鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（159）

渡畑遺跡2

二〇一一年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（159）

中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅸ）

渡畑（わたりばた）遺跡 2

（南さつま市金峰町）

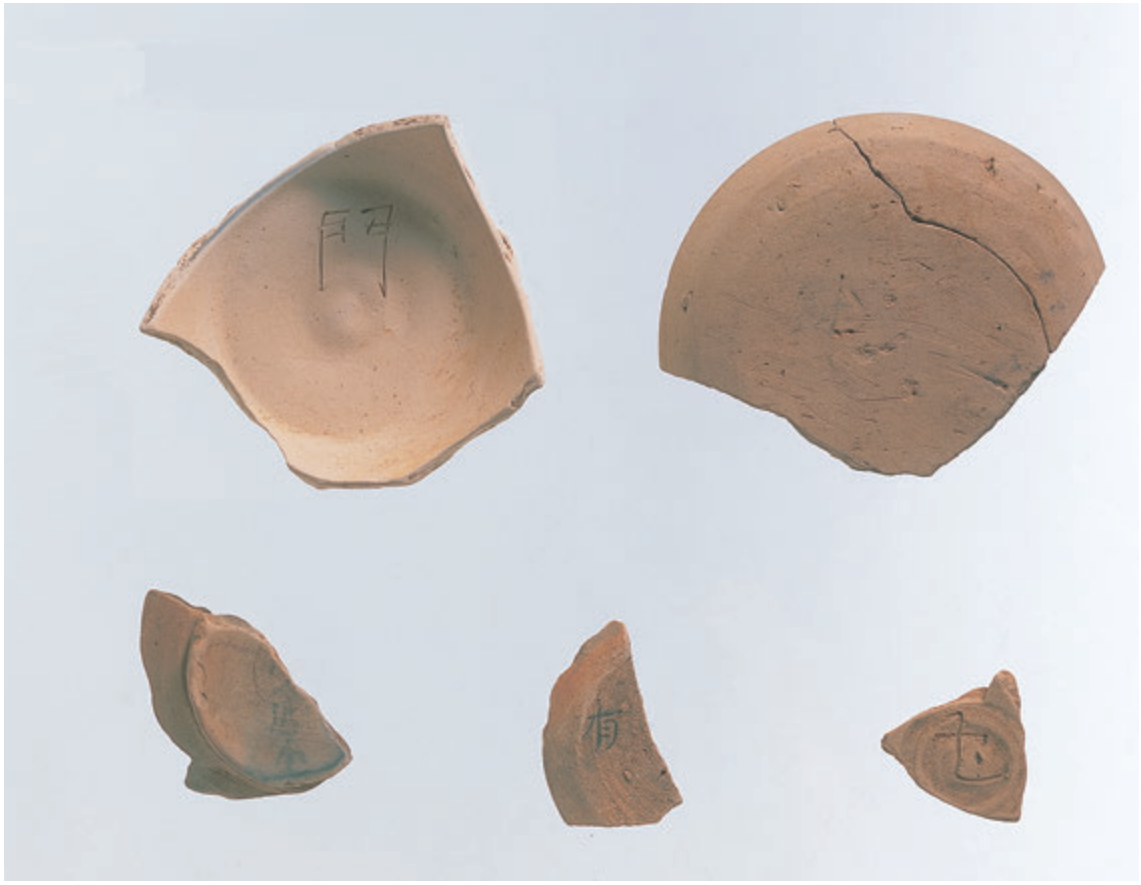
弥生・古墳時代以降編

2011年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



弥生・古墳時代出土遺物





古代・近世出土遺物

序　　文

この報告書は，中小河川改修事業（万之瀬川）に伴って，平成８年度，12年度，15年度，16年度に実施した南さつま市金峰町に所在する渡畑遺跡の発掘調査の記録です。

渡畑遺跡は，縄文時代から近世までの長期にわたる遺構・遺物が発見された複合遺跡です。これまで，平成21年度に縄文時代及びＡ地点の調査成果報告書として「渡畑遺跡１」を刊行しております。本報告書は２冊目で，Ｂ地点における弥生時代から近世までの調査記録となります。

今回報告する調査の成果として，古墳時代の土器が多量に発見されました。古代では，「門」と書かれたヘラ書き土器や，県内でも珍しい「厨」と書かれた墨書土器などが発見されました。中世では，同安窯系青磁椀や皿，青白磁，湖州鏡，輸入陶磁器や国内産陶磁器などが多量に発見されました。

いずれも，当時の生活様式を知る上での貴重な資料となりました。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たりご協力いただいた南薩地域振興局建設部（旧伊集院土木事務所），南さつま市教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成２３年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　　長　　山　下　吉　美

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	わたりばたいせき
書　　名	渡畑遺跡２
副　書　名	中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ
シ　リ　ー　ズ　名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シ　リ　ー　ズ　番　号	第１５９集
編　著　者　名	小林晋也・日髙勝博・上床真
編　集　機　関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　在　地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号（0995－48－5811）
発　行　年　月　日	２０１１年３月３１日

遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積 m^2	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
渡畑遺跡（わたりばたいせき）	鹿児島県（かごしまけん）南さつま市（みなみさつまし）金峰町宮崎（きんぽうちょうみやざき）字渡畑（あざわたりばた）	46220	35－80	31°25′44″	130°19′22″	1996.9.25～1996.11.25 2000.8.21～2001.3.27 2004.3.2～2004.3.16 2004.5.20～2005,3.29	43,400	中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
渡畑遺跡	散布地	弥生時代 古墳時代	竪穴住居跡 土坑・ピット	入来式土器・黒髪式土器 成川式土器 須恵器 磨製石鏃・石包丁・磨製石斧・石核・敲石 砥石・軽石製品	
		古　代	竪穴住居跡 溝状遺構 土坑・ピット	土師器・須恵器・墨書土器・ヘラ書き土器・土錘・紡錘車	
		中・近世	掘立柱建物跡 溝状遺構 井戸状遺構 炉状遺構 土壙墓 円形粘土塊状遺構 土坑・ピット	土師器・青磁・白磁 須恵器・常滑焼・滑石製石鍋・布目瓦・緑釉陶器土錘・カムィヤキ・合子・古銭（洪武通宝・治平元宝・崇寧通宝）・墨書土器 薩摩焼・肥前陶磁・古銭（天保通宝・寛永通宝・加治木銭） 人骨・数珠玉 湖州鏡	

遺跡の概要	渡畑遺跡は，Ａ地点（調査区北側）とＢ地点（調査区南側）に分けられ，本報告書はＢ地点の弥生時代から近世までの調査結果を掲載している。 本遺跡では，古墳時代から古代にかけての竪穴住居跡や中・近世の掘立柱建物跡など，当時の生活様式を知る上で貴重な資料となる遺構が検出された。 また，古墳時代の遺物として多量の成川式土器，古代の土師器や須恵器，中世の青磁や白磁が出土した。特に古代の墨書土器やヘラ書き土器は，県内でも数例しか出土例がない貴重な資料となった。



渡畑遺跡位置図（１：50,000）

例　　言

1　本書は，中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う渡畑遺跡の発掘調査報告書である。本書では，Ｂ地点の弥生時代から近世までの調査報告を行う。

2　本遺跡は，鹿児島県南さつま市（旧日置郡金峰町）宮崎に所在する。

3　発掘調査及び報告書作成（整理作業）は，県土木部河川課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

4　発掘調査は，平成12年８月21日～平成13年３月27日，平成16年３月２日～平成16年３月16日，平成16年５月20日～平成17年３月29日にかけて実施し，整理作業・報告書作成は平成20～22年度に実施した。

5　遺物番号は通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。

6　挿図の縮尺は，各図面に示した。

7　本書で用いたレベル数値は，県土木部が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。

8　発掘調査における図面の作成，写真の撮影は，各年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は，有限会社ふじた，有限会社スカイサーベイ九州に委託した。

9　遺構実測は主に調査担当者が行い，一部は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。トレースは，整理作業員の協力を得て小林晋也が行った。

10　土器，陶磁器の実測・トレースは，整理作業員の協力を得て小林・日髙勝博が行った。

11　石器の実測・トレースは，株式会社埋蔵文化財サポートシステム，株式会社九州文化財研究所，株式会社アイシン精機，株式会社パスコに委託し，監修は溝口学・上床真・小林が行った。

12　遺物の写真撮影は，吉岡康弘・辻明啓が行った。

13　本書の編集は，小林・日髙・上床が担当し，執筆の分担は次の通りである。

第１～３章　・・・・・・・・・・・・・・・・・小林
第４・５章　・・・・・・・・・・・・・・・・・小林・日髙
第６章　　・・・・・・・・・・・・・・・・・小林
第７章　　・・・・・・・・・・・・・・・・・小林・上床
第８章　第１～３節・・・・・・・・・・・・・小林
　　第４・５節・・・・・・・・・・・・・上床
　　第６節・・・・・・・・・・・・・・・小林

14　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，遺物の遺物註記の略号は「ＷＢ」である。

凡　　例

1　本書で用いる遺構の表現については，次のとおりである。

硬化面　　焼土・炭化物集中

2　本書で用いる土器の表現については，次のとおりである。

ススの付着　　黒色土器黒色範囲　コゲ
須恵器断面　　赤色土器　丹塗り範囲

本　文　目　次

巻　頭　図　版
序　　文
報 告 書 抄 録
例　　言
凡　　例
目　　次

第１章　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
　第１節　調査に至るまでの経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
　第２節　事前調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
　第３節　本調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
　第４節　整理･報告書作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
　第５節　中小河川改修事業関連の遺跡と概要・・・・・・６
第２章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第３章　層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第４章　弥生･古墳時代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
　第１節　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
　第２節　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
　第３節　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第５章　古代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
　第１節　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
　第２節　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94
　第３節　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
第６章　中･近世の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123
　第１節　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123
　第２節　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
　第３節　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・171
第７章 科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・206
　第１節　概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・206
　第２節　放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・・・・・・・・206
　第３節　炭化種実同定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・208
　第４節　出土製鉄･鍛冶･鋳造関連遺物の
　　金属学的調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・210
第８章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・223
　第１節　弥生･古墳時代の概要・・・・・・・・・・・・・・・・223
　第２節　古代の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・223
　第３節　中･近世の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・225
　第４節　井戸状遺構の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・229
　第５節　出土人骨の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・233
　第６節　今後の取扱いについて・・・・・・・・・・・・・・・・234

図　版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・235

挿　図　目　次

第１図　確認トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
第２図　遺跡グリッド配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
第３図　中小河川事業関連遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・９
第４図　周辺遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第５図　土層断面実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第６図　弥生･古墳時代検出遺構配置図（１）・・・・・・・・17
第７図　弥生･古墳時代検出遺構配置図（２）・・・・・・・・18
第８図　弥生･古墳時代検出遺構配置図（３）・・・・・・・・19
第９図　弥生･古墳時代検出遺構配置図（４）・・・・・・・・20
第10図　１号竪穴住居跡実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第11図　２号竪穴住居跡及び出土遺物実測図・・・・・・・22
第12図　３号竪穴住居跡及び出土遺物実測図・・・・・・・23
第13図　４号竪穴住居跡実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第14図　５･６号竪穴住居跡実測図・・・・・・・・・・・・・・・25
第15図　７号竪穴住居跡及び出土遺物実測図・・・・・・・26
第16図　１～３号大型土坑及び出土遺物実測図・・・・・27
第17図　１･２号土坑実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第18図　３号土坑及び出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・29
第19図　４～７号土坑及び出土遺物実測図・・・・・・・・・30
第20図　１･２号ピット及び出土遺物実測図・・・・・・・・31
第21図　３～12号ピット及び出土遺物実測図・・・・・・・32
第22図　弥生･古墳時代出土遺物実測図（１）・・・・・・・・34
第23図　弥生･古墳時代出土遺物実測図（２）・・・・・・・・35
第24図　弥生･古墳時代出土遺物実測図（３）・・・・・・・・36
第25図　弥生･古墳時代出土遺物実測図（４）・・・・・・・・37
第26図　弥生･古墳時代出土遺物実測図（５）・・・・・・・・38
第27図　弥生･古墳時代出土遺物実測図（６）・・・・・・・・39
第28図　弥生･古墳時代出土遺物実測図（７）・・・・・・・・40
第29図　弥生･古墳時代出土遺物実測図（８）・・・・・・・・41
第30図　弥生･古墳時代出土遺物実測図（９）・・・・・・・・42
第31図　弥生･古墳時代出土遺物実測図(10)・・・・・・・・43
第32図　弥生･古墳時代出土遺物実測図(11)・・・・・・・・44
第33図　弥生･古墳時代出土遺物実測図(12)・・・・・・・・45
第34図　弥生･古墳時代出土遺物実測図(13)・・・・・・・・46
第35図　弥生･古墳時代出土遺物実測図(14)・・・・・・・・47
第36図　弥生･古墳時代出土遺物実測図(15)・・・・・・・・48

第37図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(16)……49
第38図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(17)……51
第39図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(18)……52
第40図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(19)……53
第41図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(20)……54
第42図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(21)……55
第43図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(22)……56
第44図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(23)……57
第45図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(24)……58
第46図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(25)……60
第47図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(26)……61
第48図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(27)……62
第49図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(28)……63
第50図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(29)……64
第51図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(30)……65
第52図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(31)……66
第53図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(32)……67
第54図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(33)……68
第55図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(34)……69
第56図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(35)……70
第57図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(36)……71
第58図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(37)……72
第59図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(38)……73
第60図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(39)……74
第61図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(40)……75
第62図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(41)……76
第63図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(42)……77
第64図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(43)……78
第65図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(44)……79
第66図　弥生・古墳時代出土遺物実測図(45)……80
第67図　古代検出遺構配置図(１)……91
第68図　古代検出遺構配置図(２)……92
第69図　古代検出遺構配置図(３)……93
第70図　８号竪穴住居跡実測図……94
第71図　９・10号竪穴住居跡実測図……95
第72図　１・２号溝状遺構及び出土遺物実測図……96
第73図　４号大型土坑及び出土遺物実測図……97
第74図　８～14号土坑及び出土遺物実測図……98
第75図　15～23号土坑及び出土遺物実測図……99
第76図　13～23号ピット及び出土遺物実測図……100
第77図　古代出土遺物実測図(１)……102
第78図　古代出土遺物実測図(２)……103
第79図　古代出土遺物実測図(３)……104
第80図　古代出土遺物実測図(４)……105
第81図　古代出土遺物実測図(５)……106
第82図　古代出土遺物実測図(６)……107
第83図　古代出土遺物実測図(７)……108
第84図　古代出土遺物実測図(８)……109
第85図　古代出土遺物実測図(９)……111
第86図　古代出土遺物実測図(10)……112
第87図　古代出土遺物実測図(11)……113
第88図　古代出土遺物実測図(12)……114
第89図　古代出土遺物実測図(13)……115
第90図　古代出土遺物実測図(14)……116
第91図　古代出土遺物実測図(15)……117
第92図　中・近世検出遺構配置図(１)……123
第93図　中・近世検出遺構配置図(２)……124
第94図　中・近世検出遺構配置図(３)……125
第95図　掘立柱建物跡実測図……126
第96図　掘立柱建物跡内出土遺物実測図……127
第97図　３～８号溝状遺構実測図……128
第98図　３～８号溝状遺構内出土遺物実測図(１)…130
第99図　３～８号溝状遺構内出土遺物実測図(２)…131
第100図　３～８号溝状遺構内出土遺物実測図(３)…132
第101図　３～８号溝状遺構内出土遺物実測図(４)…133
第102図　３～８号溝状遺構内出土遺物実測図(５)…134
第103図　９・10号溝状遺構及び出土遺物実測図……135
第104図　11～14号溝状遺構実測図……137
第105図　11号溝状遺構内出土遺物実測図……138
第106図　11～14号溝状遺構内出土遺物実測図……139
第107図　15号溝状遺構実測図……140
第108図　15号溝状遺構内出土遺物実測図(１)……141
第109図　15号溝状遺構内出土遺物実測図(２)……142
第110図　16・17号溝状遺構実測図……143
第111図　16・17号溝状遺構内出土遺物実測図(１)…145
第112図　16・17号溝状遺構内出土遺物実測図(２)…146
第113図　16・17号溝状遺構内出土遺物実測図(３)…147
第114図　16・17号溝状遺構内出土遺物実測図(４)…148
第115図　16・17号溝状遺構内出土遺物実測図(５)…149
第116図　16・17号溝状遺構内出土遺物実測図(６)…150
第117図　18号溝状遺構及び出土遺物実測図……152
第118図　井戸状遺構実測図……153
第119図　１～３号炉状遺構実測図……154
第120図　１・２号土壙墓実測図……155
第121図　３～６号土壙墓及び出土遺物実測図……156
第122図　５号大型土坑及び出土遺物実測図……157
第123図　６号大型土坑実測図……158
第124図　６号大型土坑出土遺物実測図(１)……159
第125図　６号大型土坑出土遺物実測図(２)……160
第126図　６号大型土坑出土遺物実測図(３)……161
第127図　６号大型土坑出土遺物実測図(４)……162
第128図　６号大型土坑出土遺物実測図(５)……163
第129図　円形粘土塊状遺構・24～26号土坑及び出土遺物実測図……164
第130図　27～29号土坑及び出土遺物実測図……165
第131図　30・31号土坑及び出土遺物実測図……166

第132図　32～35号土坑及び出土遺物実測図……167
第133図　24～33号ピット及び出土遺物実測図……169
第134図　34～40号ピット及び出土遺物実測図……170
第135図　41･42号ピット及び出土遺物実測図……171
第136図　中･近世出土遺物実測図（１）……172
第137図　中･近世出土遺物実測図（２）……173
第138図　中･近世出土遺物実測図（３）……174
第139図　中･近世出土遺物実測図（４）……175
第140図　中･近世出土遺物実測図（５）……176
第141図　中･近世出土遺物実測図（６）……177
第142図　中･近世出土遺物実測図（７）……178
第143図　中･近世出土遺物実測図（８）……179
第144図　近世出土古銭（１）……180
第145図　近世出土古銭（２）……181
第146図　暦年較正年代グラフ……207
第147図　鹿児島県下の製鉄遺跡出土砂鉄･製錬滓の化学組成……216
第148図　中九州地域の製鉄遺跡（竪形炉）出土砂鉄･製錬滓の化学組成……216
第149図　墨書･ヘラ書き土器実測図……225
第150図　出土遺物の割合……228
第151図　布目瓦出土数……228
第152図　県内発見の井戸跡①（素掘り）……230
第153図　県内発見の井戸跡②（石組み）……231
第154図　渡畑遺跡調査予定区……234

表　目　次

表１　確認トレンチ一覧表……２
表２　中小河川改修事業関連遺跡一覧表……８
表３　中小河川改修事業に関わる遺跡の調査経緯……10
表４　周辺遺跡一覧表……14
表５　B地点の層位……16
表６　弥生･古墳時代出土遺物観察表（１）……81
表７　弥生･古墳時代出土遺物観察表（２）……82
表８　弥生･古墳時代出土遺物観察表（３）……83
表９　弥生･古墳時代出土遺物観察表（４）……84
表10　弥生･古墳時代出土遺物観察表（５）……85
表11　弥生･古墳時代出土遺物観察表（６）……86
表12　弥生･古墳時代出土遺物観察表（７）……87
表13　弥生･古墳時代出土遺物観察表（８）……88
表14　弥生･古墳時代出土遺物観察表（９）……89
表15　弥生･古墳時代出土遺物観察表(10)……90
表16　古代出土遺物観察表（１）……118
表17　古代出土遺物観察表（２）……119
表18　古代出土遺物観察表（３）……120
表19　古代出土遺物観察表（４）……121
表20　古代出土遺物観察表（５）……122
表21　中･近世出土遺物観察表（１）……182
表22　中･近世出土遺物観察表（２）……183
表23　中･近世出土遺物観察表（３）……184
表24　中･近世出土遺物観察表（４）……185
表25　中･近世出土遺物観察表（５）……186
表26　中･近世出土遺物観察表（６）……187
表27　中･近世出土遺物観察表（７）……188
表28　中･近世出土遺物観察表（８）……189
表29　中･近世出土遺物観察表（９）……190
表30　中･近世出土遺物観察表(10)……191
表31　中･近世出土遺物観察表(11)……192
表32　中･近世出土遺物観察表(12)……193
表33　中･近世出土遺物観察表(13)……194
表34　中･近世出土遺物観察表(14)……195
表35　中･近世出土遺物観察表(15)……196
表36　中･近世出土遺物観察表(16)……197
表37　中･近世出土遺物観察表(17)……198
表38　中･近世出土遺物観察表(18)……199
表39　中･近世出土遺物観察表(19)……200
表40　中･近世出土遺物観察表(20)……201
表41　中･近世出土遺物観察表(21)……202
表42　中･近世出土遺物観察表(22)……203
表43　中･近世出土遺物観察表(23)……204
表44　中･近世出土遺物観察表(24)……205
表45　放射性炭素年代測定結果……207
表46　渡畑遺跡の種実同定結果……209
表47　供試材の履歴と調査項目……215
表48　供試材の化学組成……215
表49　出土遺物の調査結果のまとめ……215
表50　刻書土器･ヘラ書き土器･墨書土器一覧……224
表51　鹿児島県内で発掘された井戸（一部に参考含む）……232

写　真　目　次

写真１　上空から見た渡畑遺跡周辺の様子……11
写真２　中・近世表層出土遺物（１）……179
写真３　中・近世表層出土遺物（２）……180
写真４　渡畑遺跡の種実遺体……209
写真５　炉壁の顕微鏡組織・
　　EPMA調査結果（１）……217
写真６　炉壁の顕微鏡組織・
　　EPMA調査結果（２）……218
写真７　椀形鍛冶滓・炉壁の顕微鏡組織……219
写真８　鍛冶滓・黒鉛化木炭の顕微鏡組織……220
写真９　製錬滓（流動滓）・椀形鍛冶滓の
　　顕微鏡組織……221
写真10　椀形鍛冶滓・炉壁の顕微鏡組織……222
写真11　ポルトガル王家の紋章が入った青花……228
写真12　４号土壙墓出土人骨（脳頭蓋）……233

図　版　目　次

図版１　古墳時代遺構検出状況（１）……235
図版２　古墳時代遺構検出状況（２）……236
図版３　古墳時代遺構検出状況（３）……237
図版４　古墳時代遺構検出状況（４）
　　および遺物出土状況……238
図版５　古代遺構検出状況（１）……239
図版６　古代遺構検出状況（２）
　　および遺物出土状況……240
図版７　中・近世遺構検出状況（１）……241
図版８　中・近世遺構検出状況（２）……242
図版９　中・近世遺構検出状況（３）……243
図版10　中・近世遺構検出状況（４）……244
図版11　弥生・古墳時代出土遺物（１）……245
図版12　弥生・古墳時代出土遺物（２）……246
図版13　弥生・古墳時代出土遺物（３）……247
図版14　弥生・古墳時代出土遺物（４）……248
図版15　弥生・古墳時代出土遺物（５）……249
図版16　弥生・古墳時代出土遺物（６）……250
図版17　弥生・古墳時代出土遺物（７）……251
図版18　弥生・古墳時代出土遺物（８）……252
図版19　弥生・古墳時代出土遺物（９）……253
図版20　弥生・古墳時代出土遺物（10）……254
図版21　弥生・古墳時代出土遺物（11）……255
図版22　弥生・古墳時代出土遺物（12）……256
図版23　弥生・古墳時代出土遺物（13）……257
図版24　弥生・古墳時代出土遺物（14）……258
図版25　古代出土遺物（１）……259
図版26　古代出土遺物（２）……260
図版27　古代出土遺物（３）……261
図版28　古代出土遺物（４）・近世出土遺物……262
図版29　中・近世出土遺物（１）……263
図版30　中・近世出土遺物（２）……264
図版31　中・近世出土遺物（３）……265
図版32　中・近世出土遺物（４）……266
図版33　中・近世出土遺物（５）……267
図版34　中・近世出土遺物（６）……268

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護と活用を図るため，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて各開発関係機関との間で協議し，諸開発との調整を図っている。この協議に基づき，鹿児島県土木部河川課（以下「県土木部」）は，中小河川改修事業（万之瀬川）の日置郡金峰町（現南さつま市）における事業計画実施に先立って，対象地域内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育委員会文化財課（以下「県文化財課」）に照会した。

これを受けて県文化財課，金峰町教育委員会が平成５年度に分布調査を実施したところ，事業区域内に万之瀬川川底遺跡，松ヶ鼻遺跡，持躰松遺跡，渡畑遺跡，芝原遺跡，上水流遺跡の６遺跡の所在が判明した。この結果を受けて，県土木部・県文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県立埋文センター」）の三者で協議した結果，対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとなった。

確認調査は，平成８年９月25日から11月25日の期間に実施した。その結果，予定地において約43,400㎡の範囲に遺跡が残存していることが確認された。

これを受けて，本調査は県立埋文センターが担当することとなり，平成12年度に持躰松遺跡隣接部分（Ａ地点）と河川側（Ｂ地点），平成15年度に樋門隣接部分（Ｂ地点），平成16年度に樋門部分から下流部分（Ｂ地点）の調査を実施した。

なお，渡畑遺跡はＡ地点とＢ地点との間にあたる未調査部分が約29,000㎡あり，今後河川改修事業を行う際には発掘調査が必要である。

報告書作成作業は，県立埋文センターが担当することとなり，平成20年度から報告書作成作業に着手し，平成22年度まで実施した。平成22年３月に「渡畑遺跡１Ａ地点及びＢ地点縄文時代編」，平成23年３月に「渡畑遺跡２Ｂ地点弥生・古墳時代～中・近世編」を刊行した。

第２節　事前調査

１　分布調査

県土木部は，中小河川改修事業（万之瀬川）の日置郡金峰町内（現南さつま市）における事業計画実施に先立って，対象地内における埋蔵文化財の有無について，県文化財課に照会した。

これを受けて県文化財課，金峰町教育委員会が平成５年度に事業区域内の分布調査を実施したところ，事業区域内に万之瀬川川底遺跡，松ヶ鼻遺跡，持躰松遺跡，渡畑遺跡，芝原遺跡，上水流遺跡の６遺跡の所在が明らかとなった。

２　確認調査

(1) 調査概要

平成８年６月10日に伊集院土木事務所・加世田土木事務所・金峰町教育委員会・加世田市教育委員会・県立埋文センターで今後の調査の進め方について協議した結果，平成８年度中に持躰松遺跡の本調査及び渡畑遺跡の確認調査を実施することとなった。

そこで，平成８年９月25日から11月25日に，渡畑遺跡の確認調査を実施した。

(2) 調査体制

事業主体	鹿児島県土木部	
	（伊集院土木事務所）	
調査主体	金峰町教育委員会	
調査統括	〃	
	教育長	松田　道治
調査担当	金峰町教育委員会	
	主事	宮下　貴浩
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	倉元　良文
事務担当	金峰町教育委員会社会教育課	
	課長	鮫島　範正
	係長	清永　信一
	主事補	泊　友子

(3) 調査経過

渡畑遺跡の確認調査は，９月25日から開始した。

トレンチは基本的に公共座標に沿い，地形的状況や調査区内の削平状況を考慮に入れながら31本設定し，その設定順に１トレンチから31トレンチまでの番号を付けた（表１，第１図）。掘り下げは基本的に人力で行い，必要に応じて重機を使用した。

調査はトレンチごとの土層を確認しながら進めたが，トレンチごとの土層堆積状況や土層の色調に違いがあり，基本的な土層を把握できなかった。そのために，各トレンチの遺物取り上げについては，各トレンチごとの層序で取り上げた。また，遺物出土状況を平板実測した遺物番号については，遺跡内全て通し番号とした。土層断面図については，２・３・６・13トレンチのみ実測し，他のトレンチは模式図を作成した。

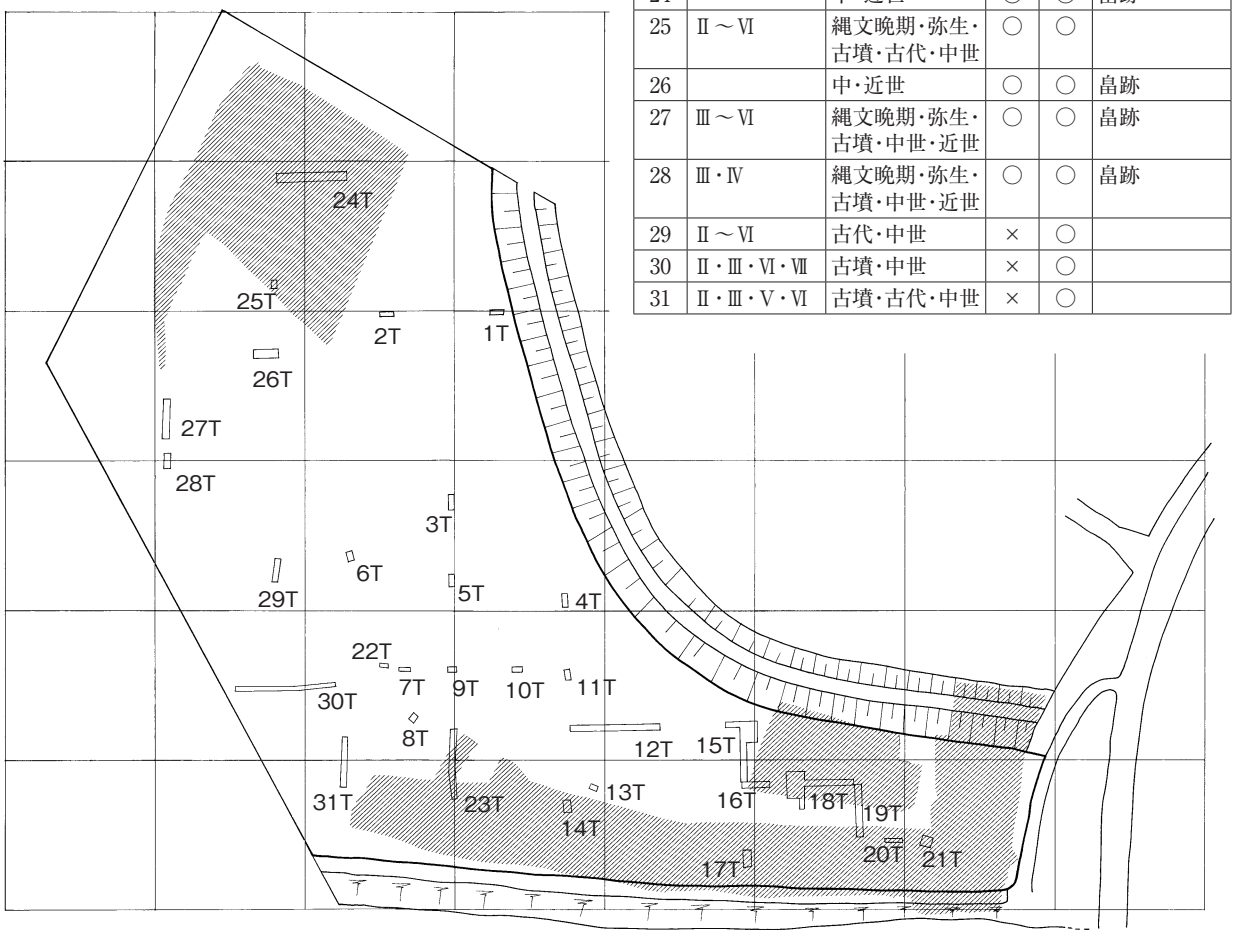
確認調査の結果，１～３トレンチ付近は中世から弥生時代までの包含層が残存した。その下層は，砂層もしくは粘質土となり縄文時代の包含層は確認できなかった。10・11トレンチ付近は，表層を除去すると縄文時代晩期の包含層となり，それ以前の包含層は確認できなかった。15・16・18トレンチ付近は，縄文時代晩期の包含層

は削平されていたが，濁暗褐色土の落ち込みがみられた。河川による自然流入とも考えられたが，同落ち込み内から鉄滓を伴う石列を検出したことから遺構と考えられる。19トレンチも表層下は縄文時代晩期の包含層となる。さらに掘り下げて調査した結果，縄文時代後期の包含層が３枚あることを確認した。21トレンチ付近では，表層からではあるが五輪塔の一部が出土した。14トレンチは21トレンチと同じようにほとんど削平を受けておらず，縄文時代後期の包含層が確認できないことから，縄文時代後期の遺跡範囲は18トレンチ付近より東側が中心と思われる。

西側については，調査期間の後半に調査を実施した。24トレンチは重機を使い表土を除去した後，上面の精査により畠跡が確認された。畠跡は26・27・28トレンチでも確認され，25トレンチについては畠面が小河川が洪水により削り出された状況が観察された。この結果，畠跡は多少の削平は受けていても旧南薩鉄道敷地付近から西側に広がるものと思われる。24・26トレンチについては畠跡を実測したのみで下層の掘り下げは行わなかった。

表１　確認トレンチ一覧表

番号	層	時代	遺構	遺物	備考
1	Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ・Ⅶ	弥生・中世	○	○	
2		古墳	○	○	柱穴
3	Ⅲ～Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ	古墳	×	○	
4	Ⅱ・Ⅲ	縄文晩期	×	○	
5	Ⅲ	縄文晩期	×	○	
6	Ⅲ・Ⅳ	古墳	○	○	住居跡　柱穴
7			×	×	
8	Ⅱ・Ⅲ	古墳	○	○	柱穴　溝
9	Ⅳ	縄文後期	×	○	
10	Ⅲ	縄文晩期	×	○	
11	Ⅱ・Ⅲ	縄文晩期	×	○	
12	Ⅱ	縄文晩期	×	○	
13			×	○	
14	Ⅱ～Ⅴ	縄文晩期・古墳	○	○	溝　柱穴
15		近世	○	×	製鉄関連遺構に伴う柱穴
16		近世	○	×	製鉄関連遺構に伴う柱穴
17			×	×	
18		近世	○	○	鉄滓を含む石列
19	Ⅱ・Ⅴ	縄文晩期・後期	○	○	
20	Ⅲ	弥生・古墳	○	○	
21			○	○	五輪塔
22	Ⅱ	縄文晩期・古墳・古代	×	○	
23			×	○	
24		中・近世	○	○	畠跡
25	Ⅱ～Ⅵ	縄文晩期・弥生・古墳・古代・中世	○	○	
26		中・近世	○	○	畠跡
27	Ⅲ～Ⅵ	縄文晩期・弥生・古墳・中世・近世	○	○	畠跡
28	Ⅲ・Ⅳ	縄文晩期・弥生・古墳・中世・近世	○	○	畠跡
29	Ⅱ～Ⅵ	古代・中世	×	○	
30	Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ・Ⅶ	古墳・中世	×	○	
31	Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ	古墳・古代・中世	×	○	



第１図　確認トレンチ配置図

27・28トレンチは，堤防及び河川敷を一部ショートカットし，断面が観察できるように設定し調査した。それによると，縄文時代晩期の包含層が確認できるため，弥生時代の包含層までの確認で終了した。23・30・31トレンチについては重機を使い，主に包含層の有無とその範囲について調査した。

第３節　本調査

(1) 調査概要

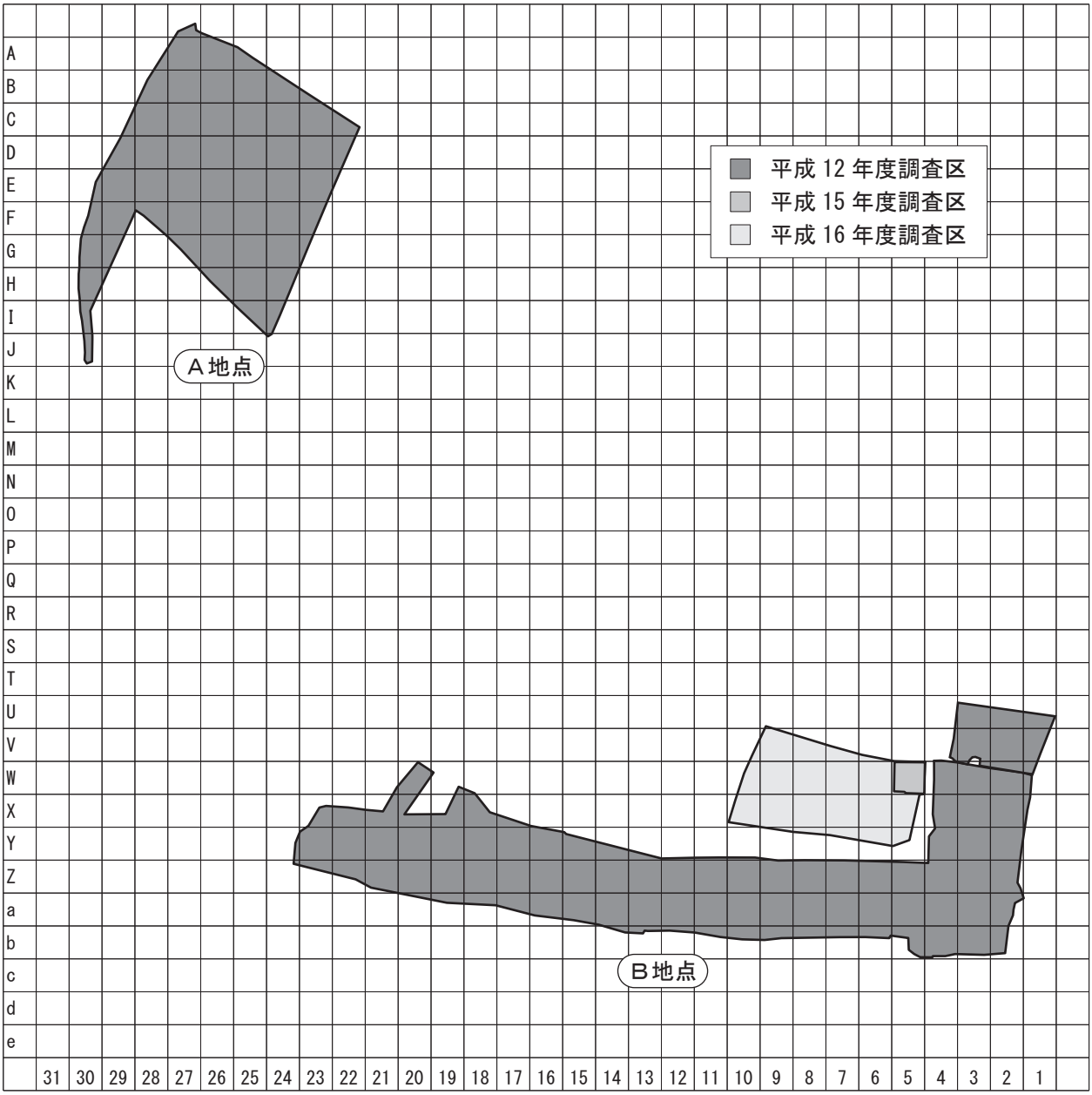
平成８年９月～11月にかけて行った県立埋文センターの確認調査を受けて，平成12年度に河川側と持躰松遺跡隣接部分，平成15年度に樋門隣接部分，平成16年度に樋門部分から下流部分の本調査を行った。

調査は，対象区域全体に公共座標に沿って10ｍのグリッドを設定して実施した。本遺跡の北側からＡ・Ｂ・・・Ｚ・ａ・ｂ，東側から１・２・・・29・30とし，Ｂ－６区などと呼称することとした。（第２図）

発掘調査は重機によってⅠ層（表土）を除去した後，遺物包含層を人力で掘り下げた。場所により，Ⅱ層以下に無遺物層が認められる場合も同様に重機で除去した。最後に，下層確認のためのトレンチを設定して，掘り下げていった。

これらの調査の結果，Ⅱ層からⅫ層まで，縄文時代中期から近世までの遺物と遺構が発見された。

尚，調査区北西側にあたるＡ～Ｊ－22～30区の範囲を「Ａ地点」とし，さらに調査区南東側にあたるＵ～ｂ－１～24区の範囲を「Ｂ地点」と呼称することにした。



第２図　遺跡グリッド配置図

(2) 調査体制

ア　平成12年度

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査・企画	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	井上　明文
調査企画	次長兼総務課長	黒木　友幸
	調査課長	新東　晃一
	主任文化財主事	
	兼第一調査係長	青﨑　和憲
	主任文化財主事	中村　耕治
調査担当	文化財研究員	栗林　文夫
	文化財研究員	福永　修一
	文化財研究員	上床　真
	文化財調査員	橋口　亘
事務担当	総務係長	有村　貢
	主事	溜池　佳子
調査指導	鹿児島大学歯学部	
	助手	竹中　正己

イ　平成15年度

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査・企画	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	木原　俊孝
調査企画	次長兼総務課長	田中　文雄
	調査課長	新東　晃一
	主任文化財主事	
	兼第一調査係長	池畑　耕一
	主任文化財主事	中村　耕治
調査担当	文化財主事	湯之前　尚
	文化財主事	日高　正人
	文化財主事	富山　孝一
事務担当	総務係長	平野　浩二
調査指導	広島大学文学部	
	教授	河瀬　正利
	西南学院大学文学部	
	教授	高倉　洋彰

ウ　平成16年度

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査・企画	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	木原　俊孝
調査企画	次長兼総務課長	賞雅　彰
	調査課長	新東　晃一
	主任文化財主事	
	兼第二調査係長	彌榮　久志
調査担当	主任文化財主事	長野　眞一
	文化財主事	抜水　茂樹
	文化財主事	富山　孝一
	文化財主事	石原田高広
	文化財研究員	黒川　忠広
事務担当	文化財研究員	上床　真
	総務係長	平野　浩二

(3) 調査経過

調査の経緯については，調査日誌をもとに主な出来事を月単位で表した。

【平成12年度：実働119日】 （平成12年８月21日～平成13年３月27日）	
８月	・重機による表土剥ぎ取り。 ・プレハブ設置場所の造成。 （芝原遺跡の調査と併行して作業を行う。作業員は10月から渡畑遺跡へ移動。）
9月	・重機による表土剥ぎ取り。
10月	・プレハブ設置。 ・芝原遺跡より移動。 ・グリッド杭打ち。 ・Ｘ～Ｚ－１・２区表層掘り下げ。
11月	・表層掘り下げ（Ｗ～ｂ－１～５区）。 ・溝状遺構検出（Ｘ～Ｚ－２・３区，ａ・ｂ－３・４区，Ｚ－４区）。 ・土壙墓検出。 ・人骨出土（Ｘ・Ｚ－２・３区）。 ・土壙墓検出（Ｗ－２・３区，Ｙ－２区）。 ・中世同安窯青磁椀出土（Ｙ－２区溝状遺構内）。 ・Ⅳｂ層埋土ピット検出（Ｙ・Ｚ－２・３区）。 ・竪穴建物跡検出（Ｚ－２・３区，Ⅴａ層上面）。 ・中世掘立柱建物跡検出（Ｘ・Ｙ－１～３区，３間×３間）。 ・重久淳一氏（隼人町教育委員会）来跡（24日）。
12月	・表土剥ぎ（Ｚ・ａ－４・８区）。 ・表層掘り下げ（Ｚ・ａ－５・６区，ａ－４区，Ｘ～Ｚ－14～18区）。 ・Ⅵ層上面検出（Ｗ～Ｚ－１～３区）。 ・Ⅴｂ層埋土ピット検出（Ｘ－２区）。 ・ピット内より土師器皿出土（Ｚ－２区）。 ・土壙墓内人骨取り上げ（Ｗ－２区）。 ・柳原敏昭氏（東北大学助教授）来跡（11日）。 ・本田道輝氏（鹿児島大学助教授）来跡（19日）。 ・伊集院土木との現地協議（19日）。 ・藤田明良氏（天理大学教授）他６名来跡（22日）。
	・Ⅵ～Ⅷ層掘り下げ（Ｗ～ａ－１～４区，Ｗ～Ｚ－４区）。

1月	・表層掘り下げ（Y～a－18・19区）。 ・古道検出（W～Z－2・3区）。 ・竪穴建物跡検出（W－4区）。 ・カマド状遺構検出（X－1区）。 ・成川式土器出土（W－1・2区）。
2月	・XI層上面検出（W～Y－1～4区，a－3～13区）。 ・X・XI層掘り下げ（Z－5～13区）。 ・畠畝検出（A～I－21～29区）。 ・III層掘り下げ（A～C－26～29区）。 ・川側落ち込みライン確認（A～D－28・29区，F～K－30～39区，Y・Z－16～29区）。 ・石製品出土（W－3区）。 ・竪穴建物跡検出（W－3・4区）。 ・中世畠畝検出（A地点）。 ・中世畠畝より白磁・青磁出土（A地点）。 ・畠畝空中写真撮影（A～I－21～29区）。 ・完形土器出土（XI層より，Z－3区）。 ・集石検出（Z－9区，№1363・1364）。 ・永山修一氏（ラ・サール学園）来跡。 （墨書土器の遺物指導）
3月	・XI層掘り下げ（U～W－1～3区）。 ・III層掘り下げ（A～D－25・26区）。 ・VIII層掘り下げ（A～E－26～29区）。 ・円形粘土塊検出（W－1区）。 ・溝状遺構検出（№1213～1216，U～W－1～3区）。 ・大溝内から青銅製鏡出土（U～W－1～3区）。 ・ピット検出（U・V－1・2区）。 ・陶磁器片が混入する中世焼土検出（A～E－28・29区）。 ・竪穴建物跡検出（U－3区）。

【平成15年度：実働13日】 （平成16年3月2日～平成16年3月16日）	
3月	・表土剥ぎ（V・W－5区）。 ・ピット検出（V・W－5区）。 ・X・XI層掘り下げ（V・W－5区）。

【平成16年度：実働63日】 （平成16年5月20日～平成17年3月29日） ＊平成16年8月～17年1月までは調査中断。	
5月	・表土剥ぎ・掘り下げ（W～Y－5～7区）。 ・ピット検出（Y－6区）。 ・竪穴住居跡検出（№1931，Y－6区）。
	・芝原遺跡にて，足形土製品の足部が検出。渡畑遺跡の足首部土製品との接合に成功。 ・竪穴住居跡検出（2・3号）。
6月	・土坑検出（№1951・1952）。 ・竪穴住居跡ピット検出（2・3号）。 ・森脇広氏（鹿児島大学教授）・和田るみ子氏（新和技術コンサルタント）来跡。
7月	・X層掘り下げ（W－6区）。 ・ピット検出（W－6区）。 ・板倉有大氏（九州大学大学院）来跡。 ・近世溝掘り下げ（W－6・7区）。
2月	・IX・X・XI層掘り下げ（V～Y－5～11区）。 ・ピット検出（V・W－7・8区）。 ・鉄生産関連遺構検出（X・Y－8・9区）。 ・石鍋出土。桑水流俊一氏（鹿児島読売記者クラブ）来跡。 ・大澤研一氏（大阪歴史博物館）来跡。 ・橋口亘氏（坊津町教育委員会）来跡。
3月	・XII層掘り下げ（W～Y－5・6区）。 ・縄文時代晩期土坑検出（X－5区）。 ・カマド状遺構検出（№1991・2061・2155大溝内）。 ・集石検出（№2202・2203，X・Y－5・6区）。 ・ピット検出（X・Y－5・6区）。 ・指宿式土器出土（W～Y－5・6区）。 ・橋本達也氏（鹿児島大学総合研究博物館助教授）来跡（2日）。 ・石組井戸跡検出（№2164，W－7区）。 ・西村誠氏・大濱春代氏（鹿児島国際大学生）来跡（14日）。 ・伊集院土木部との現地協議（17日）。 ・岩永勇亮氏・榊原えりこ氏・真邊彩氏（鹿児島大学生）来跡（24日・29日）。 ・調査終了。

第4節　整理・報告書作成

(1) 作成概要

渡畑遺跡の発掘調査報告書作成に伴う整理作業は，平成8年度から平成16年度にかけての発掘調査中に，遺物の水洗・註記作業を並行して行い，本格的な整理作業を平成20年度から実施した。本報告書については，平成21年度から22年度にかけて行った。作業は，県立埋文センターで，他の万之瀬川流域遺跡群と同時進行の形で行った。

(2) 作成体制

ア　平成20年度

事　業　主　体　　鹿児島県土木部河川課
作　成　主　体　　鹿児島県教育委員会
調　査　・　企　画　　鹿児島県教育庁文化財課
作　成　統　括　　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　所　　長　　宮原　景信
作　成　企　画　　次長兼総務課長　　平山　章

	次長	池畑　耕一
	調査第一課長	青﨑　和憲
	主任文化財主事	
	兼調査第一課第二調査係長	井ノ上秀文
作成担当	文化財主事	溝口　学
	文化財主事	佐藤　義明
	文化財主事	木之下悦郎
	文化財主事	黒川　忠広
	文化財研究員	上床　真
事務担当	総務係長	紙屋　伸一

イ　平成21年度

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
調査・企画	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下　吉美
作成企画	次長兼総務課長	齊藤　守重
	次長	青﨑　和憲
	調査第一課長	中村　耕治
	主任文化財主事	
	兼調査第一課第二調査係長	宮田　栄二
作成担当	文化財主事	溝口　学
	文化財主事	小林　晋也
	文化財主事	日高　勝博
	文化財研究員	上床　真
事務担当	総務係長	紙屋　伸一
企画担当	文化財主事	佐藤　義明

ウ　平成22年度

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
調査・企画	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下　吉美
作成企画	次長兼総務課長	田中　明成
	次長	中村　耕治
	調査第一課長	長野　眞一
	調査第一課第二調査係長	八木澤一郎
作成担当	文化財主事	池畑　耕一
	文化財主事	溝口　学
	文化財主事	小林　晋也
	文化財主事	平屋　大介
事務担当	総務係長	大園　祥子
企画担当	文化財主事	関　明恵

(3) 作成経過

【平成20年度】
4～10月　出土遺物水洗い，分類，註記，接合
11～3月　A地点出土遺物の実測・拓本
検出遺構の整理
縄文時代出土遺物実測
B地点出土遺物註記

【平成21年度】
4～5月　縄文時代出土遺物実測・拓本
B地点出土遺物分類，接合（～9月）
渡畑遺跡1原稿執筆（～12月）
6～9月　縄文時代出土遺物拓本・トレース
A地点検出遺構整理，トレース
10～11月　縄文時代出土遺物レイアウト
A地点出土遺物トレース，レイアウト
B地点検出遺構整理
B地点遺構内出土遺物実測
渡畑遺跡1掲載遺物写真撮影
12～3月　渡畑遺跡1原稿校正，掲載遺物収納
B地点遺構内出土遺物実測

【平成22年度】
4～5月　B地点遺構内出土遺物拓本・トレース
B地点遺構トレース
B地点包含層遺物の分類・実測
渡畑遺跡2原稿執筆（～12月）
6～10月　B地点包含層遺物実測・拓本・トレース
11～12月　遺物のレイアウト，写真撮影
1～3月　原稿校正，遺物の収納

第5節　中小河川改修事業関連の遺跡と概要

1　関連遺跡の概要

中小河川改修事業（万之瀬川）に伴い，調査を実施することになった遺跡は，渡畑遺跡を含めて6遺跡である。ここでは，報告書の刊行年度順に概要を示すことにする。尚，各遺跡の検出遺構及び出土遺物等の詳細については表2に示し，各遺跡の場所については第3図に示した通りである。

(1) 南田代遺跡

鹿児島県南九州市川辺町田部田に所在し，万之瀬川流域右岸の自然堤防上に立地する。本遺跡とは東南約4,400m離れた場所に位置する。

南田代遺跡では，縄文時代～中世の遺構や遺物が発見された。中でも，縄文時代前期の層から検出された石斧埋納遺構や剥片集積遺構は，当時の生活様式を知る上でたいへん貴重な資料となるものである。また，前期出土土器（轟式土器・曽畑式土器・深浦式土器）及び石器（石鏃等）も多量に見つかった。

(2) 古市遺跡

南九州市川辺町永田に所在し，万之瀬川左岸の自然堤防上に立地する。南田代遺跡の東側に隣接しており，本遺跡とは約4,700m離れた場所に位置する。

古市遺跡では，弥生時代～中世の遺構や遺物が発見さ

れた。特に，弥生時代中期の出土土器（山ノ口式土器・黒髪式土器）は，古市遺跡から１km ほど離れた内陸部にある寺山遺跡出土の同時期の遺物（須玖式土器）との関連性を考える上で興味深い遺跡となった。

(3) 持躰松遺跡

南さつま市金峰町宮崎に所在し，万之瀬川下流域右岸の自然堤防上に立地する。本遺跡Ａ地点の北側に隣接しており，本遺跡との関連性も高い。

持躰松遺跡では，縄文時代晩期から近世までの遺構や遺物が発見された。縄文時代後期に出土した土器（南福寺式土器・出水式土器），晩期の出土土器（入佐式土器・黒川式土器）については，渡畑遺跡から出土したものと類似点が多い。弥生時代は，終末期の在地系土器が豊富に出土し，中世前半期においては，掘立柱建物跡や溝状遺構・土壙墓等が確認された。また，それに伴い，県内では例を見ないほどの多種多様な輸入陶磁器と，東海地方や近畿・瀬戸内地方から流入したと考えられる国産陶磁器等が出土している。

(4) 上水流遺跡

南さつま市金峰町花瀬に所在し，万之瀬川中流の右岸，標高約６m の自然堤防上に立地する。本遺跡とは，南東約1,500m 離れた場所に位置する。

上水流遺跡では，縄文時代前期から近世にかけての遺構・遺物が発見された。縄文時代前期では，曽畑式土器がほぼ単純な状態で出土し，石器組成などの時期判断を絞り込むことのできる数少ない遺跡である。

縄文時代中期～後期にかけては，阿高式系土器と指宿式土器が出土し，縄文時代晩期では黒川式土器及び後続する千河原段階の土器がまとまって出土した。中でも三叉文を有する資料が出土するなど，これまで不明瞭であった時期について良好な検討資料が出土している。竪穴住居跡こそ発見されなかったが，各時期ともに集石や土坑，ピットや焼土跡などが多数検出され，一定期間人々が生活していた様子も窺える。また報告書では，後期の編物圧痕のある底部片や，晩期の組織痕についてモデリング陽像を採り比較を行い紹介している。

弥生時代では，磨製穿孔具などの特徴的な石器が出土し，周辺遺跡との関係が注目される。

古墳時代では，11軒の竪穴住居跡が発見された。これに伴って，古式須恵器の器台・把手・付鉢などや，県内では類例の少ない鉄製の摘鎌が発見された。

中・近世では，大溝（大型溝状遺構）から出土した16･17世紀を中心とした大量の陶器・磁器が注目される。これらの遺物は，中国・朝鮮・東南アジア産のものと国内産のものに大別される。国内産のものの中には，初期の薩摩焼窯である堂平窯で生産されたとみられるものも多くあり，この時期の流通を考える上で重要である。また，鉄製品も多数出土しており，鍋の破片や鎌，火打金が出土している。

(5) 芝原遺跡

鹿児島県南さつま市金峰町宮崎に所在し，万之瀬川下流域右岸の自然堤防上に立地する。本遺跡Ｂ地点の東側に隣接し，本書でも特筆したが縄文時代後期の足形土製品の足部（芝原遺跡）と足首部（渡畑遺跡）が合致したこともあり，関連性の高さが窺える。

芝原遺跡では，縄文時代中期から近世にかけての遺構・遺物が発見されている。縄文時代中期では，春日式土器を伴う竪穴状遺構が２基と土坑１基が検出されている。縄文時代中期の竪穴状遺構は検出例が少なく注目される。また，竪穴状遺構からは，漁猟具であると考えられている鋸歯縁石器（組合せ銛の尖端部）が３点出土している。縄文時代後期の遺跡から出土する例はあるが，縄文時代中期の遺構から出土したことは貴重な情報である。尚，本遺跡でも，この組み合わせ銛の可能性が高い石器が６点出土しており，関連性について検証中である。

縄文時代後期では，竪穴状遺構３基をはじめ，集石や土坑，ピットなどが多数検出され，一定期間人々が生活していた様子が窺える。

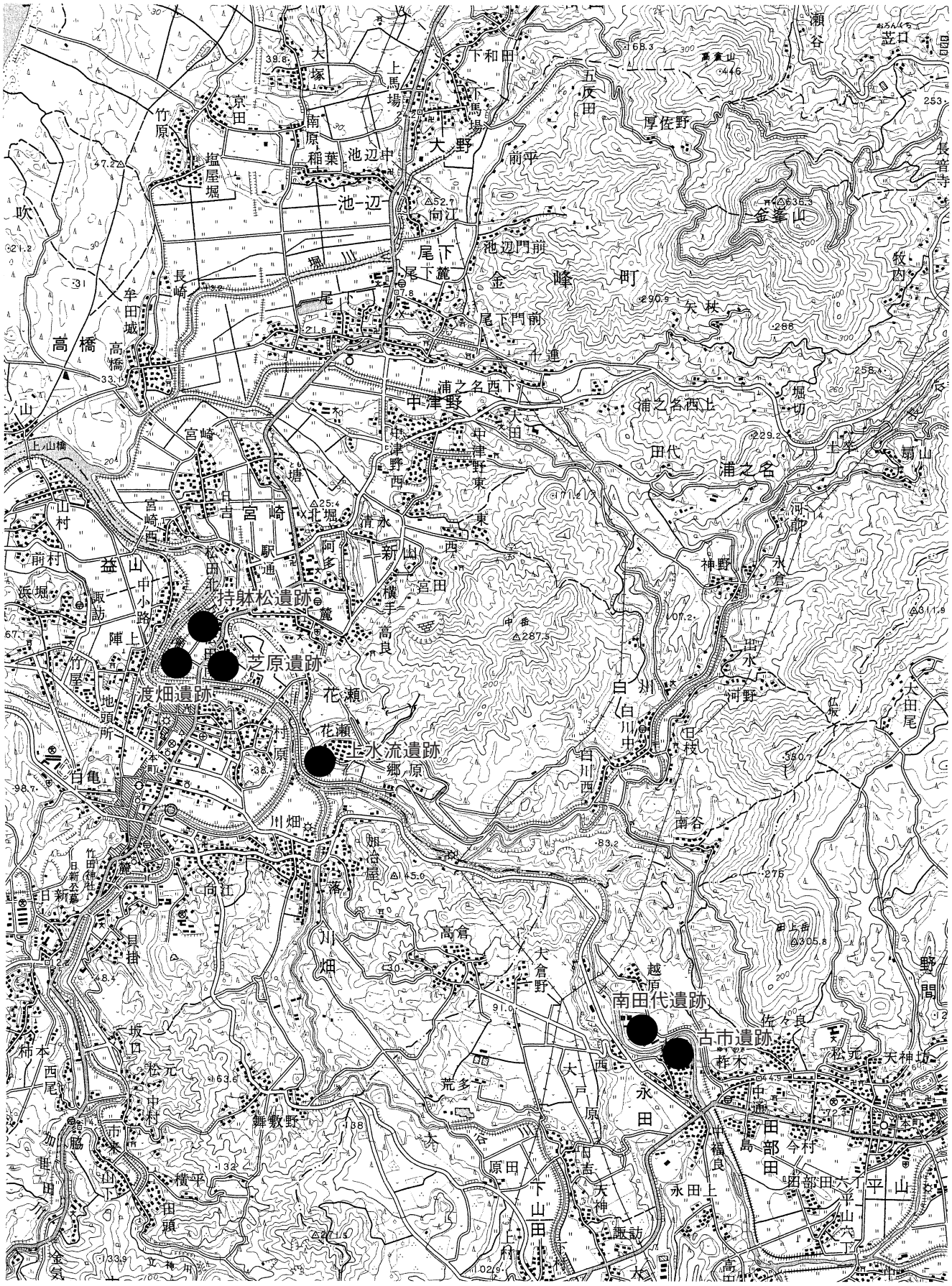
弥生時代以降については，多量な遺構・遺物が発見された。次年度以降に整理作業を行い，報告書刊行の予定である。

刊行報告書一覧

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005「南田代遺跡」
　鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（88）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005「古市遺跡」
　鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（89）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2007「上水流遺跡１」
　鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（113）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2007「持躰松遺跡」
　鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（120）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2008「上水流遺跡２」
　鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（121）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2009「上水流遺跡３」
　鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（136）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2010「芝原遺跡１」
　鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（150）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2010「上水流遺跡４」
　鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（151）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2011「芝原遺跡２」
　鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（158）

表２　中小河川改修事業関連遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺跡番号	調査期間	調査面積	主な時代	主な遺構	主な遺物
1	南田代遺跡	27-82	01.5.7～01.8.29 02.10.4～03.3.20 03.5.6～03.5.27	13,700m²	縄文時代早期		塞ノ神式土器
					縄文時代前期	集石，磨石集積，石斧埋納，剥片集積，黒曜石埋納	轟式土器，曽畑式土器，深浦式土器，石鏃
					縄文時代中期	集石	阿高式土器，春日式土器，船元式土器
					縄文時代後期		御領式土器
					縄文時代晩期		黒川式土器
					弥生時代		高橋式土器，松木薗式土器
					古墳時代		成川式土器
					古代		土師器，須恵器
					中世		土師器，青磁
2	古市遺跡	27-89	01.9.3～02.3.25 02.5.07～02.10.3 03.10.20～03.11.12	17,180m²	弥生時代	竪穴住居	高橋式土器，黒髪式土器，山ノ口式土器，松木薗式土器，中津野式土器，石鏃，石斧，石包丁
					古墳時代	竪穴住居，溝状遺構	成川式土器，砥石，石製品
					中世	掘立柱建物	土師器，須恵器，白磁，青磁
3	持躰松遺跡	35-130	97.9.1～98.2.27 98.10.12～99.3.25 99.4.20～99.10.14	7,038m²	縄文時代後期		南福寺式土器，出水式土器
					縄文時代晩期		入佐式土器，黒川式土器，石鏃，磨製石斧，打製石斧，スクレイパー，磨石，叩石
					弥生・古墳時代	竪穴住居跡，土坑，溝状遺構，ピット，土器溜まり	刻目突帯文土器，入佐式土器，黒髪式土器，山ノ口式土器，須玖式土器，松木薗式土器，中津野式土器，砥石，ガラス製品，鉄製品
					古代	溝状遺構，土坑，掘立柱建物跡，畝間状遺構，ピット	土師器，須恵器，墨書土器，刻書土器，箆書土器，赤色土器，黒色土器，移動式カマド，鉄製品，紡錘車，鞴の羽口，鉄滓
					中世	掘立柱建物跡，竪穴建物跡，溝状遺構，畝間状遺構，土師器集積遺構，土坑墓，ピット，杭列跡，石列	土師器，須恵器（東播磨系・樺万丈系），瓦質土器，瓦器，赤色土器，黒色土器，常滑焼，瀬戸焼，備前焼，カムィヤキ，青磁，白磁，青白磁，青花，輸入陶器，土錘，土製品，滑石製石鍋，滑石製品，砥石，硯，刀子，鉄製品，鞴の羽口，鉄滓
					近世		苗代川焼（薩摩焼），肥前系陶磁器
4	上水流遺跡	35-98	00.4.24～01.3.29 03.8.9～04.3.19 04.5.14～05.2.4 05.5.9～05.9.28	15,500m²	縄文時代前期	集石，土坑，焼土，ピット，礫集積	曽畑式土器，方形土器，焼成粘土塊，石鏃，石匙，楔形石器，スクレイパー，石錘，打製石斧，磨製石斧，磨石，敲石，石皿，石製品
					縄文時代中期～後期	集石，土坑，焼土，ピット	阿高式土器，南福寺式土器，指宿式土器，磨消縄文土器，松山式土器，土製品，石鏃，石匙，石斧，磨石，石皿
					縄文時代晩期	集石，土坑，焼土，ピット	入佐式土器，黒川式土器，千河原段階，三叉文施文の土器，孔列土器，刻目突帯文土器，南島系壺形土器，石鏃，石匙，石斧，磨石，石皿，石製品
					弥生時代		高橋式土器，入来Ⅱ式土器，黒髪Ⅰ式土器，磨製石鏃，磨製穿孔具，扁平片刃石斧
					古墳時代	竪穴住居跡，土坑，埋納ピット，礫集積，焼土	中津野式土器，辻堂原式土器，笹貫式土器，古式須恵器，ミニチュア土器，土製品，勾玉，管玉，鉄製摘鎌
					古代		土師器，須恵器，緑釉陶器
					中・近世	掘立柱建物跡，大型土坑，大型溝状遺構，溝状遺構，塚状遺構，帯状硬化面，土抗墓，炉状遺構，土坑，畝間状遺構，畦状遺構，鍛冶炉，土器埋納遺構，礫積遺構	土師器，須恵器，カムィヤキ，瓦質土器，染付，青花，薩摩焼（堂平窯・苗代川系・竜門司系含む），輸入陶磁器（東南アジア系含む），土錘，砥石，石硯，鉄器，鉄滓，ガラス玉，軽石製品，石塔，銭貨，人骨，炭化桃核，ヤマトシジミ
5	芝原遺跡	35-81	99.10.15～00.3.22 00.4.24～01.1.25 01.5.7～02.3.19 02.5.7～03.3.20 04.5.6～05.3.22 05.5.14～05.7.16	49,600m²	縄文時代中期	竪穴状遺構，土坑	春日式土器，石鏃，鋸歯尖頭器，石匙，スクレイパー，擦切石器，石皿，磨石
					縄文時代中期後半～後期前半	竪穴状遺構，埋設土器，土坑，集石，ピット，焼土，石皿集積，落ち込み	阿高式土器，南福寺式土器，出水式土器，岩崎式系土器，指宿式土器，市来式系土器，土製品，石鏃，石匙，スクレイパー，楔形石器，石錘，磨製石斧，打製石斧，礫器，擦切石器


持躰松遺跡
芝原遺跡
渡畑遺跡
上氷流遺跡
南田代遺跡
古市遺跡
中津野
金峰町
浦之名
大野
大塚
下和田
厚佐野
池辺
池辺門前
尾下
尾下門前
高橋
牟田城
宮崎
吉宮崎
新宮田
花瀬
川畑
白川
白川中央
白川西
南谷
大倉野
越原
荒多
大戸原
永田
田部田
平山
下山田
舞敷野
横平
田頭
市来山
脇本
西尾
坂口
松元
中村
貝掛
本町
日新公園
竹田神社
加治屋落
向江
高倉
川畑
益山
前村
浜堀
山村
上山橋
竹屋
地頭所
白亀
陣上
諏訪
中小路
駅通
松田北
清水
阿多
横手
高良
東西
神野
永倉
川前
堀切
土手
屋敷
田代
浦之名西上
浦之名西下
千連
矢林
金峰山
牧内
長音寺
瀬谷
蓑口
五反田
前平
稲葉
南原
京田
竹原
塩屋堀
吹
堀川
長崎
尾下麓
尾
塘
北堀
宮崎西
上馬場
下馬場
中番
向江
加治屋
金気
立神川
大田尾
野間
佐々良
桁木
松元
大神坂
中通
島
今村
平山
穴丁
高畑
大神
諏訪
上村
下村
永田上
原田
大谷
大戸
西永田
中福良
日吉
日枝
可野
仮坂
横手
高良
上水流
郷原
花瀬
村原
本町
日新
新公園
竹田神社
加治屋落
向江
川畑
高倉
大倉野
越原
南田代遺跡
古市遺跡
荒多
大戸原
永田
舞敷野
横平
田頭
市来山
脇本
西尾
坂口
松元
中村
貝掛
柿本
金気
立神川
白亀
竹屋
地頭所
陣上
諏訪
中小路
駅通
松田北
清水
阿多
横手
高良
東西
神野
永倉
川前
浜堀
山村
上山橋
益山
宮崎西
吉宮崎
新宮田
花瀬
川畑
白川
白川中央
白川西
南谷
大倉野
越原
荒多
大戸原
永田
田部田
平山
下山

２　事業関連遺跡の調査経緯

中小河川改修事業（万之瀬川）は，平成５年度の県教委による分布調査に始まり，これまで南田代遺跡，古市遺跡，持躰松遺跡，上水流遺跡，芝原遺跡，渡畑遺跡について調査を進めてきた。一連の調査経緯については，表３に示した通りである。

表３　中小河川改修事業に関わる遺跡の調査経緯

事業年度	遺跡名	事業内容	担当	備考
平成５年度	全遺跡	分布調査	鹿児島県教育委員会	
平成６年度	持躰松遺跡	確認調査	南さつま市（旧金峰町）教育委員会	県教委支援
平成７年度	上水流遺跡	確認調査	南さつま市（旧金峰町）教育委員会	
平成８年度	渡畑遺跡・持躰松遺跡	確認調査（一部本調査）	南さつま市（旧加世田市）教育委員会	県教委支援
平成９年度	持躰松遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
	松ヶ鼻遺跡	確認調査	鹿児島県教育委員会	
平成10年度	芝原遺跡・持躰松遺跡	確認・本調査	鹿児島県教育委員会	
平成11年度	芝原遺跡・持躰松遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成12年度	上水流遺跡・芝原遺跡・渡畑遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成13年度	芝原遺跡・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成14年度	芝原遺跡・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成15年度	芝原遺跡・渡畑遺跡・上水流遺跡・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成16年度	芝原遺跡・渡畑遺跡・上水流遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
	南田代遺跡・古市遺跡	報告書刊行	鹿児島県教育委員会	
平成17年度	上水流遺跡	本調査・整理作業	鹿児島県教育委員会	
	芝原遺跡	整理作業	鹿児島県教育委員会	
平成18年度	上水流遺跡	整理作業・報告書Ⅰ刊行	鹿児島県教育委員会	
	持躰松遺跡・芝原遺跡	整理作業	鹿児島県教育委員会	
平成19年度	上水流遺跡	整理作業・報告書Ⅱ刊行	鹿児島県教育委員会	
	持躰松遺跡	報告書刊行	鹿児島県教育委員会	
	芝原遺跡・渡畑遺跡	整理作業	鹿児島県教育委員会	
平成20年度	上水流遺跡	整理作業・報告書Ⅲ刊行	鹿児島県教育委員会	
	芝原遺跡・渡畑遺跡	整理作業	鹿児島県教育委員会	
平成21年度	上水流遺跡	報告書Ⅳ刊行	鹿児島県教育委員会	
	芝原遺跡・渡畑遺跡	整理作業・報告書Ⅰ刊行	鹿児島県教育委員会	
平成22年度	芝原遺跡	整理作業・報告書Ⅱ刊行	鹿児島県教育委員会	
	渡畑遺跡	報告書Ⅱ刊行	鹿児島県教育委員会	
予　定	芝原遺跡	整理作業・報告書Ⅲ刊行		
予　定	芝原遺跡	報告書Ⅳ刊行		

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

渡畑遺跡は，鹿児島県の南さつま市金峰町宮崎に所在し，万之瀬川下流域右岸の自然堤防上に立地する（写真１）。

万之瀬川は鹿児島市の南部美濃岳南麓に源を発し，南九州市川辺町から南さつま市の加世田平野を横断している。さらに吹上浜に至り，東シナ海に注ぐ長さ約20km，流域面積381km^{2}の薩摩半島南部を代表する河川である。河口周辺には砂丘が広く形成されており，中下流域には沖積平野が広がっている。また万之瀬川の蛇行によって浸食された台地が見られる。こうした砂丘地と台地には，縄文時代から弥生時代にかけて良好な遺跡が存在している。

河口より約６km さかのぼった渡畑遺跡周辺の標高は，約５m 前後である。このあたりの表層は，未固結堆積物である粘土や砂礫のある河川敷で，後背地には灰色低地土壌が広がり，一部には黒泥炭土壌も見られる。氾濫堆積物は主に砂・シルトからなり，場所によっては，その下位に砂礫からなる万之瀬川の旧河床堆積物が伏在する。

本遺跡で出土した縄文後期初頭以降の文化遺物は，自然堤防を形成した氾濫堆積物に覆われた土壌層中に見いだされる。そのことから，万之瀬川の自然堤防は，約4,000年前頃から形成されたことが分かる。

その後，万之瀬川の河道はあまり変化せず，厚さ４m ほどの堆積物を氾濫によって累積してきた。氾濫堆積物の層区分とその推移から，遺跡周辺では縄文中期から中世までの顕著な氾濫は４，５回ほど認められる。この一帯は万之瀬川が大きく蛇行しており，かつ，加世田川や長谷川などの支流の合流地点も近くにあり，周辺の沖積平野は，過去梅雨や台風の時期になると水害に遭っている。

昭和10（1935）年の国土地理院発行の地図では，村原付近において河川改修が行われ，低地において蛇行する部分を直線化したことがわかる。これは，昭和初期の恐慌時に，失業対策事業として実施された河川改修事業による影響である。

下流に目を向けると，現在の河口は，享和年間（1801～1804）の洪水により流れが変わってできたもので，新川と呼称されている。それ以前の万之瀬川河口はさらに南側に蛇行しており，現在の河口より約３km 南にあったことがわかっている。周辺に目を向けると，東部には比較的なだらかな標高約200m 前後の山々が南北を縦断している。このなかで約７km 北東方向にある金峰山は，旧町名（金峰町）の由来ともなった標高636m の薩摩半島中央部における最高峰で，古来から信仰の対象となっている。また，海上航行の際には，同山より南西方向に約22km 先にある野間岳と共にランドマーク的役割を果たしていた。特に，野間岳に関しては，『三國名勝圖會』の中に「毎歳漢土の商舶，長崎に來る時は，洋中にて必ず此嶽を認て，針路を取り，皇國の地に到り，其始て認め見し時は，酒を酌て賀をなすといふ云々」の記述が見える。



写真１　上空から見た渡畑遺跡周辺の様子

第２節　歴史的環境

南さつま市では，旧石器時代から歴史時代での遺跡が数多く発見されている（第４図，表４）。

この中には，学史上極めて重要な遺跡も含まれており，当地域が考古学研究の良好なフィールドであることをあらためて示唆している。

旧石器時代では，小中原遺跡，祝原遺跡からナイフ形石器が，山野原遺跡，平田尻遺跡から細石器や礫群が発見されている。

縄文時代草創期の遺跡としては，栫ノ原遺跡がある。ここでは，煙道付き炉穴や集石等の遺構と，隆帯文土器・磨製石斧・丸ノミ状の磨製石斧等の遺物が出土し，国指定の史跡となっている。また，志風頭遺跡では，煙道付き炉穴から大型の隆帯文土器が出土している。

縄文時代早期の遺跡としては，前述の栫ノ原遺跡が著名である。昭和52（1977）年の発掘調査で出土した遺物は，前平式土器と吉田式土器の型式設定について問題を投げかけた。小中原遺跡では，前平式土器の円筒形・角筒形がまとまって出土している。

縄文時代前期の遺跡としては，阿多貝塚や上焼田遺跡が著名である。阿多貝塚から出土した資料は，阿多Ｖ類土器（現在では西唐津式とされる）と称され，上焼田遺跡からは玦状耳飾が出土している。

縄文時代中期の遺跡としては，上水流遺跡で大型の集石と春日式土器が豊富に出土しており，河川沿い低地との関係において注目される。また，芝原遺跡の竪穴住居跡と石堂遺跡の阿高式土器・並木式土器の出土等も挙げられる。さらに，鋸歯石器や石鋸などの特徴的な石器も出土している。

縄文時代後期の遺跡としては，先述の芝原遺跡がある。ここでは，大量の指宿式土器や南福寺式土器が出土している。また，足形を呈する土製品は本県でも例が無く，加えて隣の本遺跡出土の土製品と接合したことで注目される。

縄文時代晩期の遺跡としては，上加世田式土器の標識遺跡である上加世田遺跡がある。ここでは土偶・軽石製岩偶・石棒など祭祀をうかがわせる資料が出土しているが，近年の広域編年研究により縄文時代後期に位置づけられることも多くなっている。また，干河原遺跡や上水流遺跡では，豊富な量の浅鉢と深鉢が出土している。下原遺跡では，縄文時代晩期終末～弥生時代早期の刻目突帯文土器に伴って，朝鮮半島系無文土器・籾痕のある土器・石包丁などが出土している。

弥生時代から古墳時代にかけては，多くの遺跡で遺物の散布がみられる。高橋貝塚は，弥生時代前期を主体とする貝塚で万之瀬川の支流堀川の右岸，標高11m の洪積世砂丘上にある。昭和37・38（1962・1963）年に，河口貞徳氏によって発掘調査が実施された。調査の結果，縄文時代晩期の夜臼式土器と弥生時代前期の高橋Ⅰ式土器が共伴したことや，南海産の貝を素材とした製作中の貝輪や貝そのものが出土したことで，学史に残る遺跡である。下小路遺跡は，弥生時代後期の須玖式の甕棺が検出された埋葬遺跡で，棺内の人骨にはゴホウラ製の貝輪が着装されていた。また，松木薗遺跡では，弥生時代後期の環濠である可能性のある大溝が松木薗式土器を伴って検出されている。中津野式土器の標識遺跡である中津野遺跡からは，床面が３段構造になる竪穴住居跡が発見され，最下段である３段目からは完形土器が40個出土しているという。中津野式土器は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器として位置付けられている。

古墳時代の遺跡としては，小湊にある奥山古墳（六堂会箱式石棺墓）が特筆される。この遺跡は昭和６（1931）年に発見され，石棺内部には赤色顔料が塗られており，ガラス玉や長さ180cm の鉄剣，刀子が副葬されていた。平成17（2005）年３月には，鹿児島大学総合研究博物館助教授の橋本達也氏が再調査を行っている。その結果，周溝の一部と考えられる遺構が発見され，また同年８月の調査で４世紀代の古墳である可能性が高いことが示された。白糸原遺跡では，竪穴住居跡19軒が検出されている。遺構内遺物から，辻堂原式土器から笹貫式土器にかけての時期の集落であるとされる。

古代にも多くの遺跡が発見されている。特に集落が発見される場合が多く，広域的なあり方について検討する場合に重要な資料となっている。荒平窯をはじめとする中岳山麓窯跡群は旧金峰町にあり，９世紀から10世紀にかけて稼動していたとみられる須恵器窯である。発掘調査は行われていないが，表面採集された遺物によって荒尾窯（熊本県荒尾市）の製品との類似性が高いと言われており，人的・物的な交流があったと考えられている。小中原遺跡からは，多くの掘立柱建物跡と「阿多」という文字が刻まれた土器などが発見されていることから，阿多郡衙の跡ではないかと考えられている。また，山野原遺跡でも多くの掘立柱建物跡と土師器・須恵器などが発見されている。祭祀に関わるとみられる遺構や，土師器焼成遺構の可能性が考えられるものなども発見されており，在地の実力者にかかわる施設であった可能性が考えられている。

中世には，阿多郡は，ほぼ全域で島津荘が成立した薩摩国にあって，唯一大宰府領であった。このなかで大宰府の権威をかりて領主権を確立し，やがて薩摩武士団の棟梁的地位を固めるまでに至ったとみられる阿多郡司平忠景は，12世紀前半の史料に初見される。

忠景の在位期間は中央政権の交代の影響で比較的短期間ではあったが，周辺地域にも多少の影響を与えたことも考えられる。

阿多郡はその後13世紀前半には北方と南方に分割され


高橋
高橋
尾下
尾下
尾下門前
浦之名西下
中津野
中津野東
大田
堂園
宮崎
宮崎西
日吉
唐
北堀
清水
新山
西
東
宮田
横手
春屋敷
松田北
駅通
老人ホーム
益山
中小路
諏訪
松南
本町
竹屋
陣
上
尿処理場
地頭所
花瀬
郷原
向江
加治屋
川畑
高良
白亀
村原
加世田市
貝掛
高倉
竹田神社
日新公墓
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50

第４図　周辺遺跡位置図

表４　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地		時代							備考
				旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	
１	牟田遺跡	南さつま市	金峰町高橋字真門砂入						●		
２	尾下遺跡	南さつま市	金峰町尾下			●					
３	亀ヶ城跡	南さつま市	金峰町尾下　麓						●		
４	田布施遺跡	南さつま市	金峰町野首他５		●		●		●		
５	筆付遺跡	南さつま市	金峰町尾下筆付		●	●		●			金峰町発掘
６	高橋貝塚	南さつま市	金峰町高橋			●					金峰町発掘
７	草原町遺跡	南さつま市	金峰町宮崎				●				
８	上焼田遺跡	南さつま市	金峰町宮崎焼田		●	●	●	●	●		金峰町発掘
９	堀川貝塚	南さつま市	金峰町宮崎		●						
１０	阿多貝塚	南さつま市	金峰町宮崎上焼田		●	●	●				金峰町発掘
１１	立原遺跡	南さつま市	金峰町宮崎				●				
１２	中津野遺跡	南さつま市	金峰町中津野１１１９			●					県発掘
１３	中津野城跡	南さつま市	金峰町新山						●		
１４	万之瀬川床遺跡	南さつま市	金峰町益山万之瀬川			●	●				
１５	上川原遺跡	南さつま市	金峰町宮崎上川原			●	●				
１６	上花立遺跡	南さつま市	金峰町								
１７	野村原遺跡	南さつま市	金峰町中津野				●				
１８	白糸原遺跡	南さつま市	金峰町宮崎		●	●	●	●	●		県発掘
１９	小中原遺跡	南さつま市	金峰町新山小中原	●	●	●	●	●	●		県・金峰町発掘
２０	立野原遺跡	南さつま市	金峰町新山				●				
２１	三反田	南さつま市	金峰町新山			●	●				
２２	市薗遺跡	南さつま市	金峰町宮崎		●				●		県発掘
２３	中小路遺跡	南さつま市	加世田益山			●	●				市発掘
２４	陣跡遺跡	南さつま市	加世田益山陣						●		
２５	内ノ田遺跡	南さつま市	加世田益山内ノ田	●			●		●	●	
２６	松田南遺跡	南さつま市	金峰町花瀬		●		●		●		
２７	持躰松遺跡	南さつま市	金峰町松田南		●	●	●	●	●	●	県発掘
２８	渡畑遺跡	南さつま市	金峰町松田南		●	●	●	●	●	●	本報告書
２９	芝原遺跡	南さつま市	金峰町松田南		●	●	●	●	●	●	県・金峰町発掘
３０	下東堀遺跡	南さつま市	加世田宮原下東堀	●	●		●				
３１	大迫田遺跡	南さつま市	金峰町花瀬						●		
３２	今城跡遺跡	南さつま市	金峰町花瀬今城原		●	●	●		●		
３３	中岳山麓古窯群	南さつま市	金峰町花瀬					●			鹿児島大学調査
３４	榕ノ原遺跡	南さつま市	加世田村原字榕ノ原	●	●	●	●	●	●	●	加世田市発掘
３５	上水流Ｄ遺跡	南さつま市	金峰町花瀬								金峰町発掘
３６	花瀬遺跡	南さつま市	金峰町花瀬				●			●	
３７	上水流Ｃ遺跡	南さつま市	金峰町花瀬		●		●		●		金峰町発掘
３８	上水流遺跡	南さつま市	金峰町花瀬上水流森山		●	●	●	●	●	●	県・金峰町発掘
３９	針原遺跡	南さつま市	金峰町花瀬		●			●			
４０	弥十山遺跡	南さつま市	金峰町花瀬		●						金峰町発掘
４１	宇治野原遺跡	南さつま市	金峰町白川西	●	●		●				金峰町発掘
４２	杉本寺遺跡	南さつま市	加世田川畑杉本寺			●		●	●		南さつま市発掘
４３	上加世田遺跡	南さつま市	加世田川畑上加世田		●	●	●	●	●	●	加世田市発掘
４４	永田遺跡	南さつま市	加世田川畑永田					●			
４５	加治屋遺跡	南さつま市	加世田川畑岩山・加治屋		●	●	●	●			県発掘
４６	鮎受遺跡	南さつま市	金峰町花瀬		●		●				金峰町発掘
４７	二頭遺跡	南さつま市	加世田川畑二頭				●				加世田市発掘
４８	屋地遺跡	南さつま市	加世田武田屋地			●					
４９	遠見ヶ岡遺跡	南さつま市	加世田川畑遠見ヶ岡		●	●					
５０	上長迫遺跡	南さつま市	加世田川畑上長迫 川辺町下山田荒多迫，他		●	●	●				

る。旧金峰町が位置する阿多郡は阿多氏が，後には鮫島氏が支配を行い，旧加世田市が属する加世田別府は二階堂氏が，後には島津氏が支配するようになる。

中世前半の遺跡としては，平成８（1996）年から11（1999）年まで旧金峰町が発掘調査を行った小園遺跡が挙げられる。ここでは，掘立柱建物跡・円形竪穴遺構・区画溝等が発見され，遺物として11世紀後半から13世紀代の貿易陶磁と，須恵器・常滑焼・和泉型瓦器椀・類須恵器（カムィヤキ）・滑石製品等が出土している。このことから，金峰山信仰の拠点寺院として，12世紀前半の文献で初見される観音寺との強い関連性が指摘されている。観音寺は保延４（1138）年に，前述の阿多郡司平忠景より阿多牟田上浦の寄進を受けるなど，薩摩半島西南部における仏教及び山岳信仰の中心拠点であったと考えられている。

城館跡の発掘調査としては，上ノ城跡，別府城跡，牟礼ヶ城跡，貝殻崎城跡などが知られる。発掘調査は行われていないが，南さつま市加世田益山の寺園氏宅には，二重の濠があったと伝えられ，現在もその痕跡が残る（上東2004）。中世に由来するかは明らかでないが，居館であった可能性も考えられる。

白糸原遺跡では，中世末から近世にかけての土壙墓が24基検出されている。この中には，南島産の夜光貝が入っているものもある。加えて，竪穴建物跡や双魚文青磁なども見つかっている。また，本遺跡の属する万之瀬川流域の遺跡群も，近年特に注目されている。万之瀬川下流には川底遺跡と中流には古市遺跡・南田代遺跡（南九州市）などがあり，中世を中心とした縄文時代から近世・近代にわたる複合遺跡として今後の調査の成果が期待される。

近世においては，前述の上水流遺跡の大溝から，16～17世紀頃の肥前系陶磁器と初期の薩摩焼（苗代川系）等が，福建・広東及びベトナム産の甕・壺類といった貯蔵器とともに出土している。また，万之瀬川河口付近を含む吹上浜沿岸では，東南アジアとの交易に関連するという指摘のある漂着遺物が確認されている（橋口1999など）。

外城制度（天明４［1784］年，郷に改められた）に関連するものとして，地頭仮屋（旧加世田市は麓，旧金峰町は阿多と田布施の２か所）・庄内役所・浦役所・別当役所・会所・宿場・御蔵・常平倉・津口御番所・遠見御番所・射場・御牧などがあった。また，野町と呼ばれる商人の居住区も存在した。旧加世田市では川畑に現在所在する聖徳寺付近に，また旧金峰町内では阿多郷野町と田布施郷池辺野町の二つがあった。渡畑・持躰松・芝原の各遺跡を含む宮崎の「御新田」とされる一帯は，享保13（1728）年，万之瀬川の中流域にあたる川辺町越ケ原より用水路を引き新田開発が行われたものである。

交通網に目を向けると，本遺跡と下流側に隣接する持躰松遺跡には，近世の街道『伊作筋』が通っており，現在は国道220号線となって万之瀬橋が架けられている。ここはかつて村原渡口と呼ばれる渡し場であり，昭和56（1981）年以前は船で渡っていた。また，大正３（1914）年には，南薩鉄道（鹿児島県唯一の私鉄）の伊集院－加世田間が開通している。これは，渡畑遺跡・持躰松遺跡の中もかつて通っていたものであるが，昭和58（1983）年の6・21加世田水害を機に，翌昭和59年廃止された。数年前までは，遺跡周辺でも線路跡である土堤があちらこちらに残っていたが，近年になってその姿を消しつつある。近・現代においては，太平洋戦争（第二次世界大戦）時，旧加世田市の唐仁原・高橋に，陸軍飛行戦隊知覧分遣隊の万世基地がおかれ，戦争末期に特別攻撃隊の出撃基地となった。

参考文献

鹿児島県教委　1975『南薩地域　土地分類基本調査』

上東　克彦　2004「鹿児島県薩摩半島に伝世された華南三彩－クンディと果実形水注－」『貿易陶磁研究24号』日本貿易陶磁研究会

橋口　　亘　1999「薩摩出土の清朝磁器」『貿易陶磁研究会19号』日本貿易陶磁研究会

加世田市教委　1985「上加世田遺跡Ⅰ」『加世田市埋蔵文教育委員会化財発掘調査報告書』（3）

1987「上加世田遺跡Ⅱ」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』（4）

1995「干河原遺跡」『加世田市埋蔵文化材発掘調査報告書』（12）

1999「志風頭遺跡・奥名野遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』（16）

金峰町教委　1998「上水流遺跡－第１次調査－」『金峰教育委員会町埋蔵文化財発掘調査報告書』（9）

1998「持躰松遺跡　第1次調査」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』（10）

2000「小薗遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』（11）

鹿児島県教委　1991「小中原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財教育委員会発掘調査報告書』（57）

河口　貞徳　1988『日本の古代遺跡38鹿児島』保育社

加世田市教委　1986『加世田市史』（上下）史編纂委員会

金峰町教委　1987・1989『金峰町郷土史』（上下）郷土史編纂委員会

原口　虎雄　1982 『三國名勝圖會』第二巻　図書出版青潮

第３章　層　　序

渡畑遺跡は，万之瀬川下流沿岸の自然堤防及び河川敷に立地しており，地層は基本的に河川堆積の砂質土および粘質土である。

本遺跡は，調査区北側の持躰松遺跡に隣接するＡ地点と，調査区南側の芝原遺跡に隣接するＢ地点とに分かれ，それぞれで層位が異なる。

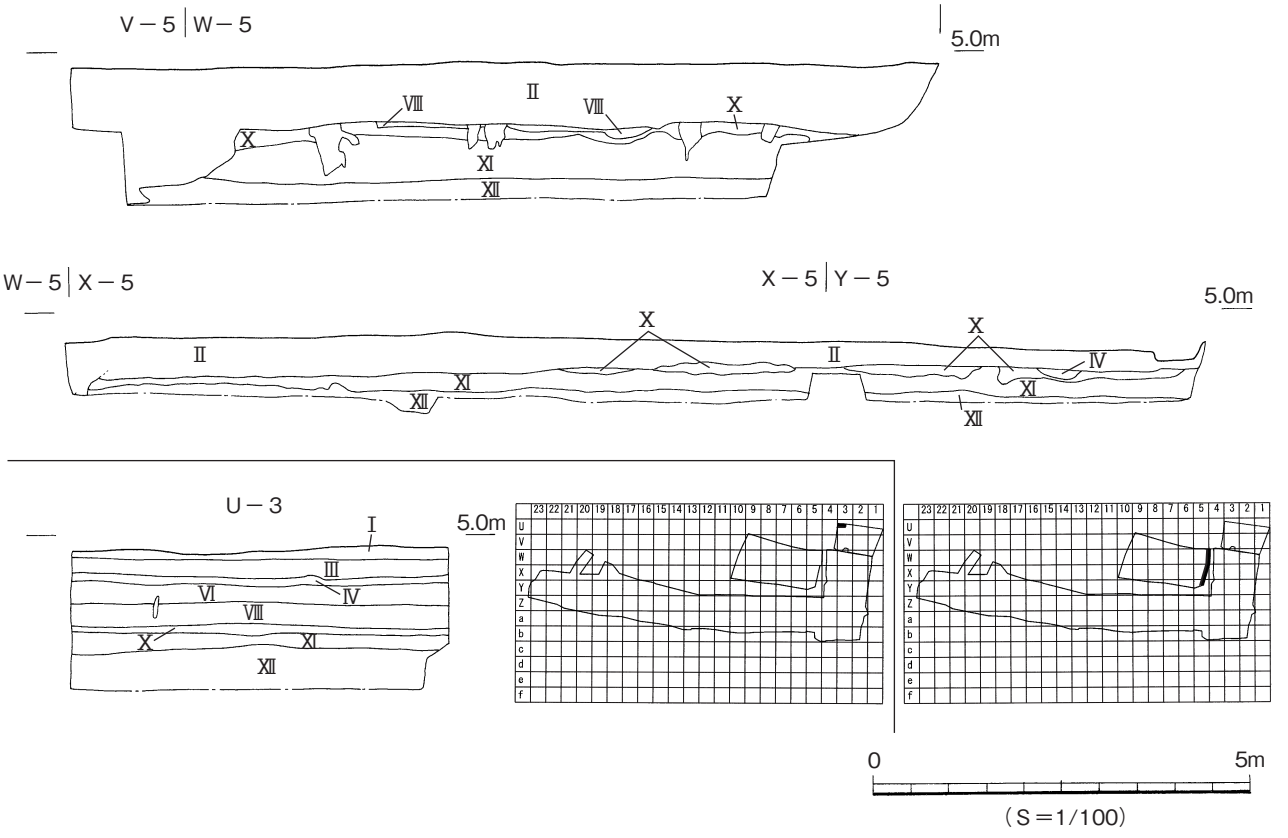
Ｂ地点における調査区北西側のＶ～Ｙ－５～10区では，Ⅲ～Ⅴ層が削平されている（第５図）。そのため，古代から中世までの遺構・遺物はほとんど見られなかった。さらに，Ｗ～Ｙ－６～８区においてはⅥ～Ⅻ層が攪乱によって明確な分層ができなかったため，弥生・古墳時代の遺構検出が困難であった。

多量の遺構が検出されたＶ～ａ－１～４区については，水田耕作や過去数回に及ぶ河川の氾濫に伴う洪水堆積層などを含んでおり，層位が安定していない。

比較的層位が安定しているＵ～Ｗ－１～３区の層位を基準に，各時代の遺物包含層を確定することにした。なお，Ａ地点の土層断面および，Ｂ地点の東側土層断面については，平成21年度刊行「渡畑遺跡１」に掲載してある。

表５　Ｂ地点の層位

Ⅰ　層	灰褐色土	現耕作土
Ⅱ　層	茶褐色砂質土	近世遺物包含層
Ⅲ　層	黒色砂質土	中世前期遺物包含層
Ⅳａ層	黄褐色砂層	
Ⅳｂ層	茶褐色砂質土	中世前期遺物包含層
Ⅴａ層	黄褐色砂層	
Ⅴｂ層	明茶褐色粘質土	古代遺物包含層
Ⅵ　層	黒褐色砂質土	古代遺物包含層 古墳時代遺物包含層
Ⅶ　層	暗黄褐色砂層	古墳時代遺物包含層
Ⅷ　層	明茶褐色砂質土	弥生・古墳時代遺物包含層
Ⅸ　層	黄褐色砂層	
Ⅹ　層	明黒褐色砂質土	弥生・古墳時代遺物包含層 縄文時代晩期遺物包含層
Ⅺ　層	黄橙色砂質土	縄文時代後期遺物包含層
Ⅻ　層	白色砂層	縄文時代中期遺物包含層



第５図　土層断面実測図

第４章　弥生・古墳時代の調査

第１節　調査の概要

Ｂ地点の調査は重機を使用して表土を除去した後，人力でⅡ層以下の掘り下げを行った。

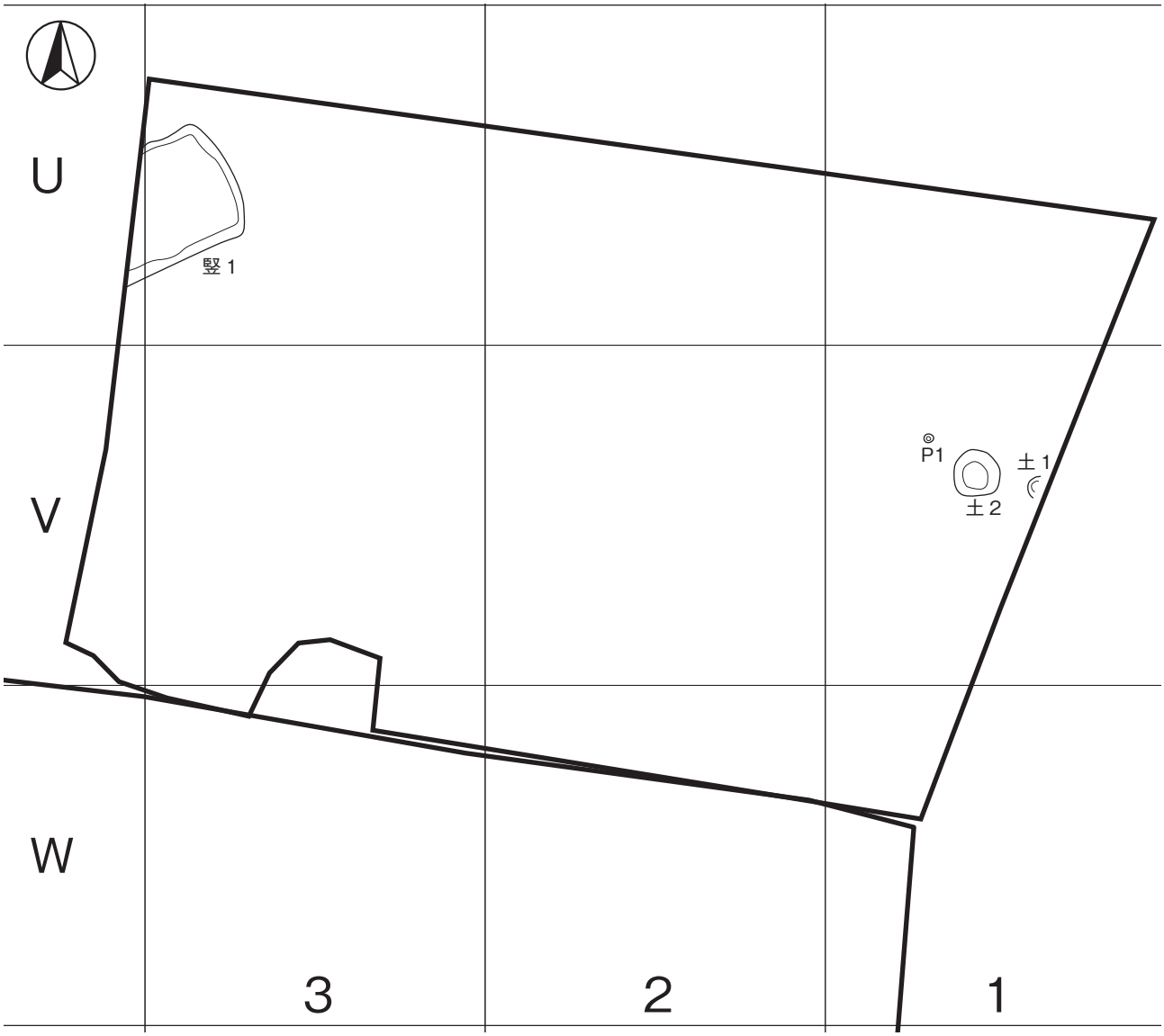
弥生・古墳時代の調査対象となる層位は，Ⅵ～Ⅷ層であるが，層位が安定していないため，表土直下層から検出された遺物も多く，それらは一括して取り上げることにした。また，縄文時代の遺物包含層であるＸ層からも，弥生・古墳時代の遺物が検出された。これらは，河川の氾濫による流れ込みと判断し，該期の遺物として取り上げることにした。

遺構検出は，Ⅵ～Ⅷ層で行った。ただ，層位が不安定な場所では，Ⅸ・Ｘ層から検出された遺構も多い。その結果，該期の遺構として竪穴住居跡７軒，大型土坑３基，土坑７基，ピット12基を検出した。（第６～９図）

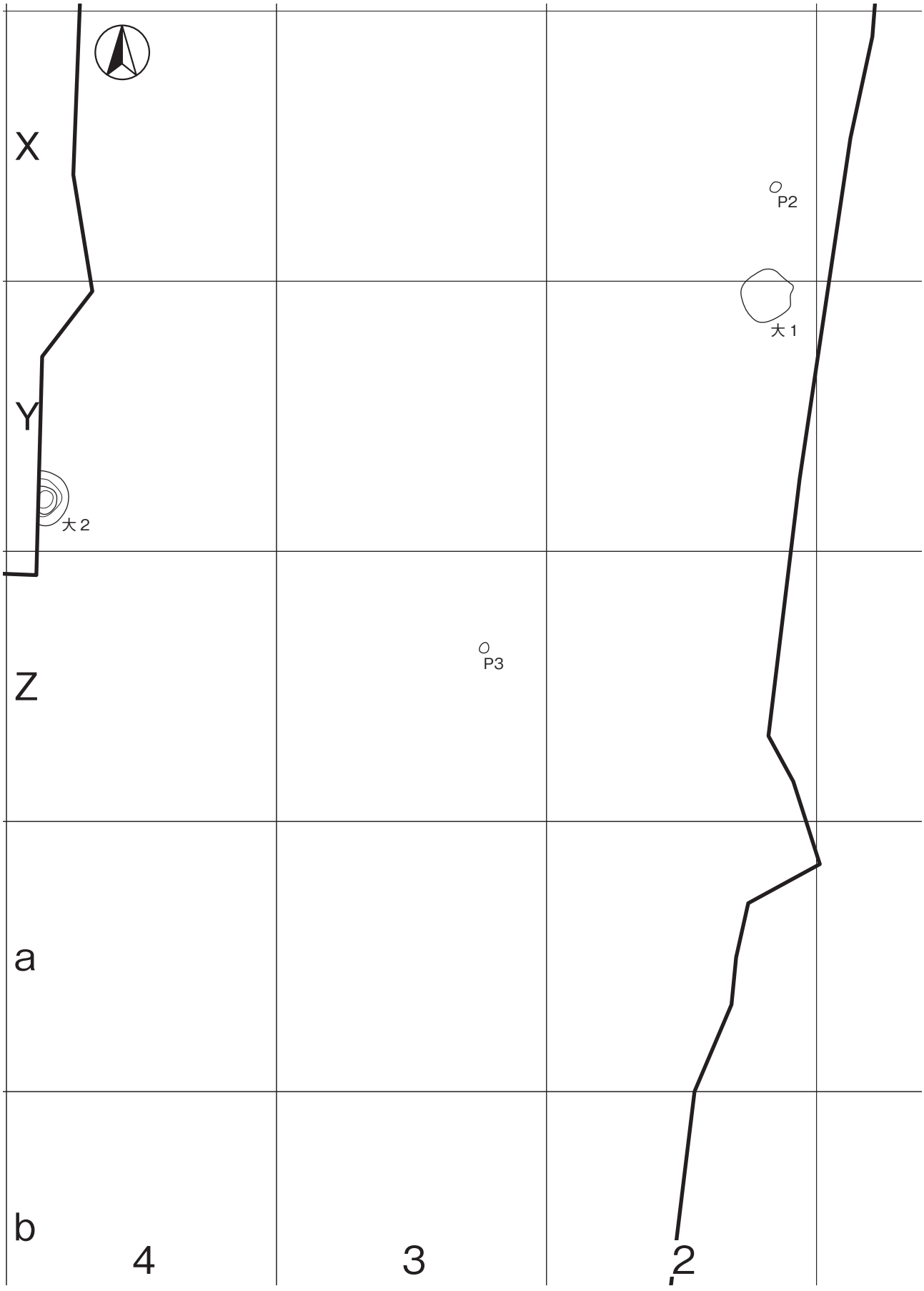
遺物は小破片がほとんどであり，その総数は２万点を超える。遺構内出土遺物は，全て番号を付けて取り上げ，それ以外は一括して取り上げた。ただし，該期の遺構に伴う同時期の遺物と認定されるものは少なく，その中で時期形式が合致するものを掲載することにした。

土器は，甕形土器，壺形土器を中心とした土器片がほとんどである。石器は，礫石器として磨製石鏃，石包丁，石核が１点ずつ出土し，剥片石器として磨製石斧が１点，敲石が１点，凹石が２点，砥石が11点出土した。軽石製品は数十点出土したが，形がはっきりしたもの11点を掲載することにした。土師器は土師甕が１点，須恵器は杯身が２点出土した。

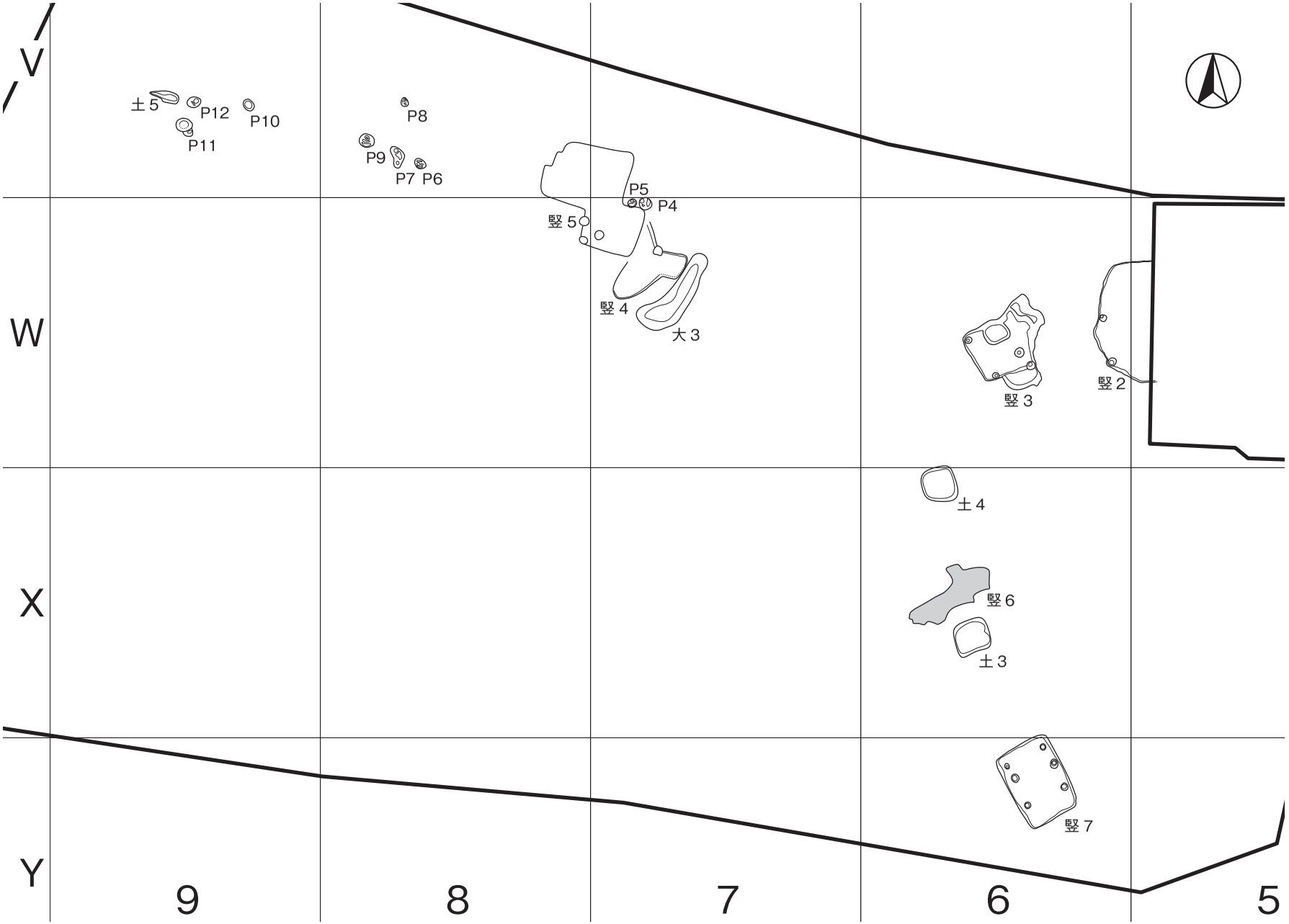
遺物の分類については，土器，土製品，土師器，須恵器，石器とした。さらに土器は，甕形土器，甑形土器，壺形土器，鉢形土器，高坏形土器，坩形土器，蓋類と分類した。



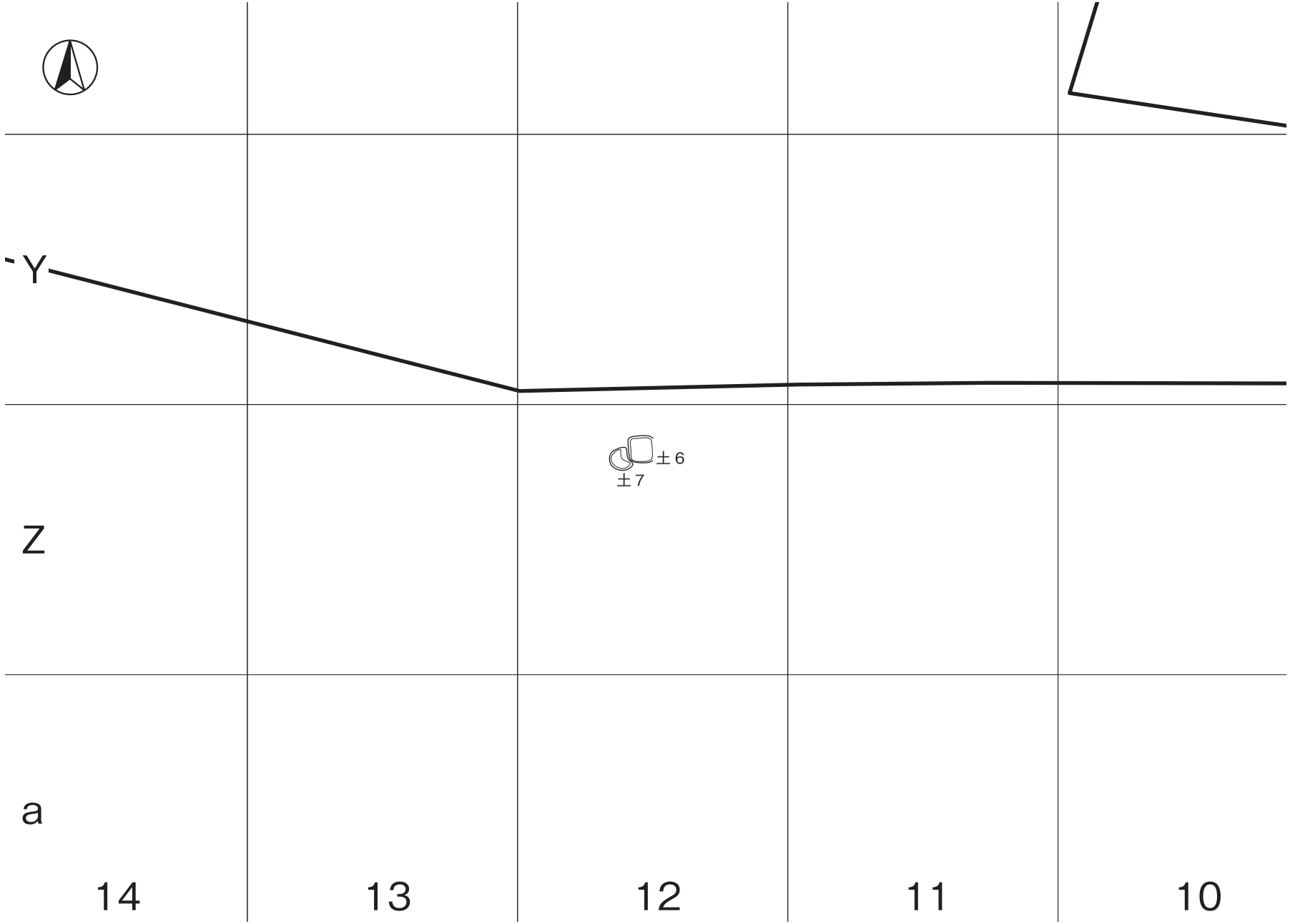
第６図　弥生・古墳時代検出遺構配置図（1）



第７図　弥生・古墳時代検出遺構配置図（2）



第８図　弥生・古墳時代検出遺構配置図（3）



第９図　弥生・古墳時代検出遺構配置図（4）

第２節　遺構

該期の遺構はＵ～Ｚ－１～12区の広い範囲で検出した。

層序で示したとおり，Ｗ～Ｙ－６・７区はⅥ～Ⅷ層の遺構検出が困難なため，Ｘ層上面を検出面とした。

１　竪穴住居跡

(1)　１号竪穴住居跡（第10図）

Ｕ－３・４区のⅦ層上面で，東側約3/4を検出した。

調査は，中央に埋土観察ベルトを設定して中央部分から床面を確認していった。

最終的なプランである残存部の長径は約4.2m，短径は約3.5m と住居跡としてはやや大きめである。検出面から張り床とみられる硬化面までの深さは約25cm で，硬化面の厚さは約14cm である。硬化面は中央部が最も厚く硬化している。埋土はⅥ層の黒褐色砂質土であり，床面の中央部に多量の炭化物集中域を有する。また，その南方には約１m 程度の土坑があり，炭化物集中域との関連性については，今後検討していく必要がある。

多数検出された柱穴と思われるピットは，確定が困難なため全て掲載することにした。

遺構に伴う該期の遺物は確認できなかった。

(2)　２号竪穴住居跡（第11図）

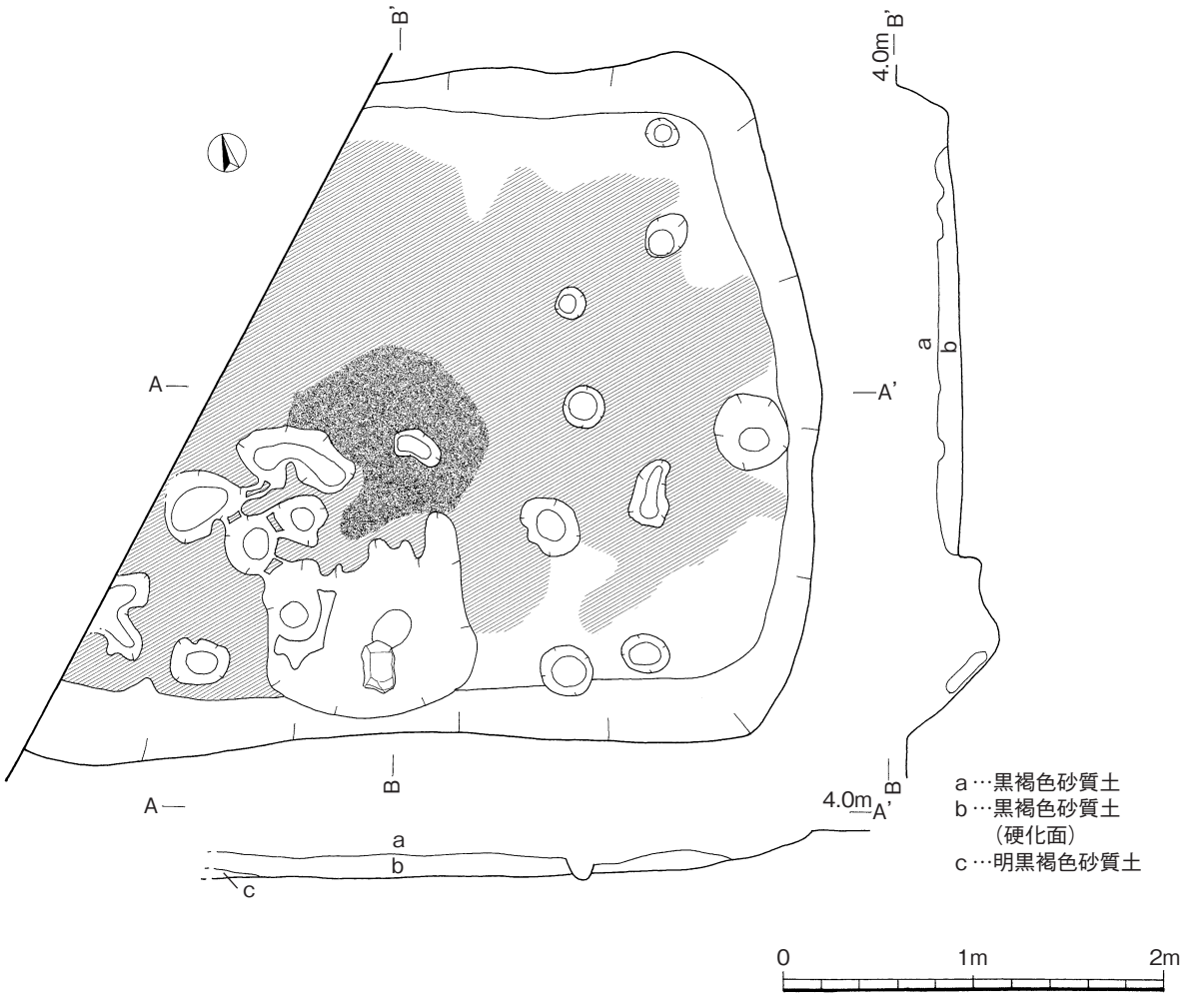
Ｗ－５・６区のＸ層上面で，西側半分を検出した。形状は，円形に近くなると思われる。

最終的なプランである残存部の長径は約4.5m，短径は不明で住居跡としてはやや大きめである。検出面から張り床とみられる硬化面までの深さは約15cm である。

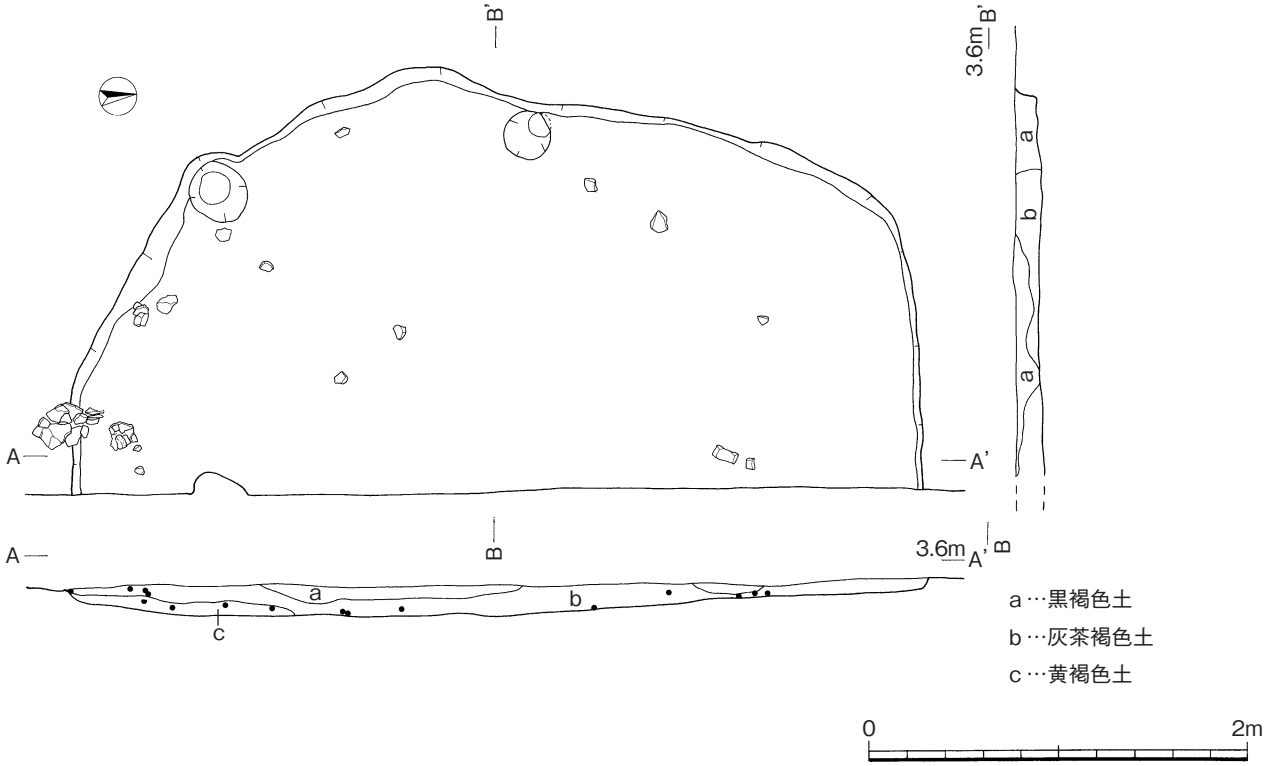
遺物は甕形土器，鉢形土器の小破片が21点出土し，その中で３点を掲載した。

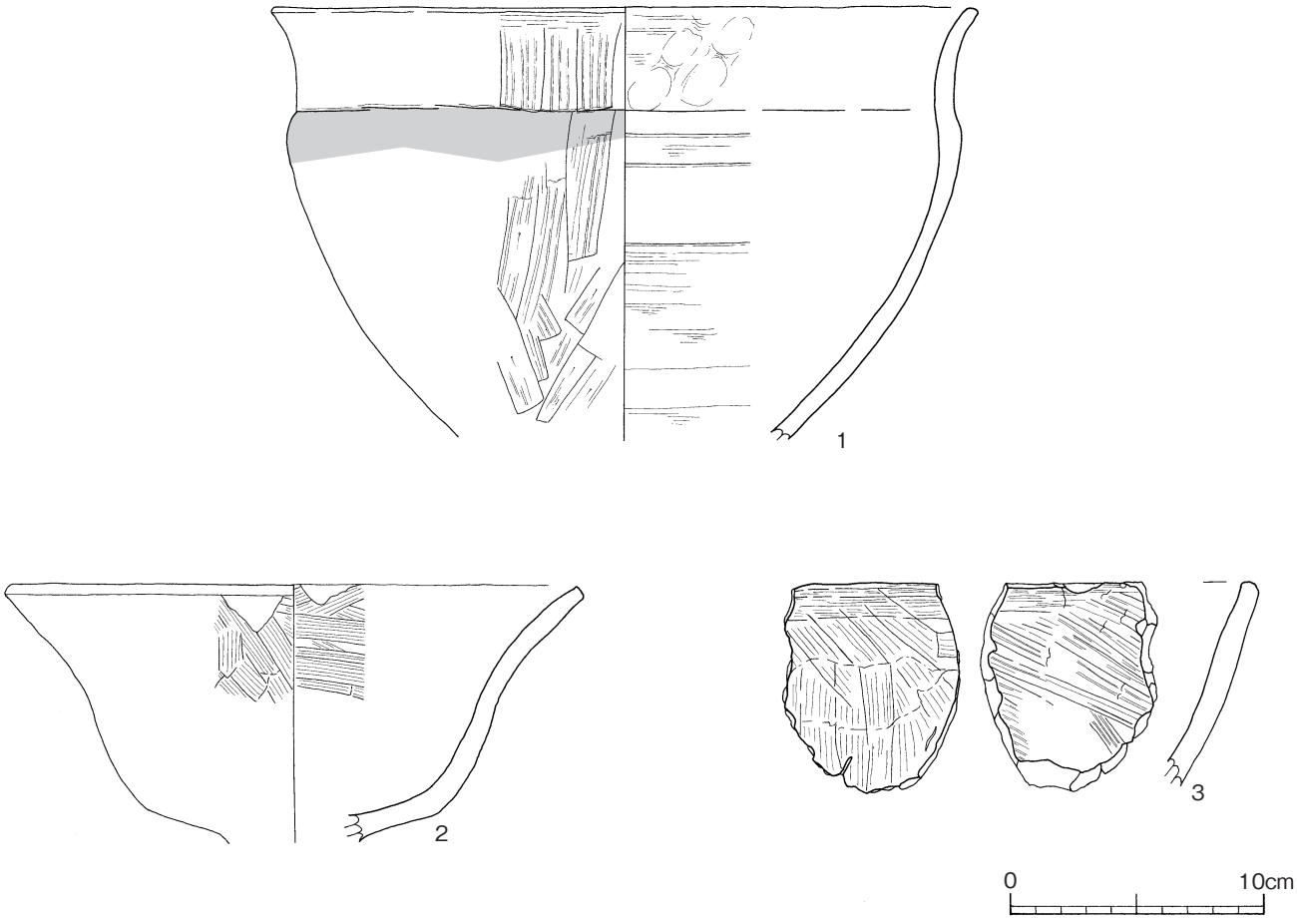
２号竪穴住居跡内出土遺物（第11図１～３）

１は甕形土器の口縁部から胴部で，口縁部が緩やかなＳ字を呈し，胴部上位にススが付着している。２は鉢形土器の口縁部から底部であり，胴部から底部にかけて屈曲している。３は甕形土器の口縁部である。



第10図　１号竪穴住居跡実測図





第11図　２号竪穴住居跡及び出土遺物実測図

(3) ３号竪穴住居跡（第12図）

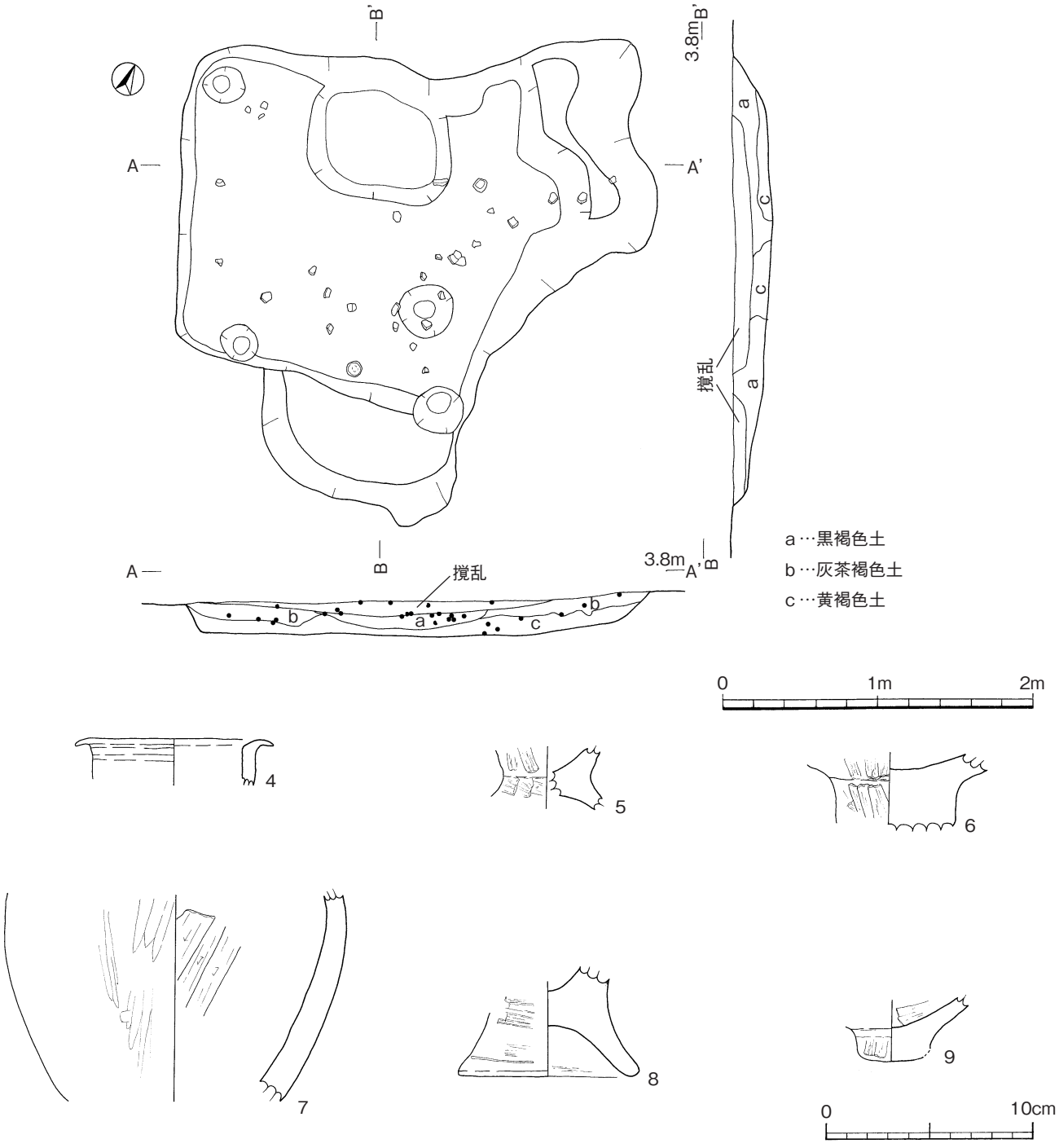
Ｗ－６区のＸ層上面で検出した。

最終的なプランは約３ｍ×2.8mの長方形を呈し，床面までの最深部は約24cmである。また，南側に大きめの張り出しをもつ。

遺物は甕形土器，壺形土器の小破片が31点出土し，その中で６点を掲載した。

３号竪穴住居跡内出土遺物（第12図４～９）

４は，壺形土器の口縁部で，口縁端部が逆Ｌ字状になるもので断面が丸みを帯びるものである。径は約10cmで小型である。５・６は甕形土器の脚部で，７は胴部である。８・９は底部で，８は甕形土器の高台，９は平底である。



第12図　３号竪穴住居跡及び出土遺物実測図

(4) ４号竪穴住居跡（第13図）

Ｗ－７区のＸ層上面で，東側1/4を検出した。５号竪穴住居跡に切られるように検出したため，比較的古いものと判断できるが，明確な時期差は不明である。

形状は，東部に張り出しをもつ方形である。規模については，残存部が少ないため不明である。硬化面までの深さは20cm で，張り出し部はさらに５cm ほど下がる。

埋土は，Ｖｂ層の明茶褐色粘質土とⅥ層の黒褐色砂質土である。張り出し部の中央には土坑が検出され，埋土の最下部にはＶｂ層が硬化した土が見られる。

また，削平された部分に４・５号ピットが検出されたが，その関連性については後述する。

遺物は27点出土し，古墳時代のものと思われるが，いずれも小片であったため掲載しなかった。

(5) ５号竪穴住居跡（第14図）

Ｖ・Ｗ－７・８区のＸ層上面で，４号竪穴住居跡を切って検出している。

最終的なプランで確認すると，２軒の住居跡が重なったように見える。埋土状況によってそれらの関係を判断すると，北方部の埋土はＶｂ層の明茶褐色粘質土とⅥ層の黒褐色砂質土が混在しているが，南方部の埋土はＶｂ層の明茶褐色粘質土である。時期差について明確な判断は困難であるが，用途は異なると考えられる。

ピットは北西方部において７基検出した。これらは内側に規則的な配列をもつため，柱穴跡であると考えられる。また，中央には円形の土坑が２基，東部には焼土跡を伴う長方形の土坑が見られる。南方部では焼土跡が１基検出されたが，ピット等は見られなかった。

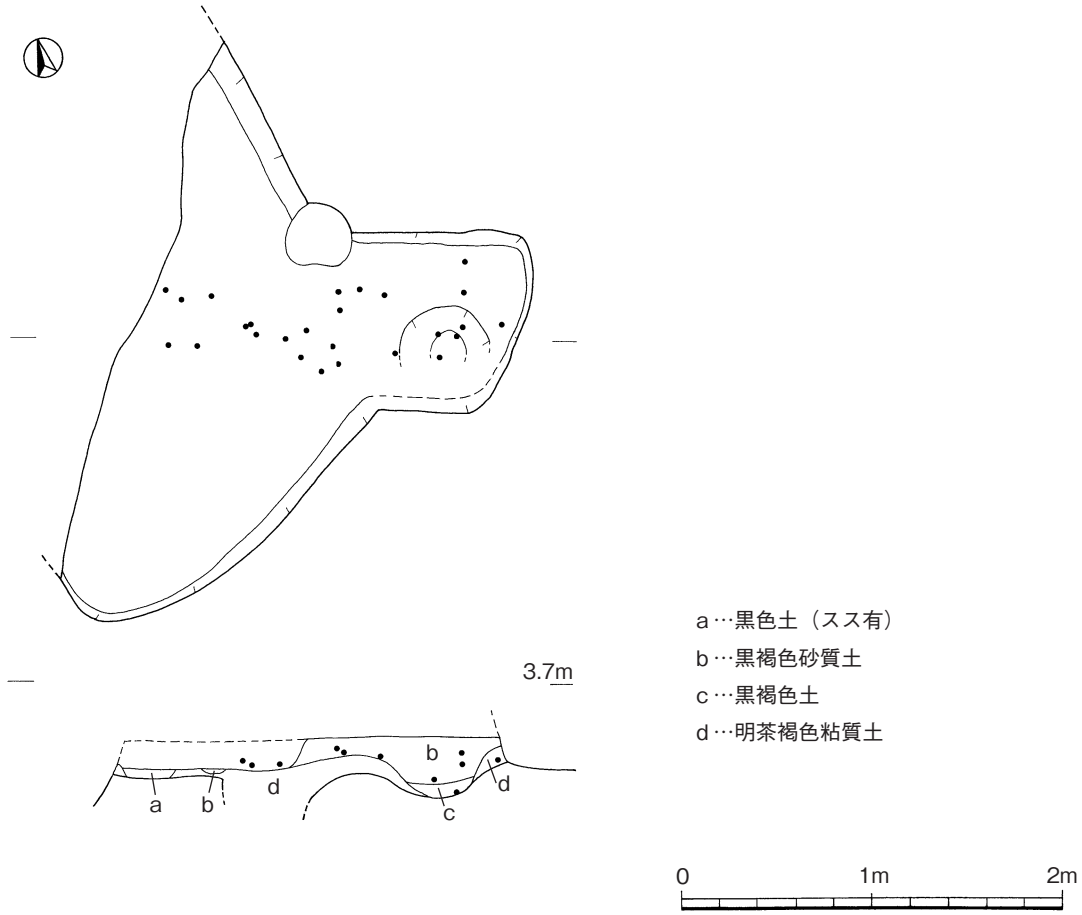
北方部の長径は約3.2m，短径は約2.3m を測り，硬化面までの深さは最深で約23cm である。南方部の長径は約2.1m，短径は約1.9m であり，硬化面は検出されなかった。それぞれ住居跡としてはやや小さめである。

また，遺構に伴う同時期の遺物は確認できなかった。

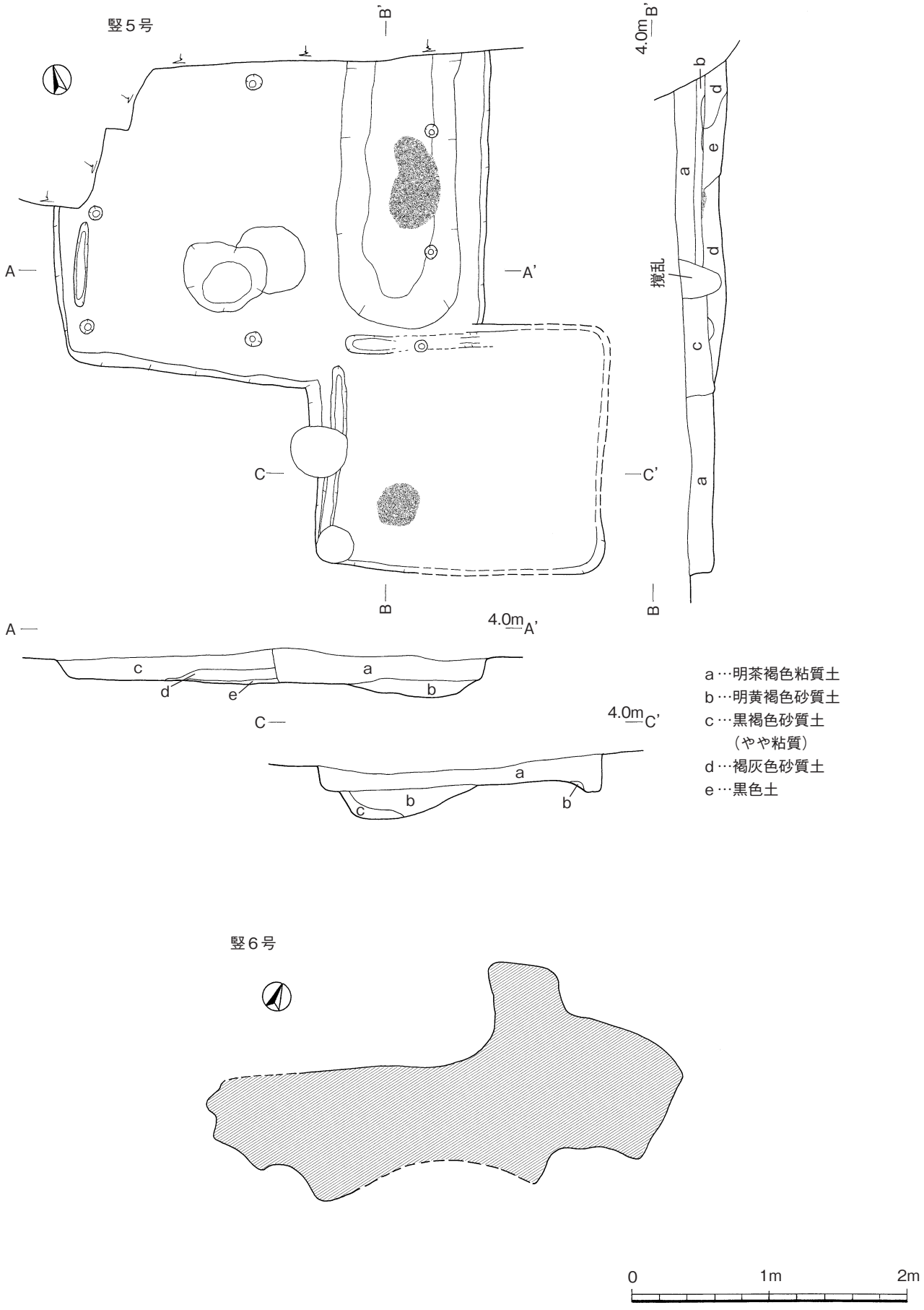
(6) ６号竪穴住居跡（第14図）

Ｘ－６区のＸ層上面で検出したが，上部は削平されており硬化面のみであったため，形状等は不明である。

また，遺構の周辺やそれに伴う遺物も出土しなかった。



第13図　４号竪穴住居跡実測図



第14図　５・６号竪穴住居跡実測図

(7) ７号竪穴住居跡（第15図）

Ｘ・Ｙ－６区のＸ層上面で検出した。

最終的なプランは，長径約３m，短径約2.2m の隅丸長方形を呈する。深さは，検出面から最深部で約20cm 程度である。

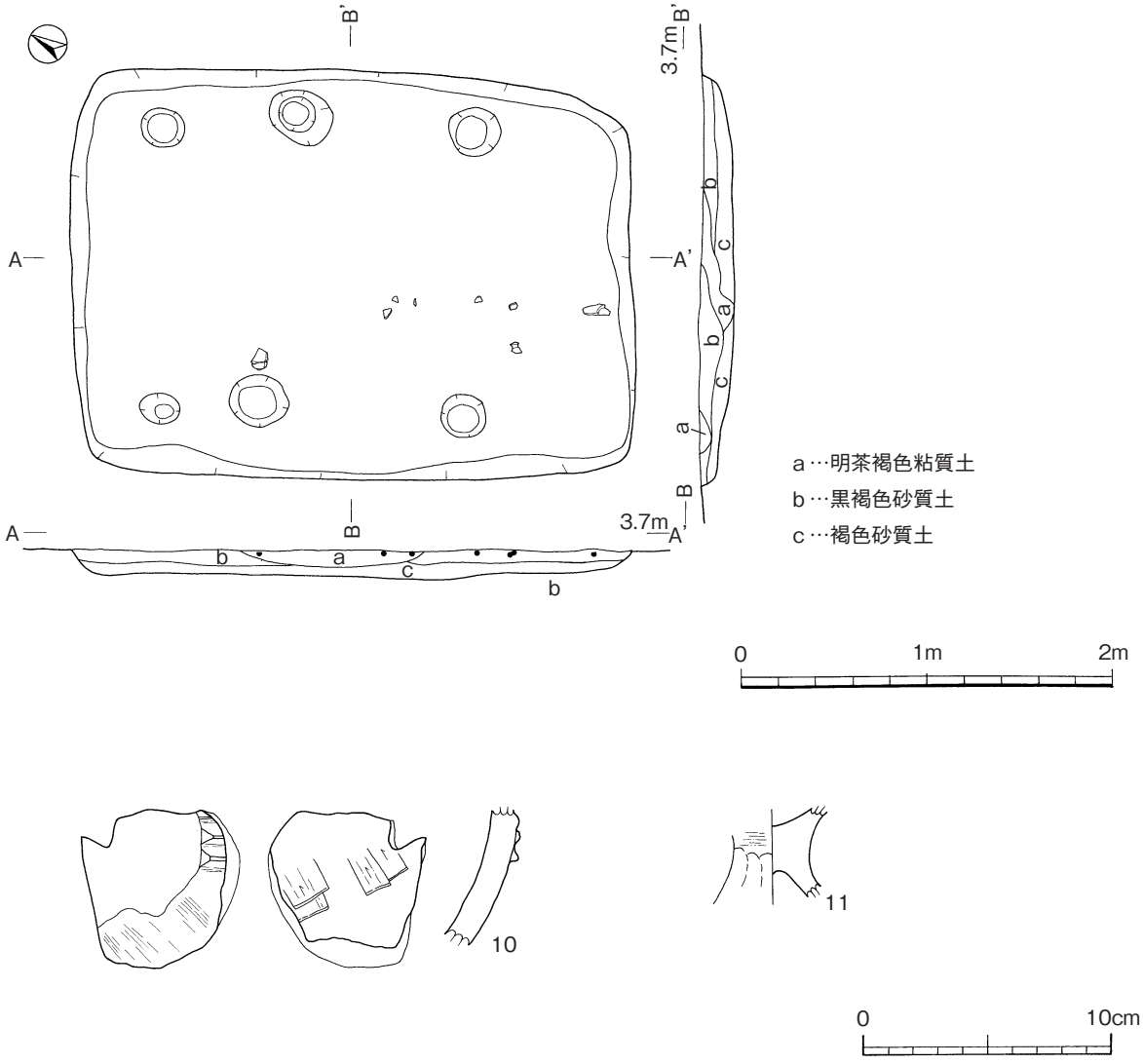
埋土は，Ｖｂ層の明茶褐色粘質土と，Ⅵ層の黒褐色砂質土とそれらの混在土の３つに分層できる。炭化物等の混入は見られない。

ピットは，６基検出した。内側に規則的に配列されており，径が約30cm である４基は主柱穴跡と考えられる。

遺物は土器片が７点と礫片が１点出土し，壺形土器の小片を２点のみ掲載した。

７号竪穴住居跡内出土遺物（第15図10・11）

10は壺形土器の胴部片で突帯を有し，11は脚部である。



第15図　７号竪穴住居跡及び出土遺物実測図

2　大型土坑

(1)　1号大型土坑（第16図）

X・Y－2区のⅧ層上面から検出した。

径が約1.9m の隅丸方形で，遺構内に土坑が2基みられる。埋土は，4つに分層できる。硬化面は見られなかった。

遺物は，古墳時代の甕形土器，壺形土器の小片が出土した。その中で形状が明確なものを3点掲載した。

1号大型土坑内出土遺物（第16図12～14）

12は壺形土器の底部付近で，径は不明であるがかなり大型のものと思われる。13・14は胴部片で，刻みを施した突帯を有する。

(2)　2号大型土坑（第16図）

Y－4区のⅧ層上面から検出した。

径が約2m の円形を呈すると思われ，2段堀りになっており，最深部は約1.5m もある。東側半分を残存部とする。

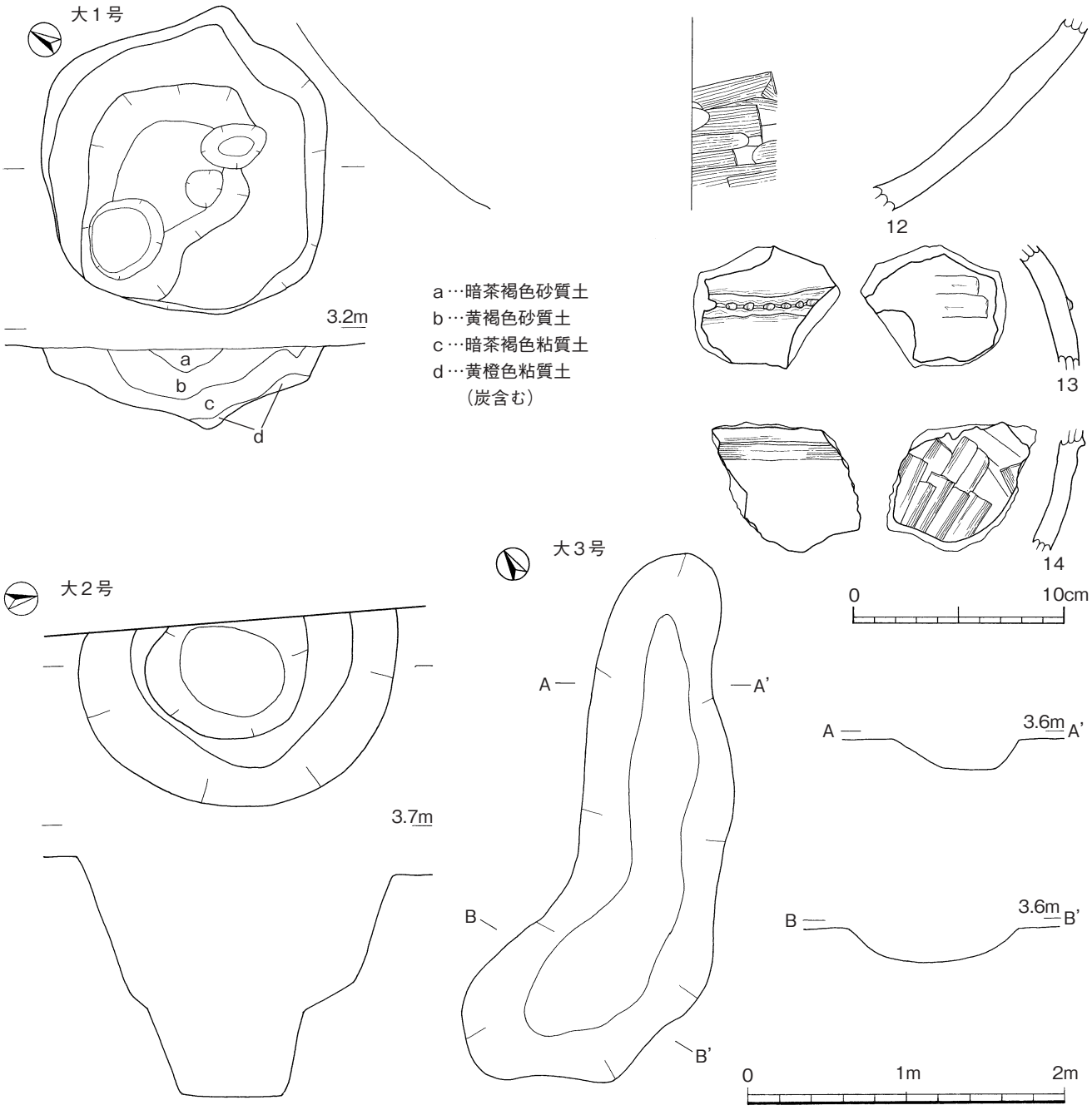
遺構に伴う遺物は遺構周辺を含めて出土せず，また，掘り込みが深く硬化面も見られないことから，その用途については不明である。

(3)　3号大型土坑（第16図）

W－7区のX層上面から検出した。

長径約3.4m，短径約1.1m の長楕円形で，検出面からの深さは約20cm である。

遺構に伴う遺物は出土しなかった。



第16図　1～3号大型土坑及び出土遺物実測図

３　土坑

該期の土坑は，７基検出した。

(1) １・２号土坑（第17図）

１・２号土坑はⅤ－１区のⅧ層上面から検出され，遺構に伴う遺物は出土しなかった。

１号土坑は東側は調査区外のため，西側半分のみ調査した。残存部の径は約90cm で，深さは約12cm と浅い。

２号土坑は径が約1.4m の円形で，検出面からの深さは約30cm である。

(2) ３・４号土坑（第18・19図）

３・４号土坑はⅩ－６区のⅩ層上面で検出した。

３号は長径約1.3m，短径約1.2mの隅丸方形を呈し，検出面からの深さは約15cm である。３号土坑からは，古墳時代の壺形土器片が７点出土し，その内２点を掲載した。

４号土坑は径が約1.2mの隅丸方形を呈し，掘り込みの深さが約５cm と浅い。遺構に伴う遺物は，甕形土器の小片が３点出土し，１点のみ掲載した。

３・４号土坑内出土遺物

３号土坑内出土遺物（第18図15・16）

15は壺形土器の胴部片で刻目突帯を有す。16は，同じく刻目突帯を有す壺形土器の胴部から底部で，底面は平底である。

４号土坑内出土遺物（第19図17）

17は甕形土器の胴部片である。

(3) ５号土坑（第19図）

５号土坑はⅤ－９区のⅧ層上面から検出した。

長径約1.1m，短径約43cm の楕円形を呈し，検出面からの最深部は約25cm である。

遺構に伴う遺物は出土しなかった。

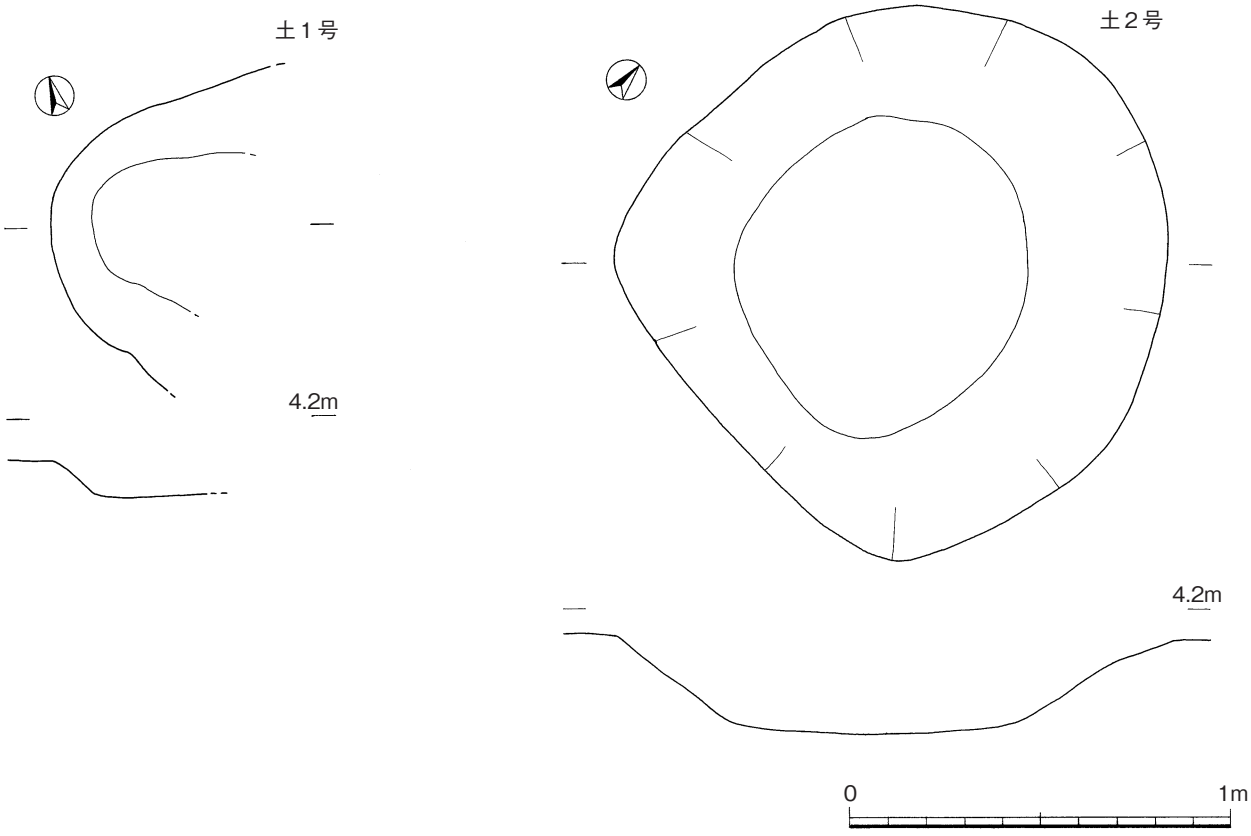
(4) ６・７号土坑（第19図）

６・７号土坑はＺ－12区のⅧ層上面から検出した。

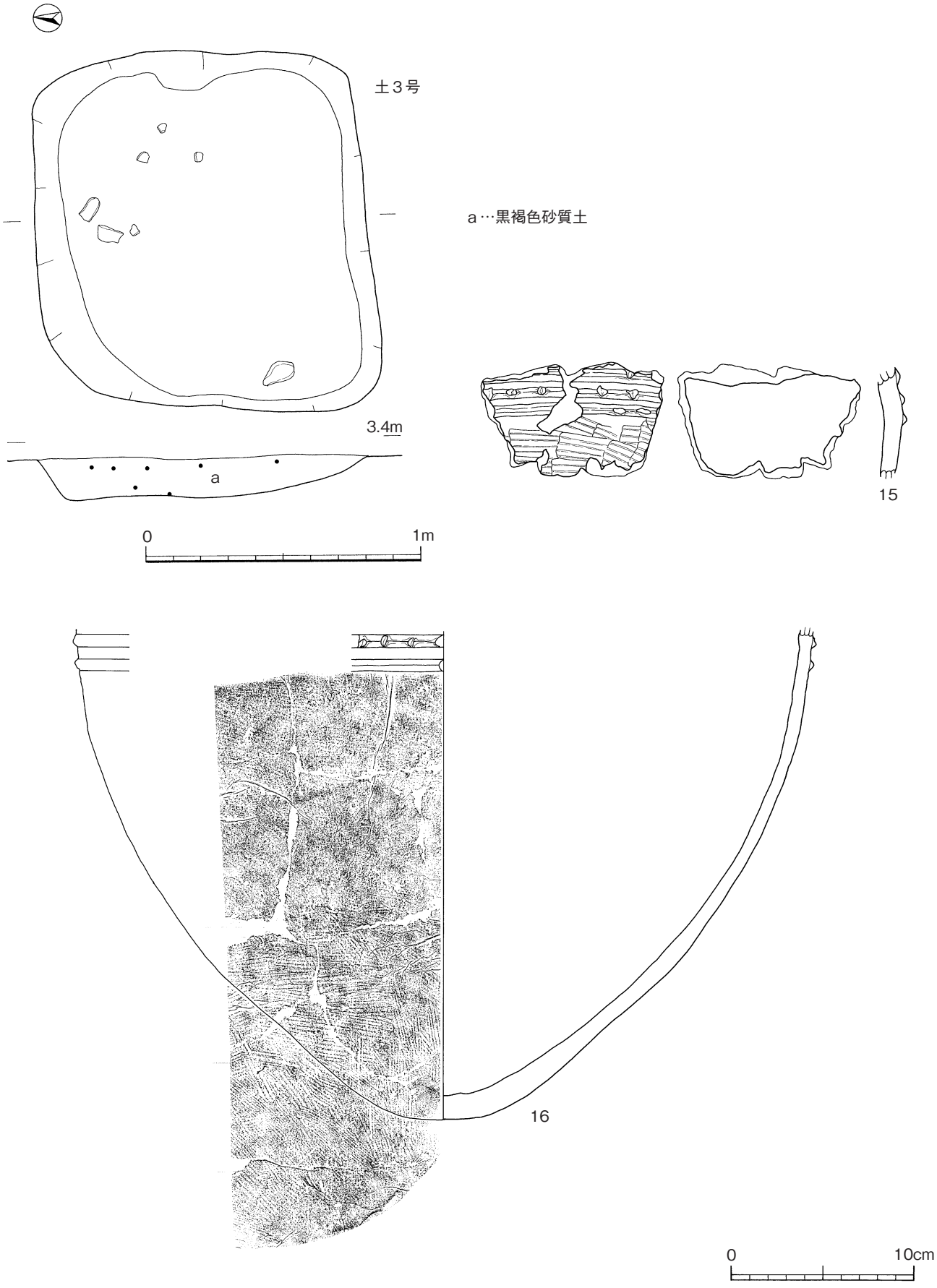
６号土坑は，径が約１m の隅丸方形を呈し，検出面からの深さは約15cm である。

７号土坑は約長径85cm，短径約65cm の楕円形を呈し，検出面からの深さは約45cm である。

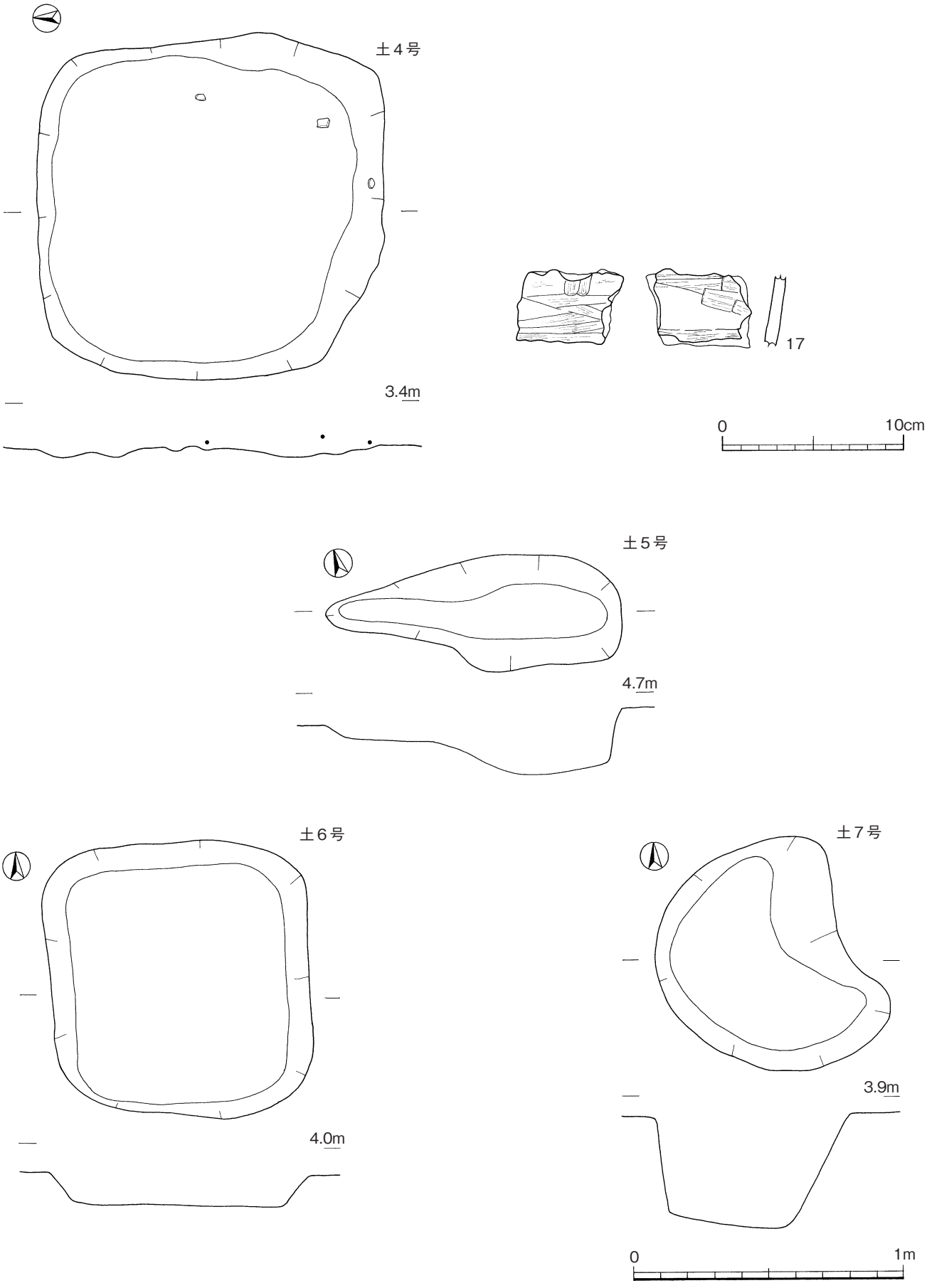
いずれも，遺構に伴う遺物は出土しなかった。



第17図　１・２号土坑実測図



第18図　3号土坑及び出土遺物実測図



第19図　4～7号土坑及び出土遺物実測図

4　ピット

該期のピットは，12基検出した。

(1) 1号ピット（第20図）

1号ピットはⅤ－1区のⅧ層上面で，1・2号土坑と並列して検出された。径が約25cmの円形を呈し，検出面からの深さは約30cmである。

遺構に伴う遺物は，古墳時代の甕形土器片が1点出土した。

1号ピット内出土遺物（第20図18）

18は，甕形土器の口縁部から頸部である。径は約21cmで，口縁部は大きく外向している。

(2) 2号ピット（第20図）

2号ピットはⅩ－2区のⅦ層で検出した。径が約37cmの円形を呈し，検出面からの深さは約63cmである。

遺構に伴う遺物は出土しなかった。

(3) 3号ピット（第21図）

3号ピットはZ－3区のⅨ層で検出した。長径約40cm，短径約30cmの不整楕円形を呈し，検出面からの深さは約23cmである。

埋土の上部では，古墳時代の鉢形土器の完形品が横向きに置かれた状態で出土した。

3号ピット内出土遺物（第21図19）

19は径が約17cmで，器高が約11cmの古墳時代の鉢形土器である。内外面にハケメを施し，仕上がりはやや粗い。他には遺物は出土しなかった。埋土の床着ではないことと置かれた状態が直立ではないことから，意図的に埋納したかどうかは不明である。

(4) 4・5号ピット（第21図）

4・5号ピットは，W－7区のX層上面における4号竪穴住居跡の削平部分と思われる場所で検出した。

4号ピットは径が約45cmの円形で，検出面からの深さは53cmである。

5号ピットは径が約32cmの円形で，検出面からの深さは約40cmある。

ほぼ同じ形状であることと，遺構に伴う遺物は出土しなかったことから，4号竪穴住居跡の柱穴跡の可能性も高い。また，大きさでは4号が5号よりもやや大きめであることから，4号が主柱穴であると考えられる。

(5) 6～12号ピット（第21図）

6～12号ピットは，Ⅴ－8・9区に集中し，Ⅷ層上面で検出された。

いずれも遺構に伴う遺物は出土しなかった。

6号ピットは長径約50cm，短径約30cm，検出面からの深さは約30cmの楕円形を呈する。

7号ピットは長径約82cm，短径約40cm，検出面からの深さは約54cmの楕円形を呈する。北部の掘り込みが深く，南部へ向かって上がってきている。

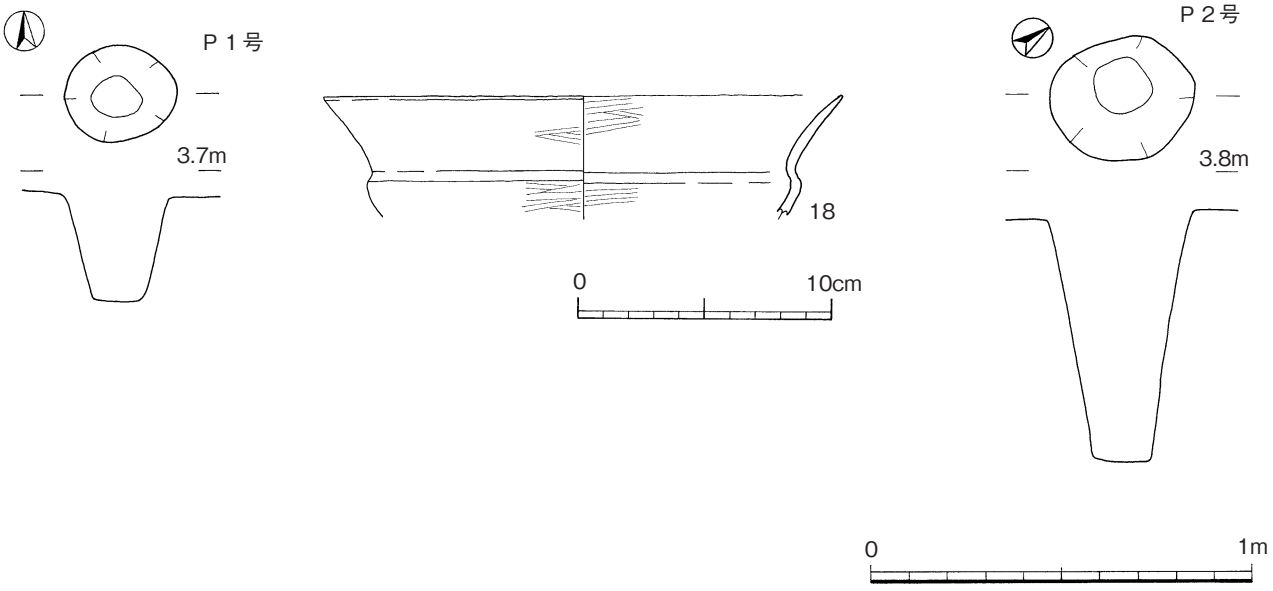
8号ピットは長径約33cm，短径約27cm，検出面からの深さは約22cmの小型楕円形を呈する。掘り込みが2か所ある。

9号ピットは径約55cmのほぼ円形を呈し，検出面からの深さは約30cmを測る。

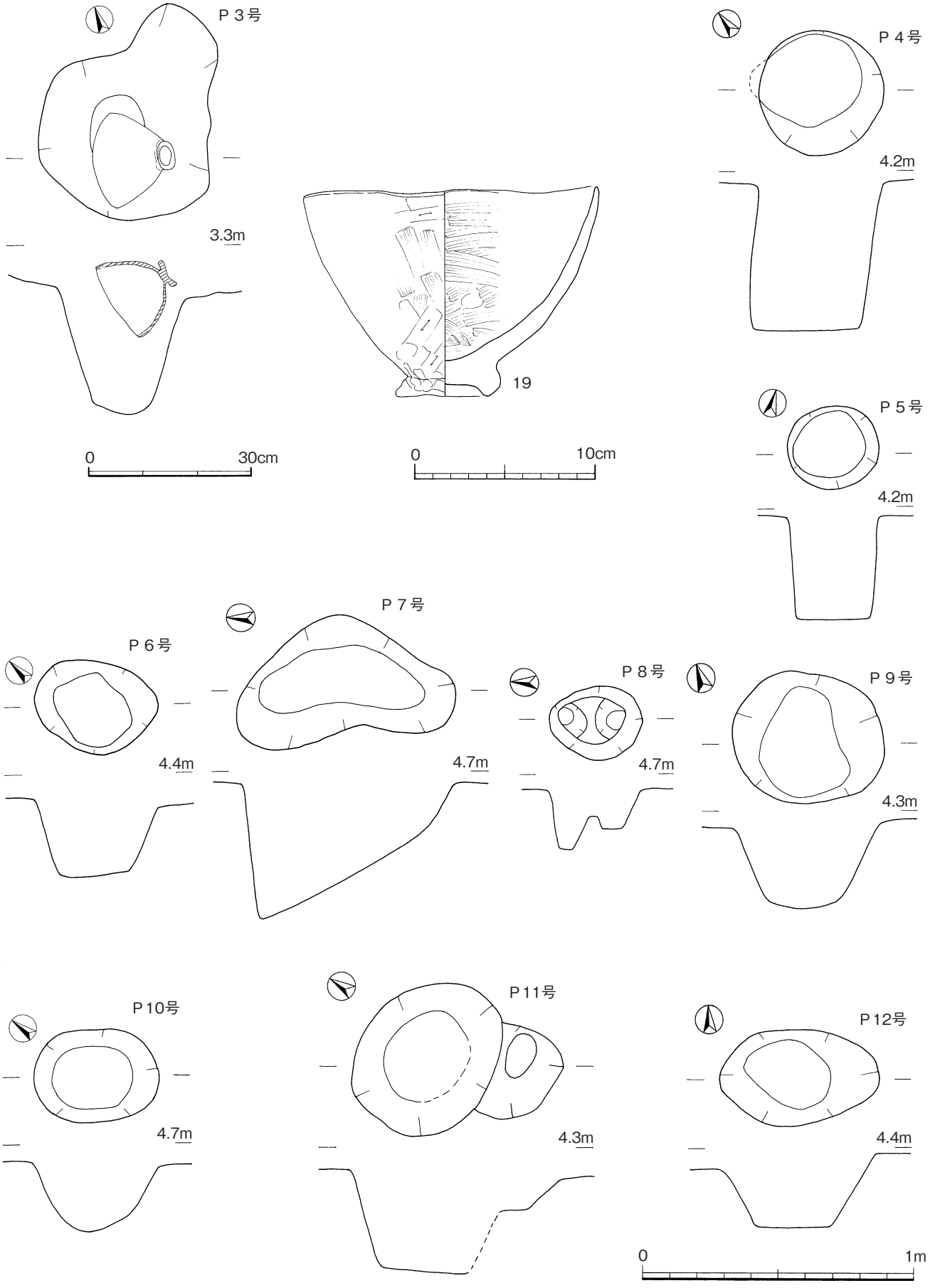
10号ピットは長径約46cm，短径約35cm，検出面からの深さは約25cmの楕円形を呈する。

11号ピットは2つの楕円形を呈するピットが重なっており，北側のピットが南側のピットを切っている。北側のピットの長径は約60cm，短径約50cm，検出面からの深さは約45cmである。南側のピットは深さ約12cmである。

12号ピットは長径約60cm，短径約35cm，検出面からの深さは約28cmの楕円形を呈する。



第20図　1・2号ピット及び出土遺物実測図



第21図　３～12号ピット及び出土遺物実測図

第３節　遺物

包含層からは，弥生時代前期から古墳時代後期の遺物が出土している。

Ⅴ層を中心として，大量の遺物が出土した。そのほとんどが小破片であり，これらに関しては区一括で取り上げを行った。完形に近いものや比較的大きい破片については，番号を付けて取り上げを実施した。

１　土器

(1) 甕形土器

甕形土器は，口縁部，胴部，底部合わせて371点を図化した。形式上Ⅰ～Ⅸ類に分類した。Ⅰ～Ⅴ類は小片が多く，口縁部断面の形状で判断し分類した。また形式不明な胴部，底部をそれぞれⅩ，Ⅺ類とした。

ア　Ⅰ類（第22図20・21）

口縁部断面が逆Ｌ字状で，刻目突帯が貼り付けられたものである。

20は口縁端部に連続刺突文を施し，断面は四角を呈する。21も口縁端部に連続刺突文を施す。断面は三角で，輪積みの跡が明確に残る。

イ　Ⅱ類（第22図22～39）

口縁部断面が逆Ｌ字，もしくはくの字状で，口縁端部に浅い沈線を施したものもある。

22～25は口縁端部に浅い沈線を施し，口縁部が内弯している。22は器壁が薄く，口唇部に浅くて細い沈線を縦位に施す。23～25は口縁端部の断面が四角を呈し器壁は厚い。

26～28は口唇部が平らで，口縁部が直立している。

29～31は口縁部がくの字を呈しており，口唇部に浅い沈線を施している。31は口径約22cm を測り，外面に丁寧なナデ調整を施す。

32～39は口縁部断面が三角を呈している。32～36は，口縁端部に浅い沈線を施す。33は口唇部に浅くて細い沈線を施す。35は口径約24cm で，口唇部にやや深い沈線を施す。37～39は口唇部が尖っている。

ウ　Ⅲ類（第22図40～42）

口唇部に玉縁を有する。

40は口縁部が直立しており，口径16.8cm を測る。41・42は口縁部がやや外反しており，玉縁下位に丁寧なナデ調整を施す。

エ　Ⅳ類（第23図43～61）

口縁部断面が逆Ｌ字状，またはくの字を呈しており，口縁部内側への張り出しが強い。口縁端部の断面は四角で浅い沈線を施すものと，沈線を施さない丸いものがある。

43～47は口唇部がやや丸みを帯び，内側の張り出しが四角形を呈する。口縁部は内弯している。46の口径は約31.5cm を測り，口唇部下位に管状工具による連点刺突を施す。

48～53は口唇部が平らで，内側の張り出しは三角形を呈する。48の口径は約29cm で，外面の口縁部に丁寧なナデ調整を施している。50の口径は約24cm で，内外面にナデ調整を施す。52は外面に丁寧なナデ調整を施している。

54～59は口唇部がやや凹んでおり，内側の張り出しは三角形を呈する。60・61は，口縁部がやや外向している。60は，口径が約28cm を測り，内側の張り出しは尖っている。

オ　Ⅴ類（第24図62～86）

口縁部内側への張り出しは弱く，口縁端部の断面は，丸いものと三角のものがある。

62～66は，口縁部断面が逆Ｌ字状を呈する。62・63は口唇部がやや丸く膨らみ，64は平らである。65・66は，口唇部がやや凹んでいる。65は口径約27cm を測り，内外面に丁寧なナデ調整を施す。66は口径約28cm を測り，口縁端部が三角を呈している。

67～82は口縁部断面がくの字状を呈し，67～79は口唇部がやや凹んでいる。68は口径約27cm を測り，内外面にケズリ後ナデ調整を施している。69は内外面にナデ調整を施す。70は口径約28cm を測り，内外面にケズリ後ナデ調整を施す。72は口径約31cm を測る。74は口径約30cm を測り，内外面に丁寧なナデ調整を施している。76は内外面ともに丁寧なナデ調整を施している。78は口径約20cm を測る。81は口径約31cm を測り，内外面に丁寧なナデ調整を施す。

83～86は口縁下部が欠損している。

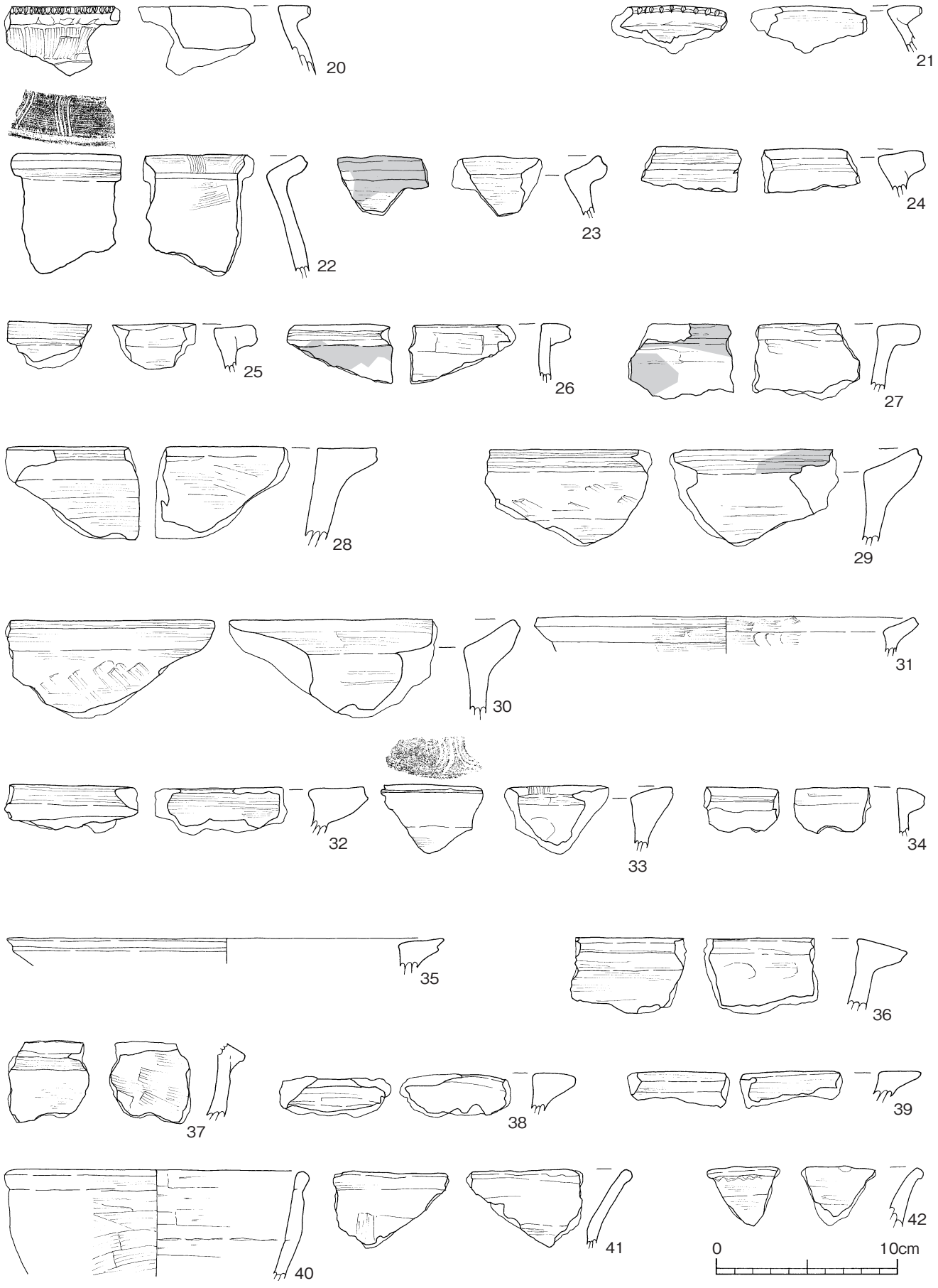
カ　Ⅵ類（第25・26図87～106）

口縁部が大きく外反し，胴部との屈曲部内外面に明瞭な強い稜が残る。

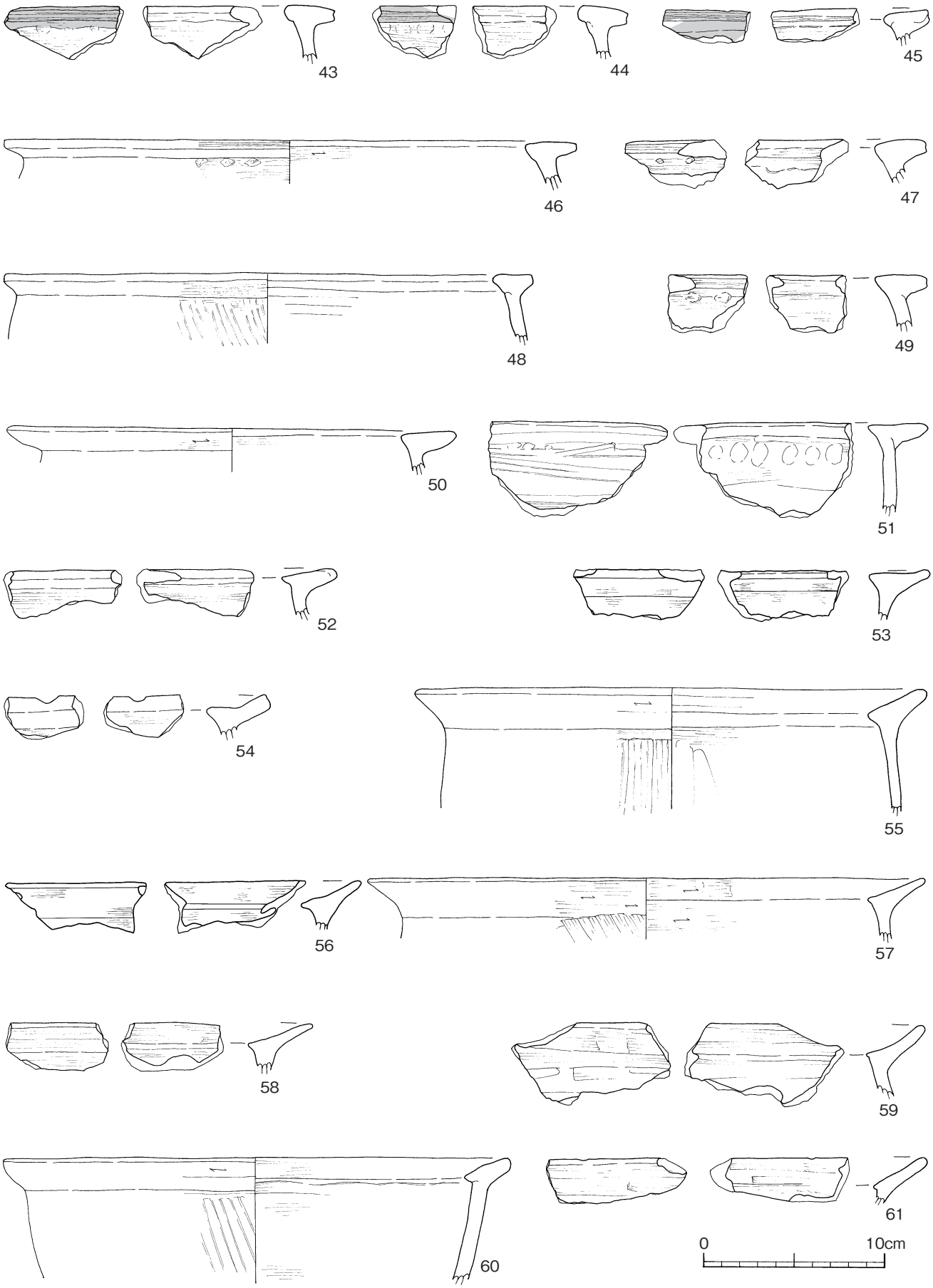
87～95は，肩部から胴部にかけて膨らんでいる。87は口縁端部の断面が四角形を呈する。口径約29cm で器面全体の内外面にハケメ調整を施す。88～95は口縁端部の断面が丸く，口縁部と胴部の屈曲が強い。90は口径約25cm で，器面全体にハケメ調整を施している。91～95は口縁部と肩部の屈曲がやや弱い。91は口径約21cm で，器面全体にハケメ調整を施している。92は口径約23cm で口縁部の形成が粗い。

96～103は，肩部から胴部にかけてやや膨らんでいる。96・97は口縁端部の断面が四角形を呈し，口縁部と胴部の屈曲が強く，肩部の器壁が厚い。98～103は，口縁端部の断面が丸く，肩部の器壁は薄い。100は口径約22cm を測り，外面にハケメ調整を施す。103は口径約13cm の小型の甕で，粗いケズリ調整を施す。

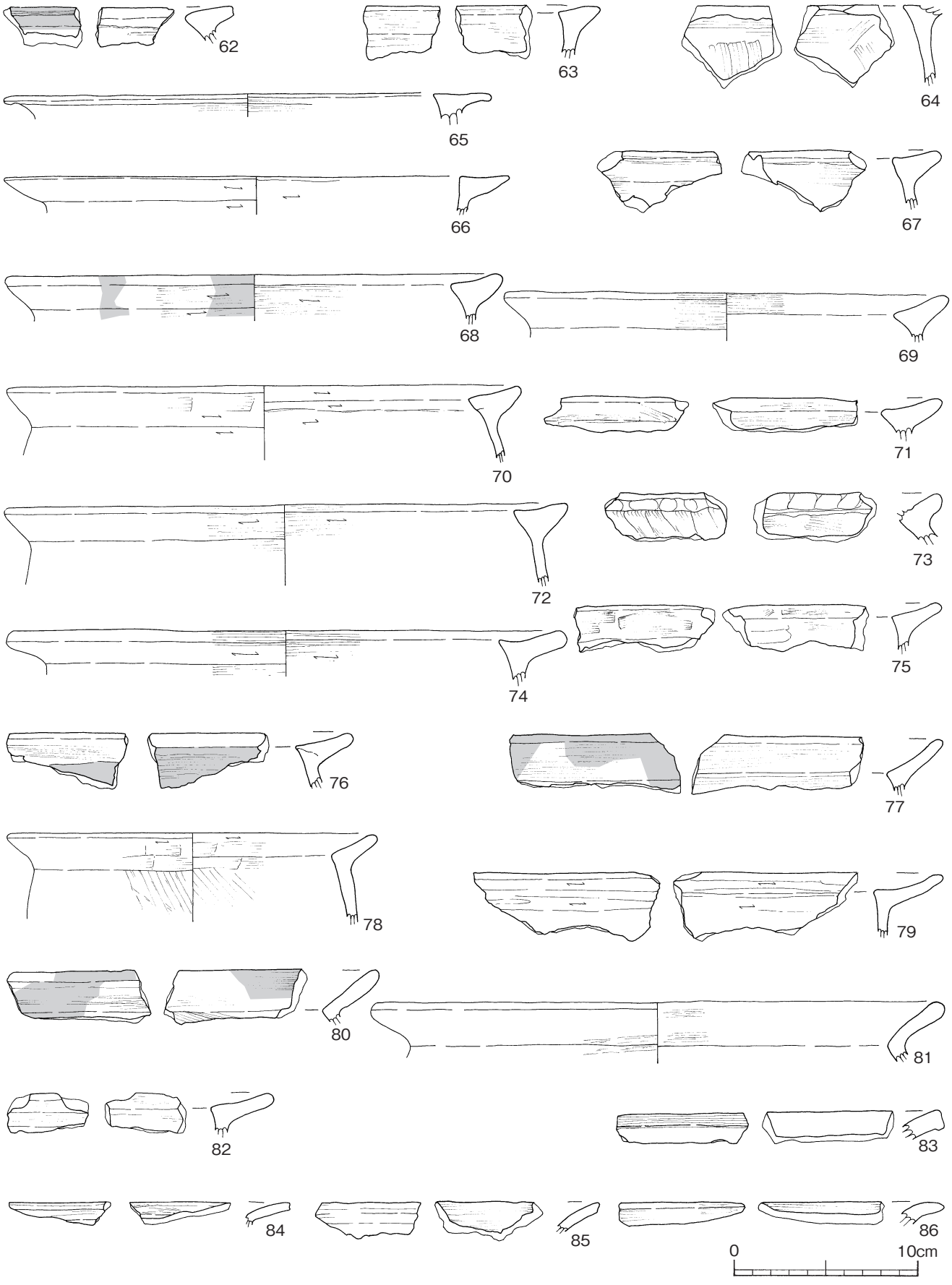
104～106は，口縁端部の断面が四角を呈するが，肩部から胴部にかけての形状が不明である。104は口径約30cm で，内外面に丁寧なハケメ調整を施す。



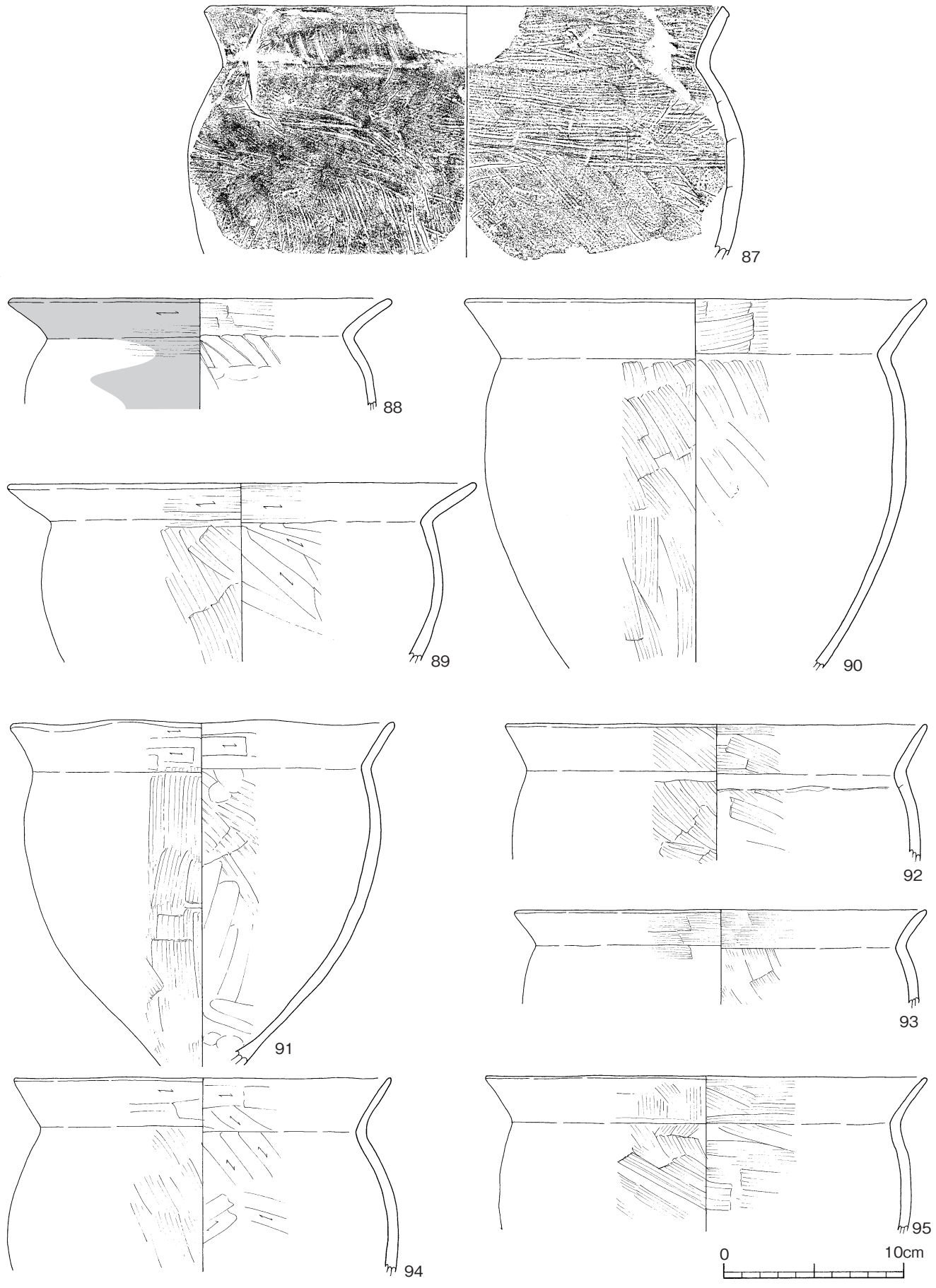
第22図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（１）



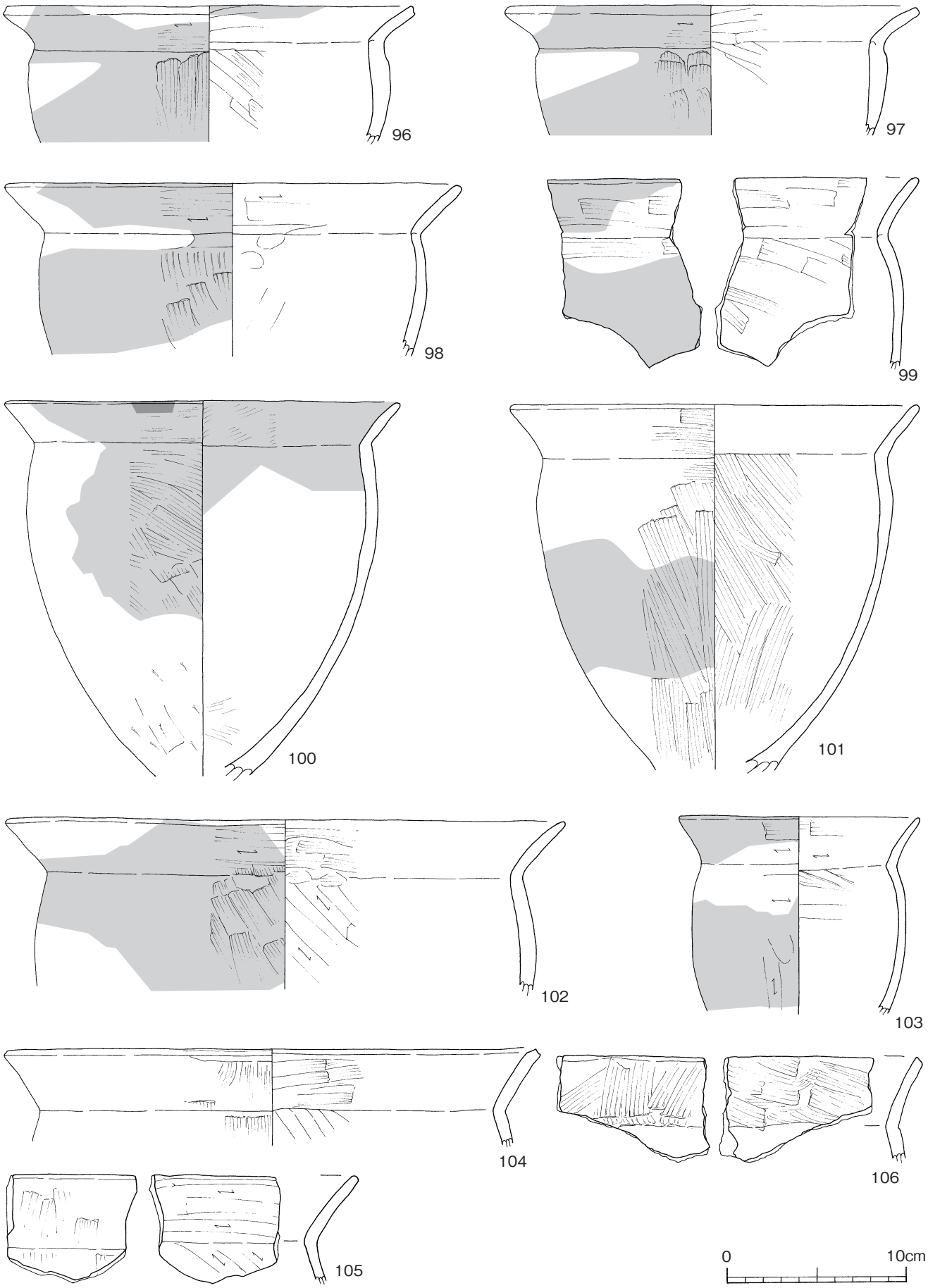
第23図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（２）



第24図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（3）



第25図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（４）



第26図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（５）

キ　Ⅶ類（第27～32図107～173）

口縁部が外反し，胴部との屈曲部内外面にやや強い稜が見られる。

107～123は，肩部から胴部にかけてやや膨らみをもつものである。

107は口縁端部の断面が四角形を呈し，浅い沈線を施す。口径約28cm を測り，口縁部外面にナデ調整，胴部にはケズリ調整を施す。

108～114は口縁端部の断面が四角を呈する。108は口径約29cm で，内外面にハケメ調整を施す。109は口径約16cm で，器高は約18cm と，やや小さめの甕形土器である。外面にケズリ調整を施し，内面は丁寧なナデ調整を施す。110は口径約28cm で，外面は工具によりナデ調整を施している。112は口径約26cm で，外面にハケメ調整を施す。

115～123は，口縁端部の断面が丸い。117は口径約35cm を測り，内外面をハケメ調整で仕上げている。118は口径約14cm で，外面に工具によるナデ調整を施す。119は口径約32cm を測り，内外面にハケメ調整を施す。123は口径約23cm，器高約26cm で器面全体にハケメ調整を施す。

124～143は，肩部から胴部にかけての膨らみが弱いものである。

124～130は，口縁端部の断面が四角を呈する。125は口径約27.5cm，器高約30cm で外面にケズリ調整，内面にハケメ調整を施す。127は，口縁部外面を横位にケズリ後ナデ調整を施し，胴部外面はハケメ調整を施す。129は口径約22cm を測り，器面全体にハケメ調整を施す。130は口径約21cm，器高約25cm を測り，胴部外面上位にナデ調整，下位に上方向へケズリ調整を施す。

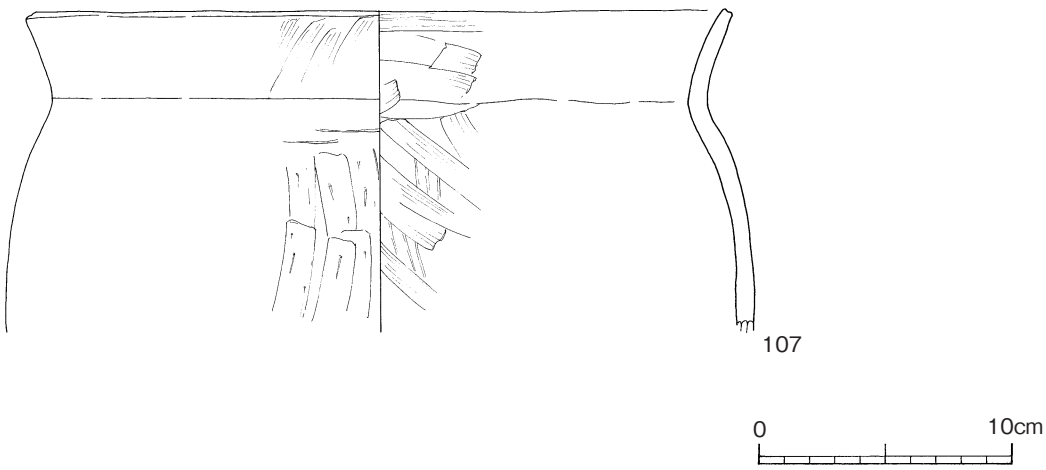
131～143は，口縁端部の断面が丸いものと尖っているものである。131は口縁部外面を横位に丁寧なナデ調整を施し，口縁部下位に上方向へハケメ調整を施す。

132は口径約27cm を測り，屈曲部へ向けて口縁部外面は下方向へ，胴部外面は上方向へハケメ調整を施している。133は口径約20cm，器高約21cm を測り，口縁部外面を横位にナデ調整，胴部をハケメ調整で仕上げている。134は口径約30cm で外面にハケメ調整を施す。135は口径約29cm で外面にハケメ調整を施す。136は，口径が約22cm，137は口径約26cm を測り，口縁部外面を横位にナデ調整，口縁部下位に上方向へハケメ調整を施す。138は口径約22cm を測り，胴部外面に上方向へハケメ調整を施す。内面はケズリ後ナデ調整を施す。139は口径約26cm を測り，外面に上方向へハケメ調整，内面を横位にハケメ調整を施す。140は口径約20cm を測り，口縁部内外面を横位にナデ調整を施し，胴部は丁寧なハケメ調整を施している。141は口径約16cm を測り外面にハケメ調整を施し，内面にナデ調整を施す。142は口縁部内外面を斜位にハケメ調整を施す。143は内外面に丁寧なナデ調整を施している。

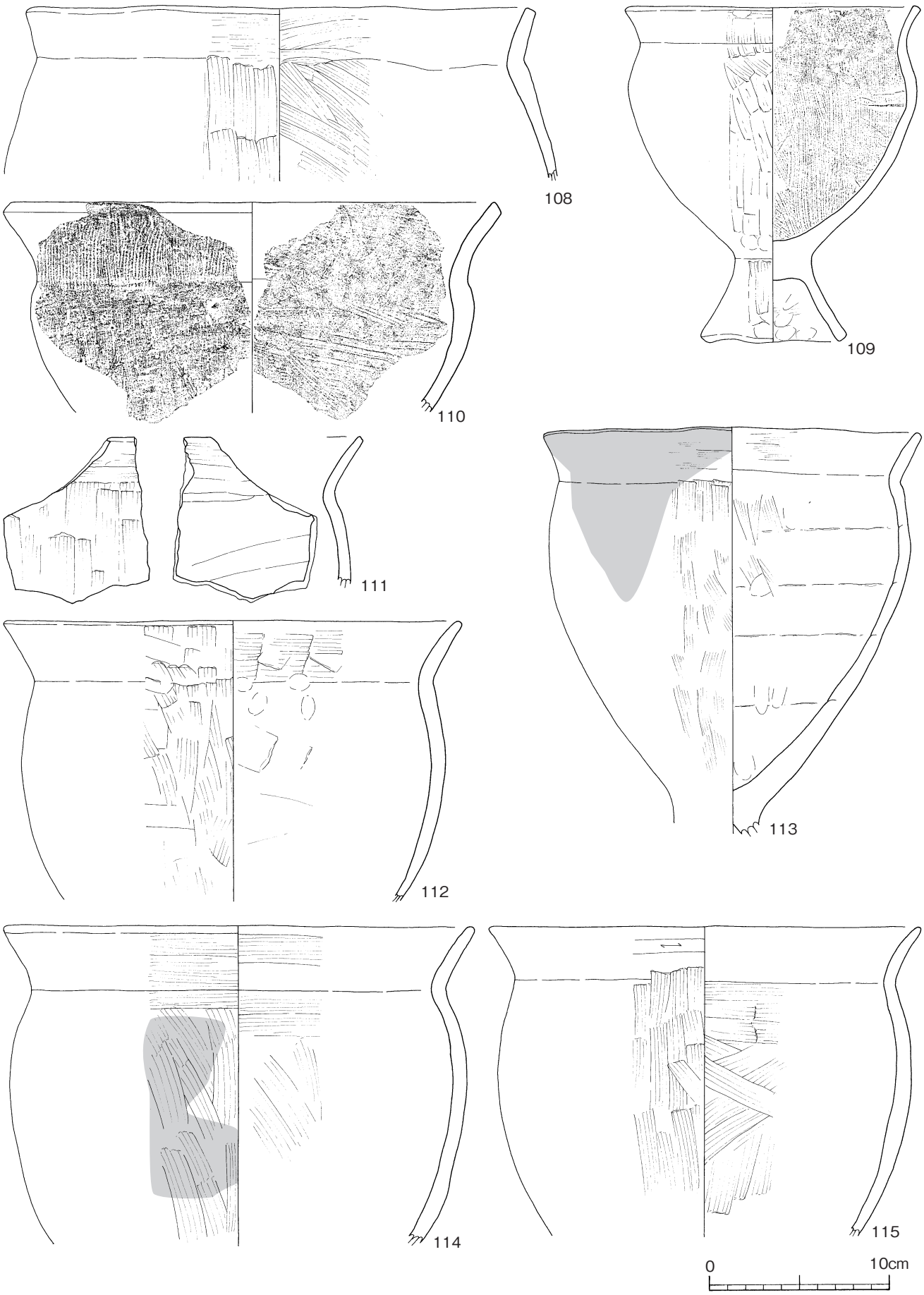
144～156は，胴部との屈曲部が残る口縁部である。

144～152は口縁端部の断面が四角を呈している。144～146は口縁端部に浅い沈線を施している。150は屈曲部へ向けて口縁部が下方向へ，胴部が上方向へハケメ調整を施している。153～156は，口縁端部の断面が丸い。153は口径約23cm で，口縁部内外面を横位に，屈曲部下位は上方向へケズリ調整を施している。154は口縁部内面にハケメ調整を施している。

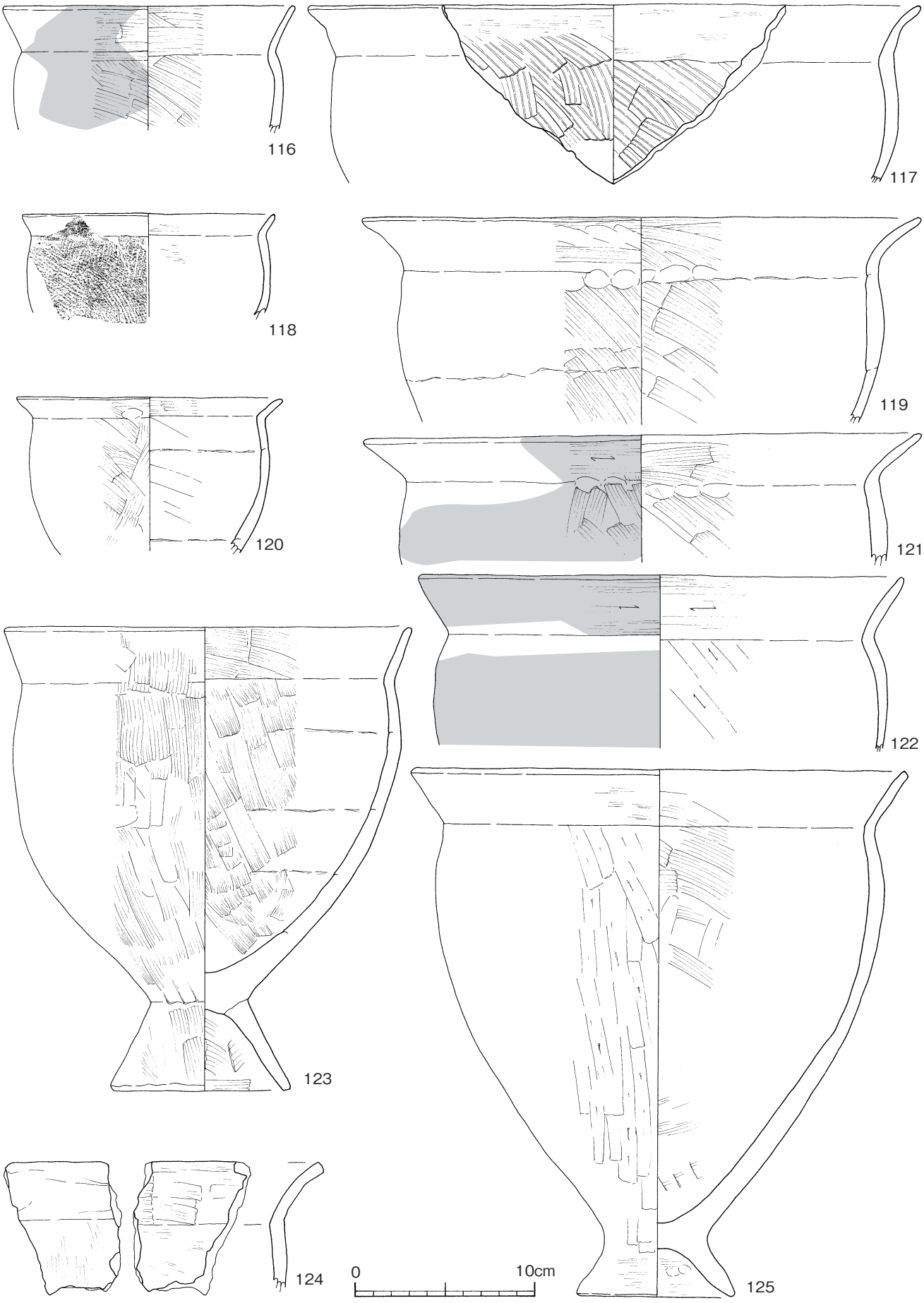
157～173は，口縁部のみである。157～160は口縁端部に浅い沈線を施している。162・163は，内外面に工具による丁寧なナデ調整を施している。165は外面を縦位に，内面を横位にハケメ調整を施している。169～171は，内外面を横位に丁寧なナデ調整を施す。172は口径約26cm を測り，内外面に丁寧なハケメ調整を施している。



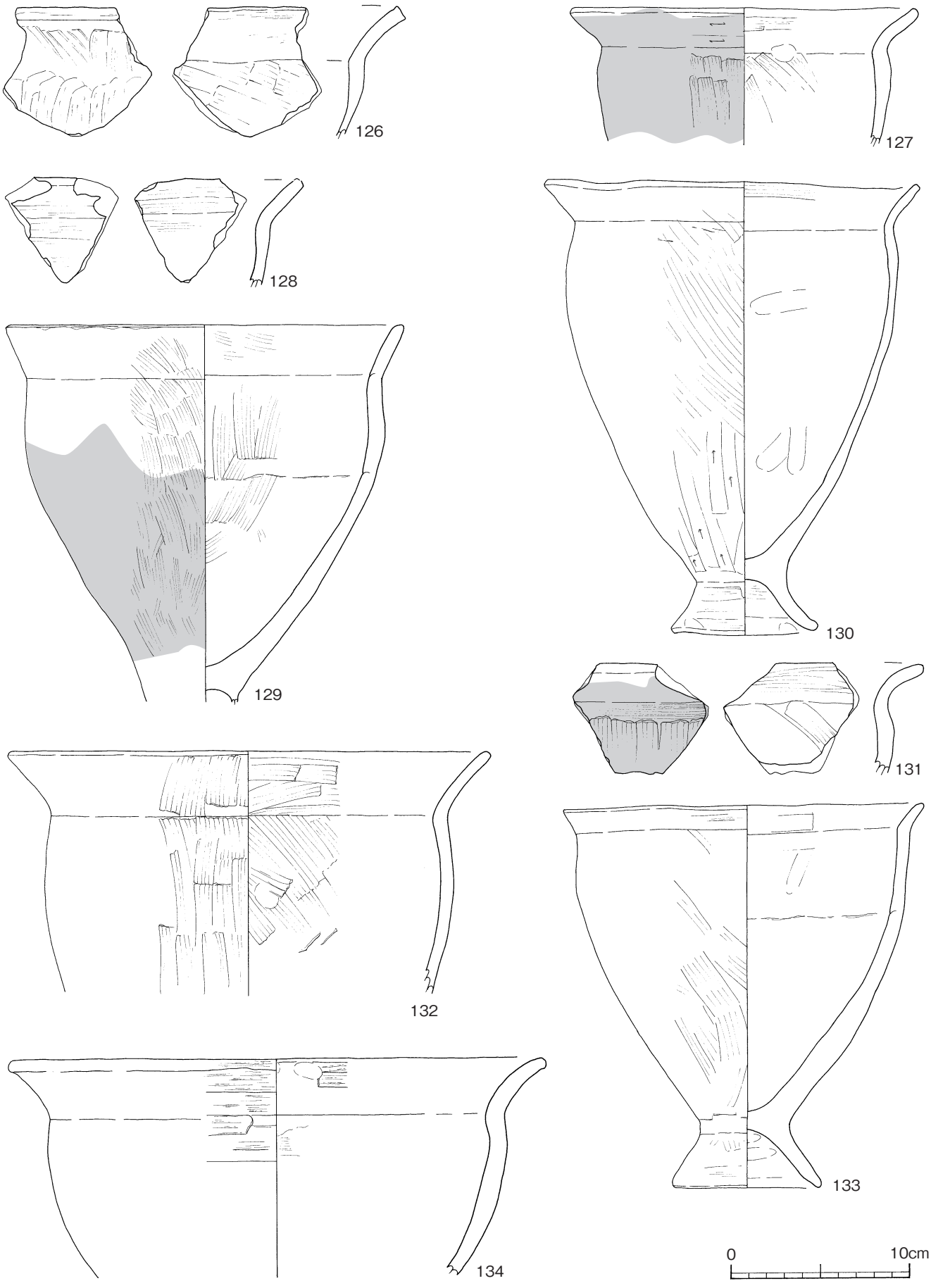
第27図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（６）



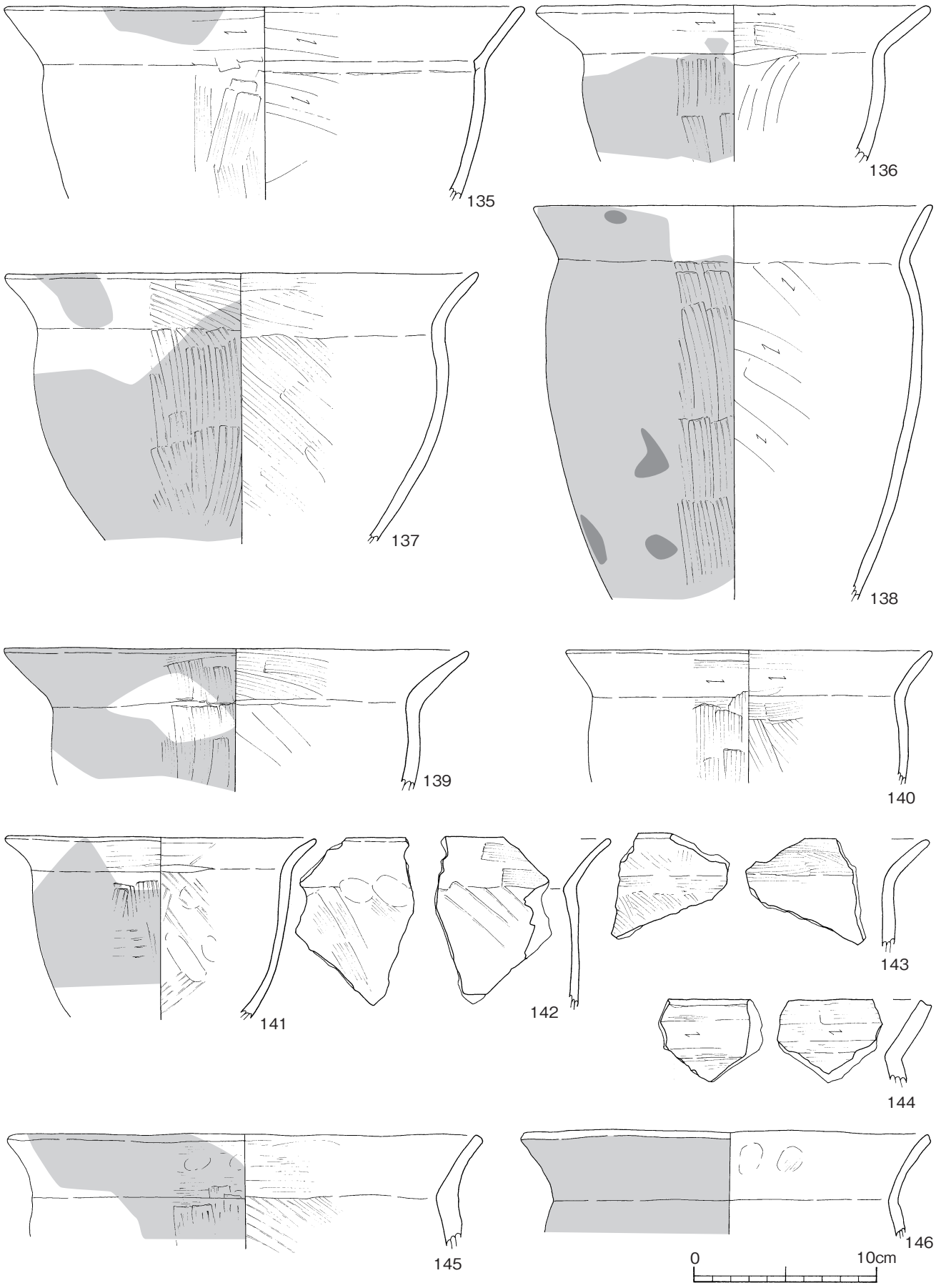
第28図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（7）



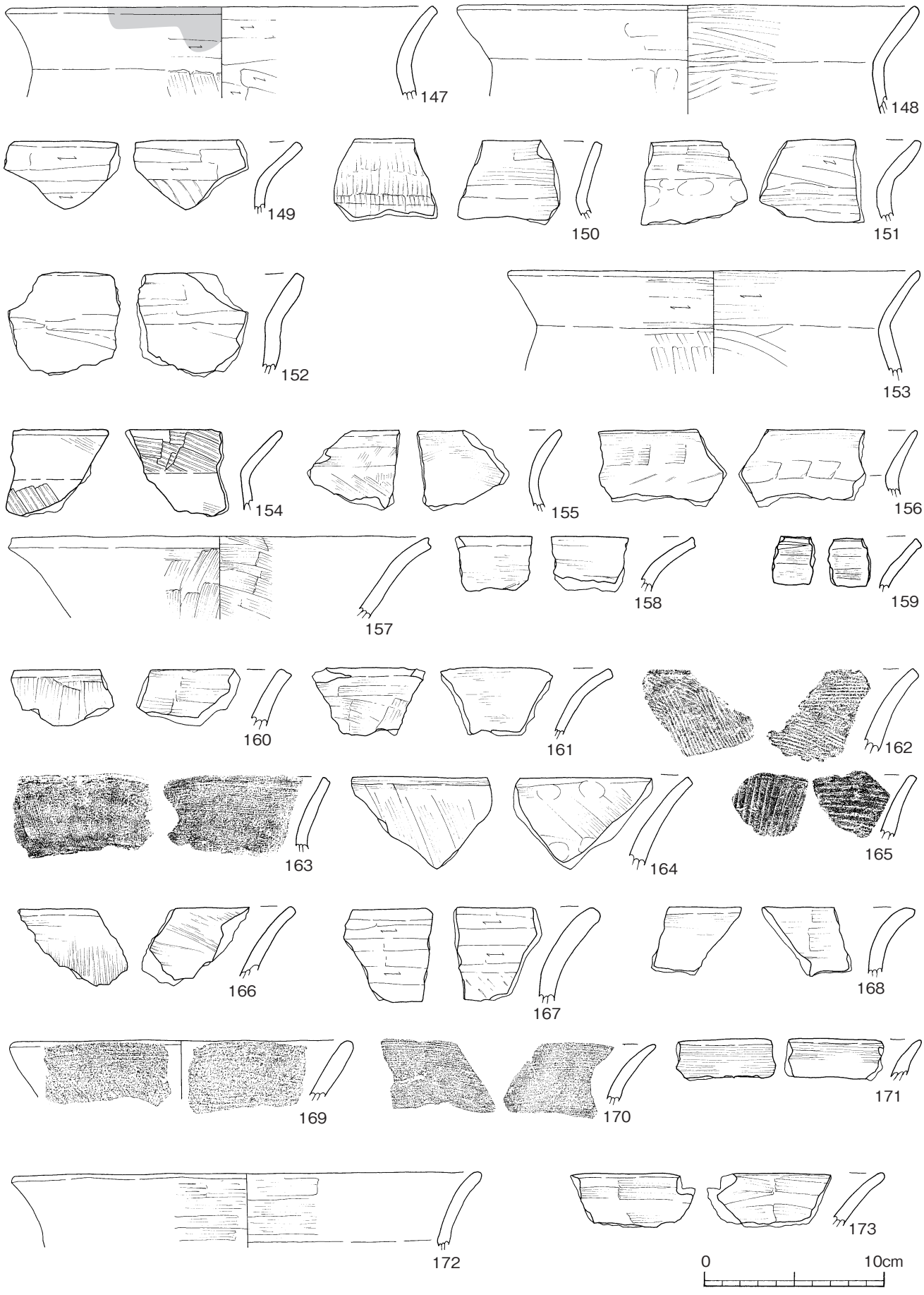
第29図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（8）



第30図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（9）



第31図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（10）



第32図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（11）

ク　Ⅷ類（第33～37図174～253）

口縁部が僅かに外向，もしくは直立するもので，外面屈曲部に弱い稜が見られる。

174～178は，口径が約９～10cmの小型の甕である。174は口縁部が短く外反し，胴部内外面に丁寧なハケメ調整を施す。177は口径約10cm，器高が約13.5cmで，口縁部が長く直立する。

179～190は口縁部から胴部にかけての屈曲が弱く，断面が緩いＳ字を呈する。179・180は口縁端部の断面が四角を呈する。180は口径約32cmで，上方向へ丁寧なハケメ調整を施す。181は口径約17cmを測り，胴部外面に上方向へハケメ調整を施す。182は口径約25cmを測り，器面全体にハケメ調整を施す。183は，口径約18cmを測る。186と同様に，指頭圧によって屈曲部を形成している。184は口径約26cmを測り，器面全体にハケメ調整を施す。185は口径約21cmを測り，外面をケズリによる粗い調整で仕上げている。187は口径約31cmを測り，口縁部外面をミガキ調整で仕上げ，胴部外面はハケメ調整を施す。190は口径約14cmで，内外面にハケメ調整を施す。

191～202は，口縁部から胴部にかけての屈曲がほとんどないものである。

191～196は口縁端部の断面が四角を呈する。191は口径約28cmを測り，内外面にハケメ調整を施す。192は口径約20cm，195は口径約28cmを測り，ともに外面はハケメ調整を施す。194は，口径約14cm，器高約18cmのやや小型で，屈曲部上位を下方向へ，下位を上方向へハケメ調整を施す。196は口径約20cmを測り，口縁部と胴部の屈曲を指頭圧によって形成している。

197～201は，口縁端部の断面が丸い。197は口径約25cmを測り，屈曲部上位に上方向へ丁寧なナデ調整を施している。198は粗いケズリによって調整を施している。199は口径約27cmを測り，屈曲部上位はケズリ後にナデ調整を施し，下位は上方向へハケメ調整を施している。201は口径約12cm，器高約13cmを測るやや小型の土器で，器面全体を粗いケズリ調整によって仕上げている。

202は，外面に丁寧なハケメ調整を施し，内面にミガキ調整を施している。

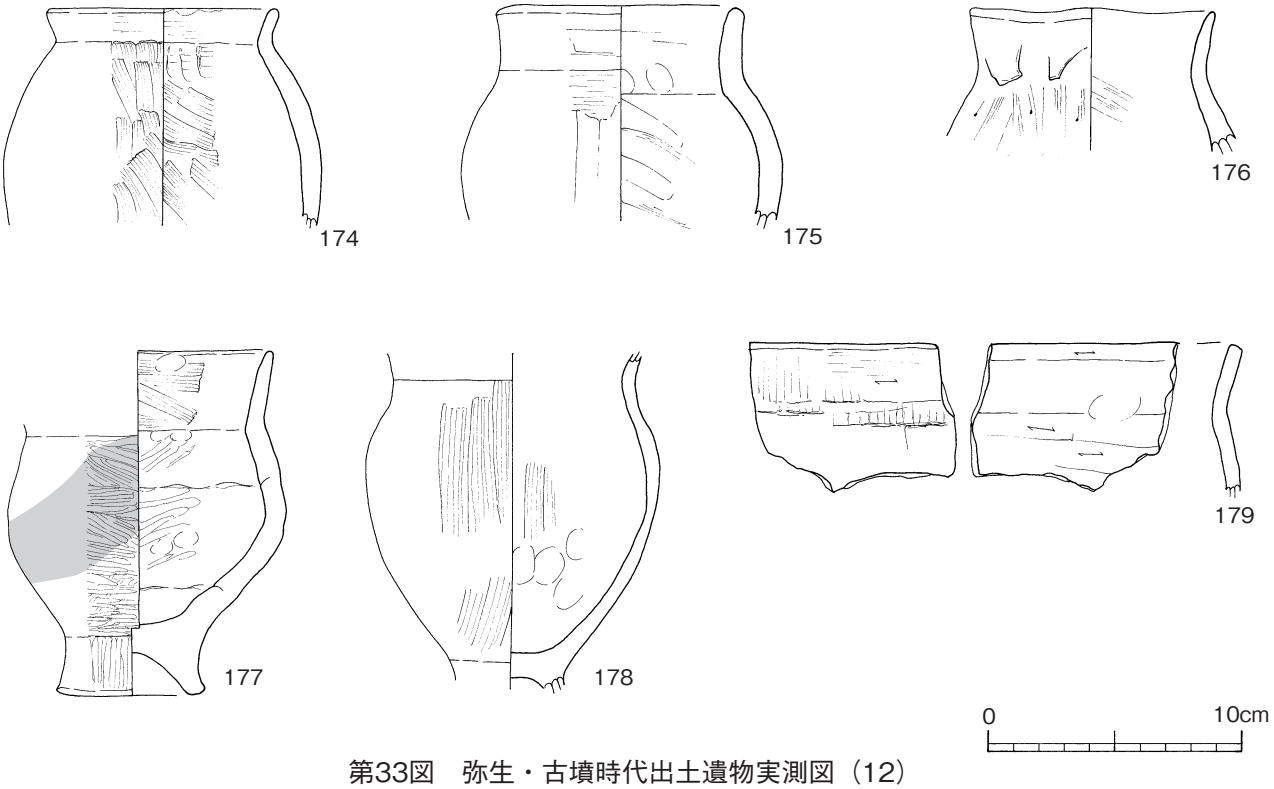
203～219は，胴部との屈曲が残る口縁部である。203～211は，口縁端部の断面が四角を呈している。

205は，内外面に工具による丁寧なナデ調整を施している。

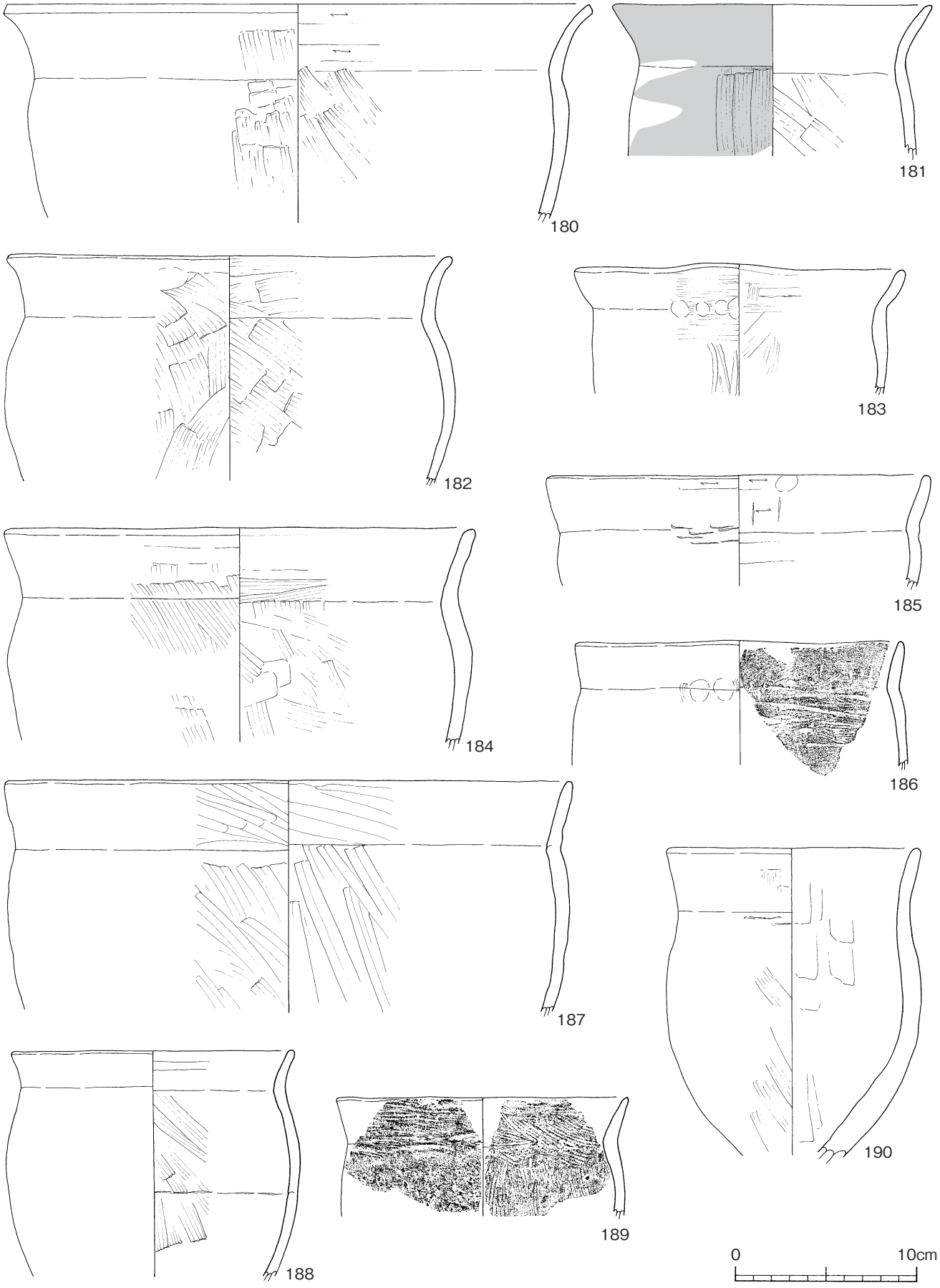
212～219は，口縁端部の断面が丸いものである。212は外面にミガキ調整を施している。213は，外面に丁寧なハケメ調整を施している。219は，屈曲部上位を横位に，下位を上方向へハケメ調整を施している。

220～253は口縁部のみである。口縁端部の断面が四角を呈し，浅い沈線を施しているものもある。

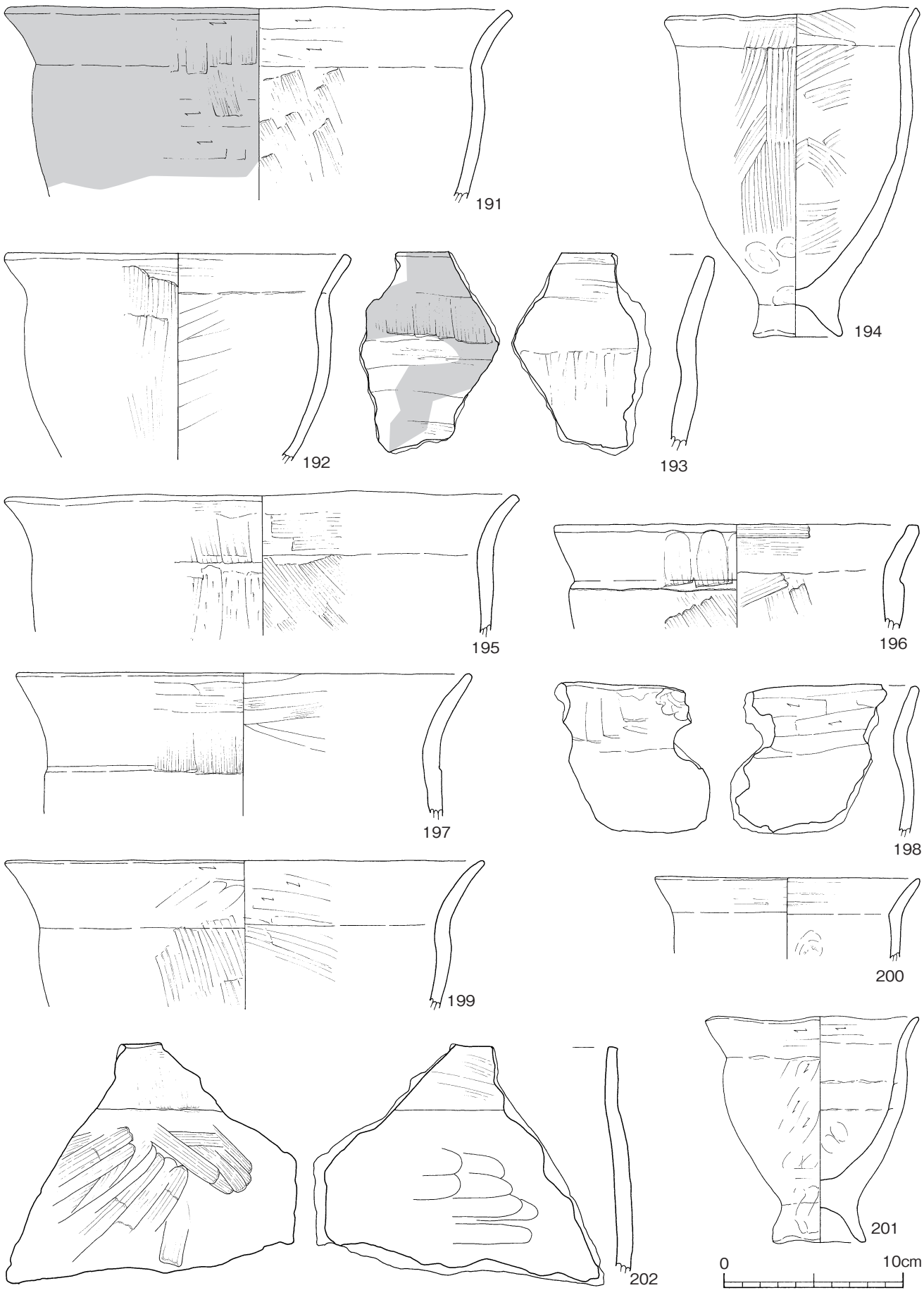
223は，口唇部を横位にミガキ調整を施している。227は，外面の屈曲部上位に下方向へハケメ調整を施し，内面にケズリ調整を施している。230～234は，内外面を工具による丁寧なナデ調整を施している。252は，外面に丁寧なハケメ調整を施し，内面を横位にナデ調整を施している。253は，内外面に粗いケズリ調整を施す。



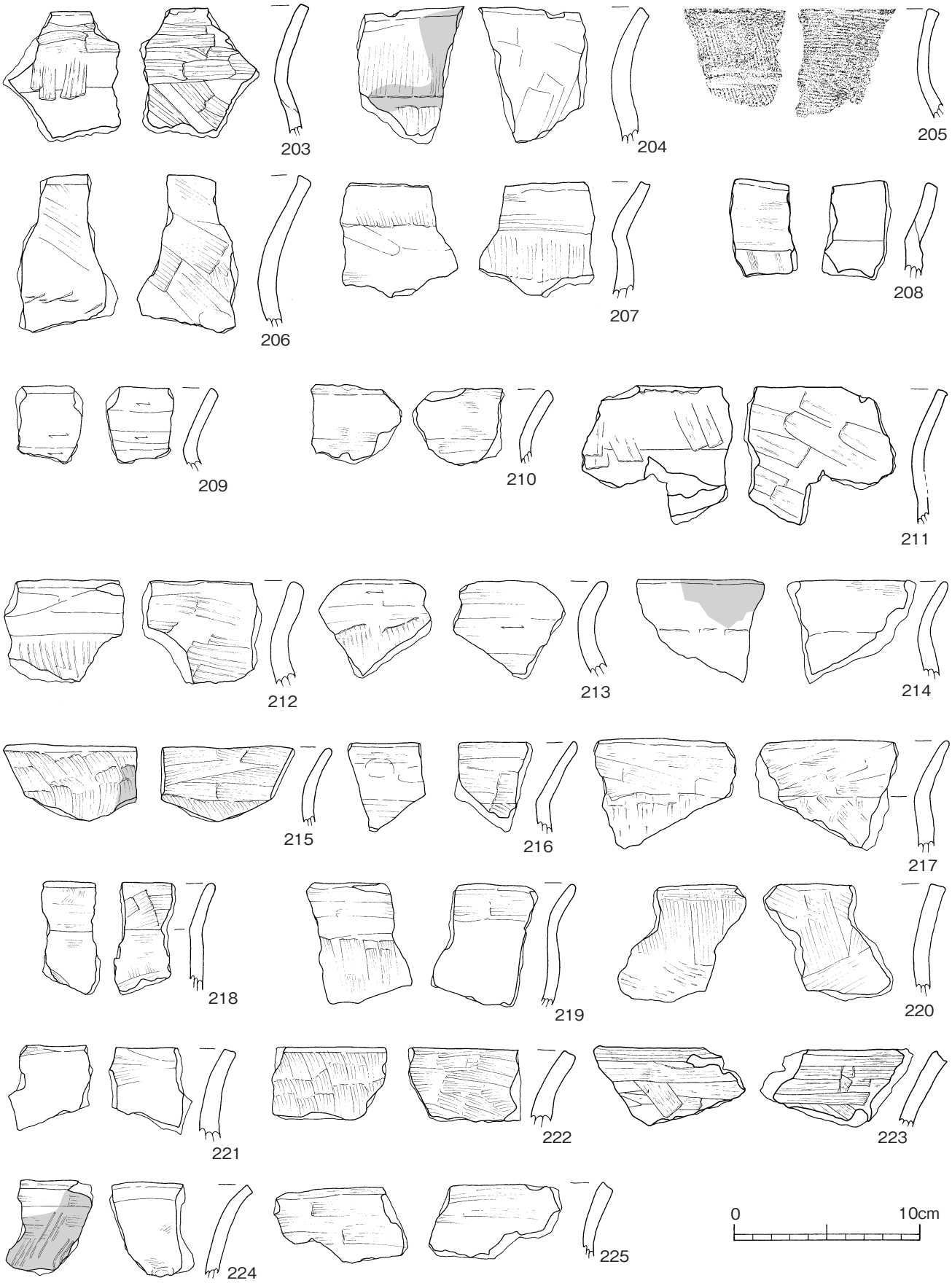
第33図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（12）



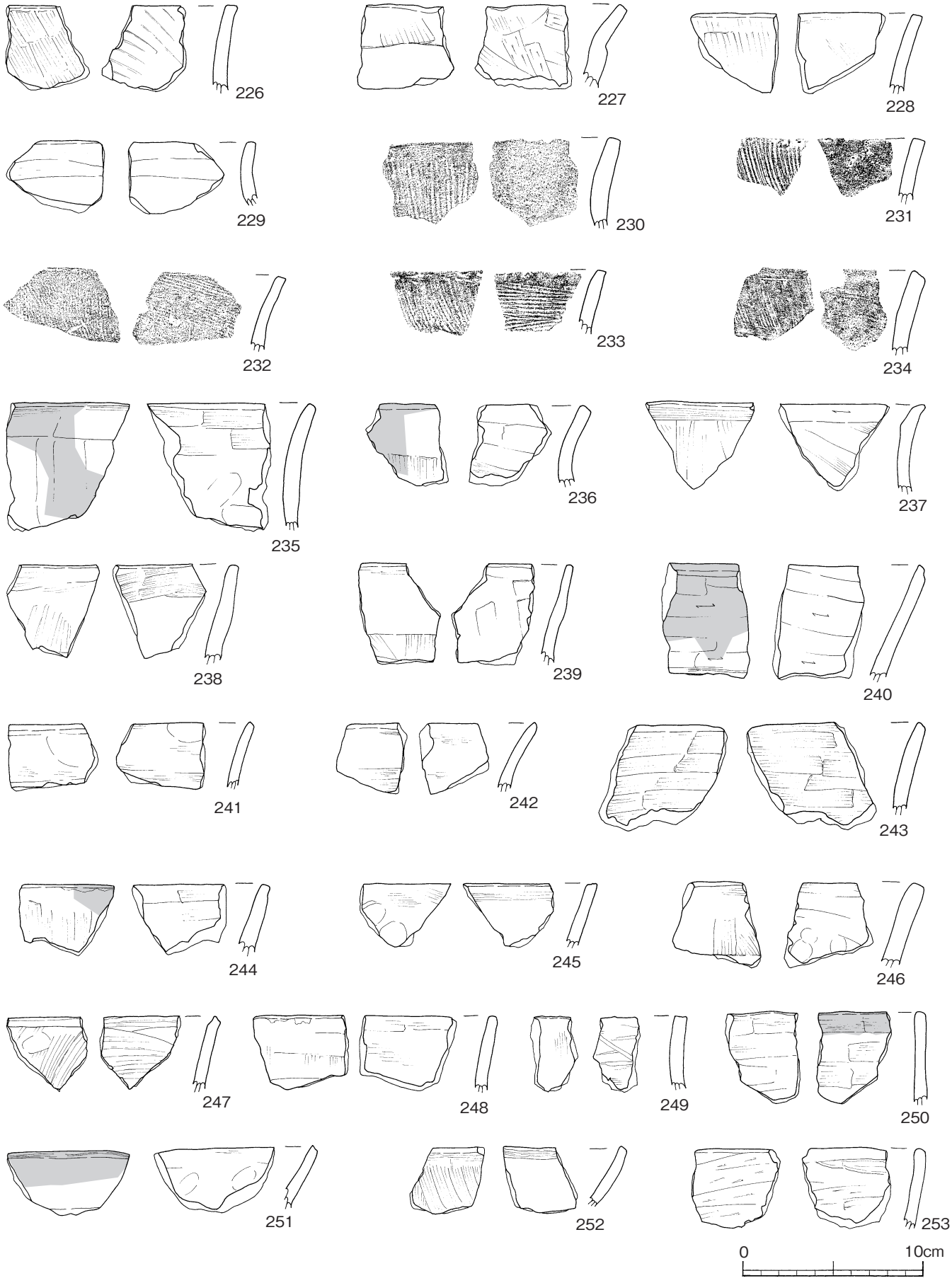
第34図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（13）



第35図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（14）



第36図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（15）



第37図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（16）

ケ　Ⅸ類（第38・39図254～276）

口縁部下位に１条の突帯を有する。口縁部は外反，もしくは直立している。

254～264は突帯に刻み目を施さないもので，254～261は突帯の断面が三角を呈する。

254は口径約26cm を測り，突帯の上下に横位ヘケズリ調整を施している。255は，突帯上位にハケメ後ナデ調整を施している。256は口径約33cm を測る。外面は突帯の上位に横位ヘケズリ調整を施し，内面はハケメ調整を施している。257は，突帯上位に横位ヘハケメ調整を施している。258は口径約24cm を測り，外面にナデ調整を施し，内面はケズリ後にナデ調整を施している。259は口縁部のみである。口径約26cm を測り，突帯上位に丁寧なハケメ調整を施す。260は口径約25cm を測る。突帯上位を横位にハケメ調整を施し，突帯下位を斜位にハケメ調整を施す。261は，胴部全体にハケメ調整を施している。

262～264は，突帯の断面が台形状を呈する。横ナデ調整で，焼成が堅致である。突帯部が約２cm と長く突き出ていて，大甕の突帯部であると考えられる。

265～276は突帯に刻み目，もしくは連続刺突文を施すものである。突帯の断面は三角を呈す。

265・266は，突帯を貼り付けた後に刻み目を斜位に施しており，突帯部からはみ出している。265は，口径約28cm で外面を横位にハケメ調整を施す。266は突帯上位に下方向へハケメ調整を施し，突帯下位を横位にナデ調整を施す。

267～271は，刻み目を斜めもしくは縦方向へ施し，突帯部からはみ出していない。267は，突帯部下位を横位にナデ調整を施している。268は，突帯部上位を縦位にハケメ調整を施し，内面は指頭によるナデ調整を施している。269は，突帯上位に下方向へハケメ調整を施している。刻み目の間隔は，約９mm と狭い。270・271は，突帯上位を横位にナデ調整を施している。

272～276は，突帯に連続的な刺突を施している。

272～274は，刺突痕が見られる。272は口径約30cm を測り，突帯上位に下方向へハケメ調整後，横ナデ調整を施している。273は，内外面にハケメ調整を施している。274は口径約25cm を測り，突帯上位にハケメ調整を施した後で，口縁部上端の内外面を横位にハケメ調整を施している。275・276は刺突内に，布目等の圧痕は見られない。275は，突帯上位を横位にハケメ調整を行い，内面には指頭圧痕が残る。276は口径約32cm を測り，突帯上位に横ナデ調整を施している。内面には，突帯を貼り付けたときの指頭圧痕が残る。

コ　Ⅹ類（第40・41図277～295）

形式不明な胴部を一括したものである。

277～281は，肩部から胴部にかけて膨らんでいる。277は，内外面に丁寧なハケメ調整を施している。278・279は外面を工具により，丁寧なナデ調整を施している。280は内外面ともに，ケズリとナデによる調整を施している。281は，外面にケズリ調整を施し，内面は丁寧なハケメ調整を施している。

282～289は，胴部の一片である。

282は，内外面ともにハケメ調整を施している。283は，工具によるナデ調整を施している。284は，全体にケズリ調整を施している。286～288は，外面に丁寧なハケメ調整を施している。289は，内面にハケメ調整を施している。

290～295は，胴部から下位の部分であり，底部にかけて内弯している。291は，内外面を丁寧なナデ調整で仕上げている。293は，内外面にハケメ調整を施している。295は外面を工具によるナデ調整を施している。

サ　Ⅺ類（第41～44図296～390）

底部を一括したものである。脚台をもつものがほとんどであるが，平底も若干出土している。

296～371は，中空の脚台である。底径は約８～11cm を測り，脚部が直線的，もしくはやや外反気味に開くものである。

296～312は，脚端部断面が四角を呈すものであり，いずれも高脚である。300は，外面にハケメ調整を施し，内面を横位にナデ調整を施す。302は，内外面に粗いケズリ調整を施している。306・312は，内外面にケズリ調整を施し，断面に輪積の跡が見られる。

313～363は，脚端部断面が丸いもの，もしくはやや尖ったものである。322は，ケズリ調整と指頭圧による調整を施している。342は，脚部の内外面に指頭圧による調整を施し，胴部はハケメ調整を施している。364は，脚部と胴部との剥離面が露呈している。

365～371は，天井がなく脚端部断面は四角を呈する。370は脚端部に輪積の痕跡が残る。

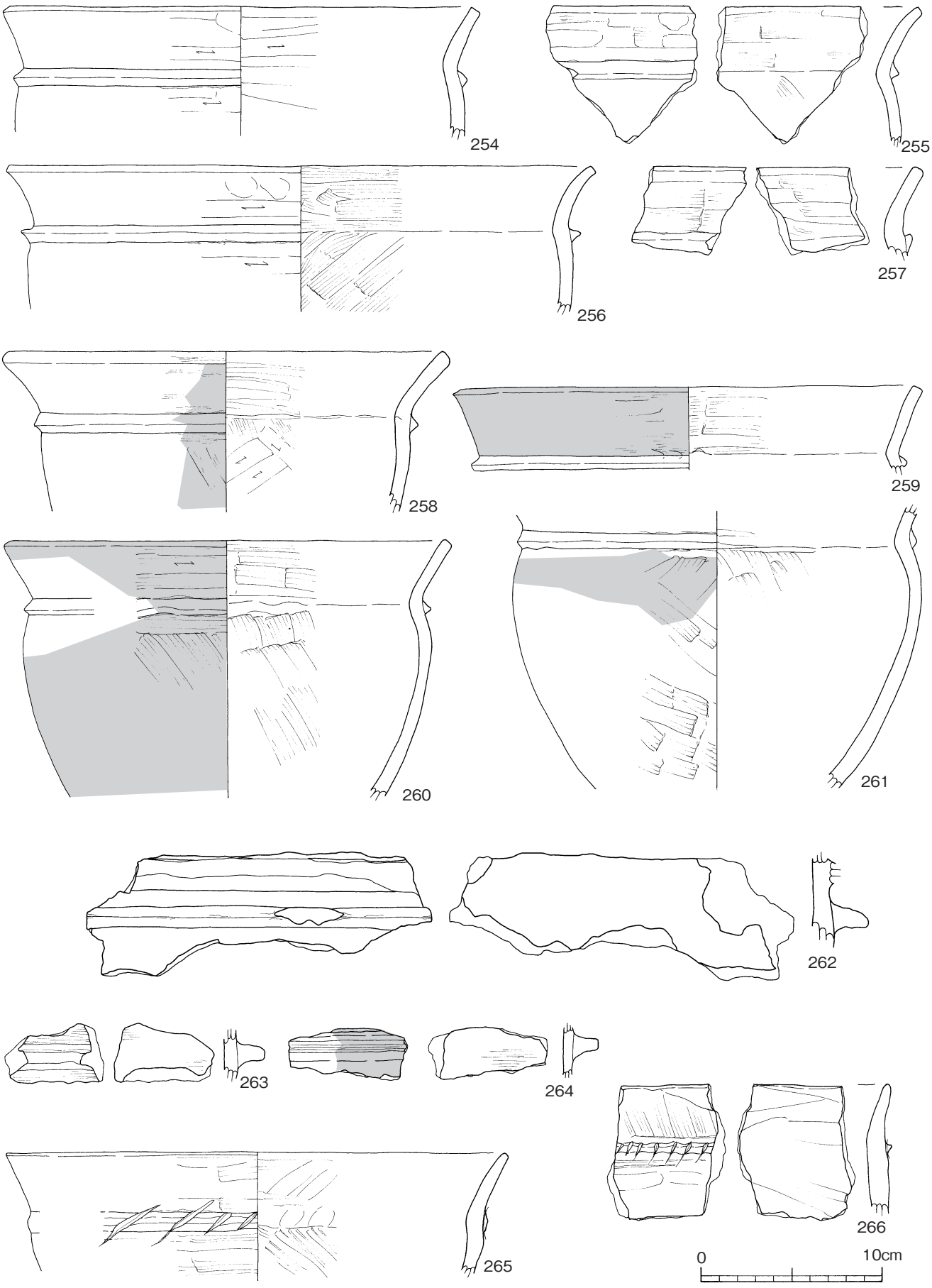
372～388は中空の脚台であるが，下部が欠損したものである。374は，内外面にハケメ調整を施している。378は，外面にナデ調整を施し，内面にハケメ調整を施している。

389・390は，脚台をもたない平底である。389は，外面にケズリ調整を施し，内面に丁寧なナデ調整を施し，直線的に立ち上がる。

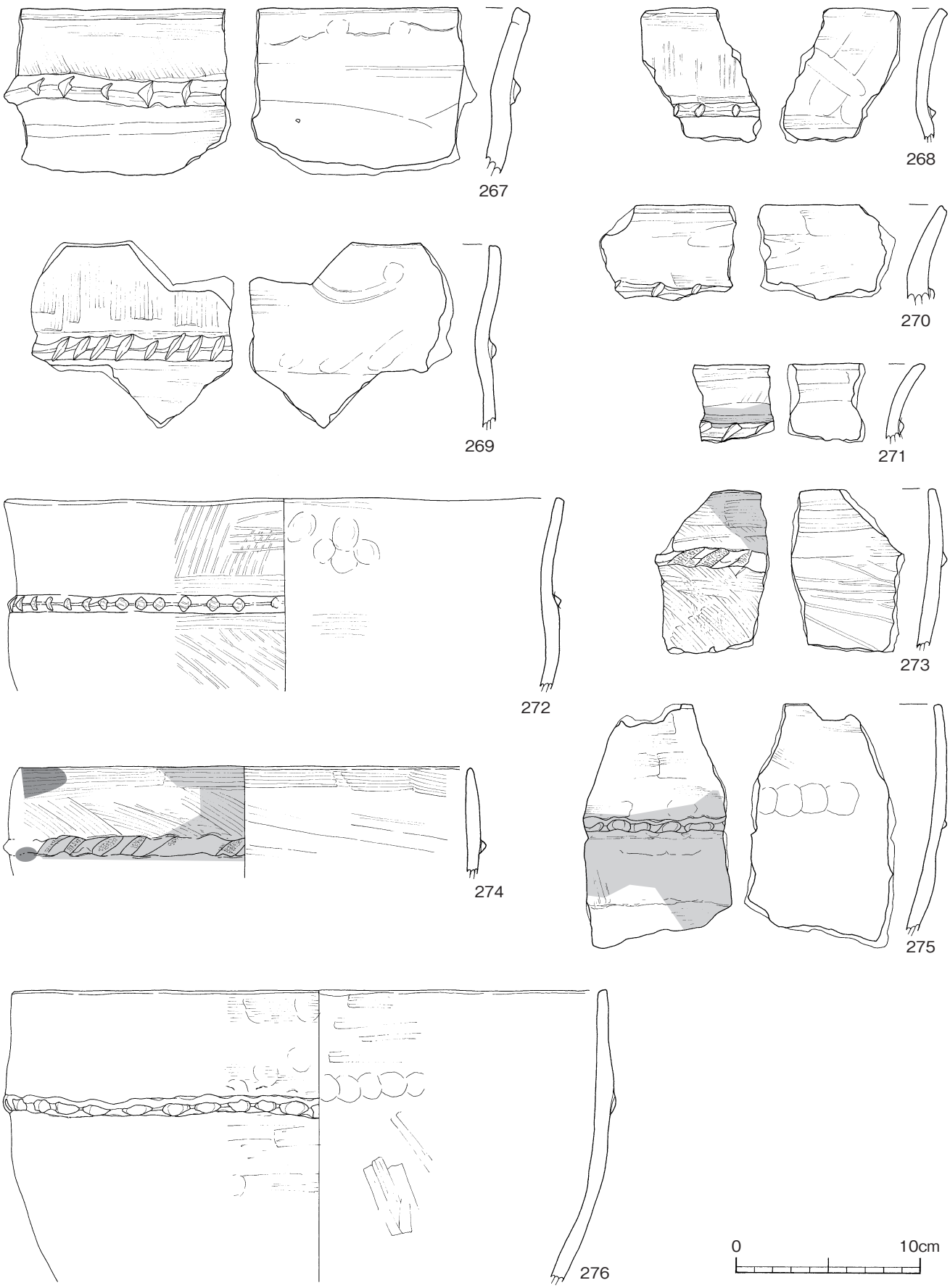
(2) 甑形土器（第44図391）

甑形土器は１点のみの出土で，391は深鉢形を呈し，底部に蒸気孔を施す。胴部下位付近に，ススがリング状に付着している。蒸気孔を形成するために指頭圧による調整を施し，胴部はハケメ調整で仕上げている。蒸気孔の外径は約5.5cm，内径は約４cm である。

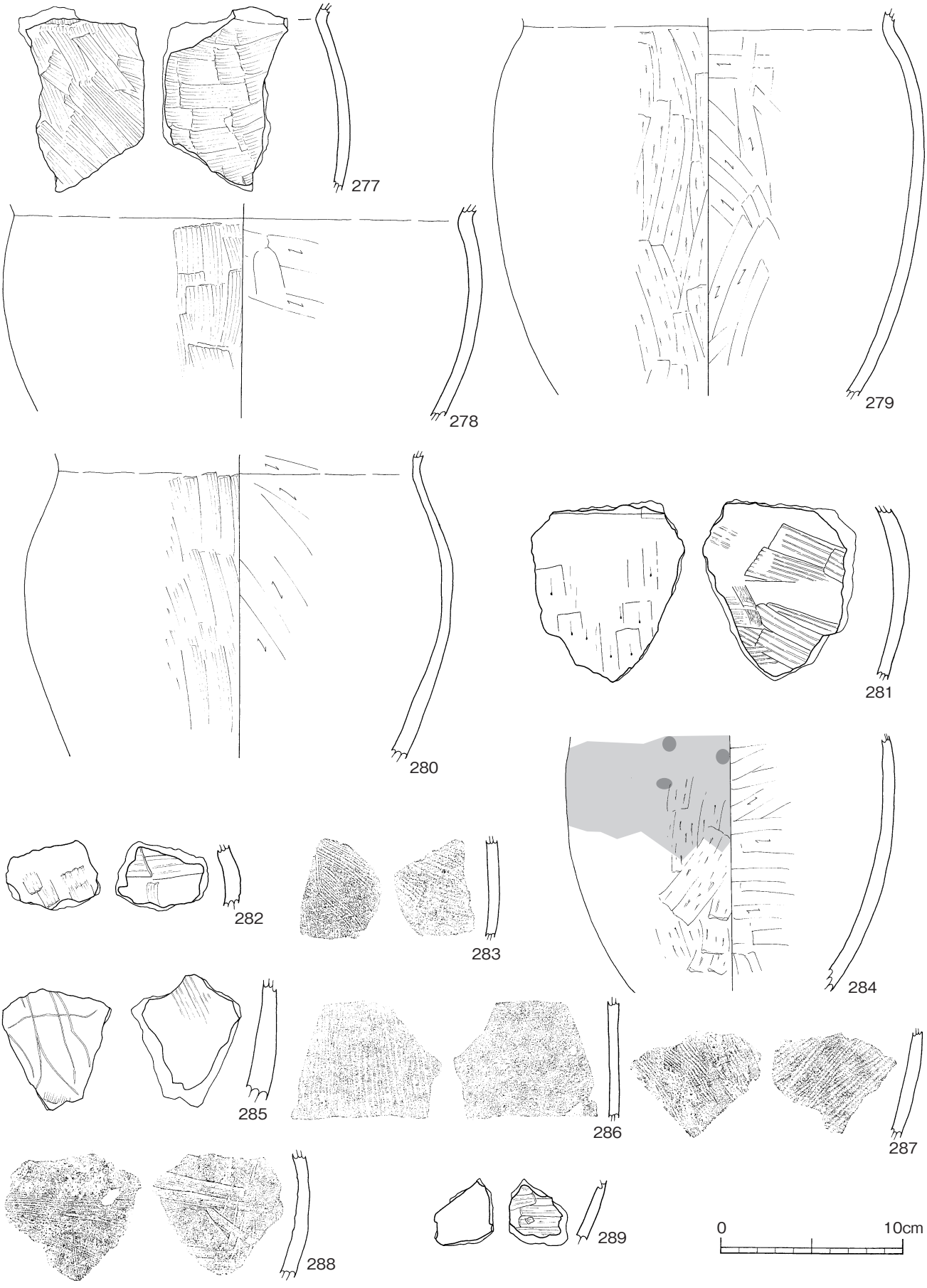
なお，本土器に付する蓋は不明である。



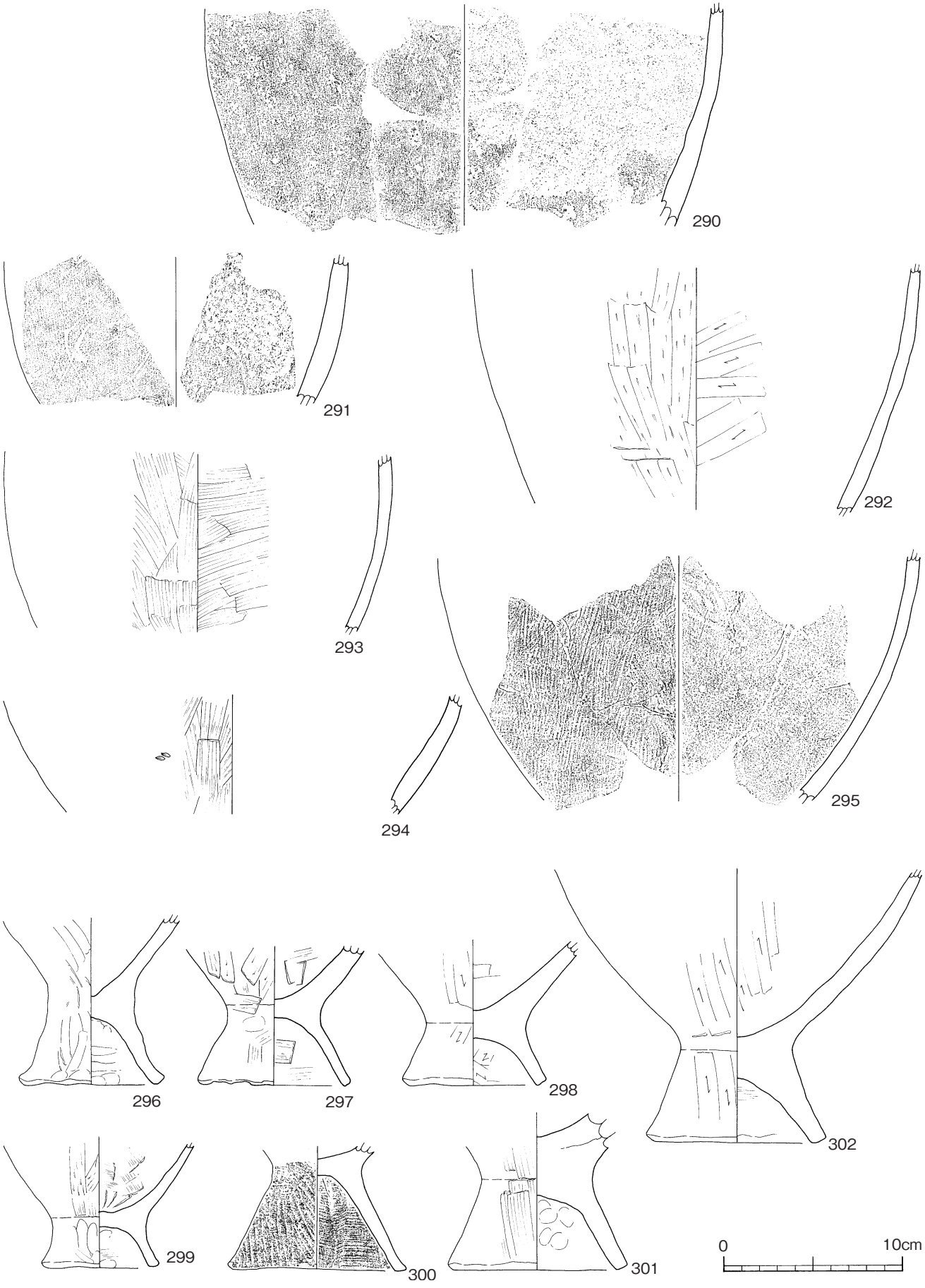
第38図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（17）



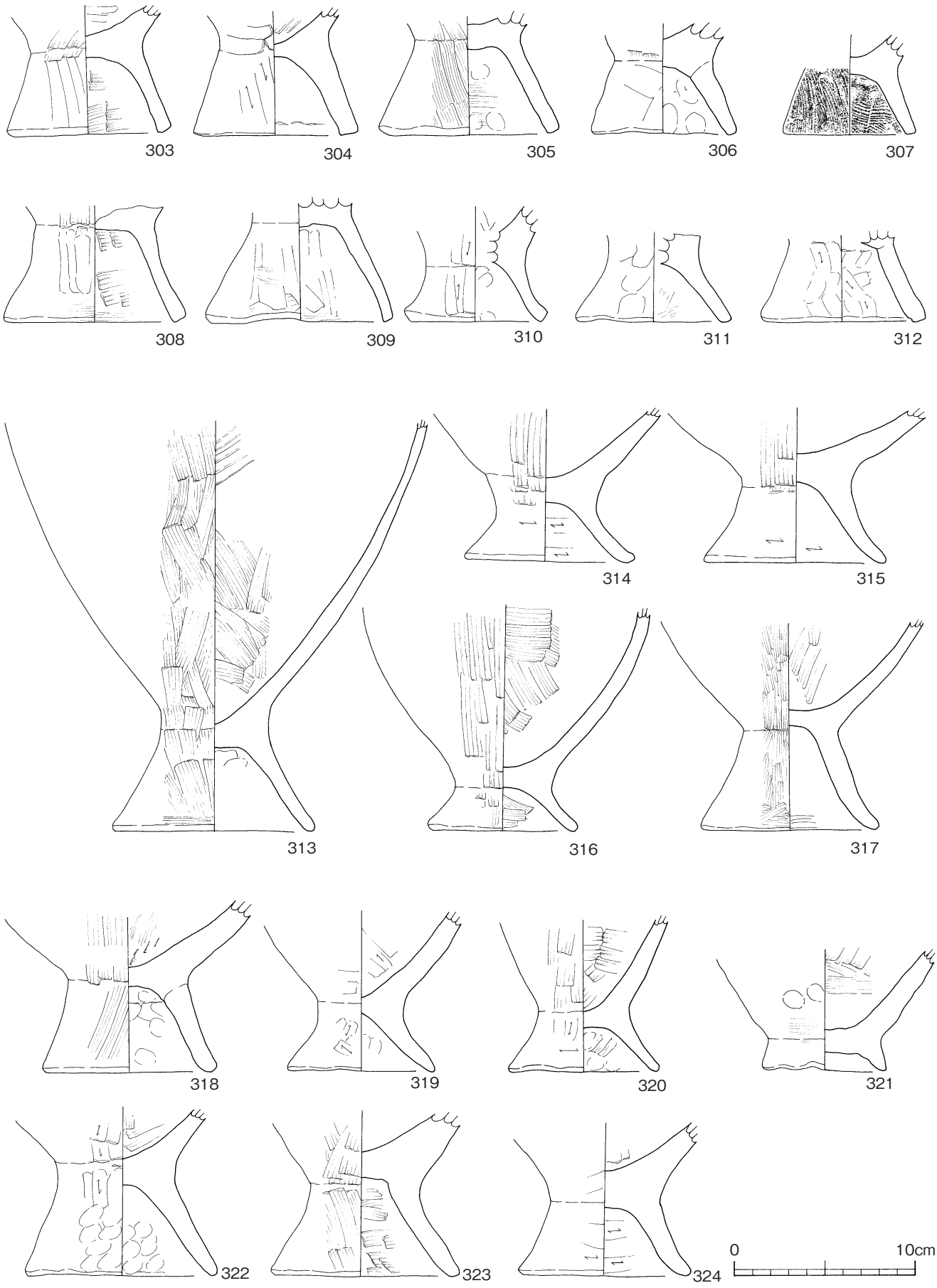
第39図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（18）



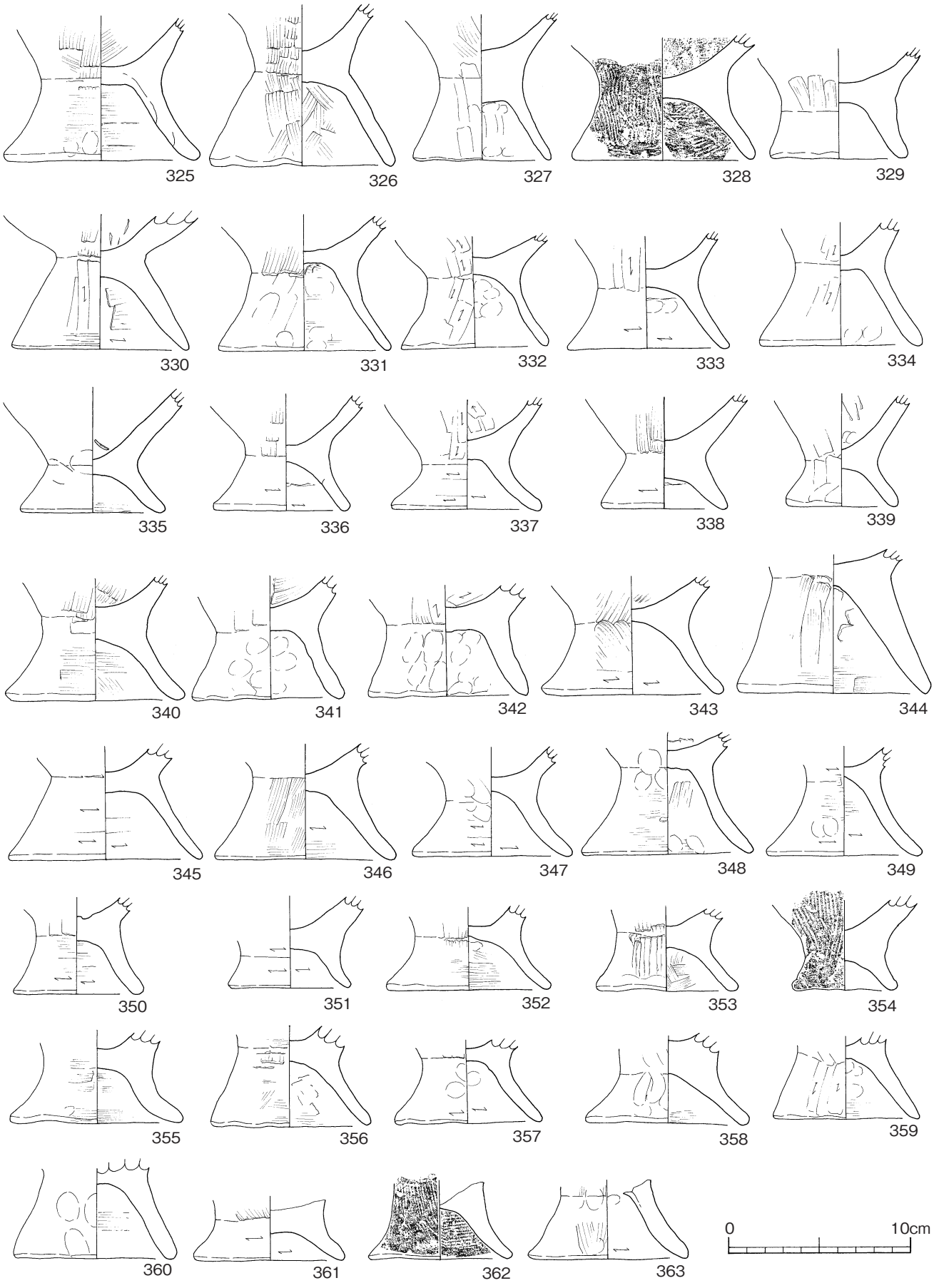
第40図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（19）



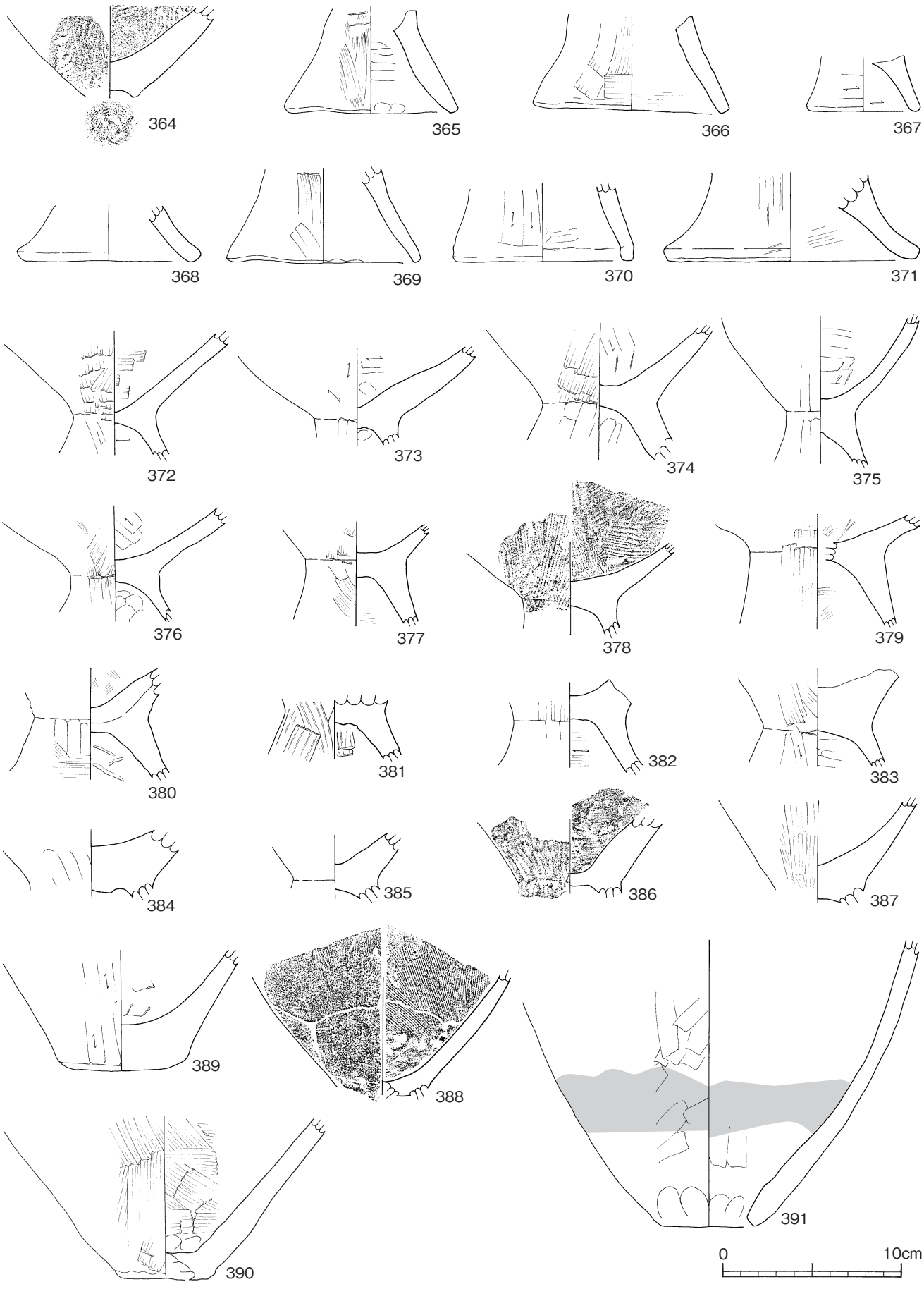
第41図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（20）



第42図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（21）



第43図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（22）



第44図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（23）

(3) 壺形土器

壺形土器は，口縁部，胴部，底部合わせて87点を図化した。Ⅰ～Ⅳ類は小片が多く，口縁部断面と，口唇部の形状で判断し分類した。形式上Ⅰ～Ⅶ類に分類し，形式不明な胴部，底部をそれぞれⅧ，Ⅸ類とした。

ア　Ⅰ類（第45図392・393）

口唇部が下がり，口縁部の断面が逆Ｌ字状を呈する。口縁端部に沈線を施す。

392は内外面にナデ調整を施し，端部の器壁が厚く，胎土に金雲母が多く混じる。大型の壺形土器の口縁部と思われる。393は，内外面にナデ調整を施す。

イ　Ⅱ類（第45図394～399）

口縁部の断面が逆Ｌ字状，もしくはくの字状を呈し，口縁部の内側が張り出す鋤先口縁である。

394・395は口唇部が上向きで，中がやや凹んでいる。395は外面に丁寧なナデ調整を施している。396は口径約16.5cm を測り，口唇部が平らで，横位にナデ調整を施す。397～399は，外面に粘土を貼り付け肥厚させており粘土貼り付け部には指ナデ調整を施している。397は口径約16cm を測り，口唇部が丸く膨らんでいる。398は口径約18cm を測り，口唇部は平らで斜め下方向へ下がっている。399は口径約16cm を測り，口唇部はかなり丸く膨らんでいる。

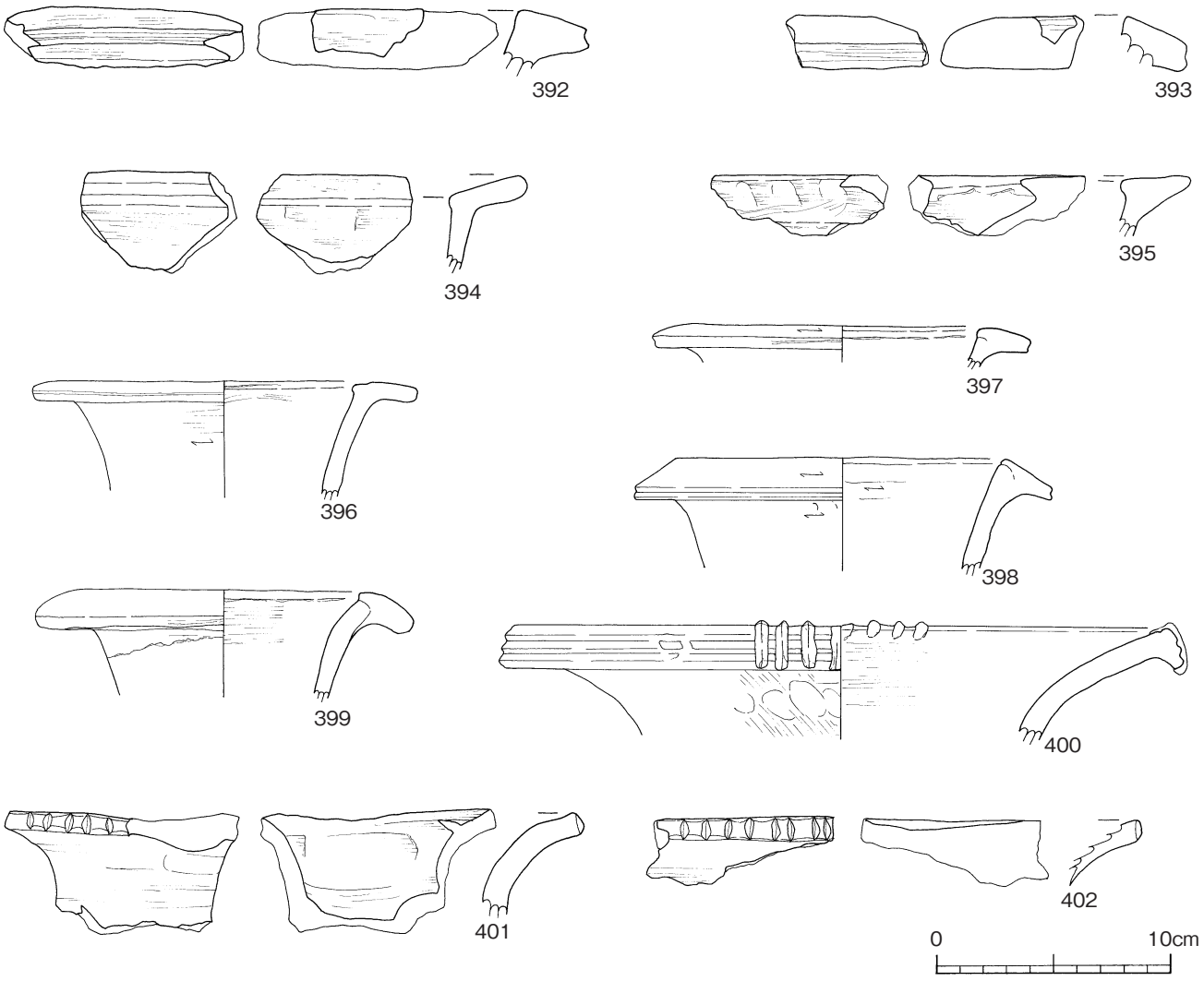
ウ　Ⅲ類（第45図400）

400は，頸部からやや曲線的に斜め上方向に開き，口縁端部が肥厚している。口縁部の内側は，僅かに張り出す。口唇部に横位への沈線を２条施し，粘土紐により縦に突帯を付着させている。焼成がしっかりしており，内外面にナデ調整を施している。口径は約29cm と，やや大型の壺形土器である。

エ　Ⅳ類（第45図401・402）

口縁部がラッパ状に大きく開き，口唇部に連続的な刺突文を施す。

401は，外面に丁寧なハケメ調整が施されている。402は内外面にナデ調整を施している。



第45図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（24）

オ　Ⅴ類（第46・47図403～407）

口縁部がラッパ状に開き，頸部が強く締まっている広口壺形土器である。口縁部内部に，明瞭な稜をもつ。

403は，口径約20cm，器高約38cm である。胴部中央やや上位に断面が三角状である２条の突帯を有し，その下位に最大径約29cm を測る。器面全体にハケメ調整を施している。頸部から肩部への屈曲が強く，胴部の膨らみも強い。平底で，底径は約３cm である。

404～406は，断面が三角を呈する刻目突帯を有し，胴部の内弯は403よりも弱い。404は口径約12cm，器高32cm で，器面全体にハケメ調整を施す。最大径は約21cm，平底の底径は約４cm である。405は口径約14cm，器高約32cm で胴部上位にハケメ調整を施し，下位にケズリ調整を施す。最大径は約22cm で，底径は約３cm である。406は口径約15cm，器高約32cm で，外面にケズリ後ハケメ調整を施し，内面にケズリ調整を施す。突帯部は最大径約23cm を測り，底径は約５cm である。407は口径約28cm で，内外面にハケメ調整を施す。肩部から下位が欠損しているが，口径の長さと器壁の厚さから，かなり大型の壺形土器であると考えられる。

カ　Ⅵ類（第47・48図408～423）

頸部が筒状に長い，長頸壺形土器である。

408は，胴部が大きく張り出した算盤玉状を呈し，口径約21cm で，器面全体にハケメ調整を施す。断面が台形を呈する刻目突帯文を有し，最大径は約40cm を測る。底部は欠損しているが，かなり大型の壺形土器であると考えられる。

409～423は口縁部である。409は口径約25cm で，内外面にハケメ調整を施す。410は口径約24cm で，外面は縦位にハケメ調整を施す。411は口径約17cm で，外面は斜位にハケメ調整を施す。412は口径約19cm で，内外面にハケメ調整を施す。413は口径約18.5cm で，外面にナデ調整，内面に指頭圧による調整を施す。414は口径約15.5cm で，外面は縦位にハケメ調整を施す。415は口径約17.5cm で，内外面にハケメ調整を施す。416は口径約16cm で，内外面にハケメ調整を施す。417は口径約16cm で，外面にナデ調整を施す。418は口径約17cm で，外面にハケメ調整，内面にナデ調整を施す。419は，口径約15cm で内外面にケズリ調整を施す。420は口径約12cm で，外面は横位にケズリ後，ハケメ調整を施す。421は口径約13cm で，内外面は横位にケズリ調整を施す。422は丁寧なナデ調整を施している。423は外面にハケメ調整を施している。

キ　Ⅶ類（第48図424～426）

小型の壺形土器で，短い口縁部が開きながら直線上に立ち上がる。

424は口径約８cm，器高が約11cm で，外面にハケメ調整を施し，内面は粗いケズリ調整を施している。胴部は強く膨らみ，ほぼ球形を呈する。最大径は約13cm で，平底の底径は約３cm を測る。425は口径約９cm，器高約９cm で，最大径は約10cm を測る。肩部から胴部にかけて強く内弯しており，底部にかけて緩やかに内向している。口縁部外面を横位にケズリ調整，胴部外面にハケメ調整を施し，内面は，指頭圧によって調整を施している。426は口径約10cm で，内外面にケズリ調整を施している。

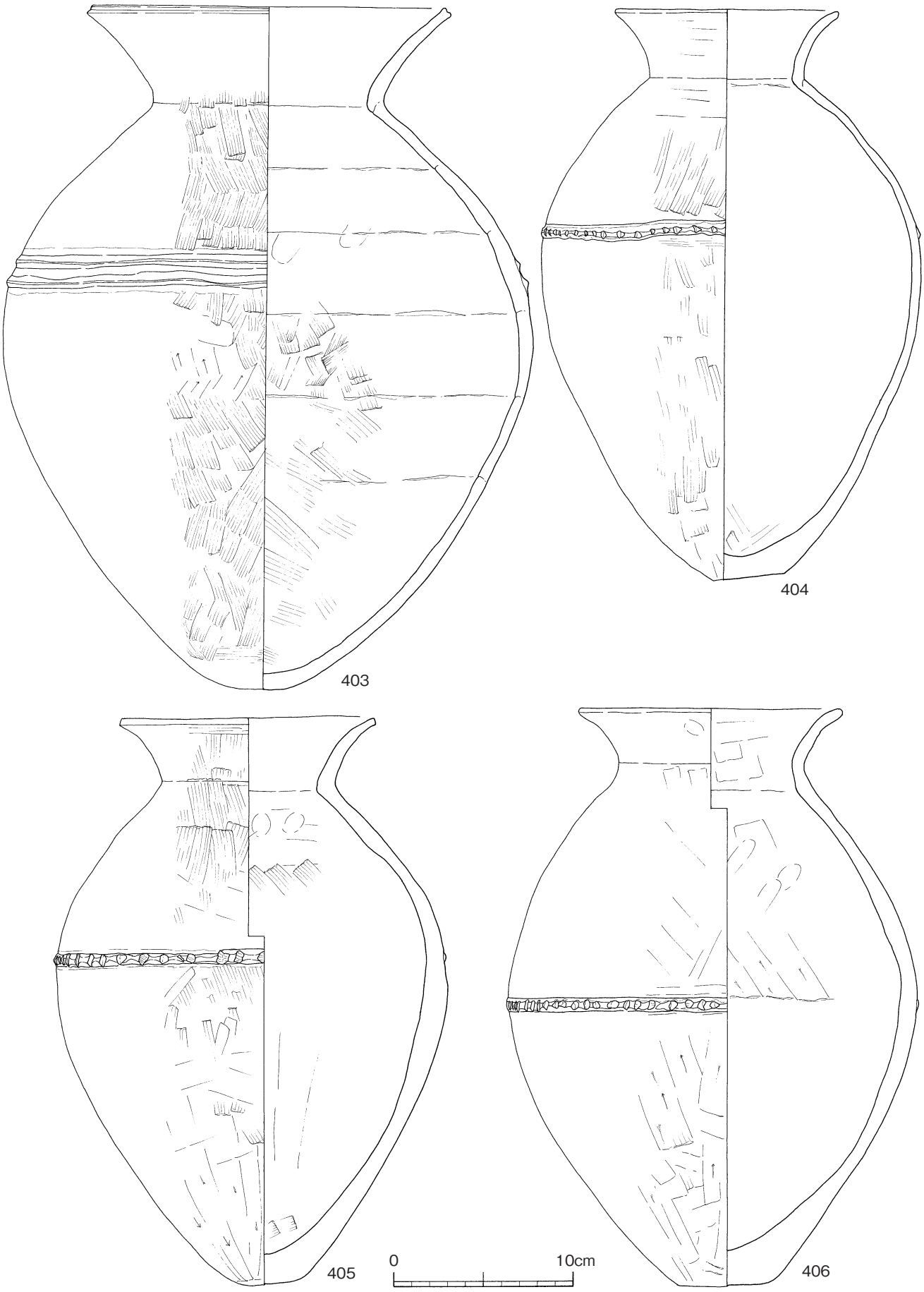
ク　Ⅷ類（第49～54図427～461）

胴部を一括したものである。

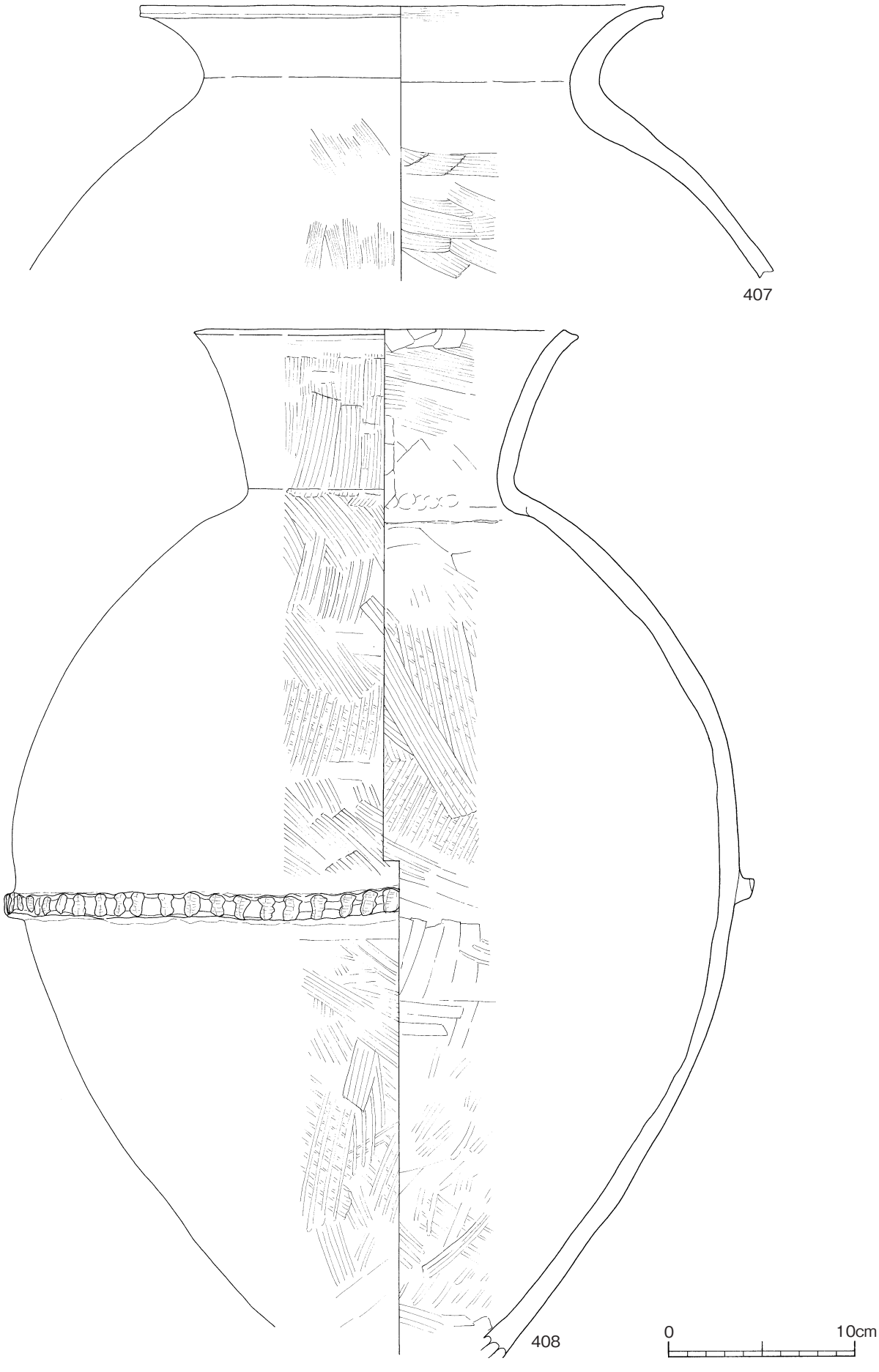
427～430は，頸部が強く締まっていて，口縁部内側に明瞭な稜をもつ。427～429は断面が三角を呈する刻目突帯を有し，胴部の内弯が強く膨れている。いずれも，器面全体にハケメ調整を施している。427は最大径約20cm を測り，胴部の内弯が強く，ほぼ球形に近い。428は最大径約25cm を測り，427と同じく球形を呈する。430は頸部のみであり，内外面にハケメ調整を施している。

431～438は，頸部が直線的に立ち上がり，口縁部内側に明瞭な稜をもつ。431・432は断面が三角を呈する刻目突帯を有し，胴部が強く内弯している。431は内外面にハケメ調整を施し，432は外面をナデ調整で仕上げ，内面にハケメ調整を施している。433は頸部から肩部にかかる部分で，頸部内外面は横位にナデ調整を施し，肩部はハケメ調整を施している。434は肩部に沈線を数条施している。丁寧なミガキ調整で仕上げ，焼成もしっかりしている。435は，外面にハケメ調整を施し，内面はケズリ後ナデ調整を施している。肩部から胴部にかけてほぼ直角に内弯し，胴部の膨らみは弱い。436は断面が三角を呈する刻目突帯を有し，内外面にハケメ調整を施している。437は頸部から肩部にかけての一部で，外面は丁寧なハケメ調整を施し，内面は指頭圧による調整後，横位にナデ調整により仕上げている。438は外面にミガキ調整を施し，焼成もしっかりしている。

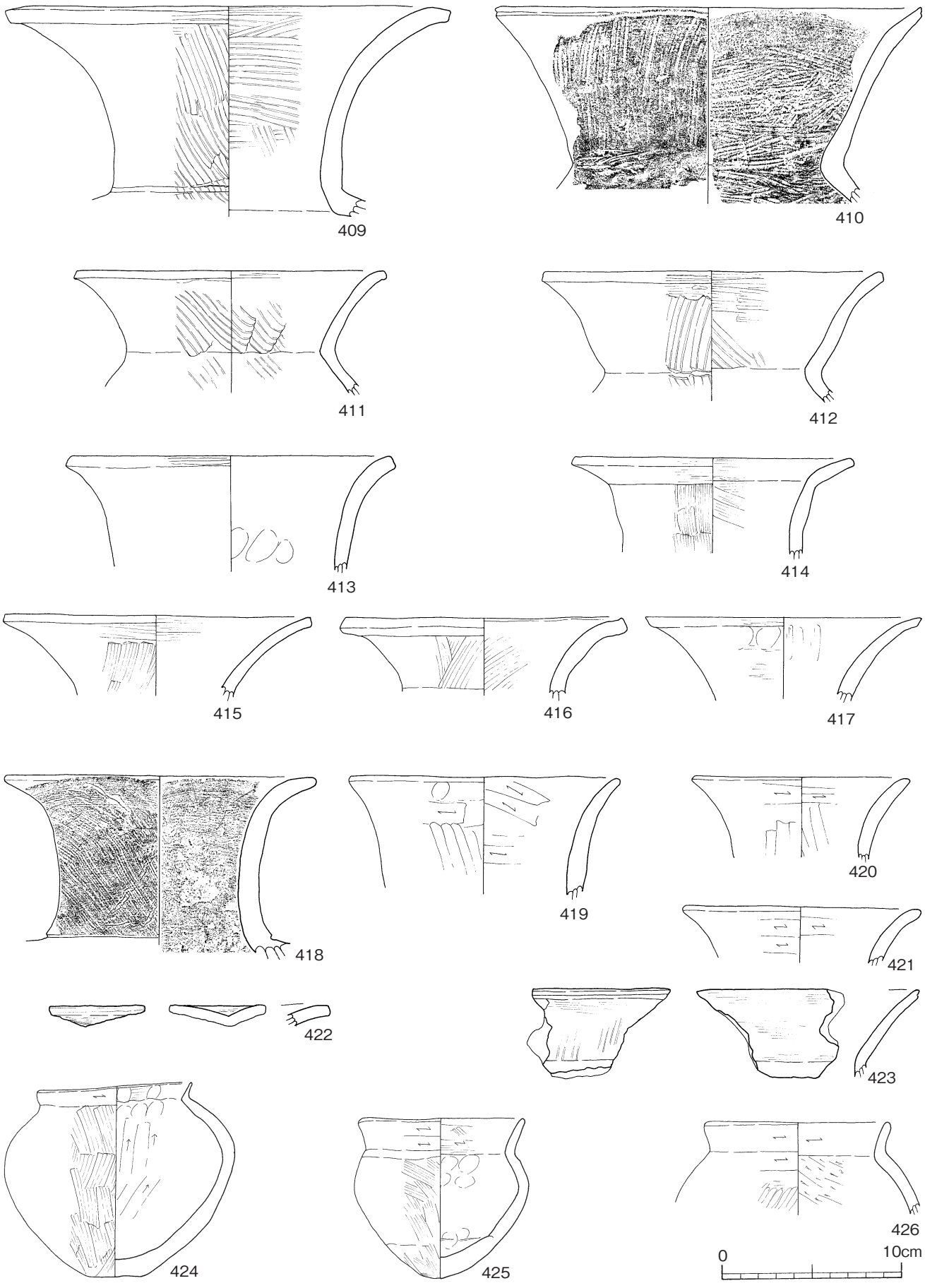
439～442は，頸部から上部のみが欠損しているもので，形式が不明なものである。439は，底部から胴部にかけて直線的に立ち上がり，胴部から肩部にかけて強く内向している。外面は肩部にミガキ調整を施し，胴部はハケメ調整を施している。440は胴部中央付近に三角突帯を１条施し，その下位を上方向へケズリ調整により仕上げている。最大径は約23cm を測り丸底を呈する。441は，肩部から胴部にかけて強く内弯し，底部にかけて緩やかに内向している。胴部中央付近に三角突帯を３条施し，器面全体にハケメ調整を施している。最大径は約30cm を測り，平底を呈すると思われる。442は最大径が約40cm を測る大型の壺形土器である。胴部の膨らみは弱く，卵形を呈する。胴部中央付近に断面が三角を呈する刻目突帯を有し，内外面にハケメ調整を施している。平底で，底径は約５cm である。



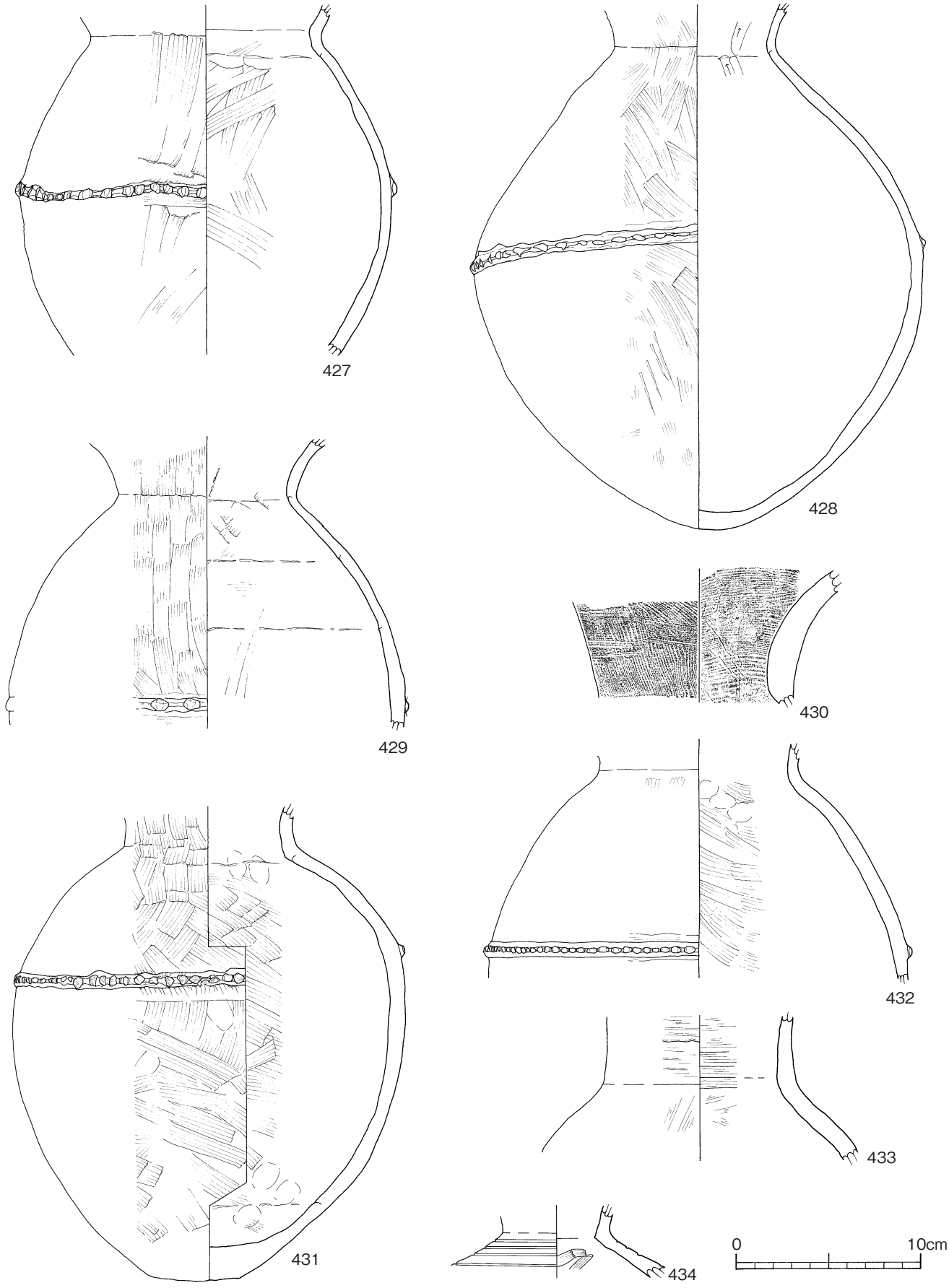
第46図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（25）



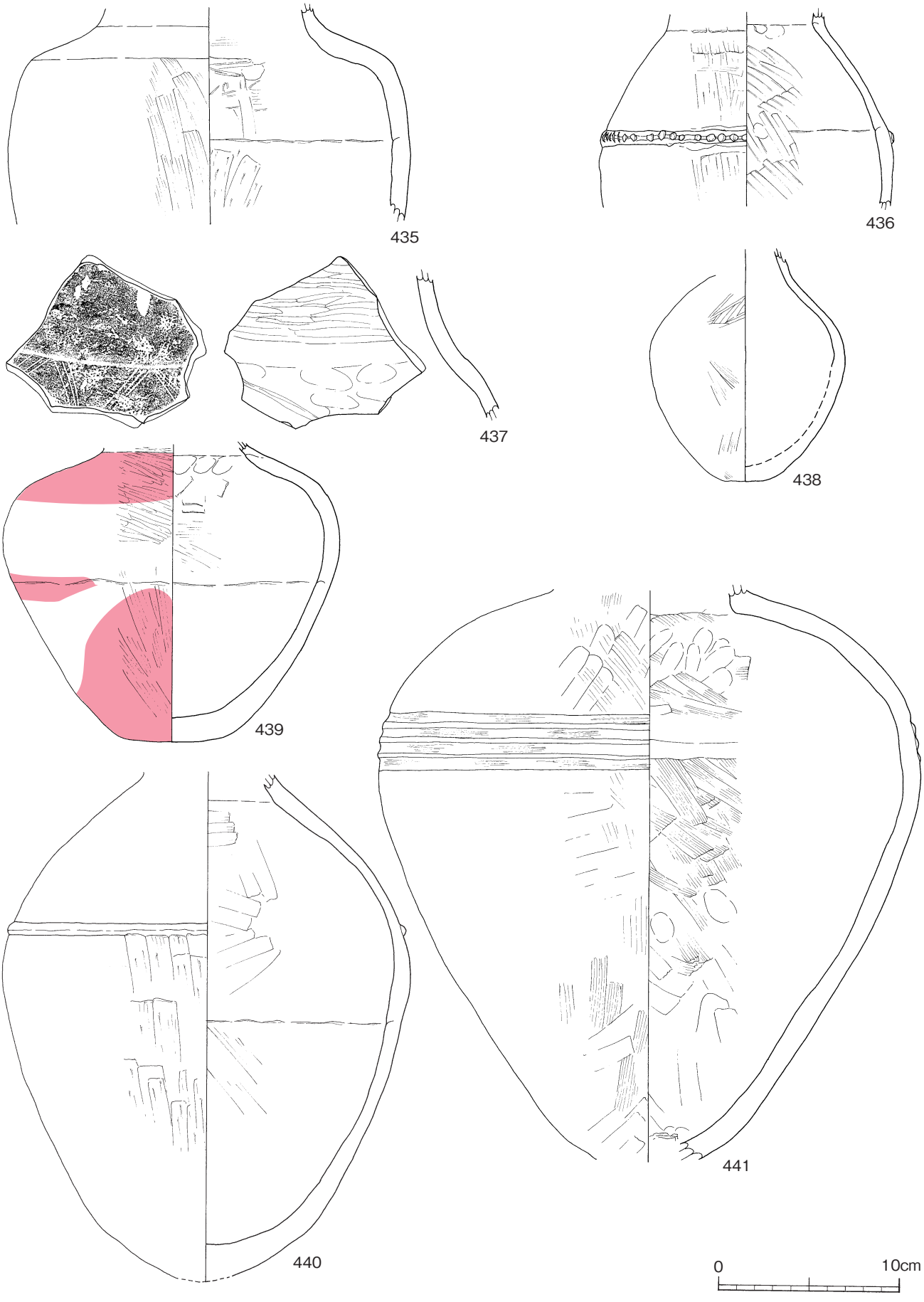
第47図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（26）



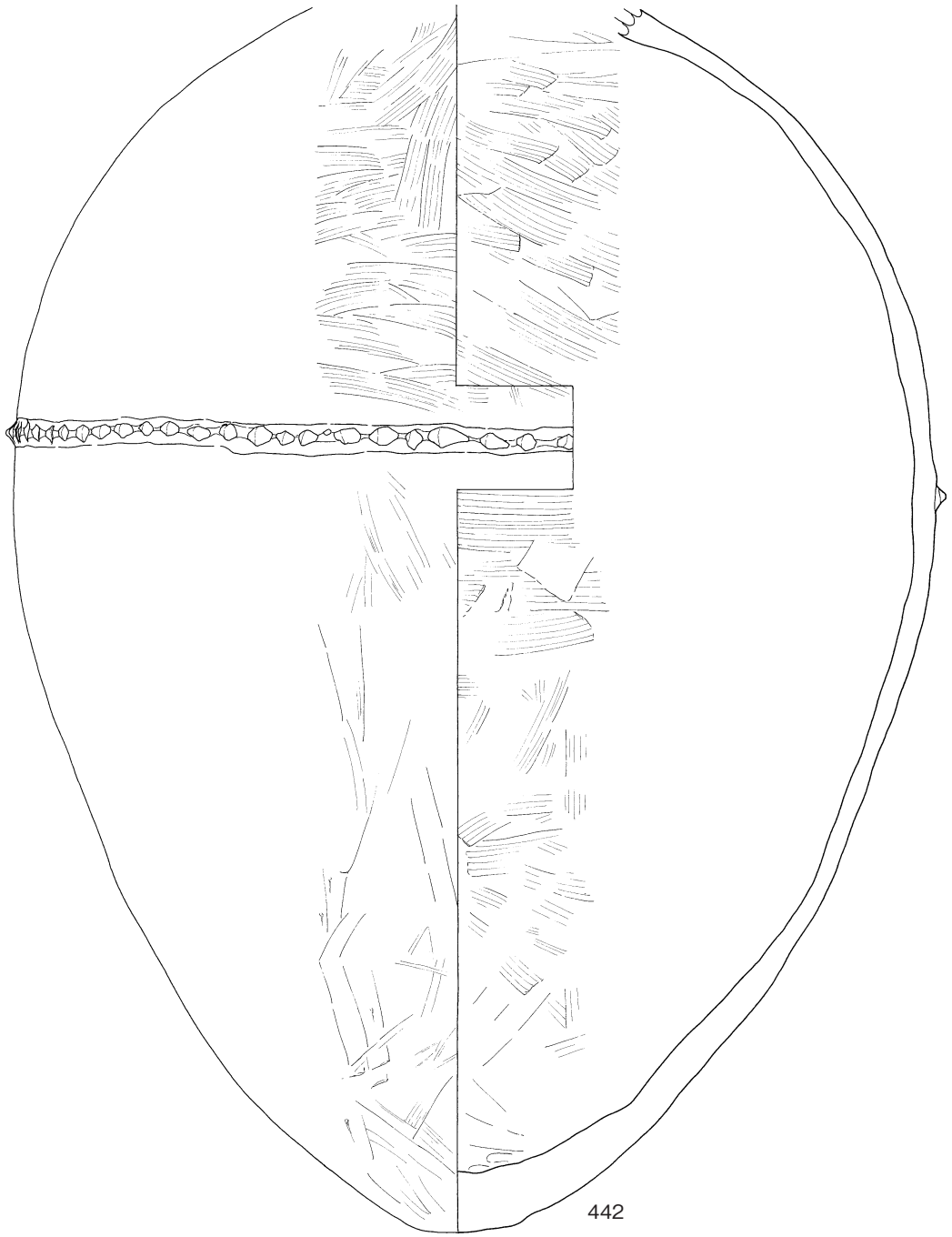
第48図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（27）

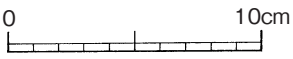


第49図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（28）



第50図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（29）





第51図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（30）

443～461は，肩部から底部までの一部分で，突帯を有するものである。

443～445は肩部で，443は４条の三角突帯を施している。外面にミガキ調整を施し，内面はナデ調整で仕上げている。444は，断面が三角を呈する刻目突帯を有する。突帯の上下に横位にナデ調整を施し，内面はハケメ調整を施す。445は焼成がしっかりしており，工具による条痕が見られる。446は，突帯の上下に丁寧な横ナデ調整を施す。突帯部が最大径で，約18cm を測る。447は，突帯の上位は下方向へハケメ調整，下位は上方向へハケメ調整を施す。449は４条の三角突帯を施し，内外面にハケメ調整を施す。突帯部が最大径で，約34cm を測る。450は３条の三角突帯が施されている。外面に丁寧なナデ調整を施す。451は，断面が台形を呈する刻目突帯を有し，外面に丁寧なハケメ調整を施す。452は，突帯下位を上方向へハケメ調整を施す。453は突帯下位の部分で，外面に丁寧なハケメ調整を斜位に施し，内面はハケメ調整後，指頭圧による調整を施している。454は断面が台形を呈する突帯を施し，その下位をミガキ調整によって丁寧に仕上げている。455は外面にハケメ調整，内面に指ナデ調整を施す。456～459は，１条の刻目突帯を有し，内外面にハケメ調整を施す。いずれも胴部が強く内弯しており，ほぼ球状を呈している。456は突帯部が最大径で，約24cm を測る。457は胴部上位に突帯を施し，最大径は約17cm を測る。458は突帯部が最大径で，約23cm を測る。460は突帯下位に縦位へ丁寧なナデ調整を施す。内面はハケメ調整で，工具による跡が強く残る。461は胴部の膨らみが強く，底部にかけて内向している。内外面にハケメ調整を施す。

ケ　Ⅸ類（第54・55図462～478）

底部を一括したものである。

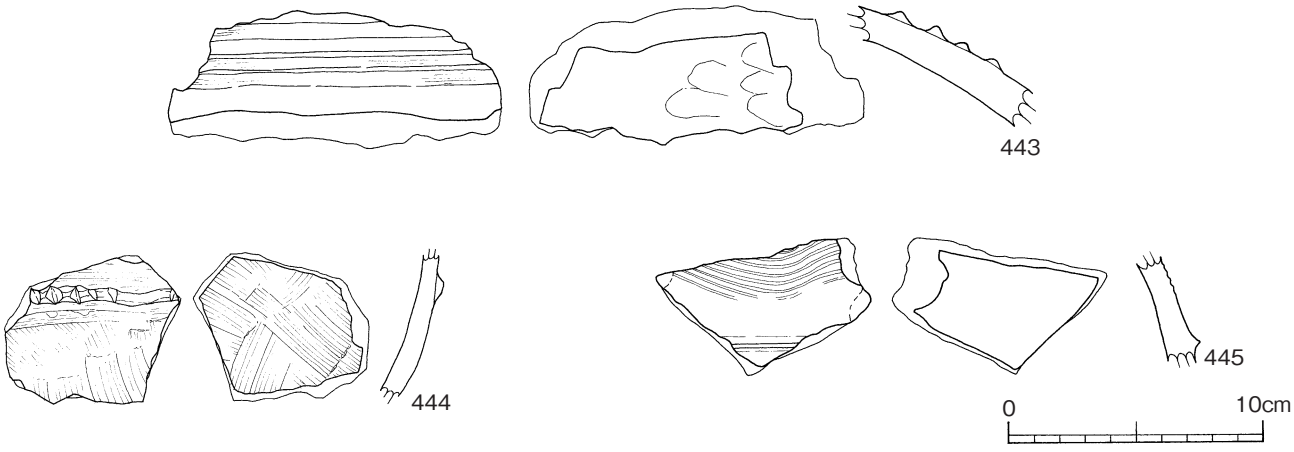
462～473は平底を呈する。462は底径約５cm で，厚みもあることから，やや大型と思われる。463は底径が約６cm で，ほぼ直線的に開きながら立ち上がる。外面を上方向へ，内面を横位にハケメ調整を施している。464は底径約９cm で，胴部への立ち上がりはほぼ直立である。465は底径約５cm で，やや内向気味に立ち上がる。内外面に粗いケズリ調整を施す。

466～469は，胴部への立ち上がりが緩やかに内弯しているものである。466は底径が約６cm で，内外面にハケメ調整を施している。467は底径約４cm で，内外面に丁寧なハケメ調整を施す。468は底径約５cm で，器壁が厚く，内面にナデ調整を施す。469は底径約６cm で，内外面にハケメ調整を施す。

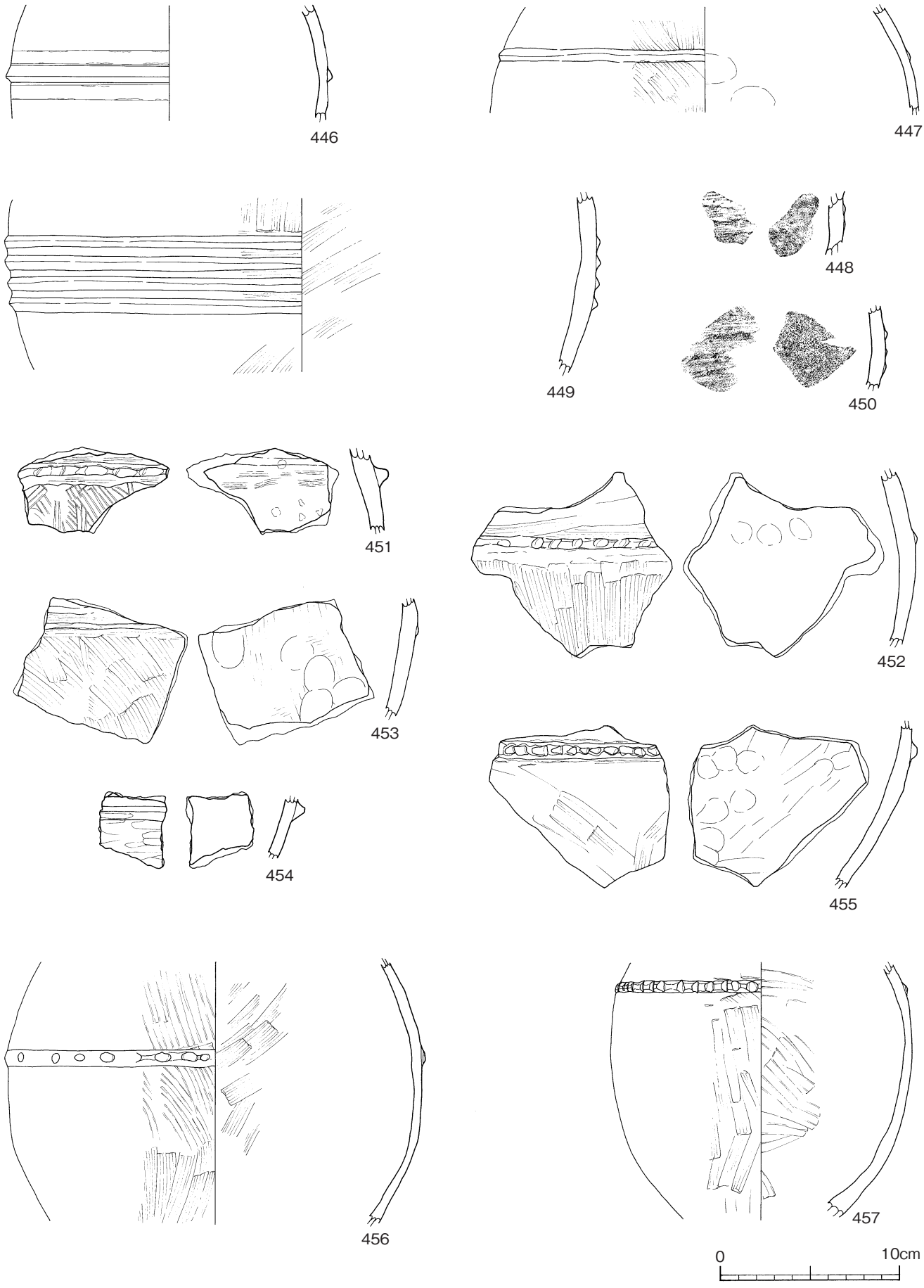
470～472は，開きながら立ち上がり，胴部へかけて内弯する。470は底径約５cm で，内外面にハケメ調整を施す。472は底径約４cm で，外面は縦位に，内面は斜位にハケメ調整を施す。

473は直線的にやや開きながら立ち上がり，胴部へかけて緩やかに内弯している。底径は約４cm で，内外面に丁寧なハケメ調整を施している。

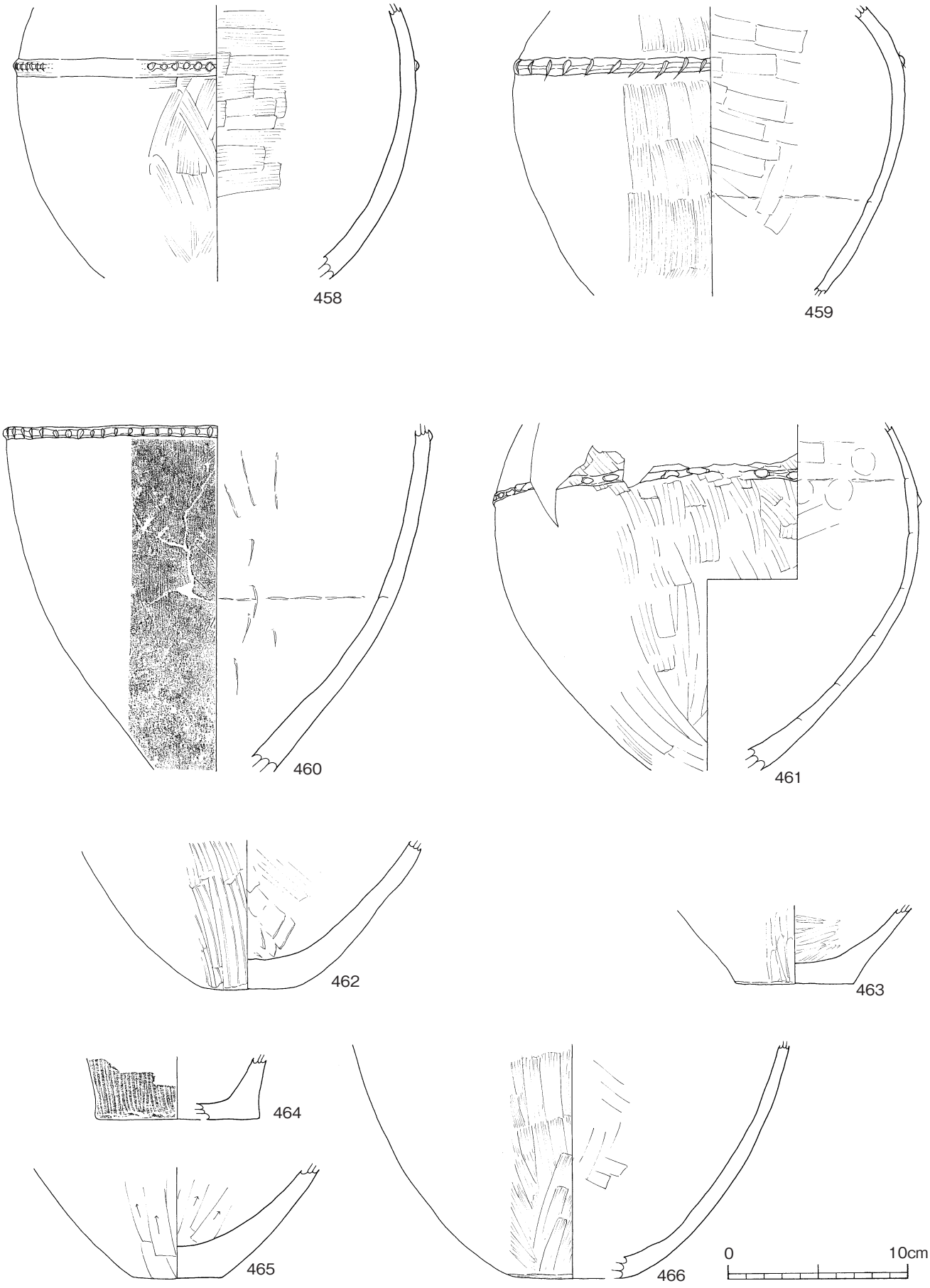
474～478は丸底を呈する。474は開きながら立ち上がり，胴部へかけて緩やかに内弯している。外面は，ケズリ後ハケメ調整を施している。475は肩部から底部まで丸形を呈し，外面にケズリとハケメ調整を施している。476は器壁が厚く，外面にハケメ調整を施す。立ち上がりが大きく開いており，大型の壺形土器の底部と考えられる。477は，内外面にケズリ調整を施している。立ち上がりは強く内弯している。478は底面がほぼ尖っており，直線的に大きく開きながら立ち上がる。



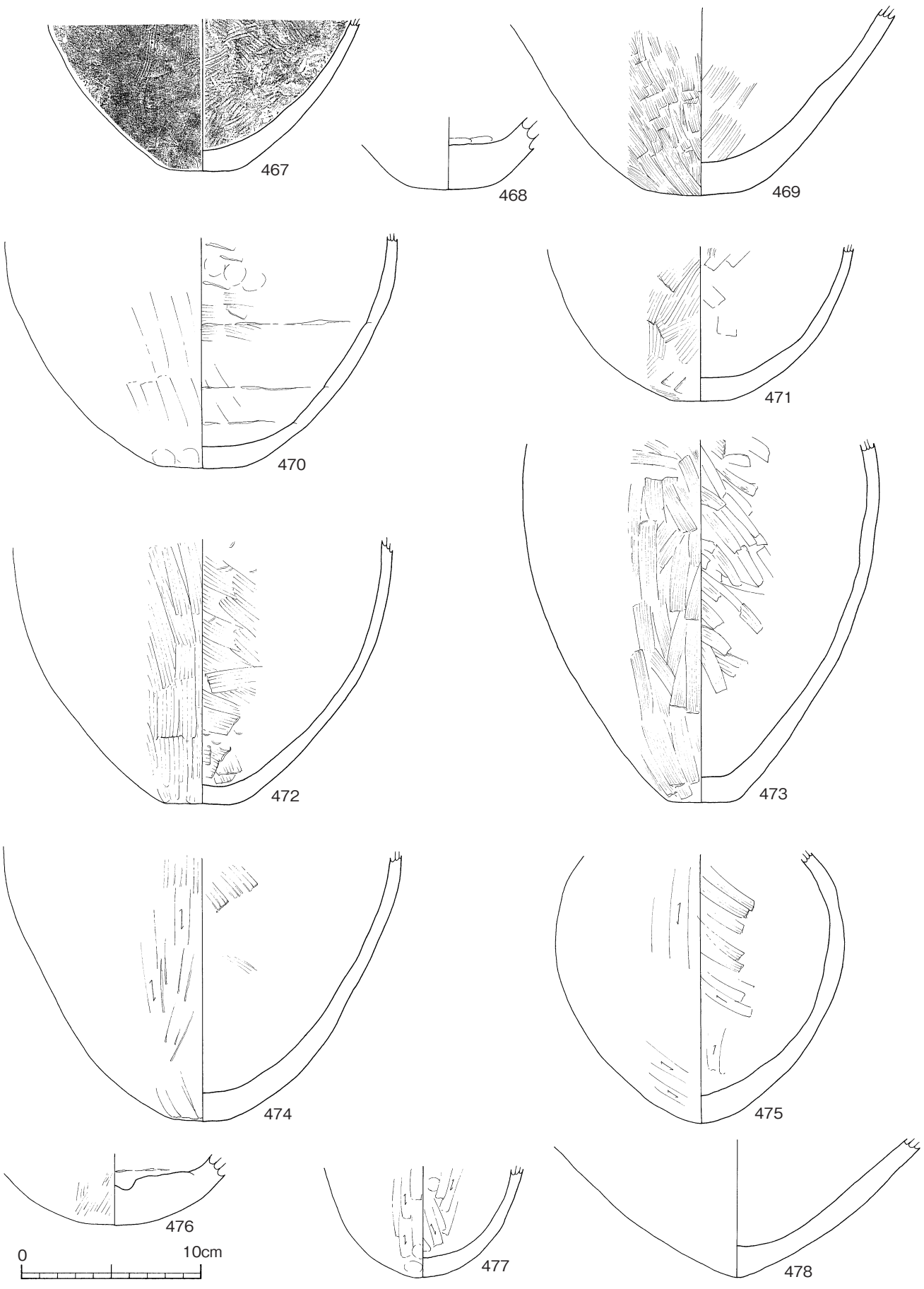
第52図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（31）



第53図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（32）



第54図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（33）



第55図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（34）

(4) 鉢形土器

鉢形土器は，口縁部，胴部，底部合わせて47点を図化した。形式上Ⅰ～Ⅲ類に分類した。

ア　Ⅰ類（第56図479～484）

口径が約10～17cm の小型鉢形土器である。

479～482は口縁部が直線的にのびるもので，479は口唇部がわずかに外反する。482は充実高台気味に肥厚した平底である。483・484は，口縁部が内向しながら立ち上がり，胴部が膨らむ鞠形を呈する。

イ　Ⅱ類（第57図485～497）

口縁部が直線的にのびるものである。

485・486は，口縁部が外反する。485は外面が縦位に，内面は横位にハケメ調整を施す。486は口縁端部が欠損している。外面に，ケズリ後ナデ調整を施す。

487～489は，口縁部から底部まで直線的にのびている。490・491は，胴部がやや膨らんで，緩やかに内弯するものである。490は外面にハケメ調整を施し，内面は粗いケズリ調整を施す。492・493は，胴部中央付近から底部にかけて緩やかに内向している。494～497は口縁部である。495は，内外面に粗いケズリ調整を施している。

ウ　Ⅲ類（第58図498～525）

底部を一括したものである。

498～512は，中空をもつ脚台である。513～517は脚台であるが，接地面は欠損している。518は脚台が短い。

519～525は平底を呈する。519・520は充実高台気味に肥厚した平底である。523は底部から胴部にかけて，ほぼ直立気味に立ち上がる。

(5) 高坏形土器（第58・59図526～550）

口縁部，脚柱部，脚部合わせて25点が出土した。

526～528は，頸部の締まりが強く，内側に段をもつものである。内外面にミガキ調整を施す。529～531は口縁部のみで，大きく外反する。533～546は脚柱部であり，535～546・548は穿孔を施している。547～550は脚部で裾広がりに大きく外反しながら開く。

(6) 坩形土器（第59図551～560）

551は，底部から口縁部にかけて僅かに外向しながら立ち上がる。553は口縁部が直立し，底部から胴部にかけて強く内弯する。554は，頸部から肩部にかけて強く屈曲し，胴部が強く内弯する。555・556は胴部の一部で，556は算盤玉状を呈する。557～560は底部である。

(7) 手捏ね土器（第60図561～567）

口径が約８cm 以下の小型で，指頭圧痕が全体に残る。

561・562は，胴部が膨らみ鞠形を呈する。563～567は鉢形を呈し，565・566は底部が尖っている。

(8) 蓋類（第60図568～580）

568～574は庇部が大きく外反しており，庇部の内面下部にススが付着している。鉢形土器の転用と考えられる。575～580は庇の縁部であり，内側にススが付着している。

２　土製品（第60図581・582）

土製品は紡錘車と思われるものが２点出土した。

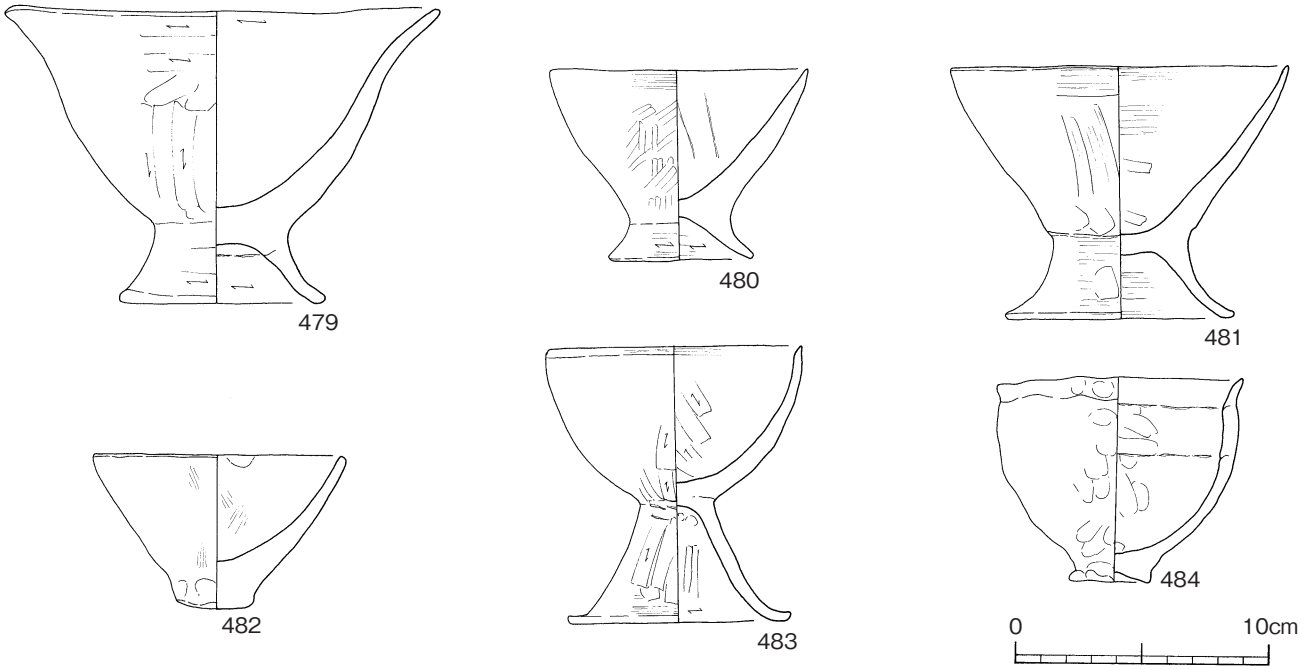
581は，穿孔を施した部分のみが残る。582は，胴部片を利用したものと思われ，中央に穿孔を施す。

３　土師器（第60図583・584）

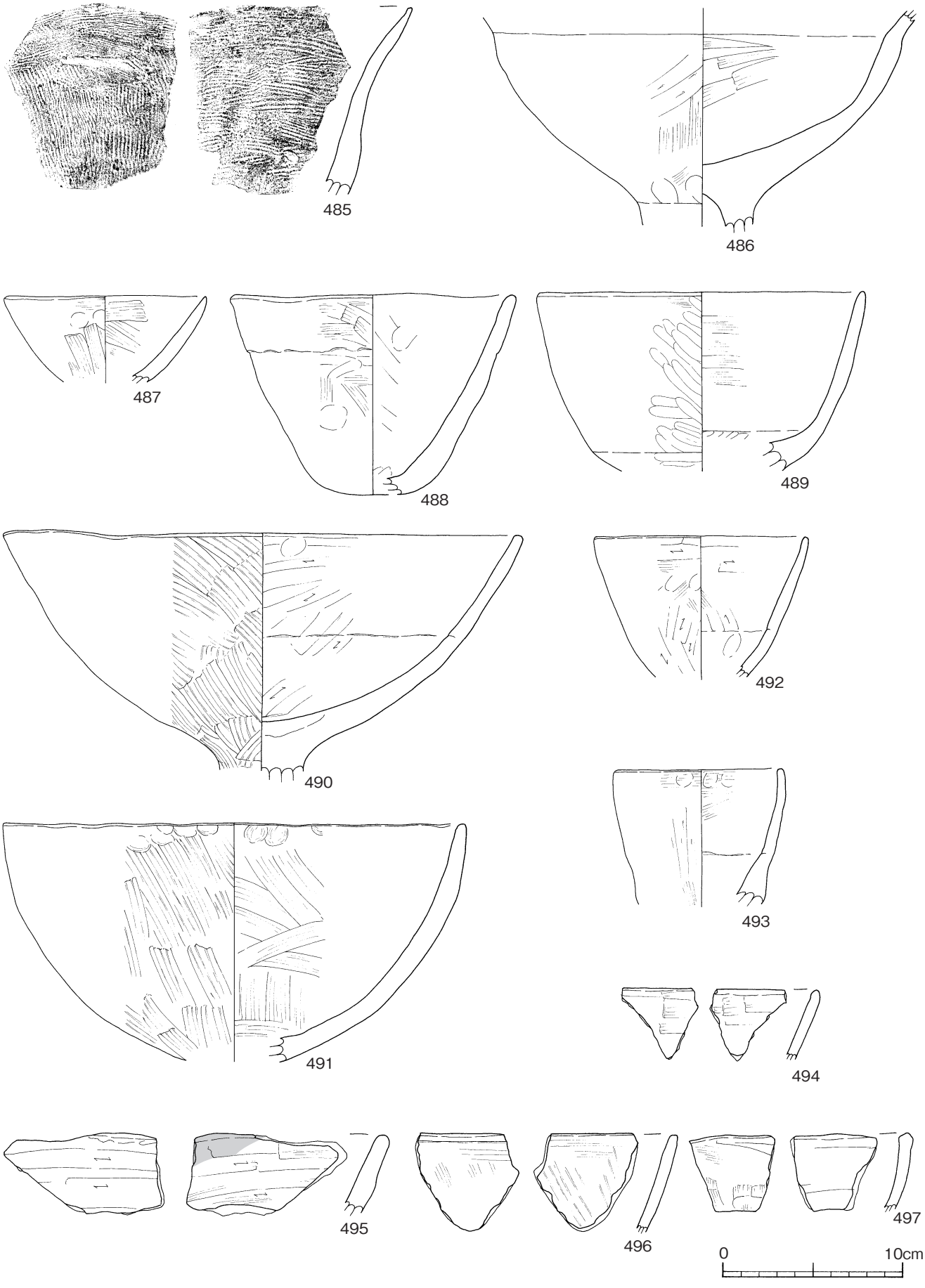
土師器は，古墳時代末期の甕と思われる口縁部が２点出土した。583は，口縁部が直立し，口唇部で大きく外向する。584は，頸部から口縁部の屈曲が強い。

４　須恵器（第60図585・586）

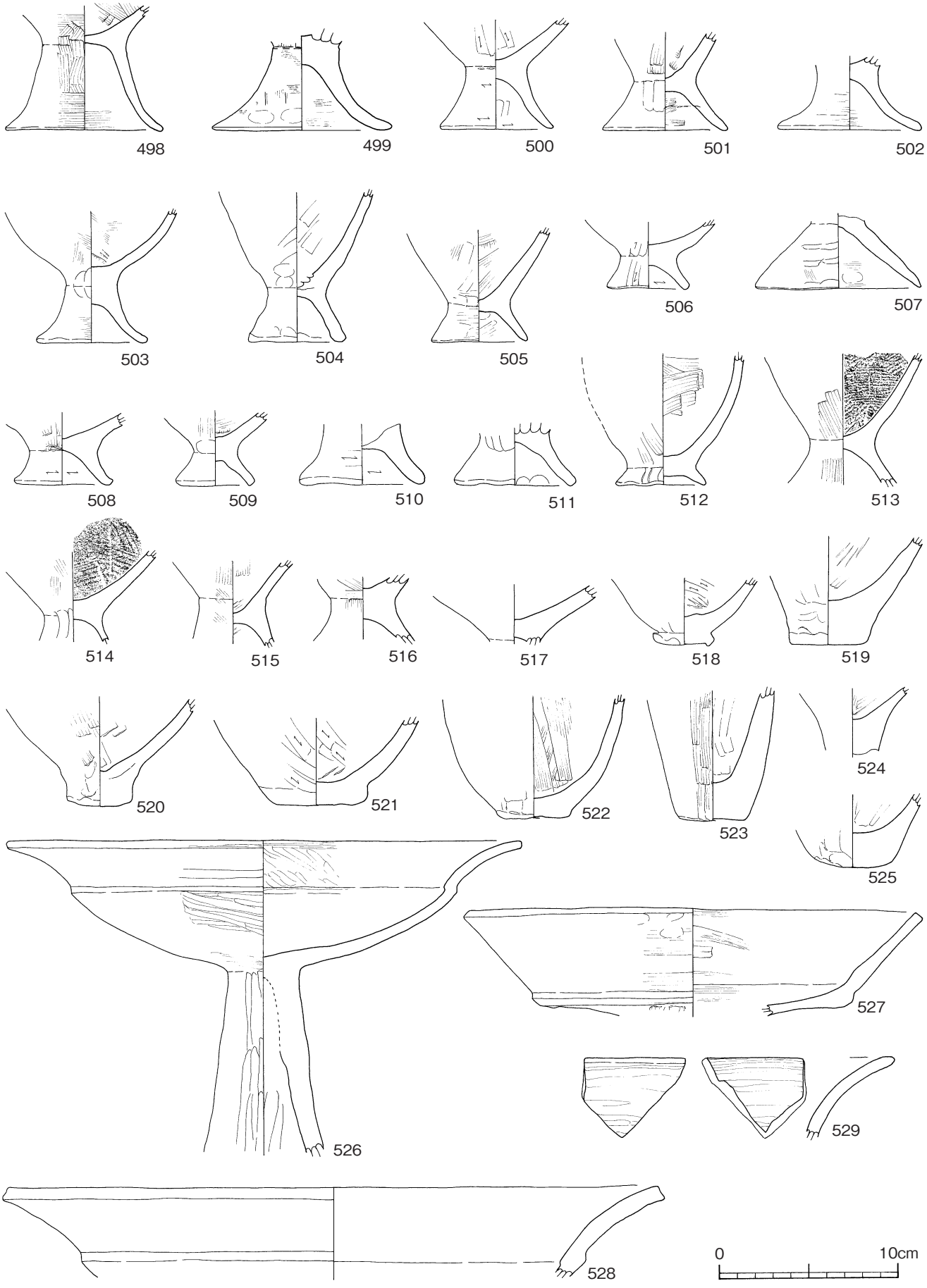
須恵器は，杯身が２点出土した。585は平底で胴部に段をもち，口縁部がやや内向しながら直線的に立ち上がる。586は，高台付の底部で，脚端部が外反する。



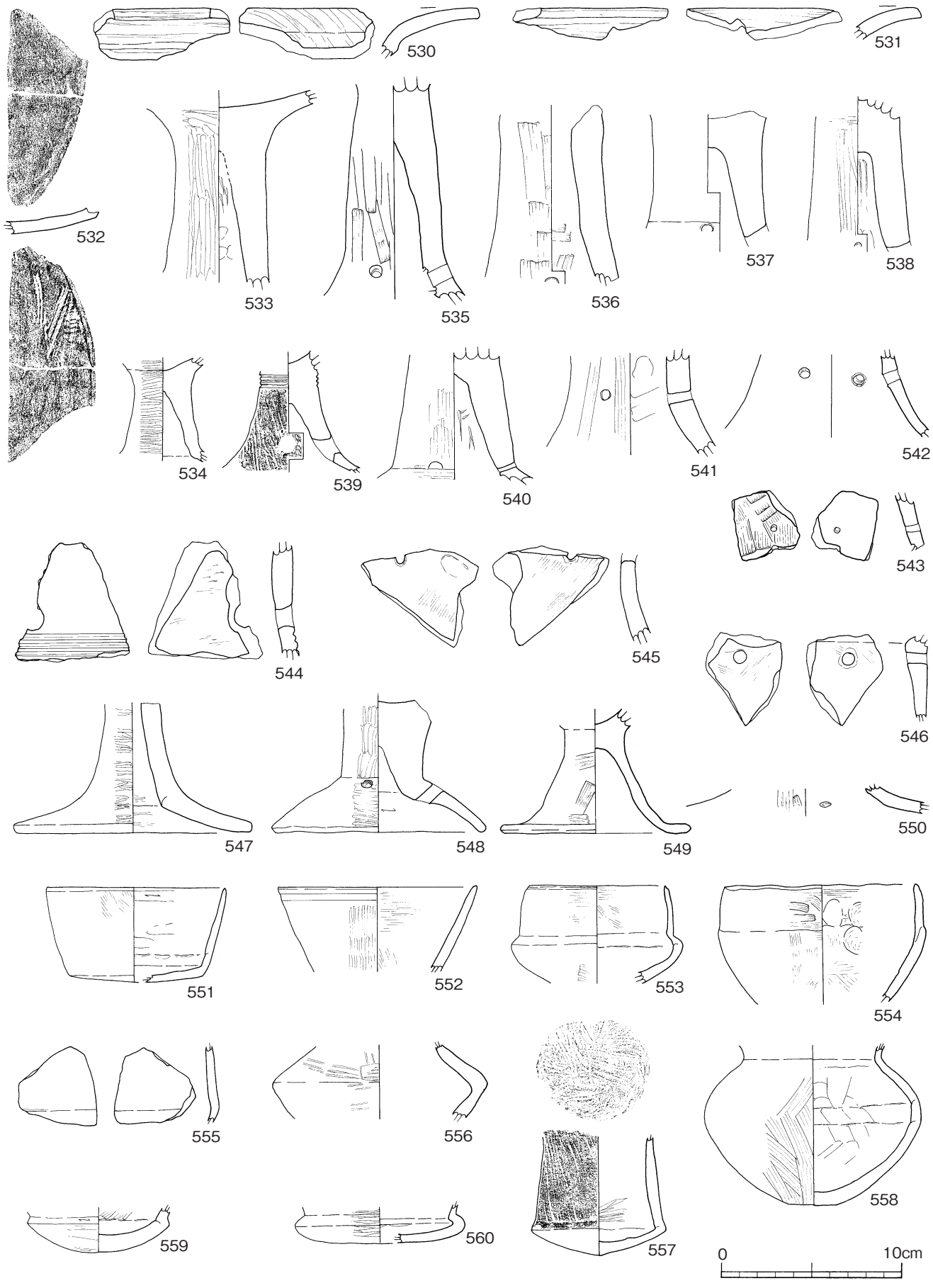
第56図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（35）



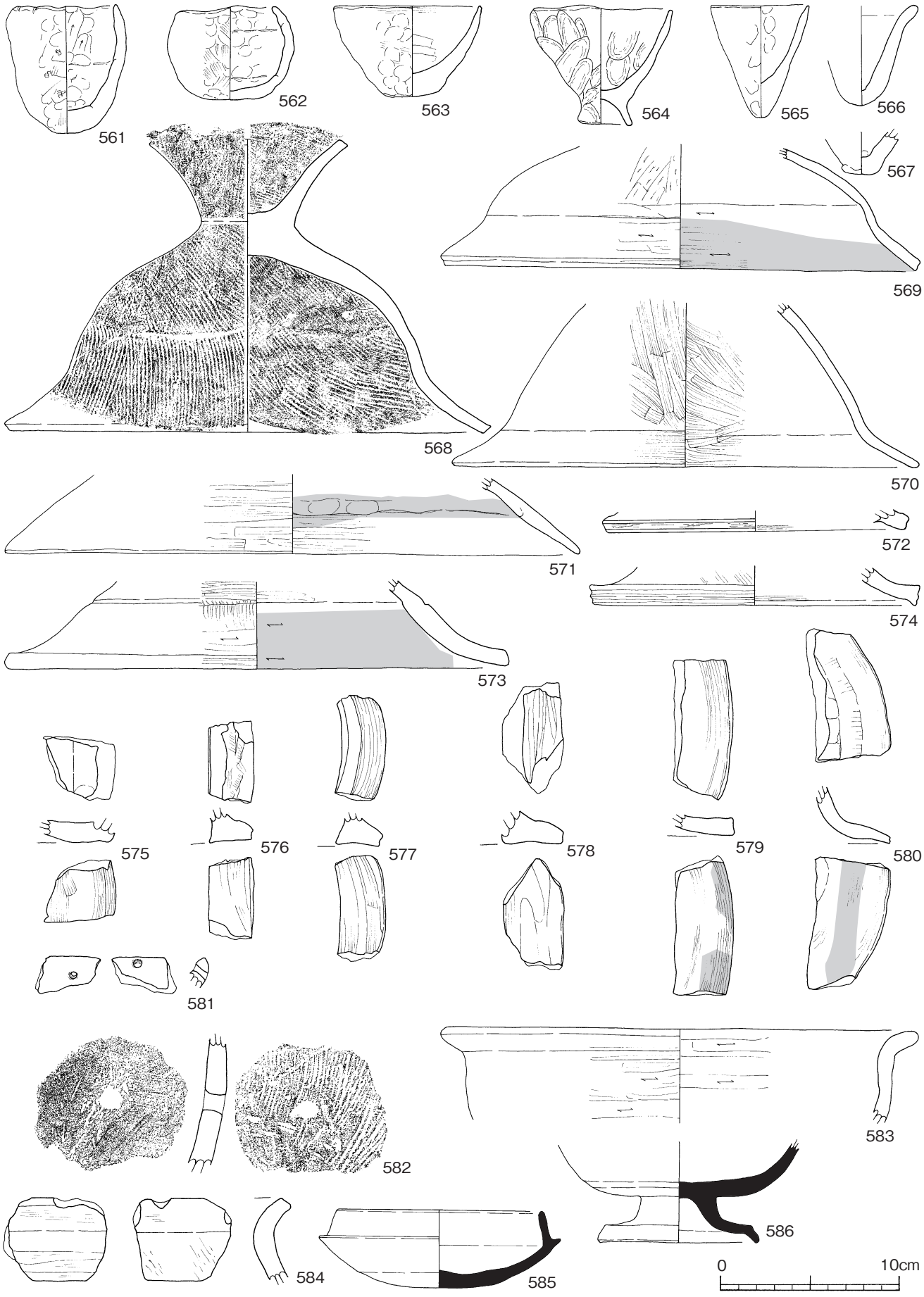
第57図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（36）



第58図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（37）



第59図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（38）



第60図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（39）

5　石器

該期の石器は56点出土した。18点を掲載し，剥片石器と礫石器の２つに分類した。

(1) 剥片石器（第61図587～589）

ア　磨製石鏃

587は頁岩製であり，全長約4.8cm，幅約1.9cm のやや大きめの磨製石鏃である。断面はレンズ状を呈する。刃部は表裏両面とも主に横位へ研磨が施されており，基部は縦位に研磨を施す。

イ　石包丁

588は頁岩製であり，全長約７cm，幅約4.5cm の弧状の刃部と直線的な背部をもつ石包丁である。表裏両面だけではなく，背縁や側面にも丁寧な研磨が施されている。穿孔は欠損のため，１か所しか確認できない。

ウ　石核

589は上牛鼻産とみられる黒曜石の小角礫を使用し，平坦打面から小型の剥片を剥離しているものである。

(2) 礫石器（第61～64図590～604）

ア　磨製石斧

590はホルンフェルス化した頁岩製で，全長約11.3cm，幅約5.4cm，厚さ約2.5cm の磨製石斧である。断面は蛤形を呈する。

叩打後に丁寧な研磨を行い，体部の整形を施している。刃部には使用痕が残り，背面は使用による欠損と考えられる。

イ　敲石

591は砂岩製で，全長約15.4cm，幅約3.1cm の細長い円礫を使用した敲石である。長軸片側の細い方の突端に著しい敲打痕が見られ，もう一方には敲打痕は見られない。

ウ　凹石

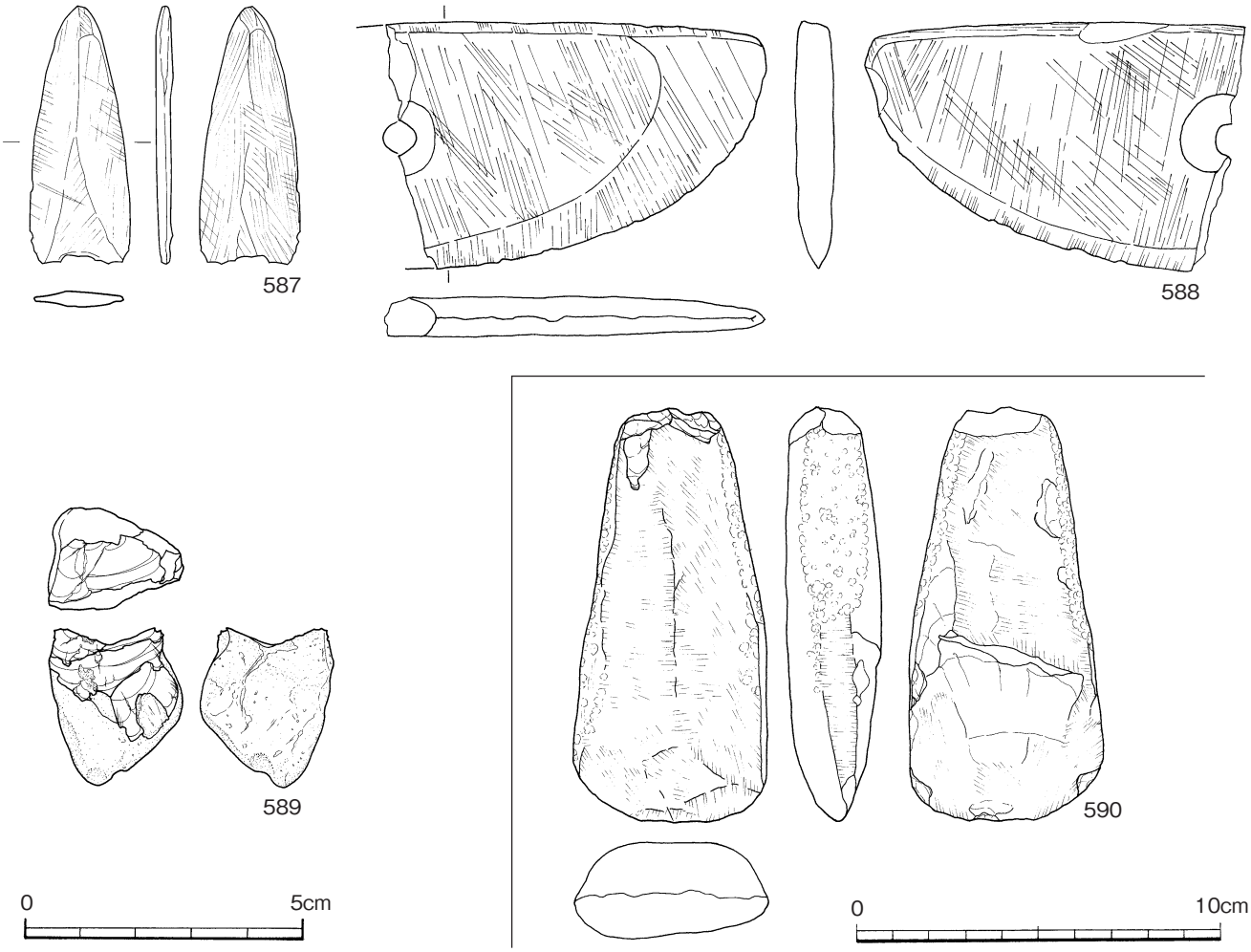
592は半分を欠損している。592・593とも砂岩の円礫を利用したもので，表裏両面の中央に浅く広い敲打痕が見られる。

エ　砥石

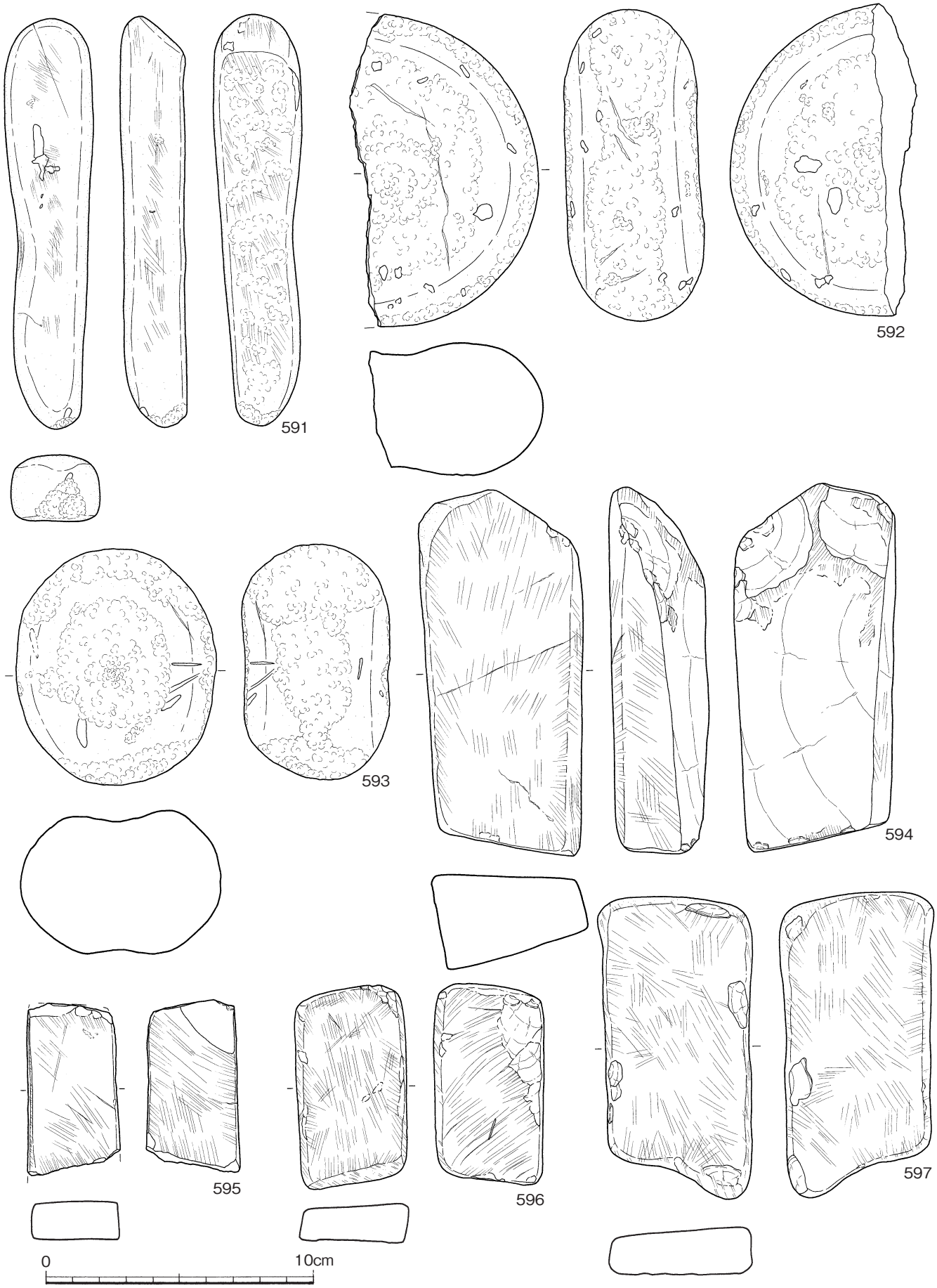
いずれも，頁岩製の礫で平坦面部分を使用している。

594～598は，表裏両面が平坦な長方形を呈している。594は，表面と側面に使用による光沢が見られる。595～598は両面に光沢が見られる。器厚が２cm 未満と薄い。

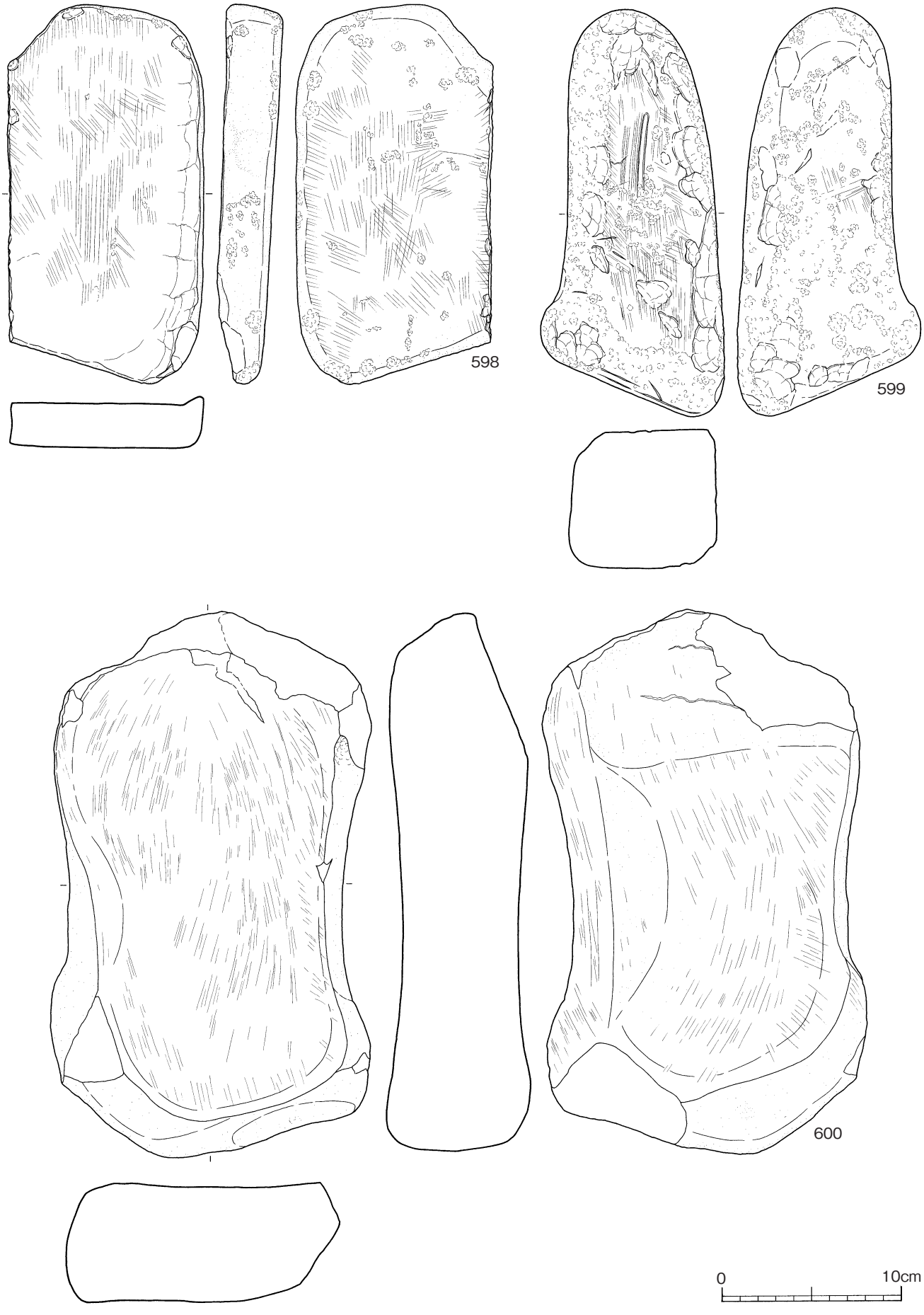
599・600は，不定形で厚い礫の平坦面を使用している。599は断面が方形を呈し，表面の中央部に光沢が見られる。600は表裏全面を使用し，やや中央が凹んでいる。全長が約30cm で重量が6.2kg と，かなり大型の砥石である。



第61図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（40）



第62図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（41）



第63図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（42）

601・602は隅丸方形を呈し，断面が厚い礫を使用している。601は，両面に使用による光沢が見られる。602は断面が台形を呈し，片面のみに使用による光沢が見られる。

603・604は，細長い礫の一部を利用したものである。603は摩耗が激しく，光沢部が点在する。604は，両面に使用による光沢が見られる。

6　石製品（第65・66図605～615）

軽石製品は，約300点余りが出土した。その中で，ほぼ完形に近いものを11点掲載した。形状がはっきりとしたものや穿孔を施すものがあり，浮きあるいは垂飾品の類と考えられる。

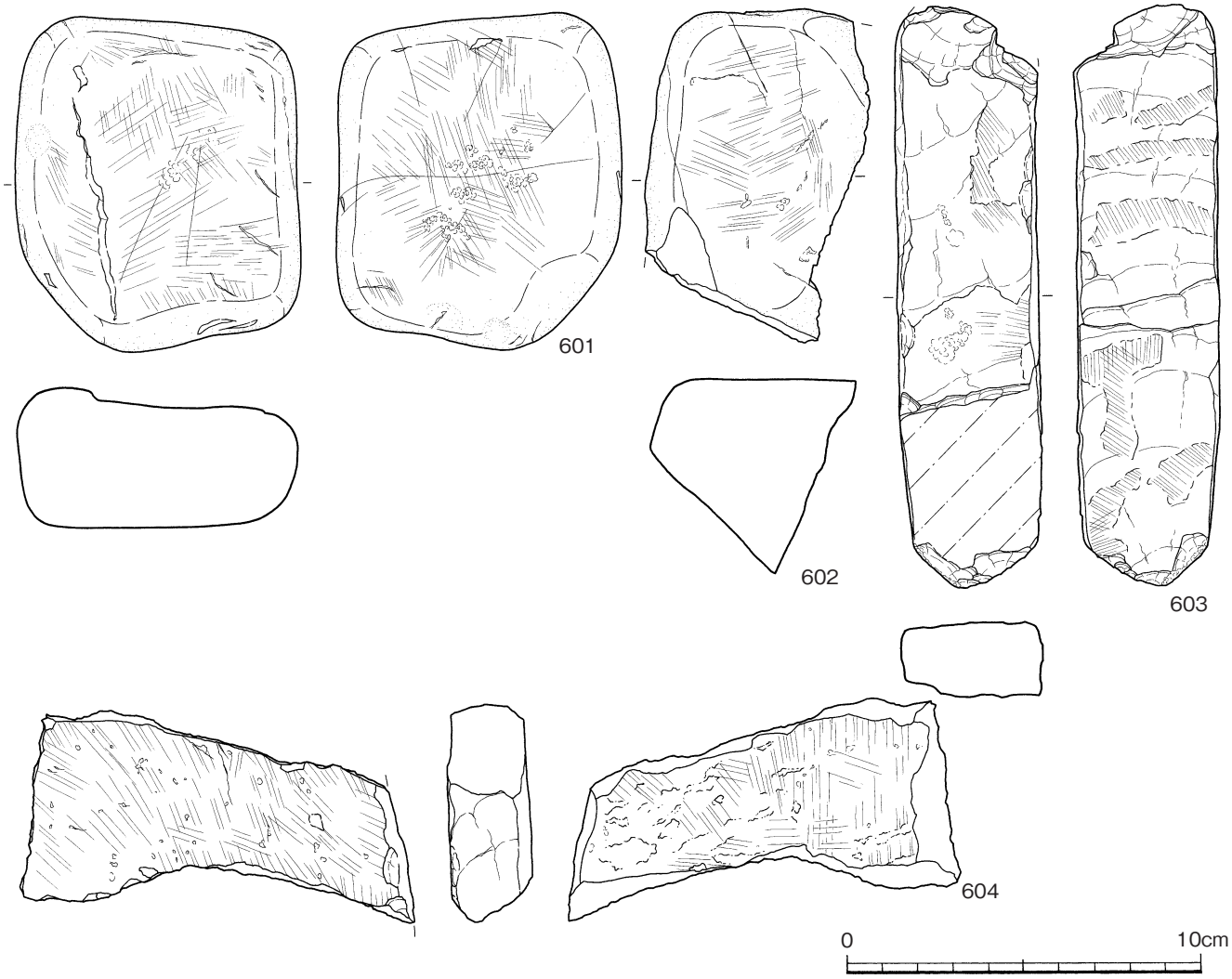
605・606は，平坦面中央部に上下方向から穿孔を施したものである。表裏および側縁に明瞭な擦痕が見られ，扁平状に形成している。605は，全長は約９cm，最大幅約3.2cm，厚さが約1.5cm で三日月状を呈している。606は全長約６cm，幅約４cm，厚さ約1.3cm で隅丸長方形を呈している。

607～611は，凹みをもつ石製品である。607は，船形状の凹みをもつ。側縁および下面には擦痕が見られ，丁寧に丸く仕上げられている。608は上面に２か所，下面に１か所の深い凹みをもつ。側縁に擦痕が見られ，調整を施している。609は，Ｖ字形の凹みをもつ。左側1/4を欠損しており，下面は擦痕が見られる。610・611は，Ｕ字形の凹みをもつ。611は，側縁と下面に擦痕が顕著に見られ，丁寧な調整で仕上げている。

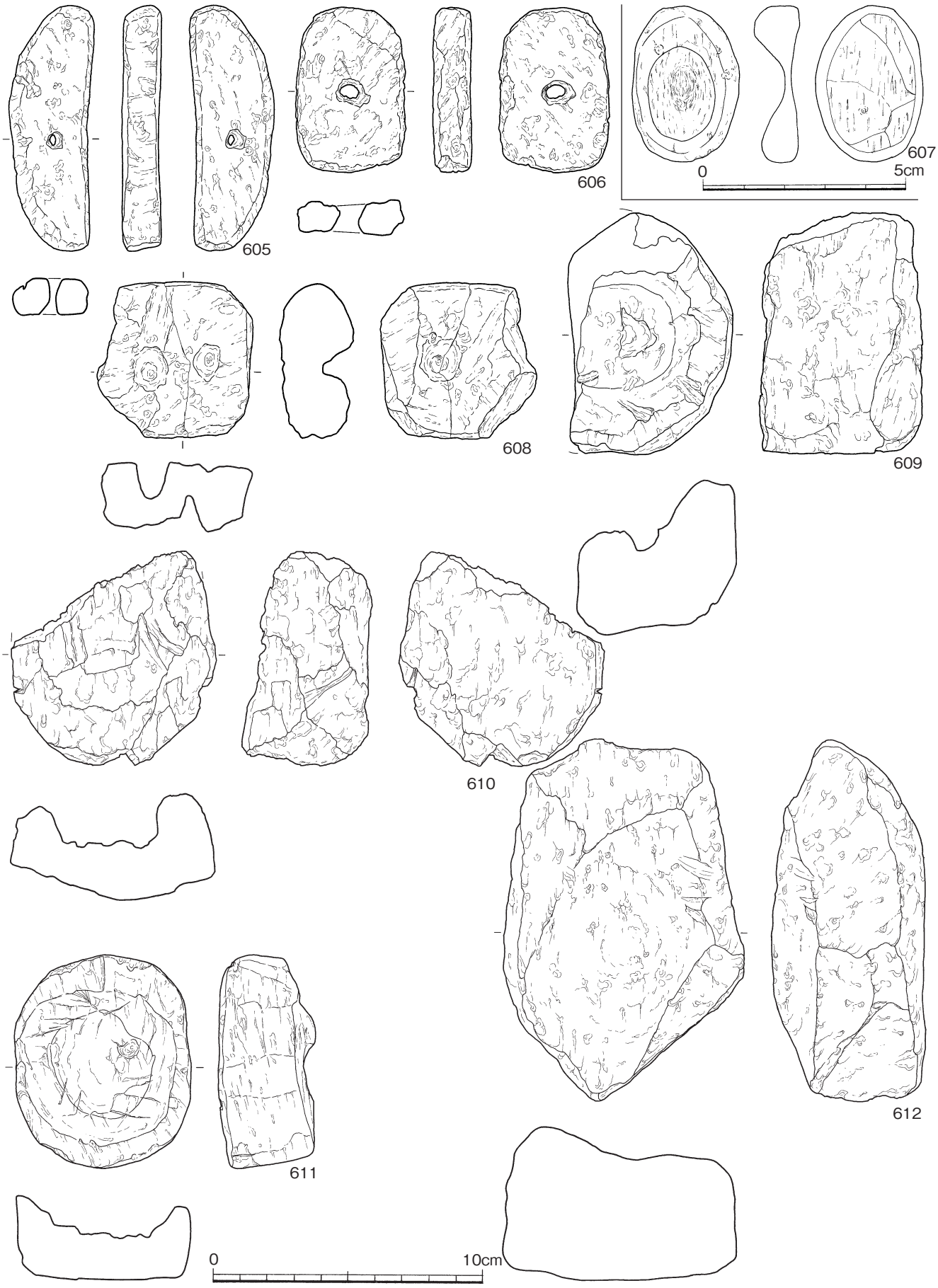
612～614は，上面に浅い凹みが見られ，下面および側縁に擦痕が見られる。613は長方形を呈し，一部欠損している。614は欠損が激しく，大型の軽石を利用したものと思われる。

615は最大長約14.5cm で，断面の直径が約10cm の円筒状を呈する。円筒の周りに深さ１cm 程度の溝を２条巡らせ，側縁には縦位に溝を１条施している。また所々に，被熱による赤色化した部位が認められる。

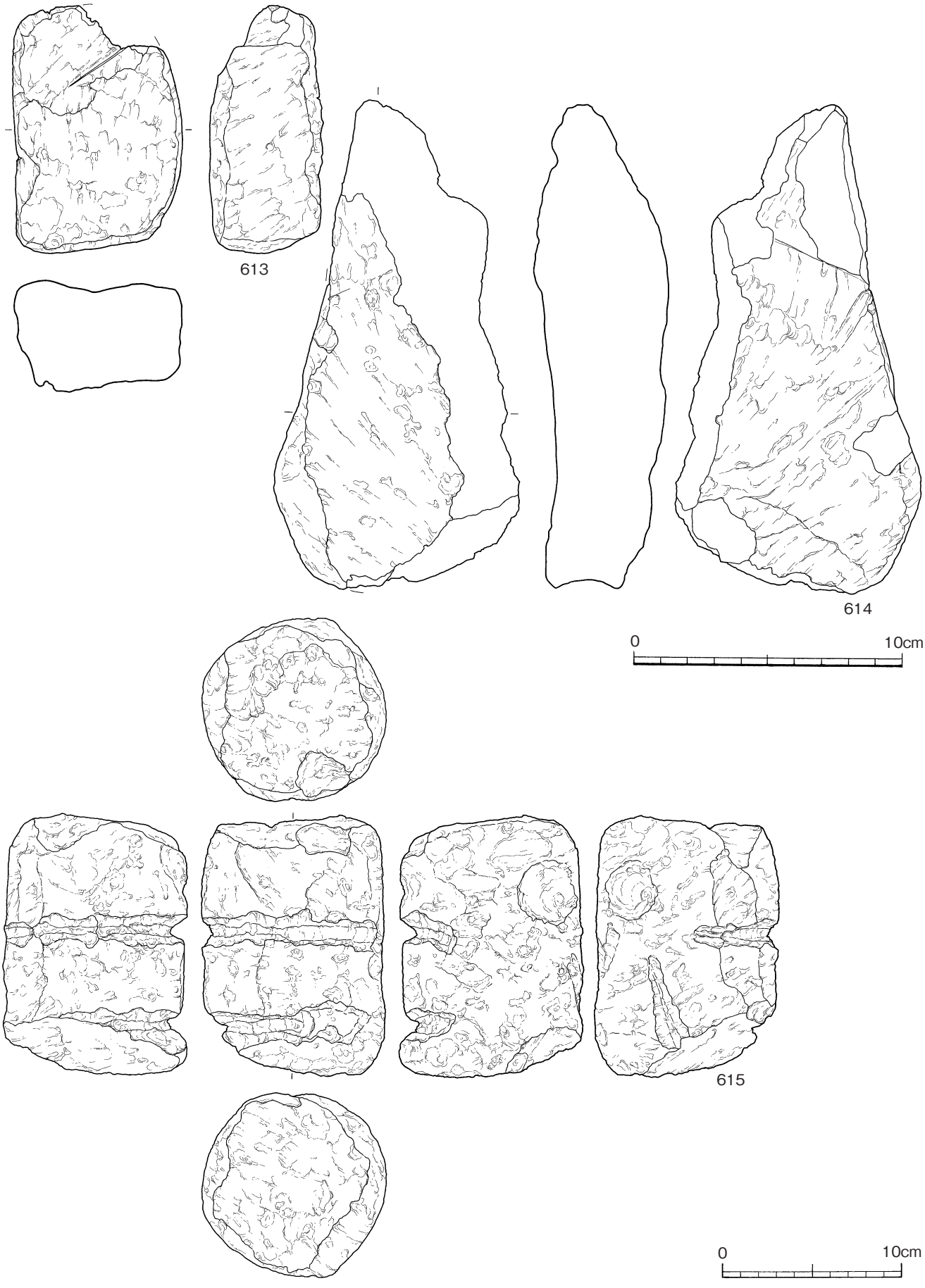
用途については現時点では不明であるが，他の製品と比較して明らかに形状が異なるため，使用目的については今後検討していく必要がある。



第64図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（43）



第65図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（44）



第66図　弥生・古墳時代出土遺物実測図（45）

表６　弥生・古墳時代出土遺物観察表（１）
遺構内遺物

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	調整		色調		胎　土							備考
						外	内	外	内	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他	
11	1	Ⅹ	W	5	甕	ハケメ後ナデケズリ	ナデ	黒褐	にぶい褐	○	○	○					２号竪穴住居内出土
	2	Ⅹ	W	5	鉢	ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○		○			２号竪穴住居内出土
	3	Ⅹ	W	5	鉢	ハケメヘラケズリ	ハケメ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○	○					２号竪穴住居内出土
12	4	Ⅹ	W	6	壺	ナデ	ナデ	黄褐	暗灰黄	○	○						３号竪穴住居内出土
	5	Ⅹ	W	6	鉢	ハケメヘラケズリ	ナデ	オリーブ褐	浅黄	○	○						３号竪穴住居内出土
	6	Ⅹ	W	6	高坏	ハケメヘラケズリ	ナデ	橙	明褐	○	○						３号竪穴住居内出土
	7	Ⅹ	W	6	壺	ナデ	ナデヘラミガキ	明黄褐	明黄褐	○	○						３号竪穴住居内出土
	8	Ⅹ	W	6	甕	ケズリナデ	ケズリナデ	浅黄	浅黄	○	○			○			３号竪穴住居内出土
	9	Ⅹ	W	6	鉢	ナデケズリ	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						３号竪穴住居内出土
15	10	Ⅹ	Y	6	壺	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					７号竪穴住居内出土
	11	Ⅹ	Y	6	高坏	ナデ	ナデ	明茶褐	暗茶褐	○	○						７号竪穴住居内出土
16	12	Ⅷ	Y	2	鉢	ナデ	ハケメ	暗茶褐	暗茶褐	○	○	○		○			１号大型土坑内出土
	13	Ⅷ	Y	2	甕	ナデ	ケズリ後ナデ	暗茶褐	暗茶褐	○	○						１号大型土坑内出土
	14	Ⅷ	Y	2	甕	ナデ	ハケメ	明赤褐	暗茶褐	○	○						１号大型土坑内出土
18	15	Ⅹ	Ⅹ	6	壺	ハケメナデ	ナデ	灰褐色	灰褐	○	○	○		○			３号土坑内出土
	16	Ⅹ	Ⅹ	6	壺	ハケメ	ハクリ	暗褐	暗茶褐	○	○	○		○			３号土坑内出土
19	17	Ⅵ	Ⅹ	6	甕	ナデ	ナデ	黒褐	浅黄	○	○						４号土坑内出土
20	18	Ⅴb	Ⅴ	1	高坏	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐	明赤褐	○	○	○					１号ピット内出土
21	19	Ⅸ	Z	3	鉢	ケズリ後ナデ	ナデ	暗茶褐	暗茶褐	○	○						３号ピット内出土

包含層遺物（土器，土製品，土師器，須恵器）

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	調整		色調		胎　土							備考
						外	内	外	内	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他	
22	20	Ⅵ	Ⅹ	3	甕	ハケメ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○						
	21	Ⅷ	Ⅹ	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						
	22	Ⅵ	W	2	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○					
	23	Ⅶ	W	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					スス付着
	24	Ⅷ	Ⅹ	3	甕	ナデ	ナデ	灰黄	橙	○	○						
	25	Ⅵ	Ⅹ	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	26	Ⅷ	Y	3	甕	ハケメ	ハケメ後ナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○						スス付着
	27	Ⅷ	Y	2	甕	ナデ	ナデ	黒褐	にぶい黄	○	○						スス付着
	28	Ⅵ	Ⅹ	2	甕	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○		○			金雲母	
	29	Ⅷ	Y	3	甕	ハケメ後ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						スス付着
	30	Ⅶ	Ⅹ	1	甕	ハケメ後ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○			
	31	Ⅷ	Ⅹ	3	甕	ヘラナデ	指頭圧痕	暗褐	浅黄	○	○						
	32	Ⅶ	Ⅹ	2	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○				金雲母	
	33	Ⅷ	Ⅹ	3	甕	ヘラナデ	指頭圧痕	暗褐	浅黄	○	○						
	34	Ⅷ	Ⅹ	3	甕	ナデ	ナデ	暗褐	浅黄	○	○						
	35	Ⅶ	Ⅹ	2	甕	ナデ	ナデ	赤褐	橙	○	○	○		○			
	36	Ⅹ	Ⅹ	1	甕	横ヘラナデ	指頭圧痕	明黄褐	明黄褐	○	○						
	37	Ⅵ	W	3	甕	ハケメ	ハケメ後ナデ	橙	にぶい褐	○	○						
	38	Ⅵ	Y	2	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○						
	39	Ⅷ	Ⅹ	2	甕	ナデ	工具ナデ	黒褐	黒褐	○	○						
	40	－	Y	2	甕	ヘラケズリ	ヘラケズリ	赤褐	暗褐	○	○						
	41	Ⅵ	Y	2	甕	ハケメ後ナデ	ナデ	赤褐	にぶい橙	○	○						
	42	Ⅵ	Ⅹ	3	甕	ハケメ後ナデ	ナデ	黒褐	明褐灰	○	○						
23	43	Ⅷ	W	3	甕	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						スス付着
	44	Ⅵ	W	3	甕	工具ナデ	ナデ	にぶい黄褐	明灰黄	○	○	○					スス付着
	45	Ⅷ	Ⅹ	3	甕	ナデ	ナデ指頭圧痕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○					スス付着
	46	Ⅶ	Ⅹ	3	甕	ハケメ	ハケメ後ナデ	黒褐	にぶい褐	○	○						
	47	Ⅹ	Y	6	甕	ハケメ後ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	○	○						
	48	Ⅵ	W	2	甕	工具ナデ	ハケメ後ナデ	黄橙	黄橙	○	○						
	49	Ⅵ	W	2	甕	ナデ指頭圧痕	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○						
	50	Ⅶ	Ⅹ	3	甕	ナデ	ナデ	灰黄	にぶい黄橙	○	○						
	51	Ⅷ	Y	2	甕	ナデ	ナデ指頭圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	52	Ⅶ	W	2	甕	ナデ	ナデ	黄橙	黄橙	○	○	○					
	53	Ⅵ	Y	7	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○						
	54	Ⅶ	Ⅹ	2	甕	ナデ	ナデ	黄橙	黄橙	○	○	○					
	55	Ⅵ	W	2	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○						
	56	Ⅵ	Y	7	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						
	57	Ⅶ	Ⅹ	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○					
	58	Ⅶ	Ⅹ	3	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○					

表７　弥生・古墳時代出土遺物観察表（２）

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	調整		色調		胎土							備考
						外	内	外	内	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他	
23	59	Ⅷ	Y	2	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい黄褐	灰褐	○	○	○					
	60	Ⅷ	Y	3	甕	ハケメ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						
	61	Ⅵ	Y	2	甕	ハケメ	ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						
24	62	Ⅶ	X	2	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						スス付着
	63	Ⅶ	W	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						
	64	Ⅵ	X	2	甕	ハケメナデ	ハケメナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○						
	65	Ⅶ	X	2	甕	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○						
	66	Ⅶ	b	3	甕	ナデケズリ	ナデケズリ	浅黄橙	浅黄	○	○	○					
	67	Ⅶ	X	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	68	Ⅷ	X	3	甕	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	灰黄褐	灰黄褐	○	○	○					スス付着
	69	Ⅷ	X	3	甕	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	○	○						
	70	Ⅷ	X	3	甕	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○						
	71	Ⅷ	X	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○	○					
	72	Ⅷ	X	3	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○						
	73	Ⅷ	Y	3	甕	ハケメ	ナデ	橙	にぶい橙	○	○						
	74	Ⅷ	Y	3	壺	ハケメ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						
	75	Ⅶ	X	3	甕	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○						
	76	Ⅷ	W	2	甕	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○						スス付着
	77	Ⅷ	X	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						スス付着
	78	Ⅷ	X	3	甕	工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○						
	79	Ⅷ	X	2	甕	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	80	Ⅷ	Y	3	甕	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	○	○			○			スス付着
	81	Ⅵ	U	1	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						
	82	Ⅷ	―	2	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○						
	83	Ⅷ	X	2	甕	工具ナデ	ナデ	橙	黄橙	○	○						
	84	Ⅶ	X	3	甕	ハケメ	ヘラナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	85	Ⅷ	Y	2	甕	ナデ	横ナデ	灰褐	灰褐	○	○	○					
	86	Ⅷ	Y	3	甕	横ナデ	横ナデ	灰褐	灰褐	○	○	○					
25	87	Ⅵ	X	2	甕	ハケメ	ハケメ	明黄褐	明黄褐	○	○	○				○	
	88	Ⅵ	W	2	甕	工具ナデ	ヘラナデ	橙	橙	○	○						スス付着
	89	Ⅵ	W	2	甕	ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						
	90	Ⅵ	W	2	甕	ハケメ	ハケメ後工具ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	○	○						
	91	Ⅷ	W	3	甕	ハケメ	ハケメ	にぶい赤褐	橙	○	○						
	92	Ⅵ	W	2	甕	工具ナデ	工具ナデ	橙	橙	○	○						
	93	Ⅶ	X	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○						
	94	Ⅵ	W	2	甕	ナデ	ナデ	橙	黄橙	○	○	○					
	95	Ⅵ	W	2	甕	工具ナデ	工具ナデ	橙	橙	○	○						
26	96	Ⅵ	Y	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○					スス付着
	97	Ⅵ	Y	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○			○			スス付着
	98	Ⅵ	W	2	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						スス付着
	99	Ⅵ	W	2	甕	工具ナデ	工具ナデ	浅黄橙	黄橙	○	○	○					スス付着
	100	Ⅶ	W	2	甕	ハケメ後ナデ	ハケメ	橙	明赤褐	○	○			○			スス付着
	101	Ⅶ	X	2	甕	ヘラナデ指頭圧痕	工具ナデ	橙	黄橙	○	○						スス付着
	102	Ⅵ	W	2	甕	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						スス付着
	103	Ⅵ	W	2	甕	ケズリ	ケズリ	橙	橙	○	○						スス付着
	104	Ⅵ	W	2	甕	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙	橙	○	○						
	105	Ⅵ	W	3	甕	工具ナデ	工具ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○					
	106	Ⅷ	W	3	甕	ハケメ	ケズリ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○					
27	107	Ⅵ	W	2	甕	ケズリナデ	ヘラナデ	にぶい黄褐	黒褐	○	○						
28	108	Ⅵ	Y	3	甕	ハケメ	ハケメ	にぶい橙	橙	○	○						
	109	Ⅵ	X	7	甕	ケズリ	工具ナデ	黒褐	橙	○	○						
	110	Ⅷ	X	8	甕	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙	橙	○	○						一個体
	111	Ⅵ	W	2	甕	工具ナデ	ナデ	浅黄	にぶい橙	○	○						
	112	Ⅵ	X	2	甕	ハケメ後ナデ	ハケメナデ	橙	橙	○	○						
	113	Ⅳ	W	2	甕	工具ナデハケメ指頭圧痕	工具ナデハケメ	橙	にぶい橙	○	○	○					スス付着
	114	Ⅳ	W	3	甕	工具ナデハケメ	工具ナデハケメ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					ススコゲ付着
	115	Ⅵ	W	1	甕	ナデ	ナデ	淡橙	灰白	○	○						スス付着
29	116	Ⅵ	W	2	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					スス付着
	117	Ⅷ	W	3	甕	ハケメ	ハケメナデ	浅黄	橙	○	○						
	118	Ⅵ	W	2	甕	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	○	○						
	119	Ⅵ	W	2	甕	工具ナデ指頭圧痕	ハケメ後ナデ指頭圧痕	明赤褐	赤褐	○	○	○					
	120	Ⅵ	W	2	甕	工具ナデ	ナデ	暗灰黄	橙	○	○	○					スス付着

表８　弥生・古墳時代出土遺物観察表（３）

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	調整		色調		胎　土							備考
						外	内	外	内	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他	
29	121	Ⅵ	W	3	甕	ハケメ指頭圧痕	ハケメ指頭圧痕	にぶい橙	橙	○	○	○					スス付着
	122	Ⅵ	W	2	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					スス付着
	123	Ⅵ	W	2	甕	ハケメ後ナデ	ハケメ後ヘラナデ	橙	明赤褐	○	○			○			
	124	Ⅵ	W	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	125	Ⅷ	X	4	甕	ヘラケズリ	ハケメ後ナデ	にぶい橙	明黄褐	○	○						
30	126	Ⅵ	Y	3	甕	ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい橙	浅黄	○	○						
	127	Ⅵ	Y	3	甕	ナデ	ナデ指頭圧痕	にぶい褐	にぶい褐	○	○						スス付着
	128	Ⅶ	X	3	甕	ナデ	ナデ	黒褐	にぶい褐	○	○						
	129	Ⅵ	W	2	甕	ハケメ後ナデ	ハケメナデ	にぶい橙	橙	○	○	○					一個体
	130	Ⅵ	Y	2	甕	ハケメ	ハケメ	橙	橙	○	○						スス付着
	131	Ⅵ	Y	3	甕	ナデ	ハケメ	にぶい橙	黄橙	○	○	○					スス付着
	132	Ⅵ	W	2	甕	ハケメ	ハケメ指頭圧痕	明黄褐	橙	○	○						
	133	Ⅵ	W	2	甕	ハケメ後ナデ	ハケメ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						一個体
	134	Ⅷ	Y	2	甕	ハケメ	工具ナデ指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○					
31	135	Ⅶ	W	2	甕	ハケメ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○						スス付着
	136	Ⅵ	W	2	甕	ハケメナデ	ナデミガキ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○			スス付着
	137	Ⅵ	W	3	甕	ケズリ	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○						スス付着
	138	Ⅵ	W	3	甕	ハケメ	ケズリ後ナデ	灰褐	橙	○	○						ススコゲ付着
	139	Ⅶ	X	3	甕	ハケメ	ハケメ	橙	黄橙	○	○						スス付着
	140	Ⅵ	W	2	甕	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○						
	141	Ⅵ	W	3	甕	ハケメナデ	ハケメ	にぶい橙	橙	○	○						スス付着
	142	Ⅶ	X	2	甕	ハケメ	ハケメ	にぶい橙	浅黄	○	○						
	143	Ⅵ	X	3	甕	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	144	Ⅶ	X	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	145	Ⅵ	Y	3	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	淡橙	橙	○	○						スス付着
	146	Ⅵ	W	2	甕	ナデ後指頭圧痕	指頭圧痕後ナデ	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○					スス付着
32	147	Ⅵ	W	2	甕	ナデ	ナデ	灰褐	にぶい褐	○	○	○					スス付着
	148	Ⅵ	W	3	甕	ナデ後指頭圧痕	工具ナデ	にぶい橙	橙	○	○						
	149	Ⅶ	X	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○						
	150	Ⅶ	X	3	甕	ハケメ後ナデ	ナデ	黒褐	橙	○	○						
	151	Ⅶ	X	3	甕	指頭圧痕	ナデ	にぶい橙	橙	○	○						
	152	Ⅶ	X	4	甕	ナデ後指頭圧痕	ナデ後指頭圧痕	にぶい橙	橙	○	○						
	153	Ⅵ	W	2	甕	ケズリ	ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	154	Ⅵ	X	3	甕	ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○	○					
	155	Ⅵ	a	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○						
	156	Ⅶ	X	1	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○					
	157	Ⅷ	Y	2	甕	工具ナデ	工具ナデ	暗灰黄	浅黄	○	○						
	158	Ⅵ	Y	2	甕	ナデ	ナデ	黒褐	橙	○	○						
	159	Ⅵ	X	3	甕	ヘラケズリナデ	ナデ	にぶい褐	浅黄	○	○	○		○			
	160	Ⅵ	Y	2	甕	ヘラケズリ	ヘラケズリ	灰褐	橙	○	○						
	161	Ⅵ	X	2	甕	ヘラナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰白	○	○						
	162	Ⅵ	X	3	甕	工具ナデ	工具ナデ	灰褐	にぶい橙	○	○						
	163	Ⅶ	X	3	甕	工具ナデ	工具ナデ	浅黄橙	灰黄	○	○						
	164	Ⅶ	X	3	甕	ナデ	ナデ	黒褐	赤褐	○	○						
	165	Ⅶ	X	4	甕	ハケメ	ハケメ	橙	橙	○	○	○					
	166	Ⅵ	a	2	甕	工具ナデ	工具ナデ	橙	橙	○	○	○					
	167	Ⅵ	a	3	甕	ナデケズリ	ナデケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	168	Ⅵ	X	1	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○						
	169	Ⅶ	X	2	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	灰褐	にぶい橙	○	○						
	170	Ⅶ	X	3	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	黒褐	浅黄橙	○	○						
	171	Ⅵ	X	2	甕	横ナデ	ナデ	浅黄橙	明黄褐	○	○						
	172	Ⅵ	Y	3	甕	ハケメ	ハケメ	灰褐	にぶい褐	○	○			○			
	173	Ⅷ	Y	2	甕	工具ナデ	工具ナデ	黒褐	灰黄褐	○	○	○					
33	174	Ⅵ	W	2	甕	ハケメ	ハケメ	にぶい橙	にぶい褐	○	○						
	175	Ⅵ	W	2	壺	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○					
	176	Ⅵ	X	3	甕	ヘラナデケズリ	ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○						
	177	Ⅷ	Y	3	壺	ミガキ	ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	○	○						スス付着
	178	Ⅵ	X	2	壺	ナデ後ハケメ	ナデ指頭圧痕	橙	橙	○	○	○					
	179	Ⅶ	X	3	甕	工具ナデ	工具ナデ	黒褐	にぶい黄褐	○	○						
34	180	Ⅵ	Y	3	甕	ハケメ	ハケメ	黒褐	浅黄	○	○						
	181	Ⅵ	W	2	甕	ハケメ	ハケメ	灰白	灰白	○	○						スス付着
	182	Ⅲ	W	3	甕	ハケメ	ハケメ	浅黄	にぶい橙	○	○	○					

表９　弥生・古墳時代出土遺物観察表（４）

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	調整		色調		胎　土							備考
						外	内	外	内	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他	
34	183	Ⅵ	W	2	甕	ナデ指頭圧痕	ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○					
	184	Ⅵ	X	2	甕	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	暗赤褐	橙	○	○	○					
	185	Ⅶ	X	3	甕	ケズリ	ケズリ	にぶい黄褐	橙	○	○						
	186	Ⅶ	X	4	甕	ナデ	ケズリ	にぶい橙	橙	○	○			○			コゲ付着
	187	Ⅵ	X	2	甕	ミガキハケメ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○					
	188	Ⅵ	W	2	壺	ハクリ	ハケメ	灰褐	橙	○	○						
	189	Ⅶ	X	1	甕	ハケメ	ハケメ	黒	にぶい黄橙	○	○						
	190	Ⅶ	X	2	甕	ハケメ	ケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○						
35	191	Ⅵ	Y	3	甕	ハケメ	ハケメ	黒褐	橙	○	○	○					スス付着
	192	Ⅵ	W	2	甕	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○					
	193	Ⅵ	W	2	甕	ケズリナデ	ナデ	黒褐	明赤褐	○	○	○					スス付着
	194	Ⅵ	W	2	甕	ハケメ	ナデ	黒褐	明赤褐	○	○						
	195	Ⅵ	Y	3	甕	ヘラケズリ ヘラナデ	ヘラナデ	黒褐	淡黄	○	○	○					
	196	Ⅵ	Y	4	甕	ヘラケズリナデ	ヘラナデ	灰黄褐	淡黄	○	○	○					
	197	Ⅶ	X	1	甕	工具ナデ	ナデ	黒褐	にぶい赤褐	○	○						
	198	Ⅶ	X	3	甕	ケズリ	ケズリ	黒褐	にぶい赤褐	○	○						
	199	Ⅵ	W	2	甕	ケズリ後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○						
	200	Ⅷ	Y	2	甕	ナデ	ナデ指頭圧痕	にぶい橙	橙	○	○						
	201	Ⅶ	X	3	甕	ケズリ指頭圧痕	ケズリ指頭圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	202	Ⅶ	X	3	甕	ハケメ	ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
36	203	－	W	2	甕	ハケメ後ナデ	ハケメ	黒褐	橙	○	○						
	204	Ⅵ	X	3	甕	ヘラナデ	ヘラナデ指頭圧痕	にぶい赤褐	橙	○	○	○					スス付着
	205	Ⅵ	Y	2	甕	工具ナデ	工具ナデ	黒褐	にぶい黄橙	○	○	○		○			
	206	Ⅵ	Y	2	甕	ナデ	ハケメ	にぶい褐	明黄褐	○	○	○					
	207	Ⅵ	Y	2	甕	ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい褐	にぶい褐	○	○						
	208	－	X	3	甕	ナデ	ナデ	明赤褐	橙	○	○	○					
	209	Ⅵ	X	3	甕	ナデ	ナデ	灰褐	明赤褐	○	○						
	210	Ⅵ	－	－	甕	ナデ	ナデ	灰褐	明赤褐	○	○						
	211	Ⅶ	Y	3	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	黒	にぶい黄橙	○	○						
	212	Ⅵ	X	3	甕	ミガキ	ヘラナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○						
	213	Ⅵ	X	2	甕	ハケメ	横ナデ	にぶい黄橙	淡橙	○	○						
	214	Ⅶ	X	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						スス付着
	215	Ⅶ	X	3	甕	ハケメ	ハケメ後ナデ	灰褐	浅黄橙	○	○						
	216	Ⅵ	X	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○	○					
	217	Ⅵ	W	3	甕	ナデヘラケズリ 指頭圧痕	ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○					
	218	Ⅵ	X	2	甕	ヘラナデ	ハケメ	橙	明黄褐	○	○	○					
	219	Ⅵ	a	3	甕	ハケメ	ハケメ	橙	橙	○	○						
	220	Ⅶ	X	3	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	浅黄橙	橙	○	○	○					
	221	Ⅵ	Y	2	甕	ヘラケズリ	ヘラケズリ	浅黄	にぶい橙	○	○						
	222	Ⅵ	X	3	甕	工具ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○						
	223	Ⅵ	X	1	甕	ミガキナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○					
	224	Ⅵ	X	3	甕	工具ナデ	ナデ	灰褐	にぶい褐	○	○						スス付着
	225	Ⅵ	W	3	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	○	○						
37	226	Ⅵ	W	2	甕	工具ナデ	工具ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○						
	227	Ⅵ	Y	2	甕	ハケメ	ケズリ	黒褐	灰黄褐	○	○						
	228	Ⅶ	X	3	甕	ナデ	ナデ	黒褐	灰黄褐	○	○						
	229	Ⅶ	X	1	甕	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○						
	230	Ⅶ	X	3	甕	工具ナデ	工具ナデ	黒褐	明褐	○	○						
	231	－	Y	2	甕	工具ナデ	工具ナデ	黒褐	にぶい黄褐	○	○	○					
	232	Ⅶ	X	3	甕	工具ナデ	工具ナデ	黒褐	浅黄	○	○	○					
	233	Ⅵ	Y	2	甕	工具ナデ	工具ナデ	灰褐	にぶい橙	○	○						
	234	Ⅵ	Y	2	甕	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙	褐灰	○	○						
	235	Ⅵ	X	3	甕	ナデ	ナデ	灰褐	にぶい赤褐	○	○						スス付着
	236	Ⅵ	X	3	甕	ナデ	ナデ	灰褐	橙	○	○						スス付着
	237	Ⅶ	a	3	甕	ナデ	ナデ	橙	にぶ赤褐	○	○			○			
	238	Ⅵ	X	3	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	黒褐	にぶい赤褐	○	○						
	239	Ⅵ	Y	2	甕	ナデ	ナデ	黒	にぶい橙	○	○	○					
	240	Ⅶ	X	3	甕	ナデ	ナデ	褐灰	にぶい黄橙	○	○						スス付着
	241	Ⅷ	Y	2	甕	ナデ指跡	ナデ指跡	橙	にぶい黄橙	○	○						
	242	Ⅶ	X	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	橙	○	○						
	243	Ⅶ	X	3	甕	ナデ	工具ナデ	黒褐	橙	○	○						
	244	Ⅶ	Y	2	甕	ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○						スス付着

表10　弥生・古墳時代出土遺物観察表（5）

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	調整		色調		胎　土							備考
						外	内	外	内	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他	
37	245	Ⅳ	X	1	甕	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	○	○						
	246	―	Y	2	甕	ナデ	ナデ指頭圧痕	黒褐	にぶい橙	○	○						
	247	Ⅵ	X	2	甕	ハケメ指頭痕	ハケメ	にぶい橙	明赤褐	○	○	○					
	248	Ⅵ	X	3	甕	ハケメ	ハケメ	にぶい橙	明赤褐	○	○	○					
	249	Ⅶ	W	2	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○						
	250	―	X	3	甕	ナデ	ナデ指ナデ	褐	灰黄褐	○	○						スス付着
	251	Ⅶ	X	3	甕	ナデ	ナデ	褐	にぶい黄褐	○	○						スス付着
	252	Ⅶ	X	3	甕	ハケメ	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	○	○	○					
	253	Ⅵ	Y	2	甕	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	褐	にぶい橙	○	○						
38	254	Ⅶ	X	3	甕	ケズリナデ	ナデ	黒褐	にぶい褐	○	○						
	255	Ⅶ	X	4	甕	ハケメ後ナデ	ナデ	褐	橙	○	○						
	256	Ⅵ	Y	3	甕	ケズリナデ	ハケメ	褐	橙	○	○						
	257	Ⅵ	X	3	甕	ハケメ	ナデ	橙	橙	○	○						
	258	Ⅵ	W	2	甕	ナデ	ケズリ後ナデ	にぶい橙	橙	○	○						スス付着
	259	Ⅵ	Y	3	甕	ハケメ	ヘラナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○						スス付着
	260	Ⅵ	Y	3	甕	ハケメ	ハケメナデ	褐	にぶい黄褐	○	○	○					スス付着
	261	Ⅵ	Y	3	甕	ハケメ	ハケメ	褐	にぶい橙	○	○	○		○			スス付着
	262	Ⅵ	X	9	甕	ナデ	ナデ	明赤褐	橙	○	○		○			金雲母	
	263	Ⅶ	X	3	甕	ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	○	○						
	264	Ⅵ	W	2	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						スス付着
	265	Ⅵ	Y	2	甕	ハケメ	ハケメ指頭圧痕	灰黄褐	黒褐	○	○	○					
	266	Ⅵ	Y	2	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○						
39	267	X	V	2	甕	工具ナデ	ナデ	浅黄橙	黄橙	○	○						
	268	Ⅵ	Y	2	甕	ハケメ	指ナデ	黒褐	明褐	○	○						
	269	Ⅵ	Y	3	甕	ハケメ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	270	Ⅶ	X	1	甕	ナデ	ナデ	黒褐	にぶい褐	○	○						
	271	Ⅵ	Y	2	甕	ナデ	指頭圧痕ナデ	黒褐	にぶい橙	○	○						スス付着
	272	Ⅶ	X	1	甕	ハケメ後ナデ	指頭圧痕後ナデ	暗褐	明褐	○	○						
	273	Ⅵ	a	4	甕	工具ナデ	ハケメナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○					スス付着
	274	Ⅵ	X	2	甕	ハケメ	ハケメ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					スス付着
	275	―	X	4	甕	ハケメ	ヘラケズリ 指頭圧痕	黒褐	にぶい橙	○	○						スス付着
	276	Ⅵ	X	5	甕	ナデ	ナデ指頭圧痕	橙	橙	○	○						
40	277	Ⅵ	W	2	甕	ハケメ	ハケメ	橙	橙	○	○						
	278	Ⅵ	W	2	甕	工具ナデ	ナデ指頭圧痕	黒褐	にぶい橙	○	○						
	279	Ⅵ	W	2	甕	工具ナデ	ナデハケメ	にぶい褐	にぶい橙	○	○						
	280	Ⅵ	W	3･4	甕	ケズリナデ	ケズリナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○					
	281	Ⅵ	X	3	甕	ケズリ	ハケメナデ	黒褐	明黄褐	○	○						
	282	Ⅵ	X	1	甕	ハケメ	ハケメ	灰褐	灰褐	○	○						
	283	Ⅵ	W	2	甕	工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄	明黄褐	○	○						
	284	Ⅵ	W	2	甕	ケズリ	ケズリ	にぶい褐	橙	○	○						ススコゲ付着
	285	Ⅵ	W	3	甕	ハケメ	ハケメ	にぶい褐	橙	○	○						
	286	Ⅵ	W	2	甕	ハケメ	工具ナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○		○				
	287	Ⅵ	W	2	甕	ハケメ	工具ナデ	にぶい橙	浅黄橙	○	○						
	288	Ⅵ	W	2	甕	ハケメ	ナデ後ハケメ	黒褐	黒褐	○	○	○					
	289	Ⅷ	W	3	甕	ナデ	ナデ	黒褐	黒褐	○	○	○					
41	290	Ⅷ	W	4	甕	ナデ	ナデ	にぶい褐	褐	○	○						
	291	Ⅷ	W	4	甕	工具ナデ	工具ナデ	橙	にぶい橙	○	○						
	292	Ⅵ	W	2	甕	ヘラケズリ	ナデケズリ	黒褐	橙	○	○			○			
	293	Ⅵ	W	2	甕	ハケメ	ハケメ	橙	浅黄橙	○	○						
	294	Ⅵ	W	2	甕	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○						
	295	Ⅵ	W	4	甕	工具ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					
	296	Ⅵ	W	4	甕	ハケメ	ハケメ	褐	明褐	○	○						
	297	Ⅵ	W	4	甕	ハケメ	工具ナデ	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○						
	298	Ⅵ	W	7	甕	ケズリ	ケズリ	明赤褐	にぶい橙	○	○	○					
	299	Ⅷ	Y	3	甕	ヘラケズリ	ヘラケズリ 指頭圧痕	灰褐	灰褐	○	○						
	300	Ⅷ	Y	3	甕	ハケメ	ナデ	灰褐	灰褐	○	○						
	301	Ⅵ	X	2	甕	工具ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○	○	○					
	302	Ⅵ	X	2	甕	ケズリ	ケズリ	明褐	黄褐	○	○			○			
42	303	Ⅵ	X	2	甕	ナデ	ナデ	灰褐	黒褐	○	○						
	304	Ⅵ	X	2	甕	ヘラケズリ指ナデ	ナデ	暗赤褐	暗赤褐	○	○						
	305	Ⅵ	X	2	甕	ハケメ	ナデ	明黄橙	黒褐	○	○						
	306	Ⅵ	X	1	甕	指頭圧痕	指頭圧痕	橙	橙	○	○						

表11　弥生・古墳時代出土遺物観察表（6）

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	調整		色調		胎　土							備考
						外	内	外	内	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他	
42	307	Ⅵ	X	1	甕	ハケメ	ハケメ	にぶい赤褐	黒褐	○	○						
	308	Ⅵ	X	2	甕	ハケメ	ハケメ	赤褐	褐	○	○						
	309	Ⅷ	Y	3	甕	ナデ	ナデ	灰褐	灰褐	○	○						
	310	Ⅵ	Y	2	甕	ケズリ	指頭圧痕	褐	褐	○	○			○			
	311	Ⅵ	X	1	甕	ナデ	ナデ	赤褐	褐	○	○						
	312	Ⅵ	W	8	甕	ケズリ	ケズリ	橙	橙	○	○	○					輪積み
	313	Ⅵ	W	9	甕	ハケメ	ハケメ	橙	橙	○	○	○					
	314	Ⅵ	W	2	甕	ナデ	ナデ	橙	黒褐	○	○	○					
	315	Ⅵ	W	2	甕	ハケメ	ナデ	橙	黒褐	○	○	○					
	316	Ⅵ	X	2	甕	ヘラケズリ	工具ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○					○	
	317	Ⅹ	Y	4	甕	ミガキ	工具ナデ	赤褐	褐	○	○	○					
	318	Ⅶ	X	1	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	明褐	明黄褐	○	○						
	319	Ⅵ	W	2	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○			
	320	Ⅵ	X	2	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	明赤褐	赤褐	○	○						
	321	Ⅵ	X	1	甕	ヘラナデ後指頭圧痕	ヘラナデ	黄橙	橙	○	○						
	322	Ⅵ	W	2	甕	指頭圧痕	ナデ	にぶい黄橙	黒褐	○	○						
	323	Ⅵ	X	2	甕	ヘラナデ	ナデ	明赤褐	黄橙	○	○						
	324	Ⅵ	W	2	甕	ナデ指頭圧痕	ナデ	橙	橙	○	○						
43	325	Ⅵ	Y	3	甕	ハケメ	工具ナデ	橙	にぶい橙	○	○	○					
	326	Ⅶ	X	1	甕	ハケメ	ナデ	にぶい橙	黒	○	○	○				○	
	327	Ⅵ	X	2	甕	ナデ	ナデ指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○					
	328	Ⅶ	X	1	甕	工具ナデ	ハケメ	赤褐	暗赤褐	○	○			○			
	329	Ⅶ	X	1	甕	ハケメ指頭圧痕	ナデ	明褐灰	明褐灰	○	○	○					
	330	Ⅵ	X	2	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	橙	橙	○	○			○			
	331	Ⅶ	X	3	甕	工具ナデ指ナデ	指頭圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	332	Ⅵ	W	2	甕	ヘラケズリ	指頭圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					
	333	Ⅵ	W	2	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	褐灰	○	○			○			
	334	Ⅵ	W	2	甕	指頭圧痕	指頭圧痕	明褐灰	明褐灰	○	○			○			
	335	Ⅵ	X	3	甕	ヘラナデ指ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	336	Ⅶ	Y	2	甕	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○						
	337	Ⅵ	W	2	甕	ヘラケズリ	ヘラケズリ	褐	褐	○	○						
	338	Ⅵ	W	2	甕	ハケメ後ナデ	ナデ	褐	明赤褐	○	○						
	339	Ⅵ	W	2･3	甕	ヘラナデ	工具ナデ	灰褐	灰褐	○	○						
	340	Ⅵ	X	2	甕	ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙	黄橙	○	○	○					
	341	Ⅵ	W	2	甕	指頭圧痕ハケメ	指頭圧痕ハケメ	赤褐	赤褐	○	○	○		○			
	342	Ⅵ	W	3	甕	指頭圧痕ケズリ	指頭圧痕ケズリ	赤褐	赤褐	○	○	○		○			
	343	Ⅵ	W	2	甕	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○					
	344	Ⅵ	Y	3	甕	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○						
	345	Ⅵ	W	2	甕	ハケメ	指頭圧痕	橙	橙	○	○	○					
	346	Ⅵ	X	2	甕	指ナデ貝殻条痕	ナデ	橙	明赤褐	○	○						
	347	Ⅵ	X	2	甕	ヘラナデ指ナデ	ハケメ	にぶい橙	褐	○	○						
	348	Ⅶ	X	1	甕	ヘラナデ指頭圧痕	ヘラナデ指圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○					○	
	349	Ⅵ	X	2	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	浅黄	黒	○	○					○	
	350	Ⅵ	W	2	甕	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○						
	351	Ⅵ	X	2	甕	ナデ	ナデ	灰褐	灰褐	○	○						
	352	Ⅵ	X	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○			
	353	Ⅶ	X	3	甕	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					
	354	Ⅵ	X	3	甕	工具ナデ	指ナデ	灰褐	灰褐	○	○	○					
	355	Ⅷ	Y	3	甕	ヘラケズリ指頭圧痕	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					
	356	Ⅵ	X	1	甕	ヘラナデ	ナデ	にぶい橙	黒	○	○					○	形状がいびつ
	357	Ⅵ	X	2	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					
	358	Ⅵ	X	3	甕	ナデ	ナデ	褐	褐	○	○						
	359	Ⅵ	W	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○			
	360	Ⅵ	X	2	甕	指頭圧痕	指頭圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○			
	361	Ⅵ	X	2	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○	○						
	362	Ⅵ	X	3	甕	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○			○			
	363	Ⅶ	X	2	甕	ハケメ	ナデ	浅黄橙	黄橙	○	○						
44	364	Ⅵ	X	3	甕	工具ナデ	ナデ	淡橙	淡橙	○	○						
	365	Ⅵ	Y	3	甕	ヘラケズリ	指頭圧痕	橙	橙	○	○			○			
	366	Ⅵ	X	3	甕	ヘラナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○			○			
	367	Ⅵ	W	2	甕	指ナデ	指ナデ	橙	橙	○	○			○			
	368	Ⅵ	W	3	甕	ナデ	ナデ	明褐灰	明褐灰	○	○			○			

表12　弥生・古墳時代出土遺物観察表（7）

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	調整		色調		胎土							備考
						外	内	外	内	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他	
44	369	—	Y	2	甕	ナデ	指ナデ	橙	橙	○	○						
	370	Ⅵ	W	3	甕	ケズリ	指頭圧痕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○					
	371	Ⅷ	Y	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○					
	372	Ⅵ	X	2	甕	ハケメ	ナデ	橙	橙	○	○	○		○			
	373	Ⅷ	X	2	甕	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	黒褐	橙	○	○						
	374	Ⅵ	X	2	甕	ナデ	ハケメ	にぶい橙	橙	○	○	○		○			
	375	Ⅵ	Y	3	甕	ハケメ	ハケメ	にぶい橙	橙	○	○						
	376	Ⅵ	X	2	甕	ヘラナデ	指ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○			
	377	Ⅶ	X	3	甕	ヘラナデ指頭圧痕	ナデ	にぶい橙	黒褐	○	○						
	378	Ⅶ	X	3	甕	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	379	Ⅶ	X	3	甕	ヘラナデ	ナデ	橙	橙	○	○						
	380	Ⅶ	X	1	甕	指ナデ後ヘラ	ヘラケズリ	にぶい橙	暗赤灰	○	○						
	381	Ⅶ	Y	3	甕	ハケメ後ナデ	ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						
	382	Ⅵ	X	3	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					
	383	Ⅵ	X	2	甕	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○		○			
	384	Ⅷ	X	3	甕	指頭圧痕	ナデ	暗赤褐	暗赤褐	○	○	○		○			
	385	Ⅵ	X	1	甕	指頭圧痕	指頭圧痕	明褐	明褐	○	○			○			
	386	Ⅶ	X	2	甕	工具ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					
	387	Ⅶ	X	3	甕	ハケメ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○			
	388	Ⅶ	X	1	甕	ケズリ	工具ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○						
	389	Ⅶ	Y	3	甕	ハケメ	ハケメ	暗赤褐	暗赤褐	○	○	○					
	390	Ⅵ	X	3	甕	ハケメ	ハケメ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	391	Ⅳ	Y	4	甑	ハケメ指頭圧痕	ハケメ指頭圧痕	橙	橙	○	○						スス付着
45	392	Ⅵ	W	2	壺	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○		○			金雲母	
	393	Ⅶ	W	3	壺	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○						
	394	Ⅵ	W	2	壺	ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○						
	395	Ⅷ	Y	3	壺	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙	灰褐	○	○	○		○			
	396	Ⅷ	Y	3	壺	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○						
	397	Ⅵ	Y	4	壺	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○	○					
	398	Ⅵ	W	2	壺	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	399	Ⅷ	Y	3	壺	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○	○						
	400	—	—	—	壺	ナデ	ナデ	褐	褐	○	○						
	401	Ⅷ	Y	3	壺	ハケメ	ナデ指頭圧痕	にぶい橙	橙	○	○						
	402	Ⅷ	Y	3	壺	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○					
46	403	—	—	—	壺	ハケメ	ハケメ	にぶい橙	橙	○	○						一個体
	404	Ⅵ	W	2	壺	ハケメ後ナデ	ハケメ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					一個体
	405	Ⅵ	W	2	壺	ハケメケズリ	ケズリ後ナデ	明赤褐	橙	○	○						一個体
	406	Ⅵ	W	2	壺	ケズリ後ハケメ	ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○			一個体
47	407	Ⅵ	Y	18	壺	ハケメ	ハケメ	橙	橙	○	○						
	408	—	—	—	壺	ハケメ	ハケメ	にぶい橙	橙	○	○	○					
48	409	Ⅵ	X	3	壺	ハケメ	ハケメ	橙	橙	○	○			○			
	410	Ⅵ	X	2	壺	ハケメ	ハケメ	橙	橙	○	○	○					
	411	Ⅵ	W	2	壺	ハケメ	ハケメナデ	明黄褐	明黄褐	○	○						
	412	Ⅵ	X	3	壺	ハケメ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○						
	413	Ⅵ	W	3	壺	ナデ	指頭圧痕	にぶい橙	橙	○	○	○					
	414	Ⅶ	X	1	壺	ハケメ後ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○						
	415	Ⅵ	X	2	壺	ハケメ	ハケメ	明褐灰	明褐灰	○	○	○					
	416	Ⅵ	W	2	壺	ハケメ後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						
	417	Ⅵ	Y	3	壺	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○	○						
	418	Ⅵ	X	1	壺	ハケメ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○	○						
	419	Ⅶ	X	3	壺	ケズリ	ナデ指ナデ	黒褐	にぶい橙	○	○						
	420	Ⅵ	Y	2	壺	ケズリ後ハケメ	ナデ	黒褐	黒褐	○	○	○					
	421	Ⅵ	W	2	壺	ハケメ	ハケメ	橙	橙	○	○						
	422	Ⅵ	W	2	壺	工具ナデ	ハケメ	灰褐	橙	○	○						
	423	Ⅵ	X	1	壺	ハケメ	ナデ	橙	橙	○	○			○			
	424	Ⅵ	W	2	壺	ハケメ	ケズリ	明褐灰	明褐灰	○	○						
	425	Ⅷ	Y	3	壺	ケズリ後ハケメ	指頭圧痕	浅黄橙	浅黄橙	○	○						
	426	Ⅵ	W	2	壺	ケズリ	ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					
49	427	Ⅵ	W	2	壺	ハケメ	工具ナデ指頭圧痕	褐	褐	○	○						
	428	Ⅵ	W	2	壺	ハケメ	ナデ	淡橙	淡橙	○	○	○					
	429	Ⅵ	X	1	壺	ハケメ	ハケメナデ	橙	にぶい黄橙	○	○						
	430	Ⅷ	X	2	壺	ハケメ	ハケメ後ナデ	黒褐	橙	○	○						

表13　弥生・古墳時代出土遺物観察表（8）

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	調整		色調		胎　土							備考
						外	内	外	内	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他	
49	431	Ⅵ	W	2	壺	ハケメナデ	ハケメナデ	褐	褐	○	○						
	432	Ⅵ	W	2	壺	ナデ	ヘラナデ	橙	橙	○	○						
	433	Ⅵ	X	8	壺	ナデ	ハケメ	褐	褐	○	○	○					
	434	Ⅵ	X	8	壺	ミガキ	指頭圧痕	灰黄	橙	○	○						
50	435	Ⅵ	Y	2	壺	ハケメ	ケズリ後ナデ	にぶい橙	橙	○	○						
	436	Ⅵ	W	2	壺	ハケメ	ハケメ指頭圧痕	褐	にぶい橙	○	○						
	437	X	Z	4	壺	ハケメ	指頭圧痕ナデ	浅黄橙	橙	○	○						
	438	X	X	4	壺	ミガキナデ	ナデ	橙	橙	○	○						
	439	－	－	－	壺	ミガキ摩耗	ハケメ	橙	橙	○	○						朱
	440	Ⅵ	W	2	壺	ケズリナデ	ナデ	橙	黒褐	○	○						
	441	－	－	－	壺	ハケメ	ハケメ	にぶい橙	橙	○	○						
51	442	－	－	－	壺	ハケメ	ハケメ	にぶい橙	橙	○	○						
52	443	Ⅶ	X	1	壺	ミガキ	ナデ指頭圧痕	褐	橙	○	○	○		○			
	444	Ⅶ	Y	2	壺	工具ナデ	ケズリ	橙	黒褐	○	○						
	445	Ⅷ	V	1	壺	工具ナデ条痕	ヘラナデ	灰黄	暗灰黄	○	○	○					
53	446	Ⅵ	X	9	壺	ナデ	ナデ	浅黄	にぶい黄橙	○	○						
	447	Ⅵ	X	1	壺	ハケメ	ハケメ	橙	にぶい黄橙	○	○						
	448	Ⅶ	X	2	壺	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○			
	449	Ⅵ	X	3	壺	ハケメ	ハケメ	黒褐	橙	○	○						
	450	Ⅵ	X	7	壺	工具ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	○	○	○					
	451	Ⅶ	V	3	壺	工具ナデ	ナデ	橙	明黄褐	○	○						
	452	Ⅶ	W	2	壺	ハケメ後ナデ	ナデ	暗灰黄	黄灰	○	○						
	453	Ⅵ	Y	2	壺	横ナデ	ハケメ	にぶい橙	褐灰	○	○						
	454	Ⅵ	a	3	壺	ミガキ後ナデ	ナデ	黒褐	にぶい黄橙	○	○						
	455	Ⅵ	X	2	壺	ハケメ	ナデ指頭圧痕	橙	橙	○	○						
	456	Ⅶ	Y	2	壺	ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○						
	457	Ⅵ	W	2	壺	ハケメ	ハケメ	褐	褐	○	○						
54	458	Ⅶ	X	4	壺	ハケメ	ハケメ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	459	Ⅵ	X	1	壺	ハケメ後ナデ	ハケメ	にぶい黄	黒褐	○	○	○					
	460	Ⅵ	X	2	壺	ハケメ	ナデ	褐	褐	○	○						
	461	Ⅵ	W	3･4	壺	ハケメ	工具ナデハケメ	橙	にぶい黄	○	○	○					
	462	Ⅶ	Y	2	壺	ケズリ	ケズリ	橙	灰オリーブ	○	○						
	463	Ⅵ	W	6	壺	ナデ	ハケメ	にぶい黄	黒褐	○	○						
	464	Ⅵ	W	2	壺	ハケメ	ハケメ	橙	褐灰	○	○						
	465	Ⅵ	W	2	壺	ケズリ	ケズリ	赤褐	赤褐	○	○						
	466	Ⅵ	X	1	壺	ハケメ	ハケメ	橙	灰白	○	○	○		○			
55	467	Ⅵ	a	3	壺	ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○					
	468	Ⅵ	X	3	壺	ナデ	ヘラナデ	橙	にぶい橙	○	○						
	469	Ⅵ	X	2	壺	ハケメ後ナデ	ハケメ	にぶい黄橙	灰白	○	○	○					
	470	Ⅵ	X	2	壺	ハケメ	ハケメ後ナデ	橙	黄橙	○	○						
	471	Ⅵ	W	2	壺	工具ナデ	ナデ	橙	橙	○	○						
	472	Ⅵ	W	2	壺	ハケメ	ハケメ	明褐	灰褐	○	○						
	473	Ⅵ	X	1	壺	ハケメ	ハケメ	橙	橙	○	○						
	474	Ⅵ	W	2	壺	ケズリ後ハケメ	ナデ	橙	橙	○	○	○					
	475	Ⅵ	W	2	壺	ハケメケズリ	工具ナデ	橙	橙	○	○	○					
	476	－	X	3	壺	ハケメ	指頭圧痕	赤褐	橙	○	○						
	477	Ⅵ	W	2	壺	ケズリ	ケズリ	褐	黒褐	○	○	○					
	478	Ⅵ	X	1	壺	ナデ	ハクリ	浅黄橙	浅黄橙	○	○						
56	479	Ⅵ	W	2	鉢	ケズリ	ケズリ	橙	橙	○	○			○			一個体
	480	Ⅵ	W	2	鉢	ナデ	工具ナデ	橙	にぶい橙	○	○						一個体
	481	Ⅵ	W	2	鉢	ナデ	ヘラナデ	橙	黒褐	○	○						一個体
	482	Ⅵ	W	2	鉢	ナデ指頭圧痕	ナデ	にぶい橙	橙	○	○	○		○			一個体
	483	X	X	4	鉢	ケズリ	ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	○	○						一個体
	484	Ⅶ	X	1	鉢	指頭圧痕	指頭圧痕	橙	橙	○	○						一個体
57	485	Ⅶ	X	1	鉢	工具ナデ	ハケメ	黒褐	にぶい赤褐	○	○						
	486	Ⅵ	Y	1	鉢	ケズリ後ナデ	ハケメナデ指圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	487	Ⅵ	Y	3	鉢	ハケメ	ハケメ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	488	X	X	4	鉢	ヘラナデ指ナデ	指頭圧痕	明赤褐	明赤褐	○	○	○					
	489	X	X	4	鉢	ミガキ	ナデミガキ	赤褐	にぶい橙	○	○						
	490	Ⅶ	X	1	鉢	ハケメ	ケズリ	明赤褐	明赤褐	○	○	○					
	491	Ⅵ	X	2	鉢	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	○	○						
	492	Ⅵ	X	2	鉢	ハケメ	ナデ	橙	橙	○	○						

表14　弥生・古墳時代出土遺物観察表（9）

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	調整		色調		胎土							備考
						外	内	外	内	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他	
57	493	Ⅶ	X	3	鉢	ナデ	ナデ	褐	橙	○	○						
	494	Ⅶ	X	3	鉢	ナデ	ナデ	にぶい橙	灰褐	○	○						
	495	Ⅵ	X	4	鉢	ケズリ	ケズリ	橙	にぶい赤褐	○	○	○					
	496	Ⅵ	X	1	鉢	ナデ	ハケメ	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○						
	497	Ⅶ	X	3	鉢	ヘラナデ指頭圧痕	ナデ	にぶい黄橙	灰褐	○	○	○					
58	498	Ⅵ	X	1	鉢	ヘラナデ	ヘラナデ	明黄褐	明黄褐	○	○	○					
	499	Ⅵ	X	7	鉢	ヘラナデ指ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						
	500	Ⅵ	Y	3	鉢	ナデ後指頭圧痕	ナデ後指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						
	501	Ⅶ	X	3	鉢	ハケメナデ	ナデ	暗赤褐	暗赤褐	○	○	○					
	502	Ⅷ	Y	3	鉢	ナデ	ナデ	明黄褐	明黄褐	○	○	○					
	503	Ⅵ	Y	3	鉢	工具ナデ	工具ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○						
	504	Ⅵ	Y	3	鉢	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○						
	505	Ⅵ	Y	3	鉢	工具ナデ	ナデ	黒褐	黒褐	○	○	○					
	506	Ⅵ	Y	2	鉢	ヘラケズリ	ヘラケズリ	橙	橙	○	○						
	507	Ⅵ	X	1	鉢	ナデ	ナデ指頭圧痕	にぶい褐	にぶい褐	○	○						
	508	Ⅵ	X	2	鉢	ナデ	ナデ	浅黄	にぶい黄橙	○	○						
	509	Ⅵ	Y	3	鉢	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○						
	510	Ⅵ	W	2	鉢	ナデ	ナデ	明黄褐	橙	○	○						
	511	Ⅵ	X	3	鉢	指頭圧痕	ナデ	灰黄褐	にぶい褐	○	○						
	512	Ⅵ	W	2	鉢	ナデ	工具ナデ	黄褐	橙	○	○	○					
	513	Ⅶ	Y	1	鉢	ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄	○	○						
	514	Ⅷ	Y	2	鉢	ナデ	工具ナデ	にぶい橙	黄褐	○	○						
	515	Ⅲ	Y	3	鉢	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					
	516	Ⅵ	X	1	鉢	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄	○	○	○					
	517	Ⅶ	X	3	鉢	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○						
	518	Ⅵ	W	2	鉢	工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄褐	褐	○	○						
	519	Ⅵ	W	3	鉢	ケズリ	指頭圧痕	橙	橙	○	○	○					
	520	Ⅵ	X	2	鉢	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい橙	橙	○	○						
	521	Ⅶ	W	3	鉢	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄	○	○						
	522	Ⅵ	W	2	鉢	工具ナデ	工具ナデ	橙	橙	○	○	○					
	523	Ⅵ	X	1	鉢	ナデ	指頭圧痕	にぶい黄	黄褐	○	○						
	524	Ⅶ	Y	2	鉢	ケズリ	ケズリ	灰白	灰白	○	○						
	525	Ⅵ	W	2	鉢	指ナデ	ナデ爪跡	暗赤褐	にぶい赤褐	○	○	○					
	526	Ⅵ	Y	3	高坏	ミガキ	ミガキ	赤褐	赤褐	○	○						
	527	Ⅵ	W	2	高坏	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	浅黄橙	○	○						
	528	Ⅵ	a b	5	高坏	ミガキ	ミガキ	褐灰	にぶい橙	○	○						
	529	Ⅵ	Y	2	高坏	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐	○	○						
59	530	Ⅵ	Y	3	高坏	ナデミガキ	ナデミガキ	明赤褐	明赤褐	○	○						
	531	－	－	－	高坏	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	○	○		○				
	532	Ⅶ	X	1	高坏	ヘラナデ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						
	533	Ⅵ	X	2	高坏	ナデ	指頭圧痕後ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○						
	534	Ⅵ	X	2	高坏	ミガキ	ナデ	明赤褐	赤褐	○	○						
	535	Ⅵ	X	3	高坏	ハケメ	ハケメ	明赤褐	赤褐	○	○						
	536	Ⅲ	Y	3	高坏	ハケメ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	537	Ⅵ	X	3	高坏	ナデ	ナデ	灰黄	灰黄	○	○						
	538	Ⅵ	X	3	高坏	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
	539	Ⅵ	W	3	高坏	ハケメ後ナデ爪跡	ナデ	橙	橙	○	○						
	540	Ⅵ	X	2	高坏	ナデ	ナデ指頭圧痕	浅黄橙	にぶい橙	○	○						
	541	Ⅵ	X	2	高坏	ハケメ	ナデ指頭圧痕	橙	橙	○	○						
	542	Ⅵ	X	3	高坏	ヘラナデ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○						
	543	Ⅵ	Y	3	高坏	ミガキ	ミガキ	橙	黄橙	○	○						
	544	Ⅵ	X	3	高坏	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○						
	545	Ⅶ	X	3	高坏	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○						
	546	Ⅶ	X	2	高坏	ナデ	ナデ	にぶい橙	黄橙	○	○						
	547	Ⅶ	X	3	高坏	横ナデ	横ナデ	橙	にぶい橙	○	○						
	548	Ⅵ	X	2	高坏	ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○						
	549	Ⅶ	Z	3	高坏	ナデ	ナデ	明黄褐	明黄褐	○	○						
	550	Ⅵ	Y	2	高坏	ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	○	○						
	551	Ⅵ	Y	2	坩	ケズリ	ヘラケズリ	橙	橙	○	○						
	552	Ⅵ	Y	3	坩	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○						
	553	X	W	6	坩	ナデ	ハケメ後ナデ	橙	橙	○	○						
	554	Ⅵ	X	7	坩	ハケメ後ナデ	ナデ	にぶい褐	黒褐	○	○						

表15　弥生・古墳時代出土遺物観察表（10）

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	調整		色調		胎土							備考
						外	内	外	内	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	その他	
59	555	Ⅵ	X	2	坩	ナデ	ナデ	橙	黒褐	○	○						
	556	Ⅶ	a	4	坩	ハケメ後ナデ	ナデ	明黄褐	黒	○	○						
	557	Ⅵ	X	2	坩	ナデ	ナデ	灰黄褐	褐灰	○	○						
	558	Ⅵ	X	2	坩	工具ナデ	指ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○						
	559	Ⅶ	X	2	坩	ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						
	560	Ⅵ	X	2	坩	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						
60	561	Ⅵ	X	3	小型土器	指頭圧痕	指ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○			一個体
	562	Ⅵ	W	2	小型土器	指頭圧痕	指ナデ	明褐	橙	○	○			○			一個体
	563	Ⅵ	W	3	小型土器	指頭圧痕	指ナデ工具ナデ	明褐	橙	○	○	○					一個体
	564	Ⅵ	X	4	小型土器	指頭圧痕ナデ	指頭圧痕	明黄褐	橙	○	○						一個体
	565	Ⅵ	W	2	小型土器	ミガキ	工具ナデ	にぶい黄橙	褐灰	○	○			○			一個体
	566	Ⅵ	Y	6	小型土器	指頭圧痕工具ナデ	工具ナデ	橙	橙	○	○	○					一個体
	567	Ⅵ	X	2	小型土器	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						スス付着
	568	Ⅵ	Z	5	蓋	工具ナデ	工具ナデ	橙	橙	○	○						スス付着
	569	Ⅵ	Y	3	蓋	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○					スス付着
	570	Ⅵ	W	2	蓋	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○						スス付着
	571	Ⅵ	b	5	蓋	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		○			スス付着
	572	―	X	3	蓋	ナデ	ナデ	褐灰	褐灰	○	○						スス付着
	573	Ⅵ	a	4	蓋	ミガキ後ナデ	ナデ	灰褐	褐	○	○						スス付着
	574	Ⅵ	b	5	蓋	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○						スス付着
	575	Ⅶ	X	4	蓋	指頭圧痕	ナデ	橙	橙	○	○						スス付着
	576	Ⅶ	X	2	蓋	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					スス付着
	577	Ⅷ	Y	2	蓋	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						スス付着
	578	Ⅳa	X	1	蓋	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					スス付着
	579	Ⅵ	X	3	蓋	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○						スス付着
	580	Ⅵ	X	3	蓋	ヘラケズリナデ	ナデ	にぶい褐	浅黄	○	○						スス付着
60	581	Ⅵ	X	4	円盤型土製品（メンコ）	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○						
	582	Ⅵ	X	3	円盤型土製品（メンコ）	ハケメ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○						
60	583	Ⅵ	X	5	土師甕	ナデ	ナデ	淡橙	担当	○	○						
	584	Ⅵ	X	1	土師甕	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						
60	585	Ⅵ	X	2	須恵器坩	ナデ	ナデ	灰	灰								
	586	Ⅵ	W	3	須恵器坩	ナデ	ナデ	灰	灰								

包含層遺物（石器，石製品）

挿図番号	レイアウト番号	層位	出土区		器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
61	587	Ⅷ	X	2	磨製石鏃	頁岩	4.8	1.9	0.3	3	完形
	588	X	X	3	石包丁	頁岩	7.0	4.5	0.7	36	
	589	X	X	5	石核	黒曜石（上牛鼻）	3.0	2.4	1.9	13	
	590	Ⅷ	X	4	磨製石斧	頁岩	11.3	5.4	2.5	220	
62	591	X	X	6	敲石	砂岩	15.3	3.3	2.5	196	完形
	592	Ⅷ	X	7	凹石	砂岩	11.6	7.0	5.2	566	
	593	X	X	7	凹石	砂岩	8.8	7.5	5.5	516	
	594	Ⅷ	W	6	砥石	頁岩	13.7	6.1	3.6	435	
	595	Ⅷ	W	6	砥石	頁岩	6.4	3.5	1.4	62	
	596	Ⅷ	W	9	砥石	頁岩	7.5	4.1	1.4	83	
	597	Ⅷ	V	5	砥石	頁岩	11.3	5.8	1.7	216	
63	598	Ⅷ	W	6	砥石	頁岩	20.9	10.9	3.6	1,000	
	599	Ⅷ	X	7	砥石	頁岩	22.3	10.2	8.3	2,200	完形
	600	Ⅷ	X	7	砥石	頁岩	30.2	17.8	8.5	6,100	
64	601	Ⅷ	Y	7	砥石	頁岩	9.4	8.1	4.0	558	
	602	Ⅷ	V	9	砥石	頁岩	9.4	6.4	5.5	330	
	603	Ⅷ	X	8	砥石	頁岩	16.5	4.1	2.1	223	
	604	Ⅷ	U	3	砥石	頁岩	6.1	11.1	2.4	184	
65	605	Ⅷ	X	5	軽石製品	軽石	9.0	3.2	1.5	14	完形
	606	Ⅷ	X	5	軽石製品	軽石	6.1	4.1	1.4	13	完形
	607	Ⅷ	W	2	軽石製品	軽石	3.8	2.8	1.4	1	完形
	608	Ⅷ	W	6	軽石製品	軽石	6.1	6.1	2.7	18	
	609	Ⅷ	X	9	軽石製品	軽石	8.9	6.1	6.1	49	
	610	Ⅷ	X	3	軽石製品	軽石	7.9	7.6	4.8	54	
	611	Ⅷ	X	3	軽石製品	軽石	7.9	6.6	3.6	54	
	612	Ⅷ	W	9	軽石製品	軽石	13.3	8.9	5.7	148	完形
66	613	Ⅷ	W	9	軽石製品	軽石	9.2	6.4	4.2	63	
	614	Ⅷ	W	9	軽石製品	軽石	18.2	9.2	5.6	170	
	615	Ⅷ	X	7	軽石製品	軽石	14.5	10.2	10.3	1,100	

第５章　古代の調査

第１節　調査の概要

古代の調査対象となる層位は，Ⅴ・Ⅵ層である。

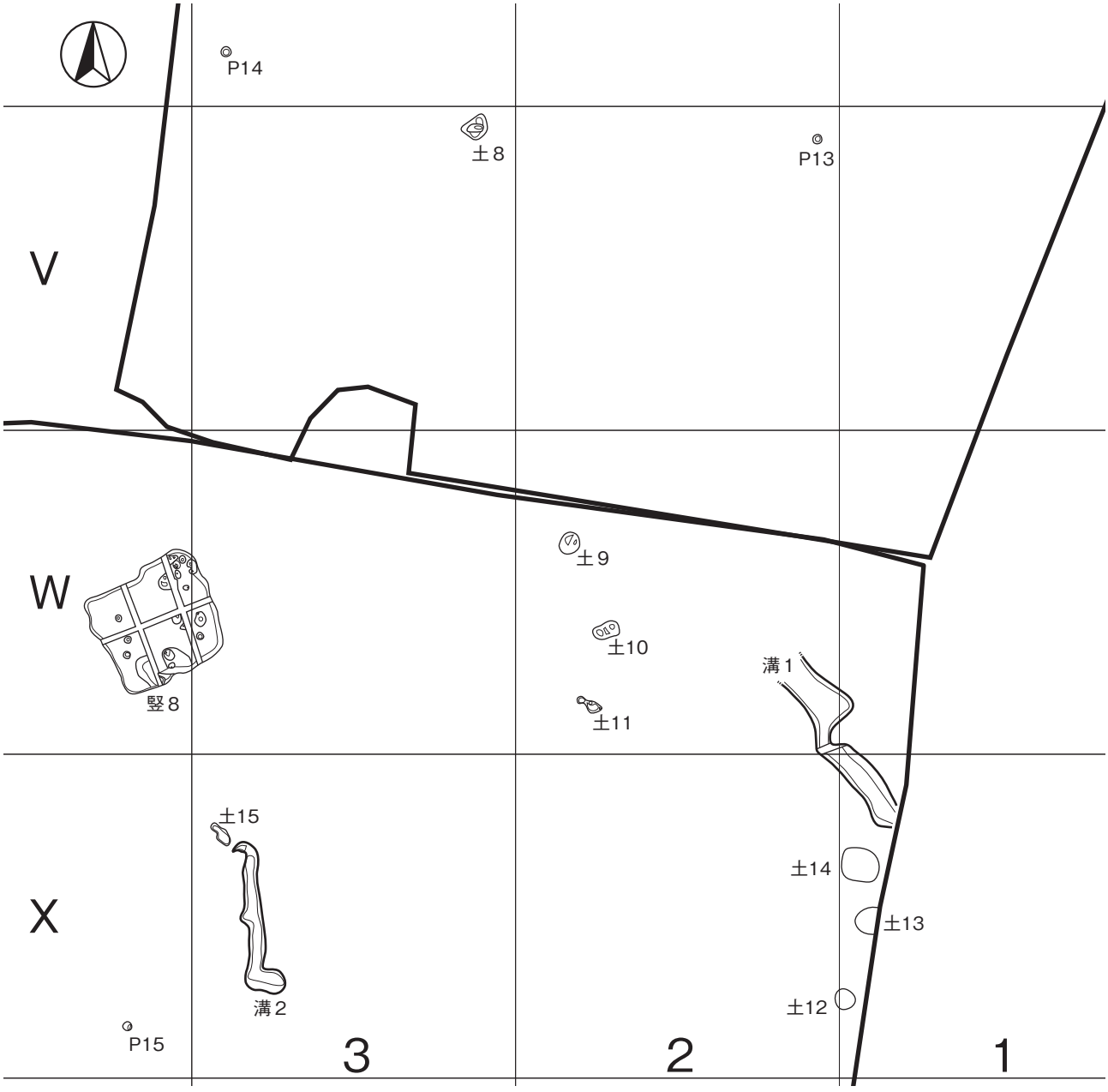
しかし，弥生・古墳時代と同様に層位が安定していないため，表土直下層から検出された遺物も多く，それらは一括して取り上げることにした。

遺構検出は，Ⅴｂ～Ⅵ層で行った。その結果，該期の遺構として竪穴住居跡３軒，溝状遺構２基，大型土坑１基，土坑16基，ピット11基を検出した。（第67～69図）

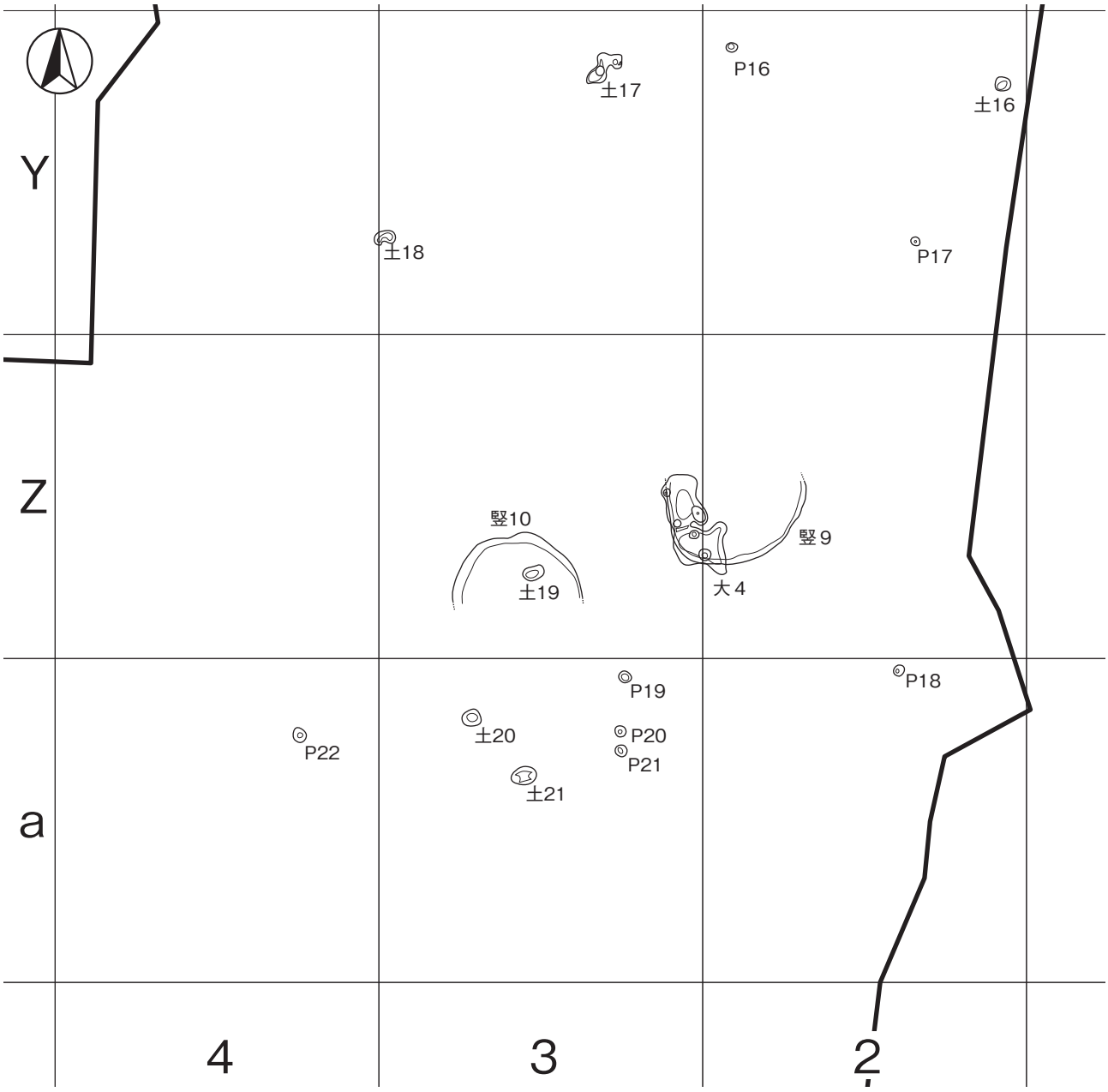
遺物総数は約2,000点で，遺構内出土遺物は全て番号を付けて取り上げを実施し，それ以外は一括して取り上げた。

遺物は，ほとんどが土師器の小破片と須恵器の小破片であった。

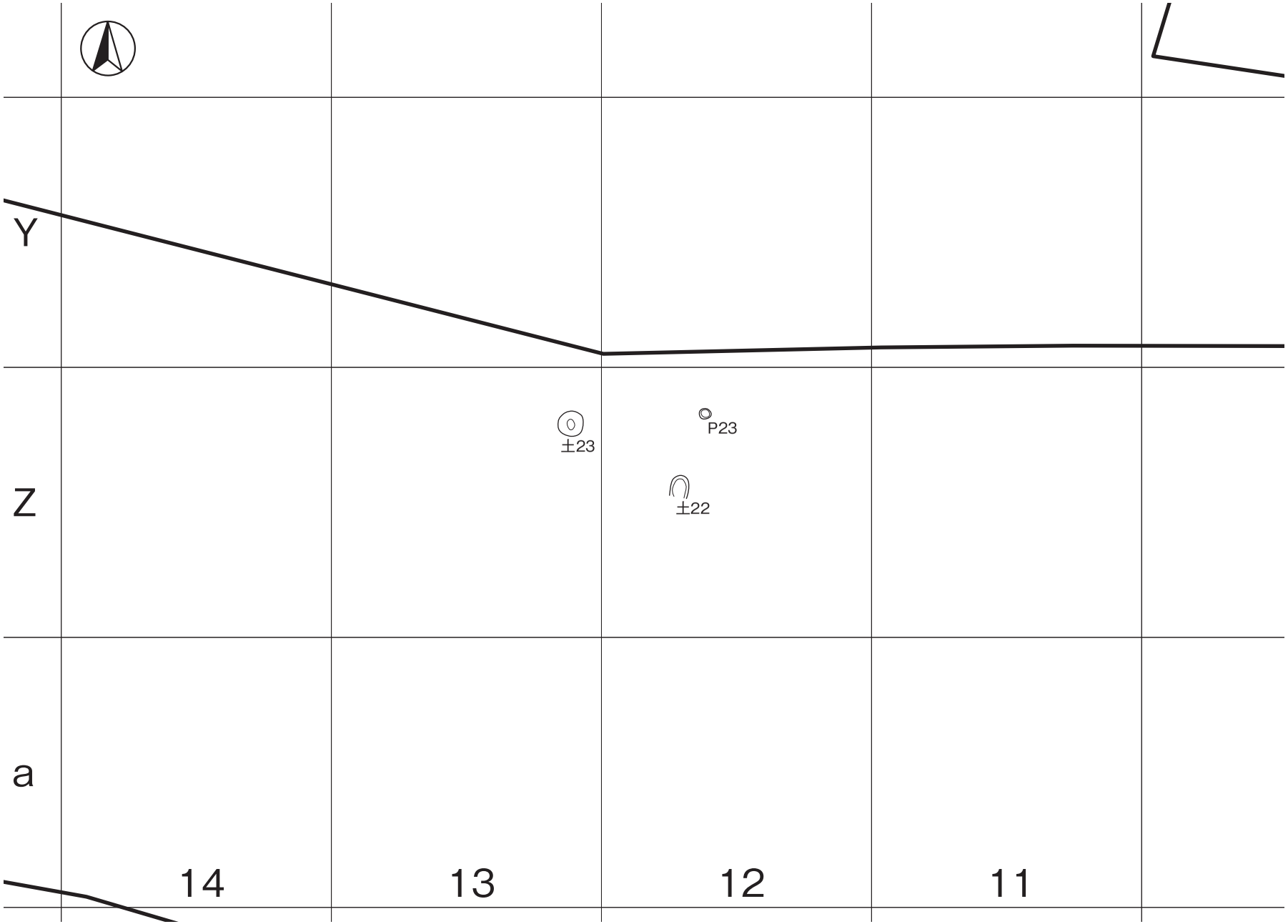
遺物の分類は，土師器，須恵器，土製品，陶磁器に分けた。さらに土師器については，皿，坏，埦，蓋，内黒土器，赤色土器，土師甕に，須恵器については埦，蓋，甕，壺に分けた。



第67図　古代検出遺構配置図（1）



第68図　古代検出遺構配置図（2）



第69図　古代検出遺構配置図（3）

第２節　遺構

該期の遺構は，Ｕ～ａ－１～４区とＺ－12・13区の範囲に集中して検出した。

層序で示したとおり，Ｖ～Ｙ－５～10区はⅢ～Ⅴ層が削平されていたため，該期の遺構は検出されなかった。

１　竪穴住居跡

(1) ８号竪穴住居跡（第70図）

Ｗ－３・４区のⅥ層上面で検出した。

最終的なプランの長径は約3.8m，短径は約3.3m の隅丸長方形を呈する。検出面から張り床とみられる硬化面までの深さは約20cm である。

南方部に落ち込みが２か所あり，多数検出された柱穴と思われるピットは，確定が困難なため全て掲載することにした。

また遺構に伴う該期の遺物は，土師器の小片が少量出土した。

(2) ９号竪穴住居跡（第71図）

Ｚ－２・３区のＶｂ層上面で，南側半分を検出した。

最終的なプランである残存部の長径は約4.3m で，半円形を呈する。検出面から張り床とみられる硬化面までの深さは約43cm である。

埋土はＶａ層の黄褐色砂層で，遺構内にピットは検出されなかった。また硬化面の下位であるⅥ層から４号大型土坑を検出した。

遺構に伴う該期の遺物は，土師器と思われる小片が少量出土したが形式不明のため掲載しなかった。

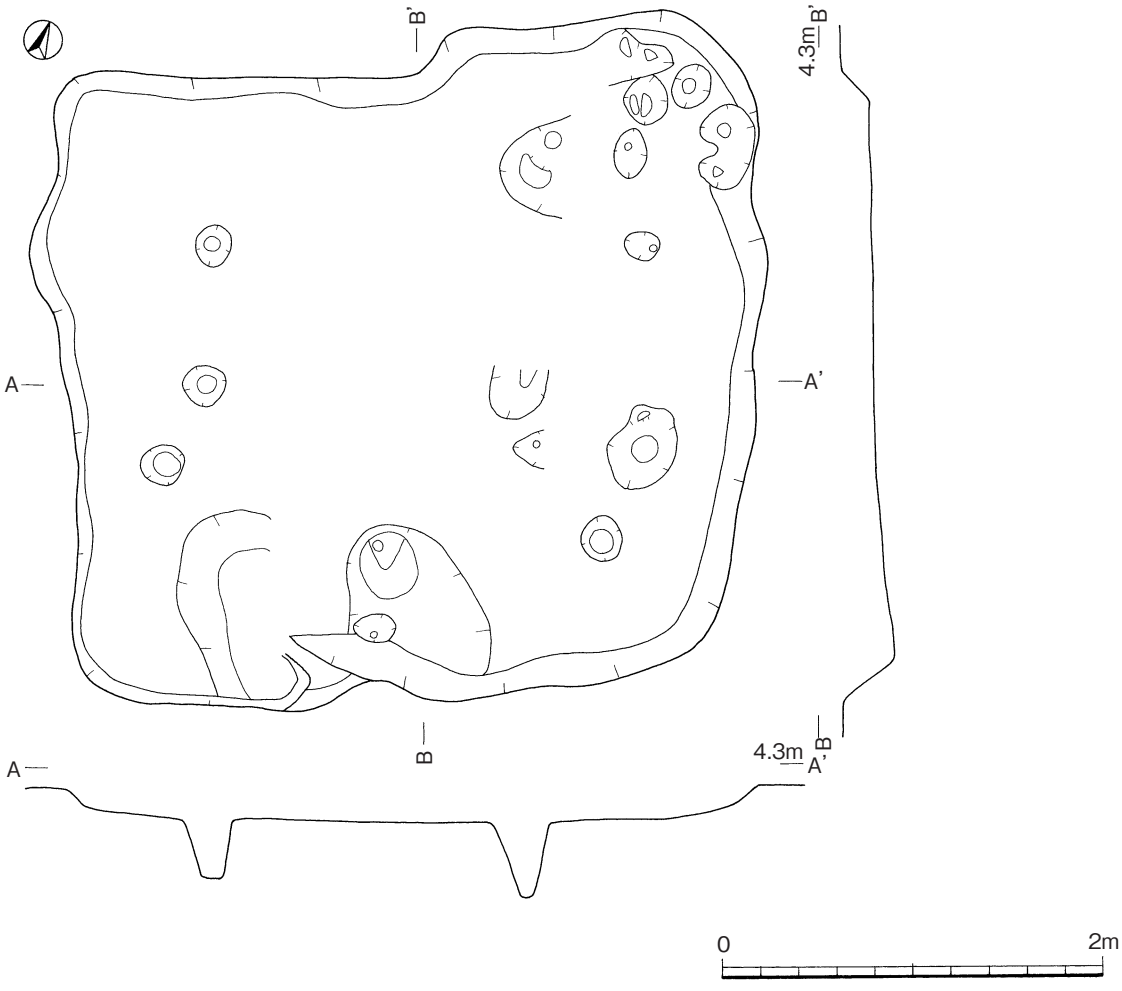
(3) 10号竪穴住居跡（第71図）

Ｚ－３区のＶｂ層上面で，北側半分を検出した。

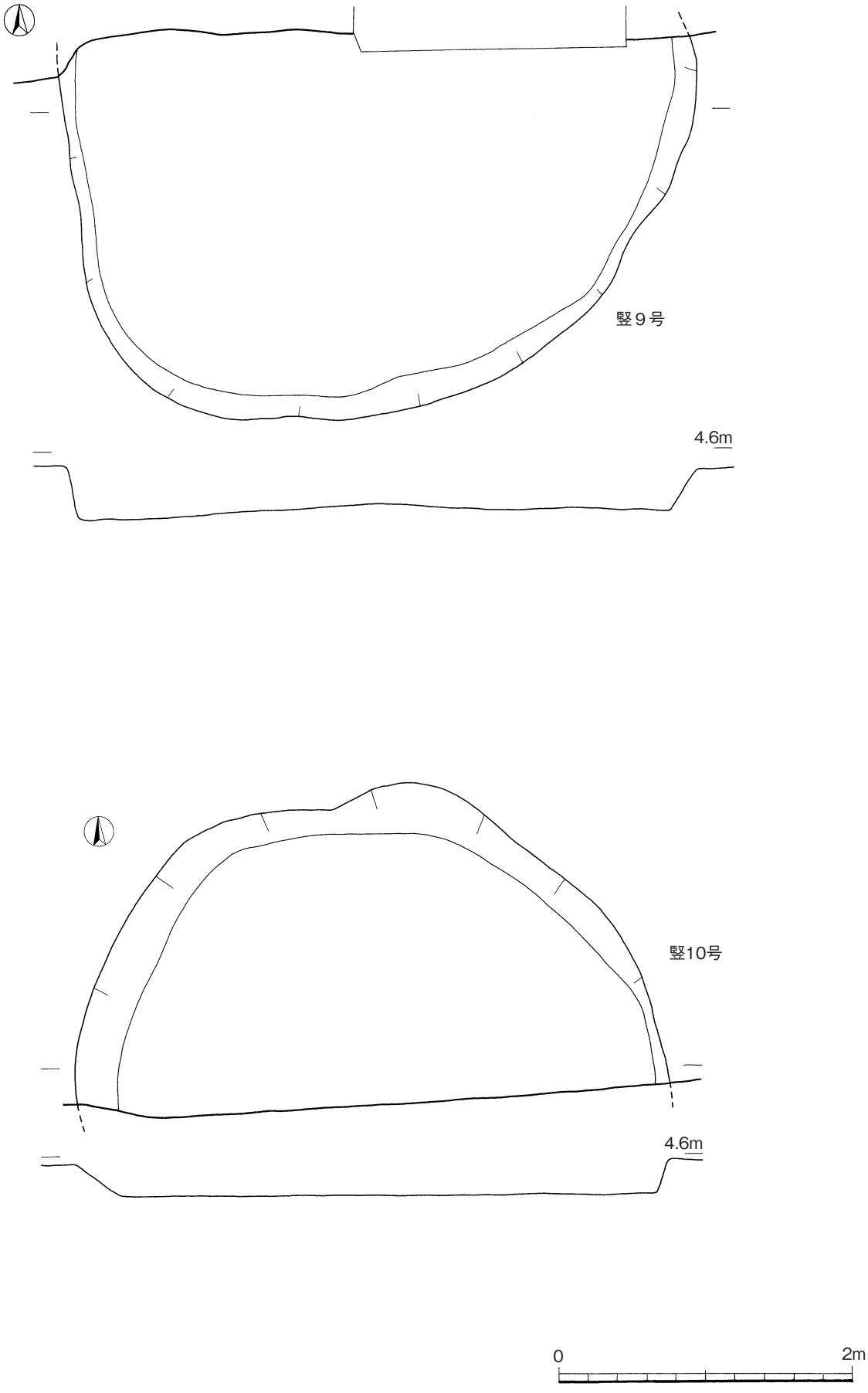
最終的なプランである残存部の長径は約４m で，半円形を呈する。検出面から張り床とみられる硬化面までの深さは約23cm である。

埋土はＶａ層の黄褐色砂層で，遺構内にピットは検出しなかった。また硬化面の下位であるⅥ層から19号土坑が検出された。遺構に伴う該期の遺物は，土師器の小片が少量出土した。

９号と10号は，形状や埋土状況が似ていることから，同時期の遺構と考えられる。



第70図　８号竪穴住居跡実測図



第71図　９・10号竪穴住居跡実測図

２　溝状遺構

(1) １号溝状遺構（第72図）

Ｗ・Ｘ－１・２区のⅥ層上面で検出した。

最終的なプランは，全長が約5.7m，最小幅約50cm，最大幅約1.4m あり，北西方向にのびている。調査区範囲外により検出できなかったが，東南方向へまだ続くものと考えられる。深さは約20cm 程度で浅く，埋土はⅣｂ層の茶褐色砂質土である。

遺構に伴う遺物は多数出土したが，形式的に見て中・近世のものが多く，該期のものとは異なるため，流れ込みによるものと判断し，ここでは掲載しなかった。

(2) ２号溝状遺構（第72図）

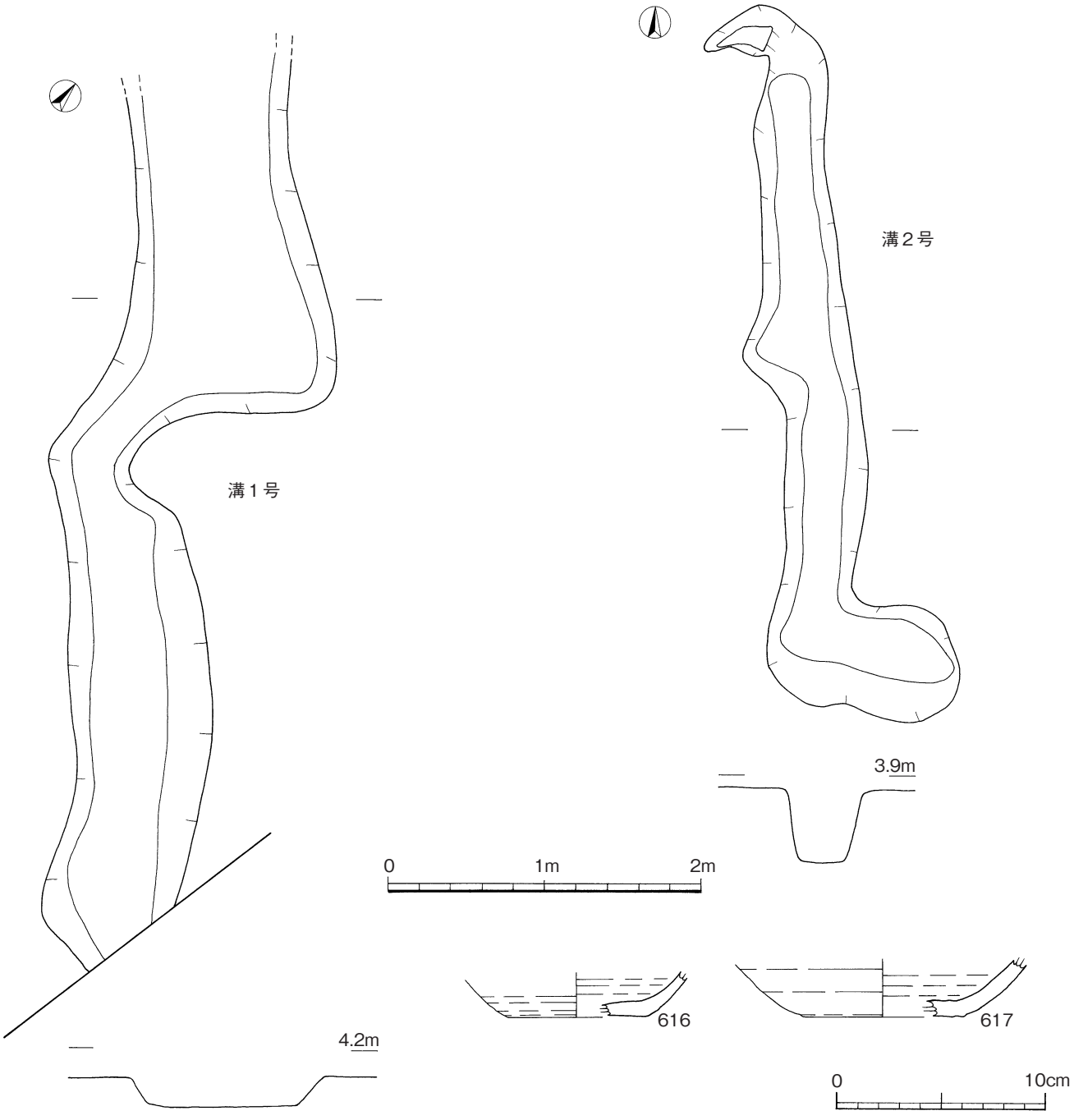
Ｘ－３区のⅥ層上面で検出した。

最終的なプランは，全長約4.5m，最小幅約50cm，最大幅約1.2m あり，南北方向にのびている。深さは約45cm 程度で，埋土はⅥ層の黒褐色砂質土とⅣｂ層の茶褐色砂質土が混在したものである。

遺構に伴う遺物は多数出土したが，該期のものと判断されるのは土師器の５点のみで，その内２点を掲載した。

２号溝状遺構内出土遺物（第72図616・617）

616・617は，古代土師器坏の底部付近である。



第72図　１・２号溝状遺構及び出土遺物実測図

3　大型土坑

(1) 4号大型土坑（第73図）

9号竪穴住居跡の硬化面下位であるZ－2・3区のⅥ層上面から検出した。

二つの土坑が隣接した状態で検出したが，切り合いがはっきりしないことと，埋土が同じⅥ層黒褐色砂質土とⅣb層茶褐色砂質土の混土であることから同一のものと判断し，大型土坑とした。長径が約3.4m，短径が約1.75mで，検出面からの最深部は約40cmである。

遺構に伴う遺物は，土師器埦の小片が8点出土し，その内1点を掲載した。

4号大型土坑内出土遺物（第73図618）

618は，古代土師器埦の胴部である。外面は摩耗が激しく，内面はミガキ調整により丁寧に仕上げている。

4　土坑

該期の土坑は，16基検出した。遺構に伴う該期の遺物は，13号土坑と20号土坑に1点ずつしか出土しなかった。

(1) 8号土坑（第74図）

8号土坑はV－3区のⅥ層上面で検出した。長径約80cm，短径約60cmで，掘り込みの深さが約30cmの隅丸台形を呈する。

(2) 9～11号土坑（第74図）

9～11号土坑はW－2区Ⅵ層上面で検出した。

9号は長径約70cm，短径約60cmで，掘り込みの深さが約35cmで楕円形を呈する。

10号は長径約80cm，短径約50cmで，掘り込みが2か所あり，最深部は約30cmの楕円形を呈する。

11号は長径約80cm，短径約35cmで，掘り込みが2か所あり，西側は5cmと浅いが東側は約40cmと深い。

(3) 12～15号土坑（第74・75図）

12～15号土坑はX－1～3区Ⅵ層上面で検出した。

12号は径が約60cmの円形を呈し，掘り込みの深さは約40cmである。

13号は西側半分を検出した。残存部の長径が約80cmで，掘り込みの深さは約30cmである。

14号は長径約1.2m，短径約1.1mで掘り込みの深さは約35cmで，中央部に厚さ約10cmの焼土跡を有する。

15号土坑は2号溝状遺構の北側で検出した。長径約85cm，短径約40cmで，掘り込みの深さは約15cmである。

13号土坑内出土遺物（第74図619）

619は，赤色土器埦の底部である。内側に朱塗りが施されているが，摩耗が激しいため残存が少ない。

(4) 16～18号土坑（第75図）

16～18号土坑はY－2～4区Ⅵ層上面で検出した。

16号は径が約50cmの円形を呈し，掘り込みの深さは約38cmである。

17号土坑は長径約1.35m，短径約50cmで掘り込みが2か所あり，最深部は約53cmである。

18号土坑は長径が約65cm，短径約40cmの楕円形を呈する。

(5) 19号土坑（第75図）

19号土坑はZ－3区Ⅵ層上面から10号竪穴住居跡の硬化面下位で検出した。長径約70cm，短径約42cm，掘り込み面の深さが約45cmの楕円形を呈する。

(6) 20・21号土坑（第75図）

20・21号土坑はa－3区Ⅵ層上面で検出した。

20号は径約60cmで，掘り込みの深さは約10cmで円形を呈する。

21号は長径約85cm，短径約55cmで，掘り込みの深さは約40cmである。

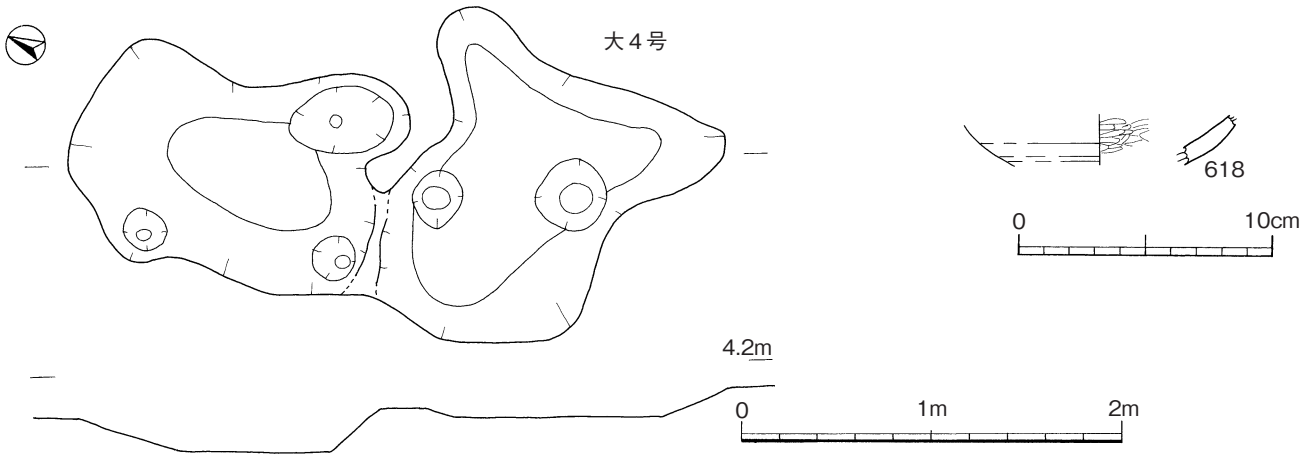
20号土坑内出土遺物（第75図620）

620は，古代赤色土器埦の底部である。内側に朱塗りが施されている。

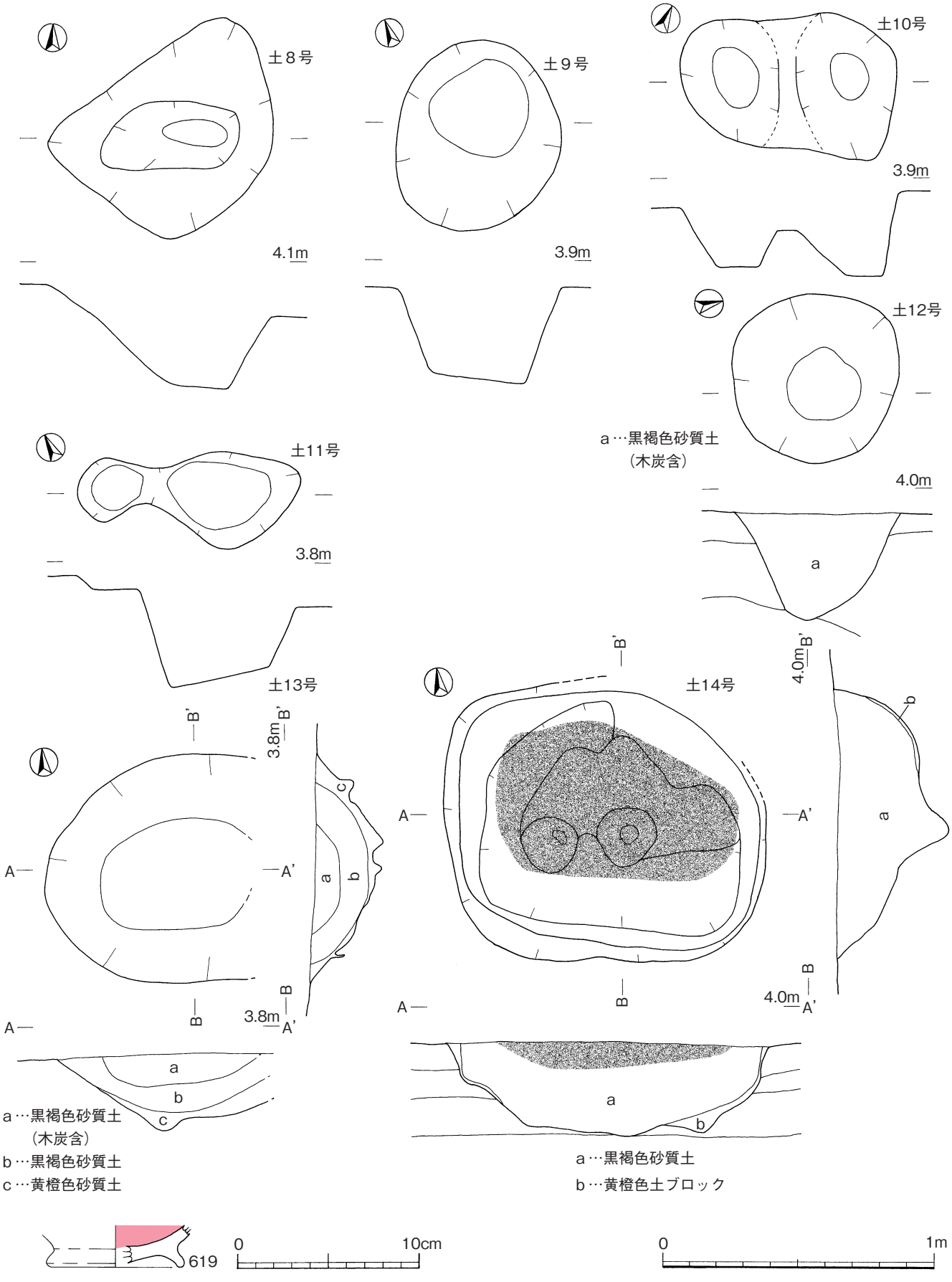
(7) 22・23号土坑（第75図）

22・23号土坑はZ－12・13区Ⅵ層上面検出した。22号は南側約1/3を削平された状態で検出され，残存部の長径が約80cm，掘り込みの深さ約34cmの楕円形を呈する。

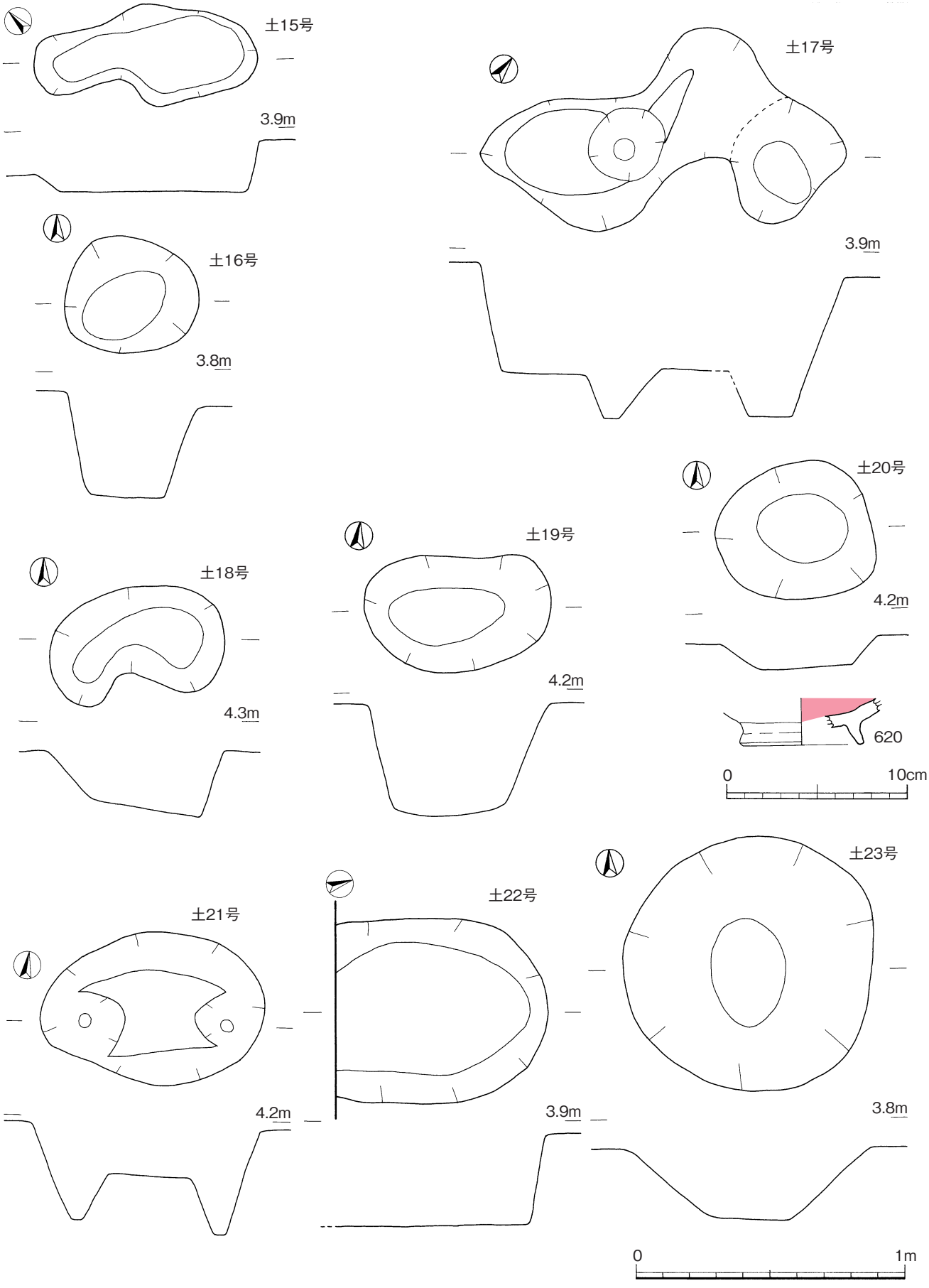
23号土坑はZ－13区のⅥ層上面で検出した。径が95cmで，掘り込みの深さ約25cmの円形を呈する。



第73図　4号大型土坑及び出土遺物実測図



第74図　8～14号土坑及び出土遺物実測図



第75図　15～23号土坑及び出土遺物実測図

4　ピット

該期のピットは，11基検出した。

遺構に伴う該期の遺物は，16号ピットと19号ピットに１点ずつしか出土しなかった。

(1) 13号ピット（第76図）

13号ピットはＶ－２区のⅥ層上面で検出し，径が約30cmの円形を呈し，検出面からの深さは約23cmである。

(2) 14号ピット（第76図）

14号ピットはＵ－３区のⅥ層上面で検出し，径が約30cmの円形を呈し，検出面からの深さは約26cmである。

(3) 15号ピット（第76図）

15号ピットはＸ－４区のⅥ層上面で検出し，径が約30cmの円形を呈し，検出面からの深さは約40cmである。

(4) 16・17号ピット（第76図）

16・17号ピットはＹ－２区のⅥ層上面で検出した。

16号は径が約35cmで，検出面からの深さが約28cmの円形を呈する。

17号は径が約30cmで，検出面からの深さが約50cmの円形を呈する。

16号ピット内出土遺物（第76図621）

遺構に伴う該期の遺物は１点出土した。

621は，古代ヘラ書き土器の底部である。

(5) 18～22号ピット（第76図）

18～22号ピットは，ａ－２～４区のⅥ層上面で集中して検出した。

18号は径が約34cmの円形を呈し，検出面からの深さは約27cmである。

19号は径が約40cmの円形を呈し，検出面からの深さは約18cmである。

20号は径が約35cmの円形を呈し，検出面からの深さは約40cmである。

21号は径が約35cmの円形を呈し，検出面からの深さは約38cmである。

22号は長径約50cm，短径約40cmの楕円形を呈し，検出面からの深さは約35cmである。

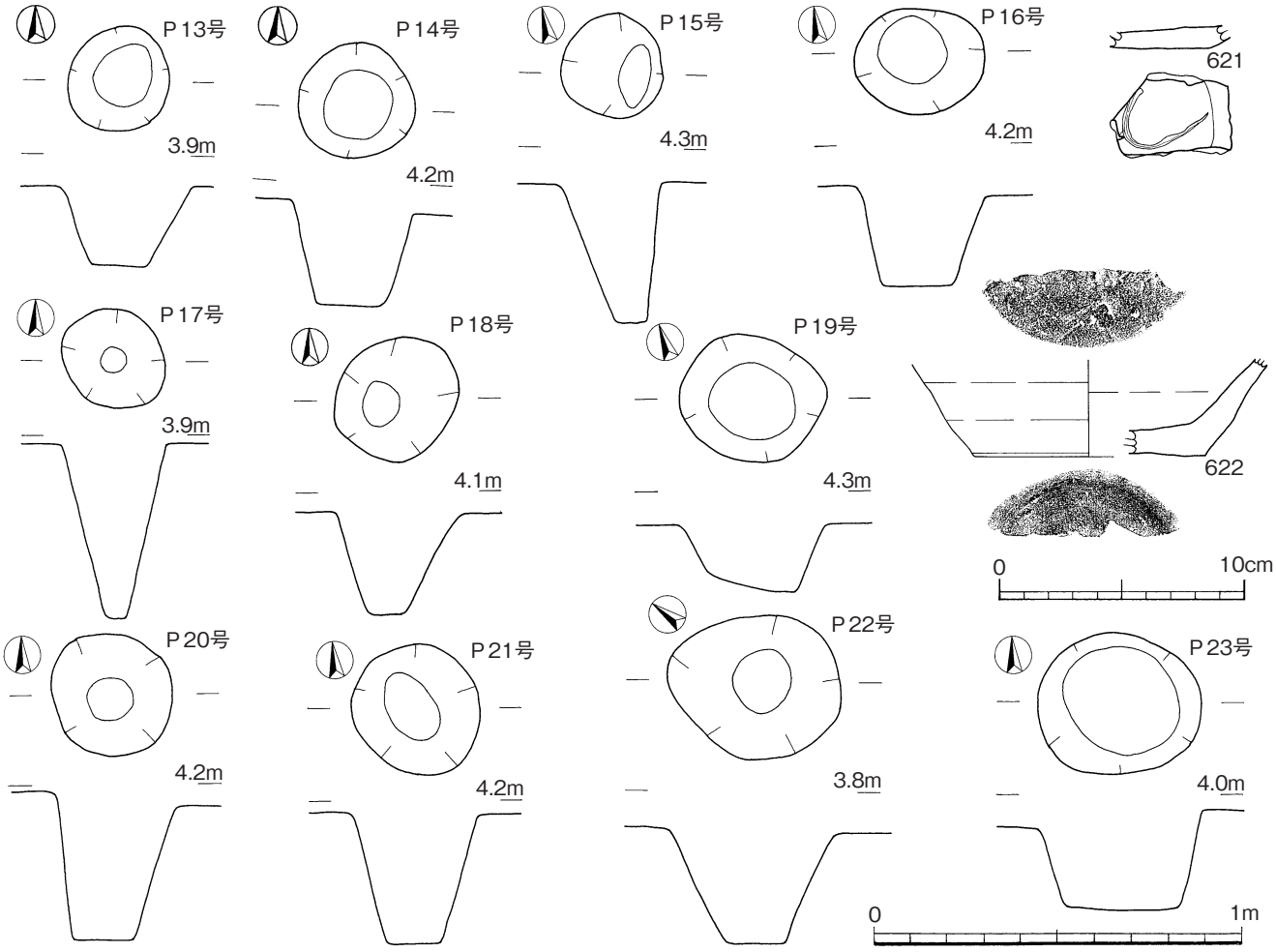
19号ピット内出土遺物（第76図622）

遺構に伴う該期の遺物は１点出土した。

622は古代土師器坏の底部で，底径は約10cmである。

(6) 23号ピット（第76図）

23号ピットはＺ－12区のⅥ層上面から検出した。径が約45cmの円形を呈し，検出面からの深さは約28cmである。



第76図　13～23号ピット及び出土遺物実測図

第３節　遺物

１　土師器（第77～84図623～804）

土師器は供膳具として，皿，高台付皿，坏，埦，蓋の５つに分類した。また，黒色土器，赤色土器，刻書土器類については別分類とし，その中で器形による分類を行った。煮炊具としては，口縁部のみの出土が多く，器形の分類が困難なために，全て甕として取り扱った。

(1) 皿（第77図623～626）

器高が低く，底面が広いもので，口縁部から底部まで残っているもの４点を図化した。

口径は約12～15cm で，底径が約９～10cm と少し差があり，器高は約３cm と浅めの皿である。

623・626の体部は，丸味をもって開いている。器面下位および底面に，工具による回転ヘラケズリ調整を施す。624は，胴部中央で僅かに段をもつ。625は，指頭圧による調整を施している。

(2) 高台付皿（第77図627～630）

皿部の口径が約10cm 未満の小型高台付皿が４点出土した。

627・628は皿部底面が凹み，断面でみると抉れている。高台はハの字状に広がり，内外面ともに横ナデ調整を施す。627は口径約10cm，底径約８cm，器高は約4.5cm で底部中央に穿孔を有する。628は口径約９cm，底径約６cm，器高は約３cm である。628・629は，高台の天井部が平坦で，629には凹みは見られない。630は高台の脚部のみである。

(3) 坏（第77～79図631～682）

土師器の坏と思われる小片は多量に出土し，その内52点を掲載した。ただし，口縁部のみが残るものについては，埦との判別が困難なため坏として掲載することにした。

631～647は，内外面ともに横ナデ調整を施し，底部は回転ヘラ切りによる切り離し後，ナデ調整を施している。底面は平坦で，体部が直線的に開く。631は口径約12cm，器高約４cm で，ほぼ完形品である。632～634は底部の器壁がやや厚い。639・640は，底部が僅かに直行し胴部にかけて内弯している。645は底部からの立ち上がりが鋭く，器高も約５cm と高い。648～650は底部から胴部にかけて，やや丸味をもって立ち上がる。底部は回転ヘラ切りによる切り離しで調整は施していない。

651～655は，立ち上がり部にナデ調整を施している。651は，底部が厚い円盤状を呈する。652・654は口縁端部がやや外交し，653は玉縁状にやや肥厚させている。654 は，器高が約２cm と低い。

656～664は，口縁部のみである。658は口縁端部が尖る。664は，ほぼ直行している。

665～682は，底部である。675・678～681は，回転ヘラ切りによる切り離しで調整は施していない。，682は内面にミガキ調整を施している。

(4) 埦（第79図683～698）

埦は，口縁部から底部まで残っているものがなかったため，器形が分かる中空の輪高台をもつ底部のみを図化した。

683～690は脚がやや長く，ハの字状に広がるものである。683は，体部が直線的に開く。684・685はやや内弯気味に開く。686～688は，底部に回転ヘラケズリ調整の痕を明瞭に残している。689は，高台の天井部が低く下がっている。

691～697は，脚部が短い。694は，脚端部が断面四角形を呈する。696・697は底部の器壁が厚く，脚部の器壁は薄い。

698は，脚が長くて細くなると思われる。高台上部が欠損しており，器形は不明である。

(5) 黒色土器（第79・80図699～714）

内面のみを黒く燻したものが15点と，内外面とも黒く燻したものを１点のみ掲載した。器種は，皿，坏，埦である。

699は，内外面とも黒く燻している。器種は口径約９cm，器高が約２cm の小型の皿で，内外面にヘラミガキ調整を施している。

700～714は，内面のみを黒く燻した内黒土師器である。700は口径約17cm，底径約11cm の坏である。内面にヘラミガキ調整を施し，外面にはススが付着している。701は口径約14cm，底径約７cm の埦である。704～711は底部であり，704・705は埦，706～713は坏である。714は小型の高台付皿で，黒色がやや剥がれている。

(6) 赤色土器（第80図715～734）

内面のみに赤色顔料が施された内朱土器と，内外面ともに施された両朱土器がある。器種は，ほとんどが高台をもつ埦の底部である。

715は，小型の高台付皿である。716・717は摩耗が激しいが両面に丁寧なミガキ調整を施している。716は口径約15cm を測る坏の口縁部で，717は底径約８cm を測る埦の底部である。

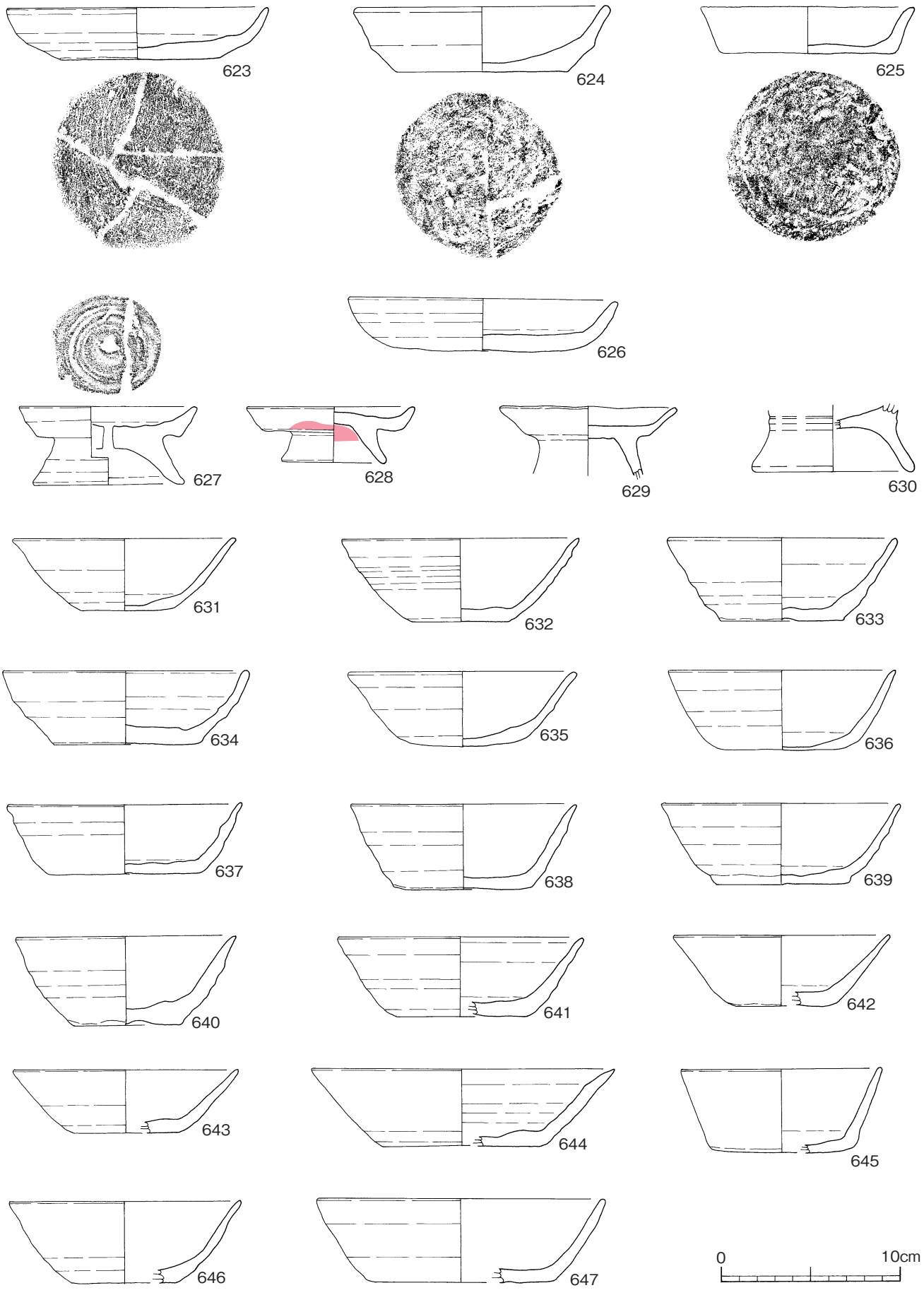
718は，両朱土器で脚部の短い埦である。口径約23cm，底径約８cm で内外面にヘラミガキ調整を施している。

719～734は，内朱土器である。719は口径約12cm，底径約７cm の小型埦である。720は立ち上がりが直線的にのびて開く埦で，口径は約13cm である。730は，脚部が短く内向している。732～734は，体部と高台の接合部で，脚端部は欠損している。

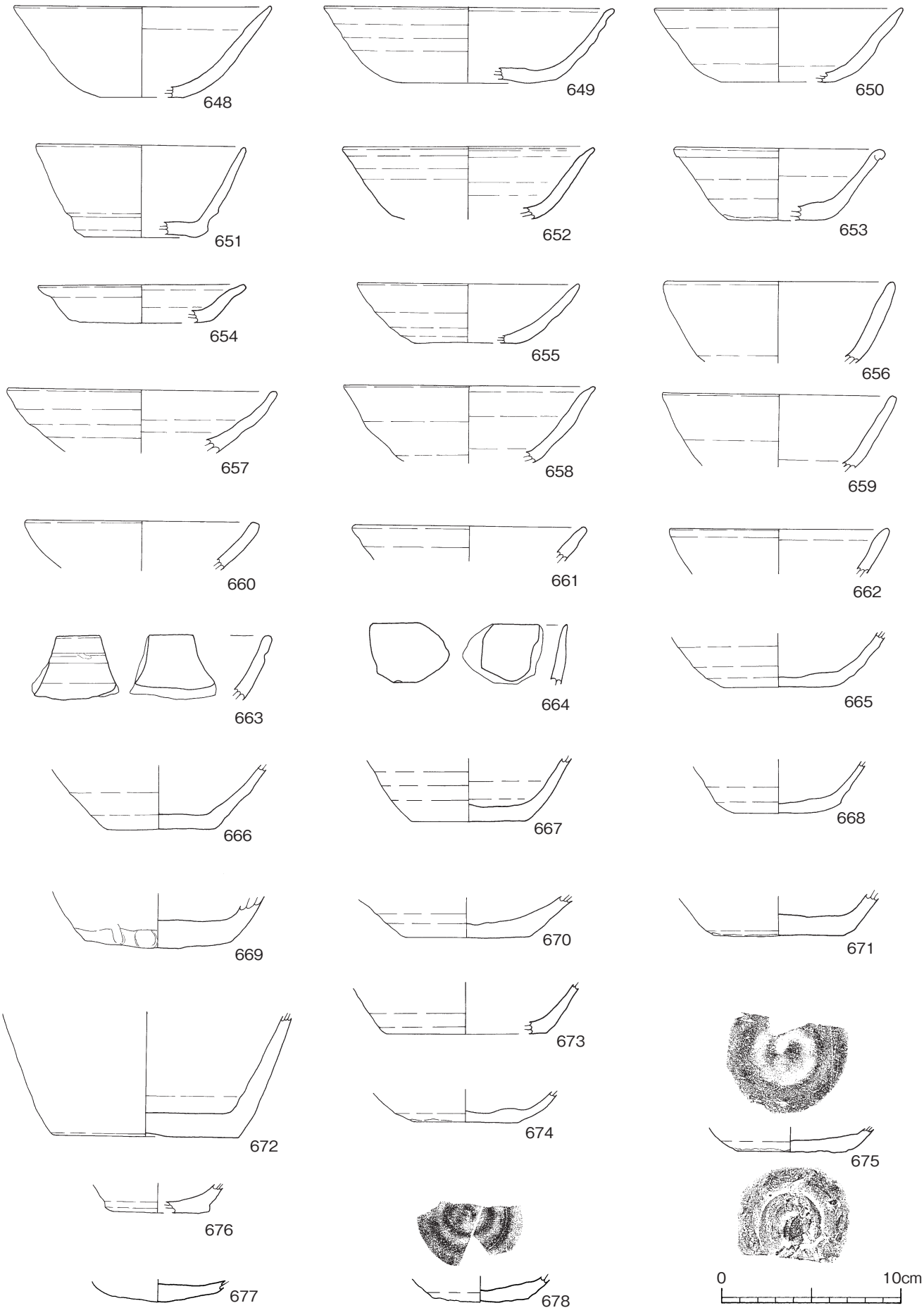
(7) 蓋類（第80図735・736）

土師器の蓋類は，全体の多さと比較するとかなり少ない。器形全体を把握できるものはなく，蓋のつまみを２点掲載した。

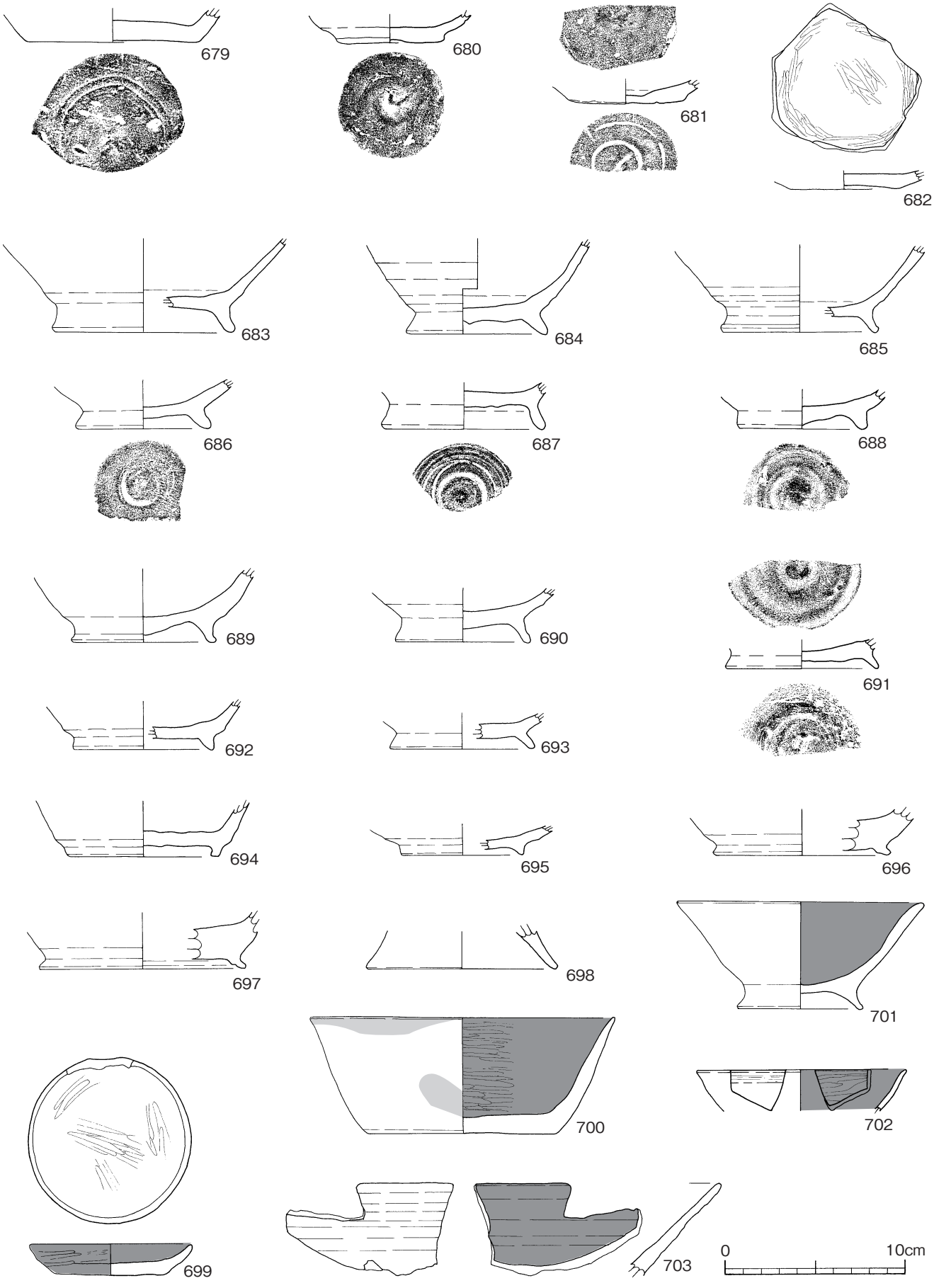
735・736は，上部は平坦でナデ調整を施している。



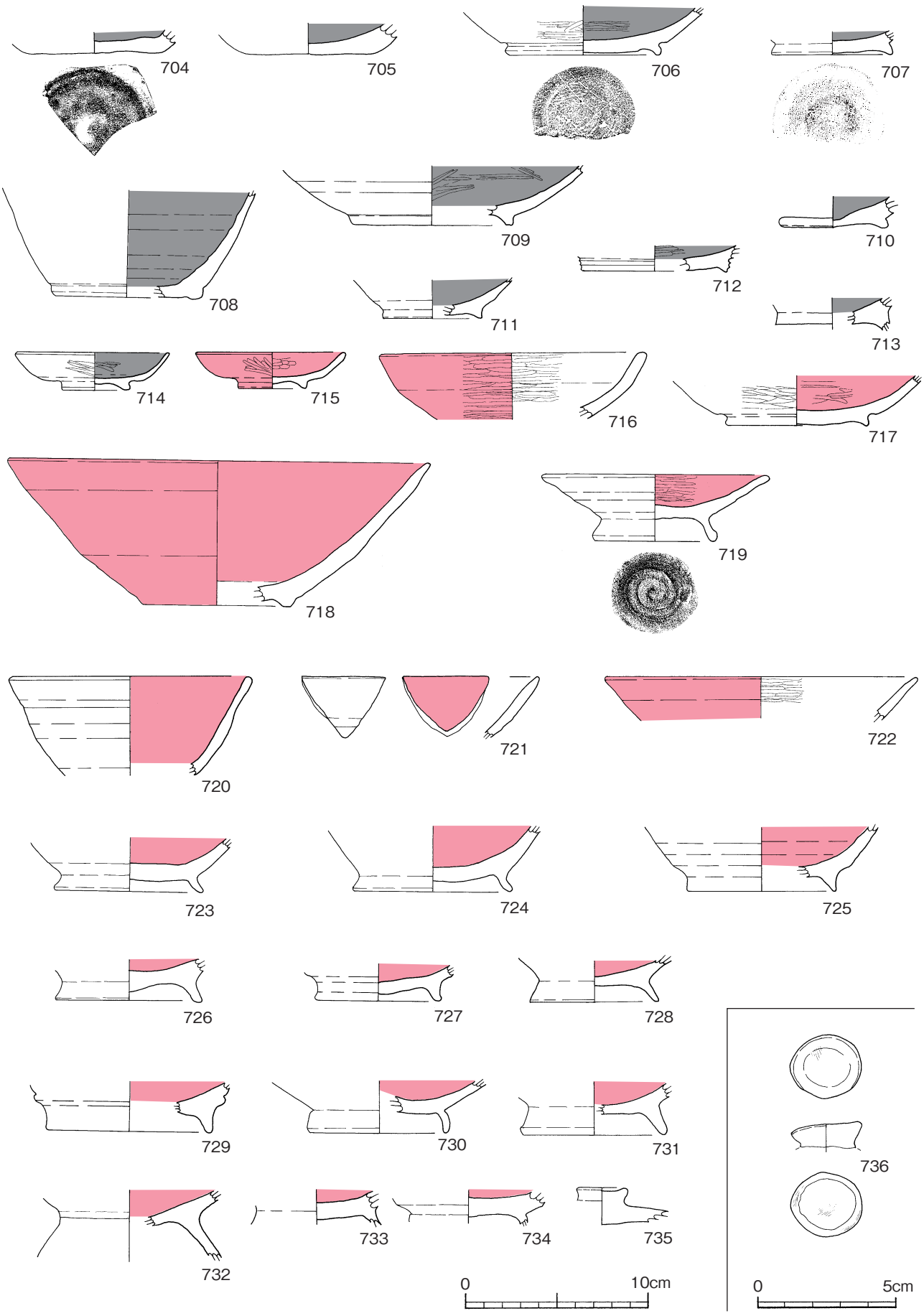
第77図　古代出土遺物実測図（1）



第78図　古代出土遺物実測図（２）



第79図　古代出土遺物実測図（3）



第80図　古代出土遺物実測図（4）

(8) 刻書土器・ヘラ書き土器・墨書土器

刻書土器は１点，ヘラ書き土器が32点，墨書土器が８点出土した。器種は埦，皿，坏であり，ほとんどが底部に記されているが，口縁部，胴部に記されているものもある。

なお，墨書土器に記されている文字の詳細については，第８章で後述する。

ア　刻書土器（第81図737）

737は刻書土器で，１点のみの出土であった。埦の口縁部から胴部にかけて刻まれており，刻書は連続する二文字の一部であると思われる。

イ　ヘラ書き土器（第81・82図738～769）

738・739は，ヘラ書きの一部分が施されているが，残存部が僅かであるため文字かどうかも不明である。738は口径約10cm の小型皿で，胴部下位から底部にかけてヘラ書きが施される。739は胴部にヘラ書きが施される。740は，口縁部が約17cm，底径約13cm，器高約２cm の平底を呈するやや大きめの皿である。文字と思われるヘラ書きの一部が，底部内面に施されている。

741は口径約16cm，底径約８cm，器高約５cm の坏である。底部内面に「門」という文字が施されている。同様に742の埦底部内面にも「門」という文字が施されている。743は，坏の底面内部に文字が施されている。

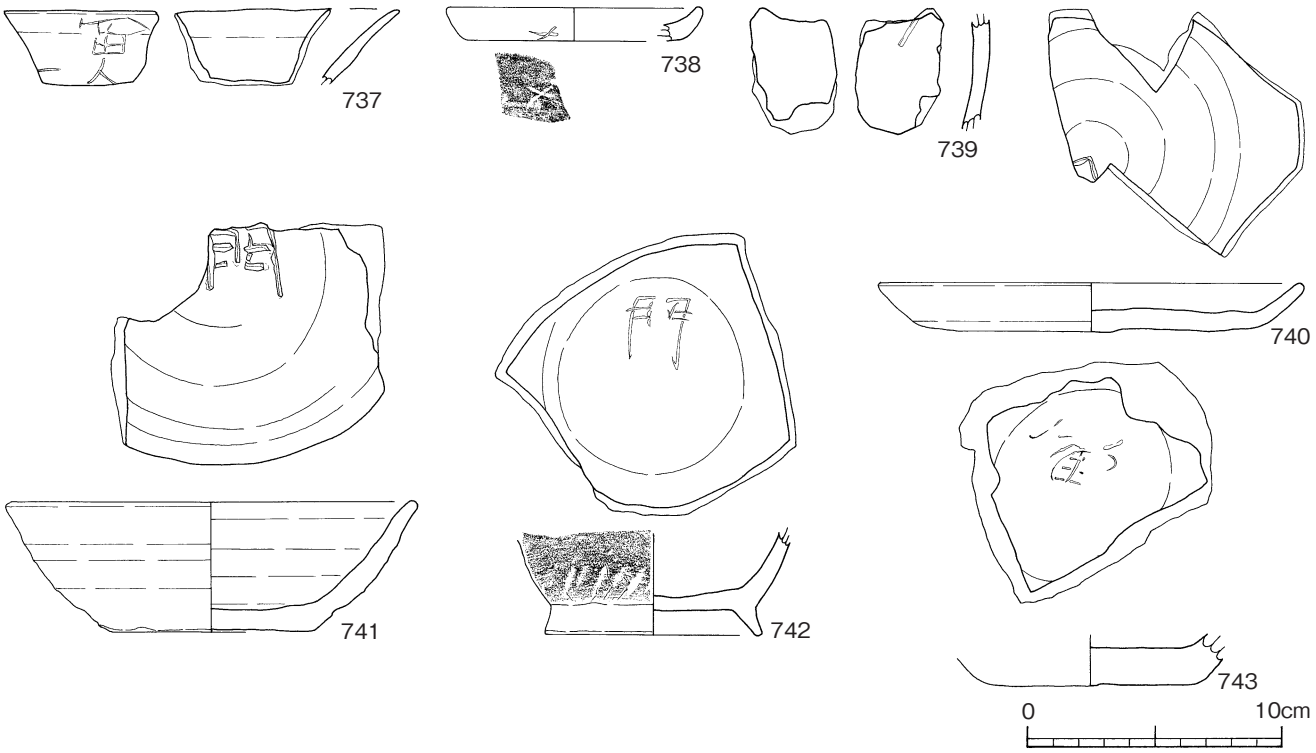
744～769は，坏と埦の底部で，744～758は底部内面に文字が施されている。ほとんどが文字の一部であるが，745は「林」という文字がほとんど残った状態で判断できる。747～753は，先述の「門」という文字の一部であると思われる。754・755は，同形の文字の一部であるが，現代の文字として該当するものは不明である。756は，葉脈あるいは針葉樹の葉先を模したヘラ書きが施される。文字の一部というより，図か記号として捉えたい。

759～769は，底部外面に文字が施されている。759は，口径約12cm，底径約８cm，器高約４cm の坏である。763は，底径約７cm を測る高台付皿の底部である。施されたヘラ書きの全て示されているが，754・755と同様に現代の文字として該当するものは不明であり，記号として使用されている可能性も高い。764～769は，残存率が低く，文字の解明は困難である。

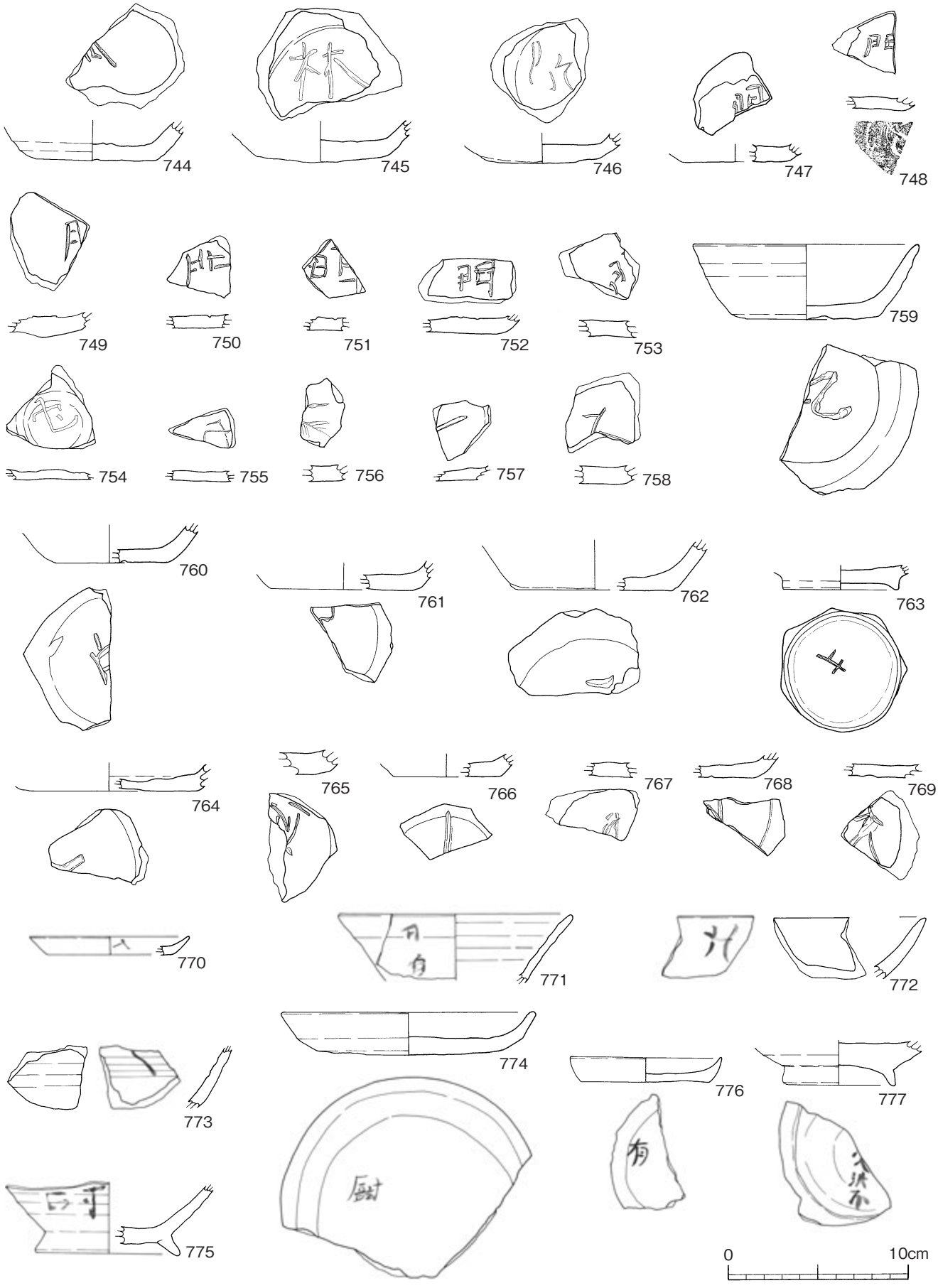
ウ　墨書土器（第82図770～777）

墨書土器は，５点が口縁部から胴部にかけて，３点が底部外面に施されている。

770は，口径約９cm，底径約７cm，器高約１cm の小型平底皿である。体部に「入」に類似した文字が施されている。771は口径約13cm の坏で文字が口縁部に１点，胴部下位に１点施されている。前者は，現代にはない文字であるが，後者は「有」に酷似している。772は坏の口縁部で「土」という文字に似たものが横位に施されている。774・775は「厨」という文字に酷似したものである。774は口径約14cm，底径約10cm，器高約2.4cm の平底皿で，底部外面に文字が施されている。775は底径約８cm の埦の胴部に文字が施されている。776は，771と同様で「有」という文字に酷似したものが施されており，他の墨書と比較して非常に濃く書かれてある。口径約８cm，底径約７cm，器高約1.5cm の小型の平底皿である。777は，複数の文字が底部外面に施された埦である。



第81図　古代出土遺物実測図（５）



第82図　古代出土遺物実測図（６）

(9) 土師甕（第83・84図778～804）

出土した甕については，口縁部のみ27点を掲載した。

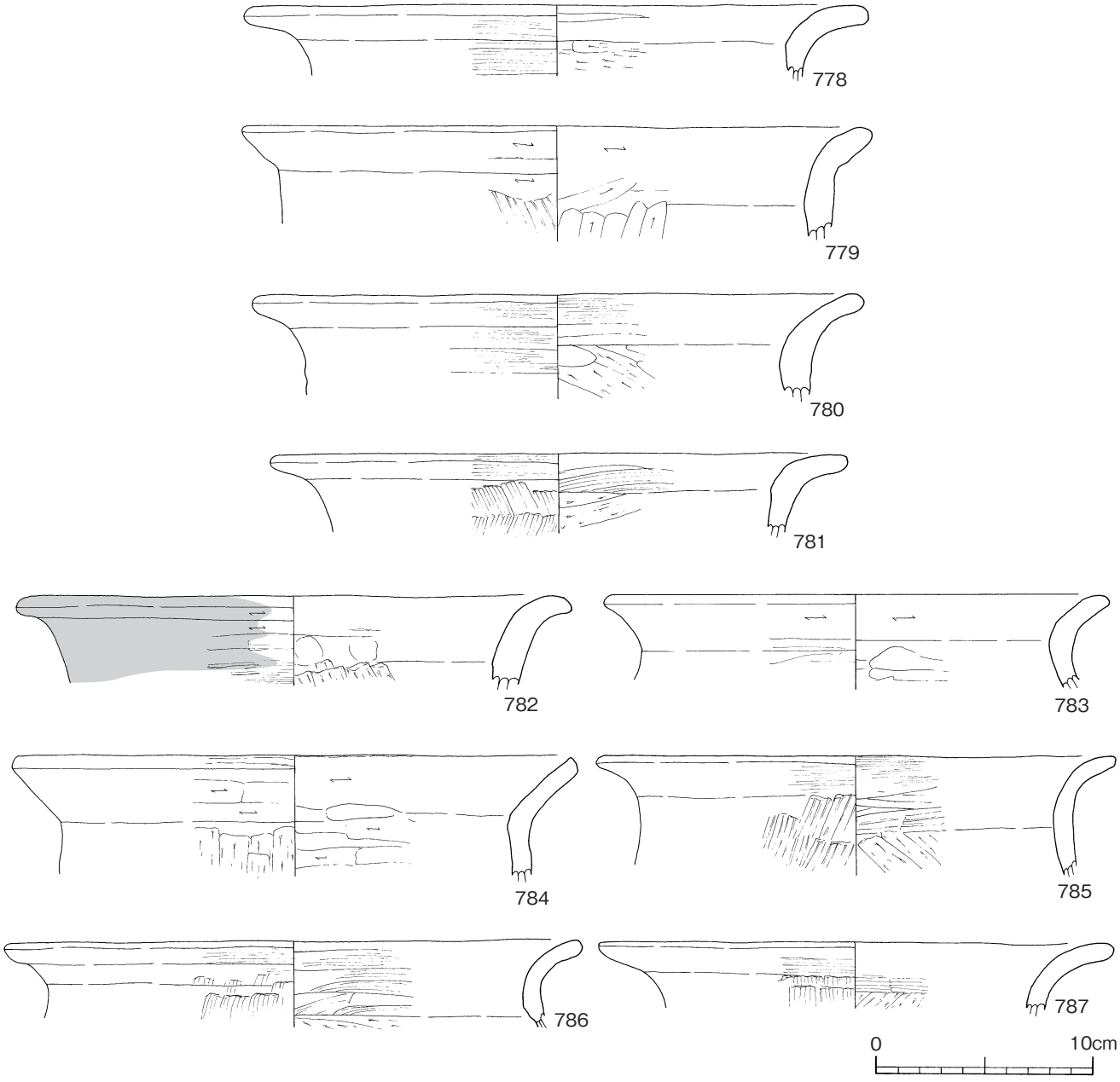
778～796は，口縁部が短く外反するものである。778は口径約29cm を測り，外面に横ナデ調整，内面にケズリ調整を施す。779は口径約29cm を測り，内外面にケズリ調整を施す。781は口径約27cm を測り，外面にハケメ後，内面にケズリ後，口縁部内外面に横ナデ調整を施す。

782～784は口径が約24～27cm で，内外面にケズリ調整を施している。785は口径約24cm で，内外面にハケメ後，口縁部に丁寧な横ナデ調整を施している。786は，口径約27cm で外面に上方向へハケメ後横ナデ調整を施している。788は口径約26cm を測り，口縁部外面に横ナデ後，肩部に上方向へハケメ調整を施している。

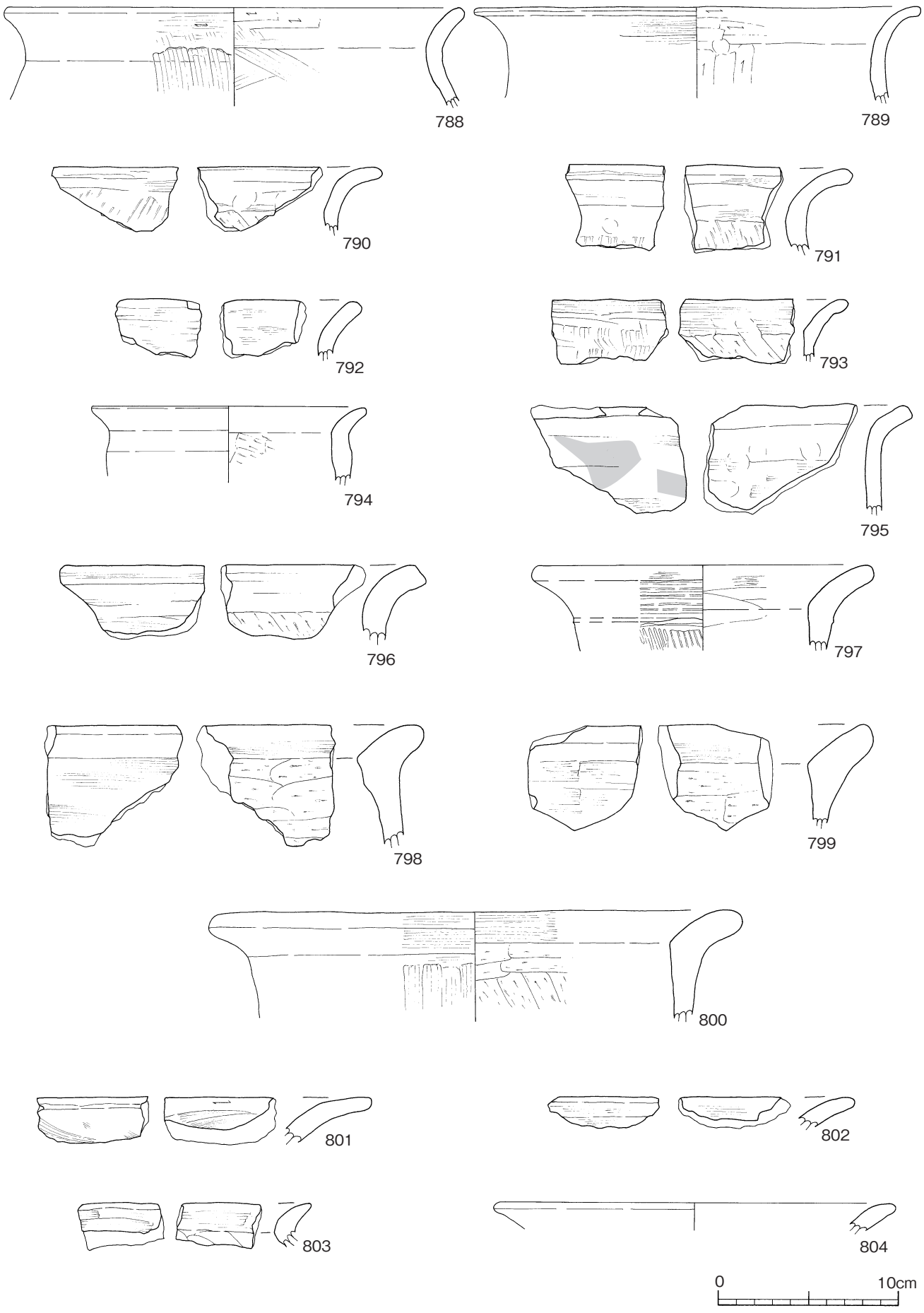
790～796は口縁部の小片である。794は，口径約15cm の小型甕で，外面にナデ調整，内面にケズリ調整を施している。795は，外面にススが強く付着している。796は，口唇部に丁寧なナデ調整を施し，やや凹んでいる。

797～800は，口縁部断面がくの字もしくは逆Ｌ字を呈するものである。797は口径約20cm を測り，ハケメ後，口縁部外面に工具による丁寧なナデ調整を施す。800は口径約30cm を測り，外面に上方向へハケメ調整，内面にケズリ調整後，口唇部内外面に丁寧な横ナデ調整を施している。

801～804は，口縁部の一部である。いずれも器壁が薄い。803は口唇部に丁寧なハケメ調整を施している。804は口径約23cm で，ナデ調整を施している。



第83図　古代出土遺物実測図（7）



第84図　古代出土遺物実測図（8）

2　土製品（第85図805～814）

土製品は，土錘，土玉，紡錘車が出土した。

(1) 土錘（第85図805～810）

土錘は６点出土した。いずれも手捏ねによる調整を施している。

805～807は，やや大きめの土錘である。805は最大長約5.5cmで，最大幅約3.5cmである。806は最大長約4.8cmで，最大幅約2.5cmである。807は最大長約5.5cmで，最大幅約２cmである。

808～810は小さめの土錘で，808は最大長約４cmで，最大幅約1.8cmである。809は最大長約3.7cmで，最大幅約1.4cmである。810は最大長約3.8cmで，最大幅約1.7cmである。

(2) 土玉（第85図811・812）

811は，残存部で最大長約2.8cmで最大幅約1.5cmを測る。基部の上位に穿孔を施しており，上位端部には僅かに凹みが見られるが，その用途は不明である。

812は，土錘を短くしたもので球状を呈す。径は約2.3cmである。

(3) 紡錘車（第85図813・814）

２点出土したが，いずれも欠損部が大きい。

813は，径が約４cmで厚さが約６mmの円状を呈すると思われ，中央部に穿孔を施している。

814は，径は不明で厚さが約６mmの円状を呈すると思われるが，穿孔の痕跡は認められないため，土製メンコの可能性も高い。

3　須恵器（第85～91図815～900）

須恵器は，蓋，坏，皿，埦，甕，壺の６器種が出土した。甕の胴部片が多量に出土したが，大きい破片のみを抜粋して掲載することにした。また，判別不明の底部は一括して掲載することにした。

(1) 蓋（第85図815～819）

蓋は５点掲載した。

815は，口径約22cmで端部は大きく外反している。回転ヘラケズリ調整を施し，端部外面にはシャープな稜をもつ。816は輪状のつまみ部を有するもので，天井部は欠損している。817～819は，天井端部を下方に折り曲げたもので，端部外面にシャープな稜をもつ。

(2) 坏（第85・86図820～829）

坏は，平底坏と高台付坏に分けられる。

820～825は口縁部で，820は口径約12cm，底径約7.5cm，器高3.5cmの平底を呈す。底部からの立ち上がりは，直線的に開きながらのびる。821は口径約19cmで，口縁部は直線的に開いている。822・824・825は，胴部中央付近に段をもつ。口径はそれぞれ約16cm，約13.5cm，約11cmである。823は口径約20cmで，口縁部が直立気味に立ち上がる。

826～829は，底部である。826は平底を呈し，底径約7.5cmである。

(3) 皿（第86図830）

１点のみの出土で，830は口径約13cmで，底径約11cm，器高約３cmの小型の平底皿である。ほぼ直立気味に立ち上がり，口縁端部がやや外反している。底部底面は，回転ヘラケズリ調整を施している。

(4) 埦（第86図831・832）

埦は，器形から判断して明瞭なものを２点のみ掲載した。831は口径約20cm，底径約10cm，器高約８cmで高台をもつ。832は口径約16cmで，底部から直線的に開きながらのびる。

(5) 甕（第86～91図833～887）

出土した甕の中には，口縁部から底部まで全体の器形が分かるものは残念ながらなかった。

833～845は，口縁部である。833は口径約34cmで，口縁部が短く外反している。口縁端部の断面は，四角を呈する。834～836は，外反する口縁部が端部近くで屈曲し，二重口縁状となるものである。834は口径約47cmを測る大型甕で，横ナデ調整を施している。835は口径約33cmを測り，器面に格子目タタキを施している。837～844は，口縁端部がやや肥厚しながら，下向きに外向している。845は，口縁部が内弯しながら大きく開き，二重口縁状を呈している。

846～850は，甕の頸部である。846は，外面に格子目タタキを施している。849は，頸部から肩部にかけての屈曲が強く，外面に格子目タタキ，内面に同心円当て具痕が見られる。

851～887は，肩部，胴部である。857は外面に平行文タタキを施し，内面に同心円当て具痕が見られる。852・857は赤褐色を呈する赤焼きの酸化炎焼成である。

(6) 壺（第91図888～892）

888・889は，頸部がくの字に屈曲しており，二重口縁となるものである。

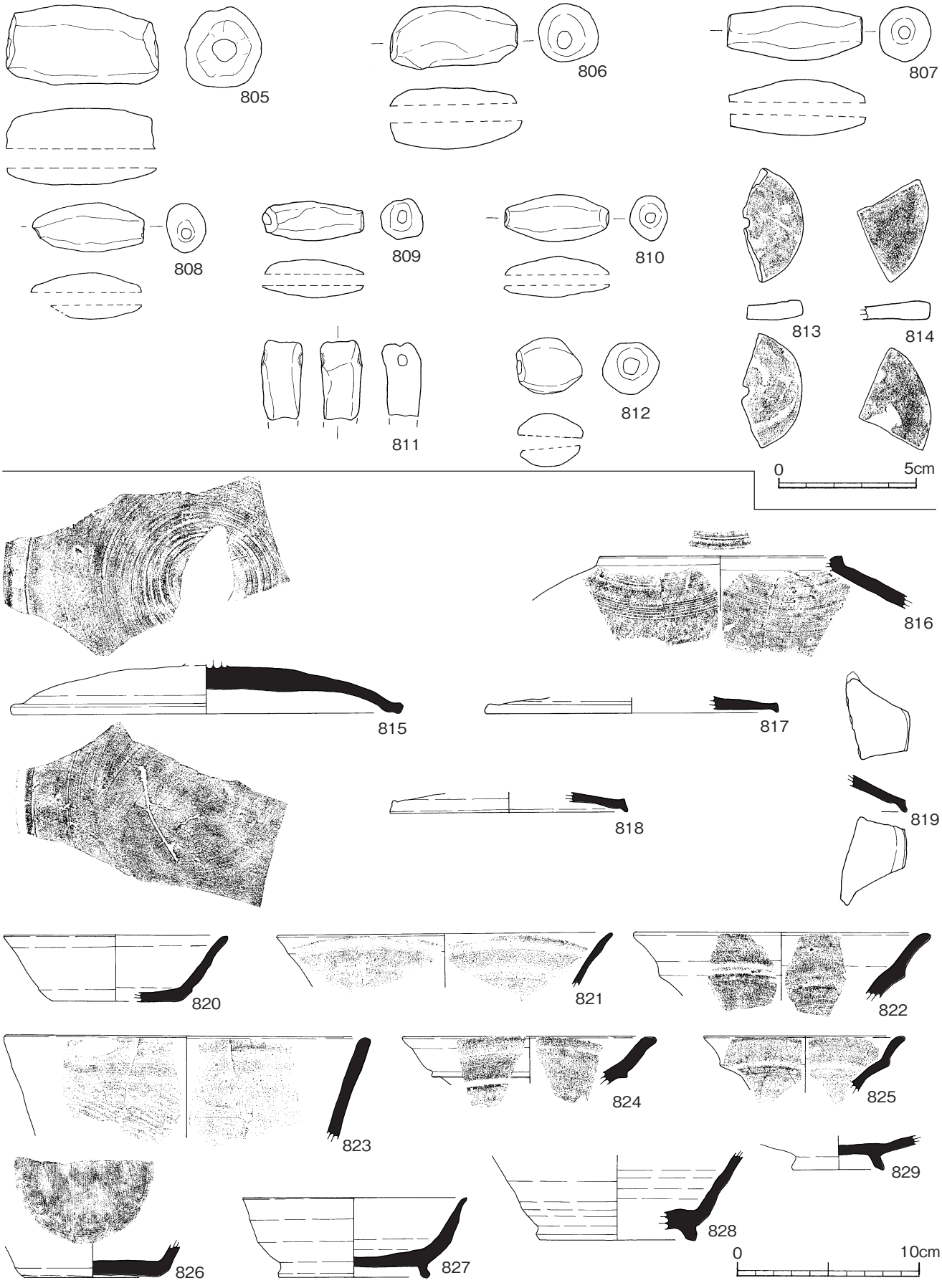
890は，肩部から胴部にかけて内弯し，胴部は直行する。外面に平行文タタキが見られ，内面はヘラケズリを施している。891は，肩部と胴部の屈曲部に突帯を有し，胴部がくの字に内弯する。

892は，胴部が直行し，底部は平底を呈する。外面に平行文タタキが見られ，内面はヘラケズリを施している。白灰色を呈し焼成がやや弱い。

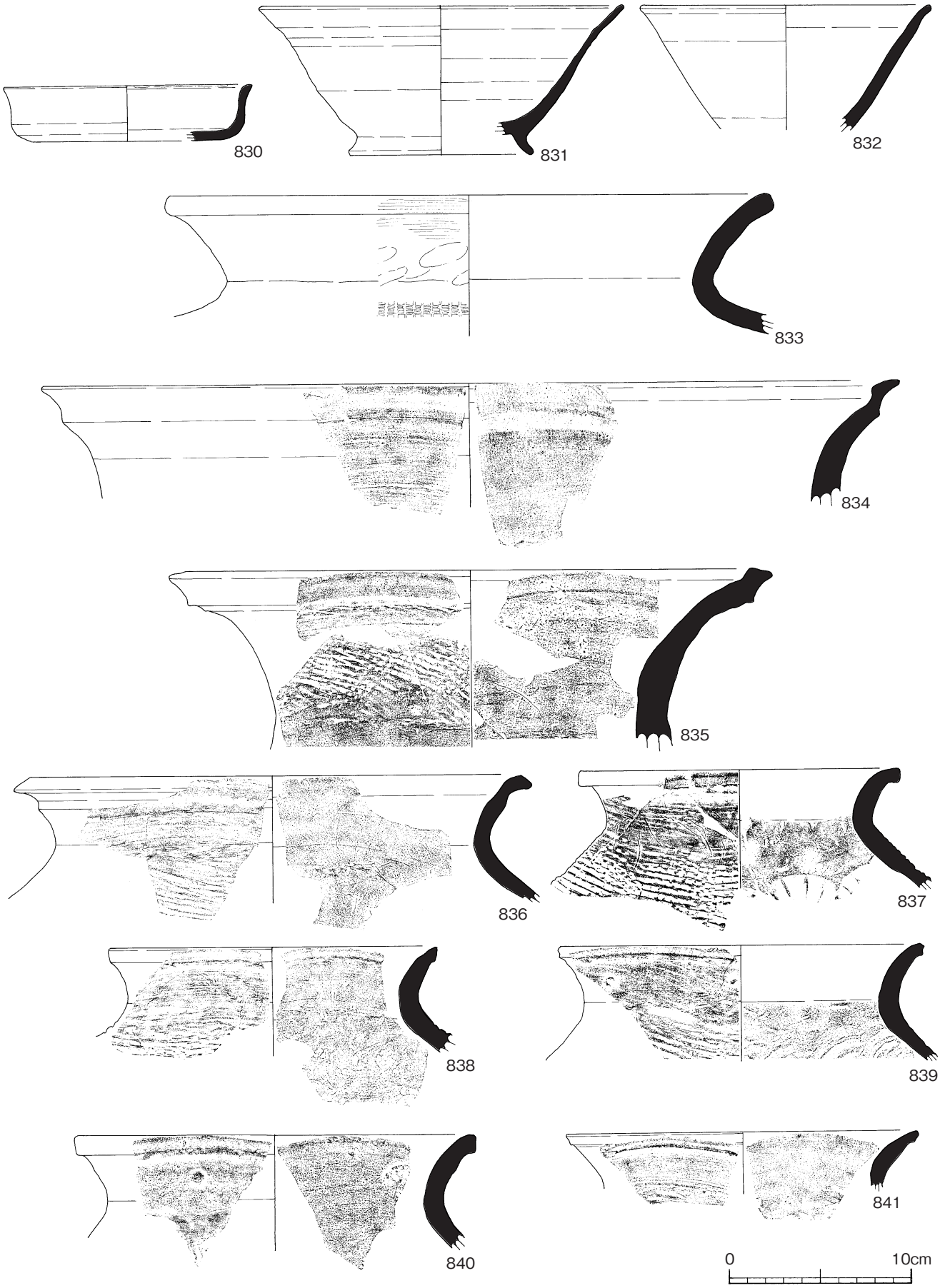
(7) 底部（第91図893～900）

器面には格子目タタキや平行文タタキが見られ，内面には粘土接合痕と指頭痕やナデが見られる。また，底部底面には，同心円タタキが見られる。

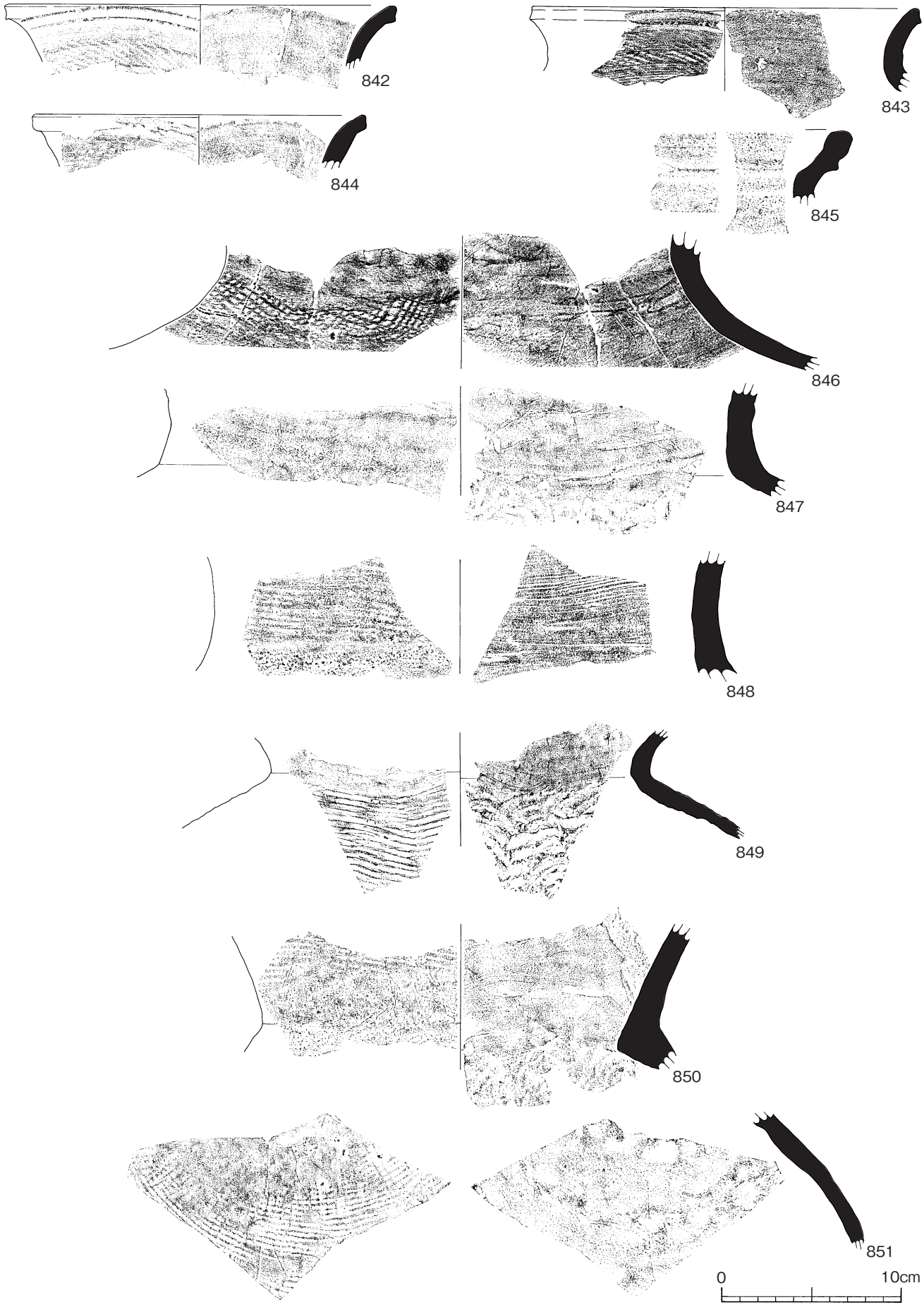
893～899は，底部から胴部へ直立気味に立ち上がる。900は，外向しながら直線的に立ち上がる。



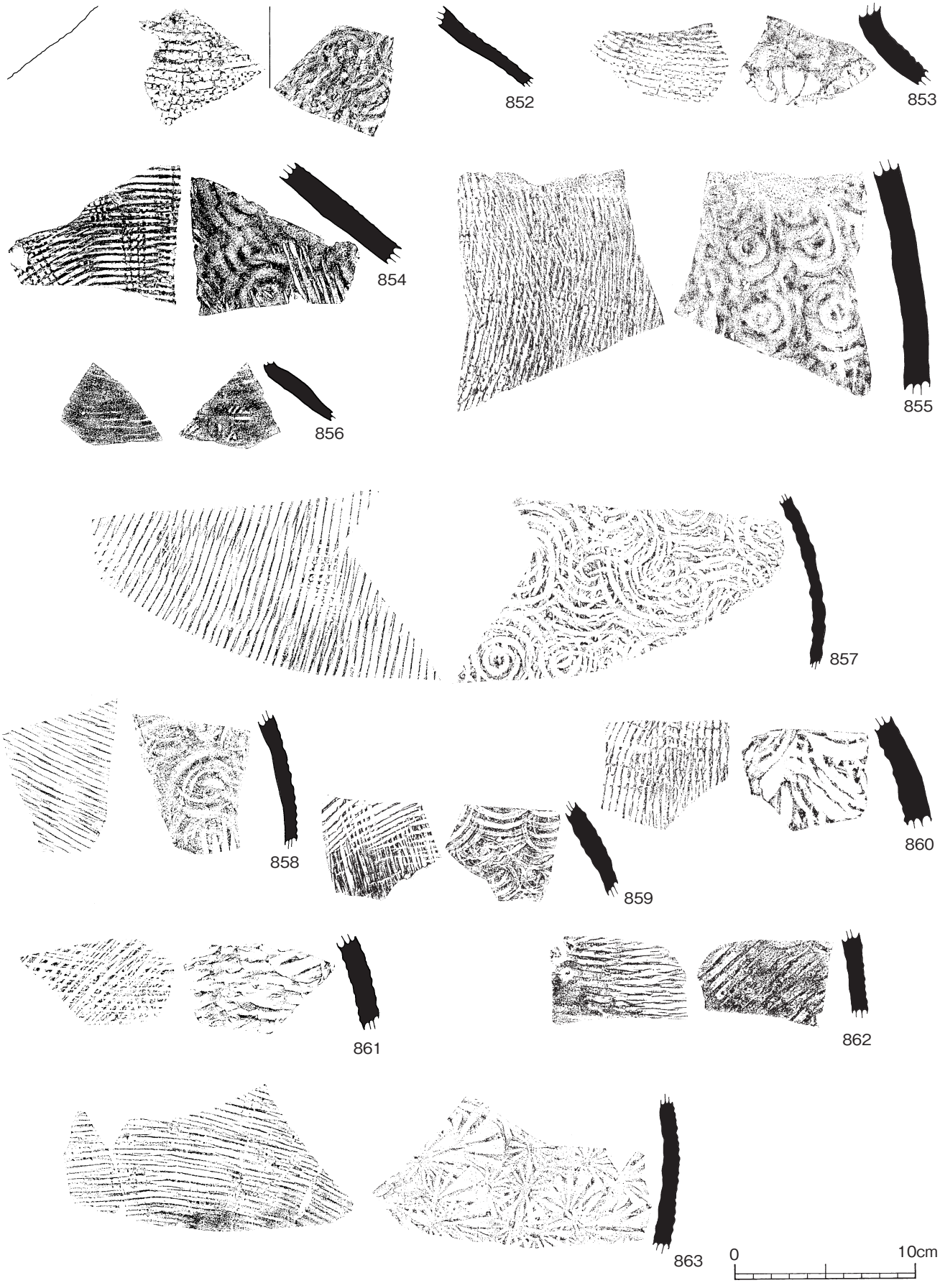
第85図　古代出土遺物実測図（９）



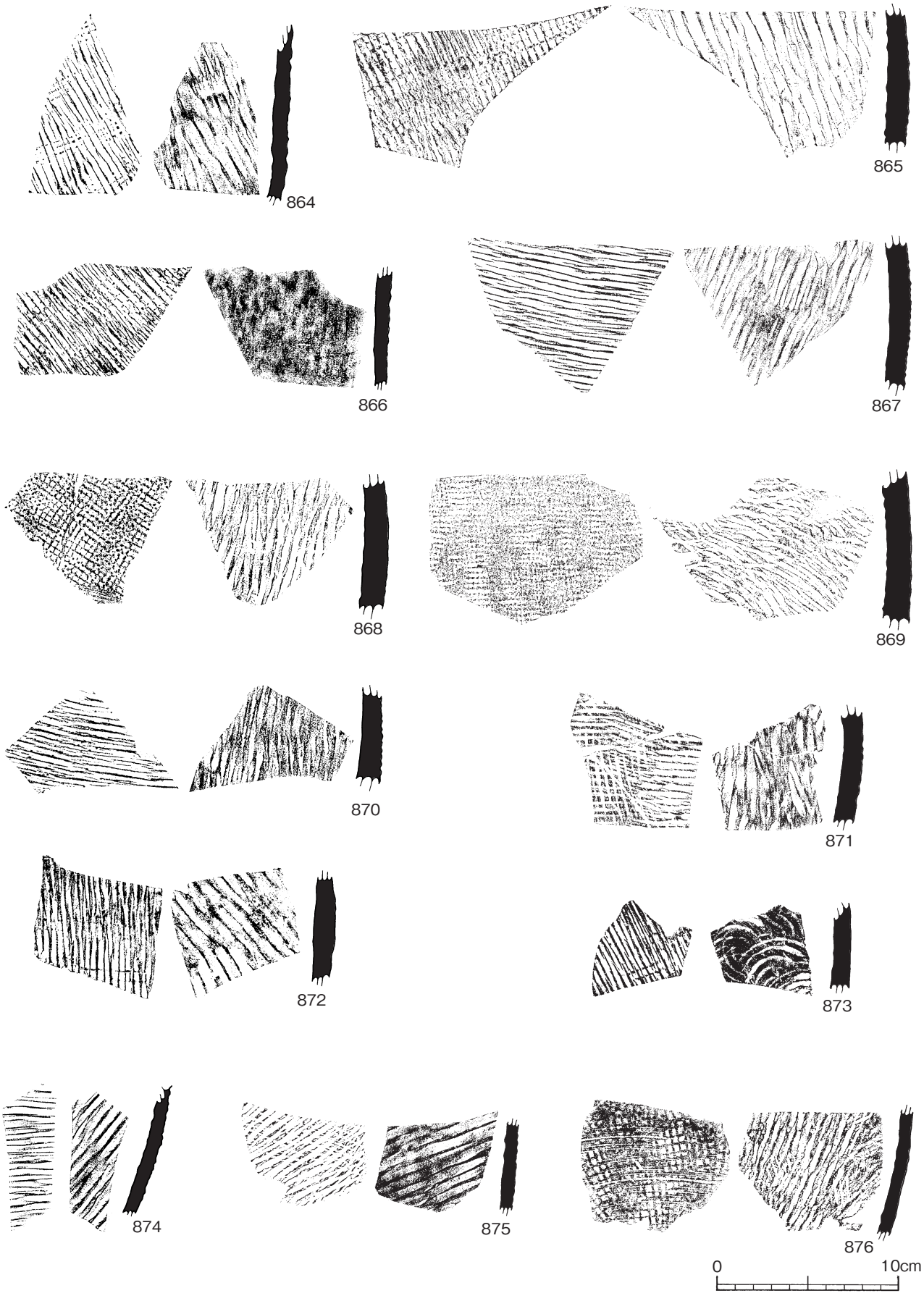
第86図　古代出土遺物実測図（10）



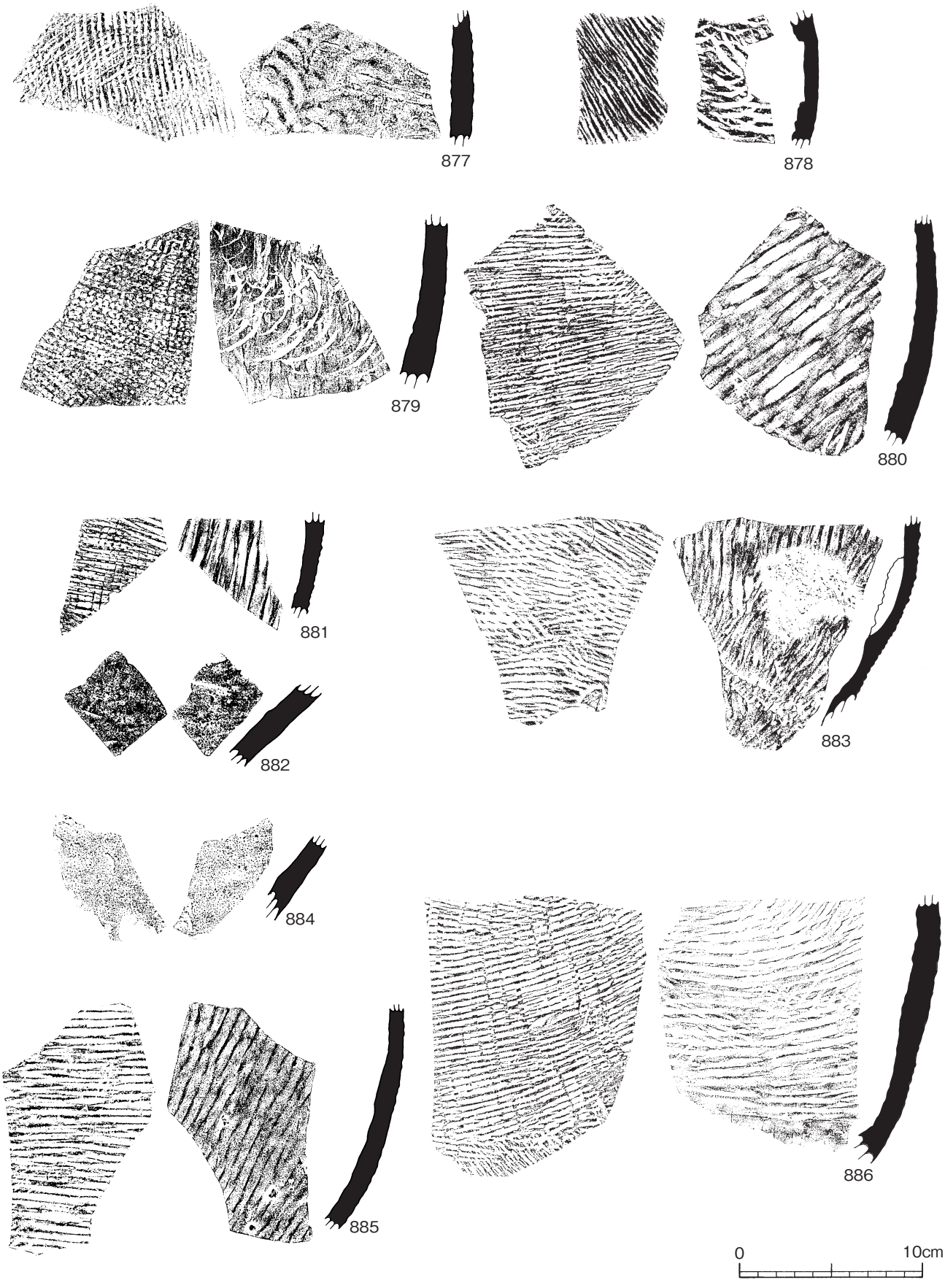
第87図　古代出土遺物実測図（11）



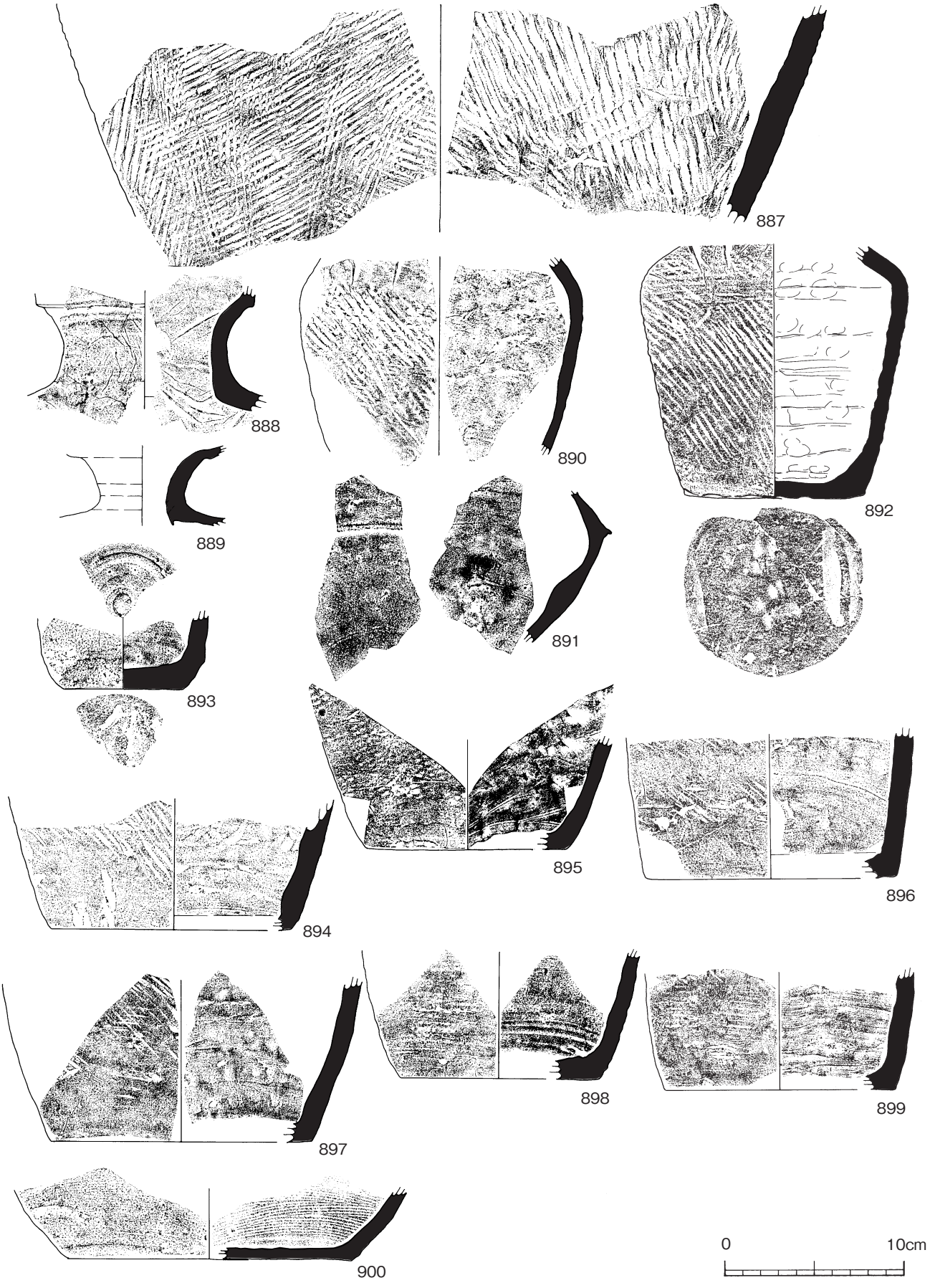
第88図　古代出土遺物実測図（12）



第89図　古代出土遺物実測図（13）



第90図　古代出土遺物実測図（14）



第91図　古代出土遺物実測図（15）

表16　古代出土遺物観察表（1）

遺構内遺物

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	口径	底径	器高	調整		色調		備考
						(cm)	(cm)	(cm)	外	内	外	内	
72	616	Ⅵ	X	3	坏	―	6.9	―	回転ナデ	回転ナデ	橙	浅黄橙	２号溝状遺構内出土
	617	Ⅵ	X	3	坏	―	7.8	―	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	２号溝状遺構内出土
73	618	Ⅵ	Z	2	埦	―	―	―	回転ナデ	ヘラミガキ	にぶい黄橙	黒	４号大型土坑内出土
74	619	Ⅵ	X	1	埦	―	7.4	―	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	橙	13号土坑内出土
75	620	Ⅵ	a	3	埦	―	6.9	―	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	にぶい橙	20号土坑内出土
76	621	Ⅵ	Y	2	坏	―	―	―	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	16号ピット内出土
	622	Ⅵ	a	3	坏	―	9.6	―	回転ナデ	回転ナデ	橙	明黄褐	19号ピット内出土

包含層遺物

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	口径	底径	器高	調整		色調		備考
						(cm)	(cm)	(cm)	外	内	外	内	
77	623	Ⅳ	V	1	皿	14.8	8.9	3.0	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
	624	Ⅵ	X	3	皿	14.6	9.8	3.6	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	625	Ⅳ	X	2	皿	11.9	9.7	2.7	指ナデ	指ナデ	浅黄橙	浅黄橙	一個体
	626	Ⅳ	25T		皿	15.2	9.4	2.9	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
	627	Ⅳ	V	1	高台付皿	10.3	8.4	4.5	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	穿孔あり
	628	Ⅳ	V	2	高台付皿	9.4	5.9	3.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	一個体
	629	Ⅳ	Z	3	高台付皿	9.8	―	―	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
	630	Ⅳ	V	1	高台付皿	―	8.8	―	回転ナデ	回転ナデ	浅黄	浅黄	
	631	Ⅵ	W	2	坏	12.2	5.0	4.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	632	Ⅵ	X	2	坏	13.2	5.6	4.7	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	633	Ⅵ	W	3	坏	12.8	6.8	4.8	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	634	Ⅳb	W	2	坏	13.8	8.2	4.2	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	635	Ⅴb	X	3	坏	13.0	6.2	4.2	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	636	Ⅵ	W	2	坏	12.7	7.0	4.4	回転ナデ	回転ナデ	灰白	浅黄橙	
	637	Ⅵ	X	2	坏	13.2	8.4	3.9	回転ナデ	回転ナデ	黄橙	浅黄橙	
	638	Ⅴb	X	2	坏	12.6	7.8	4.8	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	
	639	Ⅴb	X	2	坏	13.5	7.6	4.6	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	
	640	Ⅵ	X	2	坏	12.3	6.0	5.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	641	Ⅴb	X	2	坏	13.8	7.6	4.5	回転ナデ	回転ナデ	淡黄	淡黄	
	642	Ⅴb	X	2	坏	12.2	5.2	4.0	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	643	Ⅴb	X	2	坏	12.5	5.8	3.5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	644	Ⅴb	X	3	坏	17.0	8.8	4.2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
	645	Ⅵ	W	2	坏	11.2	7.8	4.8	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	646	Ⅴb	Z	3	坏	13.1	5.8	4.6	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	
	647	Ⅵ	V	1	坏	16.1	10.5	4.8	回転ナデ	回転ナデ	黄橙	灰白	
78	648	Ⅵ	X	2	坏	14.6	5.0	5.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	灰白	
	649	Ⅵ	Y	8	坏	16.3	8.8	4.2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	650	Ⅵ	W	2	坏	14.1	6.2	4.2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	651	Ⅴb	Z	3	坏	12.1	6.8	5.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	652	Ⅵ	X	2	坏	14.3	―	―	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	653	Ⅵ	a	3	坏	11.9	5.6	4.0	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	654	Ⅵ	V	1	坏	11.8	7.8	2.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	655	Ⅵ	X	2	坏	12.5	5.8	3.4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	656	Ⅵ	X	3	坏	12.8	―	―	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
	657	Ⅵ	X	2	坏	15.2	―	―	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	658	Ⅵ	X	2	坏	14.3	―	―	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	659	Ⅵ	X	2	坏	13.0	―	―	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
	660	Ⅵ	V	7	坏	13.2	―	―	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	
	661	Ⅵ	U	3	坏	13.0	―	―	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
	662	Ⅵ	Y	3	坏	12.2	―	―	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	663	Ⅵ	X	2	坏	―	―	―	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	664	Ⅵ	Y	3	坏	―	―	―	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	665	Ⅴb	Y	3	坏	―	6.0	―	摩耗	摩耗	浅黄橙	浅黄橙	
	666	Ⅴb	X	3	坏	―	6.4	―	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	667	Ⅴb	Y	3	坏	―	6.6	―	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	668	Ⅵ	X	2	坏	―	5.2	―	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
	669	Ⅵ	X	3	坏	―	8.4	―	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
	670	―	V	2	坏	―	7.2	―	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	

表17　古代出土遺物観察表（2）

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	口径	底径	器高	調整		色調		備考
						(cm)	(cm)	(cm)	外	内	外	内	
78	671	－	V	2	坏	－	7.0	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	
	672	Ⅵ	X	2	坏	－	10.0	－	回転ナデ	回転ナデ	明褐灰	明褐灰	
	673	Ⅵ	X	2	坏	－	9.0	－	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	674	Ⅵ	X	2	坏	－	5.6	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
	675	Ⅵ	X	2	坏	－	5.6	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
	676	Ⅵ	X	2	坏	－	5.2	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
	677	Ⅵ	X	2	坏	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	
	678	Ⅵ	Y	3	坏	－	5.0	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
79	679	Ⅴb	Y	3	坏	－	9.2	－	摩耗	摩耗	浅黄橙	浅黄橙	
	680	Ⅵ	X	3	坏	－	6.0	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
	681	Ⅶ	V	1	坏	－	6.0	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
	682	Ⅵ	X	3	坏	－	6.0	－	回転ナデ	ヘラミガキ	橙	橙	
	683	Ⅵ	X	2	埦	－	10.2	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	
	684	Ⅵ	X	2	埦	－	8.0	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	685	Ⅵ	X	3	埦	－	8.6	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	
	686	Ⅵ	Y	3	埦	－	7.4	－	回転ナデ	回転ナデ	明黄褐	明黄褐	
	687	ⅩⅠ	V	3	埦	－	8.6	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	にぶい黄橙	
	688	Ⅵ	W	9	埦	－	7.0	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	浅黄橙	
	689	Ⅴb	Y	4	埦	－	8.0	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	690	Ⅲ	Y	3	埦	－	8.2	－	摩耗	摩耗	にぶい橙	にぶい橙	
	691	Ⅵ	Y	2	埦	－	8.4	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	692	Ⅵ	V	3	埦	－	7.6	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	693	Ⅵ	Y	2	埦	－	7.8	－	回転ナデ	回転ナデ	明黄褐	橙	
	694	Ⅵ	V	3	埦	－	8.2	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	にぶい橙	
	695	Ⅳa	X	2	埦	－	6.8	－	摩耗	摩耗	橙	橙	
	696	Ⅵ	X	2	埦	－	9.6	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	にぶい橙	
	697	Ⅵ	X	3	埦	－	11.3	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	
	698	Ⅵ	V	3	埦	－	10.4	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	にぶい橙	
	699	Ⅵ	X	3	黒色土器	9.1	6.2	1.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒褐	黒	
	700	Ⅵ	U	2	黒色土器	17.3	10.4	6.4	回転ナデ	ヘラミガキ	浅黄	黒	スス付着
	701	Ⅵ	X	3	黒色土器	13.8	7.0	5.8	回転ナデ	ナデミガキ	にぶい橙	黒	
	702	Ⅵ	X	2	黒色土器	11.6	－	－	回転ナデ	ナデ後ミガキ	浅黄橙	黒	
	703	Ⅵ	X	2	黒色土器	－	－	－	回転ナデ	ナデ後ミガキ	浅黄橙	黒	
80	704	Ⅵ	X	2	黒色土器	－	7.4	－	回転ナデ	ナデ後ミガキ	にぶい褐	黒	
	705	Ⅴb	X	3	黒色土器	－	7.1	－	回転ナデ	ナデ	浅黄橙	黒	
	706	Ⅵ	V	3	黒色土器	－	8.8	－	回転ナデ	ナデ後ミガキ	にぶい橙	黒	
	707	Ⅵ	X	2	黒色土器	－	6.8	－	回転ナデ	ミガキ	橙	黒	
	708	Ⅵ	X	2	黒色土器	－	8.4	－	回転ナデ	ミガキ	黄灰	黒	
	709	Ⅵ	Y	2	黒色土器	－	8.9	－	回転ナデ	ミガキ	黄灰	黒	
	710	Ⅵ	Y	2	黒色土器	－	6.0	－	回転ナデ	ヘラミガキ	にぶい橙	黒	
	711	Ⅵ	X	3	黒色土器	－	5.6	－	回転ナデ	ヘラミガキ	黄灰	黒	
	712	Ⅷ	V	1・2	黒色土器	－	8.2	－	回転ナデ	ヘラミガキ	にぶい黄	黒	
	713	Ⅷ	Y	2	黒色土器	－	－	－	回転ナデ	ヘラミガキ	にぶい黄	黒	
	714	Ⅵ	W	2	黒色土器	8.5	3.8	2.2	回転ナデ	ヘラミガキ	黄灰	黒	一個体
	715	Ⅵ	W	3	赤色土器	8.4	3.8	2.0	回転ナデ	ヘラミガキ	黄灰	橙	一個体
	716	Ⅵ	Z	2	赤色土器	14.6	－	－	ミガキ摩耗	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい橙	
	717	Ⅳ	Y	2	赤色土器	－	7.8	－	ミガキ摩耗	ミガキ摩耗	褐灰	褐灰	
	718	Ⅶ	Z	2	赤色土器	23.2	8.3	8.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	719	Ⅵ	W	3	赤色土器	12.4	6.9	3.8	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	
	720	Ⅵ	W	2	赤色土器	13.6	－	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	橙	
	721	Ⅶ	V	7	赤色土器	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	橙	
	722	Ⅵ	X	2	赤色土器	17.3	－	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	橙	
	723	Ⅵ	W	2	赤色土器	－	8.3	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	橙	
	724	Ⅴb	Z	3	赤色土器	－	8.7	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	橙	
	725	Ⅵ	X	3	赤色土器	－	8.1	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	橙	
	726	Ⅶ	X	3	赤色土器	－	7.9	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	橙	
	727	Ⅵ	Z	2	赤色土器	－	7.0	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	橙	
	728	Ⅵ	V	3	赤色土器	－	7.2	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	橙	
	729	Ⅵ	X	8	赤色土器	－	9.2	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	橙	
	730	Ⅵ	V	2	赤色土器	－	7.8	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	橙	
	731	Ⅵ	X	2	赤色土器	－	8.0	－	回転ナデ	回転ナデ	灰白	橙	

表18　古代出土遺物観察表（3）

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	口径	底径	器高	調整		色調		備考
						(cm)	(cm)	(cm)	外	内	外	内	
80	732	Ⅵ	V	4	赤色土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	橙	
	733	Ⅵ	V	2	赤色土器	—	—	—	摩耗	摩耗	浅黄橙	褐灰	
	734	Ⅵ	X	8	赤色土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	
	735	—	Y	4	蓋	2.8	—	—	指ナデ	指ナデ	浅黄橙	橙	
	736	Ⅵ	Y	2	蓋	2.7	—	—	指ナデ	指ナデ	浅黄橙	橙	
81	737	Ⅵ	V	3	刻書土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	橙	
	738	Ⅵ	Z	2	ヘラ書き土器	10.4	8.4	1.3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	739	Ⅵ	Y	3	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	740	Ⅵb	W	2	ヘラ書き土器	16.9	13.1	1.9	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	741	Ⅴb	Z	3	ヘラ書き土器	16.3	8.1	5.2	回転ナデ	回転ナデ	明褐灰	明褐灰	
	742	Ⅵ	X	2	ヘラ書き土器	—	8.5	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	743	Ⅵ	X	2	ヘラ書き土器	—	8.2	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
82	744	Ⅴb	W	2	ヘラ書き土器	—	6.5	—	回転ナデ	回転ナデ	灰黄	灰白	
	745	Ⅵ	X	3	ヘラ書き土器	—	7.6	—	摩耗	摩耗	灰白	灰白	
	746	Ⅵ	X	2	ヘラ書き土器	—	6.1	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	747	Ⅵb	W	2	ヘラ書き土器	—	5.7	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	748	Ⅵ	Y	3	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	
	749	Ⅴb	X	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	750	Ⅴb	W	3	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	751	Ⅵ	X	1	ヘラ書き土器	—	—	—	ミガキ	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	
	752	Ⅵ	X	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	753	Ⅴb	X	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	754	Ⅵ	X	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐	灰黄褐	
	755	Ⅵ	X	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	
	756	—	Y	4	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	にぶい黄橙	
	757	Ⅱ	Y	3	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	758	Ⅵ	W	8	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	黄橙	黄橙	
	759	Ⅴb	X	3	ヘラ書き土器	12.4	7.7	4.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	灰白	
	760	Ⅵ	X	2	ヘラ書き土器	—	6.4	—	摩耗	摩耗	浅黄橙	浅黄橙	
	761	Ⅳ	Y	2	ヘラ書き土器	—	8.2	—	摩耗	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	762	Ⅵ	Y	3	ヘラ書き土器	—	8.6	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白	浅黄橙	
	763	Ⅵ	X	2	ヘラ書き土器	—	6.7	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	764	Ⅵ	X	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	ヘラミガキ	灰黄	黒	
	765	Ⅵ	X	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	灰白	
	766	Ⅵ	Y	3	ヘラ書き土器	—	6.0	—	摩耗	ナデ	灰白	浅黄橙	
	767	Ⅵ	Y	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	褐灰	褐灰	
	768	Ⅵb	W	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	769	Ⅵ	X	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	灰白	
	770	Ⅴb	Y	3	墨書土器	8.9	7.1	1.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	771	Ⅳb	Z	2･3	墨書土器	13.1	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	772	Ⅴb	X	2	墨書土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	
	773	Ⅴb	Z	2	墨書土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	
	774	Ⅴb	Y	3	墨書土器	14.2	10.1	2.3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	775	Ⅵ	X	3	墨書土器	—	8.0	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	776	Ⅵ	a	3	墨書土器	8.3	7.2	1.4	回転ナデ	ハケメ後ナデ	浅黄橙	にぶい橙	
	777	Ⅵ	Y	2	墨書土器	—	6.3	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	にぶい橙	
83	778	—	—	—	土師甕	28.7	—	—	ナデ	ヘラケズリ	浅黄橙	黒褐	
	779	Ⅴb	X	3	土師甕	29.2	—	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	780	Ⅵ	X	2	土師甕	28.2	—	—	ナデ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	781	Ⅵ	Y	3	土師甕	26.6	—	—	横ナデ	ヘラケズリ	橙	橙	金雲母
	782	Ⅵ	X	2	土師甕	25.8	—	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	金雲母
	783	Ⅵ	X	1	土師甕	23.4	—	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい橙	橙	
	784	Ⅵ	X	3	土師甕	26.2	—	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい褐	にぶい褐	小礫多
	785	Ⅵ	Y	2	土師甕	24.1	—	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
	786	Ⅵ	Y	3	土師甕	26.8	—	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	橙	にぶい褐	金雲母
	787	Ⅵ	Y	2	土師甕	23.8	—	—	ナデ	ヘラケズリ	褐灰	にぶい黄橙	
84	788	Ⅵ	X	2	土師甕	25.8	—	—	ナデハケメ	ヘラケズリ	褐灰	にぶい黄橙	金雲母
	789	Ⅵ	Y	3	土師甕	25.0	—	—	ナデ後ハケメ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙	金雲母
	790	Ⅵ	Y	2	土師甕	—	—	—	ナデ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙	
	791	Ⅵ	Y	3	土師甕	—	—	—	ナデ	ヘラケズリ	にぶい橙	黄灰	
	792	Ⅵ	X	3	土師甕	—	—	—	ナデ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	

表19　古代出土遺物観察表（4）

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	口径	底径	器高	調整		色調		備考
						(cm)	(cm)	(cm)	外	内	外	内	
84	793	Ⅵ	X	2	土師甕	―	―	―	ナデ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	明黄褐	
	794	Ⅵ	X	2	土師甕	15.2	―	―	ナデ	ヘラケズリ	橙	橙	
	795	Ⅴb	W	2	土師甕	―	―	―	ナデ後ハケメ	ハケメ後ナデ	淡黄	橙	
	796	Ⅴb	Y	2	土師甕	―	―	―	ナデ	ヘラケズリ	淡黄	にぶい黄	金雲母
	797	Ⅵ	X	2	土師甕	20.1	―	―	ナデ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙	
	798	Ⅴb	Z	2	土師甕	―	―	―	ナデ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙	金雲母
	799	Ⅴb	X	2	土師甕	―	―	―	ナデ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙	金雲母
	800	―	V	3	土師甕	30.0	―	―	ナデ	ヘラケズリ	橙	橙	金雲母
	801	Ⅴb	Z	2･3	土師甕	―	―	―	ナデ	ヘラケズリ	橙	橙	
	802	Ⅴb	a	2	土師甕	―	―	―	ナデ	ヘラケズリ	橙	橙	
	803	Ⅵ	a	3	土師甕	―	―	―	ナデ	ヘラケズリ	橙	橙	
	804	Ⅳb	X	2	土師甕	22.8	―	―	ナデ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙	
						最大長	最大幅	最大厚					
85	805	Ⅵ	X	3	土錘	5.5	2.9	―	手捏ね	手捏ね	灰黄	灰黄	
	806	Ⅵ	X	3	土錘	5.0	2.1	―	手捏ね	手捏ね	灰黄	灰黄	
	807	Ⅵ	X	2	土錘	5.0	2.0	―	手捏ね	手捏ね	明褐灰	明褐灰	
	808	Ⅵ	a	3	土錘	4.0	1.8	―	手捏ね	手捏ね	灰黄	灰黄	
	809	Ⅵ	X	3	土錘	4.0	1.4	―	手捏ね	手捏ね	橙	にぶい橙	
	810	Ⅴb	Y	3	土錘	4.0	1.7	―	手捏ね	手捏ね	にぶい橙	にぶい橙	
	811	Ⅴb	Y	3	土玉	3.0	1.5	―	手捏ね	手捏ね	にぶい橙	にぶい橙	
	812	Ⅴb	Y	3	土玉	2.5	2.5	―	手捏ね	手捏ね	明褐灰	明褐灰	
	813	Ⅴb	Y	3	紡錘車	5.0	―	0.7	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	穿孔あり
	814	Ⅴb	Z	2	紡錘車	―	―	0.7	ナデ	ナデ	灰白	灰白	穿孔なし
						口径	底径	器高					
85	815	Ⅵ	X	2	蓋	22.1	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	にぶい橙	橙	
	816	Ⅵ	U	3	蓋	―	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	明褐灰	灰	
	817	Ⅴb	Z	2	蓋	16.0	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	灰白	明褐灰	
	818	Ⅵ	X	2	蓋	13.2	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	橙	橙	
	819	Ⅵ	Y	3	蓋	―	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	灰黄	灰	
	820	Ⅴb	X	2	坏	12.4	7.4	3.4	ろくろナデ	ろくろナデ	灰	灰	
	821	Ⅴb	V	1	坏	18.6	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	灰	灰オリーブ	
	822	Ⅴb	X	3	坏	16.4	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	灰	灰オリーブ	
	823	Ⅵ	a	3	坏	20.1	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	暗灰黄	黄灰	
	824	Ⅵ	X	2	坏	13.5	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	褐灰	褐灰	
	825	Ⅵ	Y	3	坏	11.1	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	褐灰	褐灰	
	826	Ⅵ	a	3	坏	―	7.6	―	ろくろナデ	ろくろナデ	灰黄	灰黄	
	827	Ⅵ	X	2	坏	12.2	8.2	4.4	ろくろナデ	ろくろナデ	灰黄褐	灰黄褐	
	828	Ⅵ	X	3	坏	―	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	灰	褐灰	
	829	Ⅵ	X	4	坏	―	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	灰	褐灰	
86	830	Ⅴb	X	2	皿	13.1	11.1	3.1	ろくろナデ	ろくろナデ	黄灰	黄灰	
	831	Ⅵ	Y	3	埦	20.1	10.2	8.2	ろくろナデ	ろくろナデ	黄灰	黄灰	
	832	Ⅵ	X	3	埦	16.1	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	褐灰	褐灰	
	833	Ⅵ	X	3	甕	33.8	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	にぶい赤褐	にぶい黄	
	834	Ⅴb	X	2	甕	47.3	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	
	835	Ⅴb	X	3	甕	33.2	―	―	格子目タタキ	ろくろナデ	黄灰	黄灰	
	836	Ⅵ	X	3	甕	28.6	―	―	平行タタキ	ろくろナデ	にぶい赤褐	灰赤	
	837	Ⅴb	a	3	甕	17.8	―	―	格子目タタキ	ろくろナデ	黒褐	黒褐	
	838	Ⅴb	Y	3	甕	18.2	―	―	平行タタキ	ろくろナデ	にぶい赤褐	黄	
	839	Ⅴb	X	2	甕	20.2	―	―	平行タタキ	同心円当て具	にぶい赤褐	黄	
	840	Ⅵ	X	3	甕	22.2	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	にぶい黄	にぶい黄褐	
	841	Ⅴb	Y	2	甕	19.4	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	にぶい橙	にぶい橙	
87	842	Ⅴb	U	3	甕	21.8	―	―	格子目タタキ	ろくろナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	
	843	Ⅵ	Z	2	甕	21.8	―	―	格子目タタキ	ろくろナデ	にぶい赤褐	にぶい黄	
	844	Ⅵ	a	4	甕	18.8	―	―	格子目タタキ	ろくろナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	
	845	Ⅵ	V	2	甕	―	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	
	846	Ⅵ	a	4	甕	―	―	―	格子目タタキ	ろくろナデ	灰黄	橙	
	847	Ⅵ	V	2	甕	―	―	―	平行タタキ後ナデ	車輪文当て具	にぶい褐	にぶい黄橙	
	848	Ⅵ	Y	2	甕	―	―	―	格子目タタキ	ろくろナデ	にぶい橙	にぶい橙	
	849	Ⅵ	Y	3	甕	―	―	―	平行タタキ後ナデ	同心円当て具	褐	にぶい橙	
	850	Ⅵ	Y	2	甕	―	―	―	格子目タタキ後ナデ	同心円当て具	灰褐	灰黄	
	851	Ⅵ	Y	3	甕	―	―	―	格子目タタキ	ろくろナデ	にぶい黄	にぶい赤褐	
88	852	Ⅴb	W	2	甕	―	―	―	格子目タタキ	同心円当て具	オリーブ褐	にぶい赤褐	
	853	Ⅵ	W	2	甕	―	―	―	平行タタキ	同心円当て具	灰	オリーブ黄	

表20　古代出土遺物観察表（5）

挿図番号	レイアウト番号	層	区		器種	口径	底径	器高	調整		色調		備考
						(cm)	(cm)	(cm)	外	内	外	内	
88	854	Ⅵ	W	2	甕	―	―	―	平行タタキ	同心円当て具	黄灰	黄灰	
	855	Ⅵ	W	2	甕	―	―	―	平行タタキ	同心円当て具	オリーブ褐	灰黄	
	856	Ⅷ	V	2	甕	―	―	―	平行タタキ	同心円当て具	にぶい黄	にぶい赤褐	
	857	Ⅵ	X	2	甕	―	―	―	平行タタキ	同心円当て具	明黄褐	明褐灰	
	858	Ⅴb	X	2	甕	―	―	―	平行タタキ	同心円当て具	黄灰	黄灰	
	859	Ⅵ	X	2	甕	―	―	―	平行タタキ	同心円当て具	橙	橙	
	860	Ⅵ	X	7	甕	―	―	―	平行タタキ後ナデ	同心円当て具	黒褐	黄灰	
	861	Ⅵ	Y	3	甕	―	―	―	格子目タタキ	同心円当て具	灰白	灰黄褐	
	862	Ⅵ	a	3	甕	―	―	―	平行タタキ	平行タタキ後ナデ	灰黄	橙	
	863	Ⅵ	X	2	甕	―	―	―	平行タタキ	車輪文当て具	暗灰黄	暗灰黄	
89	864	Ⅵ	Y	3	甕	―	―	―	平行タタキ	平行当て具	淡黄	淡黄	
	865	Ⅵ	Y	3	甕	―	―	―	格子目タタキ	平行当て具	橙	にぶい黄褐	
	866	Ⅵ	Y	3	甕	―	―	―	平行タタキ	平行当て具	にぶい赤褐	にぶい橙	
	867	Ⅵ	U	3	甕	―	―	―	平行タタキ	平行当て具	浅黄橙	にぶい橙	
	868	Ⅵ	Z	2	甕	―	―	―	格子目タタキ	平行当て具	オリーブ褐	黄褐	
	869	Ⅵ	X	2	甕	―	―	―	格子目タタキ	平行タタキ	暗灰黄	黄灰	
	870	Ⅵ	a	3	甕	―	―	―	格子目タタキ後ナデ	平行当て具	褐	褐	
	871	Ⅵ	Y	3	甕	―	―	―	ろくろナデ	同心円当て具	オリーブ褐	黄灰	
	872	Ⅵ	Y	3	甕	―	―	―	平行タタキ	平行当て具	灰褐	にぶい褐	
	873	Ⅵ	Y	3	甕	―	―	―	平行タタキ	同心円当て具	黄褐	黄褐	
	874	Ⅵ	X	3	甕	―	―	―	平行タタキ	平行当て具	灰黄	にぶい黄褐	
	875	Ⅵ	Y	3	甕	―	―	―	平行タタキ	平行当て具	灰黄	にぶい黄褐	
	876	Ⅵ	X	3	甕	―	―	―	格子目タタキ後ナデ	同心円当て具	にぶい褐	褐灰	
90	877	―	V	2	甕	―	―	―	格子目タタキ	同心円当て具	にぶい褐	黄橙	
	878	Ⅴb	a	2	甕	―	―	―	平行タタキ	同心円当て具	褐灰	暗灰黄	
	879	Ⅴb	a	3	甕	―	―	―	格子目タタキ	同心円当て具	橙	橙	
	880	Ⅴb	Y	3	甕	―	―	―	平行タタキ	平行当て具	褐灰	灰	
	881	Ⅴb	Y	3	甕	―	―	―	格子目タタキ	平行当て具	黒褐	黄灰	
	882	Ⅵ	Y	3	甕	―	―	―	平行タタキ	平行当て具	にぶい黄	黄灰	
	883	Ⅵ	X	2	甕	―	―	―	平行タタキ	同心円当て具	黄灰	暗灰黄	
	884	Ⅵ	U	3	甕	―	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	灰褐	橙	
	885	Ⅵ	X	9	甕	―	―	―	平行タタキ	平行当て具	にぶい橙	明黄褐	
	886	Ⅵ	X	2	甕	―	―	―	格子目タタキ	平行当て具	浅黄橙	にぶい黄橙	
91	887	Ⅵ	Z	2	甕	―	―	―	平行タタキ	平行当て具	にぶい赤褐	にぶい黄橙	
	888	Ⅵ	X	2	壺	―	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	浅黄橙	にぶい橙	
	889	Ⅵ	Z	2	壺	―	―	―	ろくろナデ	ろくろナデ	淡黄	淡黄	
	890	Ⅵ	V	2	壺	―	10.1	―	平行タタキ	ナデ	オリーブ褐	にぶい黄	
	891	Ⅵ	X	2	壺	―	―	―	平行タタキ	ナデ	淡黄	淡黄	
	892	Ⅵ	V	2	壺	―	―	―	平行タタキ	平行タタキ	白灰色	白灰色	
	893	Ⅵ	W	6･7	底部	―	6.6	―	ろくろナデ	ろくろナデ	にぶい黄	褐	
	894	Ⅵ	Z	2	底部	―	13.4	―	平行タタキ	ろくろナデ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	
	895	Ⅵ	X	2	底部	―	11.2	―	格子目タタキ	ろくろナデ	にぶい赤褐	暗灰黄	
	896	Ⅵ	Y	3	底部	―	14.1	―	格子目タタキ後ナデ	ナデ	にぶい赤褐	暗灰黄	
	897	Ⅵ	X	2	底部	―	14.6	―	平行タタキ後ナデ	ナデ	灰白	オリーブ褐	
	898	Ⅵ	Z	2	底部	―	11.1	―	平行タタキ後ナデ	指ナデ	暗灰黄	灰黄	
	899	Ⅵ	X	2	底部	―	12.8	―	ろくろナデ	ろくろナデ	オリーブ黒	灰	
	900	Ⅵ	Z	2	底部	―	15.8	―	ろくろナデ	ろくろナデ	橙	にぶい黄橙	

第６章　中・近世の調査

第１節　調査の概要

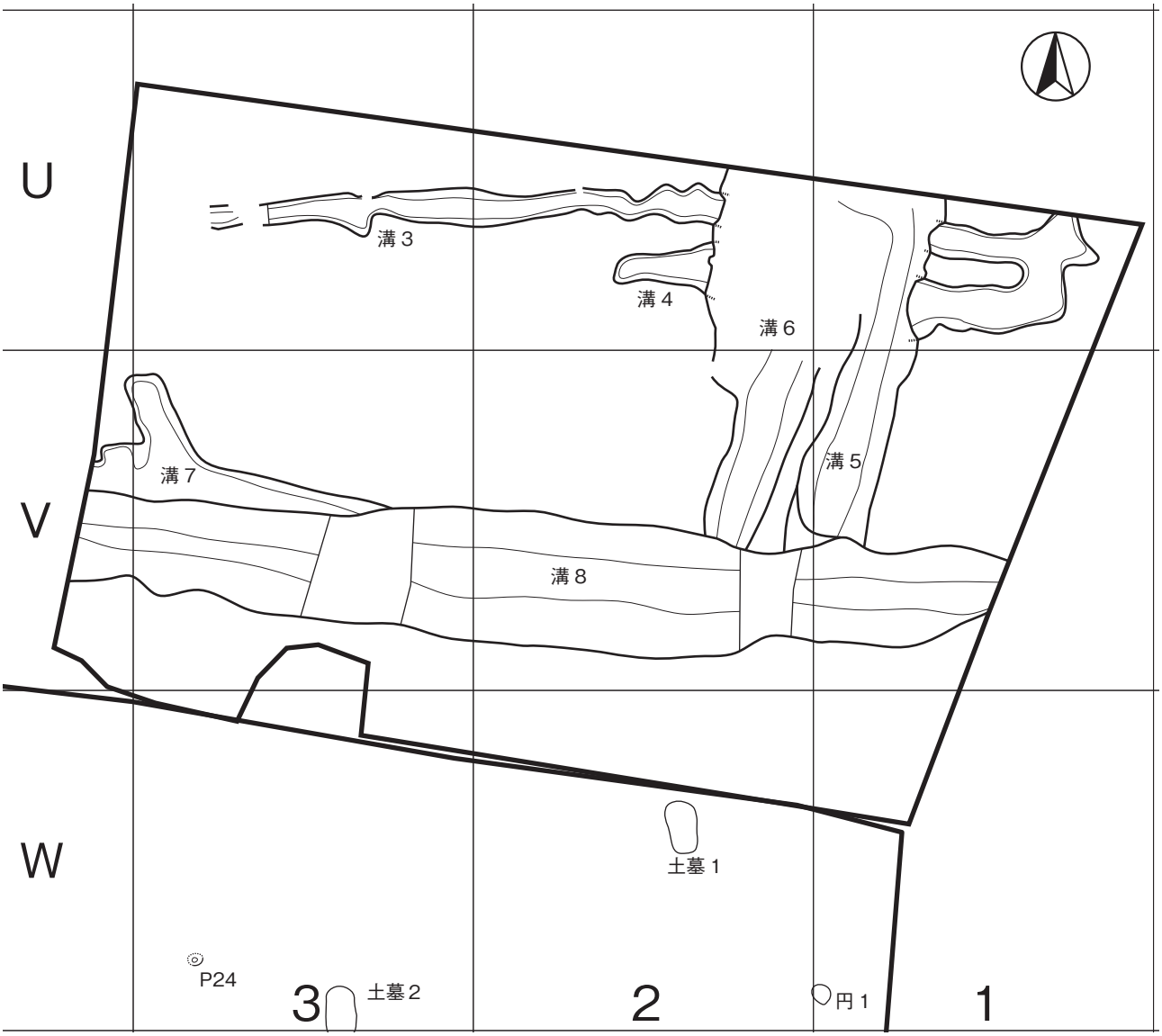
中・近世の調査対象となる層位は，Ⅱ～Ⅳ層である。

しかし，層序で述べたとおり河川の氾濫等によって層位が安定していないため，弥生・古墳時代～古代にかけて検出された遺構内へ流れ込んだ該期の遺物も多い。それらについては，包含層遺物として報告することにした。

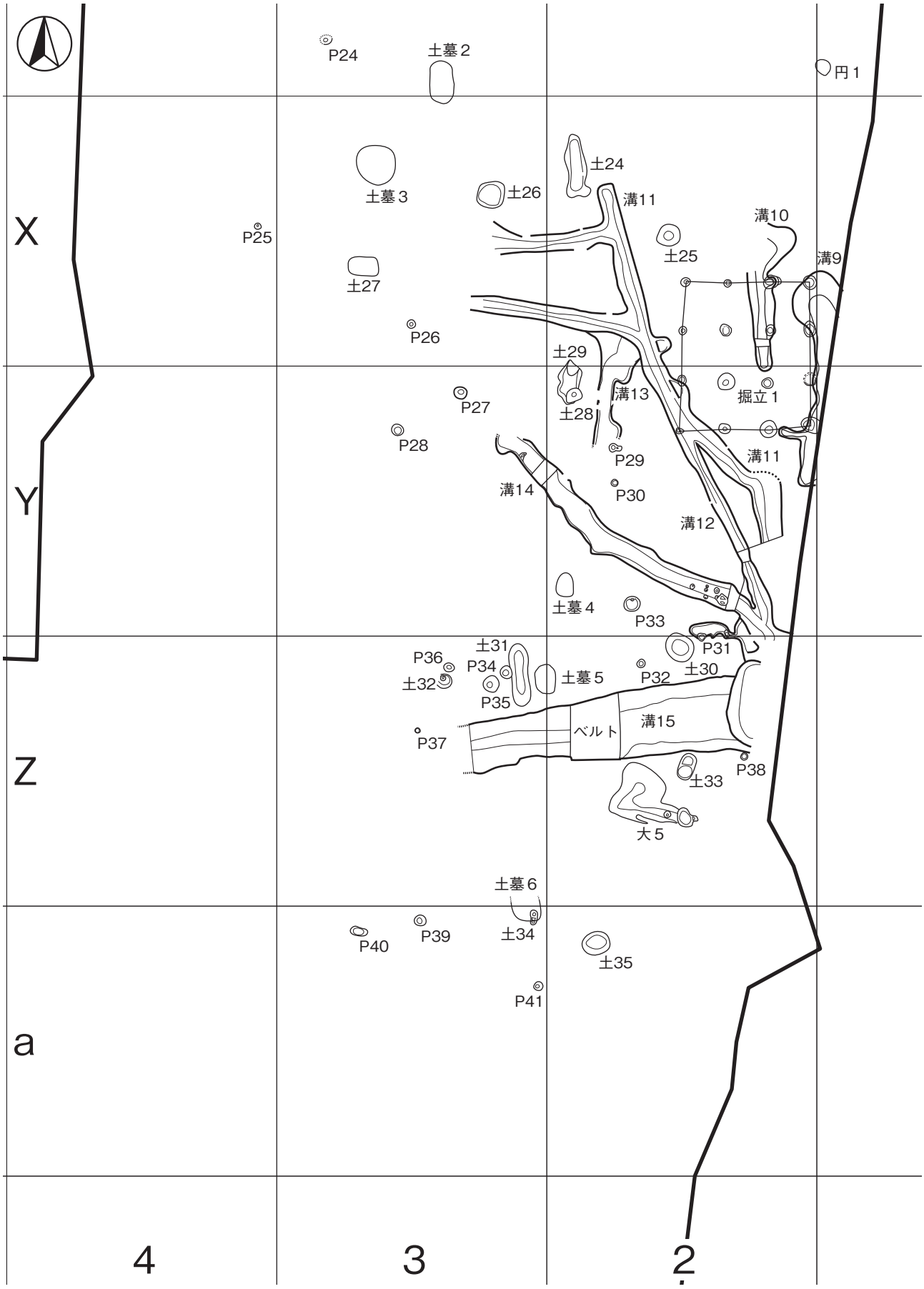
また，表層とⅡ層が混在している箇所も多く，そこで出土した遺物については，表採遺物として一括で取り上げ，資料的価値が高いものは掲載することにした。

遺構検出は，Ⅴｂ～Ⅵ層で行った。その結果，該期の遺構として掘立柱建物跡１軒，溝状遺構16基，井戸状遺構１基，炉状遺構３基，土壙墓６基，大型土坑２基，円形粘土塊状遺構１基，土坑12基，ピット19基を検出した。（図92～94）

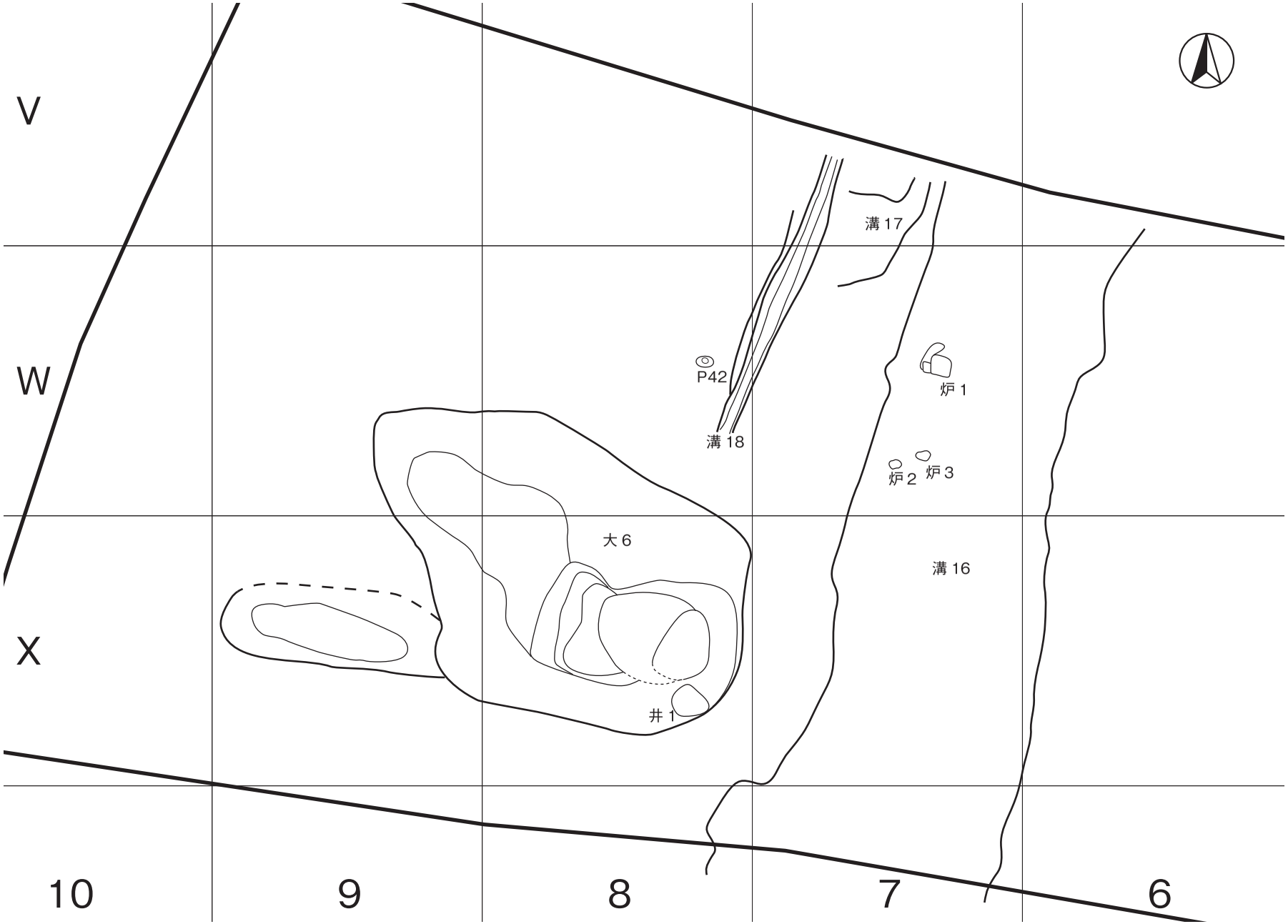
遺物は，土師器，須恵器，白磁，青磁，青花，輸入陶器，国内産陶器，国内産磁器，瓦質土器，土師質土器，土製品，滑石製品，古銭等が出土した。



第92図　中・近世検出遺構配置図（1）



第93図　中・近世検出遺構配置図（2）



第94図　中・近世検出遺構配置図（3）

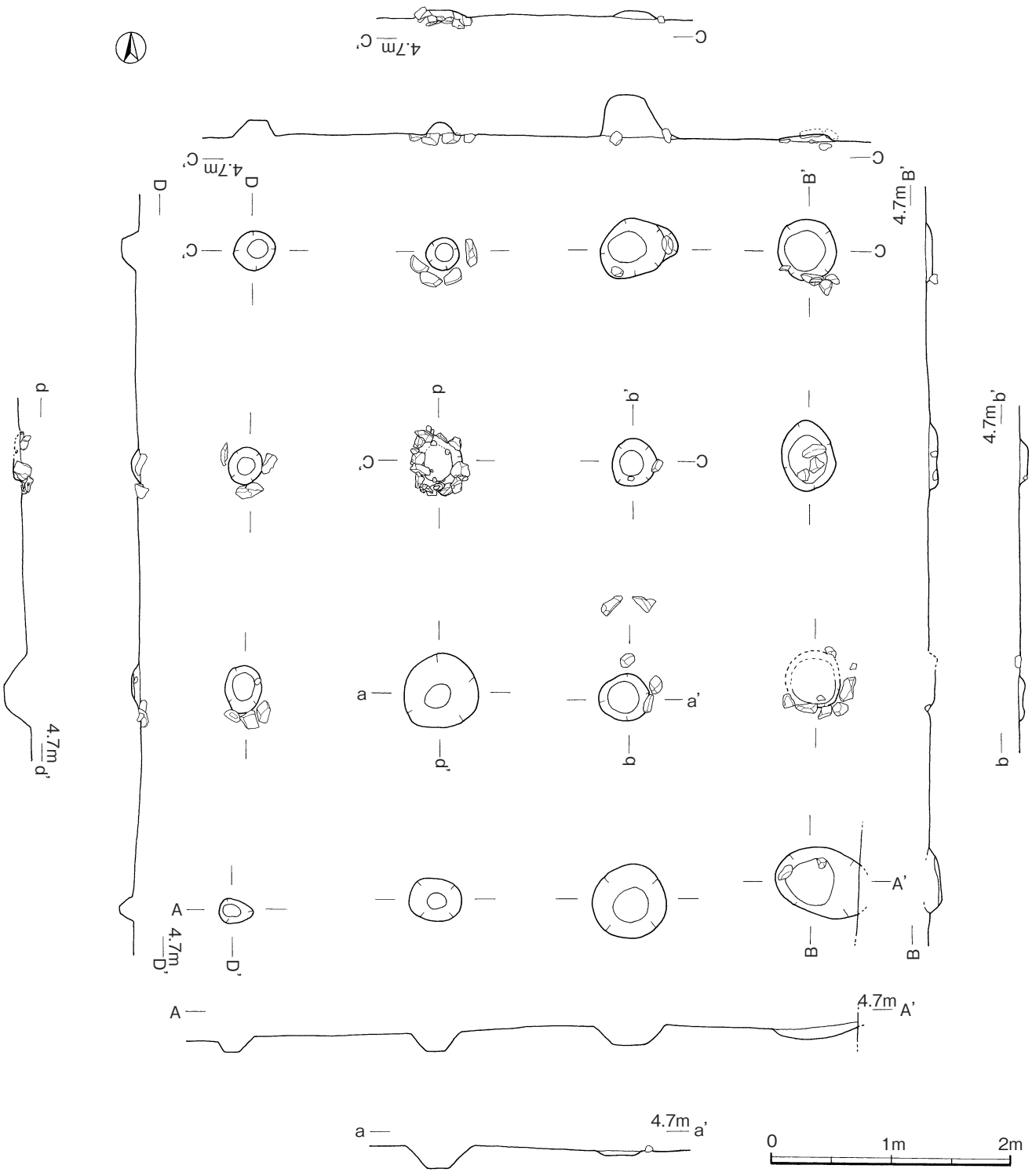
第２節　遺構

該期の遺構は，Ｕ～ａ－１～４区の範囲に集中して検出した。また，Ｖ～Ｙ－５～10区については，中世の包含層であるⅢ・Ⅳ層は削平されていたが，近世の遺物包含層であるⅡ層は確認できた。

１　掘立柱建物跡（第95図）

Ｘ・Ｙ－２区のⅢ層上面で，柱穴跡と考えられるピットが16基検出した。

南北方向，東西方向ともに柱間３間の総柱建物跡である。



第95図　掘立柱建物跡実測図

柱間隔は，東西方向が北からおおよそ1.6m ＋1.5m ＋1.5m で4.6m，1.55m ＋1.55m ＋1.5m で4.6m，1.55m ＋1.55m ＋1.55m で4.65m，1.6m ＋1.55m ＋1.55m で4.7m とほぼ同間隔である。

南北方向は，西からおおよそ1.9m ＋1.8m ＋1.8m で5.5m，1.7m ＋ 2 m ＋1.7m で5.4m，1.8m ＋ 2 m ＋1.8m で5.6m，1.8m ＋1.9m ＋1.8m で5.5m と同様にほぼ同間隔である。

それぞれの柱穴跡は，直径が約20cm ～70cm で深さが約10cm ～40cm と異なっており，石組みによる補強がされているものもある。

柱穴跡が同間隔に配列されていることと，配列方向が真北，真西を向いていることが特筆すべき点である。

遺構に伴う遺物は大量に出土したが，小片が多いため該期のものとして形式がはっきりしているもの８点を掲載した。

掘立柱建物跡内出土遺物（第96図901～908）

901～904は土師器である。901・902は皿で，901の体部は丸みを帯びながら立ち上がる。903は坏である。904は黒色土器Ｂ類の皿である。内面と外側面はミガキが施される。

905・906は，中国南部産と思われる輸入陶器である。905は水注等の口縁部で，褐釉がかかるが剥落している。906は瓶もしくは壺等の胴部である。外面の一部に鉄釉がかかる。

907・908は胎土が小豆色を呈するカムィヤキで，甕の胴部と頸部と思われる。

その他，土師器の皿・坏約190点，須恵器５点，カムィヤキ２点，白磁５点，青磁１点，布目瓦１点が出土している。出土遺物等から，中世前期11世紀後半～13世紀代を中心とする遺構と思われる。

２　溝状遺構

(1) ３～８号溝状遺構（第97図）

Ｕ・Ｖ－１～４区のⅡ層上面から，６基が集中して検出した。

切り合い関係は，３・４号が５・６号に切られ，さらに５・６号が８号に切られた状態であることから，８号が最も新しい溝であると考えられる。しかし，いずれも埋土は表層の灰褐色砂質土が含まれていることから，６基に大きな時期差はないと考えられる。

３号は全長約26.5m，幅約1.1m で最深部は約16cm あり，東西方向にのびている。

遺物は，土器片等が43点出土したが，時期を確定できない形式不明のものがほとんどであるため掲載しなかった。

４号は全長約14.2m，幅約１m で最深部は約14cm あり３号溝状遺構と平行して東西方向にのびている。

出土遺物は11世紀後半～12世紀前半に相当すると考えられる白磁の椀が１点出土した。

５号は全長約9.9m，幅約2.4m で最深部は約45cm あり，南北方向にのびている。

遺物は，該期のものを12点掲載した。

６号は全長約６m，幅約３m で最深部は約40cm あり，５号と平行して南北方向にのびている。

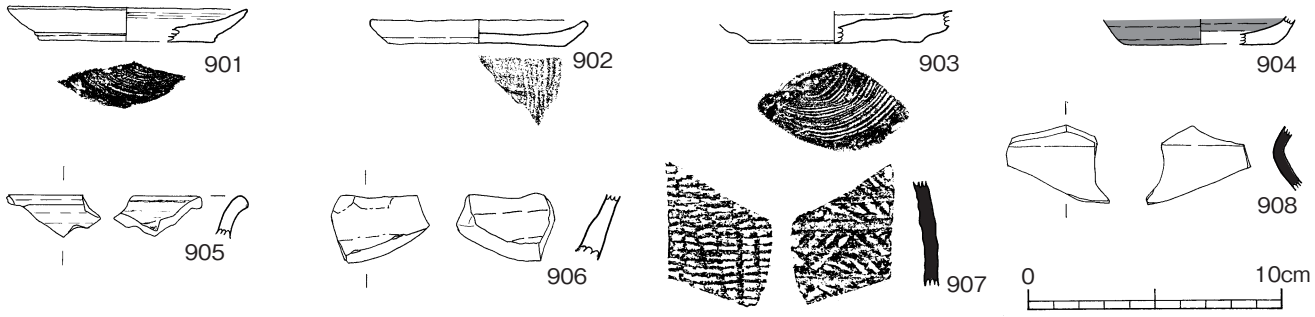
遺物は，該期のものを５点掲載した。

７号は全長約９m，幅約４m で最深部は約25cm あり，８号溝状遺構の北側に隣接している。

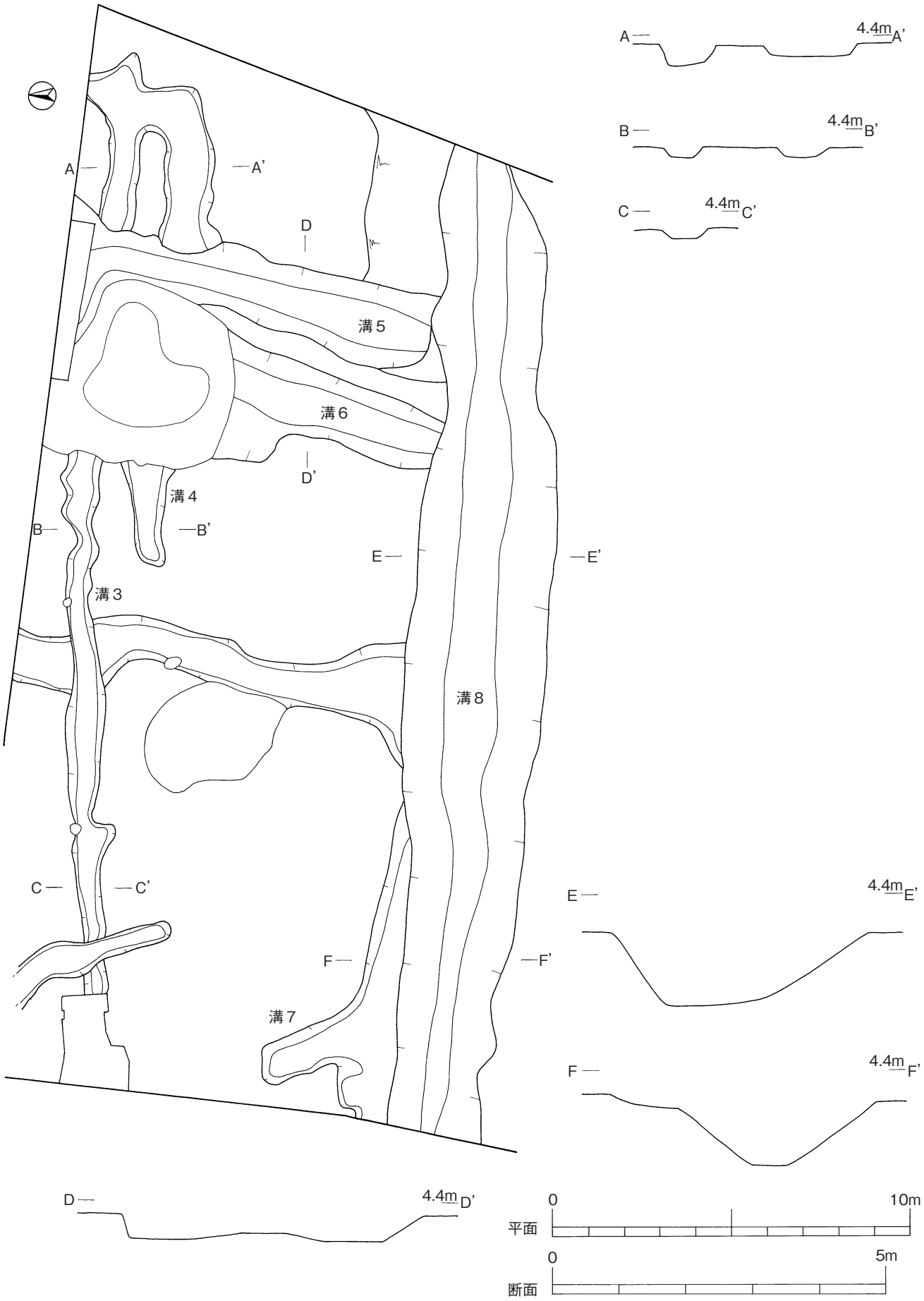
遺物は，該期のものを14点掲載した。

８号は全長約27.2m，幅約3.8m で東西方向に長くのび，最深部は約1.1m の大型溝状遺構である。

該期の遺物は大量に出土し，その内53点を掲載した。



第96図　掘立柱建物跡内出土遺物実測図



第97図　3～8号溝状遺構実測図

３～８号溝状遺構内出土遺物

４号溝状遺構内出土遺物（第98図909）

909は白磁で，内面に短い櫛目文が施される。

５号溝状遺構内出土遺物（第98図910～921）

910は土師器の坏である。外底面の一部には赤色顔料が塗布されている。内面にはススが付着する。

911～914は，龍泉窯系の椀である。911は口縁部がわずかに外反し，外面には中央に鎬をもつ片彫蓮弁文が描かれる。912・913は底部である。畳付と高台内面は釉剥ぎされる。外面には鎬を有する片彫蓮弁文が描かれる。914は畳付まで釉がかかり，内底面と見込みは円状に釉剥ぎされる。915は，同安窯系椀の口縁部である。口縁部下位で内側に屈曲し，外面には縦位に櫛目文，内面にはジグザグ連点文が描かれる。

916・917は白磁である。916は椀の底部で，外面腰部から高台内底面にかけては無釉であり，見込みも輪状に釉剥ぎされる。917は坏である。外面腰部から高台内面にかけて露胎し，高台には抉りが入る。見込みには重ね焼きの高台痕が残る。

918は，輸入陶器の水注もしくは壺の口縁部である。中国南部産と思われる。

919は，樺万丈産と思われる捏鉢である。

920は，瓦質土器の擂鉢である。

921は，備前産擂鉢である。

その他には，土師器約50点，須恵器７点，白磁５点，青磁２点，輸入陶器８点が出土している。出土遺物等から，遺構の年代は13～15世紀頃のものと思われる。

６号溝状遺構内出土遺物（第98図922～926）

922は，口縁部が玉縁を呈する白磁の椀である。

923は，輸入陶器の鉢と思われる。胎土は鈍い灰褐色で粗く，白色の微細な砂粒を多く含む。残存部の内面に褐釉がかかる。

924は，瓦質土器で，擂鉢の底部である。

925は，肥前の染付碗である。

926は，肥前陶器の碗である。腰部に弱い稜を有する。畳付と高台内面を除き，厚めの黒釉がかかる。

その他，土師器９点，須恵器２点が出土しているが，出土遺物の年代幅が大きく，遺構の詳細な年代は不明である。

７号溝状遺構内出土遺物（第98・99図927～940）

927・928は，龍泉窯系青磁の椀である。927は，内面に片彫り文様と短い櫛目文が描かれる。

929は，中国南部産の輸入陶器と思われるもので，水注等の把手である。外面には褐釉がかかる。

930は，樺万丈産と思われる捏鉢である。内面には筋状の調整痕が残る。

931は，東播磨系須恵器の捏鉢である。

932は，景徳鎮窯系青花の碗である。

933は肥前陶器で，唐津焼の皿である。灰色の灰釉がかかる。

934～939は薩摩焼で，苗代川系のものである。934～936は鉢で，934は口縁部が逆Ｌ字状を呈する。935は，口唇部が平坦につくられたものである。936は，口縁部を外側から内側に折り返してつくるもので，口唇部に貝目が残る。935・936は鉢としたが，甕や壺の蓋としての機能をもつ可能性も考えられる。937は擂鉢である。口縁部は外側に折り返して肥厚させ，外面口縁部下位に２条の突帯をつくる。内面の擂り目は，口縁部下位に余白を残して入れられる。938は土瓶の蓋である。上面の鉄釉がかかる。939は土瓶の注口部である。一穴の注口である。

940は土師質土器の焙烙である。外面全体にススが付着する。

その他に須恵器が１点（樺万丈？），輸入陶器４点，青磁８点，国産陶器（薩摩焼苗代川系）７点が出土している。中世後期～近世中頃の遺構と考えられる。

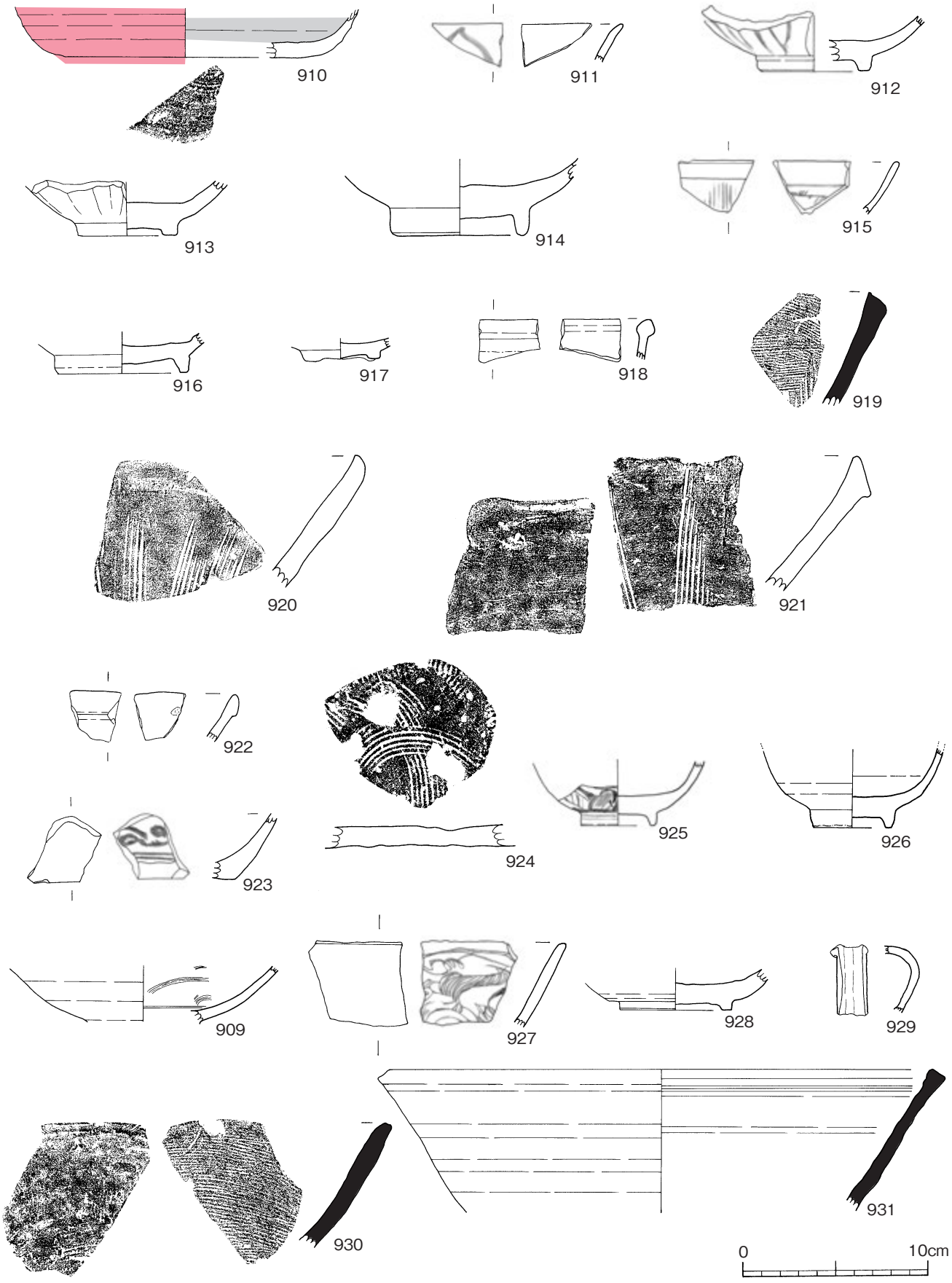
８号溝状遺構内出土遺物（第100図～102図941～993）

941～951は土師器である。941・942は皿で，どちらも体部は丸く立ち上がる。口径は941が約10cm，942が約８cm を測る。943～947は坏である。943はほぼ完形に近いもので，体部は丸みをおびる。内面には回転ナデが観察され，体部との境はナデにより溝状をなす。944は体部が直線的にのびるもので，底部の切り離しが雑で，底部と体部の境にくびれができる。948～950は黒色土器Ａ類である。948の体部は丸みを帯び，内外面とも横方向のミガキが施される。高台は短く，「ハ」の字状を呈する。951は土師器の坏の底部を再利用したメンコである。

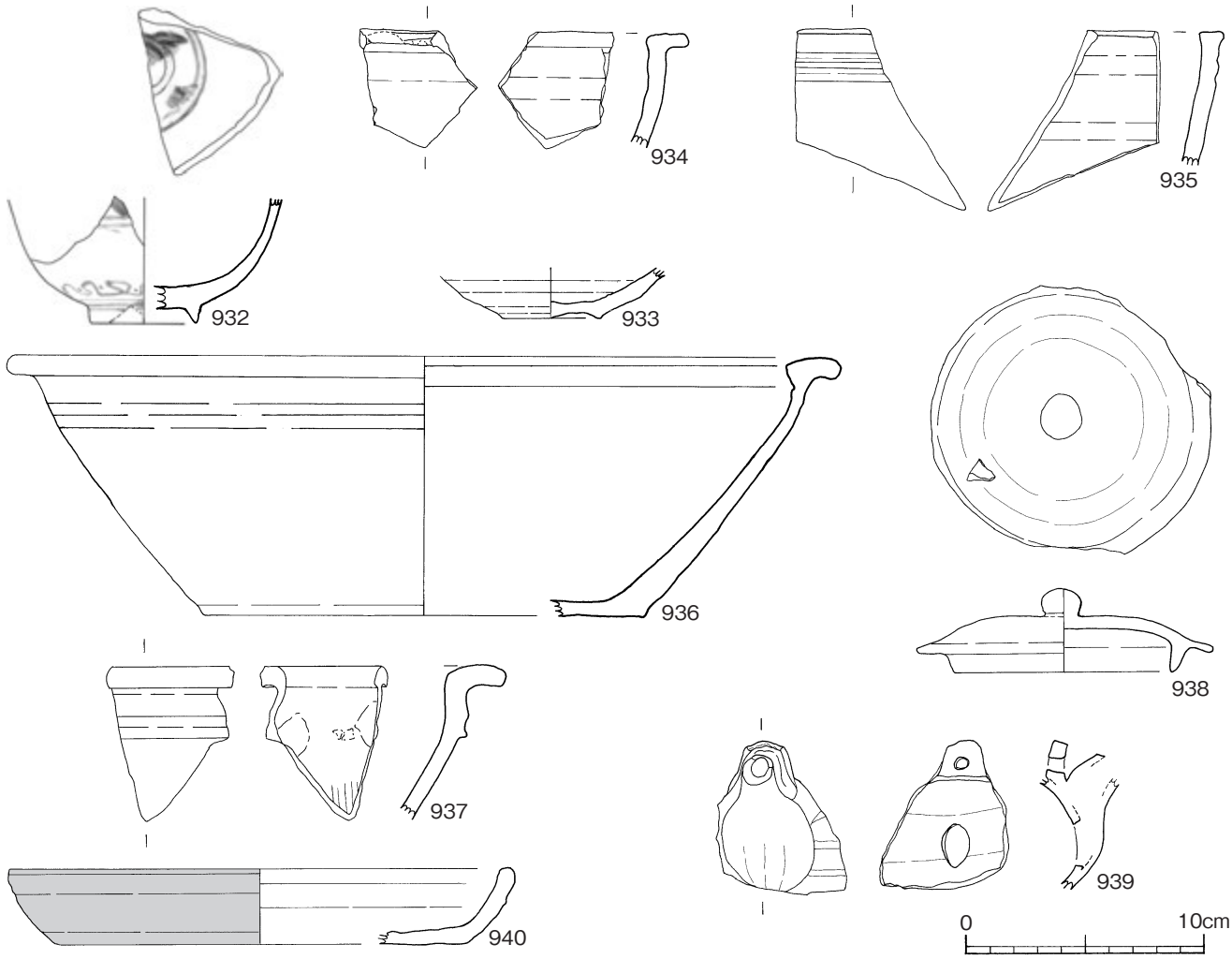
952～964は白磁である。952は，口縁部に小さめの玉縁を有する椀の底部と思われる。953は，口縁部が玉縁状を呈する椀の口縁部で，954は底部である。955～959は，口縁端部が外側に屈曲する形状を呈する椀である。957・958・960は，内面に短い櫛目文が施される。961・962は，高台が先細る形状を呈する底部である。963は皿である。口縁部はわずかに外反する。964は，瓶や壺等，袋物の底部である。

965～972は青磁である。965～967は，龍泉窯系青磁の椀である。965は内面を二又片刃で区画し，その中に花文を描く。966は外面に細線による蓮弁文が描かれるが，剣頭が省略されている。967は外面に，弁の中央に稜を有する蓮弁文が描かれる。

968～971は，同安窯系青磁である。968・969は椀である。968は内面にヘラ状の施文具を用いた文様と櫛の先端を用いたジグザグ文が描かれる。外面は細かい縦の櫛目文が描かれる。969は外面に，ヘラ状の施文具で蓮弁を描き，その中に針先のように先端が尖った工具で細い



第98図　３～８号溝状遺構内出土遺物実測図（１）



第99図　３～８号溝状遺構内出土遺物実測図（２）

縦の櫛目文を描く。970・971は皿である。体部が中位で屈曲するもので，970は無文であるが，971は内面にヘラ状工具による文様とジグザグ連点文が描かれる。

972は，器種不明の資料である。口唇部は蓋を受けるものと考えられ，釉剥ぎされる。973～979は，中国南部産と考えられる輸入陶器である。

973・974は陶器の捏鉢である。口縁部内面には２条の突帯を有する。973は無釉であるが，974は外面と口縁部内面上位のみ施釉される。

975・976は，磁州窯系の瓶の胴部と思われる。灰褐色の素地に褐釉をかけ，白化粧土を塗り，地の部分を掻き落として唐草文を描く。同一個体と思われる２点である。

977～979は壺である。977は，褐釉がかかる小型の壺である。978・979は胎土が粗く，微細な砂粒を多く含む。978は，内面と体部下位以下は無釉である。979は外面は無釉であるが，内面に淡灰褐色に発色した釉薬がかかる。

980は，樺万丈産と思われる捏鉢である。981・982は東播磨系須恵器の捏鉢である。981は片口部である。983・984はカムィヤキの甕である。983は外面に格子状のタタキ目，984は矢羽根状のタタキ目が見られる。

985は，瓦質土器の捏鉢である。

986は備前産の甕の胴部と思われる。

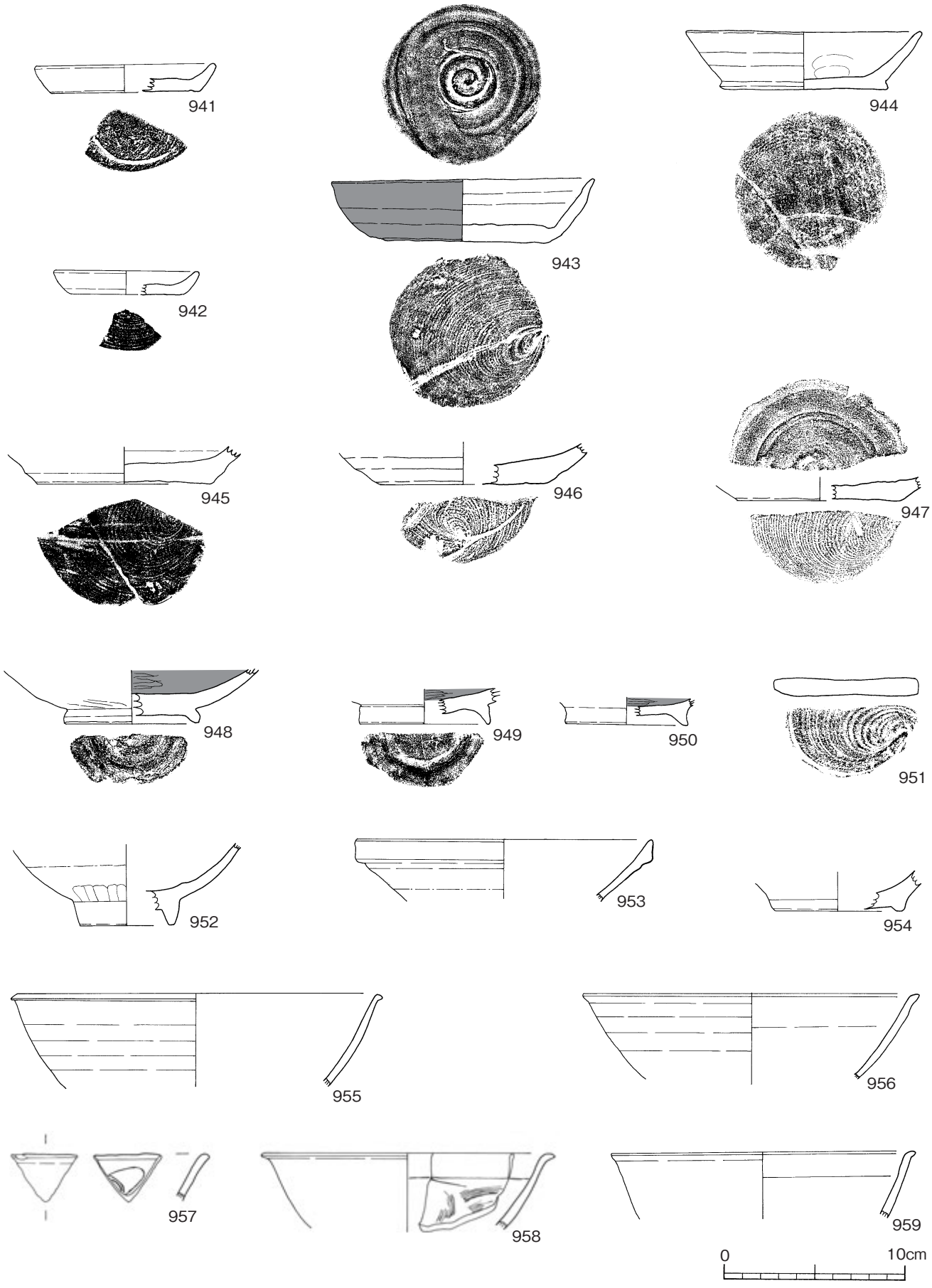
987は滑石製石鍋の底部である。外面に縦位にノミ痕が残る。

988～990は薩摩焼である。988は龍門司系の碗で，畳付と高台内面を除き，鉄釉がかけられる。見込みは蛇の目釉剥ぎされる。989・990は，苗代川系のものである。989は片口で，口唇部を除き内外面に黒色に発色した鉄釉がかかる。外面の釉下には横位に調整痕が見られる。990は甕や壺に被せる蓋の口縁部と思われる。口唇部は平坦につくられる。

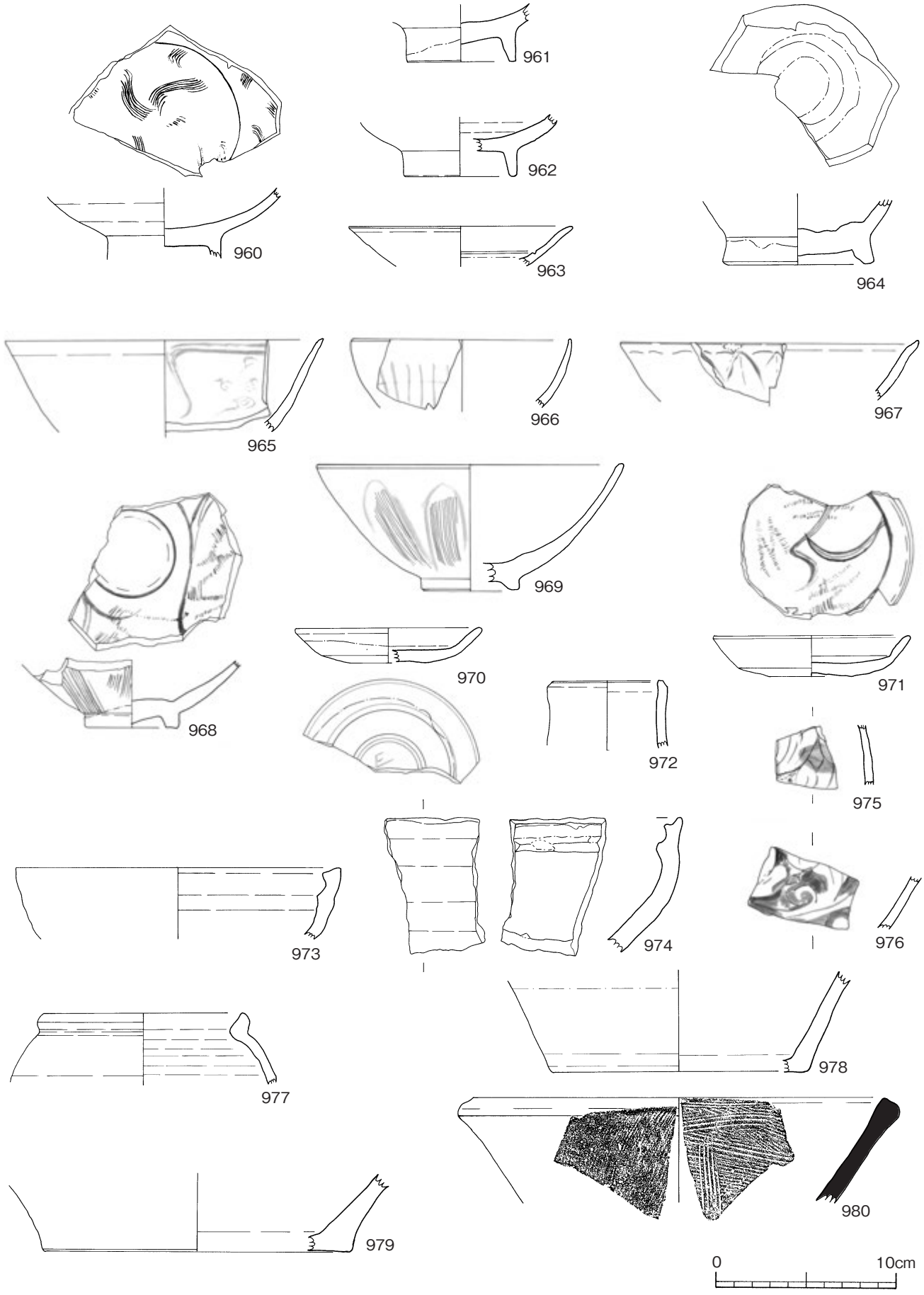
991は土師質土器の焙烙の把手部である。下部にはススが付着する。

992は鞴の羽口である。

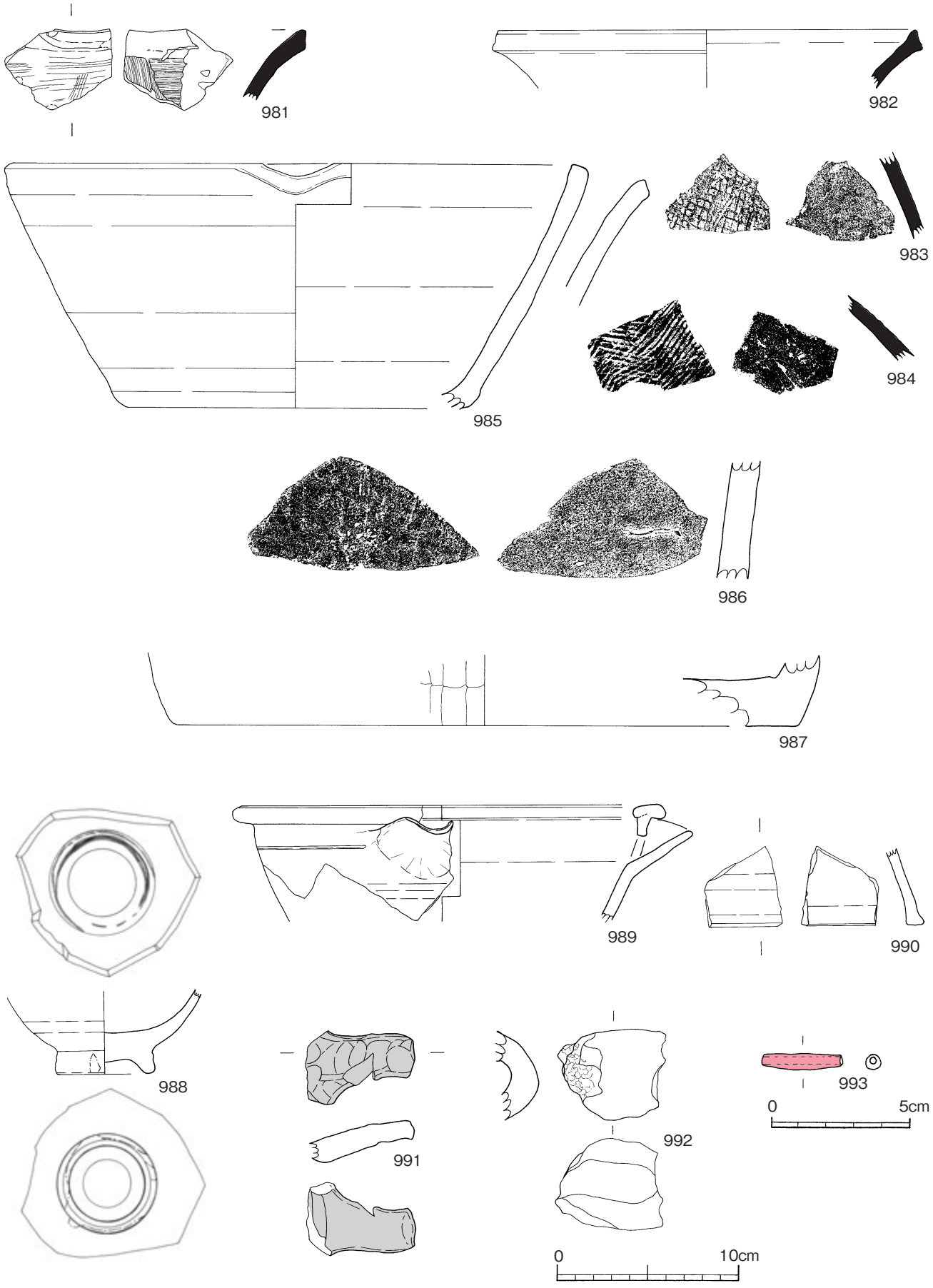
993は管状土錘である。外面には赤色顔料が塗布される。その他の出土遺物として，土師器約45点，白磁16点，青磁20点，輸入陶器24点，瓦質土器３点，国内産陶磁器４点が出土している。遺構年代としては12～13世紀頃を想定したいが，それ以降の時代のものも混入しており，断定は難しい。



第100図　３～８号溝状遺構内出土遺物実測図（３）



第101図　３～８号溝状遺構内出土遺物実測図（４）



第102図　３～８号溝状遺構内出土遺物実測図（５）

(2) ９・10号溝状遺構（第103図）

Ｘ・Ｙ－１・２区のⅣ層上面から検出した。いずれも埋土は表層の灰褐色砂質土である。

９号は全長約８ｍ，幅約２ｍで，最深部は約28cm あり，南北方向にのびている。

出土遺物は土師器の皿１点，黒色土器Ａ類２点，輸入陶器の胴部１点である。そのうち図化できたものは，994の土師器皿の底部のみであった。遺構の年代については，中・近世の範疇ではあるが，絞り込みは不可能である。

10号は全長約5.6m，幅約1.1m，最深部約21cm で，９号と平行して南北方向にのびている。

該期の出土遺物は21点で，その内５点を掲載した。

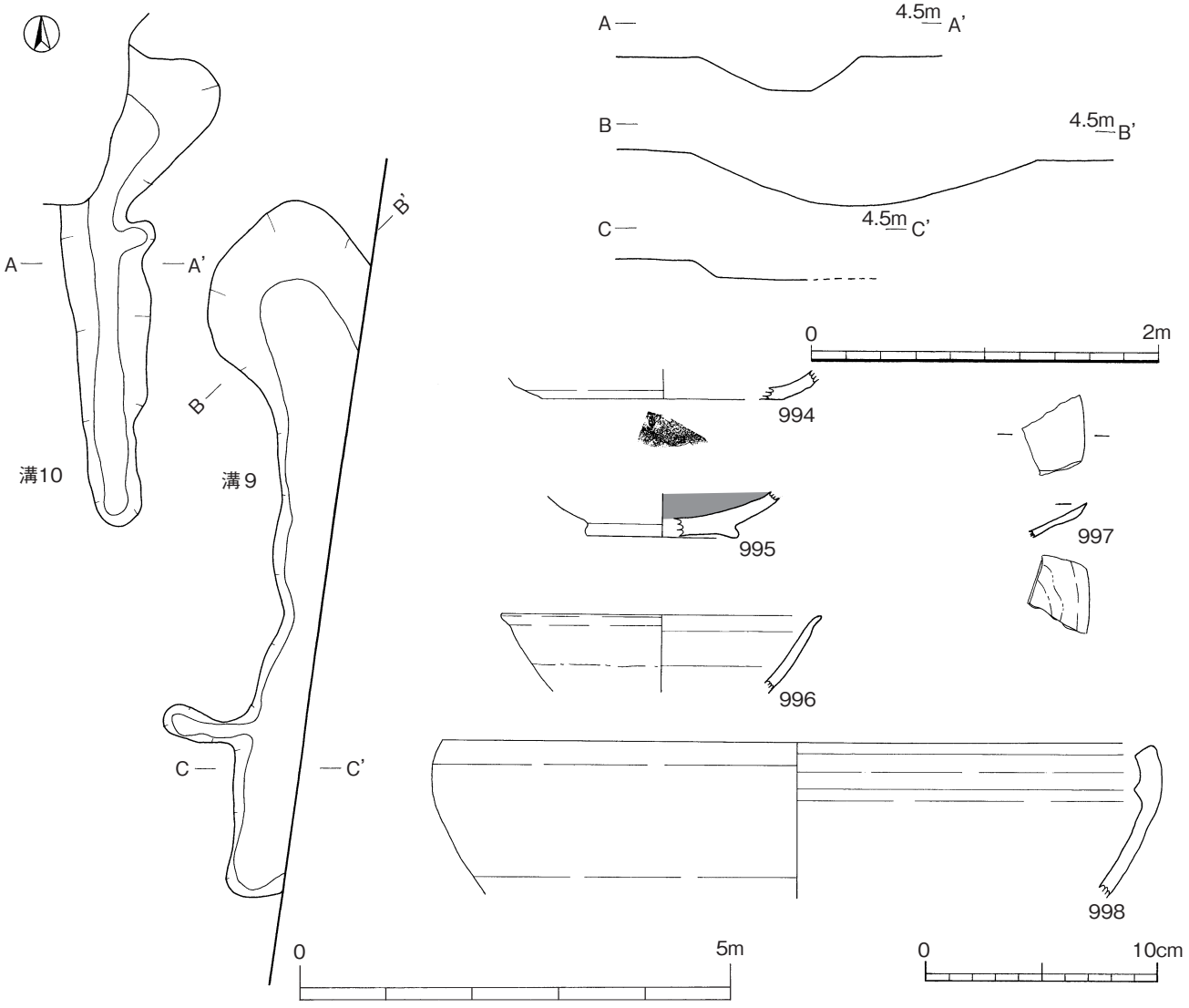
９・10号溝状遺構内出土遺物（第103図994～998）

994は土師器の皿で，995は土師器で黒色土器Ａ類の埦である。高台は短く，バチ状に貼り付けられる。

996は白磁の椀である。口縁端部が外反する。997は口縁部がわずかに玉縁状を呈する皿である。

998は輸入陶器の捏鉢である。中国南部産のものと思われる。口縁部内面は２段の突帯を有する。胎土は粗く，白色の小石粒を多く含む。

その他の遺物としては，土師器12点，赤色土器Ａ類１点，カムィヤキ１点，白磁３点が出土した。遺構の年代は，12～13世紀頃と思われる。



第103図　９・10号溝状遺構及び出土遺物実測図

(3) 11～14号溝状遺構（第104図）

X・Y－2・3区のⅣ層上面から検出した。

11号は全長約14.4m，幅約1.1m，最深部約20cmで南北方向へのびている。北部では西方向へ2基枝分かれしているが，この2基からは遺物の出土はなく，遺構としては取り扱わなかった。

該期の出土遺物は，大量に出土した。その中で，ほぼ完形状態である青磁椀2枚，皿1枚，青白磁椀3枚の計6枚（999～1004）が伏せた状態で出土した。

12号は全長約8m，幅約2m，最深部が約19cmで，11号から枝分かれしている。両者に切り合い関係は認められなかった。

遺物は，土師器の小片等が数点出土したが，時期を確定できない形式不明のものがほとんどであるため掲載しなかった。

13号は全長約4m，幅約1.2m，最深部約13cmで南へのびており，11号から枝分かれしている。

遺物は10点出土し，2点掲載した。

14号は全長約12.2m，幅約1m，最深部約15cmである。

遺構に伴う遺物は数十点出土し，そのうち7点掲載した。

11～14号溝状遺構内出土遺物

11号溝状遺構内出土青白磁（第105図999～1004）

999・1000は同安窯系青磁の椀である。体部はやや内弯気味に外上方に立ち上がり，口縁先端でやや内側に屈曲する。高台は厚く，逆台形を呈する。外面には細かい縦の櫛目文が入り，内面はヘラ状工具による文様と櫛目状工具によるジグザグ文が入る。内面見込みと体部の境には明瞭な段を有し，内面上位には沈線を入れる。胎土は灰褐色，釉は緑褐色の色調を呈し，外面腰部以下は露胎する。

1001は，同安窯系青磁の高台付の皿である。体部は内弯気味に立ち上がり，口縁部付近で外方向に弱く屈曲する。高台は台形状を呈し，低い。内外面とも無文であるが，内面見込みに沈線による圏線が巡る。胎土は灰褐色，釉は緑褐色の色調を呈する。

1002～1004は青白磁の椀である。体部はほぼ直線的に外上方へ大きく開くように立ちあがる。高台は四角形状に削り出される。内外面とも無文であるが，内面口縁部上位以下は露胎し，内面見込みは輪状に釉剥ぎされる。胎土は灰色，釉は浅黄色の色調を呈する。

11号溝状遺構内出土遺物（第106図1005～1021）

青白磁以外で，溝内から出土した遺物は次のとおりである。

1005～1008は土師器である。1005・1006は皿で，内底面には輪状の沈線が観察される。1007は坏である。1008は黒色土器A類の埦である。口縁端部はやや内弯する。内面には丁寧なナデが施される。

1009～1011は白磁の椀である。1009は口縁端部が，外側に屈曲するものである。内面には短い櫛目文が描かれる。1010・1011は口縁部が玉縁状を呈するものである。

1012は白磁の皿である。見込みに釉剥ぎが観察される。

1013は小壺と思われるが，詳細は不明である。外面に沈線と櫛目状の文様が観察され，緑釉がかかる。

1014・1016～1019は輸入陶器である。1014は壺の口縁部と思われる。1015はカムィヤキの壺の肩部である。内面はタタキ成形後，横ナデが施される。1016は瓶等の口縁部と思われる。1017は素焼きの大甕である。口唇部は内側に段を有する。胎土は粗細かい砂粒を多く含む。1018は瓶等の肩部である。内外面とも無釉で，肩部に2条の沈線が入る。1019は小壺と思われる。産地等詳細は不明である。1020は，管状土錘である。外面には赤色顔料が塗布されているが，一部剥落している。1021は，滑石製の石鍋である。口縁部下位に鍔が巡る。

その他の遺物としては，土師器約80点，外面に赤色顔料が塗布された土師器2点，白磁（太宰府Ⅴ類）20点，輸入陶器壺4点，備前焼胴部1点，布目瓦3点が出土している。

出土遺物等から遺構の年代は，12～13世紀頃と想定される。

13号溝状遺構内出土遺物（第106図1022・1023）

1022・1023は土師器皿の底部である。

その他，土師器が8点出土している。中世の遺構と思われるが，詳細な年代は不明である。

14号溝状遺構内出土遺物（第106図1024～1029）

1024は土師器の坏の底部である。体部の立ち上がりは，大きく外側に開く形状を呈すると思われる。

1025はカムィヤキの甕である。胎土は小豆色で，白色の砂粒を含む。内外面にタタキ成形のあて具痕が残る。

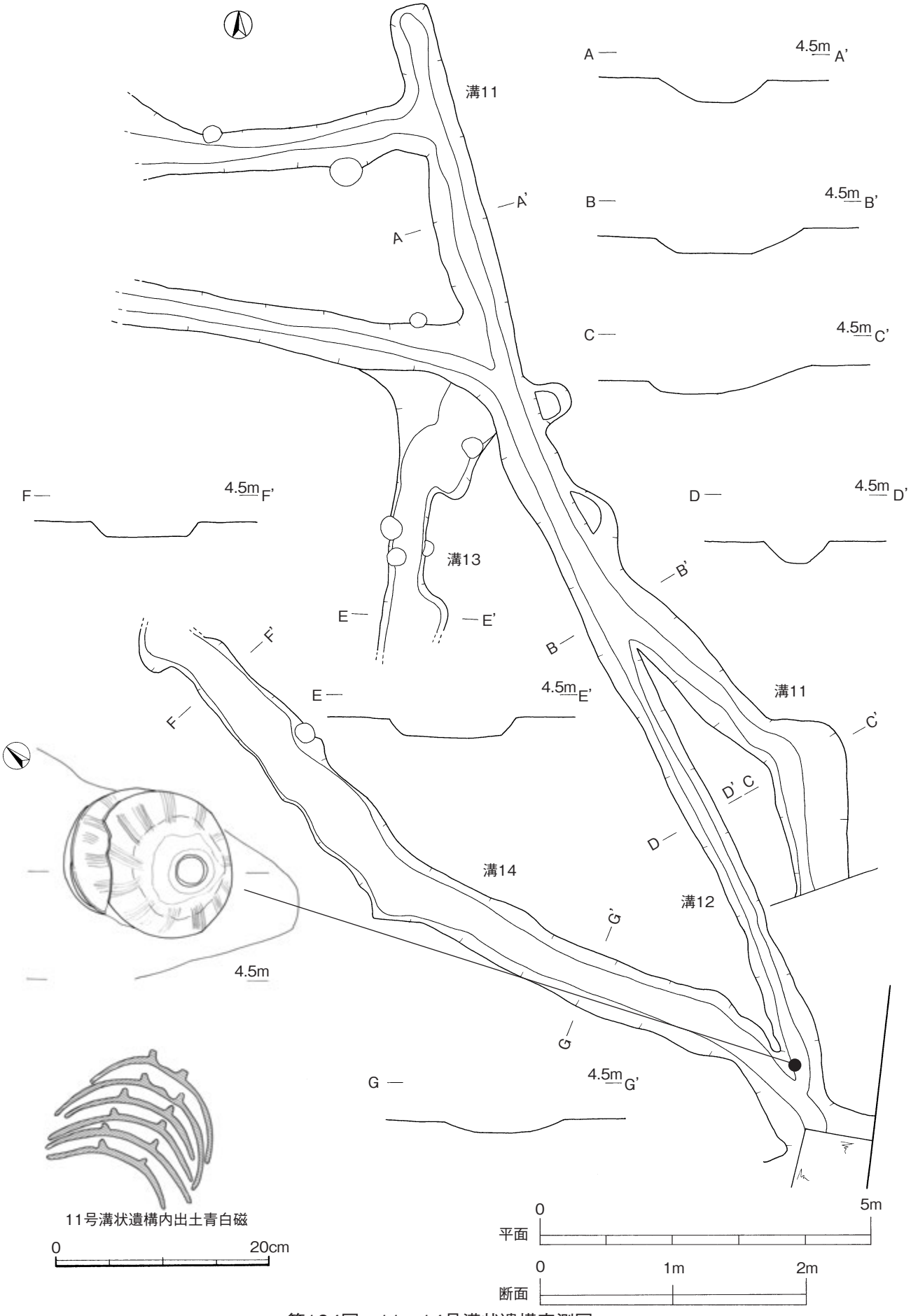
1026～1029は，溝状遺構12・14号の合流地点から出土した資料である。

1026は白磁の椀である。口縁端部が外側に屈曲するもので，内面には短い櫛目文が描かれる。

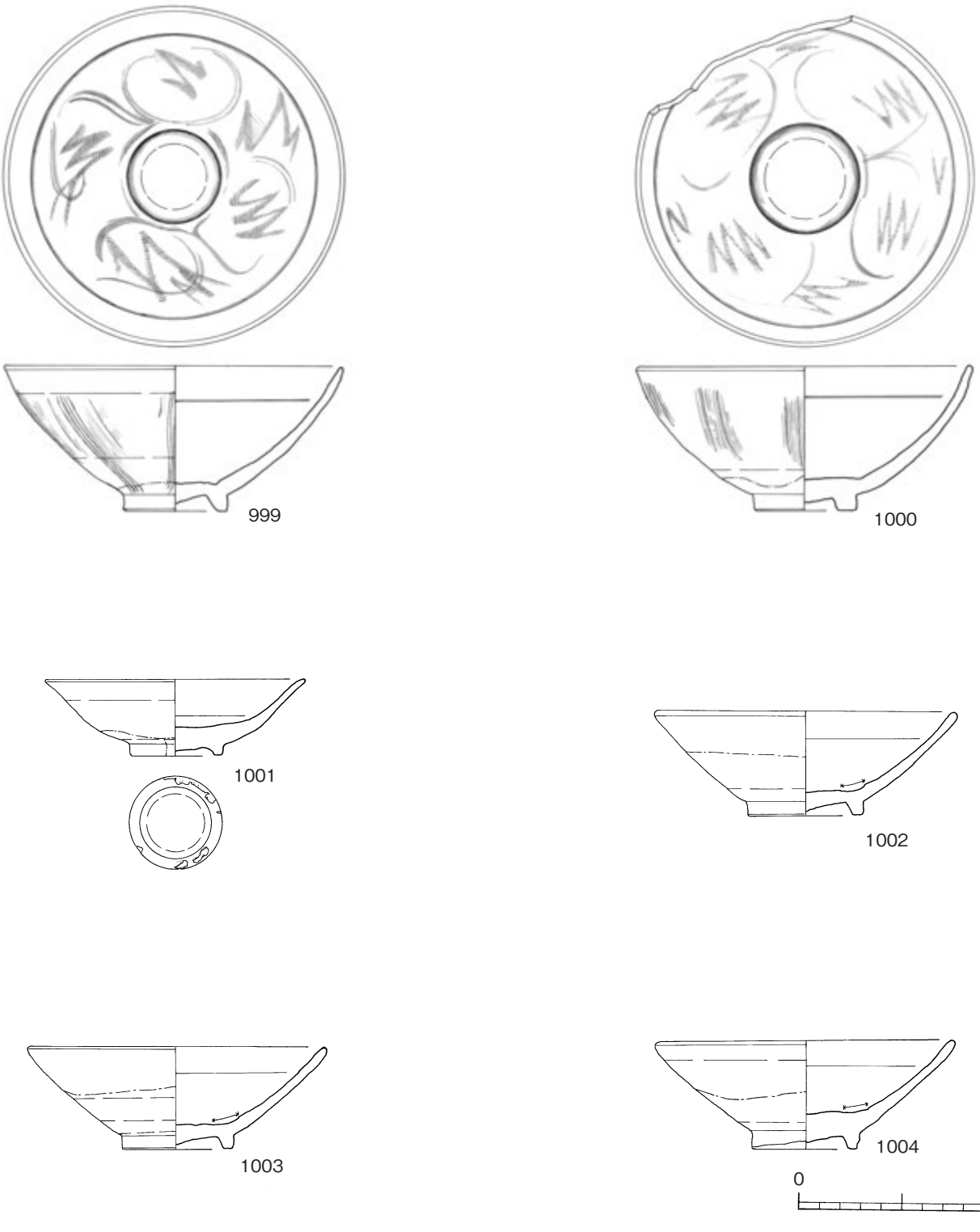
1027は土師器の埦である。黒色土器A類で，内面にはミガキが施される。高台は低く，輪状に貼り付けられる。

1028・1029はカムィヤキの壺である。1028は頸部で，1029は底部である。内外面ともタタキ成形の痕跡をナデ消しているが，一部に痕跡が残る。

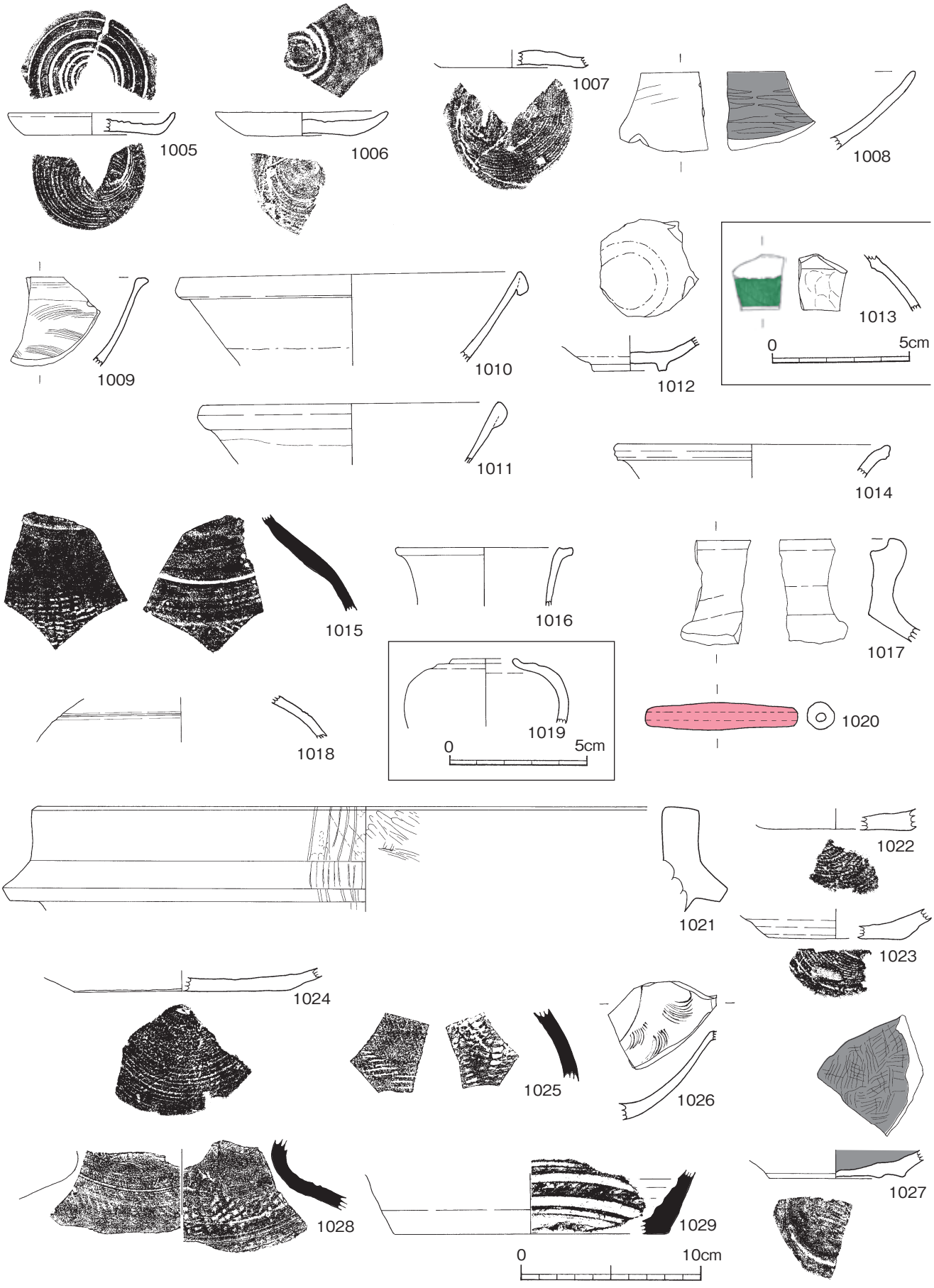
出土遺物等より，12～13世紀頃の遺構と想定される。



第104図　11～14号溝状遺構実測図



第105図　11号溝状遺構内出土遺物実測図



第106図　11～14号溝状遺構内出土遺物実測図

(4) 15号溝状遺構（第107図）

Ｚ－２・３区のⅡ層上面から検出した。全長約12m，幅約2.6m，最深部40cm で，東西にのびている。

該期の遺物は大量に出土しており，39点を掲載した。

15号溝状遺構内出土遺物（第108・109図1030～1068）

1030～1035は土師器である。1030～1032は皿である。３点とも底部の切り離しは丁寧である。1033は坏である。底部がやや厚く，体部との境にくびれを有する。1034は黒色土器Ａ類の皿である。内面が黒色に燻され，丁寧に研磨されている。1035は黒色土器Ｂ類の皿である。全面が黒色に燻され，内面と外側面が研磨されている。

1036～1038は白磁の椀である。1036は口縁部が玉縁を呈するもので，1037はその底部である。削り出された高台部には，鉋の痕跡が残る。1038は高台が先細る形状を呈する。見込みには櫛目文が描かれる。

1039・1040は青磁である。1039は器壁が厚手で，口縁端部が丸くつくられる椀である。1040は皿である。

1041は手捏ねの匙である。把手部が残存している。

1042～1044は輸入陶器である。1042は磁州窯系の資料と思われるものである。素地に白色の化粧土をかけ，掻き落として文様を施す。器種は不明である。1043・1044は中国南部産と思われる資料である。1043は褐釉がかかる捏鉢である。1044は壺等の底部と思われる。

1045は備前焼の甕の胴部と思われる。

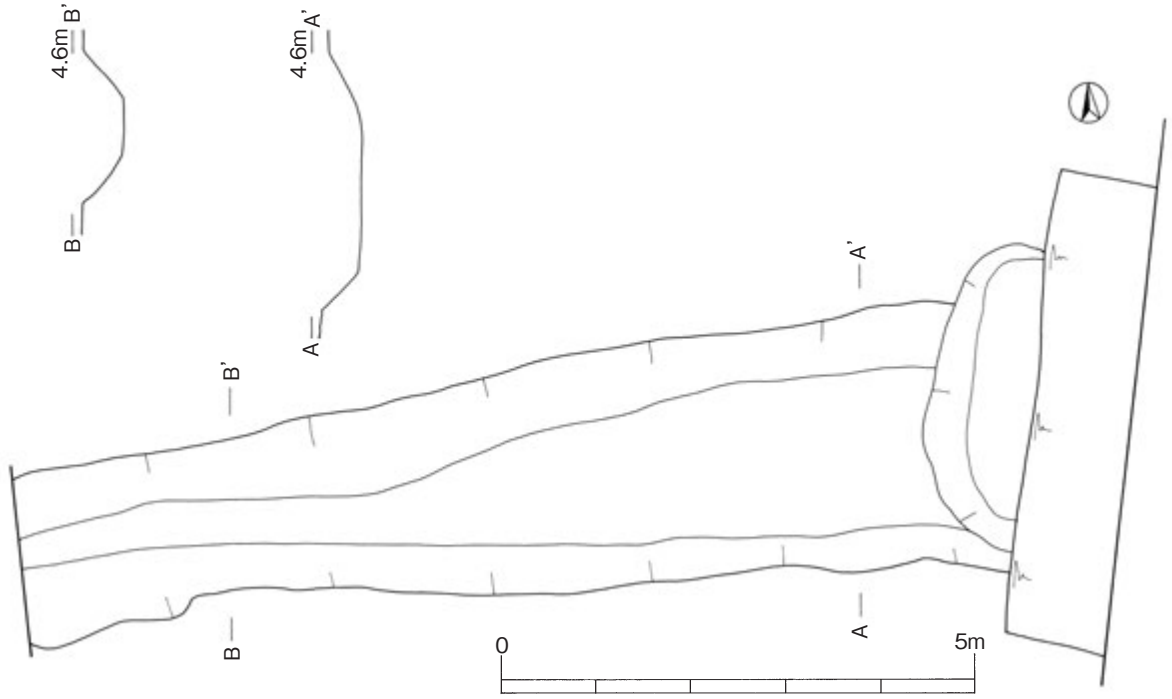
1046・1047はカムィヤキの甕である。

1048～1052は国内産磁器で，1049は白磁，他は染付である。1048は碗で，外面にコンニャク印判の文様がスタンプされる。1049は厚手の白磁椀で，口縁端部は強く外反する。1050は半筒形の碗である。外面には雪持笹文が描かれる。

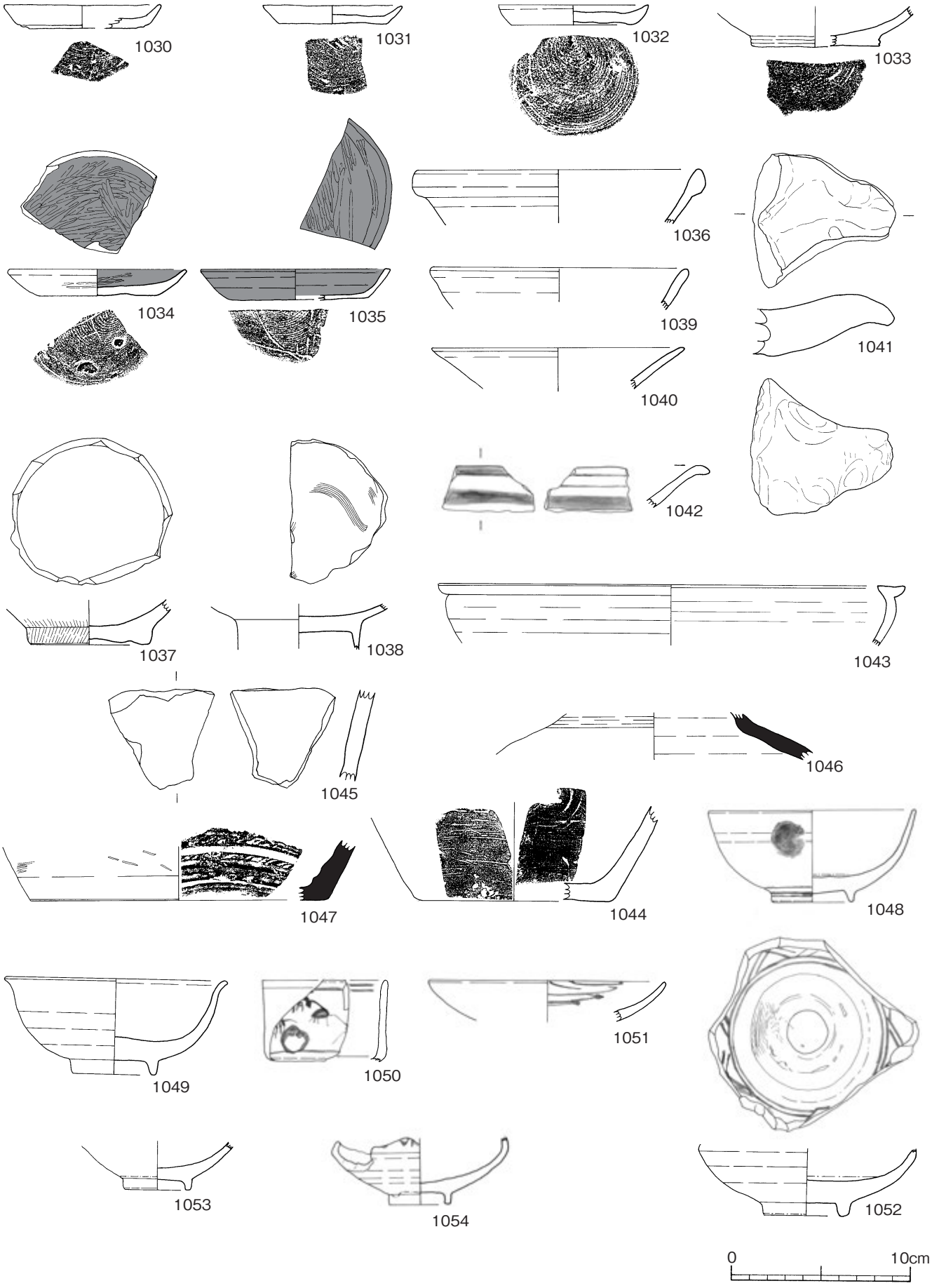
1051・1052は皿である。1052は胎土が濃灰色を呈し，呉須の発色も悪く，鉄色である。

1053～1068は国内産陶器である。1053～1055は肥前陶器である。1053・1054は京焼き風陶器の碗で，1054は外面に鉄絵が描かれる。1055は腰折れ形の碗である。内外面とも白泥で打ち刷毛目が施される。1056・1057は薩摩焼で，龍門司系の碗である。1057は鉄釉が畳付と高台内面を除きかけられる。1058は肥前陶器の盤である。文様は，内面に白化粧土をかけ，掻き落としで幅広の線を描いた後，褐釉をかける。1059・1060は徳利である。1059は薩摩焼龍門司系と思われるもので，胎土は黄橙色で，外面に白化粧土がかかる。頸部に２か所，大豆粒大の装飾がつけられる。1060は薩摩焼苗代川系のものである。外面には薄い灰釉がかかる。内面はタタキ成形の痕跡を丁寧にナデ消していると思われる。初期の薩摩焼もしくは朝鮮陶器の可能性が考えられる。1061は焼き締めの蓋で，薩摩焼苗代川系のものである。上面中央には，アーチ状のつまみが付く。1062は片口である。片口部は欠損している。内外面は横ナデが施される。薩摩焼苗代川系のものである。1063は肥前陶器の擂鉢である。口縁上部にのみ鉄釉がかかる。1064～1068は薩摩焼で苗代川系の資料である。1064は口唇部が平坦につくられ，外面に２条の浅い沈線が巡る。1065・1066は甕である。1065は口縁部で，口唇部には貝目が残る。1066は，胴部である。1067は壺で，ほぼ平坦な口唇部には貝目が観察される。内面は横ナデの調整痕が筋状に残る。1068は底部である。

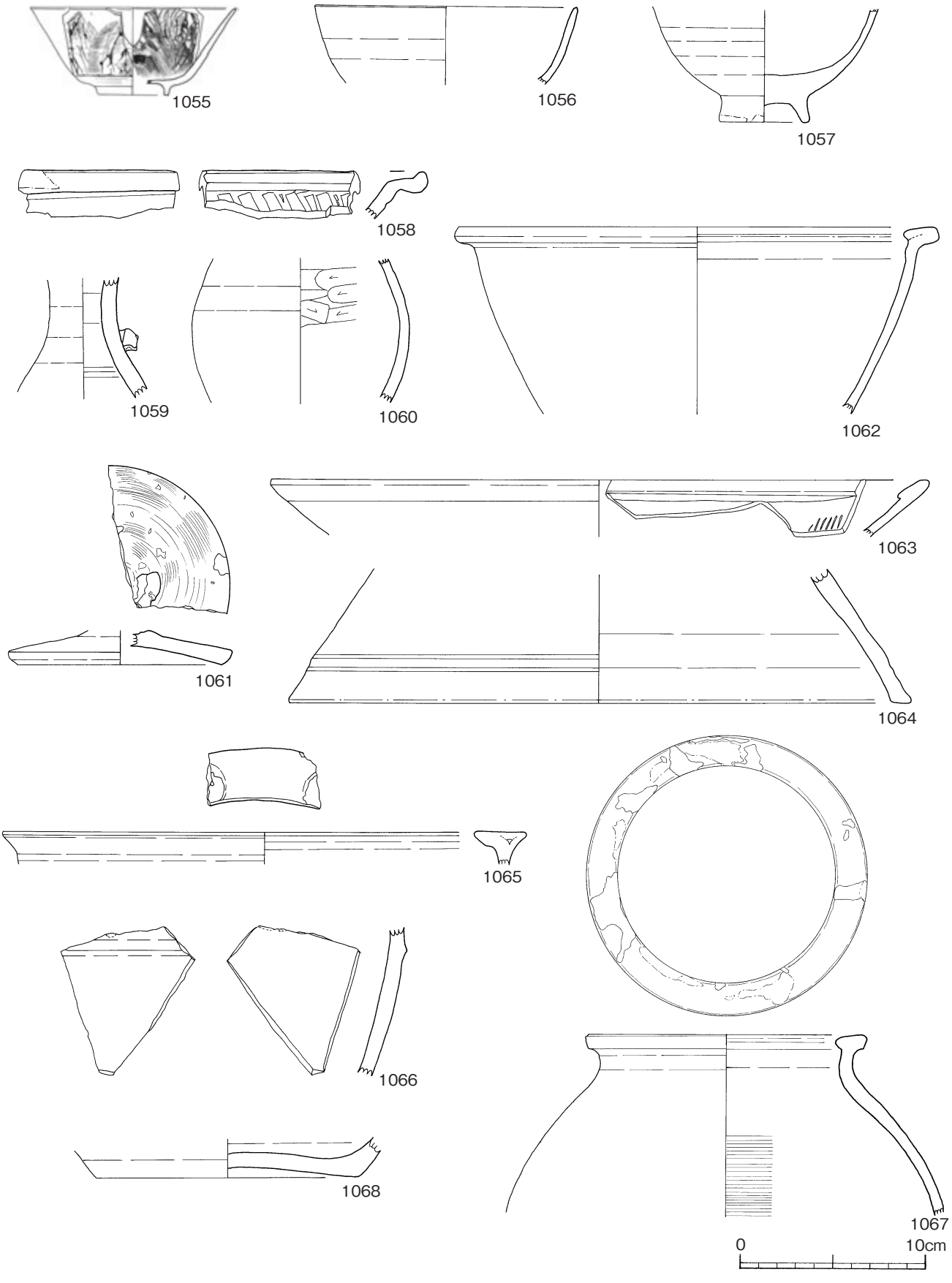
その他の遺物としては，土師器約160点，須恵器８点，白磁14点，青磁８点，瓦質土器１点，薩摩焼18点，布目瓦４点が出土している。遺構の年代としては出土遺物の年代幅が広く明確ではない。



第107図　15号溝状遺構実測図



第108図　15号溝状遺構内出土遺物実測図（１）



第109図　15号溝状遺構内出土遺物実測図（２）

(5) 16・17号溝状遺構（第110図）

Ⅴ～Ｙ－６～８区のⅡ層上面で検出した。

16号は全長約26m，幅約７～11m，最深部1.75mとかなり大型の溝状遺構である。遺構内に１～３号炉状遺構が検出されたが，関連性については不明である。

遺構に伴う遺物は約260点出土し，79点掲載した。

17号は全長約4.5m，幅約2.6mで，16号の西側で検出した。

遺構に伴う遺物は数十点出土し，形式が明確なものを３点掲載した。

16・17号溝状遺構内出土遺物

16号溝状遺構内出土遺物（第111～116図1069～1147）

1069～1071は土師器である。1069・1070は黒色土器Ａ類の皿である。内面は研磨され，外面は糸切り後，体部と底部の境まで丁寧なナデが施される。1071は黒色土器Ｂ類の坏である。体部は丸みを帯びて立ち上がり，口縁端部でわずかに外反する。内外面とも丁寧なミガキが施される。1072～1082は白磁である。

1072～1074は口縁部が玉縁状を呈する椀である。

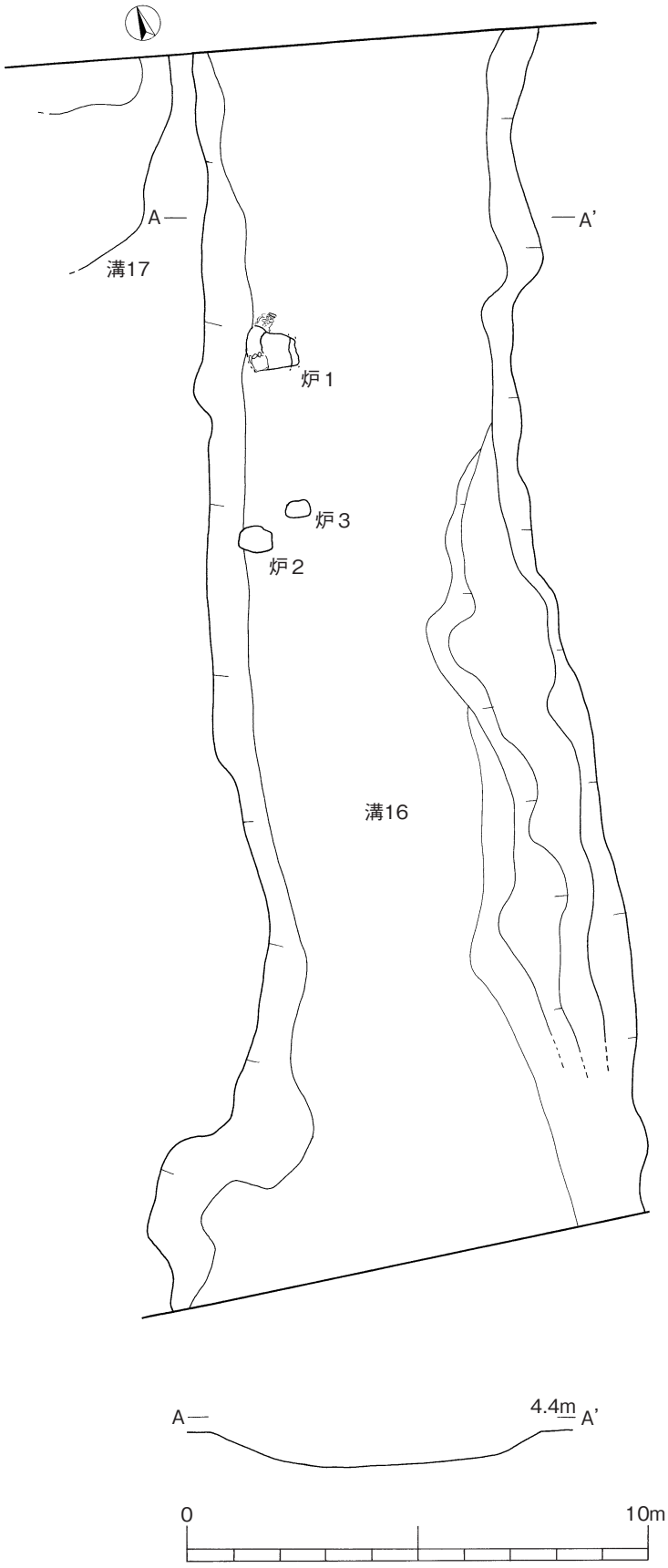
1075は口縁端部が屈曲し，口唇部を平坦につくる。

1076・1077は椀の底部である。1076は高台が輪状で低く，内側は斜行し，外面腰部から高台内底まで露胎する。1077は，内面見込みの釉が輪状に釉剥ぎされる。体部は直線的にのび，外面腰部に鉋の削りの痕跡が残る。

1078～1081は皿である。1078は口唇部の釉が剥ぎ取られた口禿げの口縁部である。1079は体部が丸みを帯びる。1080は口縁部が外反し，高台はやや内傾し先端は細く立つ。1081は高台が抉り高台を呈する坏である。

1082は，水注等の把手部と思われる。

1083～1095は龍泉窯系青磁である。1083～1085は椀の底部である。1083・1084は高台の削り出しが浅く，底部が肉厚である。1085は内面に片彫蓮花文と思われる文様が描かれる。1086～1091は口縁部である。1086は内面に片彫りにより文様が施される。1087は，内面に片彫りで草文と思われる文様と短い櫛目文が描かれる。1088は，内面に二又片刃による文様が描かれた椀と思われる。1089・1090は外面に片彫蓮弁文を描き，弁の中心には鎬はみられない。1091は，外面に鎬蓮弁文を有する。1092・1093は椀の底部である。どちらも角高台で，1092はやや高く，1093は低い。1094は外面に先の細いヘラ状工具で描いた線描蓮弁文がみられる椀である。剣頭部は，省略されている。1095は香炉である。腰部には退化した脚が３か所付く。内面は無釉である。



第110図　16・17号溝状遺構実測図

1096は同安窯系青磁の椀で，体部の一部である。内面には片彫りの文様とジグザグ連点文が描かれる。

1097～1100は青花の碗である。1097～1099は通称「レンツー碗」と称される碗である。1097は外面に芭蕉葉文が描かれる。1098・1099は同一個体と思われる。1100は底部である。見込みが平坦で，輪状に釉が剥ぎ取られる。

1101は肥前陶器で，唐津焼の鉢である。内面に鉄絵と思われる文様が描かれる。

1102～1107は輸入陶器である。1102は外面に細やかな装飾を印刻し，その上に緑釉をかけるものである。産地は中国南部と思われる。1103は瓶・壺等の口縁部と思われる。胎土は粗く，内外面に褐釉がかかる。1104は鉢と思われる。褐釉がかかるが，剥落している。1105・1107は水注もしくは壺の底部と思われる。外面胴部下位は露胎するが，上位は褐釉がかかるものと思われる。1106は胴部である。外面には褐釉がかかる。内面は無釉で，ヘラ状工具の痕跡が残る。

1108は薩摩焼苗代川系の徳利である。器壁が非常に薄く，内面には同心円状のあて具痕が残る。タタキ成形でつくられており，串木野窯産の可能性が考えられる。

1109～1115は，中世須恵器である。1109は東播磨系の捏鉢である。口縁部は玉縁状を呈し，外面口縁部下位に沈線が１条巡る。1110～1115は樺万丈産と思われる資料である。1110・1111は捏鉢である。内面に斜位のハケ目が入る。1110は，外面にも縦方向の粗い工具痕が残る。1112～1115は甕と思われる。外面には格子目タタキ，内面には斜位のハケ目やナデが施される。

1116～1122は瓦質土器である。1116は内面口縁部下位に菊花が刻印され，片口部を有することから，卸鉢である可能性が考えられる。1117～1122は擂鉢である。1117は外面に縦方向の粗いハケ目状の工具痕が残る。内面は，底面と側面に分けて擂り目を施す。1119は外面にハケ目が観察される。内面は１単位８条のやや短めの擂り目が粗く入る。1121・1122は底部である。1122の外面には粗い櫛目状の工具痕が残る。

1123～1125は火鉢である。1123・1124は全体が炭素で燻されており，外面には雷文が刻印される。1125は底部である。

1126・1127は茶釜の胴部である。胴部中央には鍔状の突起が巡り，その下部にはススが付着する。

1128～1132は土師質の土製品で管状土錘である。1129・1130には一部赤色顔料が残存する部分がみられ，全体に塗布されていたと思われる。

1133～1135は国内産陶器で常滑焼の甕である。1133は口縁部で，口縁縁帯は2.5cm を測る。1134は胴部である。外面に格子目タタキの痕跡が一部残る。1135は底部である。

1136～1139は鞴の羽口である。先端には鉄滓が熔着している。

1140～1143は瓦である。平瓦で，桶巻き作りで製作されているため，凹面には布目の圧痕と模骨を留めた紐の圧痕が残る。また凸面は，縄をまいたタタキ工具で叩いたあと，表面をナデ消しているが，一部に縄目の痕跡が残存する。1143の側面には，桶巻き作りで，瓦を４等分に切り分けた際の，切り出しの痕跡が観察される。

1144は用途不明の資料である。内面に研磨されたような部分があり，円面硯の可能性も考えられる。外面は溝状の沈線が３条入る。1145～1147は滑石製の石鍋である。体部中位に鍔状の羽部が巡る。1147は滑石製石鍋の転用品と思われ，穿孔が観察される。

その他の出土遺物として，土師器約75点，須恵器13点，カムィヤキ２点，白磁18点，青磁21点，青花６点，輸入陶器16点，瓦質土器24点，国内産陶磁器11点が出土している。遺構の年代としては，12～13世紀頃を想定したいが，出土遺物の年代幅が大きく，断定はできない。

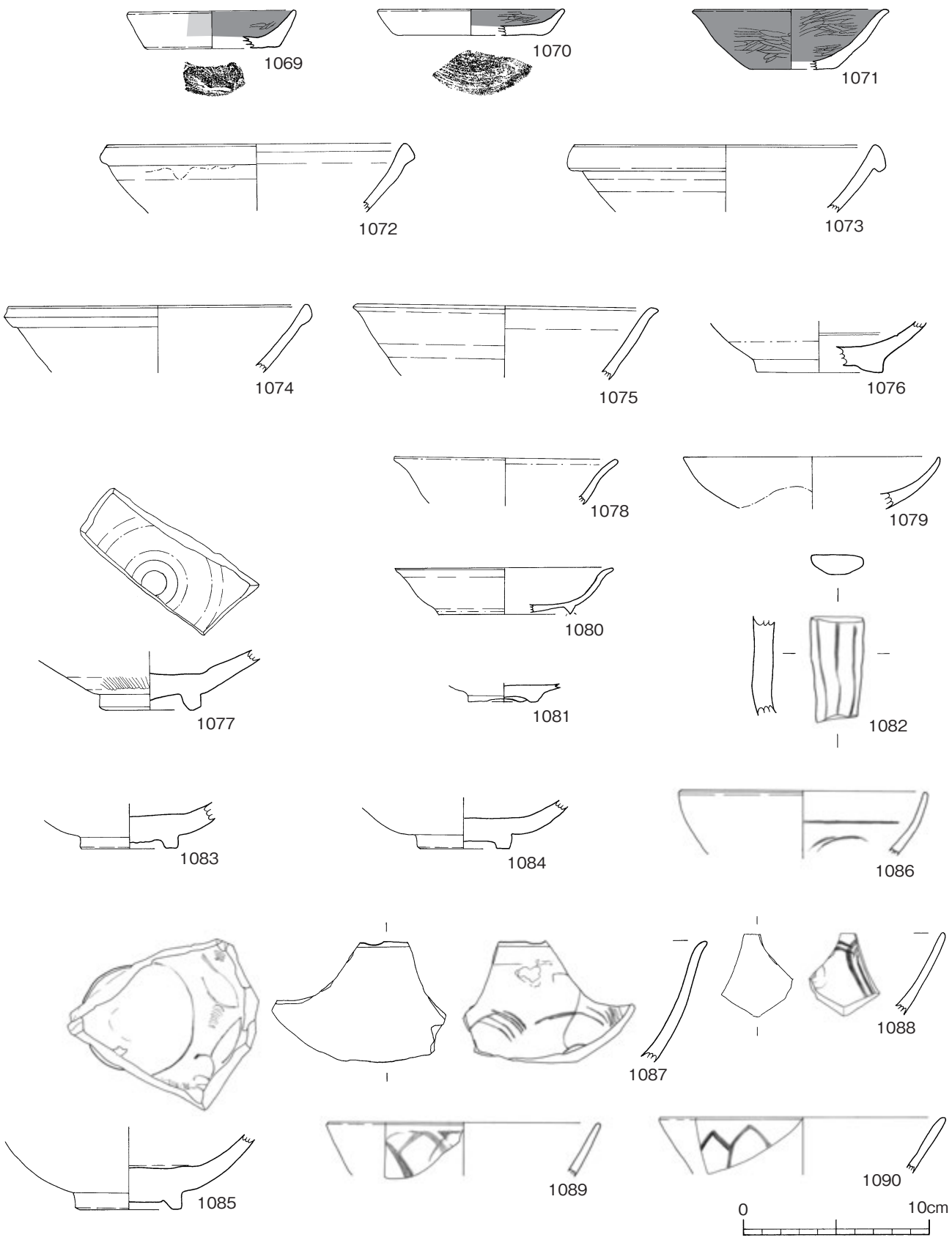
17号溝状遺構内出土遺物（第116図1148～1150）

1148は中世須恵器と思われるが，器種は不明である。底面の切り離しは糸切りである。

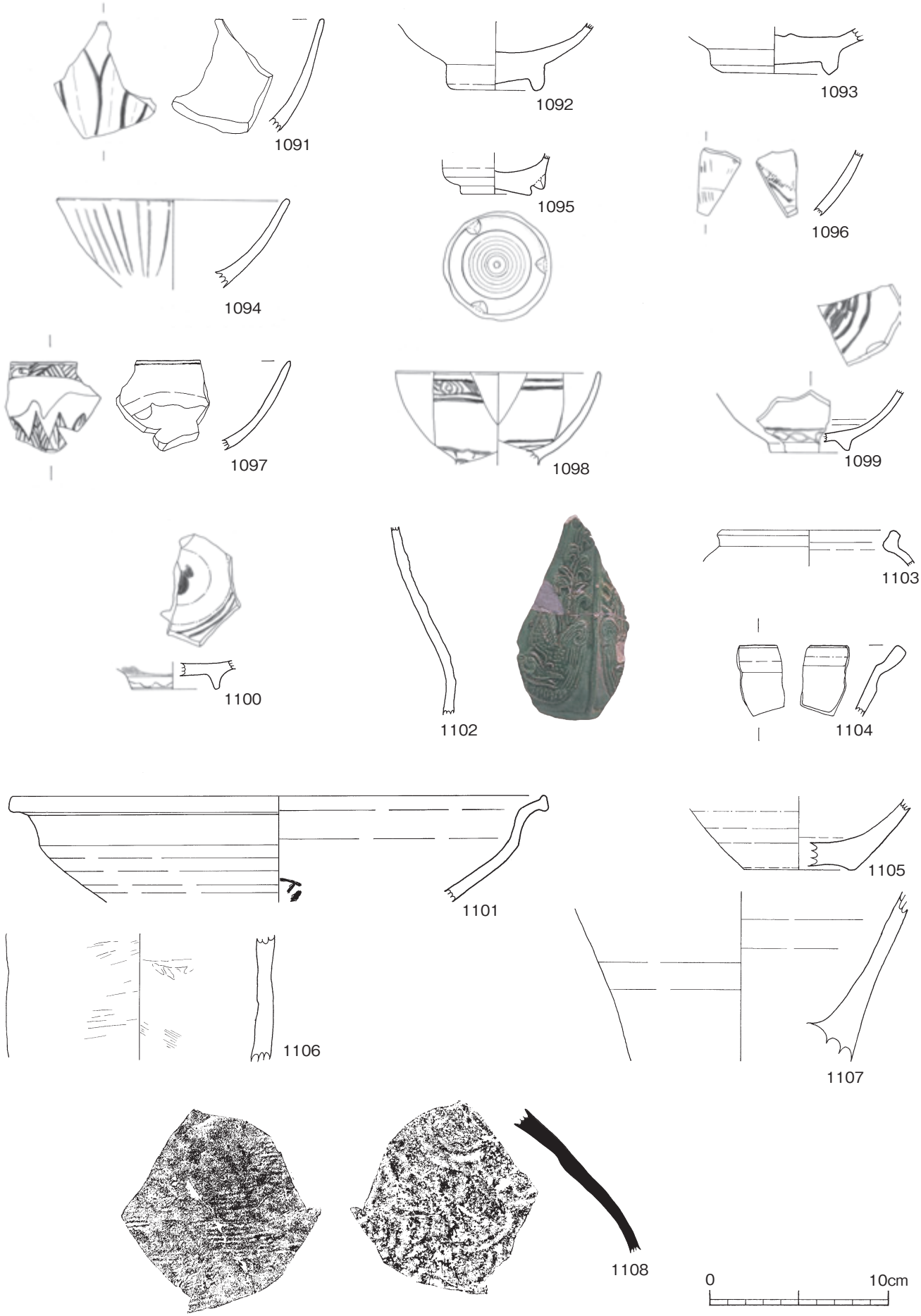
1149は龍泉窯系青磁椀の口縁部である。外面に片彫りで蓮弁文が描かれる。

1150は平瓦である。桶巻き作りで，凹面に布目痕，凸面はナデ消してはいるものの一部に，タタキ工具の縄目痕が観察される。

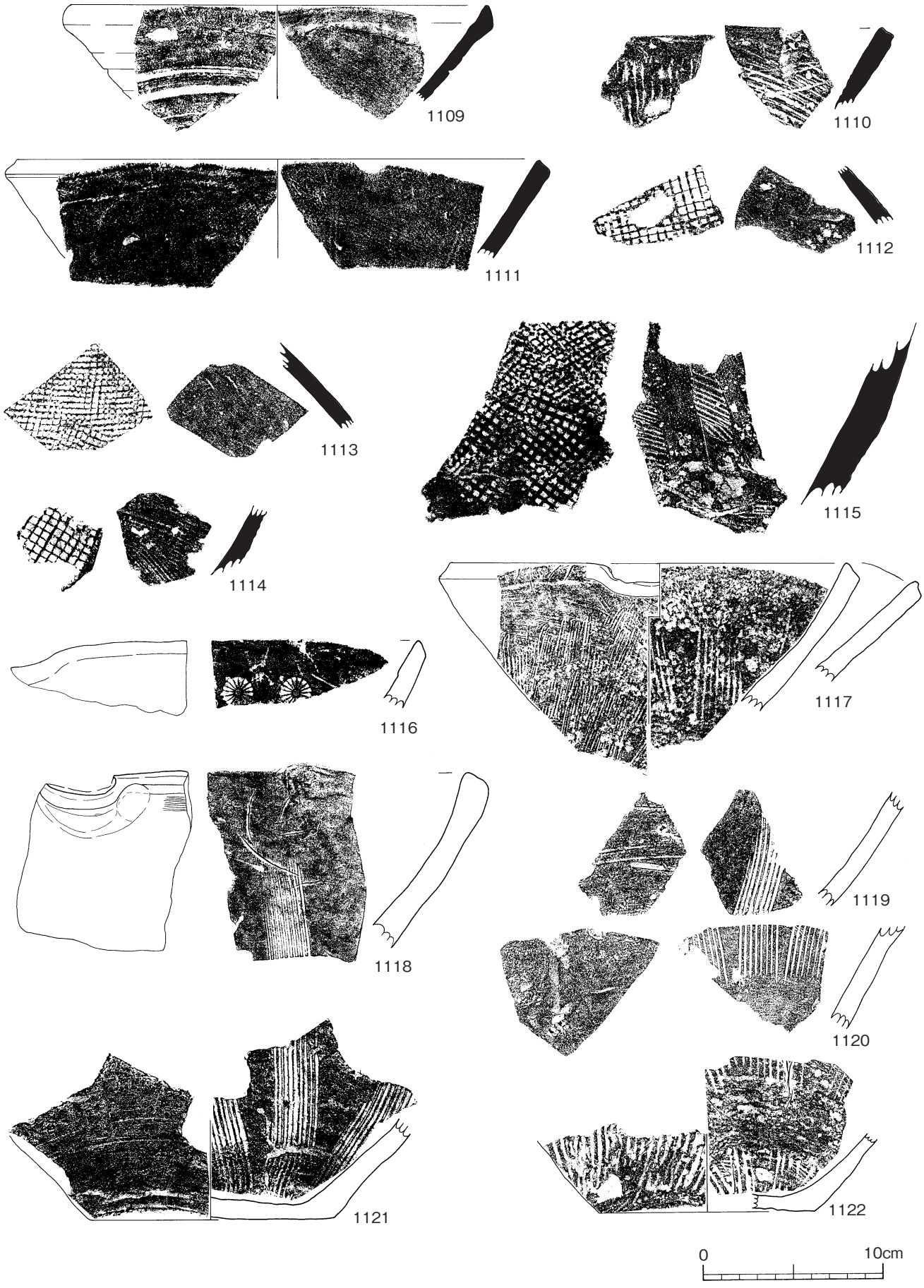
遺構の年代は中世と考えられるが，詳細は不明である。



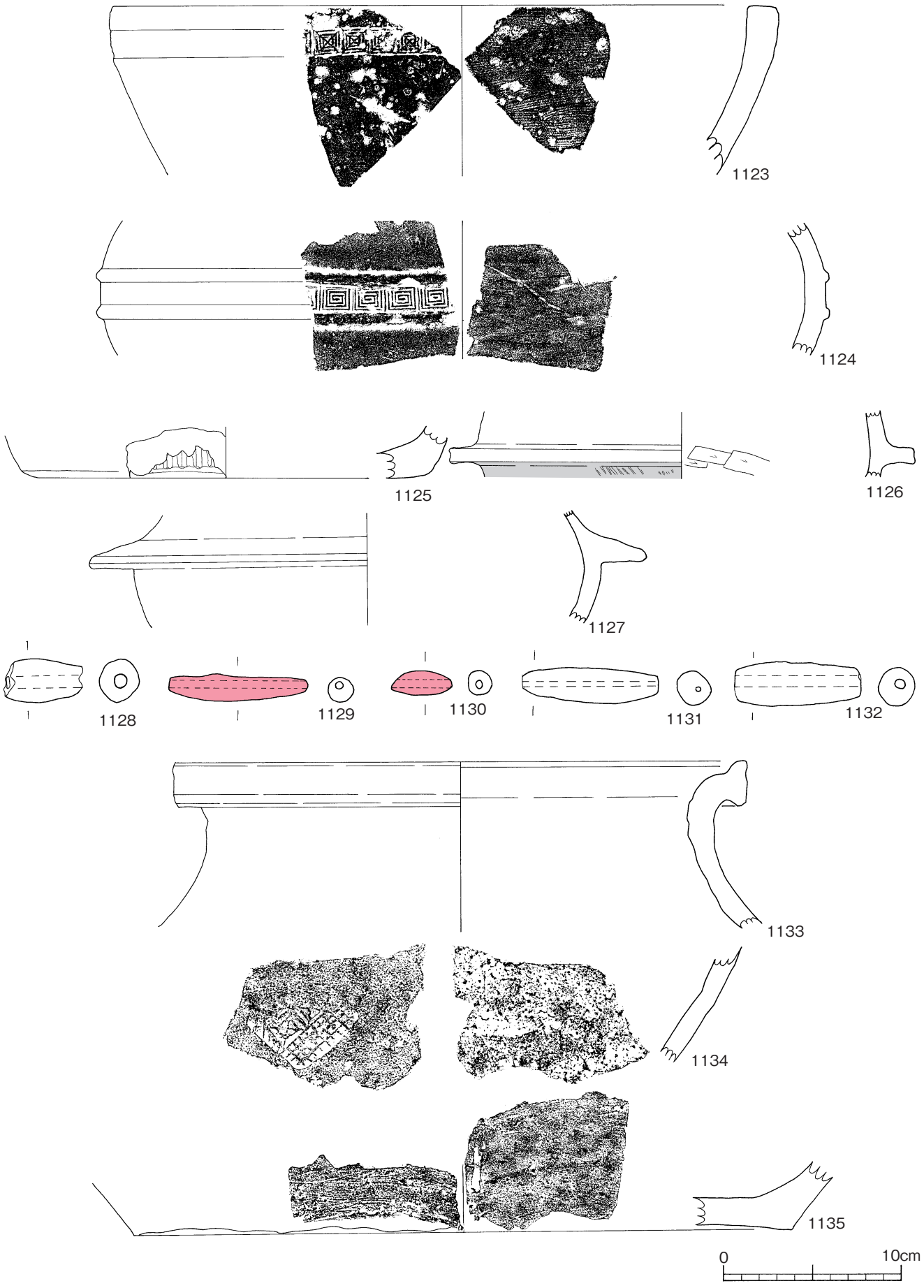
第111図　16・17号溝状遺構内出土遺物実測図（1）



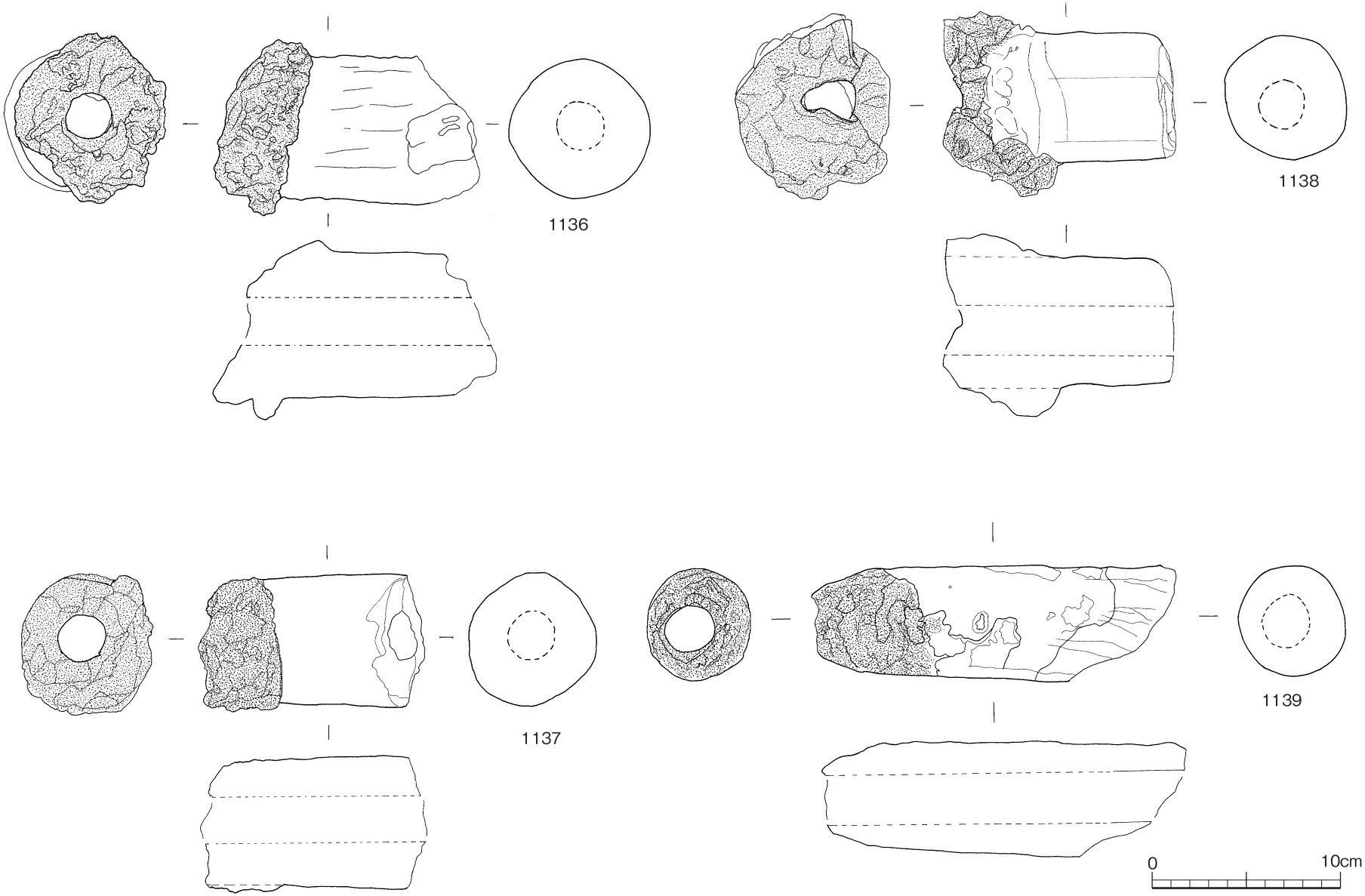
第112図　16・17号溝状遺構内出土遺物実測図（2）



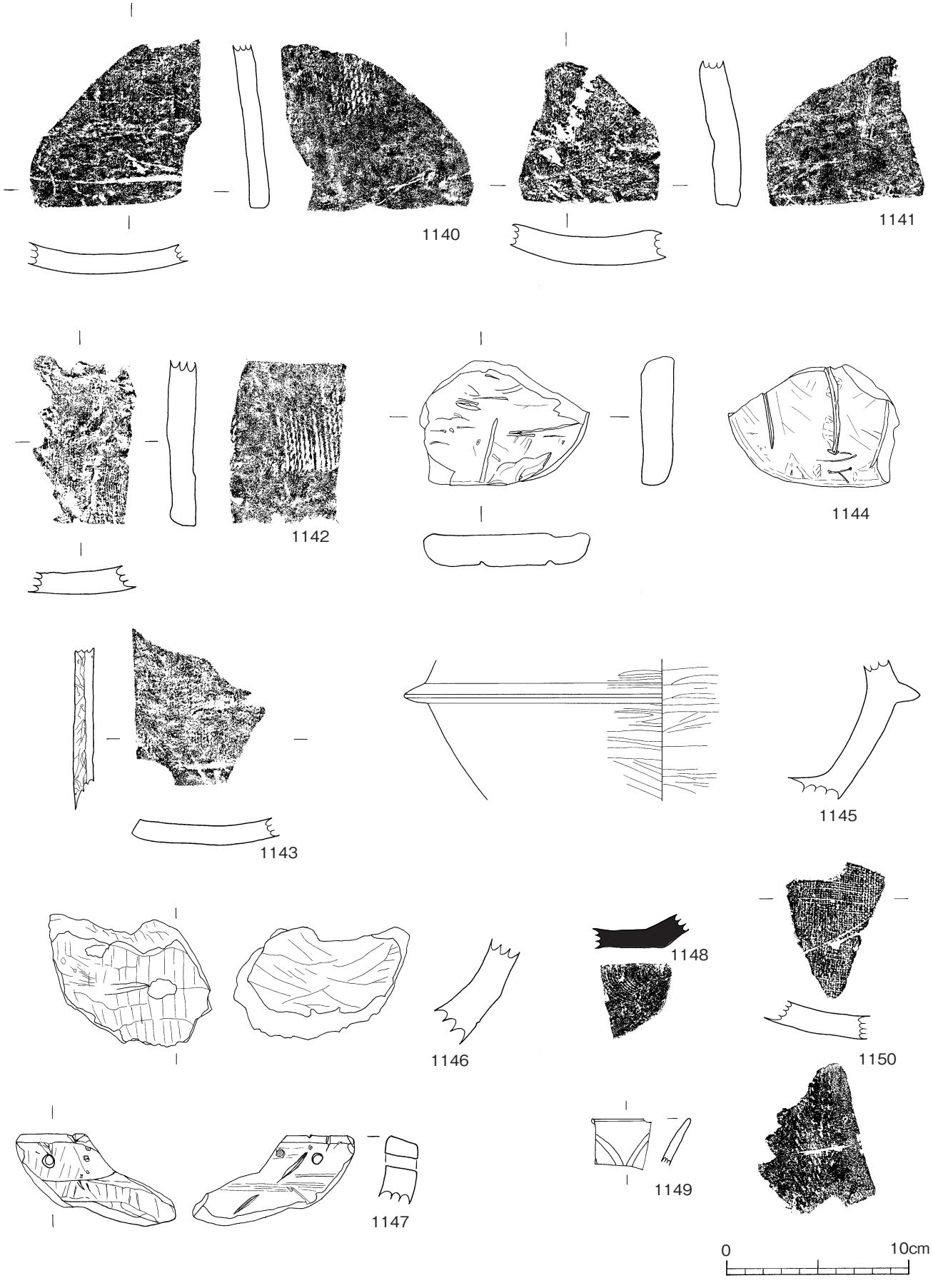
第113図　16・17号溝状遺構内出土遺物実測図（3）



第114図　16・17号溝状遺構内出土遺物実測図（４）



第115図　16・17号溝状遺構内出土遺物実測図（5）



第116図　16・17号溝状遺構内出土遺物実測図（6）

(8) 18号溝状遺構（第117図）

Ⅴ・Ｗ－７・８区のⅡ層上面で検出した。南北方向へのびる。長径約11m，幅約1.3m，最深部約55cm である。

遺構に伴う遺物は22点出土し，その内６点を掲載した。

18号溝状遺構内出土遺物（第117図1151～1156）

1151は龍泉窯系青磁椀の底部である。外面に蓮弁文が施される。

1152・1153は中世須恵器で，樺万丈産のものと思われる。1152は鉢で，内面に斜位のハケ目が観察される。1153は甕である。内外面は橙色で，胎土は浅黄色を呈する。タタキ成形のあて具痕が内外面に観察される。

1154は国内産陶器で，常滑焼の甕の胴部と思われる。

1155・1156は国内産陶器で，常滑産または肥前産の壺の胴部と思われる。内面にタタキ成形のあて具痕がわずかに残る。

その他の出土遺物としては，土師器10点，須恵器４点，青磁２点（同安窯系）が出土している。遺構の年代としては，12～13世紀頃と思われる。

３　井戸状遺構（第118図）

Ｘ－８区のⅡ層上面で検出した。長径約1.5m，短径約1.2m で検出面からの深さは約1.1m であり，大型の砂岩礫，凝灰岩礫により壁面を構築している。礫の間には，強い粘質土が充てんされており，粘土等で目地を詰めながら礫を積み上げてきたと考えられる。

また，礫には五輪塔の再利用品が多く含まれており，特に壁面下位には大型の整形された礫が目立つことから，五輪塔の部材を選択的に利用していると思われる。

遺構に伴う遺物は出土しなかった。

４　炉状遺構

(1) １号炉状遺構（第119図）

Ｗ－７区の16号溝状遺構の中から検出した。原形はＣの字の炉壁をもつものと思われるが，前後が削平されているため完全な形ではない。残存部の長径は約1.1m，短径約１m，検出面からの深さは約0.6m を測る。

焚き口に使用されたと見られる部分に墓石を再利用している。炉の内側は，小石が混じった粘土塊で構築され，被熱により赤色化している。その周りはやや硬い粘質土で固められ，同様に被熱している。床面には約10cm の焼土が積もっている。

遺構に伴う遺物は出土しなかったが，遺構内及び周囲には鉄滓が多数出土している。

(2) ２・３号炉状遺構（第119図）

Ｗ－７区で，１号炉状遺構と同様に16号溝状遺構の中から検出した。

いずれも上部が削平によるため，炉壁や焚き口は見られず床面のみの検出となった。１号の近隣に位置しており，床面の状況も類似していることから炉状遺構と認定することにした。床面は焼土と炭化物により構成され，２～３cm の鉄滓を多く含んでいる。

２号は長径約60cm，短径約40cm，焼土の厚さ約７cm の楕円形を呈する。

３号は長径約75cm，短径約55cm，焼土の厚さ約５cm の円形を呈する。

５　土壙墓

形態や大きさが類似している土坑も検出したが，人骨が遺存しているものを土壙墓として６基掲載した。

なお，各土壙墓内に遺存する人骨の詳細については，第８章で後述するとともに，出土した古銭も第144・145図に包含層から出土したものと併せて掲載することにする。

(1) １号土壙墓（第120図）

Ｗ－２区のⅣ層上面で検出した。長径約1.5m，短径約0.8m，検出面からの深さ約15cm の楕円形を呈する。

土壙墓内の北半分に人骨，古銭等が埋納されている。人骨は，中世で多く見られる膝を強く曲げた状況で屈葬されているが，副葬された古銭が寛永通寶であることから近世のものと考えられる。頭部，四肢骨ともに残存状態はよい。

古銭は14枚出土したが，詳細が不明なものを除き，寛永通寶５点を掲載した（第144図1372～1376）。

(2) ２号土壙墓（第120図）

Ｗ・Ｘ－３区のⅣ層上面で検出した。長径約1.52m，短径約0.9m，検出面からの深さ約８cm の楕円形を呈する。人骨は頭蓋と四肢の一部が遺存し，保存状態は悪い。

古銭は５枚出土し，いずれも寛永通寶である（第144図1377～1381）。

(3) ３号土壙墓（第121図）

Ｘ－３区のⅣ層上面で検出した。径が約1.6m の円形を呈する。検出面からの深さは約13cm である。

人骨はほぼ全身の骨が遺存する。立て膝で窮屈な状態のまま埋葬されている。保存状態は悪い。

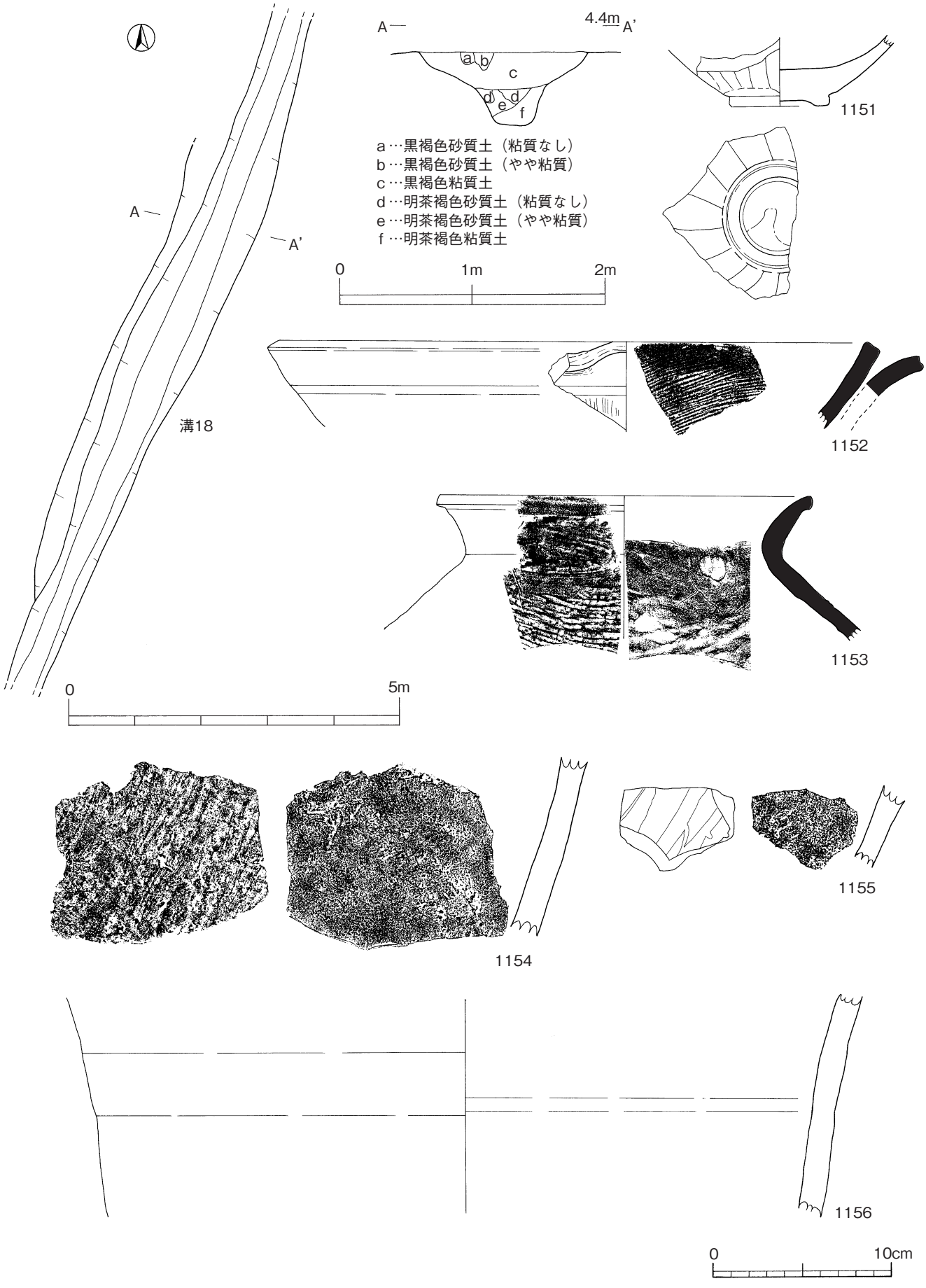
古銭等の副葬品については，出土しなかった。

(4) ４号土壙墓（第121図）

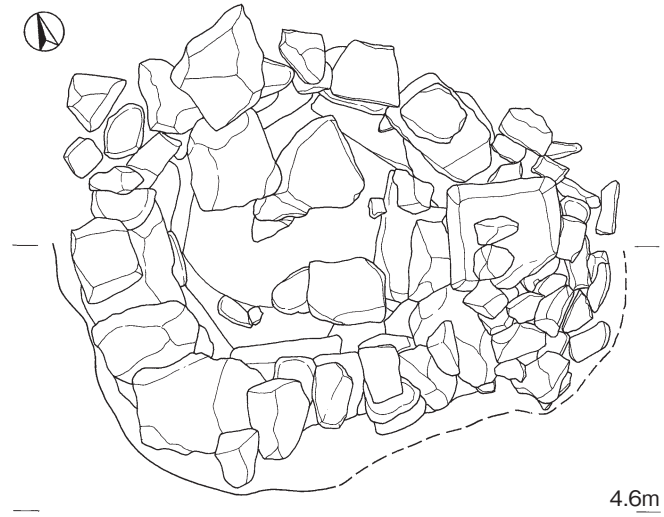
Ｙ－２区のⅡ層上面で検出した。長径約1.6m，短径約0.9m の楕円形を呈する。検出面からの深さは約20cm である。

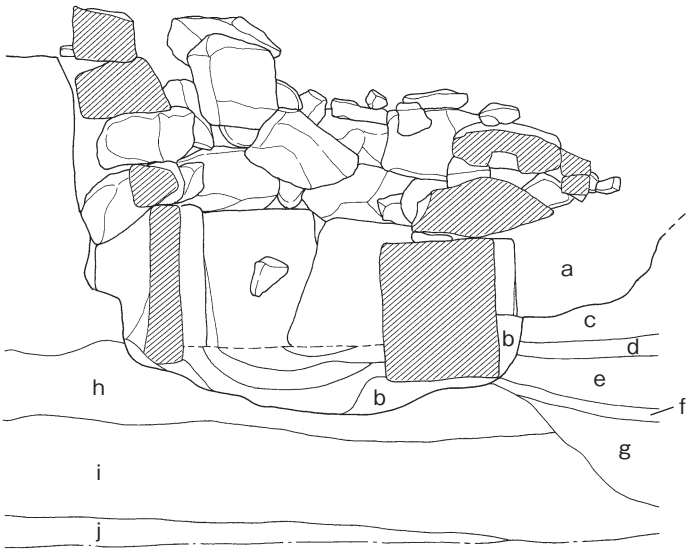
人骨は頭蓋と四肢の一部が遺存する。保存状態は悪い。

古銭は寛永通寶が７枚出土し，副葬品と見られる詳細不明な鉄などが数点出土した（第144図1382～1388）。



第117図　18号溝状遺構及び出土遺物実測図

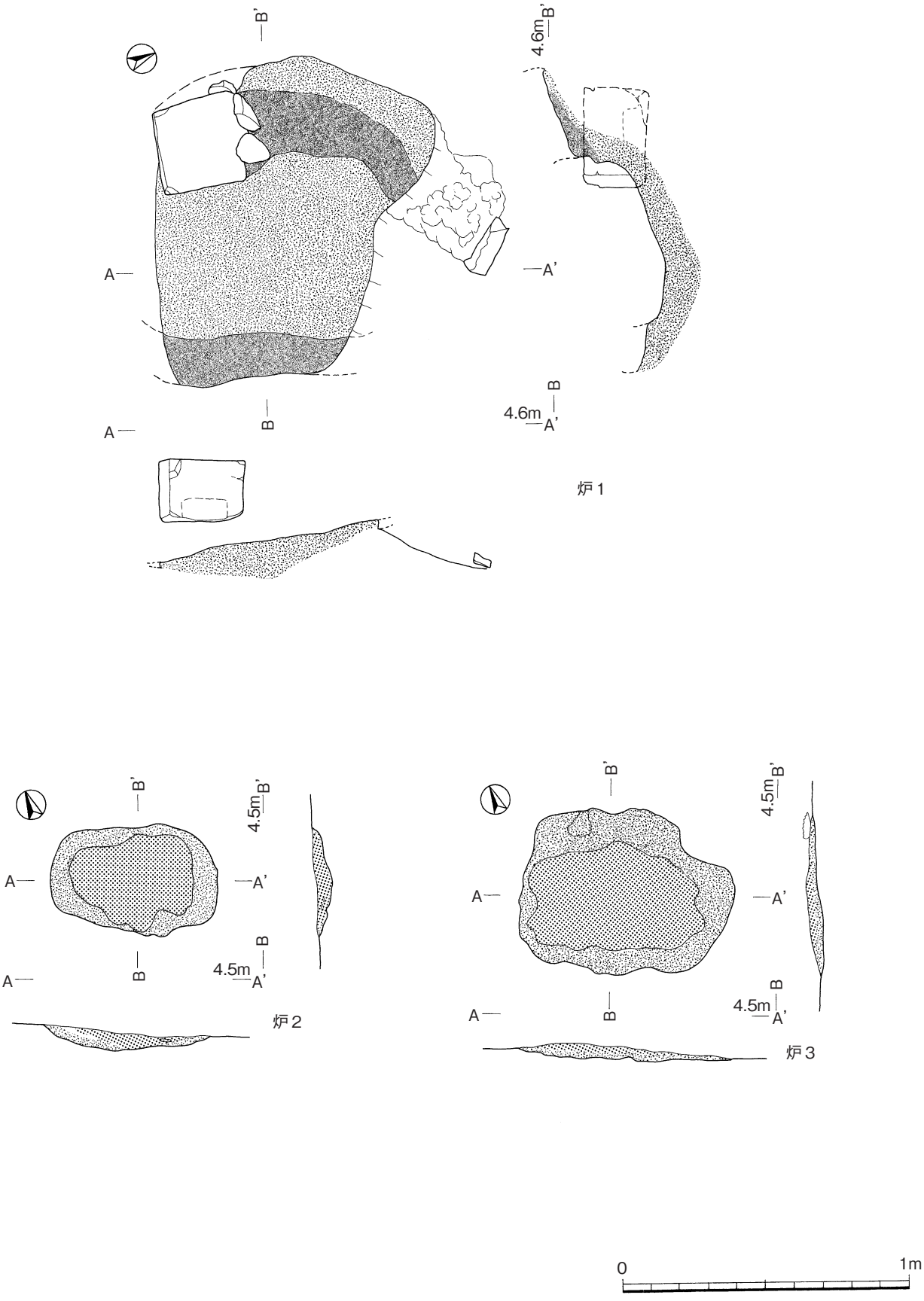




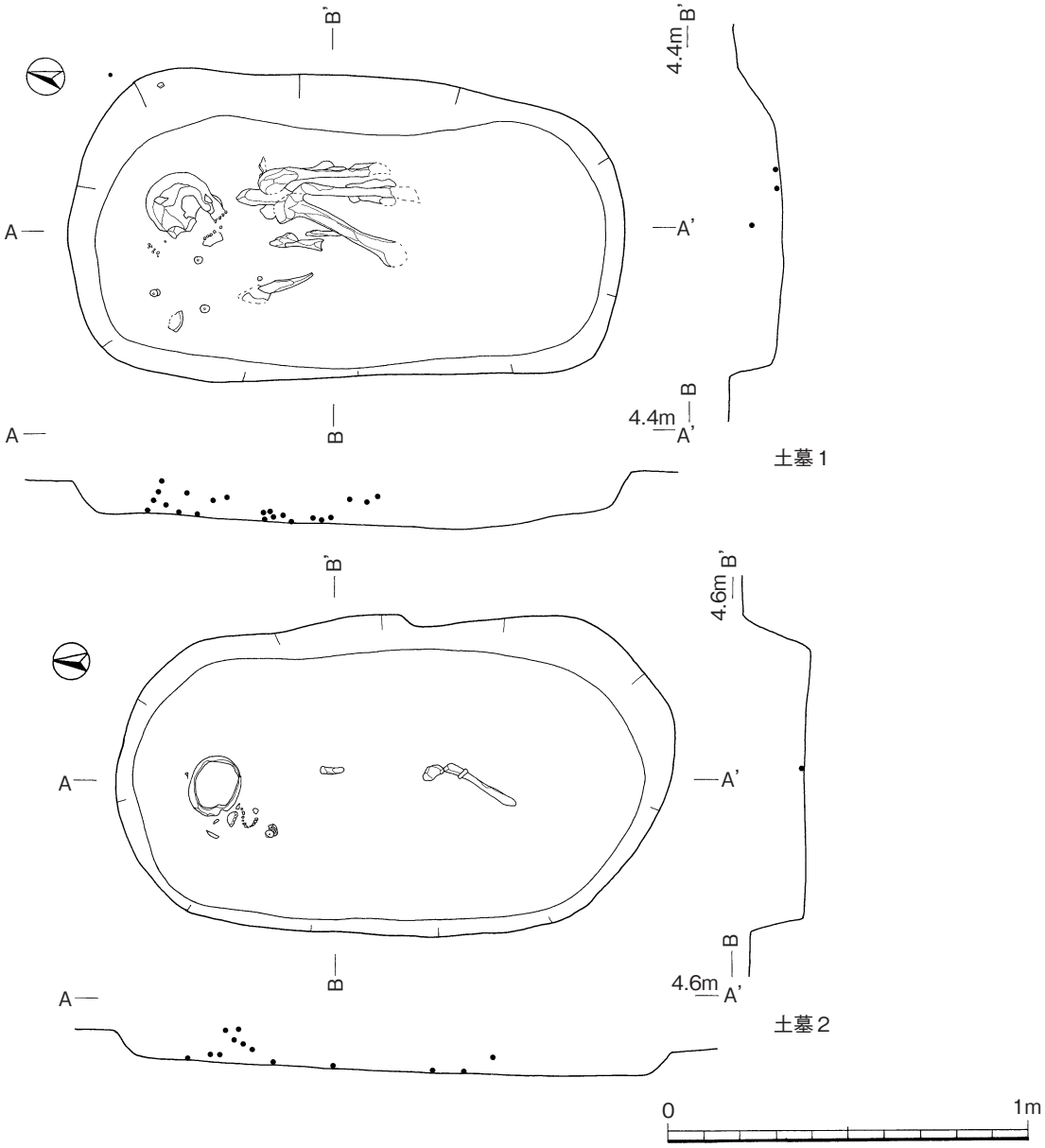
a･･･暗褐色砂質土（径３cm 程度のブロック混在）
b･･･暗黄褐色砂質土（水分を含み，やや粘質）
c･･･暗黄褐色砂質土（水分を含まない）
d･･･暗褐色砂質土（水分を含み，やや粘質）
e･･･明灰褐色砂質土
f･･･灰色粘質土
g･･･灰褐色砂質土
h･･･明黄灰褐色砂質土（やや粘質）
i･･･明灰褐色粘質土（水成作用による堆積層）
j･･･茶褐色砂礫層（砂・小石を多く含む）



第118図　井戸状遺構実測図



第119図　１～３号炉状遺構実測図



第120図　１・２号土壙墓実測図

(5) ５号土壙墓（第121図）

Ｚ－２・３区のⅡ層上面で検出した。長径約1.1m，短径約0.75m の楕円形を呈する。検出面からの深さは約５cm である。

人骨は頭部と上肢の一部が遺存する。保存状態は悪い。

遺物は，寛永通寶と思われる５枚積み重なった状態の古銭や土師器片等も多数出土した。

５号土壙墓内出土遺物（第121図1157・1158）

1157は口縁部が玉縁状を呈する白磁椀の口縁部である。1158は青花と思われるもので，内外面に圏線が巡るほか，文様は描かれていない。見込みは円状に釉剥ぎされる。

その他の出土遺物として，土師器約40点，瓦及び輸入陶器１点が出土している。遺構の年代としては，白磁と青花の年代差が大きいため，不明である。

(6) ６号土壙墓（第121図）

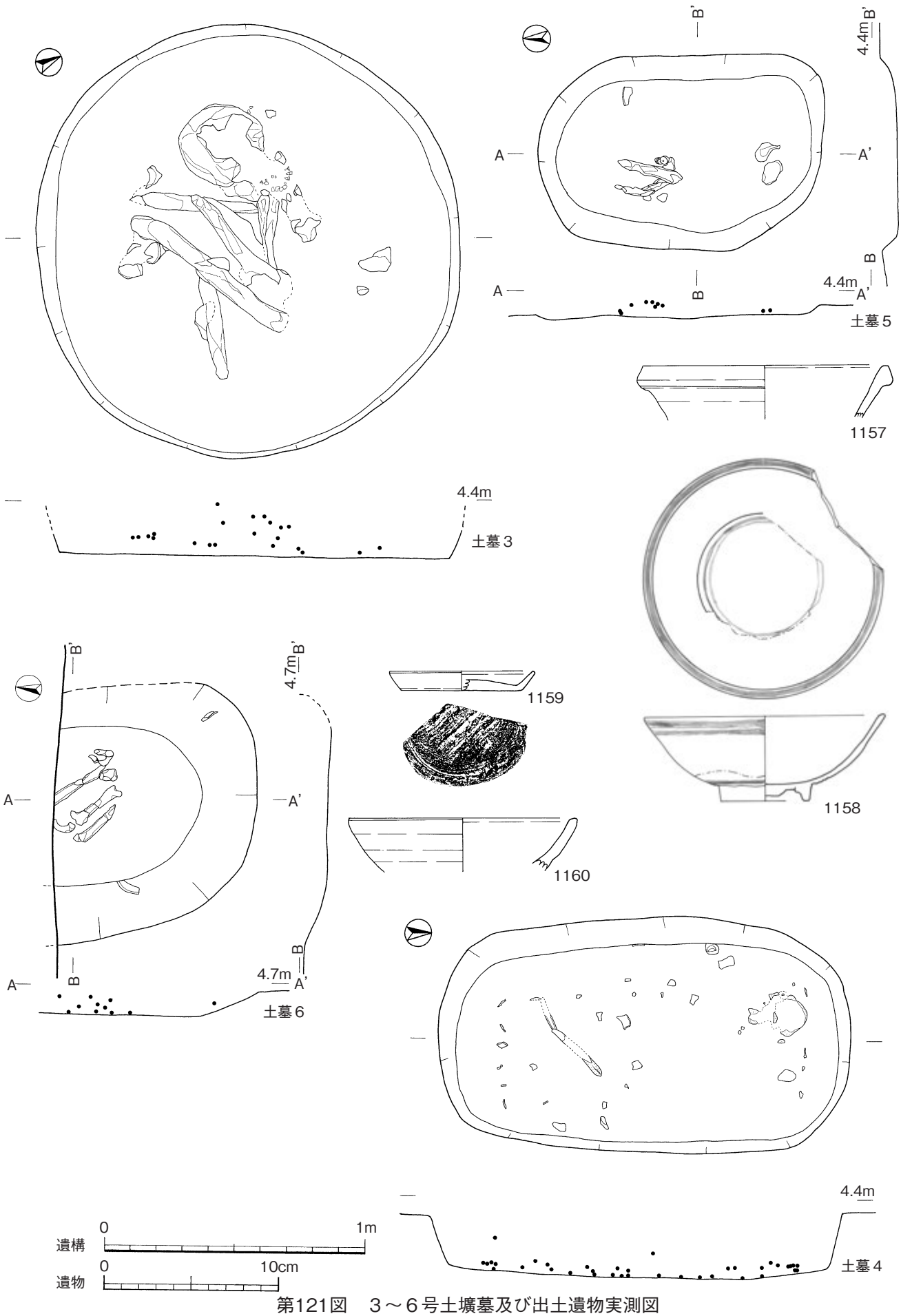
Ｚ・ａ－３区のⅡ層上面で南側半分を検出した。長径約1.5m，短径約１m の楕円形を呈すると思われる。検出面からの深さは約12cm である。

人骨は下半身と思われる骨が一部遺存する。保存状態は悪い。

遺構に伴う遺物は少なく，古銭は出土しなかった。

６号土壙墓内出土遺物（第121図1159・1160）

1159・1160は土師器である。1159は皿である。底面を切り離し後，細いすのこ状の板の上で乾燥させたものと思われ，すのこの痕跡が残る。1160は坏である。体部は丸みを帯びる。その他に土師器の小片４点が出土している。遺構の年代は中世と思われるが，詳細は不明である。



第121図　3～6号土壙墓及び出土遺物実測図

６　大型土坑

(1) ５号大型土坑（第122図）

Ｚ－２区のⅣ層上面で北側半分を検出した。残存部の長径は約２ｍで，深さは20cm と浅い。

遺構に伴う遺物は12点出土した。

５号大型土坑内出土遺物（第122図1161～1164）

1161～1164は土師器である。1161は皿である。1162は赤色土器Ａ類の埦である。1163・1164は坏の底部で，赤色土器Ｂ類である。

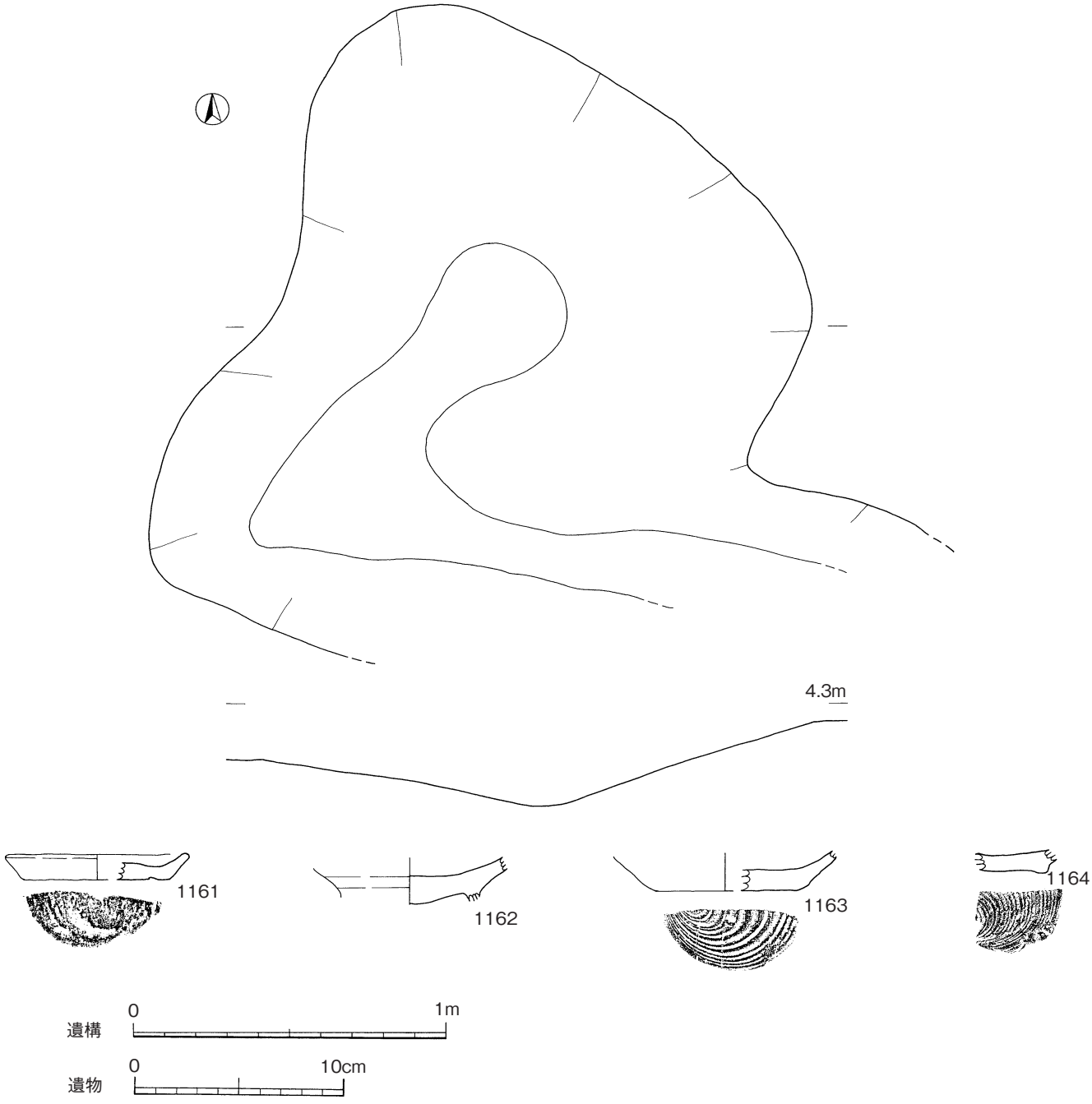
その他に土師器が８点出土している。遺構の年代としては，中世と思われるが詳細は不明である。

(2) ６号大型土坑（第123図）

Ｗ・Ｘ－８・９区のⅡ層上面で検出した。長径は約16.4m，短径約10.4m である。該期の遺構に伴う遺物は多量に出土した。

６号大型土坑内出土遺物（第124～128図1165～1227）

1165～1169は土師器である。1165～1167は坏である。1165は内面にススが付着する。1168は坏または焙烙の可能性も考えられるものである。内外面の一部にススが付着している。1169は内外面に墨書が書かれるが，小片のため判読不明である。



第122図　５号大型土坑及び出土遺物実測図

1170～1177は白磁である。1170は口縁部が玉縁を呈する椀である。1171は口縁部が外反する椀である。1172は内面にヘラと櫛目による文様が描かれる椀の胴部である。1173は高台内面に墨書が描かれるが判読不能である。1174は白磁に分類したが，他の種別の可能性も考えられる資料である。1175～1177は皿である。1175は口唇部が口禿げをなす。1176は平底の底部である。1177は坏で，高台は抉り高台を呈する。

1178～1187は龍泉窯系の青磁である。1178～1184は椀である。1178は内面に片彫劃花文が描かれる。1179は見込みに細い草花文様が印刻される。1180・1181は外面に鎬蓮弁文を有するもので，弁の中心は稜をなす。1182は外面に片彫りで幅の広い蓮弁文を描くが，弁の中心に稜はみられない。1183は外面にヘラ先による細線の線蓮弁文が描かれるが，頭が蓮弁としての単位を意識していない。1184は口縁部が外反するもので，内外面とも無文である。1185は浅形椀または坏と思われるもので，内外面とも無紋である。1186は瓶である。内面は無釉で，外面胴部中央に「福」の字が描かれる。1187は同安窯青磁の皿である。見込みに片彫りの文様と櫛状工具によるジグザグ連点文が描かれる。

1188は肥前陶器の碗で，内野山窯産のものである。暗緑色の銅緑釉が畳付を除きかかる。1189～1199は青花である。1189～1194は碗である。1189は口縁部が外反する。1191・1192は胎土が粗く，呉須の発色も悪い。漳州窯系の製品と思われる。1192は見込みが円状に釉剥ぎされ，内面中央に鉄釉で点が描かれている。

1195～1199は皿である。口縁部は直口もしくはやや内弯気味につくられる。1196は碁笥底を呈する底部である。

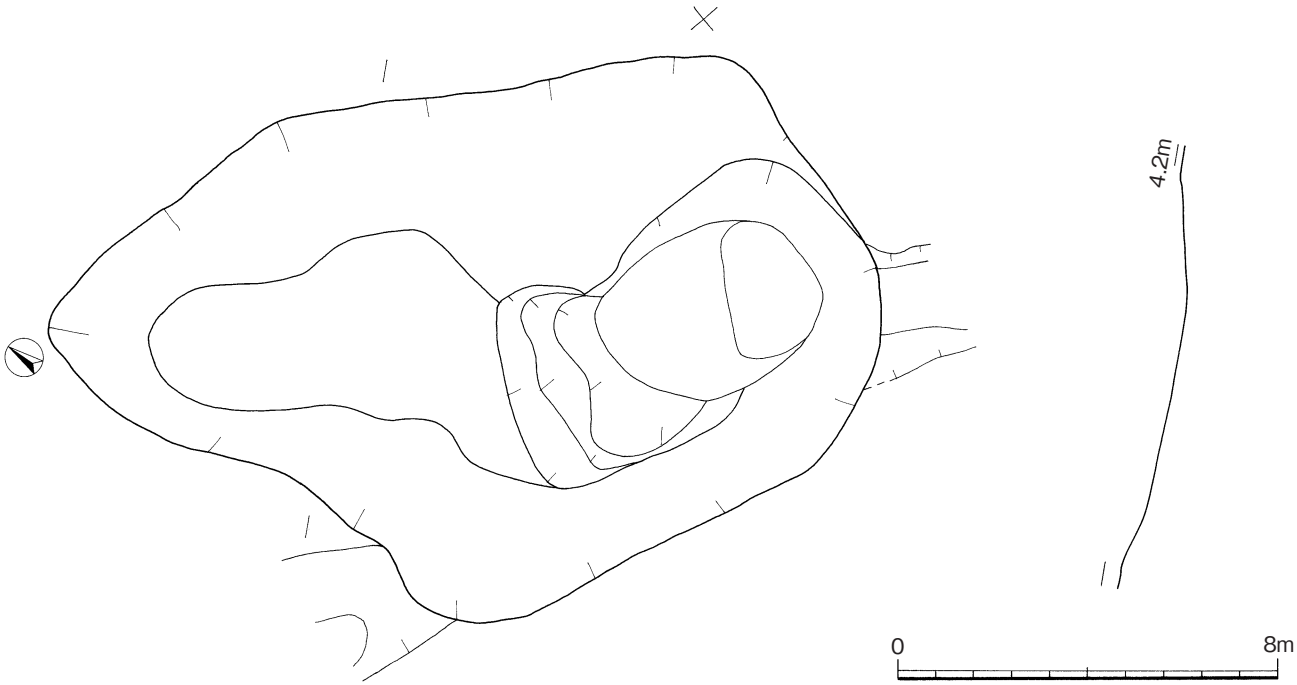
1200～1202は輸入陶器の壺である。３点とも胎土は粗く，残存部は無釉である。1202は逆三角形状の高台を有する。1203は中世須恵器の壺である。外面は格子目タタキ，内面はハケ目が観察される。樺万丈産と思われる。

1204・1205は東播磨系須恵器の鉢である。玉縁状の口縁部外面は炭素で黒色に燻される。1206・1207は瓦質土器の擂鉢である。1208・1209は瓦質土器の火鉢である。

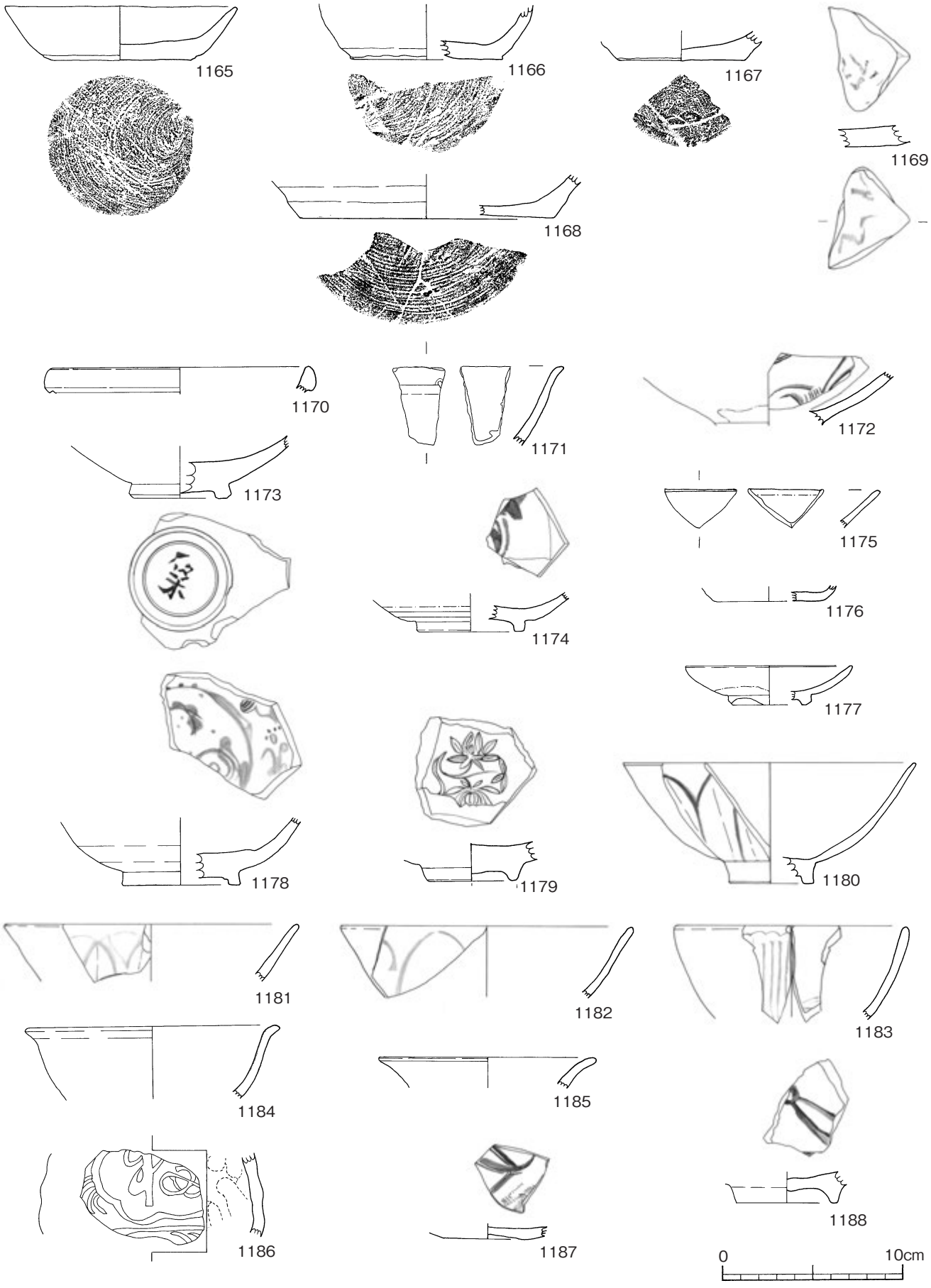
1210は土師質の土製品である。棒状の形状と思われるが，詳細は不明である。1211は備前焼の擂鉢である。擂り目は残存部より下方に入ると思われる。1212は蓋である。瓦質のものである。表面は丁寧なナデが施される。

1213は常滑焼の甕である。口縁部は「N」字状を呈する。1214・1215は肥前陶器である。1214は鉄絵唐津の碗である。1215は唐津焼の皿である。鉄絵と緑釉による二彩手である。1216は唐津焼の碗で，見込みと外底面に砂目が観察される。1217は水注の注口部である。産地等は不明である。1218は薩摩焼の擂鉢で苗代川系のものである。1219～1223は薩摩焼の苗代川系の資料で，1219は徳利の頸部である。1220は小形の瓶と思われる。胎土は緻密で，外面に薄い灰釉がかかる。1221・1222は底部で，器壁は非常に薄く焼き締まっている。内外面には薄い灰釉がかかる。1222は内面にタタキ成形による同心円状のあて具痕が残る。1223は片口の口縁部である。1224～1226は鞴の羽口である。先端部には鉄滓が熔着する。1227は滑石製石鍋である。鍔状の羽部が胴部中位に巡る。

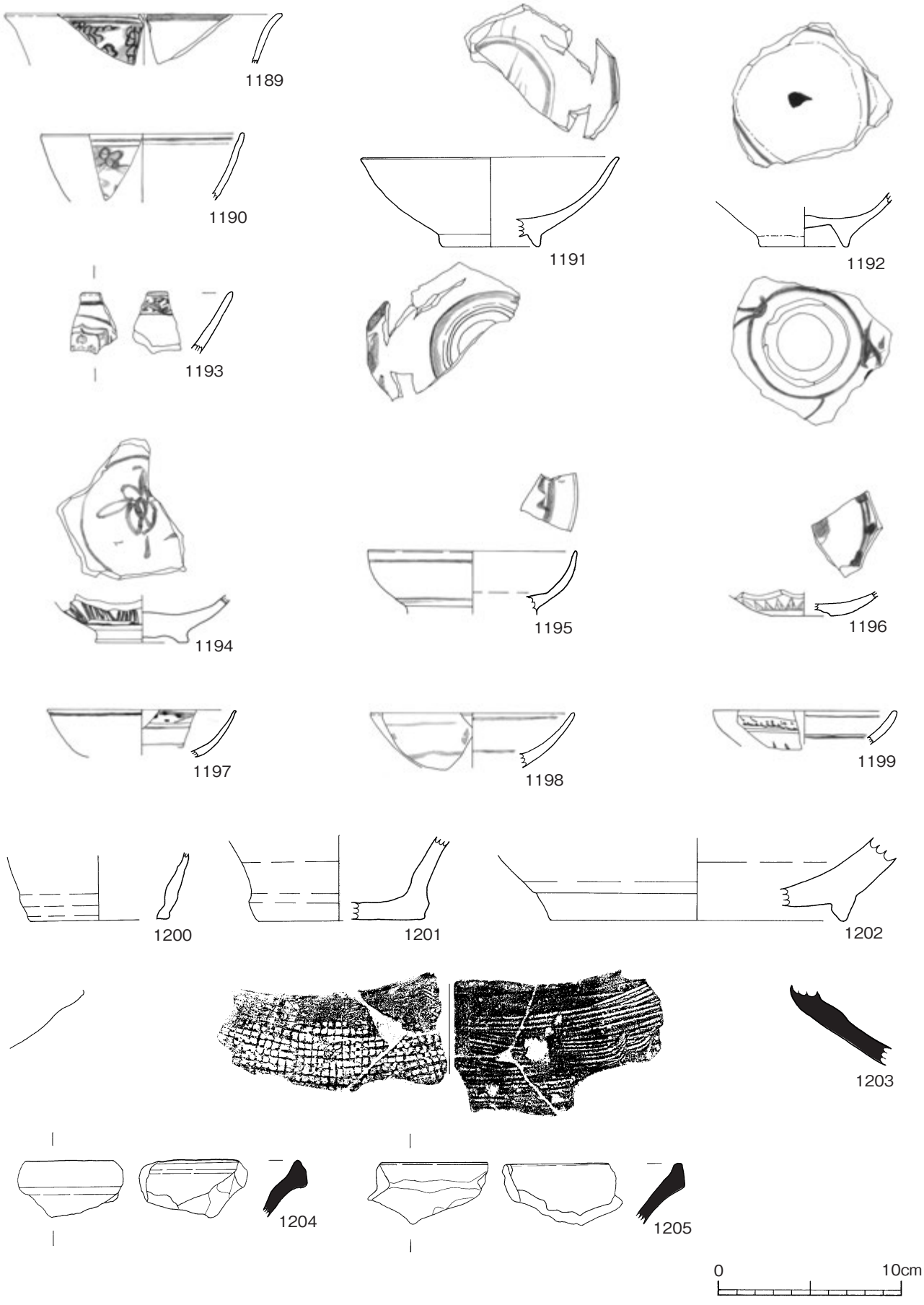
その他の出土遺物として，土師器約60点，白磁７点，青磁12点，瓦質土器21点，布目瓦２点，鞴の羽口５点が出土している。遺構の年代としては，中世後期頃と思われる。



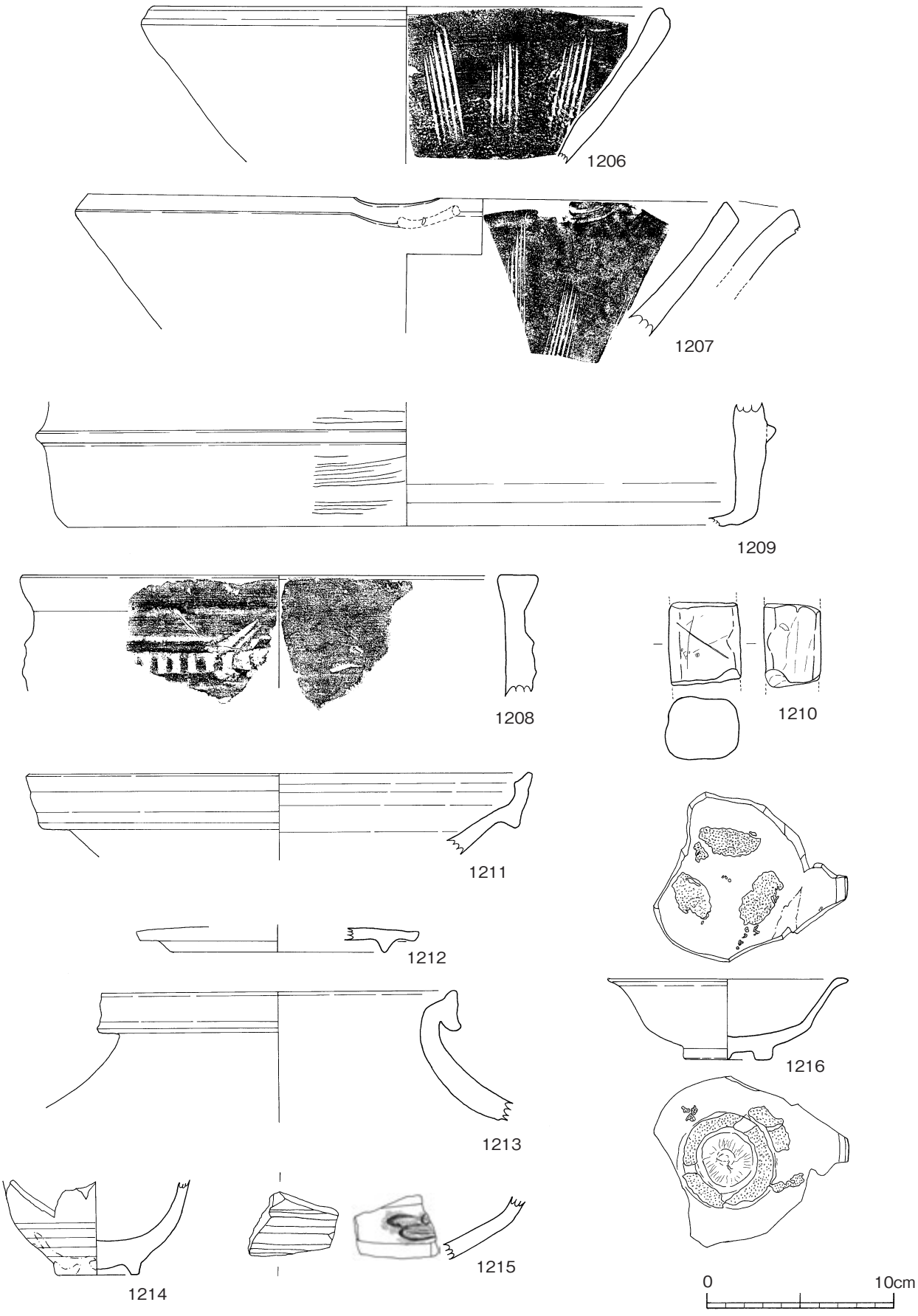
第123図　６号大型土坑実測図



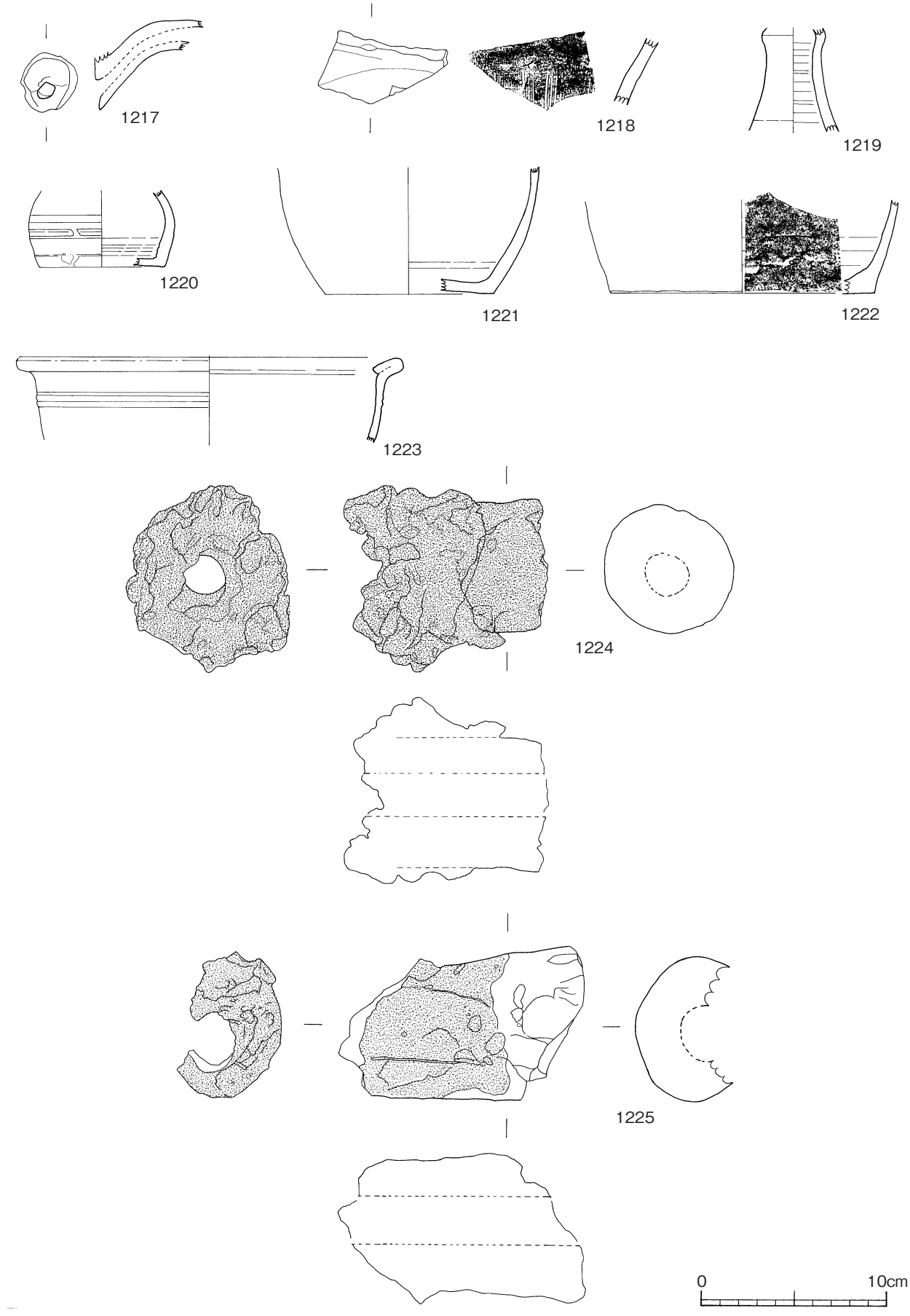
第124図　６号大型土坑出土遺物実測図（１）



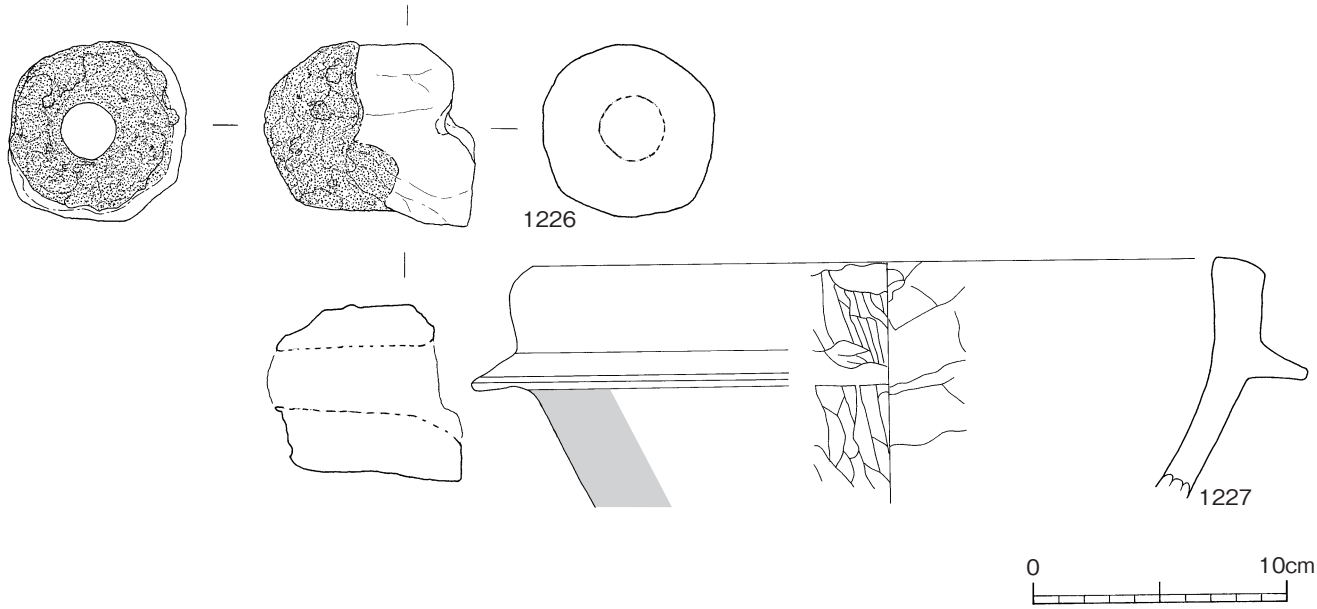
第125図　６号大型土坑出土遺物実測図（２）



第126図　６号大型土坑出土遺物実測図（３）



第127図　６号大型土坑出土遺物実測図（４）



第128図　６号大型土坑出土遺物実測図（５）

７　円形粘土塊状遺構（第129図）

Ｗ－１区のⅡ層上面において，茶褐色の粘土が円形状に固まった状態で検出した。掘り込みは確認できず，径が約60cm で，粘土の厚さ約５cm の円形を呈する。

同様の遺構が，隣接する芝原遺跡でも検出されたが，周辺の遺構検出状況や遺物等から判断するのは困難であり，その用途については不明である。

中心部に古銭が１枚出土した。

８　土坑

該期の土坑は，12基検出された。

(1) 24～27号土坑（第129・130図）

Ｘ－２・３区のⅢ・Ⅳ層上面から検出した。

24号土坑は，長径2.2m，短径約90cm，掘り込みの深さが約15cm の楕円形を呈する。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

25号は径約80cm，深さが約23cm で円形を呈する。遺物は８点出土し，２点を掲載した。

26号は径約１m で，最深部約40cm の隅丸方形を呈する。該期の出土遺物は１点である。

27号は長径約1.4m，短径約１m で，最深部は25cm と深い。遺構に伴う遺物は11点出土した。

24～27号土坑内出土遺物

25号土坑内出土遺物（第129図1228・1229）

1228は土師器の坏の底部である。

1229は白磁の椀の口縁部である。口縁端部は外側に屈曲し，上部はほぼ平坦につくる。

その他土師器６点が出土している。遺構の年代は，中世の範疇で考えたいが，詳細は不明である。

26号土坑内出土遺物（第129図1230）

1230は青白磁の合子蓋である。

その他，該期以前のものとして土師器21点，須恵器１点が出土しており，12世紀頃の遺構と思われる。

27号土坑内出土遺物（第130図1231～1233）

1231は土師器の皿である。やや深みがある物で，内外面には丁寧なナデ調整が施される。

1232は磁器の碗である。口唇部は鉄釉で口錆が施される。1233は土師質土器の焙烙で，外底面にはススが付着する。

その他土師器が８点出土している。遺構の年代は，中世の範疇で考えたいが，詳細は不明である。

(2) 28・29号土坑（第130図）

Ｘ・Ｙ－２区のⅣ層上面から検出した。

28号は長径が約60cm，短径約45cm の楕円形を呈し，掘り込みの深さは約20cm である。

29号は長径が約1.6m，短径約80cm で28号と重なって検出された。切り合いから，29号が古いと判断できる。

遺構に伴う遺物は９点である。

28・29号土坑内出土遺物

28号土坑内出土遺物（第130図1234）

出土遺物は５点で，1234は土師器で赤色土器Ｂ類の皿である。口縁先端は先細る。

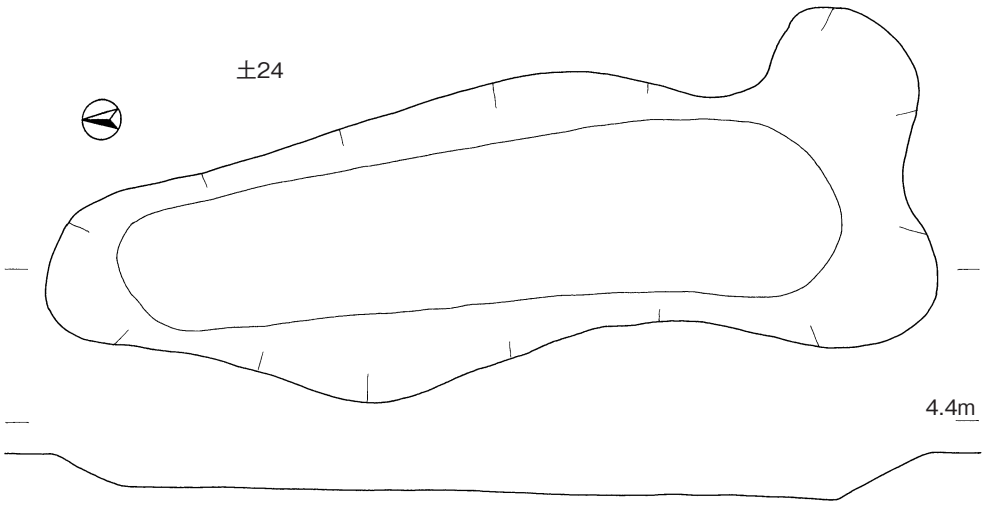
その他，土師器が４点出土している。遺構の年代は中世と思われるが，詳細は不明である。

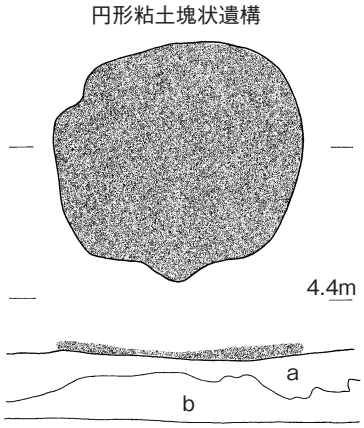
29号土坑内出土遺物（第130図1235～1237）

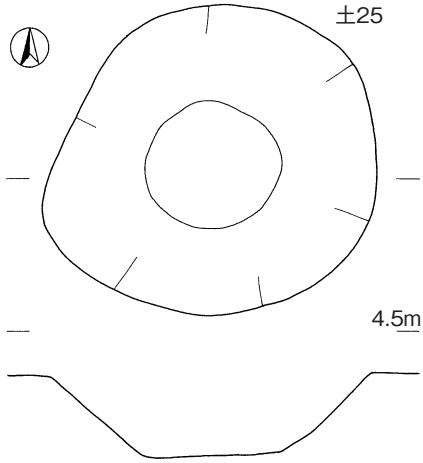
1235・1237は中国南部産と思われる輸入陶器である。

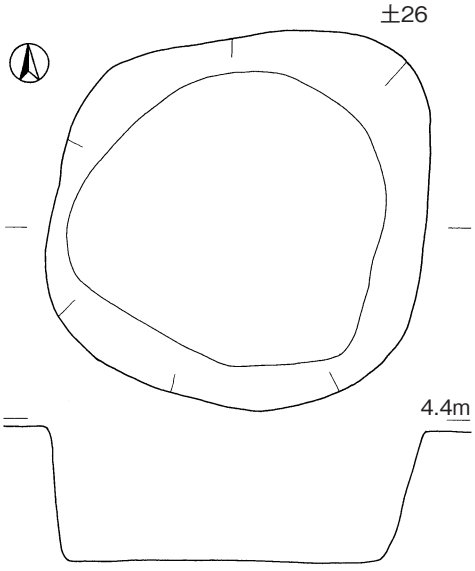
1236は土師器の坏である。内面には指ナデの痕跡が観察される。1237は底部が碁笥底を呈し，内外面には褐釉がかかる。

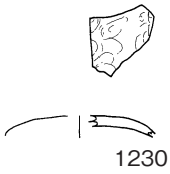
その他に土師器が６点出土している。遺構の年代としては，中世の範疇で捉えたいが，詳細は不明である。

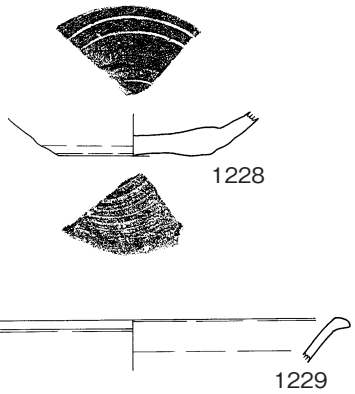






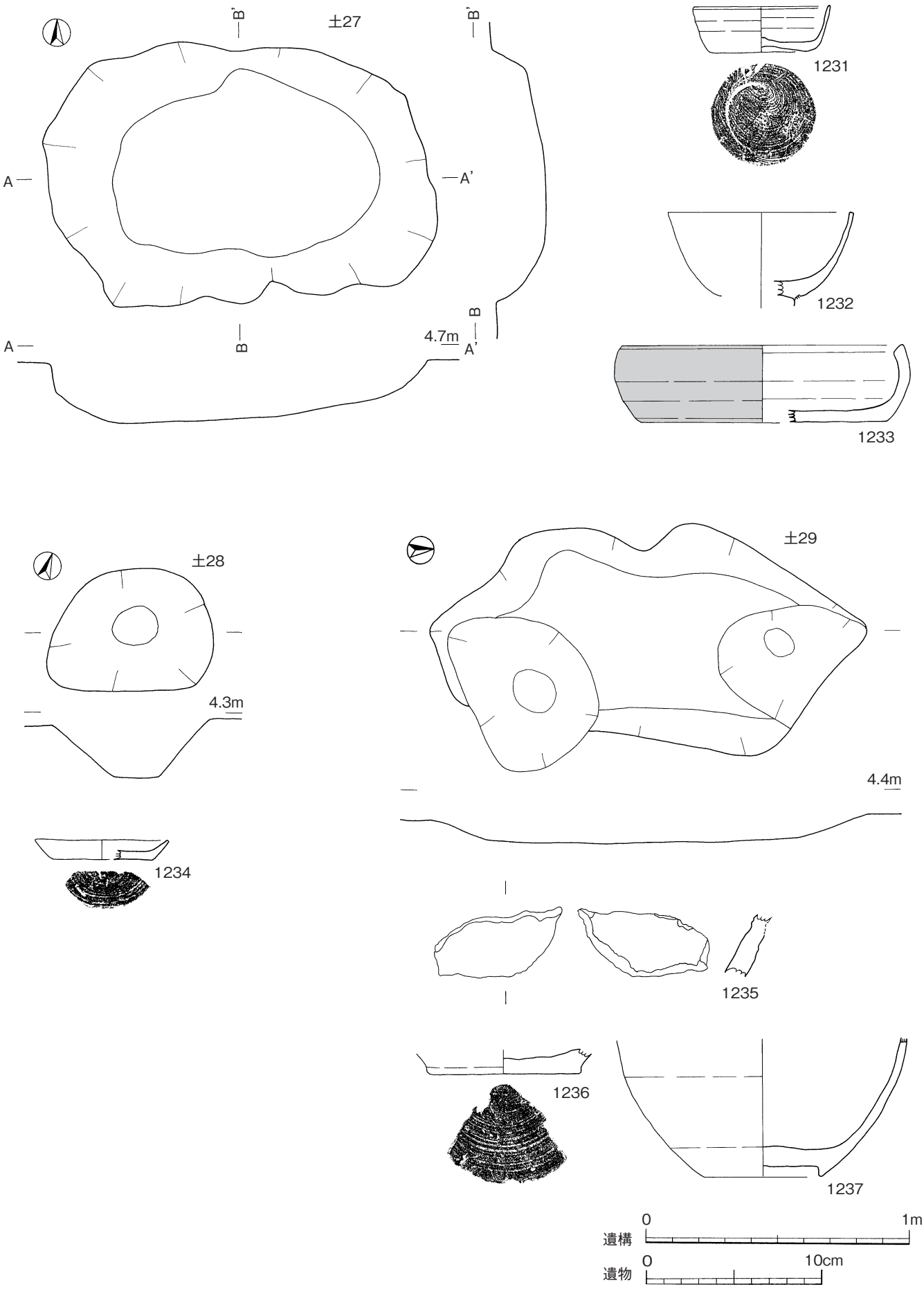








第129図　円形粘土塊状遺構・24～26号土坑及び出土遺物実測図



第130図　27～29号土坑及び出土遺物実測図

(3) 30～33号土坑（第131・132図）

Ｚ－２・３区のⅣ層上面から検出した。

30号は径約１m，深さが約13cm で円形を呈する。

31号は長径約2.3m，短径約0.6m で掘り込みの深さが約15cm の楕円形を呈する。

遺物は12点出土し，７点を掲載した。

32号は径約70cm で掘り込みの深さが約４cm の円形を呈する。

遺構に伴う遺物は出土しなかった。

33号は長径約１m，短径約60cm で深さが約55cm の楕円形を呈する。

30～33号土坑内出土遺物

30号土坑内出土遺物（第131図1238）

1238は土師器の皿である。口径約８cm で，器高は約１cm と浅い。その他に土師器が20点出土している。

遺構の年代としては，中世の範疇で捉えたいが，詳細は不明である。

31号土坑内出土遺物（第131・132図1239～1245）

1239～1243は土師器である。1239・1240は皿である。体部の立ち上がりはほぼ直線である。1241～1243は坏の底部である。体部はやや曲線的に立ち上がる。

1244・1245は白磁の椀である。1244は内面に短い櫛目文が施される。1245は，口縁部が肉厚の玉縁を呈する。

その他，土師器が５点出土している。遺構の年代としては，12世紀頃と思われる。

33号土坑内出土遺物（第132図1246）

1246は，土師器坏の底部である。

その他には該期以前の遺物として，土師器が７点出土している。

(4) 34・35号土坑（第132図）

ａ－２・３区のⅣ層上面から検出された。

34号は長径約60cm，短径約24cm で掘り込みの深さが約15cm の楕円形を呈する。

35号は長径約１m，短径約90cm で掘り込みの深さが約80cm の楕円形を呈する。

34・35号土坑内出土遺物

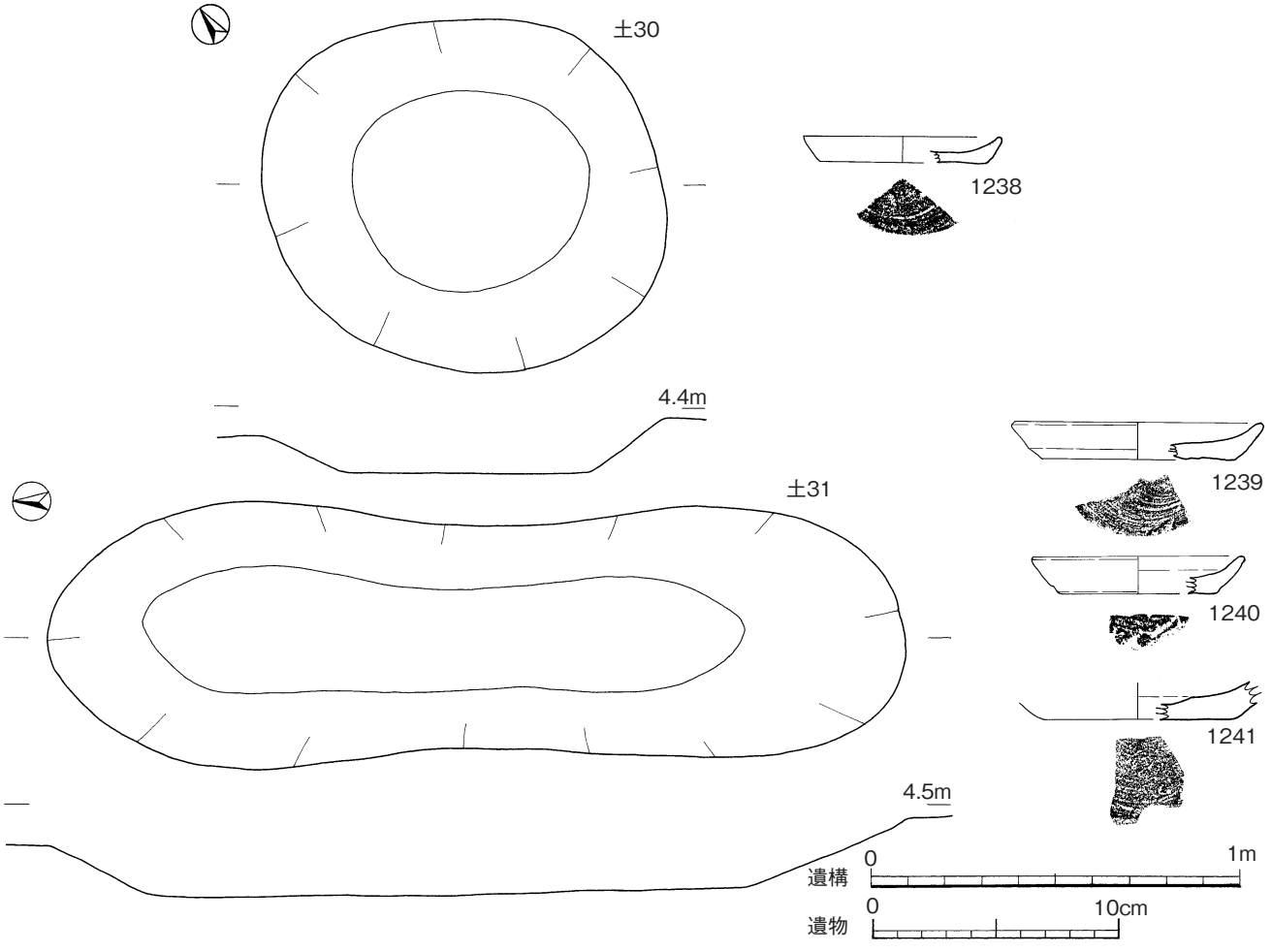
34号土坑内出土遺物（第132図1247）

1247は坏で，体部が丸みを帯びる形状を呈する。

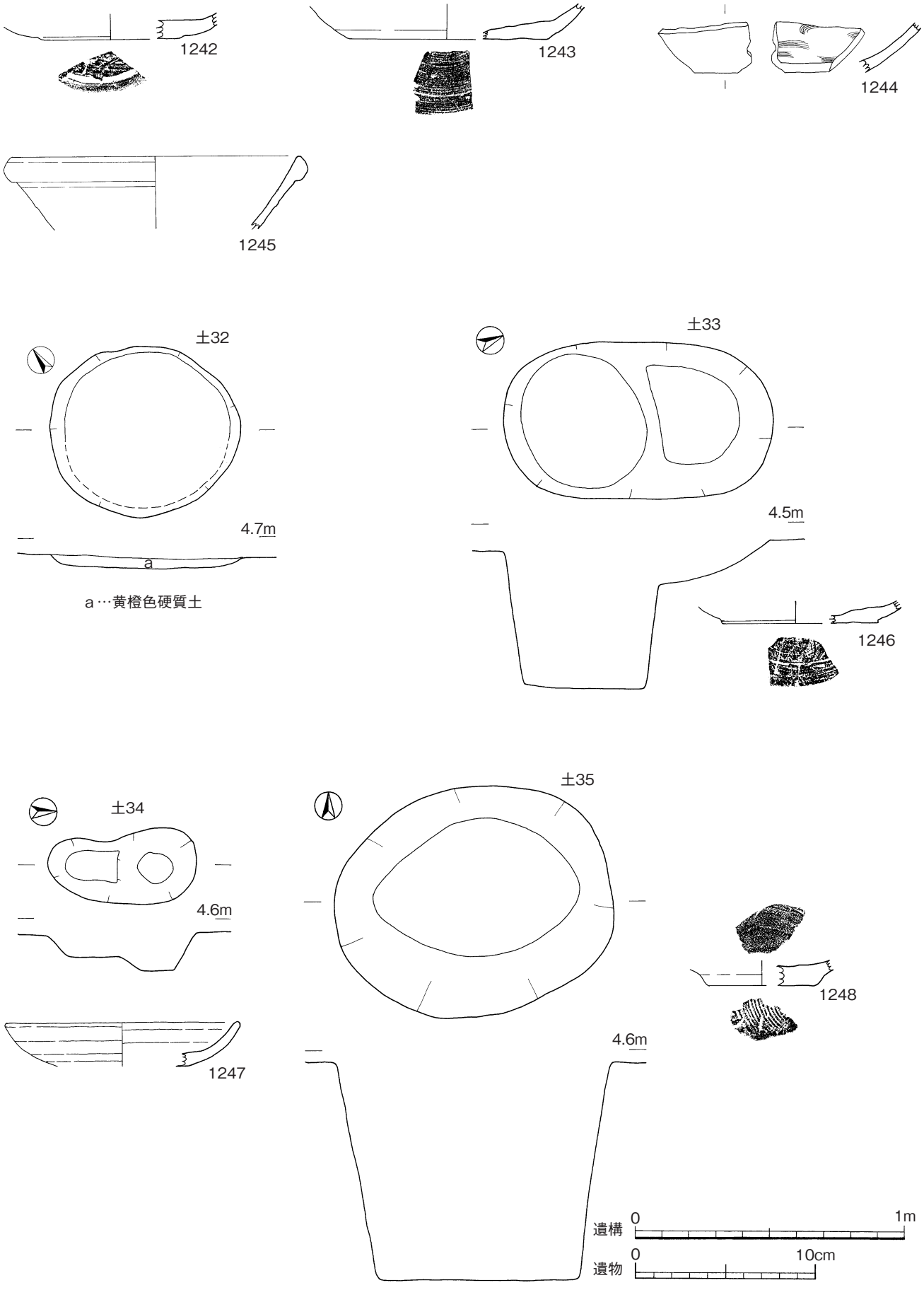
その他，該期以前の土師器が８点出土している。遺構の年代は，中世の範疇で考えたいが，詳細は不明である。

35号土坑内出土遺物（第132図1248）

1248は土師器の坏である。底部はやや厚めで，内面には回転ナデが観察される。該期以前の遺物として土師器が24点出土している。遺構の年代としては，中世の範疇で捉えたいが，詳細は不明である。



第131図　30・31号土坑及び出土遺物実測図



第132図　32～35号土坑及び出土遺物実測図

4　ピット

該期のピットは19基検出した。

42号ピットについては，近世初期（17世紀前半頃）と思われるが，他については，中世前半頃と思われる。

(1) 24号ピット（第133図）

24号ピットは，W－3区Ⅳ層上面で検出した。長径44cm，短径36cm，深さ21cmである。

遺構に伴う遺物は出土しなかった。

(2) 25・26号ピット（第133図）

25・26号ピットは，X－3・4区Ⅳ層上面で検出した。25号は，径約23cmで深さ約13cmの円形を呈する。

26号は径約33cmで，深さ約24cmの円形を呈する。

出土遺物は，土師器の坏の底部が1点出土している。

25・26号ピット内出土遺物

25号ピット内出土遺物（第133図1249～1251）

1249は土師器の坏で，底部である。1250はカムィヤキである。内外面はナデ調整が施される。1251は碁笥底を呈する水注もしくは壺の底部と思われる。

26号ピット内出土遺物（第133図1252）

1252は底部が厚く，ややつくりも雑である。内面には指ナデが観察される。

(3) 27～30号ピット（第133図）

27～30号ピットは，Y－2・3区Ⅳ層上面で検出した。27号は径約36cmで，深さ約20cmの円形を呈する。

28号は径約45cmで深さ約33cmの円形を呈する。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

29号は長径約48cm，短径約32cmで，深さ約35cmの楕円形を呈する。

30号は径約25cmで深さ約12cmの円形を呈する。

27～30号ピット内出土遺物

27号ピット内出土遺物（第133図1253）

出土遺物は，カムィヤキの甕の胴部が1点出土している。1253は，内外面ともタタキ成形を当て痕をナデ消している。

29号ピット内出土遺物（第133図1254）

出土遺物は，白磁椀が1点出土している。1254は口縁部で，玉縁状を呈する。

30号ピット内出土遺物（第133図1255）

カムィヤキの甕が1点出土している。1255は，タタキ成形の後ナデ調整を施しているが，当て具の痕跡が残る。

(4) 31～38号ピット（第133・134図）

31～38号ピットは，Y・Z－2・3区Ⅳ層上面で検出した。31号は長径約30cm，短径約15cmで，深さ約23cmの楕円形を呈する。

32号は径約30cmで深さ約45cmの円形を呈する。出土遺物は，土師器の皿が1点出土している。

33号は径約60cmで，深さ約15cmの円形を呈する。出土遺物は2点で，2点とも土師器である。

34号は径約40cmで深さ約58cmの円形を呈する。出土遺物は2点である。

35号は径約60cmで深さ約35cmの円形を呈する。

36号は長径約40cm，短径約32cmで，深さ約12cmの楕円形を呈する。出土遺物は3点である。

37号は径約20cmで深さ約15cmの円形を呈する。出土遺物は2点である。

38号は径約26cmで深さ約21cmの円形を呈する。出土遺物は2点である。

31～38号ピット内出土遺物

31号ピット内出土遺物（第133図1256）

出土遺物は1点で，1256は，土師器の坏である。

32号ピット内出土遺物（第133図1257）

1257は，口径約9cmを測る。内外面はナデ調整が施されるが，底部の切り離しは雑である。

その他，土師器の小片が約14点出土している。

33号ピット内出土遺物（第133図1258・1259）

1258は皿で，灯明皿として使用したと考えられ，一部にススが付着する。1259は坏である。底部はやや厚みがあり，体部との境に段がみられる。

34号ピット内出土遺物（第134図1260・1261）

1260は土師器の坏で，底部は厚くつくられる。内面には指ナデが観察される。1261は白磁の皿である。

35号ピット内出土遺物（第134図1262～1264）

1262は土師器で，坏の底部である。内面には渦状にナデの痕跡が残る。1263は皿で，体部は直線的に立ち上がり，先端は窄まる。1264は内面が無釉であることから，壺や水注など，内面が袋状になる器形のものである。

36号ピット内出土遺物（第134図1265）

1265は，カムィヤキの甕の胴部である。

37号ピット内出土遺物（第134図1266・1267）

どちらも土師器の皿で，口径約8cmを測る。1266は体部がやや丸みを帯びる。1267は体部が直線的に立ち上がり，端部はやや外反気味である。

38号ピット内出土遺物（第134図1268・1269）

どちらも土師器の坏の底部である。

(5) 39～41号ピット（第134・135図）

39～41号ピットは，a－3区Ⅳ層上面で検出した。39号は径約45cmで，深さ約35cmの円形を呈する。

40号は長径約70cm，短径約30cmで，深さ約14cmの楕円形を呈する。

41号は径約35cmで，深さ約30cmの円形を呈する。

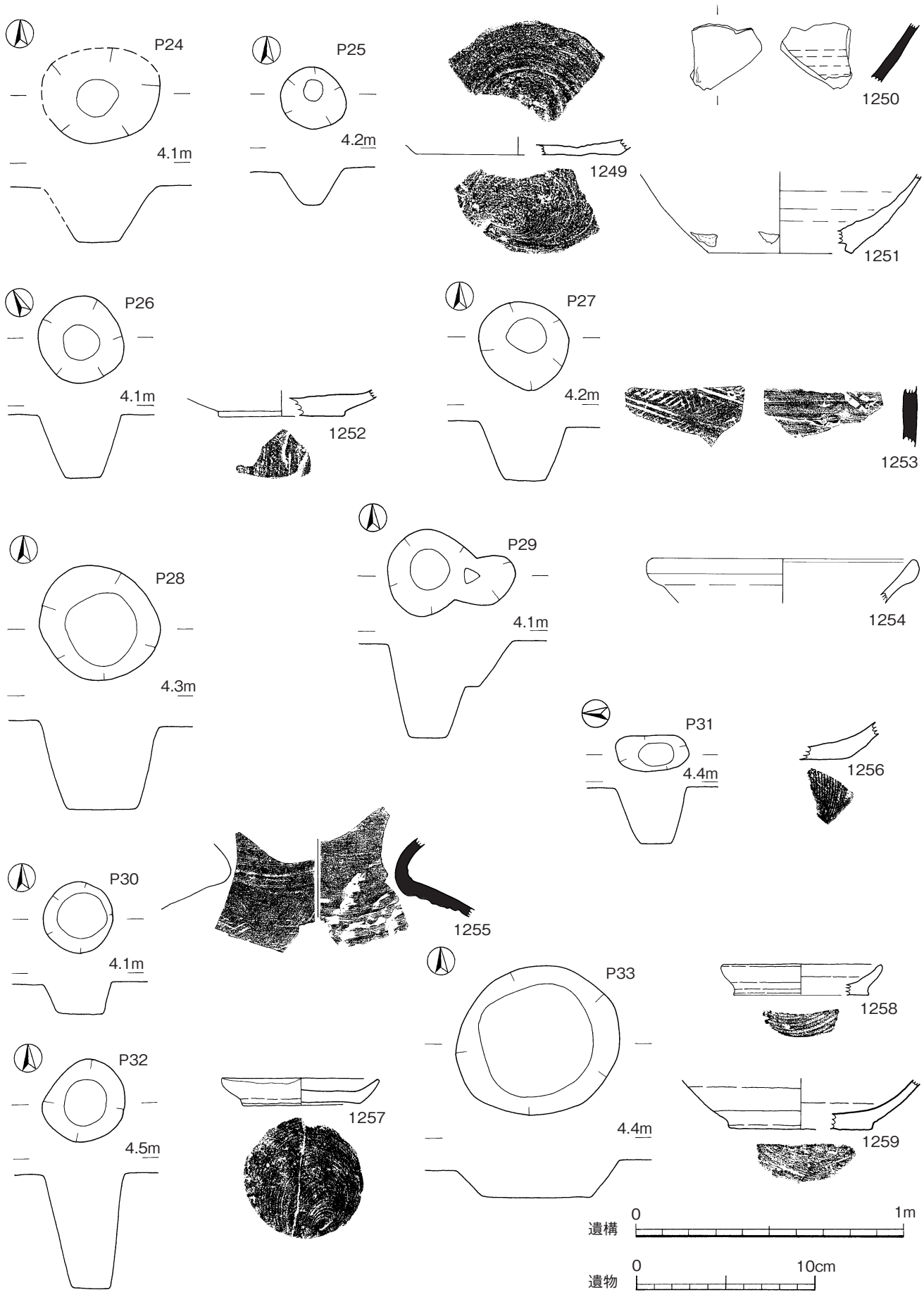
39～41号ピット内出土遺物

39号ピット内出土遺物（第134図1270・1271）

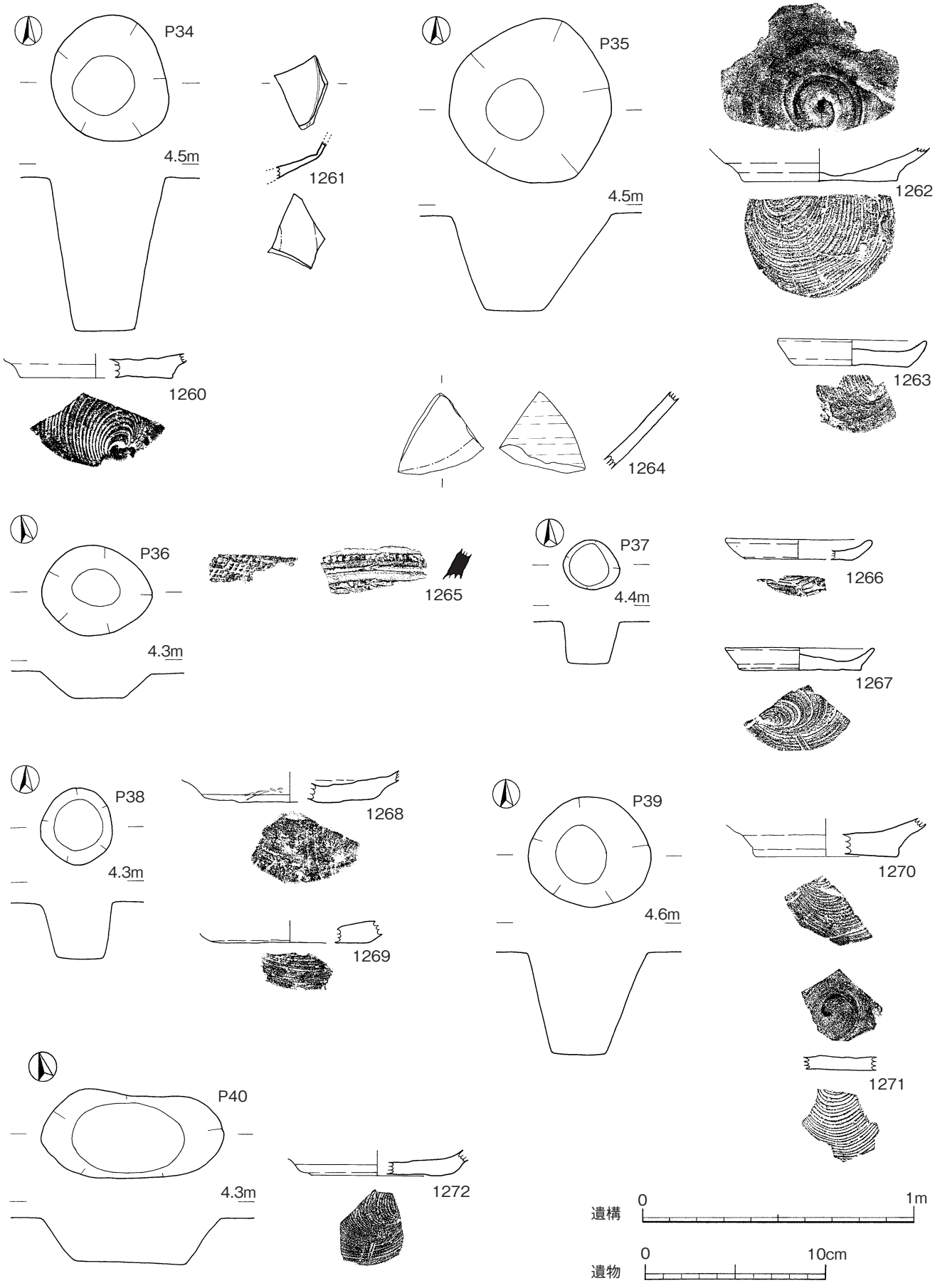
出土遺物は土師器の坏が2点出土している。

40号ピット内出土遺物（第134図1272）

出土遺物は土師器の坏が1点出土している。



第133図　24～33号ピット及び出土遺物実測図



第134図　34～40号ピット及び出土遺物実測図

41号ピット内出土遺物（第135図1273）

出土遺物は，管状土錘が１点出土している。外面に赤色顔料が塗布されている。半分は欠損している。

(6) 42号ピット（第135図）

42号ピットは，W－８区Ⅳ層上面で検出した。長径約75cm，短径約50cm で，深さ約65cm の楕円形を呈する。

42号ピット内出土遺物（第135図1274・1275）

出土遺物は２点である。1274は景徳鎮窯系の青花皿である。高台内底面に「福」の字が描かれる。1275は肥前陶器の皿で唐津焼である。口唇部に鉄釉で口紅を施す。

第３節　遺物

中世～近世の出土遺物については，前述の遺構内出土遺物と重複する資料については割愛した。ただし，特に資料的価値が高いと思われるものについては掲載した。

１　土師器（第136図1276～1296）

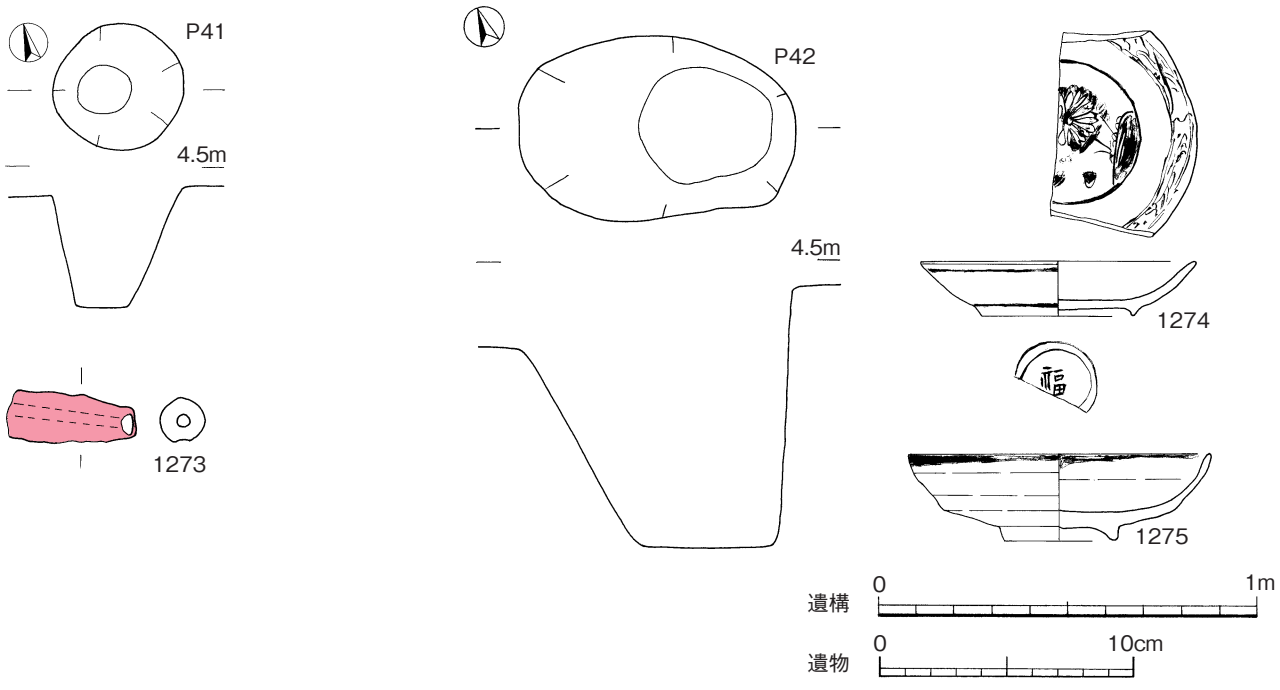
1276～1295は土師器である。底部の切り離しが糸切りのものを中世の土師器として取り扱った。器種としては，皿・坏，黒色土器Ａ類の埦，黒色土器Ｂ類の皿，赤色土器Ａ類の皿と坏がみられる。1276～1287は皿である。内外面に丁寧な回転ナデが施されるもので，底部と体部の境を面取りしたものは見られない。1276～1285は器高が低く，体部はやや丸みを帯びて立ち上がるものである。1276～1278は，復元口径約10～11cm 前後，1279～1284は９cm 前後，1285は8.4cm を測る。1286は器高が高く，体部が丸みを帯びるものである。外面口縁部の一部にススが付着する。1287～1289は黒色土器Ａ類の埦である。外面は燻されていないが，丁寧な横方向のミガキが施される。短い高台がバチ状に貼り付けられた底部である。1287・1288は高台底面に丁寧なナデ調整が施されているため，底部の切り離しは不明であるが，1289は底部の糸切りが観察できる資料である。

1290・1291は黒色土器Ｂ類の皿である。1290は器高が低く，体部は丸みを帯びる。ミガキは全面に施される。1291は摩滅があり詳細は不明であるが，内面全体と外面にミガキが観察される資料である。ミガキの施されない外底面には糸切りが残る。内外面ともにススが付着する面が多くみられ，ミガキも見られることから，黒色土器として分類した。1292は赤色土器Ａ類の坏である。体部下位から底部との境に弱いヘラケズリを施す。1293は赤色土器Ｂ類の坏である。体部と底部の境にくびれを有する。1294は黒色土器と赤色土器が一体化した坏で，内面は炭素で燻され，外面は赤色顔料が塗布される。内外面ともミガキは施されていない。1295はメンコと思われる資料である。底部と体部の境を丁寧に打ち欠いている。

1296 は中世須恵器の皿と思われる。外底面には糸切りが観察されるが，実際の底面よりやや小さい。

２　輸入陶磁器（第137図1297～1316）

1297～1316は輸入陶磁器である。1297～1300・1307は白磁で，1297は椀である。高台の削りが粗雑で，見込みには輪状の釉剥ぎが施される。外面腰部まで釉がかかる。1298・1299は皿である。1298は口縁部が外反するもので，見込みは輪状に釉剥ぎされ，砂粒が付着する。1299は体部が丸みを帯びるもので，見込みは円状に釉剥ぎされる。高台のケズリは浅い。1300・1307は壺の口縁部である。1301～1305は青磁である。1302～1305は龍泉窯系のものであるが，1301については青磁でない可能性も考えられる。口縁端部が輪花をなすもので，輪花の境は白土による細線で区切られる。1302は，内面に二又片刀による文様が描かれるもので，口縁端部は輪花となる。1303は，外面に幅の細い蓮弁文が描かれるが，細線と剣頭が蓮弁文を意識せずに描かれる。



第135図　41・42号ピット及び出土遺物実測図

1304は坏である。腰部はくの字状に屈曲し，口縁部は強く外側へ折れる。外面には蓮弁文が描かれる。釉は畳付にもかけられ，高台内底面のみ円状に釉剥ぎされる。1305～1316（1307除く）は中国南部産の陶器である。1305は小形の鉢と思われる資料である。外面は無釉で，内面のみ施釉される。1306・1308は同一個体と考えられる鉢である。胎土は精良で，薄い褐釉がかかる。底部は碁笥底状をなし，総釉である。1307・1309は瓶である。徳利状の形状を呈するものと思われる。内面は無釉で，外面は白土を一部に厚く施した後，透明釉をかける。

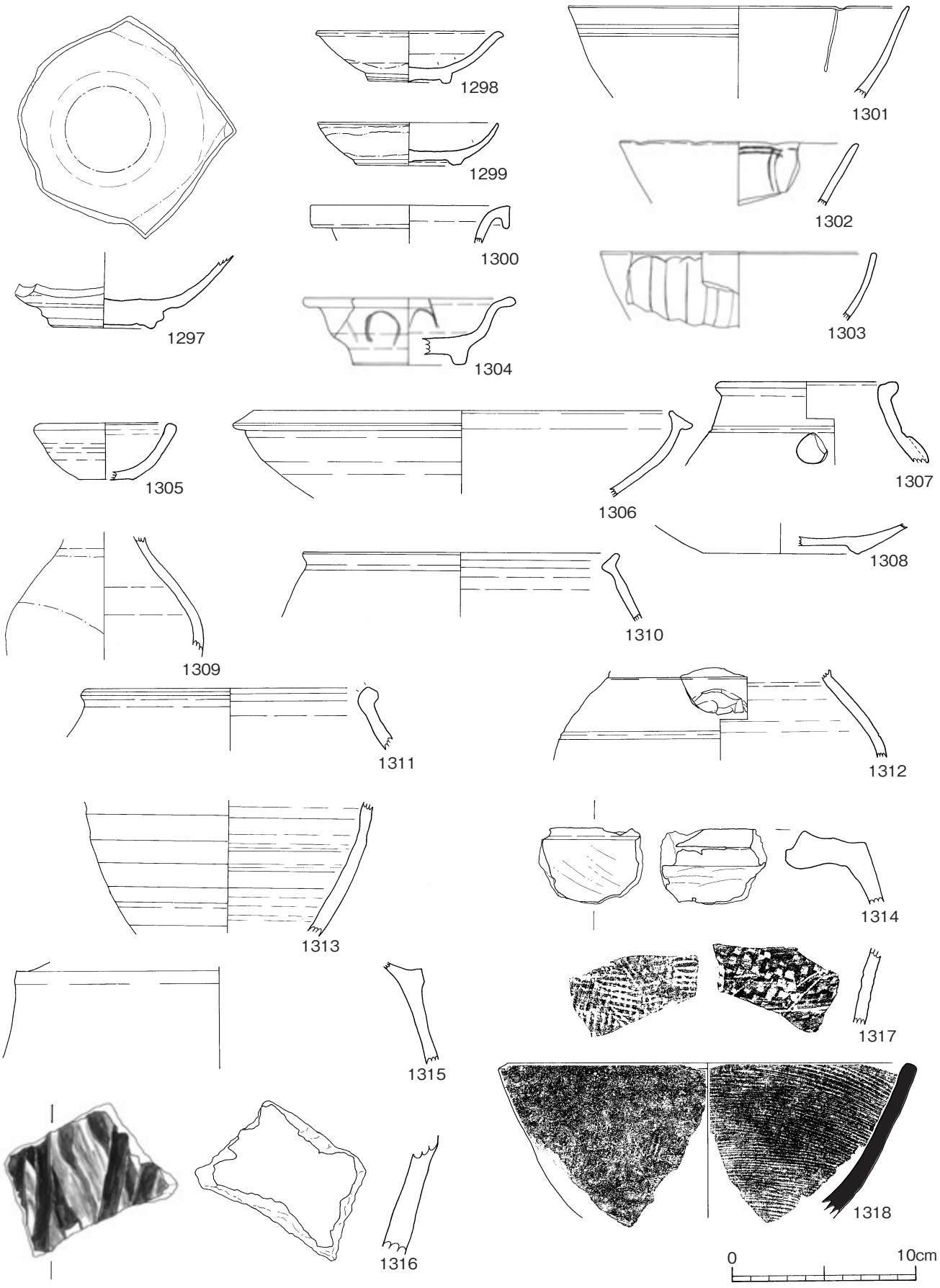
1310・1311は水注もしくは壺の口縁部である。1312は壺の胴部で，肩部には縦耳が付き，2条の沈線が巡る。1313は瓶もしくは壺の胴部である。残存部は内外面とも無釉で，外面は幅１cm 強のヘラケズリが数段にわたり施される。1314は口縁部が内側に強く屈曲する甕である。1315は甕の胴部である。1316は壺の胴部である。

３　国内産陶器・中世須恵器（第137図1316～1318）

1316は国内産陶器の甕の胴部である。1317はカムィヤキである。甕の胴部と思われる。1318は鉢である。樺万丈産と思われる。



第136図　中・近世出土遺物実測図（１）



第137図　中・近世出土遺物実測図（2）

4　瓦（第138・139図1319～1323）

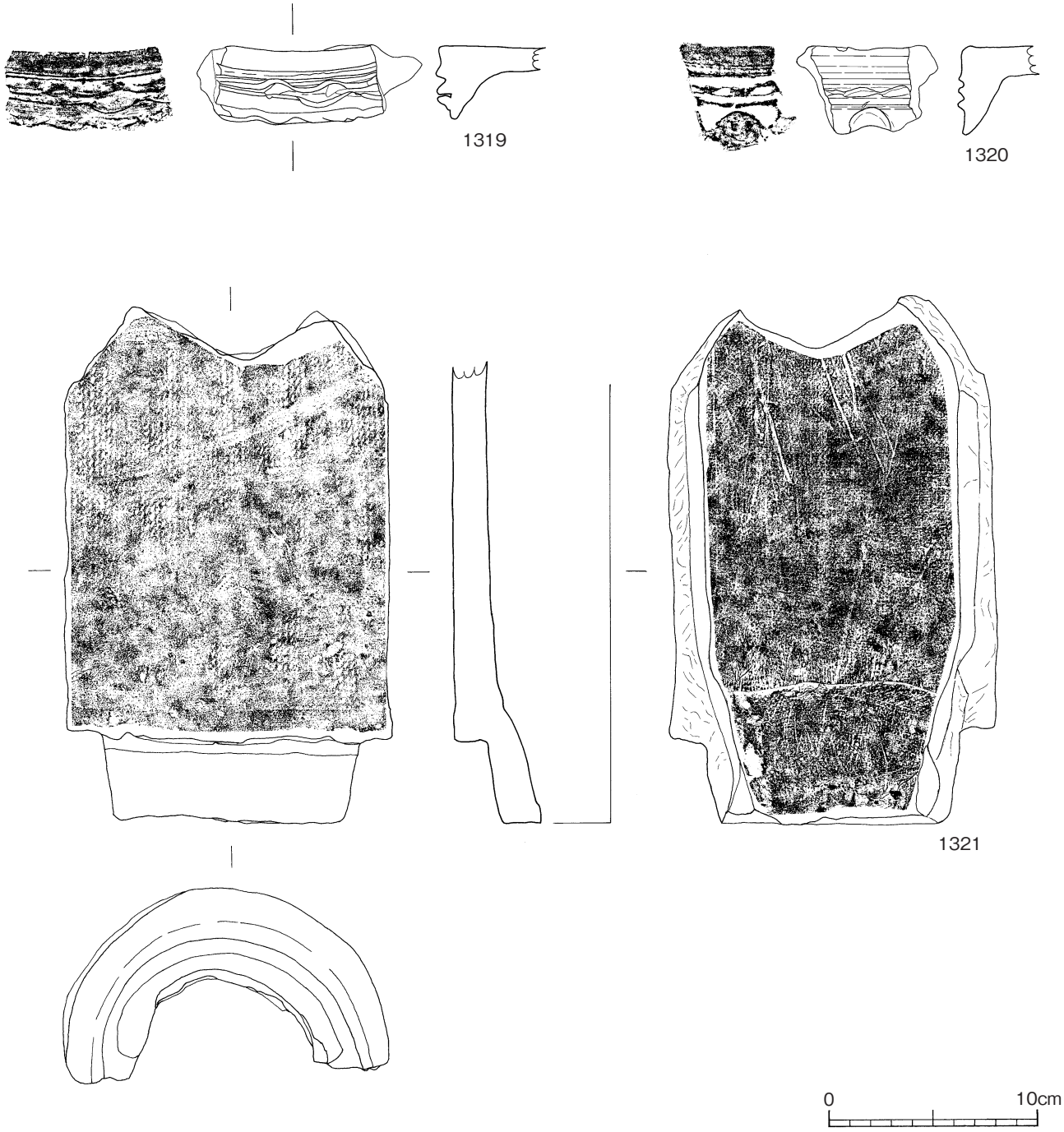
1319～1322は中世の布目瓦である。1319・1320は軒平瓦で，凹圧波濤文が施される。平瓦部分は桶巻きで作られており，上面はナデ消しているが，一部に布目の痕跡が残る。1321・1322は丸瓦である。粘土板を模板に巻き付け，凸面から縄を巻き付けた工具で叩いて成形しているため，内面には細かい布目痕，外面には縄目痕が残るが，1320の玉縁部の凸面と胴部と玉縁部の境には，丁寧なナデ調整が施されており，1322の凸面の縄目は一部ナデ消されている。また，1321・1322の側面には，桶巻き作りで切り離した際の痕跡が観察される。1323は鬼瓦である。内面は空洞にして大きく盛り上げた鬼瓦の一部と考えられる。

5　滑石製品（第139図1324～1326）

1324・1325は用途不明の資料である。1324は石鍋の鍔部を再加工したものと思われる。内面には中央に浅い凹みがつくられる。1325は内面に一部細い溝状の削りが観察される。1326は石鍋の胴部である。内外面には製作時のノミ痕が残る。

6　青花（第139図1327）

1327は景徳鎮窯系の青花である。上手の皿である。



第138図　中・近世出土遺物実測図（3）



第139図　中・近世出土遺物実測図（４）

7　国内産陶磁器（近世）（第140図1328～1332）

1328・1329は肥前磁器の染付碗である。1328は丸形，1329は半筒形である。1330～1332は薩摩焼苗代川系のものである。1330は碗である。非常に薄手のもので，釉はかかっているかわからないほど薄く鉄釉がかかる。薩摩焼初期の窯である，串木野窯産の可能性が考えられる資料である。1331は土瓶である。肩部にヘラ状工具による横筋が施される。1332は甕の胴部である。

8　その他（第140図1333・1334）

1333は土師質土器の焙烙，1334は土製品で，環状土錘である。どちらも中世に相当するものであるか，近世に相当するものであるかは不明である。1333は外面の一部にススが付着する。

9　表層出土の遺物（第141～143図1335～1371）

1335～1371の遺物は，攪乱層や表層などから出土した遺物であるが，特に資料的価値が高いと思われるため，掲載しておきたい。1335は土師器で，黒色土器Ｂ類の皿である。外底面の糸切り部は研磨されていないが，その他は丁寧な横位のミガキが施される。1336は瓦器である。県内で瓦器が出土する例は非常に少なく，本遺跡で３例目である。和泉型の皿である。1337～1340は白磁である。1337・1338は白磁の皿である。1337は口縁部が輪花となるもので，外面にも花弁を意識したと思われる彫り込みを入れる。高台は碁笥底状をなし，砂粒が付着する。1338は見込みの釉を輪状に釉剥ぎする。外面腰部には窯詰め時に熔着したと思われ砂粒が見られる。1339は水注の把手である。

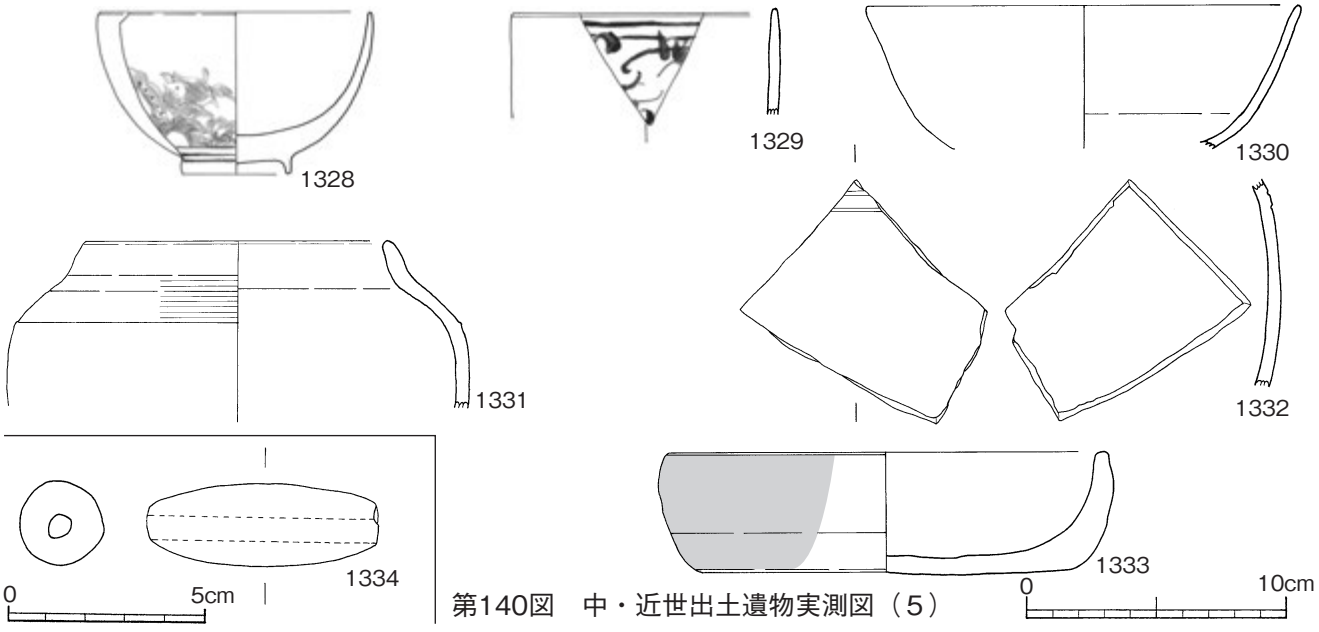
1341・1342は青白磁の合子である。1341は蓋で，上面に陽刻の文様が施される。口唇部と内面は無釉である。1342は身である。蓋受け部と外面腰部から底面にかけては無釉である。

1343～1347は青磁である。1343は内面を二又片刃による線で５等分し，その中に飛雲文を描くものである。1344は外面に細線で縦線が描かれた椀である。蓮弁文が簡略化されたものと思われ，剣頭も省略されている。見込みには「福」の字が観察される。1345は瓶もしくは水注の胴部，1346・1347は底部である。

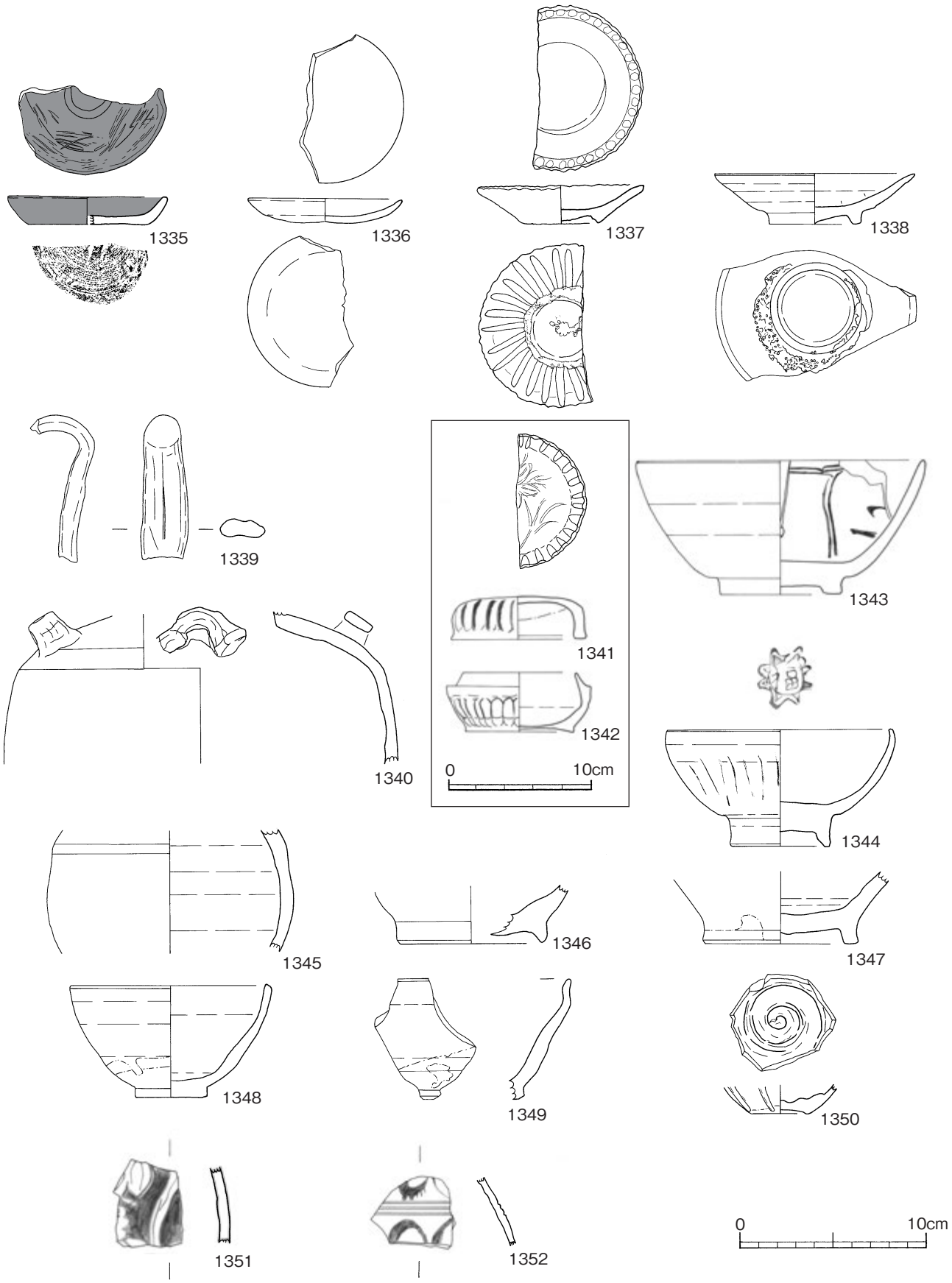
1345・1346は同一個体と思われる。

1348～1354は輸入陶器である。1348・1349は中国産の天目碗である。褐色の薄い化粧土をかけた後，黒釉を内面と外面腰部付近までかける。1350は器種不明の中国産の資料である。高台はなく平底であるが，中央はやや盛り上がる。見込みは兜巾状に削られる。1351は瓶または水注等の胴部と思われるものである。内面は無釉で，外面には褐釉掻き落としで花文が描かれる。1352は瓶の頸部と思われる。内面は無釉で，外面には３本の沈線が巡る。また，緑釉がかけられ，その上から褐釉で蓮弁状の文様が描かれる。1353は瓶の肩部と思われるもので，緑釉陶器である。内面は無釉で，外面には蓮弁状の文様が陽刻される。1354は甕の口縁部である。端部は二又に分かれ，Ｙ字状を呈する。

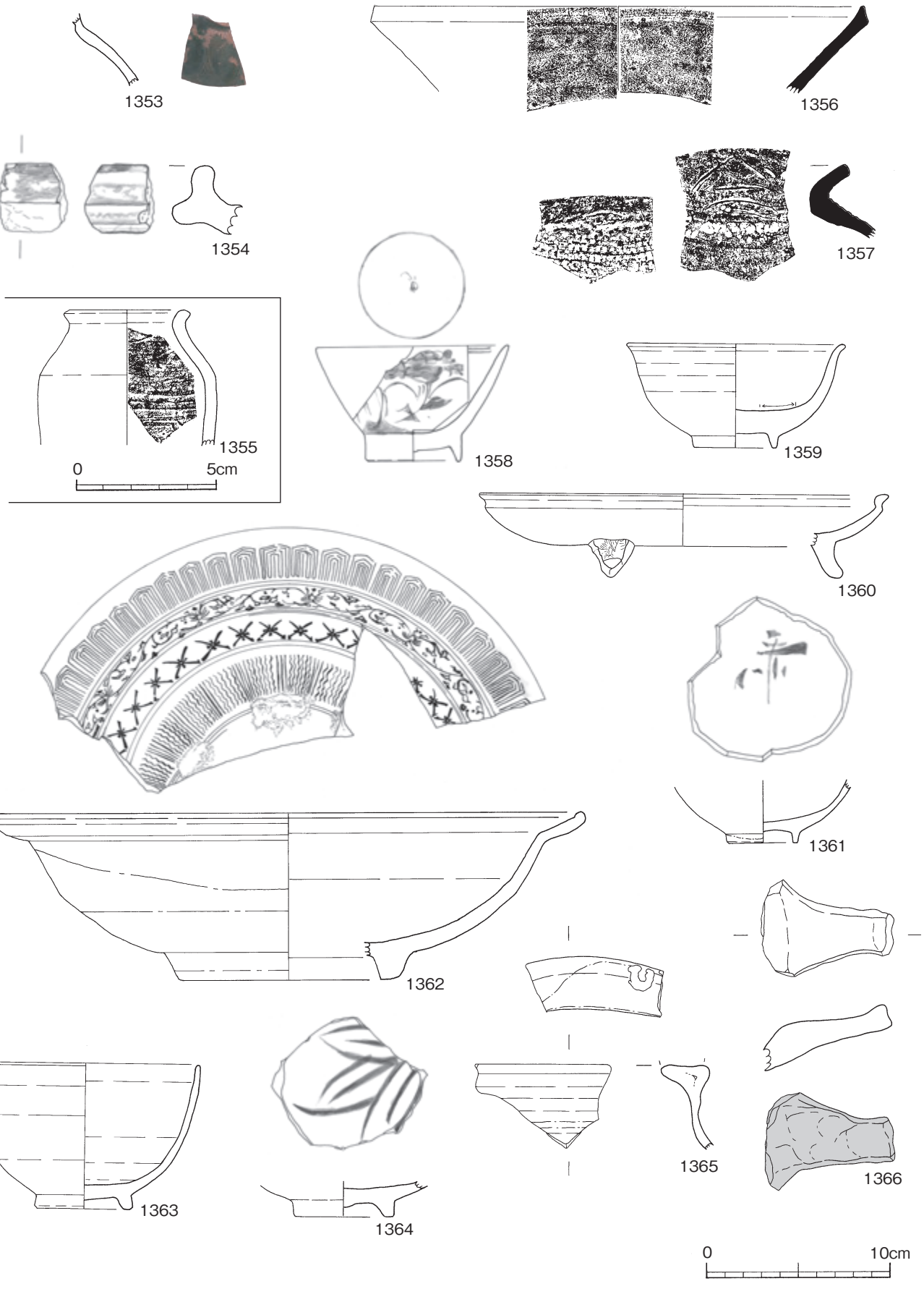
1355は小壺になるものと思われる。国内，国外含め産地不明である。1356・1357は中世須恵器である。1356は鉢である。神出魚住産と思われる。1357は壺の口縁部である。樺万丈産と思われる。1358～1365は近世の国内産陶磁器である。1358～1360は肥前磁器である。1358は染付の碗で，広東形のものである。1359は端反形の白磁碗である。見込みに蛇の目釉剥ぎが施される。1360は青磁釉がかけられた盤である。獅子頭の脚が３足つくものと思われる。1361・1362は肥前系陶器である。1361は京焼き風陶器の碗である。見込みに「壽」の文字が鉄釉で描かれる。1362はやや深みのある碗である。肥前もしくは在地産と思われるが詳細は不明である。1363は肥前陶器の唐津焼で，三島手の折れ縁皿である。見込みには砂目が残る。1364は肥前陶器で内野山窯産の碗である。見込みに笹文のような文様が彫り込まれ，暗緑色に発色した



第140図　中・近世出土遺物実測図（５）



第141図　中・近世出土遺物実測図（6）



第142図　中・近世出土遺物実測図（7）

銅緑釉が畳付を除きかけられる。1365は薩摩焼苗代川系の甕である。堂平窯産と考えられ，口唇部には貝目が見られる。1366は焙烙の把手である。中世のものか近世のものかははっきりしない。裏面は全面にススが付着する。

1367・1368は瓦である。1367は中世の平瓦である。桶巻き作りで製作されており，内面には細かい布目痕が，外面には縄目痕が残る。1368は近世の軒平瓦である。1369は瓦質の製品であるが，用途は不明である。片面に溝状の筋が彫り込まれる。1370は滑石製石鍋の底部である。外面には細かいノミ痕が観察される。

1371は湖州鏡である。近世に相当する16号溝状遺構内から出土したが，原位置を留めているものではないと思われるため，表層として取り扱った。近隣に中世の土壙墓があり，その副葬品であった可能性が考えられる。上面に銘文が刻まれるが，肉眼では判読できないため，当センターでX線写真により判読を試みたところ，上面に「□州千石念／□家□□子」と記されていることが判明した。

10　古銭（近世）（第144・145図1372～1405）

土壙墓から出土したものと表層から出土したものを一括して掲載した。

1372～1376は１号土坑から出土した寛永通寶で，1377～1381は２号土坑から出土した寛永通寶である。1377は３枚重なった状態で出土した。

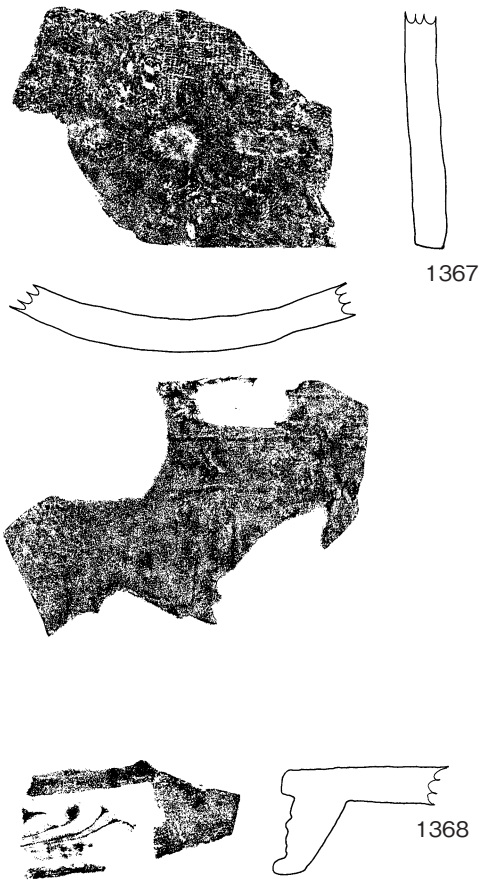
1382～1388は，４号土坑から出土した寛永通寶である。

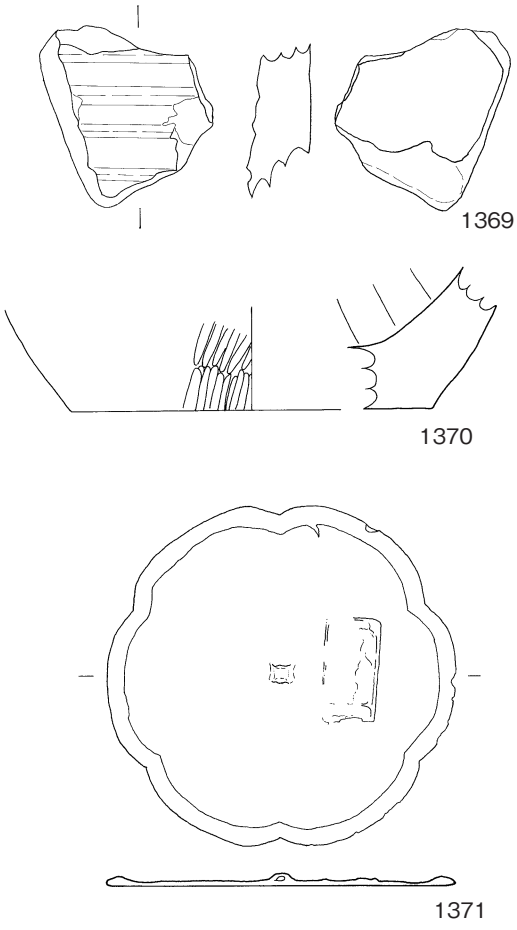
1389～1405は，表層から出土したものである。1397は開元通寶である。1398は表面の摩耗が激しく，裏面には「治」の文字が見られる。1399は朝鮮通寶である。1405は，天保通寶である。

その他の遺物（図版34　1406～1431）

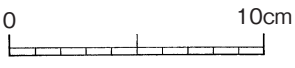
1406～1431は，包含層一括及び表層から出土した輸入陶磁器である。実測図は掲載できなかったが，資料的価値が高いと判断したため写真を掲載した。

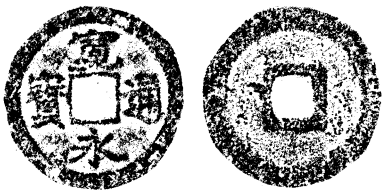
1406～1412，1414～1420，1423～1426は緑釉陶器である。器種・形状等の詳細は不明であるが，内面は無釉であることから，瓶や壺等の袋物と思われる。1413は龍泉窯系青磁の瓶もしくは水注と思われる。頸部に把手か注口がつくが，欠損している。1421は天目碗である。13世紀代と思われる。1422は外面にかけられた鉄釉を掻き落として文様を描くもので，内面は無釉である。1427は内外面に光沢の強い黒釉がかかる。1428～1431は青白磁の合子である。

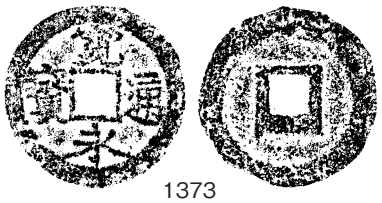


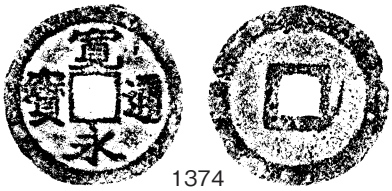


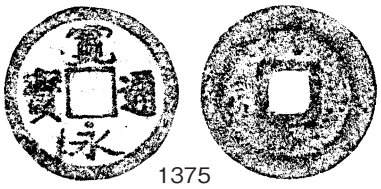
第143図　中・近世出土遺物実測図（８）

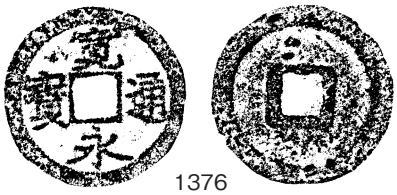


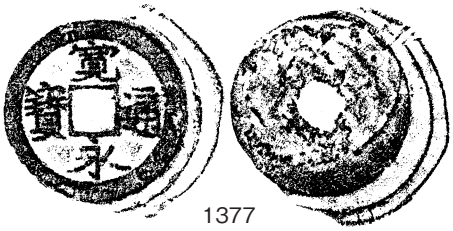

1372

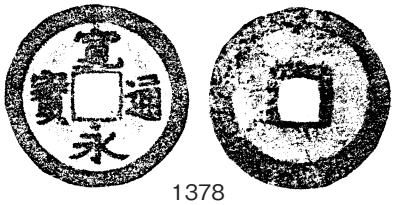

1373

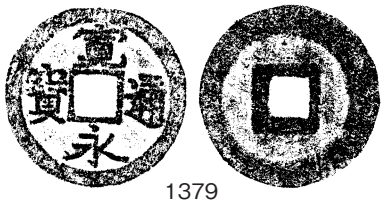

1374

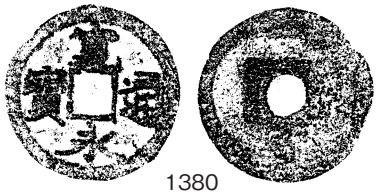

1375

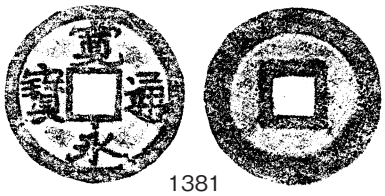

1376

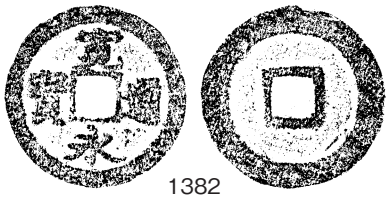

1377

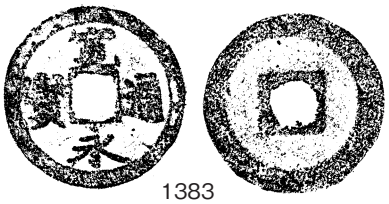

1378

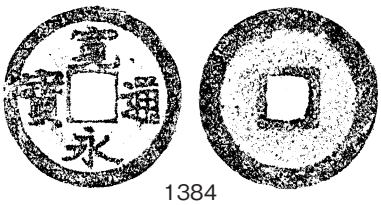

1379

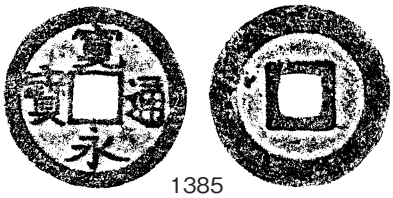

1380

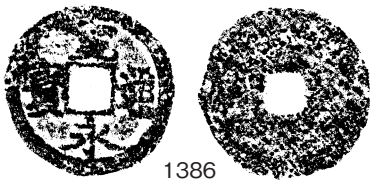

1381

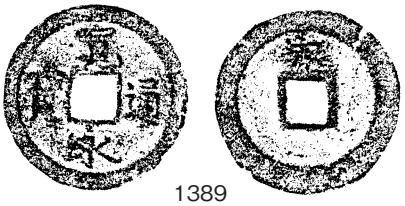

1382

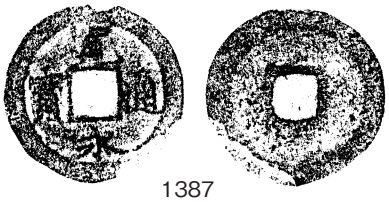

1383

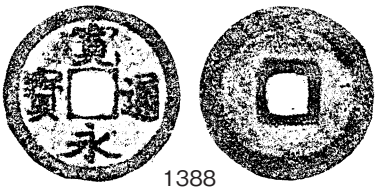

1384

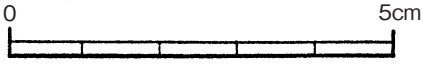

1385


1386

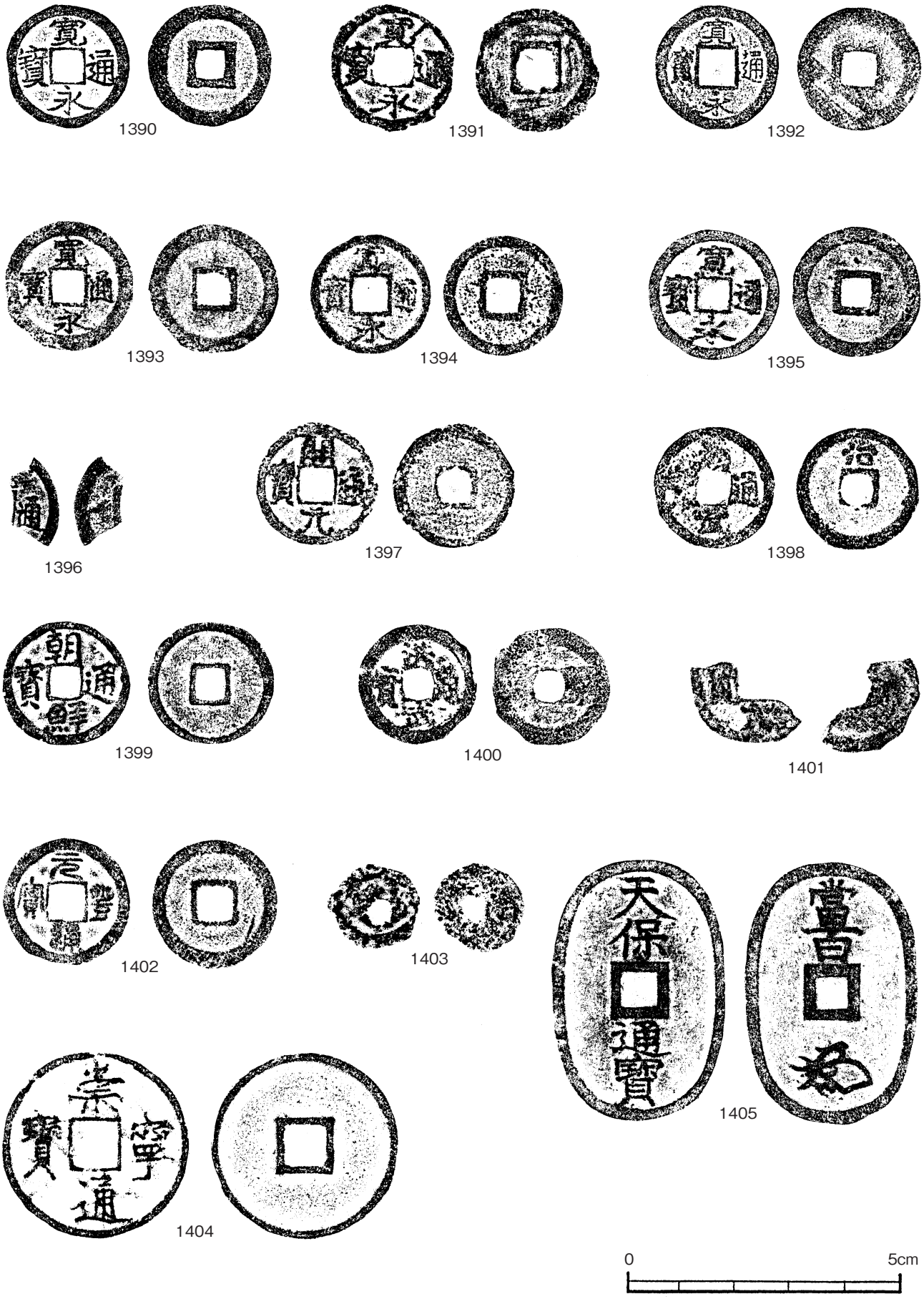

1389


1387


1388



第144図　近世出土古銭（１）



第145図　近世出土古銭（2）

表21　中・近世出土遺物観察表（1）
中世須恵器・土師器（遺構内）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	色調	法量（cm）			胎土				調整		備考
								口径	底径	器高	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	
第96図	901	Y－2 掘立	Ⅲ	土師器	皿	口縁～底部	にぶい黄橙色	9.4	6.8	1.3					ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	902	Y－2 掘立	Ⅲ	土師器	皿	口縁～底部	（外）にぶい橙色 （内）橙色	8.4	7.0	0.9		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	903	Y－2 掘立	Ⅲ	土師器	坏	底部	にぶい黄橙色	－	6.6	－					ナデ	ナデ	底部　糸切り
	904	Y－2 掘立	Ⅲ	土師器 黒色土器Ｂ類	皿	底部	黒	－	6.0	－					ミガキ	ミガキ	
	907	Y－2 掘立	Ⅲ	須恵器 （カムィヤキ）	甕	口縁部	暗赤褐色	－	－	－					格子目タタキ	平行タタキ	
	908	Y－2 掘立	Ⅲ	須恵器 （カムィヤキ）	甕	頸部	暗赤褐色	－	－	－					ナデ	ナデ	
第98図	910	V－1 溝5	Ⅱ	土師器 赤色土器Ａ類	坏	底部	（外）にぶい黄橙色 （内）褐灰色	－	12.6	－		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り　内面にスス付着
	919	V－1 溝5	Ⅱ	樺万丈系須恵器	捏鉢	口縁部	灰黄色	－	－	－					ナデ	ハケ目	
	930	V－3 溝7	Ⅱ	樺万丈系須恵器	捏鉢	口縁部	にぶい黄色	－	－	－					ナデ	ハケ目	
	931	V－3 溝7	Ⅱ	東播磨系須恵器	捏鉢	口縁部	黄褐色	29.2	－	－					ナデ	ナデ	
第100図	941	V－2 溝8	Ⅱ	土師器	皿	口縁～底部	淡黄色	10.0	8.2	1.5		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む 底部　糸切り
	942	V－2 溝8	Ⅱ	土師器	皿	口縁～底部	（外）にぶい橙色 （内）橙色	8.0	6.0	1.3				○	ナデ	ナデ	底部　糸切り
	943	V－2 溝8	Ⅱ	土師器	坏	ほぼ完形	（外）暗灰黄色 （内）にぶい黄褐色	14.4	9.0	3.4		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り　内面一部　外面にスス付着
	944	V－2 溝8	Ⅱ	土師器	坏	口縁～底部	（外）淡黄色 （内）にぶい橙色	13.0	9.0	3.2		○			ナデ	ナデ指頭圧痕	底部　糸切り
	945	V－2 溝8	Ⅱ	土師器	坏	底部	にぶい黄橙色	－	9.6	－		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	946	V－2 溝8	Ⅱ	土師器	坏	底部	淡黄色	－	8.8	－		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り
	947	V－2 溝8	Ⅱ	土師器	坏	底部	（外）にぶい黄色 （内）暗灰黄色	－	9.0	－		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り　内面にスス付着
	948	V－2 溝8	Ⅱ	土師器 黒色土器Ａ類	皿	底部	（外）にぶい黄色 （内）黒褐色	－	7.4	－		○			ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	
	949	V－2 溝8	Ⅱ	土師器 黒色土器Ａ類	椀	底部	灰色	－	7.4	－		○			ナデ	ミガキ後ナデ	
	950	V－2 溝8	Ⅱ	土師器 黒色土器Ａ類	椀	底部	淡黄色	－	6.8	－				○	ナデ	ミガキ後ナデ	
	951	V－2 溝8	Ⅱ	土製品	メンコ	－	（外）にぶい黄橙色 （内）灰黄褐色	径8.0	－	厚1.0		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り　底部にスス付着 口径は長径
第101図	980	V－2 溝8	Ⅱ	樺万丈系須恵器	擂鉢	口縁部	にぶい黄色	24.4							ハケ目	ハケ目　擂り目	

表22　中・近世出土遺物観察表（2）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	色調	法量（cm）			胎土				調整		備考
								口径	底径	器高	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	
第102図	981	V－2 溝8	Ⅱ	東播磨系須恵器	捏鉢	口縁部	灰白色	－	－	－					－	－	
	982	V－2 溝8	Ⅱ	東播磨系須恵器	捏鉢	口縁部	灰黄色	23.0	－	－					ナデ	ナデ	
	983	V－2 溝8	Ⅱ	須恵器 （カムィヤキ）	甕	肩部	黒褐色	－	－	－					ナデ格子目 タタキ	ナデ	
	984	V－2 溝8	Ⅱ	須恵器 （カムィヤキ）	甕	胴部	にぶい黄色	－	－	－					天羽根状の タタキ目	ナデ	
第103図	994	Y－2 溝9	Ⅳ	土師器	皿	底部	にぶい黄褐色	－	10.4	－					ナデ	ナデ	底部　糸切り
	995	X－2 溝10	Ⅳ	土師器 黒色土器A類	椀	底部	（外）にぶい黄橙色 （内）黒色	－	7.0	－		○			ナデ	ミガキ	
第106図	1005	Y－2 溝11	Ⅳ	土師器	皿	口縁～底部	浅黄橙色	9.0	7.2	1.2		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1006	X－2 溝11	Ⅳ	土師器	皿	口縁～底部	（外）暗灰黄色 （内）浅黄色	9.4	5.6	1.3		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1007	Y－2 溝11	Ⅳ	土師器	坏	底部	浅黄橙色	－	8.0	－					ナデ	ナデ	外面に赤色の塗料が塗布か？底部　糸切り
	1008	Y－2 溝11	Ⅳ	土師器 黒色土器A類	椀	口縁～胴部	（外）黒色 （内）淡黄色	－	－	－	○				ミガキ	ミガキ	
	1015	Y－2 溝11	Ⅳ	須恵器 （カムィヤキ）	壺？	頸部～胴部	にぶい赤褐色	－	－	－					格子目タタキ	ナデ	
	1022	Y－2 溝13	Ⅳ	土師器	皿	底部	にぶい黄橙色	－	8.4	－		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1023	Y－2 溝13	Ⅳ	土師器	皿	底部	（外）にぶい黄橙色 （内）灰黄褐色	－	7.2	－		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1024	Y－2 溝14	Ⅳ	土師器	坏	底部	（外）橙 （内）浅黄橙	－	11.8	－			○		ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1025	Y－2 溝14	Ⅳ	須恵器 （カムィヤキ）	甕	胴部	暗赤褐色	－	－	－					平行タタキ後 ナデ	格子目タタキ	
	1027	Y－2 溝12･14	－	土師器 黒色土器A類	坏	底部	（外）浅黄橙色 （内）黒色	－	8.0	－		○			ナデ	ミガキ	底部　糸切り
	1028	Y－2 溝12･14	Ⅳ	須恵器 （カムィヤキ）	甕	頸部	灰色	－	－	－					平行タタキ後 ナデ	格子目タタキ	
	1029	Y－2 溝12･14	Ⅳ	須恵器 （カムィヤキ）	甕	胴部～底部	暗灰黄色	－	14.9	－					ナデ	平行タタキ	
第108図	1030	Z－2 溝15	Ⅱ	土師器	皿	口縁～底部	浅黄色	8.8	6.0	1.3		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1031	Z－2 溝15	Ⅱ	土師器	皿	口縁～底部	にぶい橙色	7.8	6.0	1.0		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り

表23　中・近世出土遺物観察表（3）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	色調	法量（cm）			胎土				調整		備考
								口径	底径	器高	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	
第108図	1032	Z－2 溝15	Ⅱ	土師器	皿	口縁～底部	にぶい黄橙色	8.4	6.4	1.1			○		ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1033	Z－2 溝15	Ⅱ	土師器	坏	底部	橙色	－	7.0	－			○		ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1034	Z－2 溝15	Ⅱ	土師器 黒色土器Ａ類	皿	口縁～底部	（外）にぶい黄色 （内）黒色	10.0	6.0	1.5		○			ヘラミガキ	ミガキ	底部　糸切り
	1035	Z－2 溝15	Ⅱ	土師器 黒色土器Ｂ類	皿	口縁～底部	黒褐色	10.6	8.0	1.7					外側面 ヘラミガキ	ヘラミガキ	底部　糸切り
	1046	Z－2 溝15	Ⅱ	須恵器 （カムィヤキ）	甕	肩部	灰色	－	－	－					ナデ	ナデ	
	1047	Z－2 溝15	Ⅱ	須恵器 （カムィヤキ）	甕	底部	黄褐色	－	16.4	－					ナデ	平行タタキ	
第111図	1069	X－7 溝16	Ⅱ	土師器 黒色土器Ａ類	皿	口縁～底部	（外）黄灰色 （内）黒褐色	8.8	7.0	2.0		○			ナデ	ミガキ	底部　糸切り　外面にスス付着
	1070	X－7 溝16	Ⅱ	土師器 黒色土器Ａ類	皿	口縁～底部	（外）黄灰色 （内）黒褐色	9.8	7.6	1.4		○			ナデ	ミガキ	底部　糸切り
	1071	X－7 溝16	Ⅱ	土師器 黒色土器Ｂ類	坏？	口縁～底部	黒褐色	10.1	4.2	3.1		○			ミガキ	ミガキ	
第113図	1109	X－7 溝16	Ⅱ	東播磨系須恵器	捏鉢	口縁～胴部	灰色	23.4	－	－					ナデ	ナデ	
	1110	X－7 溝16	Ⅱ	樺万丈系須恵器？	捏鉢	口縁～胴部	橙色	－	－	－					平行タタキ	平行タタキ	
	1111	X－7 溝16	Ⅱ	樺万丈系須恵器	捏鉢	口縁～胴部	にぶい黄色	29.0	－	－					ハケ目	ハケ目　擂り目	
	1112	Y－7 溝16	Ⅱ	樺万丈系須恵器	甕	胴部	淡黄色	－	－	－					格子目タタキ	ハケ目	
	1113	X－7 溝16	Ⅱ	樺万丈系須恵器	甕	胴部	黄灰色	－	－	－					格子目タタキ	ハケ目	
	1114	X－7 溝16	Ⅱ	樺万丈系須恵器	甕	胴部	灰色	－	－	－					格子目タタキ	ハケ目	
	1115	X－7 溝16	Ⅱ	樺万丈系須恵器	甕	胴部	灰黄色	－	－	－					格子目タタキ	ハケ目	
第116図	1148	V－7 溝17	Ⅱ	須恵器か？	坏	底部	灰黄色	－	－	－					ナデ	ナデ	底部　糸切り
第117図	1152	W－7 溝18	Ⅱ	樺万丈系須恵器	鉢	口縁部	灰黄色	32.8	－	－					縄目タタキか？	ハケ目	
	1153	W－7 溝18	Ⅱ	樺万丈系 須恵器か？	甕	甕	浅黄橙色	20.6	－	－					格子目タタキ	同心円タタキか？	
第121図	1159	Za－3 土壙墓6	Ⅱ	土師器	皿	口縁～底部	にぶい橙色	8.4	7.0	1.1	○				ナデ	ナデ	赤色の石粒含む
	1160	Za－3 土壙墓6	Ⅱ	土師器	坏	口縁～胴部	浅黄橙色	13.0	－	－	○				ナデ	ナデ	赤色の石粒含む

表24　中・近世出土遺物観察表（４）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	色調	法量（cm）			胎土				調整		備考
								口径	底径	器高	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	
第122図	1161	Z－2 大型土坑5	Ⅳ	土師器	皿	口縁～底部	灰白色	8.8	7.0	1.2	○				ナデ	ナデ	
	1162	Z－2 大型土坑5	Ⅳ	土師器 赤色土器Ａ類	椀	底部	（外）浅黄橙色 （内）橙色	－	－	－			○		ナデ	ナデ	
	1163	Z－2 大型土坑5	Ⅳ	土師器 赤色土器Ｂ類	坏	底部	橙色	－	7.0	－		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1164	Z－2 大型土坑5	Ⅳ	土師器 赤色土器Ｂ類	坏	底部	橙色	－	－	－		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り　外底面に一部スス付着
第124図	1165	X－8 大型土坑6	Ⅱ	土師器	坏	口縁～底部	（外）浅黄橙色 （内）にぶい橙色	12.8	8.0	3.0		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り　内外底面にスス付着
	1166	X－8 大型土坑6	Ⅱ	土師器	坏	胴部～底部	（外）橙 （内）にぶい橙色	－	8.4	－			○		ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1167	X－8 大型土坑6	Ⅱ	土師器	坏	底部	にぶい黄橙色	－	7.0	－			○		ナデ	ナデ	底部　糸切り　外底面にスス付着
	1168	X－8 大型土坑6	Ⅱ	土師器	坏か焙烙	底部	にぶい黄橙色	－	14.0	－			○		ナデ	ナデ	底部　糸切り　内外面にスス付着
	1169	X－8 大型土坑6	Ⅱ	土師器 墨書土器	坏	底部	（外）にぶい黄色 （内）浅黄色	－	－	－		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り　見込み　外底部に墨書あり
第125図	1203	X－8 大型土坑6	Ⅱ	樺万丈系須恵器	壺	肩部	浅黄色	－	－	－					格子目タタキ	ハケ目	
	1204	W－8 大型土坑6	Ⅱ	東播磨系須恵器	捏鉢	口縁部	にぶい黄褐色	－	－	－					ナデ	ナデ	
	1205	W－8 大型土坑6	Ⅱ	東播磨系須恵器	捏鉢	口縁部	暗灰黄色	－	－	－					ナデ	ナデ	
第129図	1228	X－2 土坑25	Ⅳ	土師器	坏	底部	にぶい黄橙色	－	6.0	－		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
第130図	1231	X－3 土坑27	Ⅲ	土師器	皿	ほぼ完形	にぶい黄橙色	7.8	5.4	2.5		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1234	Y－2 土坑28	Ⅳ	土師器 赤色土器Ｂ類	皿	口縁～底部	にぶい橙色	7.6	5.6	1.1		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1236	Y－2 土坑29	Ⅳ	土師器	坏	底部	橙色	－	8.6	－			○		ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
第131図	1238	Z－2 土坑30	Ⅳ	土師器	皿	口縁～底部	橙色	8.0	6.6	1.0		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1239	Z－3 土坑31	Ⅳ	土師器	皿	口縁～底部	にぶい橙色	10.2	7.8	1.5			○		ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1240	Z－3 土坑31	Ⅳ	土師器 赤色土器Ａ類	皿	口縁～底部	橙色	8.6	6.2	1.5			○		ナデ	ナデ	赤色の石粒含む
	1241	Z－3 土坑31	Ⅳ	土師器	坏	底部	（外）にぶい黄橙色 （内）橙色	－	7.4	－			○		ナデ	ナデ	赤色の石粒含む
第132図	1242	Z－3 土坑31	Ⅳ	土師器	坏	底部	にぶい黄橙色	－	7.0	－		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り

表25　中・近世出土遺物観察表（５）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	色調	法量（cm）			胎土				調整		備考
								口径	底径	器高	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	
第132図	1243	Ｚ－3 土坑31	Ⅳ	土師器	坏	底部	（外）にぶい黄橙色 （内）橙色	－	11.0	－			○		ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1246	Ｚ－2 土坑33	Ⅳ	土師器	坏	底部	（外）にぶい橙色 （内）明黄褐色	－	9.2	－			○		ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1247	ａ－3 土坑34	Ⅳ	土師器	坏	口縁～底部	淡黄色	13.0	7.0	2.4			○		ナデ	ナデ	
	1248	ａ－2 土坑35	Ⅱ	土師器	坏	底部	（外）にぶい橙色 （内）にぶい黄橙色	－	6.0	－		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り
第133図	1249	Ｘ－4 ピット25	Ⅳ	土師器	坏	底部	（外）にぶい黄橙色 （内）暗灰黄色	－	11.0	－		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1250	Ｘ－4 ピット25	Ⅳ	須恵器 （カムィヤキ）	壺	胴部	灰褐色	－	－	－					ナデ	ナデ	
	1252	Ｘ－3 ピット26	Ⅳ	土師器	坏	底部	（外）浅黄橙色 （内）橙色	－	7.0	－		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1253	Ｙ－3 ピット27	Ⅳ	須恵器 （カムィヤキ）	甕	胴部	灰色	－	－	－					平行タタキ後 ナデ	同心円タタキ	
	1255	Ｙ－2 ピット30	Ⅳ	須恵器 （カムィヤキ）	甕	頸部	灰色	－	－	－					タタキ後ナデ	同心円タタキ	
	1256	Ｚ－2 ピット31	Ⅳ	土師器	坏	底部	橙色	－	－	－		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1257	Ｚ－2 ピット32	Ⅳ	土師器	皿	完形	橙色	8.8	6.5	1.4		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1258	Ｙ－2 ピット33	Ⅳ	土師器	皿	口縁～底部	（外）灰黄色 （内）灰白色	9.1	7.5	1.7		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り　内面と外面の一部にスス付着
	1259	Ｙ－2 ピット33	Ⅳ	土師器	坏	底部	橙色	－	8.0	－		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
第134図	1260	Ｚ－3 ピット34	Ⅳ	土師器	坏	底部	（外）にぶい黄橙色 （内）橙色	－	8.4	－			○		ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1262	Ｚ－3 ピット35	Ⅳ	土師器	坏	底部	橙色	－	8.4	－			○		ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1263	Ｚ－3 ピット35	Ⅳ	土師器	皿	口縁～底部	橙色	7.9	6.2	1.4		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1265	Ｚ－3 ピット36	Ⅳ	須恵器 （カムィヤキ）	甕	胴部	黒褐色	－	－	－					格子目タタキ	格子目タタキ	
	1266	Ｚ－3 ピット37	Ⅳ	土師器	皿	口縁～底部	にぶい黄橙色	8.2	6.0	1.1		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1267	Ｚ－3 ピット37	Ⅳ	土師器	皿	口縁～底部	にぶい黄橙色	8.2	6.8	1.2			○		ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1268	Ｚ－2 ピット38	Ⅳ	土師器	坏	底部	黄橙色	－	9.0	－			○		ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り
	1269	Ｚ－2 ピット38	Ⅳ	土師器	坏	底部	浅黄色	－	8.5	－		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1270	ａ－3 ピット39	Ⅳ	土師器	坏	底部	にぶい橙色	－	7.8	－		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り

表26　中・近世出土遺物観察表（６）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	色調	法量（cm）			胎土				調整		備考
								口径	底径	器高	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	
第134図	1271	a－3 ピット39	Ⅳ	土師器	坏	底部	にぶい黄橙色	－	－	－			○		ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1272	a－3 ピット40	Ⅳ	土師器	坏	底部	にぶい黄橙色	－	9.0	－		○			ナデ	ナデ	赤色の石粒含む　底部　糸切り

白磁青磁（遺構内）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			時期	分類	備考
									口径	底径	器高			
第98図	909	U－2 溝4	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	D期	太宰府Ⅴ－4b類	
	911	Ⅴ－1 溝5	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	E期	太宰府Ⅱ－b類	蓮弁文（稜有り）　龍泉窯
	912	Ⅴ－1 溝5	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内底面無釉	－	5.8	－	E期	太宰府Ⅱ類	蓮弁文（稜有り）　龍泉窯
	913	Ⅴ－1 溝5	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内底面無釉	－	5.2	－	E期	太宰府Ⅱ類	蓮弁文（稜有り）龍泉窯
	914	Ⅴ－1 溝5	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	高台内底面釉剥ぎ	－	6.8	－	G期以降	上田D類	高台内面　見込み円状釉剥ぎ　龍泉窯
	915	Ⅴ－1 溝5	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	G期以降	上田B－Ⅳ類	
	916	Ⅴ－1 溝5	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	外面無釉	－	7.0	－	CまたはD期	太宰府Ⅴ類	見込みに輪状の釉剥ぎ
	917	Ⅴ－1 溝5	Ⅱ	白磁	坏	灰白色	透明釉	外面無釉	－	4.2	－	G期以降	森田D類	見込みに目跡有り　抉り高台
	922	U－2 溝6	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	C期	太宰府Ⅳ類	
	927	Ⅴ－3 溝7	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	D期	太宰府Ⅰ－3a類	
	928	Ⅴ－3 溝7	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	高台内底面無釉	－	6.0	－	D期	太宰府Ⅰ類	
第100図	952	Ⅴ－3 溝8	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内底面無釉	－	5.2	－	C期	太宰府Ⅱ類	
	953	Ⅴ－3 溝8	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下無釉	16.4	－	－	C期	太宰府Ⅳ類	
	954	Ⅴ－3 溝8	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内底面無釉	－	7.0	－	C期か？	太宰府Ⅳ類？	
	955	Ⅴ－3 溝8	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	20.6	－	－	D期	太宰府Ⅴ－4a類	
	956	Ⅴ－3 溝8	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18.6	－	－	C期	太宰府Ⅴ－2a類	

表27　中・近世出土遺物観察表（7）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			時期	分類	備　　考
									口径	底径	器高			
第100図	957	Ⅴ－2·3 溝8	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	C 期か？	太宰府Ⅴ－2類か？	
	958	Ⅴ－3·4 溝8	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	16.2	－	－	D 期	太宰府Ⅴ－4b 類	内面櫛目文
	959	Ⅴ－3 溝8	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	17.0	－	－	D 期	太宰府Ⅴ－4a 類	
第101図	960	Ⅴ－2 溝8	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	高台内底面無釉	－	－	－	D 期	太宰府Ⅴ－4a 類	内面に細い櫛目文
	961	Ⅴ－3 溝8	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	高台脇～高台内底面無釉	－	6.0	－	C または D 期	太宰府Ⅴ類	
	962	Ⅴ－3 溝8	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内底面無釉	－	6.4	－	C または D 期	太宰府Ⅴ類	
	963	Ⅴ－2 溝8	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	外面腰部　内面見込み無釉	12.6	－	－	C 期	太宰府Ⅴ－１ａ類	
	964	Ⅴ－3 溝8	Ⅱ	白磁	瓶	にぶい黄橙色	透明釉	腰部～高台内底面無釉	－	8.4	－	C ～ F 期	太宰府Ⅲ類か？	
	965	Ⅴ－2 溝8	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	17.6	－	－	D 期	太宰府Ⅰ－4b 類	二又片刃にる分割　飛雲文
	966	Ⅴ－2 溝8	Ⅱ	青磁	椀	灰黄色	青磁釉	残存部全面施釉	12.2	－	－	G 期以降	上田Ｂ－Ⅳ’類	16世紀　外面に細線蓮弁文
	967	Ⅴ－1 溝8	Ⅱ	青磁	椀	褐灰色	青磁釉	残存部全面施釉	16.6	－	－	C 期か？	太宰府Ⅳ類か？	
	968	Ⅴ－1 溝8	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	腰部～高台内底面無釉	－	5.0	－	D 期	太宰府Ⅰ－1c 類	外面に櫛目文　内面に花文とジグザグの点描文
	969	Ⅴ－2 溝8	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内底面無釉	17.0	5.0	7.0	D 期	太宰府Ⅰ－ｂ類	外面に櫛目文
	970	Ⅴ－1 溝8	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	腰部～畳付は無釉	10.4	4.4	1.9	C 期	太宰府Ⅰ－ａ類	同安窯系
	971	Ⅴ－3 溝8	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	畳付は釉剥ぎ	11.0	4.5	2.2	D 期	太宰府Ⅰ－2b 類	ヘラによる文様とジグザグの櫛点描文
	972	Ⅴ－2 溝8	Ⅱ	青磁	不明	灰色	青磁釉	蓋受部釉剥ぎ	6.0	－	－		－	
第103図	996	Ⅹ－2 溝10	Ⅳ	白磁	椀	灰白色	透明釉	内面と 外面胴部まで施釉	13.6	－	－	C または D 期	太宰府Ⅴ類か？	
	997	Ⅹ－2 溝10	Ⅳ	白磁	皿	灰白色	透明釉	内面と外面胴部まで施釉	－	－	－	C 期か？	太宰府Ⅱ類か？	
第105図	999	Ｙ－2 溝12	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	腰部～高台内底面無釉	16.3	5.0	7.1	D 期	同安窯Ⅰ－Ⅰｂ類	
	1000	Ｙ－2 溝12	－	青磁	椀	灰白色	青磁釉	腰部～高台内底面無釉	16.2	5.0	7.0	D 期	同安窯Ⅰ－Ⅰｂ類	
	1001	Ｙ－2 溝12	－	青磁	皿	灰白色	青磁釉	腰部～高台内底面無釉	12.6	4.4	3.7	D 期	同安窯系Ⅲａ類	

表28　中・近世出土遺物観察表（8）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			時期	分類	備　　考
									口径	底径	器高			
第105図	1002	Y－2 溝12	－	青白磁	椀	灰白色	青白磁釉	胴部中位～高台内底面無釉	14.6	5.6	5.1	D 期		見込みに輪状の釉剥ぎ有り
	1003	Y－2 溝12	－	青白磁	椀	灰白色	青白磁釉	胴部中位～高台内底面無釉	14.5	5.4	5.0	D 期		見込みに輪状の釉剥ぎ有り
	1004	Y－2 溝12	－	青白磁	椀	灰白色	青白磁釉	胴部中位～高台内底面無釉	14.5	5.1	5.0	D 期		見込みに輪状の釉剥ぎ有り
第106図	1009	Y－2 溝11	Ⅳ	白磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	D 期か？	太宰府Ⅴ－4b 類	
	1010	X－2 溝11	Ⅳ	白磁	椀	灰白色	透明釉	内面と外面胴部まで施釉	18.0	－	－	C 期	太宰府Ⅳ類	
	1011	X－2 溝11	Ⅳ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	16.8	－	－	C 期	太宰府Ⅳ類	
	1012	Y－2 溝11	Ⅳ	白磁	皿	灰白色	透明釉	内面と外面胴部まで施釉	－	4.0	－	C 期か？	太宰府Ⅳ類か？	見込みに輪状の釉剥ぎ有り
	1026	Y－2 溝12･14	Ⅳ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	D 期	太宰府Ⅴ－4b 類	
第108図	1036	Z－2 溝15	Ⅱ	白磁	椀	淡黄色	透明釉	残存部全面施釉	15.6	－	－	C 期	太宰府Ⅳ類	貫入
	1037	Z－2 溝15	Ⅱ	白磁	椀	淡黄色	透明釉	脚部から高台内底面無釉	－	6.4	－	C 期	太宰府Ⅳ類	
	1038	Z－2 溝15	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	高台内底面無釉	－	－	－	D 期	太宰府Ⅴ－4b 類	
	1039	Z－2 溝15	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	14.4	－	－	G 期以降	上田 D 類	
	1040	Z－2 溝15	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	14.0	－	－	D 期	太宰府Ⅰ－1a 類	
第111図	1072	X－7 溝16	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	15.7	－	－	C 期	太宰府Ⅳ類	
	1073	V－7 溝16	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	16.0	－	－	C 期	太宰府Ⅳ類	
	1074	Y－7 溝16	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	16.0	－	－	C 期	太宰府Ⅳ類	
	1075	X－7 溝16	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	15.6	－	－	D 期	太宰府Ⅴ－4類	
	1076	Y－7 溝16	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内底面無釉	－	6.5	－	B 期	太宰府ⅩⅠ類	
	1077	X－7 溝16	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部～高台内底面無釉	－	4.6	－	D 期	太宰府Ⅷ類	見込みに輪状の釉剥ぎ
	1078	X－7 溝16	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	口禿げ	12.0	－	－	F 期	太宰府Ⅸ類	
	1079	Y－7 溝16	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部以下無釉	13.6		－	G 期以降	森田 D 類	

表29　中・近世出土遺物観察表（９）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			時期	分類	備　　考
									口径	底径	器高			
第111図	1080	X －7 溝16	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	11.5	7.0	2.5	G 期以降	森田 E 類	
	1081	X －7 溝16	Ⅱ	白磁	坏	灰白色	透明釉	外面無釉	－	3.6	－	G 期以降	森田 D 類	14世紀後半　抉り高台
	1082	X －7 溝16	Ⅱ	白磁	水注の把手	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	C 期か？	－	
	1083	X －7 溝16	Ⅱ	青磁	椀	灰黄色	青磁釉	畳付～高台内底面無釉	－	5.0	－	D 期	太宰府Ⅰ－1a 類	
	1084	X －7 溝16	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内底面無釉	－	4.7	－	D 期	太宰府Ⅰ－1a 類	
	1085	X －7 溝16	Ⅱ	青磁	椀	灰黄色	青磁釉	畳付～高台内底面無釉	－	5.3	－	D 期	太宰府Ⅰ－2a 類	
	1086	X －7 溝16	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	13.4	－	－	D 期	太宰府Ⅰ－2類	内面に片彫りの蓮弁文
	1087	X －7 溝16	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	D 期	太宰府Ⅶ－ｂ類	櫛目による草花文
	1088	Y －7 溝16	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	D 期	太宰府Ⅰ－4b 類	
	1089	X －7 溝16	Ⅱ	青磁	椀	黄灰色	青磁釉	残存部全面施釉	14.6	－	－	E 期	太宰府Ⅱ－ａ類	
	1090	X －7 溝16	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15.4	－	－	E 期	太宰府Ⅱ－ａ類	
第112図	1091	X －7 溝16	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	E 期	太宰府Ⅱ－ｂ類	縞蓮弁文
	1092	X －7 溝16	Ⅱ	青磁	椀	淡黄色	青磁釉	畳付～高台内底面無釉	－	4.6	－	G 期以降	太宰府Ⅳ類	
	1093	X －7 溝16	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	高台内底面釉剥ぎ	－	6.0	－	G 期以降	太宰府Ⅳ類	
	1094	X －7 溝16	Ⅱ	青磁	椀	灰黄色	青磁釉	残存部全面施釉	12.8	－	－	G 期以降	上田Ｂ－Ⅳ類	
	1095	X －7 溝16	Ⅱ	青磁	香炉	灰白色	青磁釉	内面　外底部無釉	－	3.8	－		－	
	1096	X －7 溝16	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	D 期	太宰府Ⅰ－ｂ類か？	外面に細かい櫛目文
第116図	1149	V －7 溝17	Ⅱ	青磁	椀	にぶい橙色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	E 期	太宰府Ⅱ類	
第117図	1151	W －8 溝18	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内底面釉剥ぎ	－	5.6	－	E 期	太宰府Ⅱ類	
第121図	1157	Z －2･3 土壙墓5	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	13.8	－	－	C 期	太宰府Ⅳ類	
第124図	1170	X －8 大型土坑6	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	14.0	－	－	C 期	太宰府Ⅳ類	

表30　中・近世出土遺物観察表（10）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			時期	分類	備　　考
									口径	底径	器高			
第124図	1171	X－8 大型土坑6	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	C 期	太宰府Ⅴ－2類	
	1172	X－8 大型土坑6	Ⅱ	白磁	椀	灰白色	透明釉	腰部以下無釉	－	－	－	D 期	太宰府Ⅴ－4b 類	内面に短い櫛目で花文
	1173	X－8 大型土坑6	Ⅱ	白磁	椀	淡黄色	透明釉	畳付～高台内底面無釉	－	5.1	－	C 期か？	太宰府Ⅳ類か？	高台内底部に墨書あり
	1174	X－8 大型土坑6	Ⅱ	白磁	椀	淡黄色	透明釉	腰部以下無釉	－	5.8	－	不明	不明	
	1175	X－8 大型土坑6	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	口唇部無釉	－	－	－	F 期	太宰府Ⅸ類	口禿
	1176	X－8 大型土坑6	Ⅱ	白磁	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	6.0	－	F 期	太宰府Ⅸ類	
	1177	X－8 大型土坑6	Ⅱ	白磁	坏	白色	透明釉	腰部～高台内底面無釉	9.2	4.2	2.2	G 期以降	森田 D 類	抉り高台
	1178	X－8 大型土坑6	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内底面無釉	－	6.4	－	D 期	太宰府Ⅰ－3a 類	内面に片彫文と櫛目
	1179	X－8 大型土坑6	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内底面無釉	－	4.8	－	D 期	太宰府Ⅰ類	見込みに花文
	1180	X－8 大型土坑6	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内底面無釉	16.1	4.4	6.6	E 期	太宰府Ⅱ－ｂ類	蓮弁文
	1181	X－8 大型土坑6	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	16.2	－	－	E 期	太宰府Ⅱ－ｂ類	蓮弁文（縞蓮弁文）
	1182	X－8 大型土坑6	Ⅱ	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	16.2	－	－	G 期以降	上田Ｂ－Ⅱ類	蓮弁文
	1183	X－8 大型土坑6	Ⅱ	青磁	椀	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	12.6	－	－	G 期以降	上田Ｂ－Ⅳ類	ヘラ先による細線の蓮弁文
	1184	X－8 大型土坑6	Ⅱ	青磁	椀	灰黄色	青磁釉	残存部全面施釉	14.0	－	－	F 期	太宰府Ⅲ－2類	
	1185	X－8 大型土坑6	Ⅱ	青磁	坏か？	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	12.0	－	－	F 期	太宰府坏Ⅲ類か？	
	1186	X－8 大型土坑6	Ⅱ	青磁	瓶	灰白色	青磁釉	外面と内面一部施釉	－	－	－	G 期以降	太宰府Ⅳ類以降	胴部に「福」の文字
	1187	X－8 大型土坑6	Ⅱ	青磁	皿	灰白色	青磁釉	畳付は釉剥ぎ	－	4.2	－	D 期	太宰府Ⅰ類	内面ヘラによる文様　ジグザグ状の櫛点描文
第129図	1229	X－2 土坑25	Ⅳ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	17.0	－	－	B 期	太宰府ＸⅠ類か？	10世紀後半～11世紀中頃
	1230	X－3 土坑26	Ⅳ	青白磁	合子蓋	灰白色	青白磁釉	内面無釉	－	－	－	D 期か？	－	
第132図	1244	Z－3 土坑31	Ⅳ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	D 期	太宰府Ⅴ－4b 類	
	1245	Z－3 土坑31	Ⅳ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	16.8	－	－	C 期	太宰府Ⅳ類	

表31　中・近世出土遺物観察表（11）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			時期	分類	備　　考
									口径	底径	器高			
第133図	1254	Y－2 ピット29	Ⅳ	白磁	椀	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	14.6	－	－	C 期	太宰府Ⅳ類	貫入有り
第134図	1261	Z －3 ピット34	Ⅳ	白磁	皿	灰白色	透明釉	内面と外面胴部まで施釉	－	－	－	D 期	太宰府Ⅷ－2b 類か？	

青花（遺構内）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬の色　調	施釉	法量（cm）			時期	分類	産地	備　　考
									口径	底径	器高				
第99図	932	V －3 溝7	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	－	4.4	－	16世紀後半～ 17世紀初頭	不明	漳州窯	
第112図	1097	X －7 溝16	Ⅱ	青花	碗	灰黄色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－		小野 C 群－Ⅰ	景徳鎮	芭蕉葉文
	1098	X －7 溝16	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	11.4	－	－	15世紀後半～ 16世紀前半	小野 C 群	景徳鎮	
	1099	X －7 溝16	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	－	5.4	－	15世紀後半～ 16世紀前半	小野 C 群	景徳鎮	
	1100	Y －7 溝16	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	畳付～高台内面無釉	－	4.6	－	15世紀後半～ 16世紀前半	小野 D 群	景徳鎮	見込みに輪状の釉剥ぎ
第121図	1158	Z －2 土壙墓5	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	腰部～高台内面無釉	13.6	5.0	4.8		－	漳州窯	見込み釉剥ぎ
第125図	1189	X －8 大型土坑6	Ⅱ	青花	碗	白色	透明釉	残存部全面施釉	15.0	－	－	16世紀後半	小野 E 群	景徳鎮	
	1190	X －9 大型土坑6	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	11.0	－	－	15世紀後半～ 16世紀前半	小野 C 群	景徳鎮	
	1191	X －8 大型土坑6	Ⅱ	青花	碗	浅黄色	透明釉	畳付～高台内面無釉	14.0	5.0	4.9	16世紀後半～ 17世紀初頭	－	漳州窯	貫入り有り
	1192	X －8 大型土坑6	Ⅱ	青花	碗	にぶい黄橙色	透明釉	畳付～高台内面無釉	－	5.0	－	16世紀後半～ 17世紀初頭	－	漳州窯	見込み釉剥ぎ　見込みに鉄釉の点あり
	1193	X －8 大型土坑6	Ⅱ	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－		不明	漳州窯	
	1194	X －8 大型土坑6	Ⅱ	青花	碗	灰色	透明釉	腰部～高台内面無釉	－	5.0	－	15世紀後半～ 16世紀前半	小野 C 群	景徳鎮	
	1195	X －8 大型土坑6	Ⅱ	青花	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	11.4	－	－	16世紀後半～ 17世紀初頭	小野 E 群	景徳鎮	
	1196	X －8 大型土坑6	Ⅱ	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	－	3.0	－	15世紀後半～ 16世紀中頃	小野 C 群Ⅰ類	景徳鎮	外面胴部に芭蕉葉文　碁笥底
	1197	X －8 大型土坑6	Ⅱ	青花	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	10.2	－	－	16世紀後半～ 17世紀初頭	小野 E 群	景徳鎮	
	1198	X －8 大型土坑6	Ⅱ	青花	皿	灰白色	透明釉	腰部以下無釉	11.0	－	－	15世紀後半～ 16世紀中頃	小野 C 群	景徳鎮	
	1199	X －8 大型土坑6	Ⅱ	青花	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	10.0	－	－	15世紀後半～ 16世紀中頃	小野 C 群Ⅰ類	景徳鎮	外面に芭蕉葉文

表32　中・近世出土遺物観察表（12）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬の色　調	施釉	法量（cm）			時期	分類	産地	備　　考
									口径	底径	器高				
第135図	1274	W －8 ピット42	X	青花	皿	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	10.8	6.0	2.1	16世紀後半～ 17世紀初頭	小野Ｅ群	景徳鎮	

瓦質・釉無陶器（遺構内）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	法量（cm）			備　　考
							口径	底径	器高	
第98図	920	U －2 溝5		瓦質土器	擂鉢	にぶい黄色	－	－	－	
	924	U －1 溝6	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	（外）淡黄色 （内）浅黄色	－	－	－	
第99図	940	V －3 溝7	Ⅱ	土師質土器	焙烙	にぶい黄橙色	20.9	17.0	3.1	外面にスス付着
第102図	985	V －2 溝8	Ⅱ	瓦質土器	捏鉢	にぶい黄色	31.8	18.2	13.4	
	991	V －2 溝8	Ⅱ	土師質土器	焙烙	浅黄橙色	－	－	－	外面にスス付着
第108図	1041	Z －2 溝15	Ⅱ	土製品	不明	にぶい黄橙色	－	－	－	
第113図	1116	X －7 溝16	Ⅱ	瓦質土器	皿	灰白色	－	－	－	内面に菊花スタンプ文
	1117	X －7 溝16	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	橙色	23.4	－	－	外面　ハケ目 内面　擂り目
	1118	X －7 溝16	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	灰黄色	－	－	－	内面　擂り目
	1119	X －7 溝16	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	灰色			－	内面　擂り目
	1120	X －7 溝16	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	淡黄色	－	－	－	内面　擂り目
	1121	X･Y －7 溝16	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	黄灰色	－	13.6	－	内面　擂り目
	1122	X －7 溝16	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	にぶい黄橙色	－	12.0	－	外面　強いハケ目 内面　擂り目
第114図	1123	X －7 溝16	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	にぶい黄橙色	37.8	－	－	
	1124	X －7 溝16	Ⅱ	瓦質土器	火舎 （火鉢）	浅黄橙色	－	－	－	
	1125	X －7 溝16	Ⅱ	瓦質土器	火舎 （火鉢）	暗灰黄色	－	20.5	－	
	1126	Y －7 溝16	Ⅱ	瓦質土器	茶釜	暗灰黄色	－	－	－	外面にスス付着
	1127	Y －7 溝16	Ⅱ	瓦質土器	茶釜	暗灰黄色	－	－	－	外面にスス付着

表33　中・近世出土遺物観察表（13）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	法量（cm）			備　　考
							口径	底径	器高	
第116図	1144	X－7 溝16	Ⅱ	瓦質土器	硯？	黄灰色		－	－	
第126図	1206	大型土坑6	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	浅黄色	28.0	－	－	内面　擂り目
	1207	W－9 大型土坑6	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	灰黄色	35.0	－	－	内面　擂り目
	1208	X－8 大型土坑6	Ⅱ	瓦質土器	火鉢 （火舎）	浅黄色	27.2	－	－	
	1209	X－8 大型土坑6	Ⅱ	瓦質土器	火鉢 （火舎）	浅黄色	－	35.0	－	小石粒含む
	1210	X－8 大型土坑6	Ⅱ	土製品	脚付土製 煮炊き具か？	灰黄色	－	－	－	
	1212	X－8 大型土坑6	Ⅱ	瓦質土器	蓋	明黄褐色	－	11.4	－	底径は庇径
第130図	1233	X－3 土坑27	Ⅲ	土師質土器	焙烙	にぶい黄橙色	15.8	13.9	4.3	外面にスス付着

陶磁器（遺構内）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬の色　調	施釉	法量（cm）			時期	産地	備　　考
									口径	底径	器高			
第96図	905	Y－2 掘立	Ⅲ	陶器	水注か？	灰黄色	褐釉	残存部全面施釉	－	－	－		中国南部	
	906	Y－2 掘立	Ⅲ	陶器	壺	暗灰黄色	鉄釉	外面施釉	－	－			中国南部	
第98図	918	U－2 溝5	Ⅱ	陶器	壺か？	灰黄色	透明釉	口縁部無釉	－	－	－		中国南部か？	
	921	U－2 溝5	Ⅱ	陶器	擂鉢	－	－	－	－	－	－		備前	
	923	U－1 溝6	Ⅱ	陶器	鉢	灰白色	褐釉	外面無釉	－	－	－		中国南部	
	925	U－1 溝6	Ⅱ	染付	碗	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	－	4.0	－	18世紀中頃	肥前	
	926	U－1 溝6	Ⅱ	陶器	碗	灰黄色	黒釉	高台内面無釉	－	4.2	－	17世紀後半	肥前	
	929	V－1·2 溝7	Ⅱ	陶器	把手	暗灰黄色	褐釉	残存部全面施釉	－	－	－		中国南部	
第99図	933	V－2 溝7	Ⅱ	陶器	皿	灰白色	灰釉	腰部～高台内面無釉	－	4.2	－	1590～1630年	肥前	
	934	V－2 溝7	Ⅱ	陶器	鉢	暗赤灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	－	－	－	18世紀代	薩摩焼苗代川系	
	935	V－2 溝7	Ⅱ	陶器	鉢	暗赤灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	－	－	－	18世紀代	薩摩焼苗代川系	口唇部に貝目有り

表34　中・近世出土遺物観察表（14）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬の色　調	施釉	法量（cm）			時期	産地	備　　考
									口径	底径	器高			
第99図	936	Ⅴ－3 溝7	Ⅱ	陶器	鉢	にぶい赤褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	34.8	18.3	10.9	18世紀代	薩摩焼苗代川系	口唇部に貝目有り
	937	Ⅴ－3 溝7	Ⅱ	陶器	擂鉢	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	－	－	－	18世紀後半	薩摩焼苗代川系	口唇部に貝目有り
	938	Ⅴ－3 溝7	Ⅱ	陶器	蓋	褐灰色	鉄釉	上面施釉	9.1	12.4	3.4	18世紀後半～ 19世紀	薩摩焼	底径は庇径
	939	Ⅴ－3 溝7	Ⅱ	陶器	水注	にぶい黄色	灰釉	残存部全面施釉	－	－	－	19世紀代	薩摩焼苗代川系	
第101図	973	Ⅴ－2･3 溝8	Ⅱ	陶器	鉢	褐灰色	－	－	18.0	－			中国南部	
	974	Ⅴ－2 溝8	Ⅱ	陶器	鉢	灰白色	鉄釉	内面口縁以下無釉	－	－	－		中国南部	
	975	Ⅴ－1 溝8	Ⅱ	陶器	瓶	灰黄色	褐釉	内面無釉	－	－	－	10世紀～11世紀	磁州窯系	白地剔花文
	976	Ⅴ－1 溝8	Ⅱ	陶器	瓶	灰黄色	褐釉	内面無釉	－	－	－	10世紀～11世紀	磁州窯系	白地剔花文
	977	Ⅴ－1 溝8	Ⅱ	陶器	壺	灰白色	褐釉	残存部全面施釉	11.4	－	－		中国南部	
	978	Ⅴ－3 溝8	Ⅱ	陶器	壺	灰白色	灰釉	外面腰部以下無釉	－	14.2	－		中国南部	
	979	Ⅴ－2 溝8	Ⅱ	陶器	壺	灰白色	灰釉	外面無釉	－	17.0	－		中国南部	
第102図	986	Ⅴ－3 溝8	Ⅱ	陶器	甕	灰白色	－	－	－	－	－		備前か？	
	988	Ⅴ－2 溝8	Ⅱ	陶器	碗	橙色	鉄釉	畳付き～高台内面無釉	－	5.0	－	18世紀後半	薩摩焼龍門司系	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	989	Ⅴ－2 溝8	Ⅱ	陶器	鉢	茶褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	23.2	－	－	18世紀代	薩摩焼苗代川系	
	990	Ⅴ－2 溝8	Ⅱ	陶器	蓋	茶褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	－	－	－	18世紀代	薩摩焼苗代川系	
第103図	998	Ⅹ－2 溝10	Ⅳ	陶器	鉢	黄灰色	－	－	30.6	－	－		中国南部	
第106図	1013	Ⅴ－2 溝11	－	緑釉陶器	不明	暗灰黄色	緑釉	肩部以下施釉	－	－	－	－	不明	
	1014	Ⅴ－2 溝11	Ⅳ	陶器	壺	灰黄色	－	－	15.2	－	－		中国南部	
	1016	Ⅴ－2 溝11	Ⅳ	陶器	瓶？	にぶい橙色	－	－	9.8	－	－		中国南部	
	1017	Ⅴ－2 溝11	Ⅳ	陶器	甕	灰褐色	－	－	－	－	－		中国南部	
	1018	Ⅴ－2 溝11	Ⅳ	陶器	瓶	にぶい黄橙色	緑釉か？	残存部全面施釉？	－	－	－		中国南部か？	

表35　中・近世出土遺物観察表（15）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬の色　調	施釉	法量（cm）			時期	産地	備　　考
									口径	底径	器高			
第106図	1019	Y－2 溝11	Ⅳ	陶器	小壺	灰黄色	透明釉	内面無釉	3.6	－	－		不明	
第108図	1042	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	皿か鉢？	灰黄色	褐釉	残存部全面施釉	－	－	－		磁灶窯系	白地剔花文
	1043	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	捏鉢	にぶい黄橙色	褐釉	残存部全面施釉	26.0	－	－	12世紀中頃～ 12世紀後半	中国南部	
	1044	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	壺か？	灰黄色	－	－	－	11.0	－		中国南部	内面同心円タタキ
	1045	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	甕	黄灰色	－	－	－	－	－		備前	
	1048	Z－2 溝15	Ⅱ	染付	碗	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	11.6	4.4	5.1	18世紀後半	肥前系	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	1049	Z－2 溝15	Ⅱ	磁器（白磁）	碗	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	12.4	4.6	5.3	18世紀後半	肥前系	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	1050	Z－2 溝15	Ⅱ	染付	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	7.0	－	－	18世紀後半	肥前系	
	1051	Z－2 溝15	Ⅱ	染付	皿	灰白色	透明釉	腰部以下無釉	13.2	－	－	19世紀	肥前系	
	1052	Z－2 溝15	Ⅱ	染付	皿	灰色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	－	4.8	－	19世紀前半	肥前系	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	1053	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	碗	浅黄色	透明釉	腰部～高台内面無釉	－	3.6	－	17世紀後半～ 18世紀初頭	肥前系	京焼き風陶器
	1054	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	碗	灰白色	透明釉	腰部～高台内面無釉	－	3.6	－		肥前系	京焼き風陶器
第109図	1055	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	碗	灰色	白化粧土に透明釉	畳付は釉剥ぎ	11.0	3.8	4.7	18世紀後半	肥前	文様　打ち刷毛目
	1056	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	碗	浅黄色	鉄釉	残存部全面施釉	13.4	－	－	18世紀後半	薩摩焼龍門司系	
	1057	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	碗	黄灰色	鉄釉	畳付～高台内面無釉	－	4.6	－	18世紀後半	薩摩焼龍門司系	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	1058	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	盤	黄灰色	白化粧土に褐釉	外面口縁以下無釉	－	－	－	17世紀後半	肥前	
	1059	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	瓶類	にぶい黄橙色	白化粧土に透明釉	内面口縁以下無釉	－	－	－	18世紀後半	薩摩焼龍門司系	
	1060	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	徳利	灰黄色	灰釉	内面無釉	－	－	－	17世紀後半	薩摩焼苗代川系	
	1061	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	蓋	にぶい褐色	－	－	12.0	－	－	17世紀代	薩摩焼苗代川系	
	1062	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	鉢	明赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	26.0	－	－	18世紀代	薩摩焼苗代川系	
	1063	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	擂鉢	褐灰色	鉄釉	内外面口唇部以下無釉	35.2	－	－	17世紀前半	肥前系	

表36　中・近世出土遺物観察表（16）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬の色　調	施釉	法量（cm）			時期	産地	備　　考
									口径	底径	器高			
第109図	1064	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	蓋	橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	33.4	－	－	17世紀後半～ 18世紀代	薩摩焼苗代川系	
	1065	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	甕	橙色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	28.0	－	－	17世紀後半～ 18世紀前半	薩摩焼苗代川系	口唇部に貝目有り
	1066	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	甕	褐灰色	鉄釉	残存部全面施釉	－	－	－	17世紀後半～ 18世紀前半	薩摩焼苗代川系	
	1067	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	壺	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	15.0	－	－	18世紀代	薩摩焼苗代川系	口唇部に貝目有り
	1068	Z－2 溝15	Ⅱ	陶器	鉢か甕	明赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	－	14.0	－	18世紀代	薩摩焼苗代川系	
第112図	1101	V－7 溝16	Ⅱ	陶器	鉢	灰色	白化粧土に 透明釉	残存部全面施釉	30.0	－	－	17世紀後半	肥前	刷毛目唐津 内面に鉄絵
	1102	X－7 溝16	Ⅱ	緑釉陶器	瓶	灰白色	緑釉	内面無釉	－	－	－	－	中国南部	
	1103	X－7 溝16	Ⅱ	陶器	壺	灰黄褐色	褐釉	残存部全面施釉	9.8	－	－		中国南部	
	1104	X－7 溝16	Ⅱ	陶器	鉢	にぶい黄橙色	褐釉	口唇部無釉	－	－	－		中国南部	
	1105	X－7 溝16	Ⅱ	陶器	壺	にぶい黄橙色	褐釉	腰部～高台内面無釉	－	6.2	－		中国南部	
	1106	X－7 溝16	Ⅱ	陶器	壺	浅黄色	－	－	－	－	－		中国南部	
	1107	X－7 溝16	Ⅱ	陶器	壺	黄灰色	－	－	－	－	－		中国南部	
	1108	X－7 溝16	Ⅱ	陶器	徳利	灰黄色	鉄釉か？	残存部全面施釉	－	－	－	17世紀初頭	薩摩焼苗代川系	串木野窯か？
第114図	1133	X－7 溝16	Ⅱ	陶器	甕	暗灰黄色	－	－	32.4	－	－		常滑焼	
	1134	X－7 溝16	Ⅱ	陶器	甕	にぶい赤褐色	－	－	－	－	－		常滑焼	
	1135	Y－7 溝16	Ⅱ	陶器	甕	灰色	－	－	－	37.0	－		常滑焼	
第117図	1154	W－8 溝18	Ⅱ	陶器	甕	灰白色	－	－	－	－	－		常滑焼	小石粒含む
	1155	W－8 溝18	Ⅱ	陶器	甕	にぶい黄橙色	鉄釉	残存部全面施釉	－	－	－		備前か？	
	1156	W－8 溝18	Ⅱ	陶器	甕	褐灰色	灰釉	残存部全面施釉	－	－	－		常滑か？	内面　タタキ
第124図	1188	X－8 大型土坑6	Ⅱ	陶器	碗	灰白色	銅緑釉	畳付は釉剥ぎ	－	5.6	－	見込みに文様	肥前内野山	
第125図	1200	X－8 大型土坑6	Ⅱ	陶器	壺	にぶい黄橙色	－	－	－	7.6	－		中国南部	

表37　中・近世出土遺物観察表（17）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬の色　調	施釉	法量（cm）			時期	産地	備　　考
									口径	底径	器高			
第125図	1201	X－8 大型土坑6	Ⅱ	陶器	壺	灰色	－	－	－	8.8	－		中国南部	
	1202	X－8 大型土坑6	Ⅱ	陶器	壺	灰黄色	－	－	－	16.0	－		中国南部	
第126図	1211	X－8 大型土坑6	Ⅱ	陶器	擂鉢	青灰色	－	－	27.0	－	－	14世紀後半～ 15世紀前半	備前	
	1213	X－8・9 大型土坑6	Ⅱ	陶器	甕	灰黄色	灰釉	外面口縁部 内面口縁部以下無釉	18.8	－	－		常滑焼	
	1214	X－8 大型土坑6	Ⅱ	陶器	碗	明赤褐色	灰釉	腰部～高台内面無釉	－	4.4	－	1590～1610年	肥前系（唐津）	
	1215	X－8 大型土坑6	Ⅱ	陶器	皿	灰褐色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－		肥前系（唐津）	内面　白化粧土 鉄絵二彩手
	1216	X－9 大型土坑6	Ⅱ	磁器	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	12.2	4.8	4.3	17世紀前半	肥前系（唐津）	見込み畳付きに砂目
第127図	1217	W－9 大型土坑6	Ⅱ	陶器	水注	にぶい褐色	灰釉	残存部全面施釉	－	－	－		不明	
	1218	X－8 大型土坑6	Ⅱ	陶器	擂鉢	黒褐色	鉄釉	残存部全面施釉	－	－	－		薩摩焼苗代川系	
	1219	大型土坑6	Ⅱ	陶器	徳利	黄灰色	灰釉	残存部全面施釉	－	－	－	17世紀後半～ 18世紀	薩摩焼苗代川系	
	1220	X－9 大型土坑6	Ⅱ	陶器	瓶	黄灰色	灰釉	内面無釉	－	6.6	－	17世紀後半～ 18世紀前半	薩摩焼苗代川系	
	1221	大型土坑6	Ⅱ	陶器	徳利	黄灰色	灰釉	残存部全面施釉	－	9.0	－	17世紀後半～ 18世紀前半	薩摩焼苗代川系	
	1222	X－8 大型土坑6	Ⅱ	陶器	徳利	灰色	灰釉	残存部全面施釉	－	14.2	－	17世紀後半～ 18世紀前半	薩摩焼苗代川系	
	1223	X－9 大型土坑6	Ⅱ	陶器	片口	褐灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	20.4	－	－	17世紀後半～ 18世紀前半	薩摩焼苗代川系	
第130図	1232	X－3 土坑27	Ⅲ	肥前系磁器	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	10.6	－	5.2	1640～1650年	肥前系	口錆
	1235	Y－2 土坑29	Ⅳ	陶器	甕	灰黄色	－	－	－	－	－		中国南部	
	1237	Y－2 土坑29	Ⅳ	陶器	水注か？	橙色	褐釉	外面腰部以下無釉	－	6.4	－		中国南部	
第133図	1251	X－3 ピット25	Ⅳ	陶器	水注	橙色	不明	外面腰部以下無釉	－	8.0	－		中国南部	腰部下位に目跡有り
第134図	1264	Z－3 ピット35	Ⅳ	陶器	壺か？	灰色	灰釉	腰部以下無釉	－	－	－		中国南部	
第135図	1275	W－8 ピット42	X	陶器	皿	にぶい褐色	灰釉	腰部～高台内面無釉	11.8	4.4	3.4	1590～1610年	肥前系（唐津）	皮鯨　口縁端部鉄釉による口紅

表38　中・近世出土遺物観察表（18）

土錘（遺構内）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	色調	法量（cm）		備考
							長さ	厚さ	
第102図	993	Ⅴ－2 溝8	Ⅱ	土製品	土錘	明赤褐色	4.4	0.9	赤色顔料塗布
第106図	1020	Ⅹ－2 溝11	Ⅳ	土製品	土錘	橙色	8.3	0.7	赤色顔料塗布
第114図	1128	Ⅹ－7 溝16	Ⅱ	土製品	土錘	にぶい黄色	4.4	2.3	
	1129	Ⅹ－7 溝16	Ⅱ	土製品	土錘	浅黄橙色	7.4	1.2	赤色顔料塗布
	1130	Ⅹ－7 溝16	Ⅱ	土製品	土錘	にぶい黄橙色	3.3	1.3	赤色顔料塗布
	1131	Ⅹ－7 溝16	Ⅱ	土製品	土錘	灰黄色	7.6	1.8	
	1132	Ⅹ－7 溝16	Ⅱ	土製品	土錘	明黄褐色	7.1	2.3	
第135図	1273	a－3 ピット41	Ⅳ	土製品	土錘	橙色	5.0	1.8	赤色顔料塗布

石鍋（遺構内）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
第102図	987	Ⅴ－2 溝8	Ⅱ	石製品	石鍋	－	－	34.4	－	
第106図	1021	Ⅹ－2 溝11	Ⅳ	石製品	石鍋	－	36.6	－	－	
第116図	1145	Ⅹ－7 溝16	Ⅱ	石製品	石鍋	－	－	－	－	
	1146	Ⅹ－7 溝16	Ⅱ	石製品	石鍋	－	－	－	－	
	1147	Ⅹ－7 溝16	Ⅱ	石製品	石鍋	－	－	－	－	補修痕あり
第128図	1227	Ⅹ－8 大型土坑6	Ⅱ	石製品	石鍋	－	28.0	－	－	外面にスス付着

鞴（遺構内）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	法量（cm）			時期	備考
							口径	底径	器高		
第102図	992	Ⅴ－11 溝8	Ⅱ	土製品	鞴の羽口	浅黄橙色	－	－	－		鉄滓熔着
第115図	1136	Ⅹ－8 溝16	Ⅱ	土製品	－	明赤褐色	－	－	－		鉄滓熔着
	1137	Ⅹ－7 溝16	Ⅱ	土製品	－	にぶい橙色	－	－	－		鉄滓熔着
	1138	Ⅹ－7 溝16	Ⅱ	土製品	－	橙色	－	－	－		鉄滓熔着

表39　中・近世出土遺物観察表（19）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	法量（cm）			時期	備考
							口径	底径	器高		
第115図	1139	X－7 溝16	Ⅱ	土製品	－	浅黄橙色	－	－	－		鉄滓熔着
第127図	1224	X－8 大型土坑6	Ⅱ	土製品	－	明黄褐色	－	－	－		鉄滓熔着
	1225	X－8 大型土坑6	Ⅱ	土製品	－	暗灰黄色	－	－	－		鉄滓熔着
第128図	1226	X－8 大型土坑6	Ⅱ	土製品	－	にぶい黄橙色	－	－	－		鉄滓熔着

瓦（遺構内）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	色調	法量（cm）			調整		備考
							長辺	短辺	厚さ	外面	内面	
第116図	1140	X－7 溝16	Ⅱ	瓦	平瓦	（外）灰色 （内）灰白色	－	－	1.0	縄目タタキ	布目痕	
	1141	X－7 溝16	Ⅱ	瓦	平瓦	（外）にぶい橙色 （内）褐灰色	－	－	1.5	縄目タタキ後ナデ	布目痕	
	1142	X－7 溝16	Ⅱ	瓦	平瓦	（外）黄灰色 （内）灰黄色	－	－	1.2	縄目タタキ	布目痕	
	1143	X－7 溝16	Ⅱ	瓦	平瓦	灰黄色	－	－	1.0	縄目タタキ後ナデ	布目痕	
	1150	V－7 溝17	Ⅱ	瓦	平瓦	（外）明黄褐色 （内）灰黄褐色	－	－	1.3	縄目タタキ後ナデ	布目痕	

土師須恵器（包含層出土）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	色調	法量（cm）			胎土				調整		備考
								口径	底径	器高	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	
第136図	1276	W－2	Va	土師器	Ⅲ	口縁～底部	（外）橙色 （内）にぶい黄橙色	11.0	9.6	1.4		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1277	Y－2	Ⅳ	土師器	Ⅲ	口縁～底部	浅黄橙色	9.8	8.0	1.4			○		ナデ	ナデ	底部　糸切り　赤色の石粒含む
	1278	Y－2	Ⅳ	土師器	Ⅲ	口縁～底部	にぶい黄橙色	9.8	7.6	1.1	○				ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1279	Y－4	Ⅳ	土師器	Ⅲ	口縁～底部	にぶい黄橙色	9.2	7.4	1.0		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り　赤色の石粒含む
	1280	W－2	Ⅳ	土師器	Ⅲ	口縁～底部	（外）にぶい黄橙色 （内）浅黄色	9.0	7.0	1.1	○				ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1281	N－2	Va	土師器	Ⅲ	口縁～底部	（外）黒褐色 （内）にぶい黄橙色	9.0	7.2	1.0		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り 外面にスス付着
	1282	Z－12	XⅠ	土師器	Ⅲ	口縁～底部	（外）にぶい黄褐色 （内）にぶい黄橙色	9.2	7.8	1.5		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り　赤色の石粒含む
	1283	Y－2	Ⅳ	土師器	Ⅲ	口縁～底部	にぶい黄橙色	9.0	8.0	1.1	○				ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1284	Z－2·3	Ⅳb	土師器	Ⅲ	口縁～底部	浅黄橙色	9.0	7.0	1.5			○		ナデ	ナデ	底部　糸切り　赤色の石粒含む
	1285	Z－12	XⅠ	土師器	Ⅲ	口縁～底部	にぶい黄橙色	8.4	6.0	1.3		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り　内外面に一部スス付着

表40　中・近世出土遺物観察表（20）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	色調	法量（cm）			胎土				調整		備考
								口径	底径	器高	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	
第136図	1286	X－9	XⅠ	土師器	皿	完形	（外）にぶい黄橙色 （内）浅黄橙色	8.6	5.0	2.5		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り　内外面に一部スス付着
	1287	V－2	Ⅳ	土師器 黒色土器A類	椀	底部	（外）浅黄橙色 （内）黒色	－	7.4	－		○			ナデ	ミガキ	
	1288	V－2	Ⅳ Ⅳb	土師器 黒色土器A類	椀	底部	（外）浅黄橙色 （内）黒色	－	8.0	－		○			ナデ	ミガキ	
	1289	X－2	Ⅵ	土師器 黒色土器A類	椀	底部	（外）浅黄橙色 （内）黒色	－	7.0	－		○			ナデ	ミガキ	高台内底糸切り
	1290	Z－3	Vb	土師器 黒色土器B類	皿	口縁～底部	（外）褐灰色 （内）黒褐色	－	5.9	－		○			ミガキ	ミガキ	
	1291	Z－2·3	Vaか Vb	土師器 黒色土器B類	皿	ほぼ完形	（外）浅黄橙色 （内）黒色	7.9	6.0	1.8		○			外側面ミガキ	ミガキ	底部　糸切り　赤色の石粒含む
	1292	Z－13	Ⅵ	土師器 赤色土器A類	坏	口縁～底部	（外）橙色 （内）にぶい橙色	15.1	10.5	3.2			○		ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1293	Z－2·3	Vaか Vb	土師器 赤色土器B類	坏	底部	（外）浅黄橙色 （内）橙色	－	8.0	－	○				ナデ	ナデ	底部　糸切り　赤色の石粒含む
	1294	Z－2·3		土師器 内黒　外赤	坏	底部	（外）橙色 （内）黒色	－	6.0	－		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り
	1295	V－2	X	土師器	メンコ	－	にぶい黄橙色	径7.5	－	厚0.8		○			ナデ	ナデ	底部　糸切り　口径は長径
	1296	X－3	Ⅳb	須恵器	皿	完形	灰黄色	8.2	4.2	2.0					ナデ	ナデ	底部　糸切り
第137図	1317	X－2	Va·b	須恵器 （カムィヤキ）	甕	胴部	灰色	－	－	－					格子目タタキ	格子目タタキ	
	1318	W－7	X	樺万丈系 須恵器	捏鉢	口縁～胴部	灰色	22.6	－	－						ハケ目	

白磁青磁（包含層出土）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			時期	分類	備考
									口径	底径	器高			
第137図	1297	X－8	Ⅱ	白磁	椀	淡黄色	透明釉	内面見込み 外面腰部～高台内底面無釉	－	5.4	－	C・D期	不明	
	1298	Y－2	Ⅳ	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台内底面無釉	9.8	4.4	2.8	F期か？	太宰府Ⅸ類か？	見込みに輪状の釉剥ぎ
	1299	V－8	Va	白磁	皿	灰白色	透明釉	腰部～高台内底面無釉	9.6	5.0	2.4		－	見込みに円状の釉剥ぎ
	1300	Y－3	Ⅱ	白磁	壺	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	10.8	－	－		－	
	1301	Y－2	Ⅲ	青磁	稜花椀	灰黄色	灰釉	残存部全面施釉	18.6	－	－	C·D期か？	－	
	1302	W－7	X	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	13.0	－	－	D期	太宰府Ⅰ－4a’類か？	二又片刀によって体部内面を五分割する （分割のみで文様なし）
	1303	V－9	X	青磁	椀	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	15.0	－	－	G期以降	上田B－Ⅳ類	上田分類B－Ⅳ　ヘラ先による細線蓮弁文
	1304	X－9	XⅠ	青磁	坏	灰白色	青磁釉	高台内底面無釉	10.8	6.0	3.6	C期	太宰府Ⅳ類	蓮弁文　見込みにスタンプ紋有り
	1305	Y－2	Ⅳ V	白磁	鉢	黄灰色	透明釉	残存部全面施釉	7.9	3.0	3.1	C期か？	白磁壺Ⅱ類か？	

表41　中・近世出土遺物観察表（21）

青花（包含層出土）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬の色調	施釉	法量（cm）			時期	分類	産地	備　　考
									口径	底径	器高				
第139図	1327	U－1	Ⅱ	青花	Ⅲ	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	－	12.4	－	15世紀末～16世紀中頃	小野Ｆ群		

瓦質土器（包含層出土）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	法量（cm）			備　　考
							口径	底径	器高	
第140図	1333	W－7	X	土師質土器	焙烙	浅黄色	16.5	14.2	4.7	外面にスス付着

陶磁器（包含層出土）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬の色調	施釉	法量（cm）			時期	産地	備　　考
									口径	底径	器高			
第137図	1306	Y－3	Ⅲ	陶器	鉢？	灰色	灰釉	外面無釉	23.2	－	－	不明	－	
	1307	Y－3	Ⅱ	陶器	鉢	にぶい橙色	褐釉	残存部全面施釉	10.0	－	－	D期	中国南部	1308と同一個体
	1308	Y－2	Ⅲa	陶器	鉢	にぶい橙色	褐釉	残存部全面施釉	－	8.2	－	D期	中国南部	碁笥底　1307と同一個体
	1309	Y－3	Ⅱ	陶器	瓶	にぶい橙色	鉄釉	内面無釉	－	－	－	不明	中国南部	
	1310	V－8	X	陶器	壺	橙色	灰釉	残存部全面施釉	17.2	－	－	E期か？	中国南部	
	1311	Z－2	Va	陶器	壺	にぶい赤褐色	褐釉	口唇部釉剥ぎ	15.0	－	－	E期か？	中国南部	
	1312	Y－2	Ⅳb	陶器	壺	橙色	灰釉	残存部全面施釉	－	－	－	不明	中国南部	
	1313	W－7	X	陶器	壺	暗灰黄色	－	－	－	－	－	E期か？	中国南部	
	1314	Y－2	Ⅲ	陶器	甕	灰色	－	－	－	－	－	E期か？	中国南部	
	1315	W－6	X	陶器	甕	黄灰色	灰釉	内面無釉	－	－	－	E期か？	中国南部	
	1316	V－8	X	陶器	甕	にぶい黄橙色	灰釉か？	残存部全面施釉？	－	－	－	E期	中国南部	
第140図	1328	W－7	X	染付	碗	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	10.4	4.0	6.2	18世紀中頃	肥前系	
	1329	W－7	X	染付	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	10.2	－	－	1620～1630年	肥前か？	
	1330	－		陶器	碗	灰褐色	鉄釉	残存部全面施釉	16.6	－	－	17世紀初頭	薩摩焼苗代川系	串木野窯か？
	1331	Z－3	Va·b	陶器	土瓶	橙色	褐釉？	口唇部釉剥ぎ	11.6	－	－	19世紀代	薩摩焼苗代川系	
	1332	W－7	X	陶器	甕	灰黄褐色	鉄釉	残存部全面施釉	－	－	－	18世紀代	薩摩焼苗代川系	

表42　中・近世出土遺物観察表（22）

石鍋（包含層出土）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	法量（cm）			備　　考
							口径	底径	器高	
第139図	1324	X－1	Ⅳa	石製品	滑石製品		－	－	－	石鍋の転用品か？
	1325	Y－3	ⅡまたはⅢ	石製品	滑石製品		－	－	－	石鍋の転用品
	1326	3T	Ⅱ	石製品	石鍋		－	－	－	

土錘（包含層出土）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	色調	法量（cm）		備　　考
							長さ	厚さ	
第140図	1334	X－2	Ⅳ	土製品	土錘	にぶい赤褐色	8.9	3.2	赤色の顔料塗布

瓦（包含層出土）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	色調	法量（cm）			調整		備　　考
							長辺	短辺	厚さ	外面	内面	
第138図	1319	畝間	Ⅱ～Ⅳ	瓦	軒平瓦	灰黄色	－	－	－	縄目タタキ後ナデ	布目痕	厚さは顎凸面厚　押圧文　12世紀代
	1320	X－3	ⅡまたはⅢ	瓦	軒平瓦	灰白色	－	－	－	縄目タタキ後ナデ	布目痕	厚さは顎凸面厚　押圧文　12世紀代
	1321	Y－2	Ⅳb	瓦	丸瓦	（外）にぶい黄色 （内）灰黄色	24.2	15.3	3.0	縄目タタキ後ナデ	布目痕	
第139図	1322	Y－3	ⅡまたはⅢ	瓦	丸瓦	黄灰色	－	－	1.4	縄目タタキ後ナデ	布目痕	
	1323	Y－3	ⅡまたはⅢ	瓦	鬼瓦	黄灰色	－	－	4.8		指押さえ	髭部分か？

土師須恵器（表層）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	色調	法量（cm）			胎土				調整		備　　考
								口径	底径	器高	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	
第141図	1335			土師器 黒色土器B類	Ⅲ	口縁～底部	黒色	8.5	6.2	1.5		○			外側面ミガキ	ミガキ	底部　糸切り
第142図	1356			神出魚住か？	捏鉢	口縁部	灰色	26.2	－	－					ナデ	ナデ	
	1357			櫛万丈系 須恵器か？	壺	口縁部	灰色	－	－	－					格子目タタキ	ナデ	

表43　中・近世出土遺物観察表（23）

白磁青磁（表層）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬の色調	施釉	法量（cm）			時期	分類	備　　考
									口径	底径	器高			
第141図	1337			白磁	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	8.8	4.0	2.0	－	不明	畳付に砂粒付着
	1338			白磁	皿	灰白色	透明釉	高台脇～高台内底面無釉	10.5	4.5	2.7	C 期	太宰府Ⅲ類－1	外面腰部に砂粒付着 見込みに輪状の釉剥ぎ
	1339			白磁	把手	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	C 期か？	－	中国閩江か？
	1340			白磁	壺	灰黄色	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	C 期	白磁壺Ⅲ－2類か？	中国閩江か？
	1341			青白磁	合子（蓋）	灰白色	透明釉	上面のみ施釉	10.0	－	1.5	－	－	
	1342			青白磁	合子（身）	灰白色	透明釉	蓋受け部と腰部～外底面無釉	8.0	8.0	4.2	－	－	
	1343			青磁	椀	灰色	青磁釉	畳付～高台内底面無釉	15.2	6.4	7.1	D 期	太宰府Ⅰ－4b 類	龍泉窯　12世紀中頃～後半
	1344			青磁	椀	灰白色	青磁釉	畳付～高台内底面無釉	12.0	5.2	6.1	G 期以降	森田 B 類	見込みに花文スタンプ有り
	1345			青磁	瓶	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	－	－	－	G 期以降	－	1346と同一個体
	1346			青磁	瓶	灰白色	青磁釉	畳付は釉剥ぎ	－	7.5	－	G 期以降	－	1345と同一個体
	1347			青磁	瓶	灰白色	青磁釉	高台脇～高台内底面無釉	－	8.2	－	G 期以降	－	

鏡（表層）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	分類	法量（cm）		備　　考
							幅	厚さ	
第143図	1371			銅鏡	湖州鏡		13.5	0.2	

瓦質無釉陶器（表層）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	法量（cm）			備　　考
							口径	底径	器高	
第141図	1336			瓦器	皿	褐灰色	8.2	2.2	1.3	13世紀　和泉型　スス付着
第142図	1366	Y－2		土製品	焙烙	（外）黒色 （内）にぶい黄橙色	－	－	－	裏面全面にスス付着

陶器（表層）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			時期	産地	備　　考
									口径	底径	器高			
第141図	1348			陶器	天目碗	灰黄色	褐釉と黒釉	腰部以下無釉	10.4	3.8	5.9	14～15世紀	中国	

表44　中・近世出土遺物観察表（24）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	法量（cm）			時期	産地	備　　考
									口径	底径	器高			
第141図	1349			陶器	天目碗	浅黄色	褐釉と黒釉	腰部以下無釉	－	－	－	13世紀	吉州か？	
	1350	X －2		陶器	不明	灰白色	透明釉	外面腰部以下無釉	－	3.0	－	17世紀	中国	
	1351	X －2 X －3		陶器	瓶	灰黄色	褐釉	内面無釉	－	－	－	－	磁州窯	白磁剔花文
	1352	Z －3		緑釉陶器	瓶	浅黄色	緑釉に鉄絵	内面無釉	－	－	－	－	不明	
第142図	1353	X －3		緑釉陶器	瓶	灰黄色	緑釉	内面無釉	－	－	－	16世紀～17世紀代	中国	
	1354	X －2		陶器	甕	暗灰色	－	－	－	－	－	－	中国南部	
	1355			陶器	小壺	灰白色	灰釉か？	内面無釉	4.6	－	－	－	不明	
	1358	ab －2·3		染付	碗	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	10.4	5.2	6.2	19世紀前半	肥前系	広東型
	1359			白磁	碗	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	11.8	4.4	5.6	18世紀後半	肥前	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	1360			磁器	盤	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	22.2	－	－	1630～1640年	肥前	獅子頭の獣足
	1361			陶器	碗	淡黄色	透明釉	腰部以下無釉	－	3.8	－	17世紀後半	肥前	京焼風陶器 見込みに鉄釉で「壽」
	1362	ab －2·3		陶器	碗	にぶい黄橙色	鉄釉	畳付は釉剥ぎ	31.3	12.0	9.0	17世紀代	肥前か在地	
	1363			陶器	大皿	にぶい橙色	透明釉	畳付～高台内面無釉	12.4	5.2	7.8	17世紀後葉	肥前	三島手の象嵌 見込みに砂目
	1364			陶器	皿	灰白色	銅緑釉	畳付は釉剥ぎ	－	5.4	－	17世紀後半	肥前内野山	
	1365			陶器	甕	にぶい橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	－	－	－	17世紀後半	薩摩焼 苗代川系	口唇部に貝目あり

瓦（表層）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	色調	法量（cm）			調整		備　　考
							長辺	短辺	厚さ	裏面	内面	
第143図	1367	Z －3		瓦	平瓦	灰黄色	13.5	9.7	1.2	縄目タタキ後ナデ	布目痕	
	1368			瓦	軒平瓦	灰黄色	－	－	4.0	ナデ	ナデ	厚さは顎凸面厚 胎土に金雲母を多量に含む
	1369			瓦か？	瓦か？	灰色	－	－	－	－	－	

石鍋（表層）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	色調	法量（cm）			備　　考
							口径	底径	器高	
第143図	1370			石製品	石鍋		－	14.1	－	

第７章　科学分析

第１節　概要

渡畑遺跡は南さつま市金峰町に所在し，西流する万之瀬川が北に大きく流路を蛇行させる付近の右岸自然堤防上に位置する。

本遺跡は，河川改修事業に伴う発掘調査により，縄文時代中・後期から古代・中近世までの遺構・遺物が発見された複合遺跡である。

調査報告にあたって，次の科学分析を行った。

まず，渡畑遺跡における出土種子の年代と当時の環境・食料選択のあり方について検討するために，放射性炭素年代測定（AMS 測定）を行った。

次に，植物利用状況を明らかにするために、出土した種実遺体の同定を実施し，炭化物の自然科学分析調査を行った。

さらに本遺跡では，製鉄関連遺構や遺物も確認されており，鉄滓，羽口等が多数出土した。そこで本遺跡での17～18世紀代の生産の実態を検討する目的から，金属学的調査を行った。

放射性炭素年代測定（AMS 測定）および，出土炭化物の自然化学分析調査については，平成21年度に(株)加速器分析研究所へ依頼した。

出土製鉄・鍛冶・鋳造関連遺物の金属学的調査については，平成22年度に九州テクノリサーチ・TAC センターへ依頼した。

第２節　放射性炭素年代測定

１　測定対象試料

渡畑遺跡は，北緯31°25′44″，東経130°19′22″ に所在し，万之瀬川に隣接する河川敷（自然堤防上）に立地する。測定対象試料は，炭化種子（１（28号土坑）：IAAA-91710）１点である。

２　測定の意義

種子の年代と当時の環境・食料選択のあり方について検討するための一資料とする。

３　化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

(2) 酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA: Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1N の水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお，AAA 処理において，アルカリ濃度が1N 未満の場合，表中に AaA と記載する。

その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

(3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

(4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

(6) グラファイトを内径１mm のカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

４　測定方法

測定機器は，3MV タンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

(1) 年代値の算出には，Libby の半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。

(2) ^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は，δ^{13}C によって補正された値である。^{14}C 年代と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}C 年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

(3) δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}C を測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

(4) pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C 濃度の割合である。

(5) 暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C 濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しな

い^{14}C 年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

6　測定結果

炭化種子１（28号土坑）の^{14}C 年代は，970±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，11世紀から12世紀前半頃の範囲で示される。

炭素含有率は70％程度の十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

参考文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355–363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425–430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355–363

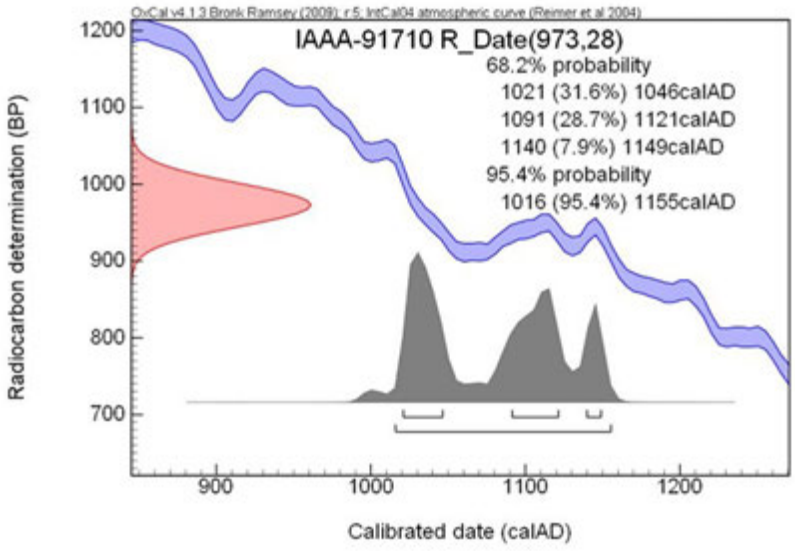
Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381–389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029–1058

表45　放射性炭素年代測定結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-91710	1（28号土坑）	渡畑遺跡 土坑	炭化種子	AAA	−24.20 ±0.42	970 ± 30	88.59 ± 0.32

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-91710	960 ± 30	88.73 ± 0.31	973 ± 28	1021AD - 1046AD（31.6%） 1091AD - 1121AD（28.7%） 1140AD - 1149AD（ 7.9%）	1016AD - 1155AD（95.4%）



第146図　暦年較正年代グラフ

第３節　炭化種実同定

１　試料

試料は，Ｙ－２区の28号土坑より出土した種実遺体67個（計10.6g）である。

２　分析方法

試料を双眼実体顕微鏡（CarlZeiss 製 Stemi2000-c）下で観察する。現生標本および石川（1994），中山（2000）ほか等との対照から，種実遺体の種類と部位を同定する。分析後は，種実を容器に入れて保管する。

３　結果

結果を表46に示す。木本２分類群（広葉樹のイチイガシ，コナラ属）の炭化した子葉64個（8.7g）が同定された他，最大径１cm の炭化材３個（0.1g），木材組織が確認されない，部位，種類共に不明の炭化物が微量（0.1g 未満）確認された。以下に，種実の形態的特徴等を記す。

イチイガシ（*Quercus gilva* Blume）ブナ科コナラ属アカガシ亜属

炭化した子葉の完形個体９個（3.0g），２枚からなる子葉に沿って割れた破片（半分）20個（3.3g），半分未満の破片29個（2.2g）が検出された。子葉は黒色を呈し，長さ1.1～1.5cm，径0.8～1.2cm 程度の楕円－広卵体。２枚からなる子葉は極端に不揃いで，合わせ目は球体表面を蛇行して一周する。幼根は頂端からずれた位置にある。表面には，１本の深い溝が基部から頂部に向かい2/3程度まで発達している。子葉は硬く緻密で，表面は縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で，正中線上は僅かに窪み，頂部には小さな孔（主根）がある。

岡本（1979）は，日本産ブナ科植物の子葉について，イチイガシには子葉の離れにくさ，著しい異形性，頂端が尖らず幼根の位置がずれている，中軸の圧痕が確認できるなどの特異性があることから，イチイガシのみが種まで同定できる場合があることを述べている。今回確認された58個は，これらの特徴を典型的に示していることから，イチイガシに同定されると判断した。なお，半分未満の破片６個（0.2g）にはイチイガシの特徴が明瞭に確認されないため，コナラ属（*Quercus*）にとどめているが，おそらくイチイガシに由来すると思われる。

４　考察

イチイガシは，湿潤，肥沃で深い土壌をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達する種で，現在は紀伊半島，四国，九州の山麓地に広く分布する。また，イチイガシの堅果はコナラ属の中でも渋みが少なく，アク抜きせずに生食可能で収量も多いため，遺跡からの出土例も多いとされる（渡辺，1975；岡本，1979など）。

渡畑遺跡の Y-2区28号土坑より出土したイチイガシを含むコナラ属の炭化子葉は，当時の本遺跡周辺域の照葉樹林から採取され，遺構内に持ち込まれた植物質食糧の残渣であることや，何らかの理由により火熱を受け炭化残存したことが推定される。

万之瀬川下流域の遺跡群では，渡畑遺跡のやや上流に位置し，右岸の自然堤防上に立地する上水流遺跡の縄文時代晩期～古墳時代と近・現代の地層の花粉分析結果より，シイ類やアカガシ亜属を主体にした照葉樹林の成立が推定されている（鹿児島県立埋蔵文化財センター，2007，2008，2009）。また，縄文時代前期とされているⅤ区Ⅵ層からは，食用可能なシイ属の炭化子葉がまとまって出土しており（鹿児島県立埋蔵文化財センター，2009），イチイガシと共にシイ属の子葉も利用されていたことが推定される。

引用文献

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

石川茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328p.

伊東隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81–181.

伊東隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所．66–176.

伊東隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83–201.

伊東隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30–166.

伊東隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47–216.

鹿児島県立埋蔵文化財センター，2007，上水流遺跡１－中小河川改修工事（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－．鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書113．鹿児島県立埋蔵文化財センター，354p.

鹿児島県立埋蔵文化財センター，2008，上水流遺跡２－中小河川改修工事（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－．鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書121．鹿児島県立埋蔵文化財センター，292p.

鹿児島県立埋蔵文化財センター，2009，上水流遺跡３－中小河川改修工事（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財

発掘調査報告書Ⅲ－．鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書136．鹿児島県立埋蔵文化財センター，273p.
中山至大・井之口希秀・南谷忠志，2000，日本植物種子図鑑．東北大学出版会，642p.
岡本素治，1979，遺跡から出土するイチイガシ．大阪市立自然史博物館業績，第230号，31–39.
島地　謙・伊東隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p.
渡辺　誠，1975，縄文時代の植物食．雄山閣出版，187p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編），1998，広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

※）本分析は，当社協力会社・パリノ・サーヴェイ株式会社にて実施した。

表46　渡畑遺跡の種実同定結果

分類群	部位	状態		Y－2区 28号土坑		備考
イチイガシ	子葉	完形	炭化	9個	3.0g	
		破片（半分）	炭化	20個	3.3g	
		破片（半分未満）	炭化	29個	2.2g	
コナラ属	子葉	破片	炭化	6個	0.2g	
不明炭化物		破片	炭化	－	<0.1g	
炭化材		破片	炭化	3個	0.1g	最大径1cm
分析残渣（炭化物含む土粒など）				－	1.8g	

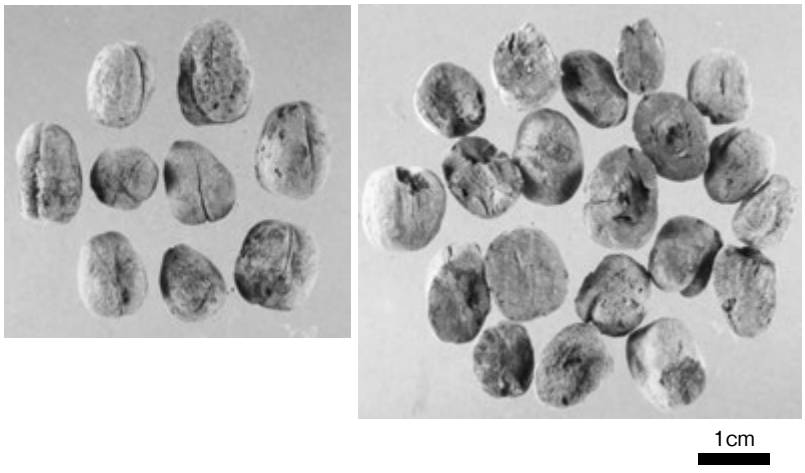


写真４　渡畑遺跡の種実遺体

第４節　出土製鉄・鍛冶・鋳造関連遺物の金属学的調査

１　供試材

表47に示す。製鉄・鍛冶・鋳造関連遺物計10点の調査を行った。

２　調査項目

(1) 肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を簡単に記載した。これらの記載をもとに分析試料採取位置を決定している。

(2) 顕微鏡組織

滓中に晶出する鉱物及び鉄部の調査を目的として，光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後，エメリー研磨紙の#150，#240，#320，#600，#1000，及びダイヤモンド粒子の3μと1μで順を追って研磨している。また金属鉄の腐食には３％ナイタル（硝酸アルコール液），酢酸・硝酸・アセトン混合液を用いた。

(3) EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

化学分析を行えない微量試料や，鉱物組織の微小域の組織同定を目的とする。

分析の原理は，真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し，発生する特性Ｘ線を分光後に画像化し，定性的な結果を得る。更に標準試料とＸ線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

(4) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe），金属鉄（Metallic Fe），酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C），硫黄（S），：燃焼容量法，燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素（SiO_2），酸化アルミニウム（Al_2O_3），酸化カルシウム（CaO），酸化マグネシウム（MgO），酸化カリウム（K_2O），酸化ナトリウム（Na_2O），酸化マンガン（MnO），二酸化チタン（TiO_2），酸化クロム（Cr_2O_3），五酸化燐（P_2O_5），バナジウム（V），銅（Cu），二酸化ジルコニウム（ZrO_2）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

３　調査結果

(1) WAH －1：炉壁（緑青付着）

ア　肉眼観察

熱影響を受けて，内面表層が若干ガラス質化した，24g 弱の小型炉壁片である。側面には不定形の緑青が複数溶着している。これらの粒は特殊金属探知機の H（○）で反応があり，少なくとも一部は金属が残存する。胎土部分は灰褐色で，小礫や籾殻を混和している。

イ　顕微鏡組織

写真５①～③に示す。①の淡橙色部は溶着金属，暗色部はガラス質滓および被熱胎土部分である。②③は溶着金属部の拡大で，酢酸・硝酸・アセトン混合液で腐食した組織を示す。素地部分は多角形結晶（Cu － Sn α相）である。また粒界には網目状の淡青色部（共析組織α＋δ相）が確認される。これは錫（Sn）の割合の高い相と推定される。さらに青灰色粒状の白鋺（Cu_2S）および酸化鉛（PbO）も点在する。これら各相の組成については EPMA 調査の項で詳述する。

ウ　EPMA 調査

写真５④に溶着金属部の反射電子像（COMP）を示す。分析点８は素地の多角形結晶の中央部で定量分析値は94.4% Cu －4.8% Sn，分析点９は多角形結晶の外周部で定量分析値は86.3% Cu －11.6% Sn －1.5% As である。ともに青銅（Cu － Sn α相）で，後者は微量砒素（As）を含む。さらに分析点10の淡青色（共析組織）部の定量分析値は66.8% Cu －30.7% Sn －2.2% Sb であった。青銅（α＋δ相）で，アンチモン（Sb）が含まれる。

また Photo.1⑤も溶着金属部の反射電子像（COMP）である。分析点11の粒状暗色部の定量分析値は86.3% Cu －9.8% O で酸化銅である。粒界部分は自然腐食（錆化）が進んでおり，この個所も廃棄後二次的に生じた可能性が高い。分析点12の微小明白色部の定量分析値は99.0% Ag －4.9% Cu と銀（Ag）主体の相であった。

さらにもう１視野，溶着金属部の調査を実施した。

写真６①に溶着金属部の反射電子像（COMP）を示す。分析点13の素地部分の定量分析値は91.1% Cu －7.8% Sn であった。やはり青銅（Cu － Sn 合金）である。また分析点15の不定形青灰色部の定量分析値は77.3% Cu －19.4% S であった。白鋺（Cu_2S）と同定される。さらに分析点17の微小明色部の定量分析値は70.2% Pb －5.0% Cu －9.5% S －15.2% O であった。鉛酸化物（PbO）で銅（Cu），硫黄（S）は周囲の影響を受けた可能性が高い。

当炉壁の溶着金属は鉛青銅（Cu － Sn － Pb 合金）である。また化学分析は実施していないが，上述したような錫（Sn）偏析がみられるため，錫（Sn）含有率はかなり高いと推定される。

(2) WAH －2：炉壁（緑青付着）

ア　肉眼観察

強い熱影響を受けて内面が黒色ガラス質滓化した，14g 弱の小型炉壁片である。内面には１か所，表面が緑青に覆われた楕円状の金属粒が溶着している。特殊金属探知機の H（○）で反応があり，内部に金属が残存する可能性が高い。胎土部分は橙色で，籾殻を多量に混和している。

イ　顕微鏡組織

写真６②～④に示す。②の淡橙色部は溶着金属で，鋳造組織を呈する。③④は金属部の拡大で，酢酸・硝酸・アセトン混合液で腐食した組織を示す。素地の淡橙色部は初晶（α相），縞状晶は共晶（α相）で，その内部に微細な淡青色部（δ相）が点在する。点状黒色部は鉛（Pb）の酸化物またはその脱落した痕跡，さらに粒界部に点在する粒状青灰色部は白鈹（Cu_2S）と推定される。

以上の調査結果から，当炉壁も前述した炉壁（WAH－1）と同様に，鉛青銅（Cu － Sn － Pb 合金）の溶解に用いられたものと判断される。炉壁厚みは両者近似しており，礫投入の差があるものの同系であろうか。

(3) WAH －3：椀形鍛冶滓

ア　肉眼観察

平面不整五角形状で，336g とやや大型の椀形鍛冶滓の破片と推測される。上下面は本来の表面で側面は５面全面破面である。滓の色調は黒灰色で，上面の外周部には小型の木炭痕が複数残る。下面には全体に薄く灰褐色の鍛冶炉床土が固着する。破面には中小の気孔が散在するが，緻密で重量感のある滓である。

イ　顕微鏡組織

写真７①～③に示す。滓中には白色粒状結晶ウスタイト（Wustite：FeO），淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite：$2FeO{\cdot}SiO_2$）が晶出する。高温沸し鍛錬鍛冶滓の晶癖である。また②③の中央は微小金属鉄粒である。3%ナイタルで腐食したところ，②は亜共析組織（C＜0.77%），③はほとんど炭素を含まないフェライト（Ferrite：α鉄）単相の組織が確認された。

ウ　化学組成分析

表48に示す。全鉄分（Total Fe）49.37%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.16%，酸化第1鉄（FeO）52.59%，酸化第2鉄（Fe_2O_3）11.91%の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3+ CaO + MgO + K_2O + Na_2O）は32.29%で，このうち塩基性成分（CaO + MgO）は5.10%である。また製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.24%，バナジウム（V）が0.16%と低値であった。酸化マンガン（MnO）は0.29%，銅（Cu）は＜0.01%と低い。さらに五酸化燐（P_2O_5）は0.44%と高めであった。

当鉄滓は砂鉄起源の脈石成分（TiO_2，V）の低減傾向が著しく，熱間で鉄器を鍛打加工した際に生じた高温沸し鍛錬鍛冶滓に分類される。また五酸化燐（P_2O_5）の高値傾向がみられるため，南九州地域に分布する五酸化燐（P_2O_5）含有率の高い砂鉄が始発原料であった可能性が高い。

(4) WAH －4：炉壁片

ア　肉眼観察

強い熱影響を受けて内面が黒色ガラス質滓化した，107g 弱のやや小型の炉壁片である。側面は全面破面で，一部では黒色ガラス質層が２面確認されるため，内面を補修して繰り返し使用されたものと判断される。また内面表層には着磁性を持つ付着物が部分的に確認される。胎土部分は灰褐色～橙色で，小礫やごく短いスサが多量に混和されている。

イ　顕微鏡組織

写真７④～⑥に示す。④中央下寄りの暗色部は被熱した炉壁胎土である。内部に点在する白色粒は，胎土中に含まれる砂鉄粒子である。またその上下はガラス質滓で，肉眼観察の項で述べた補修痕跡が確認される。⑤⑥は内面表層側のガラス質滓の拡大である。⑥の中央は非常に微細な金属粒で，橙色の色調から銅（Cu）または銅合金と推測される。また⑤の表層のごく微細な灰褐色の付着物はマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）と推定される。銅地金中の不純物の鉄（Fe）分が，加熱溶解に伴って酸化したものの可能性が考えられる。ただし炉壁胎土中の砂鉄の影響も考慮する必要があろう。

以上の調査結果から，当炉壁は炉壁（WAH －1・2）と同様に青銅鋳物の鋳造に用いられた炉壁片と推測される。

(5) WAH －5：鍛冶滓

ア　肉眼観察

18.5g とごく小型で不定形の鉄滓である。滓の色調は黒灰色で，表面は流動状を呈する。また気孔はごく僅かで緻密であるが，やや軽い質感の滓である。外観からは製錬滓（流動滓）または鍛冶滓双方の可能性が考えられる。

イ　顕微鏡組織

写真８①～③に示す。微細な茶褐色多角形結晶はウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO{\cdot}TiO_2$）とヘイシナイト（Hercynite：$FeO{\cdot}Al_2O_3$）を主な端成分とする固溶体と推測される。さらにごく微細な白色樹枝状結晶ウスタイト，発達した淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓で，最も一般的な鉱物組成といえる。

ウ　化学組成分析

表48に示す。全鉄分（Total Fe）43.59%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.15%，酸化第1鉄（FeO）52.74%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）3.50%の割合であった。ガラス質成分（SiO_2+ Al_2O_3+ CaO + MgO + K_2O + Na_2O）40.61%と高値であるが，塩基性成分（CaO + MgO）は2.93%と低めであった。また製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は1.70%，バナジウム（V）が0.05%と若干

高めであった。さらに酸化マンガン（MnO）は0.15%，銅（Cu）は<0.01%と低値である。五酸化燐（P_2O_5）は0.47%と高めであった。

当鉄滓には砂鉄起源の脈石成分（TiO_2，V）の影響が確認された。この特徴から鍛冶原料の不純物除去に伴う精錬鍛冶作業末期の反応副生物と推定される。また五酸化燐（P_2O_5）が高値傾向を示すことから，始発原料はやはり地域に分布する砂鉄であった可能性が高い。

(6) WAH －6：黒鉛化木炭

ア　肉眼観察

表面の大半が茶褐色の土砂で覆われた，18g 弱と小型の木炭破片である。木炭に鉄が置換した遺物を黒鉛化木炭と称する。一部は木炭組織（板目面）が露出する。着磁性はやや強いが，特殊金属探知機での反応はなく，金属部は残存しないと考えられる。

イ　顕微鏡組織

写真８④～⑥に示す。④の黒色部は木炭破片で木口面が観察される。⑤はその拡大である。導管が放射方向に並んでおり，広葉樹の放射孔材と判断される。

また表面側の青灰色部は錆化鉄で，⑥はその拡大である。黒色片状の黒鉛（C：Graphite）が残存しており，ねずみ鋳鉄である。

以上の断面観察結果から，木炭部分は広葉樹放射孔材で，表面にねずみ鋳鉄が溶着することが明らかとなった。

(7) WAH －7：流動滓

ア　肉眼観察

いわゆる「鳥の足」状の流動滓の破片で，重量は408g を測る。上面には上方から堆積した流動状の痕跡が顕著に残る。また下面側には着磁性の高い被熱砂鉄が広範囲に付着する。製鉄炉前に砂鉄が薄く降り積もった上に，排出された滓が堆積した可能性が高い。緻密で重量感のある滓である。

イ　顕微鏡組織

写真９①～③に示す。①は流動滓の重層部分の拡大である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出しており，砂鉄製錬滓の晶癖である。なお②③では微細な白色粒状結晶ウスタイトも若干晶出している。また②③中央の微細な明白色部は金属鉄で，3%ナイタルで腐食したところ，ほとんど炭素を含まないフェライト単相の組織が確認された。

ウ　化学組成分析

表48に示す。全鉄分（Total Fe）46.67%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.31%，酸化第1鉄（FeO）50.37%，酸化第2鉄（Fe_2O_3）10.31%の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3+ CaO + MgO + K_2O + Na_2O）20.47%で，このうち塩基性成分（CaO + MgO）は5.55%であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は16.39%，バナジウム（V）も0.23%と高値傾向が顕著である。酸化マンガン（MnO）も0.79%と高めで，銅（Cu）は<0.01%と低値であった。また五酸化燐（P_2O_5）は0.76%と高値傾向を示す。

当鉄滓は砂鉄起源の脈石成分（TiO_2，V）の高値傾向が顕著であり，製錬滓に分類される。また五酸化燐（P_2O_5）も高めであり，やはり南九州地域に分布する砂鉄が製鉄原料であった。

(8) WAH －8：椀形鍛冶滓

ア　肉眼観察

362g 弱と大型で完形の椀形鍛冶滓である。上面端部に１か所黒色ガラス質部分があり，羽口先端溶融物と推測される。また上面は広い範囲で茶褐色の鉄錆化物が固着しているが，着磁性は弱く特殊金属探知機での反応もない。下面は細かい木炭痕による凹凸が著しく，やや軽い質感の滓である。

イ　顕微鏡組織

写真９④～⑥に示す。滓中には淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また滓中の青灰色部は錆化鉄である。金属組織痕跡は不明瞭で，炭素含有量等を推定する手がかりは得られなかった。

当鉄滓はファヤライト（Fayalite：$2FeO{\cdot}SiO_2$）組成で，ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO{\cdot}TiO_2$）など砂鉄（含チタン鉄鉱）に起因する鉄チタン酸化物が全く確認されないことから，熱間で鉄器を鍛打加工した際に生じた鍛錬鍛冶滓に分類される。またファヤライトの単独晶出鉱物相は，加熱時の目減り防止に粘土汁などを塗布した鍛冶原料鉄の半製品（棒・板状）を，低温で素延べした時に排出された可能性が高い。

(9) WAH －9：椀形鍛冶滓

ア　肉眼観察

厚手でほぼ完形の470g を測る二段椀形鍛冶滓である。表面は広い範囲で茶褐色の鉄錆化物に覆われる。特殊金属探知機での反応はないが，上端側面よりに一部着磁性の高い個所があり，内部に錆化鉄を含む可能性がある。また滓部は上下段とも，細かい木炭痕による凹凸が著しい。

イ　顕微鏡組織

写真10①～③に示す。①上面端部の錆化鉄部を中心に観察したが，内部にまとまった鉄部はみられなかった。ただし滓中に散在する微細な錆化鉄部には，一部亜共析組織の痕跡が残存する。②はその拡大である。また③は滓部の拡大で，発達した白色粒状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。さらにウスタイト

粒内のごく微細な茶褐色結晶はウルボスピネルとヘイシナイトを主な端成分とする固溶体と推定される。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

ウ　化学組成分析

表48に示す。全鉄分（Total Fe）58.28%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.18%，酸化第1鉄（FeO）55.97%，酸化第2鉄（Fe_2O_3）20.87%の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3+ CaO + MgO + K_2O + Na_2O）は15.59%と低めで，このうち塩基性成分（CaO + MgO）は2.05%であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は4.22%，バナジウム（V）は0.10%であった。また酸化マンガン（MnO）は0.18%，銅（Cu）＜0.01%と低値であった。さらに五酸化燐（P_2O_5）は0.51%と高めである。

当鉄滓は砂鉄起源の脈石成分（TiO_2，V）の影響が確認された。鍛冶原料の不純物除去に伴う精錬鍛冶作業での反応副生物である。また五酸化燐（P_2O_5）が高値傾向を示すことから，始発原料はやはり地域に分布する砂鉄であった可能性が高い。

(10) WAH －10：炉壁

ア　肉眼観察

16mm とごく薄手で，36g の小型炉壁片である。内面は熱影響を受けて薄くガラス質化している。またその表層は，風化の影響か全体に白みがかっており，気孔が密に分布する。さらに茶褐色の錆に覆われた，微細な溶着金属粒が多数確認される。これらは比較的着磁性が強く，特殊金属探知機の H(◯)の反応から，内部に金属が残存する可能性がある。胎土部分は砂質で，炉壁（WAH －1・2・4）とはかなり質感が異なる。

イ　顕微鏡組織

写真10④～⑥に示す。明灰色粒は金属鉄またはその錆化物，周囲の暗色部は炉壁胎土が溶融して生じたガラス質滓である。⑤⑥は金属鉄（錆化鉄）の拡大で，3%ナイタルで腐食した組織を示す。全面に片状黒鉛が分布する，ねずみ鋳鉄であった。また⑥中央の黒色点状の共晶組織はステダイト（Steadite：Fe － Fe_3C － Fe_3P）で，燐（P）の偏析がみられる。

当炉壁の溶着金属は炉壁（WAH －1・2・4）とは異なり，ねずみ鋳鉄であった。

4　まとめ

渡畑遺跡は17～18世紀代の製鉄・鍛冶及び鋳造関連の生産遺跡であった。以下に明らかとなった内容を記述する。

(1) 製鉄・鍛冶関連遺物

ア　分析１

分析調査を実施した鉄滓のうち１点（WAH －7）は，高チタン（TiO_2）砂鉄を原料とした製錬滓に分類される。また燐（P_2O_5）の高値傾向も確認されており，南九州地域に分布する火山噴出物の斑晶鉱物起源の砂鉄の特徴を反映している。

また製錬滓としては鉄分（Total Fe）が高めである。Fig.1に示すように，これは鹿児島県下の出土製錬滓に広く共通する特徴であり，高燐砂鉄を製鉄原料としていることと関連があると推察される（注１）。

イ　分析２

分析調査を実施した鉄滓のうち２点は精錬鍛冶滓（WAH －5・9），残る２点は鍛錬鍛冶滓（WAH －3・8）に分類される。さらに鍛錬鍛冶滓は鉱物相の違いから，高温沸し鍛接滓（WAH －3），低温素延べ滓（WAH －8）の二工程の流れが想定できた。遺跡内で鍛冶原料（製錬鉄塊系遺物）の不純物除去から，熱間での鍛打作業までの連続操業を示す遺物といえる。これら鍛冶滓も五酸化燐（P_2O_5）の高値傾向がみられるため，やはり地域の砂鉄を始発原料とする鉄材を加工したと考えられる。

(2) 鋳造関連遺物

ア　分析１

炉壁（WAH －1・2・4）は青銅鋳物の溶解に用いられた炉壁の破片と推定される。

炉壁（WAH －1）の溶着金属は錫（Sn）含有率の高い鉛青銅であった。また国産と推定される銅（青銅）製品でしばしば高値傾向を示す砒素（As），鉄（Fe）の影響はきわめて少ない。高品位の鉛青銅といえる。ただし炉壁（WAH －4）には，銅地金中の不純物の鉄の存在を示唆する酸化物がみられる。

イ　分析２

炉壁（WAH －10），黒鉛化木炭（WAH －6）表層の両方にねずみ鋳鉄組織が観察された。このことから，当遺跡で青銅鋳物とともに鉄鋳物も製作されていた可能性もあるが，①当遺跡では上述したような鋳銅関連遺物が集中する個所から，これらの炉壁や黒鉛化木炭も出土している。②鉄鋳物の鋳造を直接証明するような遺物も出土していない。③薩摩半島側には酸化銅鉱の鉱床が存在する等から，粗銅の精錬時に金属銅と鉄が混在した関連遺物が生じた可能性も考えられる（注２・３）。

（注１）Fig.1の鹿児島県下の出土製鉄関連遺物の分析データは，以下の文献より引用した。

①中山光夫・上田耕「小坂ノ上遺跡出土の古代の蔵骨器と埋納鉄滓について」『ミュージアム知覧紀要第１号』1995

②大澤正己・鈴木瑞穂「宝満製鉄遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『宝満製鉄遺跡』鹿児島県曽於郡志布志町教育委員会　2004

③大澤正己「上加世田遺跡出土製鉄一貫体制遺物と鋳

銅遺物の金属学的調査」『上加世田遺跡１』加世田市教育委員会　1985

④大澤正己・鈴木瑞穂「一ツ木遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『一ツ木地区（A・B）遺跡』鹿児島県宮之城町教育委員会　2001

⑤大澤正己・鈴木瑞穂「古原遺跡出土鉄滓・青銅製品の金属学的調査」『古原遺跡』さつま川内市教育委員会　2005年度分析調査実施

⑥大澤正己・鈴木瑞穂「厚地松山遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『厚地松山製鉄遺跡』鹿児島県知覧町教育委員会　2000

⑦大澤正己・鈴木瑞穂「中原鉄生産関連（前畑西）遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『中原鉄生産関連遺跡（前畑西）遺跡』鹿児島県知覧町教育委員会2007

⑧大澤正己・鈴木瑞穂「上水流遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『上水流遺跡４』鹿児島県立埋蔵文化財センター　2010

⑨鈴木瑞穂「南九州地域の中世～近世の製鉄技術について」『鉄の歴史－その技術と文化－フォーラム第12回公開研究発表会論文集』（社）日本鉄鋼協会　社会鉄鋼工学部会「鉄の歴史－その技術と文化－」フォーラム　2009

（注２）銅鋳造に際しての鉄の存在は，以下の報告等で述べている。

①大澤正己「古代銅製錬復元実験から確認できた銅・鉄共存の様相～長登遺跡出土８世紀前半含金属スラグとの比較検討～」『古代銅製錬復元実験報告書』美東町教育委員会　2008

②大道和人・大澤正己「滋賀県甲賀市鍛冶屋敷遺跡の調査～“鉄”をめぐる解釈について～」『鋳造遺跡研究資料2005』鋳造遺跡研究会　2005

③大澤正己・鈴木瑞穂「鍛冶屋敷遺跡出土遺物の金属学的調査」『鍛冶屋敷遺跡』滋賀県教育委員会　2006

（注３）上床真・大澤正己「第７章９節　上水流遺跡ほかの金属生産遺物について」『上水流遺跡４』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第150鹿児島県埋蔵文化財センター　2010

2008.8.25・26両日に上床氏と大澤で渡畑遺跡から出土した銅鋳造関連遺物を分類したところ，銅鋳造は１～８，Ｕ～Ｚ区に特定できた。今回分析調査の炉壁や黒鉛化木炭はこの範囲に収まる。当区画内では鉄鋳造に関する遺物は認められなかった。因に鋳銅関連遺物は以下に示す７種である。

１　緑青吹き炉壁片。
２　白色ガラス付着炉壁。
３　大口径羽口。
４　粘土（炉壁，羽口先端）溶融ガラス質滓。
５　湯こぼれ屑銅。
６　黒鉛化木炭（木炭に鉄が置換）。
７　土器片転用ドロス掻き出し具（ドロス：銅溶融面上 を漂う軽質スラグ）。

九州テクノリサーチ・TAC センター
大澤正己・鈴木瑞穂

表47　供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目								備考
					大きさ（mm）	重量（g）		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー	
WAH-1	渡畑	U1・2表層一括	炉壁（緑青付着）	17～18c	42×31×18	23.6	H（○）		○			○				
WAH-2		U2表層一括	炉壁（緑青付着）		36×20×21	13.8	H（○）		○							
WAH-3		V2一括	椀形鍛冶滓		80×63×43	335.7	なし		○				○			
WAH-4		V2表層一括	炉壁（補修）		78×68×24	106.6	なし		○							
WAH-5		X8一括	鍛冶滓		45×22×19	18.5	なし		○				○			
WAH-6		Y3Ⅱ層一括	黒鉛化木炭		56×36×15	17.7	なし		○							
WAH-7		Y7大溝1991	製錬滓（流動滓）		10×74×42	407.5	なし		○				○			
WAH-8		―	椀形鍛冶滓		108×113×50	361.5	なし		○							
WAH-9		―	椀形鍛冶滓（二段）		90×78×68	469.8	なし		○				○			
WAH-10		Y・Z－18·19表層一括	炉壁（内面白色、褐色錆付着）		50×43×16	35.6	H（○）		○							

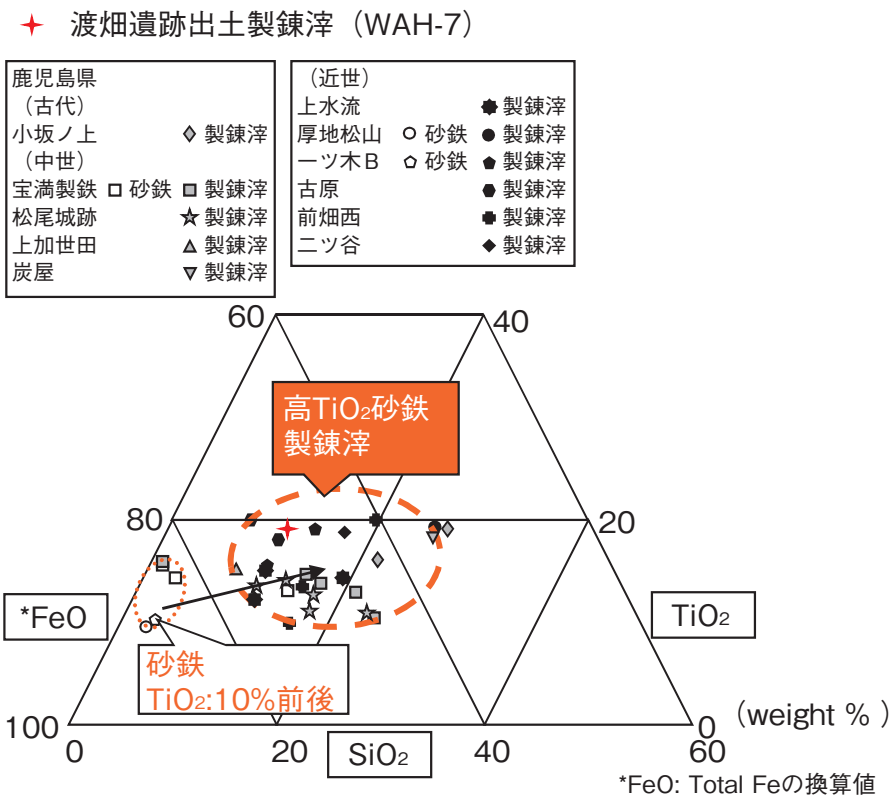
表48　供試材の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分（Total Fe）	金属鉄（Metallic Fe）	酸化第1鉄（FeO）	酸化第2鉄（Fe_2O_3）	二酸化珪素（SiO_2）	酸化アルミニウム（Al_2O_3）	酸化カルシウム（CaO）	酸化マグネシウム（MgO）	酸化カリウム（K_2O）	酸化ナトリウム（Na_2O）	酸化マンガン（MnO）	二酸化チタン（TiO_2）	酸化クロム（Cr_2O_3）	硫黄（S）	五酸化燐（P_2O_5）	炭素（C）	バナジウム（V）	銅（Cu）	二酸化ジルコニウム（ZrO_2）	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO_2 Total Fe	注
WAH-3	渡畑	V2一括	椀形鍛冶滓	17～18c	49.37	0.16	52.59	11.91	18.83	4.90	3.84	1.26	2.85	0.61	0.29	0.24	0.02	0.11	0.44	0.03	0.16	<0.01	<0.01	32.29	0.654	0.005	
WAH-5		X8一括	鍛冶滓		43.59	0.15	52.74	3.50	28.14	6.90	2.04	0.89	1.92	0.72	0.15	1.70	0.03	0.02	0.47	0.03	0.05	<0.01	<0.01	40.61	0.932	0.039	
WAH-7		Y7大溝1991	製錬滓（流動滓）		46.67	0.31	50.37	10.31	10.34	3.44	3.07	2.48	0.86	0.28	0.79	16.39	0.03	0.08	0.76	0.01	0.23	<0.01	0.08	20.47	0.439	0.351	
WAH-9			椀形鍛冶滓（二段）		58.28	0.18	55.97	20.87	10.59	2.62	1.10	0.95	0.20	0.13	0.18	4.22	0.02	0.04	0.51	0.05	0.10	<0.01	0.01	15.59	0.268	0.072	

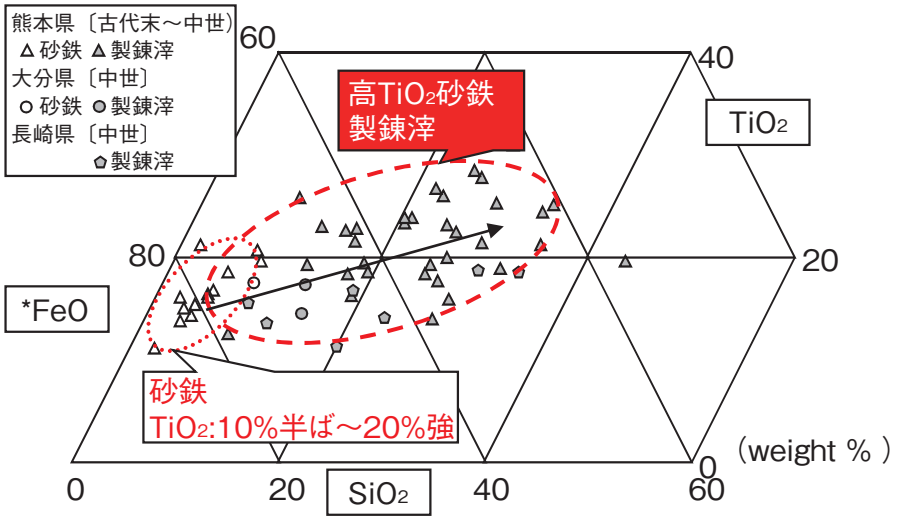
表49　出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成（%）								所見
						Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	造滓成分	Cu	
WAH-1	渡畑	U1・2表層一括	炉壁（緑青付着）	17～18c	溶着金属：鉛青銅（白鈹点在）、ガラス質滓～被熱胎土	―	―	―	―	―	―	―	―	鉛入り青銅鋳物鋳造に用いられた炉壁破片
WAH-2		U2表層一括	炉壁（緑青付着）		溶着金属：鉛青銅（白鈹点在）、ガラス質滓	―	―	―	―	―	―	―	―	鉛入り青銅鋳物鋳造に用いられた炉壁破片
WAH-3		V2一括	椀形鍛冶滓		滓部：W +F、微小金属鉄粒：フェライト単相～亜共析組織	49.37	11.91	5.10	0.24	0.16	0.29	32.29	<0.01	高温沸し鍛錬鍛冶滓（始発原料：南九州地域に分布する火山噴出物起源の高燐砂鉄）
WAH-4		V2表層一括	炉壁（補修）		微小銅（または銅合金）粒、表層：微細Mガラス質滓～被熱胎土～ガラス質滓（補修痕跡）	―	―	―	―	―	―	―	―	青銅鋳物鋳造に用いられた炉壁破片の可能性が高い
WAH-5		X8一括	鍛冶滓		滓部：W+UとHの固溶体 +F、微小金属鉄粒：フェライト単相～亜共析組織	43.59	3.50	2.93	1.70	0.05	0.15	40.61	<0.01	精錬鍛冶末期の反応副生物（始発原料：南九州地域に分布する火山噴出物起源の高燐砂鉄）
WAH-6		Y3Ⅱ層一括	黒鉛化木炭		木炭：広葉樹放射孔材、錆化鉄部：ねずみ鋳鉄	―	―	―	―	―	―	―	―	鋳銅関連鋳物との共伴関係等から、粗銅溶解時、鉄成分が析出したものとの解釈も出来るが、鉄鋳物の鋳造に伴う遺物の可能性もある
WAH-7		Y7大溝1991	製錬滓（流動滓）		滓部：U+W+F、微小金属鉄部：フェライト単相	46.67	10.31	5.55	16.39	0.23	0.79	20.47	<0.01	製錬滓（原料：南九州地域に分布する火山噴出物起源の高燐砂鉄）
WAH-8		―	椀形鍛冶滓		滓部：F、錆化鉄部：金属組織痕跡不明瞭	―	―	―	―	―	―	―	―	低温素延べ鍛錬鍛冶滓
WAH-9		―	椀形鍛冶滓（二段）		滓部：W（粒内微細UとHの固溶体）+F、錆化鉄部：亜共析組織痕跡	58.28	20.87	2.05	4.22	0.10	0.18	15.59	<0.01	精錬鍛冶滓（始発原料：南九州地域に分布する火山噴出物起源の高燐砂鉄）
WAH-10		Y・Z－18·19表層一括	炉壁（内面白色、褐色錆付着）		溶着金属：ねずみ鋳鉄（ステダイト）、ガラス質滓	―	―	―	―	―	―	―	―	鋳銅関連鋳物との共伴関係等から、粗銅溶解時、鉄成分が析出したものとの解釈も出来るが、鉄鋳物の鋳造用の炉壁の可能性もある

W: Wustite（FeO）、F: Fayalite（$2FeO·SiO_2$）、U: Ulvöspinel（$2FeO·TiO_2$）、M: Magnetite（Fe_3O_4）、H: Hercynite（$FeO·Al_2O_3$）



第147図　鹿児島県下の製鉄遺跡出土砂鉄・製錬滓の化学組成

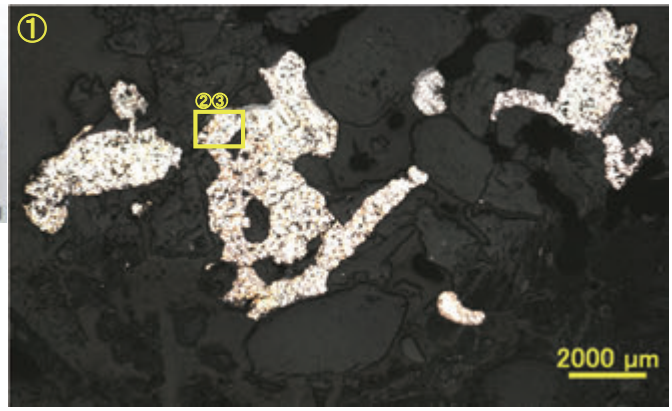


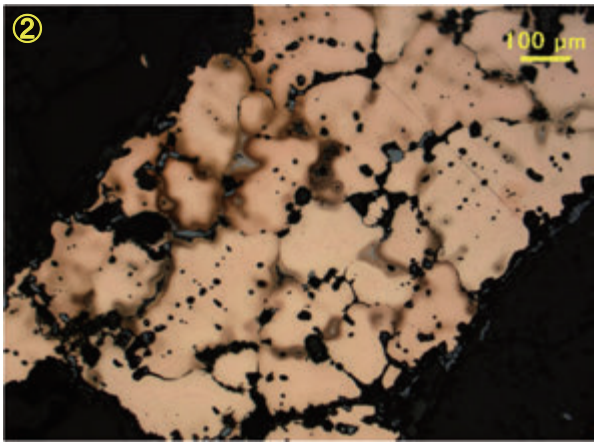
第148図　中九州地域の製鉄遺跡（竪形炉）出土砂鉄・製錬滓の化学組成

WAH-1 炉壁

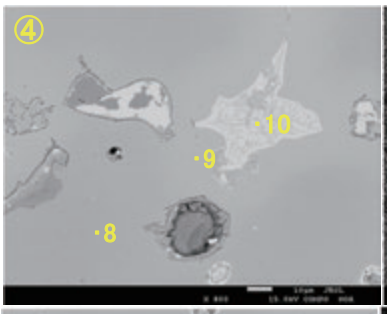
①淡橙色部:溶着金属、酢酸·硝酸·アセトンetch
暗色部:ガラス質滓～被熱炉壁胎土
②③溶着金属部拡大、鉛青銅(Cu-Sn-Pb合金)
粒界部分:白鋺(Cu$_2$S)点在

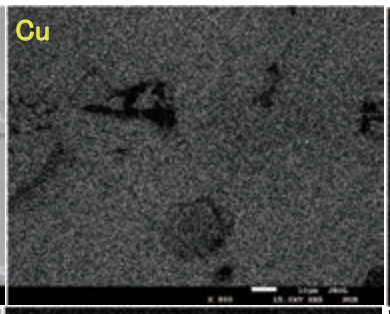


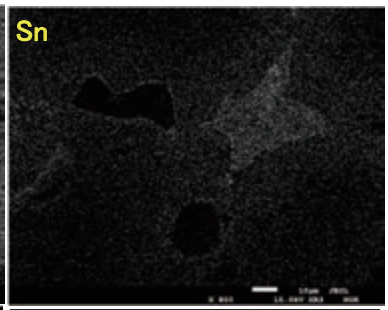


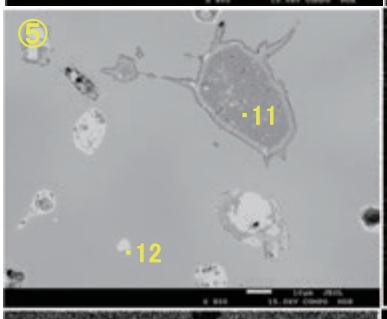


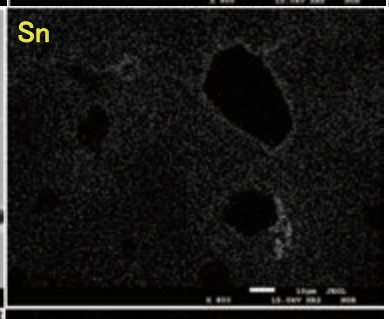


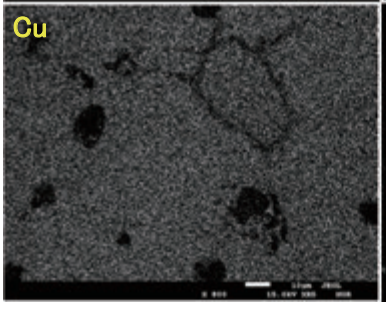












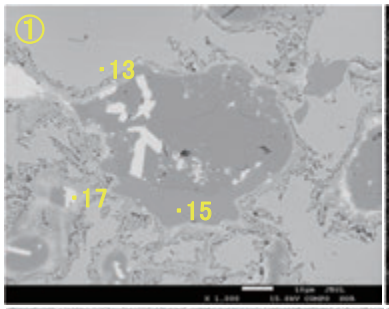


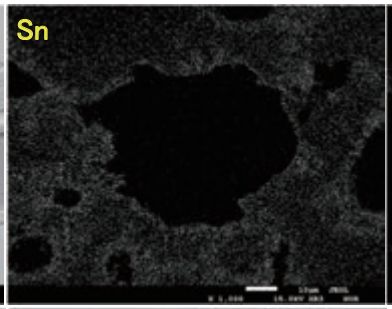
溶着金属の反射電子像
(COMP)　および特性X線像

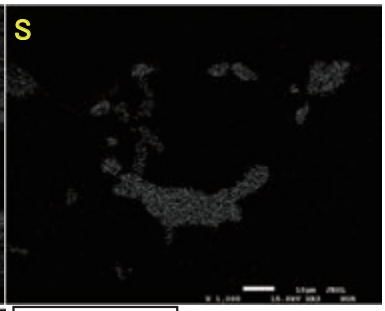
定量分析値

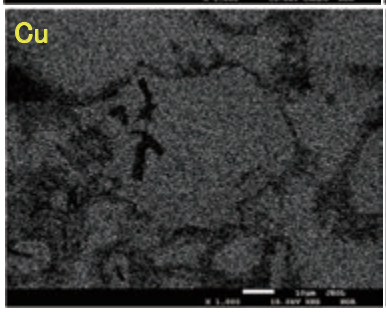
Element	8	9	10	11	12
O	0.148	0.223	0.228	9.756	0.126
Si	–	0.023	0.117	0.006	–
Ca	0.038	0.470	0.236	–	–
Sb	0.604	0.971	2.163	0.530	0.706
Sn	4.778	11.634	30.653	0.521	0.804
Pb	0.171	0.123	0.231	0.317	0.374
S	–	0.019	–	–	0.017
Al	0.025	–	0.005	0.045	0.462
As	0.357	1.543	0.517	–	–
Ag	0.021	0.127	0.906	0.068	99.009
Bi	–	0.003	–	0.359	–
Zn	0.117	0.154	0.069	0.064	0.002
Cu	94.392	86.289	66.820	86.295	4.931
Fe	0.036	–	0.015	–	0.017
Mn	–	–	0.025	0.015	–
Ce	0.047	–	0.112	0.033	0.064
Total	100.734	101.579	102.097	98.009	106.512

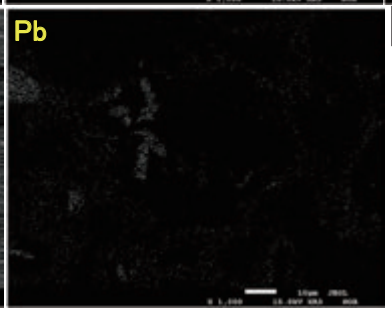
写真５　炉壁の顕微鏡組織・EPMA 調査結果（１）











溶着金属（WAH-1）の反射電子像（COMP）および特性X線像

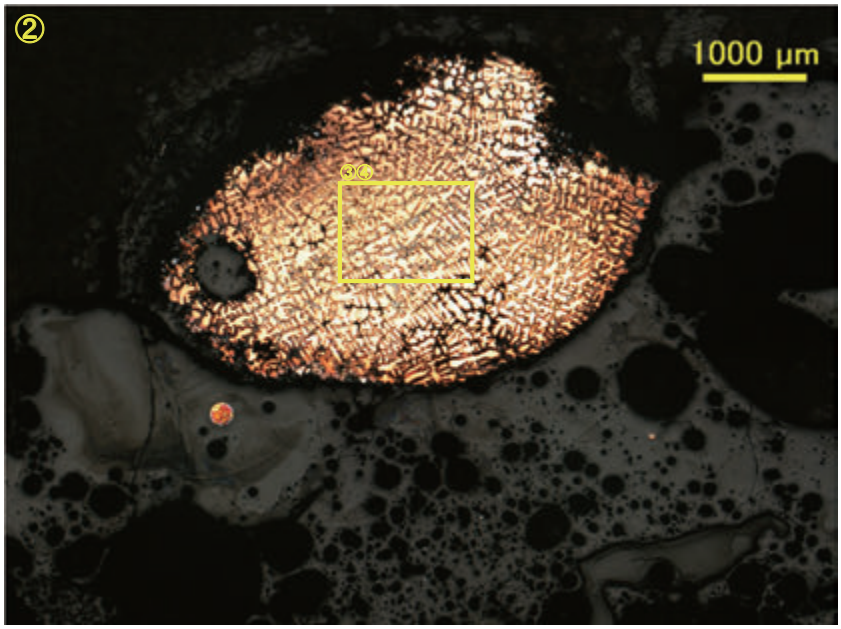
定量分析値

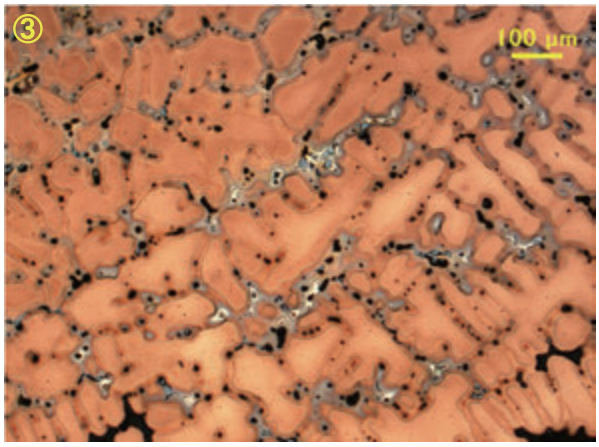
Element	13	15	17
O	0.230	0.113	15.266
Si	0.029	–	–
Ca	0.353	–	–
Sb	0.698	0.514	0.705
Sn	7.837	0.543	0.824
Pb	0.150	–	70.214
S	0.006	19.431	9.466
Al	–	0.003	–
As	0.418	–	–
Ag	0.112	0.036	–
Bi	–	0.027	–
Zn	0.196	0.168	–
Cu	91.129	77.340	4.979
Fe	–	0.006	0.009
Mn	–	–	–
Ce	0.073	0.022	0.089
Total	101.231	98.203	101.552

WAH-2　炉壁

②橙色粒:溶着金属、鋳造組織、酢酸·硝酸·アセトンetch、暗色部:ガラス質滓
③④溶着金属拡大、
鉛青銅（Cu−Sn−Pb合金）か、粒界部分:白鍍（Cu_2S）点在







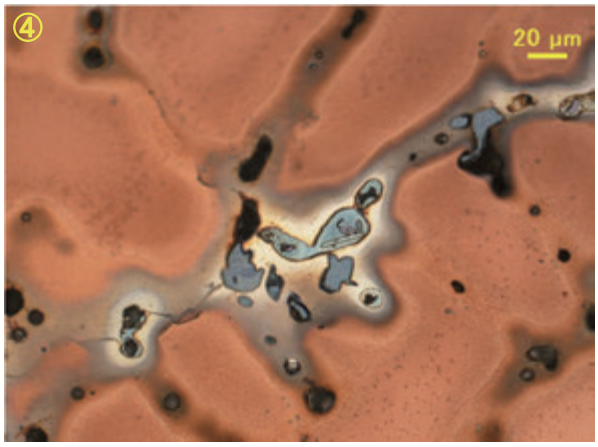
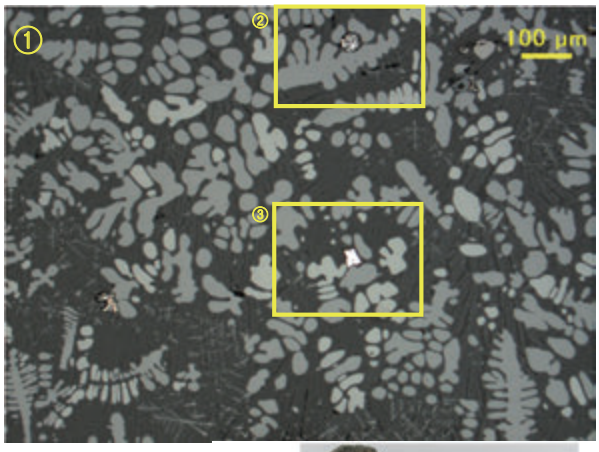
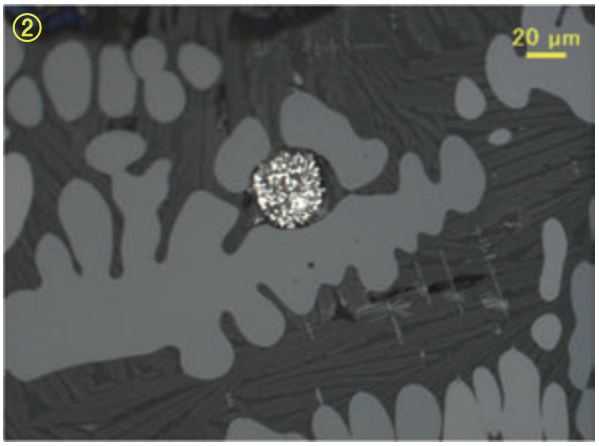


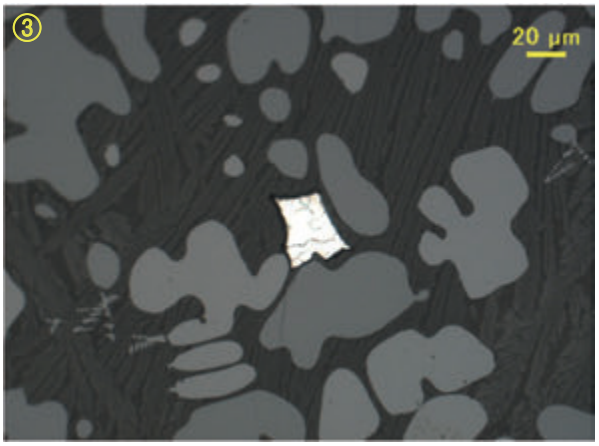
写真６　炉壁の顕微鏡組織・EPMA 調査結果（２）

WAH-3
椀形鍛冶滓
①滓部:ウスタイト・ファヤライト、微小金属鉄粒散在
②③中央部:微小金属鉄粒拡大、ナイタルetch
②亜共析組織拡大
③フェライト単相組織拡大



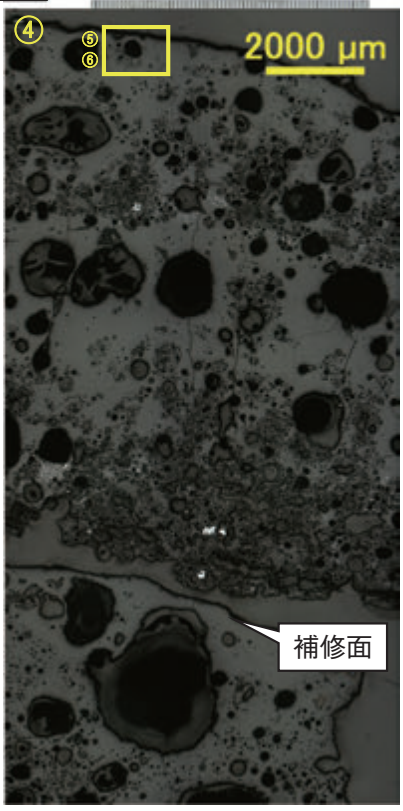


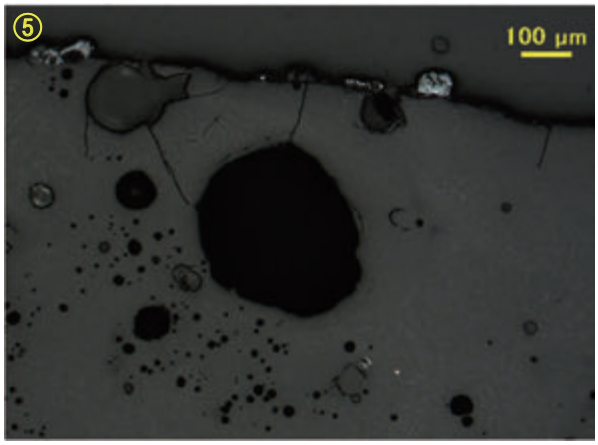




WAH-4 炉壁
④断面ガラス質滓2面確認:補修痕跡
⑤⑥ガラス質滓(内面表層部)拡大、⑥中央:微細銅(または青銅)粒







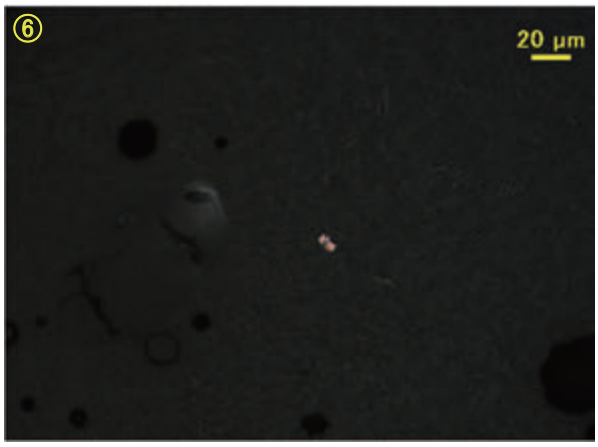
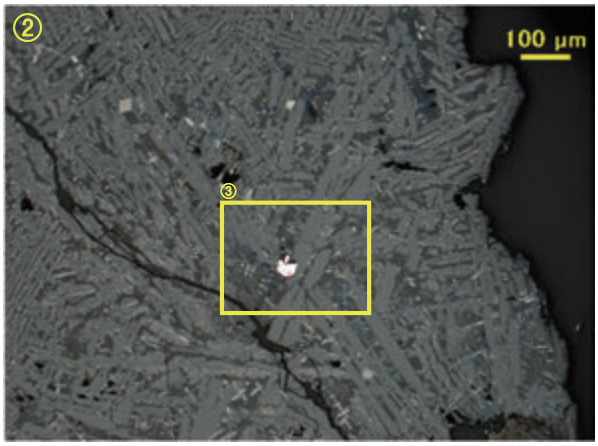


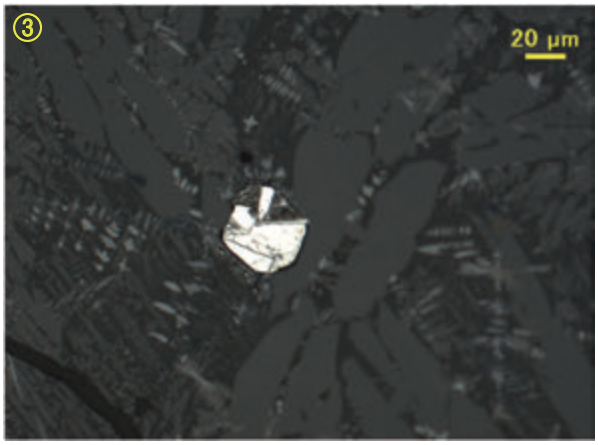
写真７　椀形鍛冶滓・炉壁の顕微鏡組織

WAH-5 鍛冶滓
①～③滓部:微小ウスタイト・ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体・ファヤライト、中央:微小金属鉄粒、ナイタルetch ①フェライト単相、②③亜共析組織



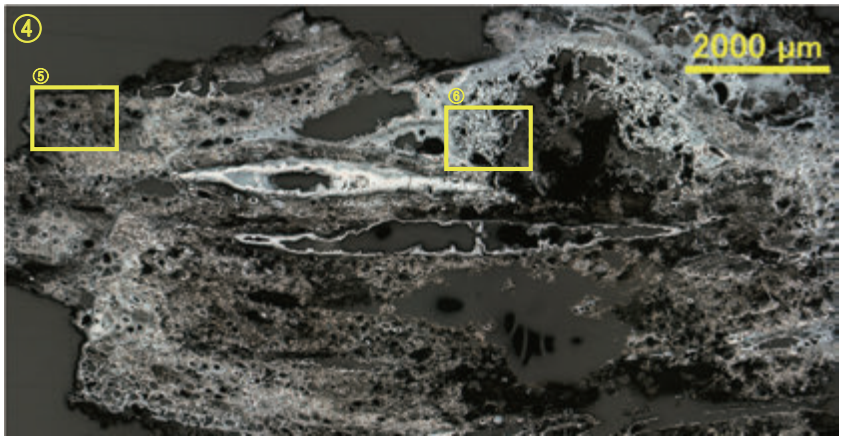


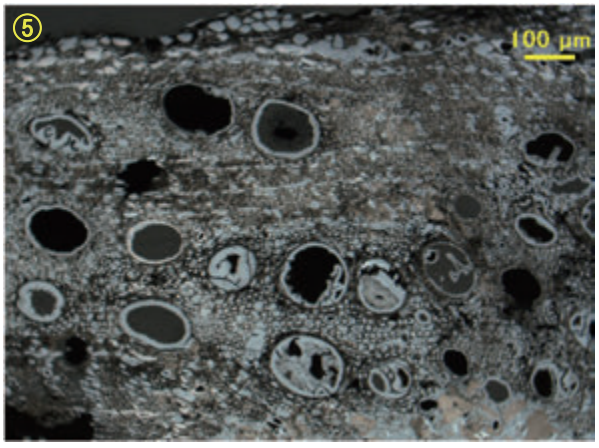




WAH-6
黒鉛化木炭
④上側青灰色部:錆化鉄、下側:木炭木口面
⑤木炭組織拡大、広葉樹放射孔材
⑥錆化鉄部拡大、ねずみ鋳鉄組織痕跡







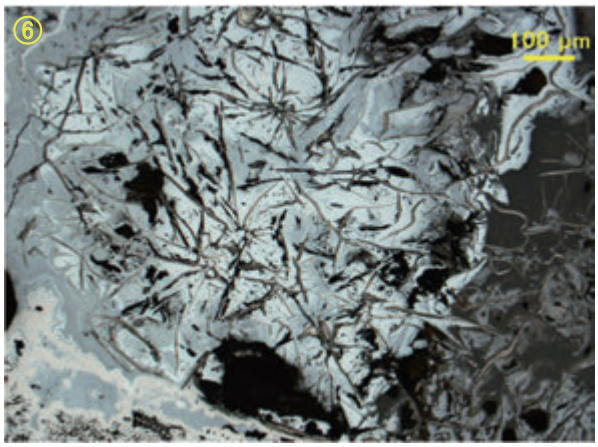
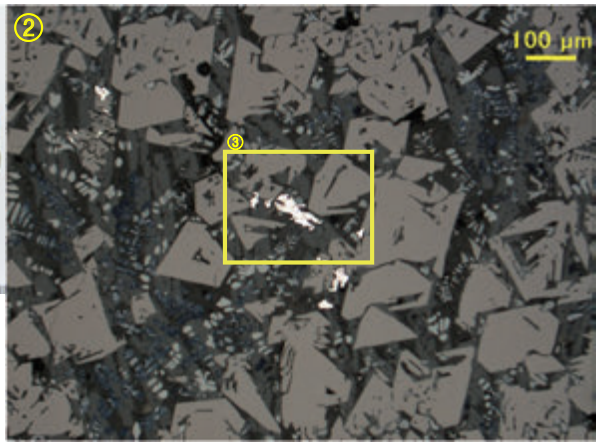
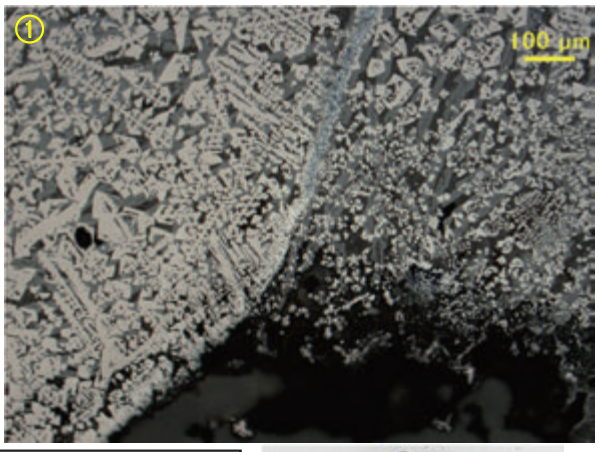


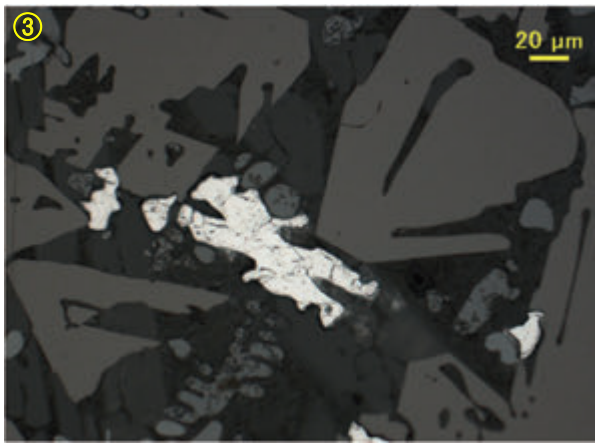
写真８　鍛冶滓・黒鉛化木炭の顕微鏡組織

WAH-7
製錬滓（流動滓）
①中央:流動滓溶着面
滓部:ウルボスピネル･ファヤライト
②③滓部:ウルボスピネル･ウスタイト･ファヤライト、中央:微小金属鉄粒、ナイタルetch フェライト単相



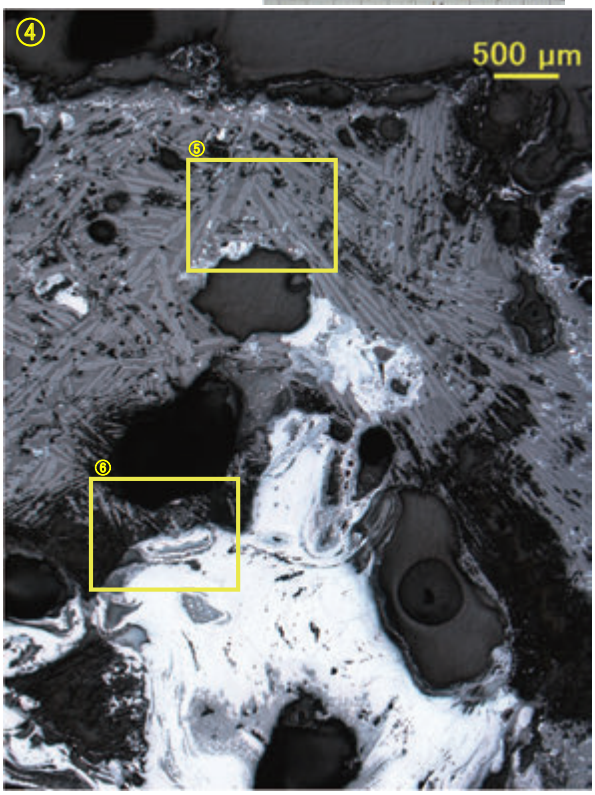


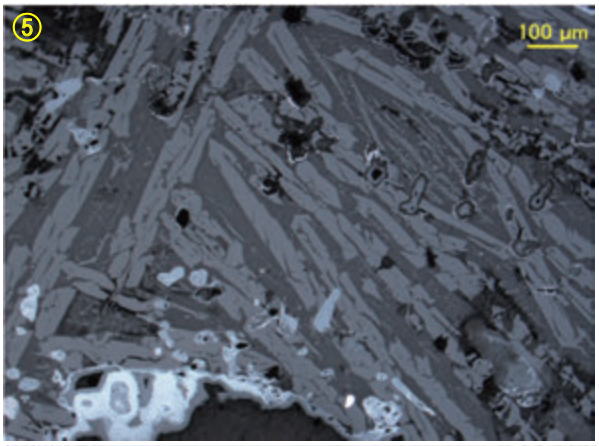




WAH-8
椀形鍛冶滓
④～⑥滓部:ファヤライト、青灰色部:錆化鉄、金属組織痕跡不明瞭







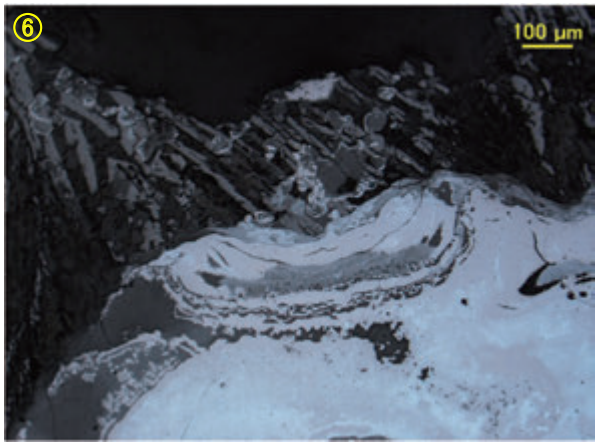
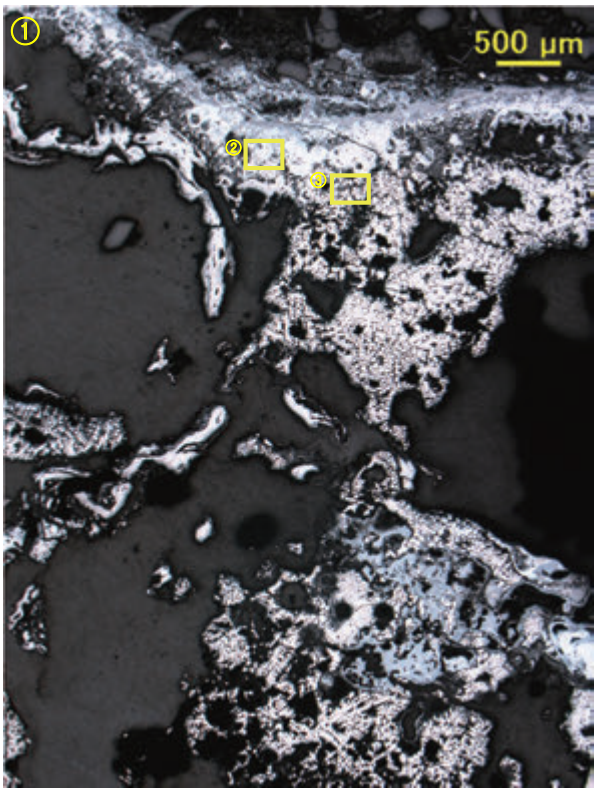
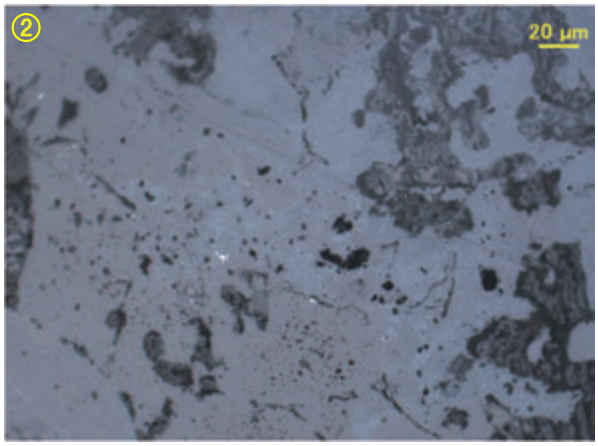


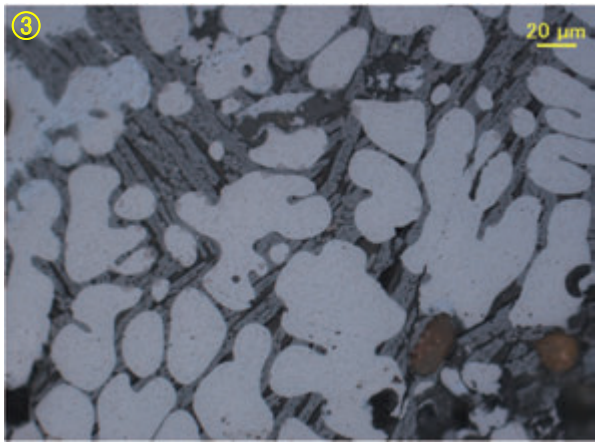
写真９　製錬滓（流動滓）・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

WAH-9
椀形鍛冶滓
①～③滓部:ウスタイト(粒内微小ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体)・ファヤライト、錆化鉄部:一部亜共析組織痕跡残存、②錆化鉄部拡大、③滓部拡大



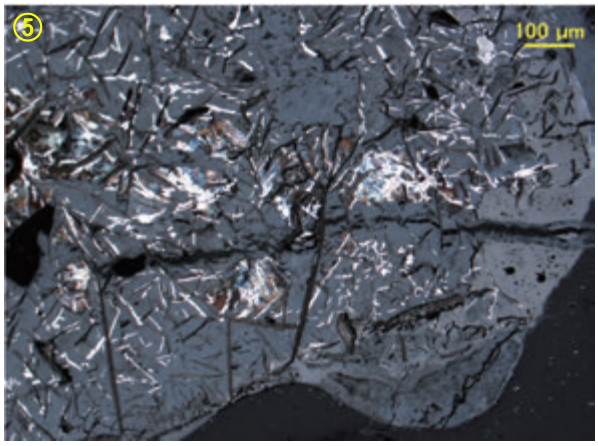






WAH-10　炉壁
④明色部:金属鉄(錆化鉄)粒、ナイタルetch ねずみ鋳鉄、暗色部:ガラス質滓
⑤⑥金属鉄(錆化鉄粒拡大)、ステダイト
(Fe-Fe_3C-Fe_3P)晶出





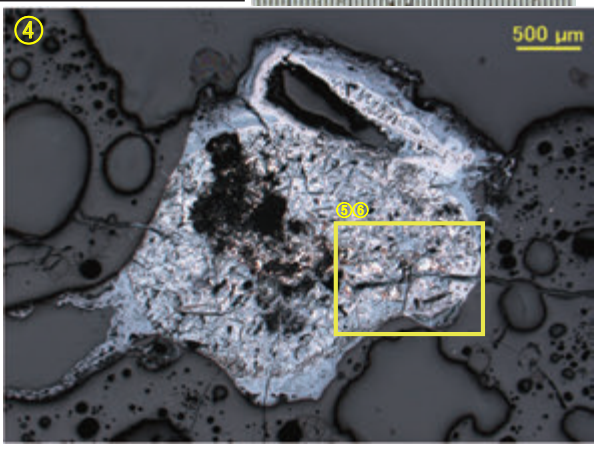




写真10　椀形鍛冶滓・炉壁の顕微鏡組織

第８章　総括

渡畑遺跡Ｂ地点の調査の結果，Ⅱ～Ⅳ層では中世～近世，Ⅴｂ・Ⅵ層では古代，Ⅷ～Ⅹ層では弥生・古墳時代，Ⅹ～ⅫⅢ層では縄文時代中期から晩期の遺構を検出した。また，該期に伴う遺物も大量に出土した。このことから，本遺跡は縄文時代中期から近世まで続く複合遺跡であることが明らかになった。

本章では，各時代の概要についてまとめていくことにする。なお，縄文時代の概要については，「渡畑遺跡１」の報告書に示されているので割愛する。

第１節　弥生・古墳時代の概要

本遺跡では，弥生時代と古墳時代の区分について，明確な層位がなく，出土遺物による判断に頼らざるを得ない。したがって，遺構については遺構内出土遺物や埋土状況から判断して，古墳時代の遺構と判断することにした。

１　遺構

遺構は，古墳時代の竪穴式住居跡が７軒，大型土坑３基，土坑７基，ピット12基を検出した。土坑およびピットについては，まだ多数の検出が見られたが，検出面の層位，周辺の遺物や埋土状況などから該期の遺構と判断したものだけを取り上げることにした。

竪穴式住居跡は，Ⅴ～Ｙ－５～８区に集中して検出された。古代以降では，この区域から住居跡は検出していないことから，河川の氾濫などにより該期の地形が変動した可能性が高い。

２　遺物

(1) 弥生時代

弥生時代の土器は，口縁部の形状によって分類した。最も古相の土器は，前期にあたる夜臼Ⅱ式土器・板付Ⅰ式土器に併行する刻目突帯文形式土器（Ⅰ類）である。

中期の土器は，入来Ⅱ式（Ⅱ類），黒髪式（Ⅳ類）の２系統に分かれる。弥生時代の土器に関しては，いずれも完形品の出土はなく，小片のみで出土量も少ない。

後期の土器は，薩摩半島に多く見られる形式変化と同様に，本遺跡でも松木薗式土器（Ⅵ類）から中津野式土器（Ⅶ類）へ推移していると考えられる。

また該期の遺物として，石器や軽石製品が出土した。軽石製品は，製作段階のものや欠損品を含めると300点以上出土した。605・606のように形状を整えて穿孔を施すものは，祭祀的な役割を担っていたと考えられる。その他のものについては，供膳具の可能性もあるが用途は不明である。

(2) 古墳時代

古墳時代の成川式土器については，完形品を含めて最も多く出土している。遺物の量から考えると，本遺跡における集落の最盛期を迎えた時期である可能性が高い。

これらについては，形式からⅧ類を東原式土器，Ⅸ類の笹貫式土器とした。成川式土器の形状は地域性の強いものであることから，隣接する持躰松遺跡や芝原遺跡，あるいは上水流遺跡から出土したものと類似している。

なお，Ⅶ類の中津野式土器は，弥生時代終末に位置づけているが，一部は古墳時代に入る可能性もある。

詳しい時期は分からないが，「つつぬけタイプ」（杉井1999）と呼ばれる甑形土器（391）が１点出土した。Ａ地点からも同様のものが１点出土している。深鉢形を呈するものであり，恐らく他にも出土していると考えられるが，接合の結果，残念ながら蒸気孔が確認されているのは１点のみである。

他には蓋類が出土した。ススの付着部から判断して蓋類としたが，568のように鉢形土器の形状を呈するものについては，転用品であると考えられる。

参考文献

金峰町教育委員会1998『持躰松遺跡（第１次調査）』
金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書（10）
鹿児島県立埋蔵文化財センター
発掘調査報告書（120）2007『持躰松遺跡』
発掘調査報告書（136）2009『上水流遺跡３』
発掘調査報告書（151）2010『渡畑遺跡１』

第２節　古代の概要

本遺跡の北側に隣接する持躰松遺跡では，古代における掘立柱建物跡の検出が多く，人口の増加とともに集落の繁盛期を迎えたとしている。しかし，本遺跡は古代における遺構は少なく，古墳時代から著しく人口が増加したとは考えにくい。ただ，持躰松遺跡と同時期と考えられるヘラ書き土器・墨書土器の出土，また，その書かれた文字の類似性から，同遺跡と深い関連があったことは窺える。

１　遺構

該期の遺構は，竪穴式住居跡が３軒，溝状遺構が２基，大型土坑が１基，土坑が16基，ピットが11基検出した。

古墳時代の遺構同様に，土坑およびピットについては，該期の遺構と判断したものを取り上げた。

１号溝状遺構からは，多量の遺物が出土した。該期のものと判断できる遺物は，土師器坏・埦の小片が197点であったが，いずれも摩耗が激しかったため，掲載しなかった。また，中・近世のものと思われる青白磁の小片も多量に出土したが，これらは包含層遺物として取り上げた。本遺跡には，このように遺構と遺構内出土遺物の異なる例が多数見られる。これらは，河川の氾濫により

流出したものと考えられる。

2　遺物

遺物は，土師器，須恵器ともに多量に出土した。中でも，該期の特記すべき出土遺物として，ヘラ書き土器や墨書土器などがある。

(1) 土師器

土師器は，供膳具である平底皿・高台付皿・坏・埦・蓋類と，煮焚具では土師甕が出土した。坏・埦の小片が多く，全体形状の把握できるものは少ない。平底皿は，９世紀頃と考えられる器高が低く底面が広いものが出土した。また，９世紀末～10世紀前半と考えられる内面を黒く丁寧にミガキ仕上げを施した黒色土器も出土した。高台付皿については，摩耗が激しいために，剥がれているものも多いが，おそらくは朱塗りを施していたと考えられる。埦については，A地点と同様に９世紀頃と思われる高台の短いものが出土している。蓋類は，つまみ部である２点（735・736）のみを掲載したが，全体的な出土量を考えると，まだ増えると思われる。残念ながら，今回は接合による復元から形状を把握できたものはなかった。土製品は，土錘・土玉・紡錘車が出土した。

供膳具や煮炊具，漁猟具としての土錘，衣を作るための紡錘車は，生活のために欠かせない一式の遺物である。これらにより，立地的環境を利用した本遺跡の当時の生活様式が窺える。

(2) 刻書土器・ヘラ書き土器・墨書土器

刻書土器・ヘラ書き土器・墨書土器に書かれてある文字・記号については，永山修一氏の御教示を得た。

出土数は，刻書土器が１点，ヘラ書き土器が32点，墨書土器が８点である（表50）。

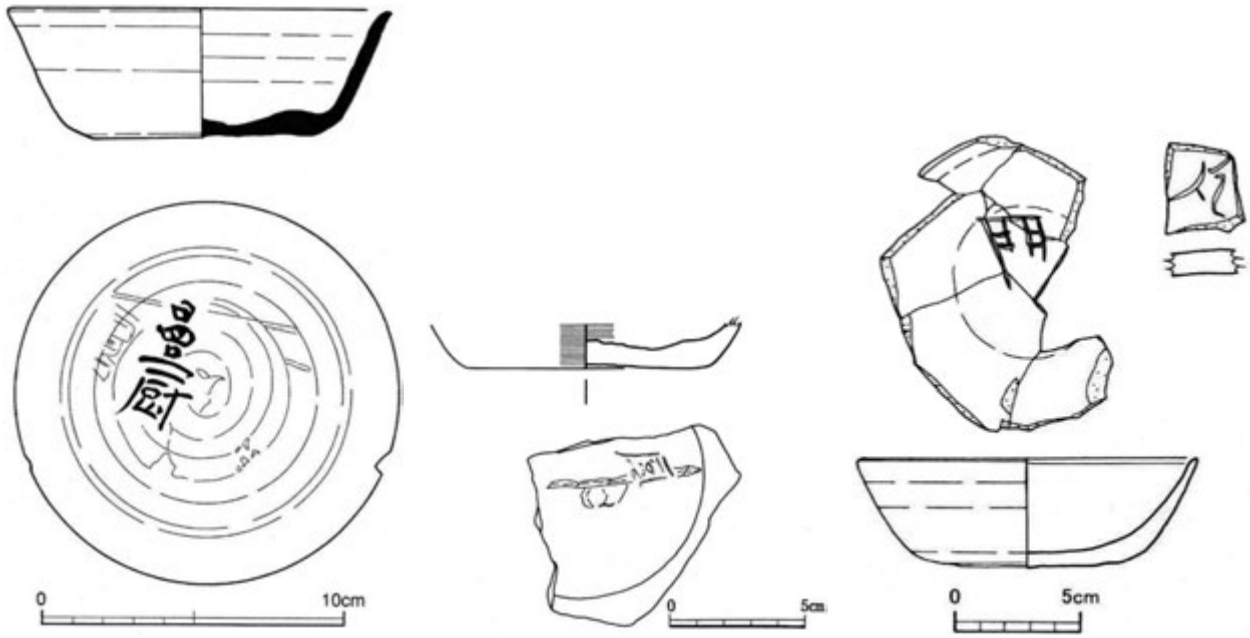
記載部位については，体部外面が５点，体部内面が３点，底部外面が14点，底部内面が19点であり，底部が約８割を占める。中でも，底部内面への記載は全てヘラ書きであるという点は興味深い。薩摩国内の古代墨書土器は，全体としてヘラ書き土器よりも墨書土器の方が多く，ヘラ書き土器が卓越するのは，現地点で隣接する持躰松遺跡だけである。この例から，さらに東側へ隣接する芝原遺跡においても，同様の傾向を看守できる。

記載内容として，まず「厨」が２点あることに注目したい（774・775）。墨書による「厨」について出土例を挙げると，尾崎Ｂ遺跡が１点，榎城跡が１点，市ノ原１地点が４点，芝原遺跡１点（多口瓶），橋牟礼川遺跡が１点，一ノ宮遺跡が１点の出土となっている。さらに，薩摩国府跡において「国厨」が１点，安茶ヶ原遺跡で「日置厨」が１点出土している。これらに，本遺跡において出土した２点を加えても，まだ13点の出土例しかなく，貴重な資料だと言える。おそらく，本遺跡の２点は芝原遺跡の１点とともに，阿多郡家の厨に関わるものと考えられる。あるいは，芝原遺跡の多口瓶を仏教関係の遺物と捉え，近辺に寺院等の存在を想定できるとすれば，寺院に附属する厨の可能性も否定できない。

「門（741・742・747～753）」「凡（759）」については，持躰松遺跡にて多数確認されている。また，754・755については，芝原遺跡で同様の文字が確認されており，釈読は難しいが，同遺跡で「宅」が出土していることから，その転写過程で変形した可能性もある。唯一の刻書土器である737については，持躰松遺跡で出土した「冨」の転写と考えられる。

表50　刻書土器・ヘラ書き土器・墨書土器一覧

掲載番号	種類	器種	記載部位		文字・記号
			体部位	内外面	
737	刻書	土師器埦	体部	外面	冨？（持躰松遺跡）
738	ヘラ書き	土師器平底皿	体部	外面	—
739	ヘラ書き	土師器埦	体部	内面	—
740	ヘラ書き	土師器平底皿	底部	内面	—
741	ヘラ書き	土師器坏	底部	内面	門（持躰松遺跡）
742	ヘラ書き	土師器埦	底部	内面	門（持躰松遺跡）
743	ヘラ書き	土師器坏	底部	内面	雀？
744	ヘラ書き	土師器	底部	内面	—
745	ヘラ書き	土師器	底部	内面	林
746	ヘラ書き	土師器	底部	内面	—
747	ヘラ書き	土師器	底部	内面	門（持躰松遺跡）
748	ヘラ書き	土師器	底部	内面	門（持躰松遺跡）
749	ヘラ書き	土師器	底部	内面	門（持躰松遺跡）
750	ヘラ書き	土師器	底部	内面	門（持躰松遺跡）
751	ヘラ書き	土師器	底部	内面	門（持躰松遺跡）
752	ヘラ書き	土師器	底部	内面	門（持躰松遺跡）
753	ヘラ書き	土師器	底部	内面	門（持躰松遺跡）
754	ヘラ書き	土師器	底部	外面	宅？（芝原遺跡）
755	ヘラ書き	土師器	底部	外面	宅？（芝原遺跡）
756	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
757	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
758	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
759	ヘラ書き	土師器坏	底部	外面	凡（持躰松遺跡）
760	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
761	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
762	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
763	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
764	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
765	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
766	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
767	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
768	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
769	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
770	墨書	土師器小型平底皿	体部	外面	入？
771	墨書	土師器坏	体部	外面	有
772	墨書	土師器坏	体部	外面	土？
773	墨書	土師器坏	体部	内面	—
774	墨書	土師器平底皿	底部	外面	厨
775	墨書	土師器埦	体部	外面	厨
776	墨書	土師器小型平底皿	底部	外面	有
777	墨書	土師器埦	底部	外面	—（３文字熟語？）



安茶ヶ原遺跡出土坏　　尾崎Ｂ遺跡出土坏　　持躰松遺跡出土坏

第149図　墨書・ヘラ書き土器実測図

隣接する両遺跡との関わりは深く，今後は，３遺跡の遺物を総体的に考察していく必要がある。さらに遺跡の性格を決定するに際して，遺物の年代観は非常に重要である。幸いにも完形品が何点か出土しているので，年代と記載文字の関係等も明らかにすることができれば，新たな研究段階に進むと考える。（特に「厨」が機能していた年代については，薩摩国の古代史を考える上で重要な問題を含んでいる。）

これらの遺物によって，本遺跡の古代における様相は，人口的な繁栄はないものの，一般集落とは異なった強い結びつきを持つ強力な集落形成を示すと言える。さらにそれが，輸入陶磁器の出土傾向や出土量から他地域との交流が最も盛んであった本遺跡の主体をなす中・近世へ繋がっていく要因になると考えられる。

(3) 須恵器

須恵器は，蓋・皿・坏・埦・甕・壺が出土した。これらは，本遺跡の近くに所在する「中岳山麓窯跡群」の窯で焼かれた可能性が高く，時期は９世紀中頃と思われる。

参考文献

永山修一「薩摩国出土古代墨書土器集成」
2010「古代西海道における出土文字資料の展開と地域性に関する研究」
柴田博子「鹿児島県の墨書土器」
2006「先史・古代の鹿児島　通史編」鹿児島県教委
鹿児島県立埋蔵文化財センター
発掘調査報告書（155）2010『椎城跡』
発掘調査報告書（49）2003『市ノ原１地点』
発掘調査報告書（118）2007『安茶ヶ原遺跡』
発掘調査報告書（120）2007『持躰松遺跡』
発掘調査報告書（136）2009『上水流遺跡３』
発掘調査報告書（151）2010『渡畑遺跡１』

第３節　中・近世の概要

本遺跡では，中世の始まりを平安末（11世紀後半）から，近世の始まりを天正16年（1588）からと捉えた。本稿では，この時代に相当する遺構・遺物について，報告書に先行して述べられてきた調査成果報告等も参照にしながら，今回の調査結果から導き出せる遺跡の性格等について述べておきたい。

なお，本遺跡の輸入陶磁器の分類・編年等については，以下の文献をもとに行った。一部については，大橋康二氏，山本信夫氏の御教示を得た。

本節については，関明恵文化財主事の指導によりまとめることとした。

森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」
1992『貿易陶器研究№２』日本貿易陶磁学会
上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」
同上
小野正敏「15～16世紀の染付碗，皿の分類と年代」
同上
太宰府市教育委員会200
『太宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―』

１　遺構

該期の遺構としては，掘立柱建物跡１軒，溝状遺構16基，井戸状遺構１基，炉状遺構３基，土抗墓６基，落ち込み状遺構１基，土坑13基，ピット19基が検出された。

（第92～135図）遺構の集中する年代としては，太宰府編年のＣ期～Ｅ期（11世紀後半～13世紀前半）

特記すべき遺構としては，万之瀬橋の西隣にあたるＸ・Ｙ－２区から，３間×３間の総柱の掘建柱建物跡が１棟検出された。柱穴内に礫を有する頑丈なつくりであること，柱が同間隔に配列されていること，配列方向が真北，真西を向いていること等，特筆すべき点の多い遺構である。建物跡に伴う遺物は少なく，柱穴内出土遺物もないため詳細な検討はできないが，Ｘ・Ｙ－２・３区より布目瓦が出土しており，建物との関連が考えられる。（第151図参照）

その他，この掘建柱建物跡の南側，Ｙ－２区で検出された11号溝状遺構からは，伏せられた状態で青磁の集積（同安窯系青磁椀２枚，青白磁椀３枚，青磁皿１枚）が検出され，同時期の一括資料として貴重な資料である。

その性格としては，縄紐等で６枚重ねで結んであったものが，縄紐は腐敗し，このような状態で出土したのではないかとの見解もあるが，今後の検討が必要であろう。

また，近世に相当する６号大型土坑内から，湖州鏡（湖州六花鏡）が出土したが，その原位置を留めていないと思われるため，本報告では表層出土遺物として取り扱った。湖州鏡は，中国の浙江省で鋳造された宋代の鏡である。日本へは平安時代中頃より輸入されたとされている。近年，県内の天神段遺跡（志布志市有明町）の土壙墓内から，本遺跡のものよりひとまわり小さい湖州鏡が出土している（現在，整理作業中）。本遺跡の湖州鏡も，土壙墓内の副葬品であったものが破壊され，流入した可能性が考えられる。年代としては，11世紀後半～12世紀前半頃と想定したい。湖州鏡の上面は，中央に小さな鈕が付く。また，方形の枠内に銘文が刻まれるが，肉眼では判読できないため，当センターでＸ線写真により判読を試みたところ，「□州千石念／□家□□子」と記されていることが判明した。

本遺跡は持躰松遺跡（第一次調査，南さつま市金峰町）に隣接する位置にあり，遺跡の性格としては，持躰松遺跡と同様の性格が予想されるが，検出された中世前期の遺構においては，「日宋貿易の拠点」的性格を示す遺構は検出されなかった。

なお，井戸状遺構および炉状遺構については第４節で，土壙墓および土壙墓内出土人骨については第５節で詳細を述べることとする。

２　遺物

該期の出土遺物としては，土師器，須恵器，白磁，青磁，青花，輸入陶器，国内産陶器，国内産磁器，瓦質土器，土師質土器，土製品，滑石製品，古銭等が出土した。

中でも輸入陶磁器の出土量は多く，中世全期を通して途絶えることなく遺物が出土しているが，出土量のピークは遺構と同じく中世前期（11世紀前半～13世紀）に相当する白磁，青磁等がその中心を占める。このような出土傾向は，中世前期の交易都市である博多や太宰府から出土する陶磁器の組成に類似する。また，本遺跡と同じ万之瀬川流域に所在する持躰松遺跡（第二次調査）や上水流遺跡，小園遺跡とも類似するものである。

次に，中世を太宰府編年にならい，５期’（Ｃ期～Ｇ期以降）に区分し，それぞれの時期において出土遺物の傾向を述べ，さらに，本遺跡の性格を考えるうえで重要と思われる資料についてふれておきたい。

Ｃ期（11世紀後半～12世紀前半）

本遺跡の中心となる時期である。白磁は，玉縁口縁を呈する椀Ⅳ類と端反口縁の椀Ⅴ１～３類が多く出土し，ほぼ同数を占める。その他椀Ⅱ・Ⅲ・Ⅹ Ⅲ類，皿Ⅱ・Ⅳ～Ⅵ類が数点ではあるが見られる。青磁は出土していない。輸入陶器は，磁州窯系の白地剔花文の瓶と思われる資料が４点（同一個体を含む）出土している。

Ｄ期（12世紀中頃～後半）

Ｃ期に引き続き，本遺跡の中心をなす時期である。白磁は，椀Ⅴ－４類を中心に，椀Ⅷ類，皿Ⅷ－１類が少量であるが出土している。青磁は，この時期から内面無文や劃花文が描かれる龍泉窯系青磁の椀Ⅰ－１～４類と皿Ⅰ類，内面にヘラ状工具による略化した花文と櫛状工具の先端によるジグザグ文が描かれた同安窯系青磁の椀Ⅰ類と皿Ⅰ類が出土する。龍泉窯系青磁と同安窯系青磁の割合は，同安窯系が龍泉窯系をやや下回る。前述した11号溝状遺構内出土の伏せられた状態で出土した６枚の椀・皿は，同安窯系青磁の椀Ⅰ－１類２枚と皿Ⅲａ類１枚，青白磁の椀３枚で，いずれもＤ期に相当する資料である。その他，青白磁の合子も見られる。輸入陶器は，鉢Ⅰ－１ｂ，Ⅳ類が出土している。さらに，特筆すべき資料として，畿内産の瓦器小皿（和泉型）が１点出土している。本県では瓦器の出土は非常に珍しく，持躰松遺跡（第２次）では２点（和泉型・楠葉型）が出土している。その他に，中国瓦と思われる瓦の出土が挙げられる。波状押圧文の軒平瓦は２点であるが，『渡畑遺跡１』でも１点掲載されている。（p.129　第92図　825　古代の瓦として取り扱われている。）その他に布目瓦の平瓦や丸瓦の可能性が考えられる瓦が360点出土している。軒丸瓦は見られなかった。中国瓦については，博多，箱崎以外での出土例は渡畑遺跡のほか，芝原遺跡のみである。近年，博多出土の軒丸瓦に類似した中国瓦が寧波で発見されたが，本遺跡の資料も寧波との関連性が考えられる。（註１）軒丸瓦・布目瓦の出土は，寧波－博多の交易ルートの中に，寄港地としての本遺跡の姿を想定させるものである。

Ｅ期（13世紀前後～前半）

白磁は出土せず，青磁もＣ・Ｄ期ほどの出土量ではな

いが，輸入陶器を中心に，一定量の輸入陶磁器が出土している時期で，C・D期に引き続き，本遺跡のピークと捉えたい。白磁は，この時期に相当するものは出土していない。青磁は，外面片彫蓮弁文や鎬蓮弁文の龍泉窯系青磁椀Ⅱ－a・b類が出土している。輸入陶器は，数量的には多くないが，E期のものが中心を占める。口縁部が内側へ強く屈曲する甕Ⅰ類，Y字口縁のⅢ類，T字口縁のⅤ類が出土している。壺は有耳壺無耳壺ともに出土している。国内産の資料では，中世須恵器である東播系須恵器の捏ね鉢，鹿児島県徳之島産のカムィヤキの甕・壺が，D期からE期にかけて出土する。そのほか，肥前産と思われる滑石製石鍋やその転用品が，D期から引き続いてこの時期にも見られる。

F期（13世紀中頃～14世紀初頭）

出土遺物は，急に減少する。この時期を代表する白磁は口禿げの碗・皿Ⅸ類であるが，本遺跡では皿がわずかに出土したのみである。そのほか，肩部が張る白磁四耳壺Ⅲ－3類が1点出土している。青磁は龍泉窯系青磁の椀Ⅱ－c類が3点出土しただけである。国内産の資料では，口縁部がN字状を呈する常滑焼の甕6型式が出土している。その他，樺万丈系の捏ね鉢や甕，瓦質土器の擂鉢等もこの時期に比定される。また，特筆すべき資料として，瓦質土器の卸皿が挙げられる。内面に印花文がスタンプされたものが1点確認されており，持躰松遺跡（第2次調査）でも出土していた瀬戸の卸皿等を模倣したものと思われる。

G期（14世紀初頭～14世紀後半）以降

中世後期の時期として，G期以降の14世紀から16世紀をまとめて述べておく。この時期の出土遺物は少ない。白磁は，景徳鎮窯系の森田分類D・E群がわずかに出土している程度で，青磁も龍泉窯系青磁椀Ⅳ類がわずかに見られる程度である。また，16世紀代以降は，青花も流入し，景徳鎮窯系の小野分類碗・皿のB・C・E群と，それらを模倣した漳州窯系青花が出土しているが，その出土量は少ない。この時期の出土遺物で特筆すべき資料は，景徳鎮窯系の碗（鉢？第125図1193）である。外面に呉醋による紋章が描かれるもので，この碗に類似した碗が，トルコのトプカプ宮殿に伝世している。（註2）この資料が掲載されている図録の解説には，「端反になった口縁部に「PEMTEMPO DE PEDRO FARIADS 54」と読めるポルトガル語が記され，ポルトガルのマラッカ総督であったペトロ・ダ・ファリアの1541年の注文により制作されたものと考えられる作品。なぜトプカプ宮殿に伝世したのか来歴の詳細はわからない。（以下略）」（写真11・註3）とあり，本遺跡出土の資料もヨーロッパからの注文品であった可能性が高い。このような資料が，なぜ本遺跡から出土するのか詳細は不明であるが，16世紀中葉以降，フランシスコ＝ザビエルの日本上陸に代表されるような，ジャンヌ船に乗った宣教師の来日や，ポルトガル船自体の寄港が，この万之瀬川下流でみられた可能性を窺わせる興味深い資料である。

以上，中世における出土遺物の概略を述べたが，近世以降（1588年～）の出土遺物は，非常に少ない。近世に相当する包含層からは，近世墓が6基検出されており，これは人骨が残存しているもののみを土壙墓として取り扱ったが，そのほかにも，土壙墓と考えられる土壙も多数検出されている。本遺跡は近世において，墓域であった可能性が考えられ，そのため近世に相当する遺物は少ないものと思われる。中世前期において，寧波－博多交易ルートの寄港地として想定される万之瀬川流域において，本遺跡が近世になり墓域化する変化は，交易がするに伴い，河川と河川敷に対する人々の認識が変化した表れであろう。

本遺跡を含む，万之瀬川津流の詳細な性格については，近隣遺跡の成果を考慮しつつ，様々な分野からの研究成果を交えたうえで，検討を重ねるべきであろう。

註釈

註1　博多との類似性が考えられる押圧波状文の軒平瓦3点（渡畑遺跡1で報告された資料1点№825と本遺跡出土の資料2点1319・1320）と布目瓦9点について，小畑弘己氏（熊本大学文学部准教授）のご厚意により，次のような分析をしていただいた。

分析機器：福岡市埋蔵文化財センター所蔵 EAGLE μProbe 蛍光X線分析装置

測定条件：X線照射範囲直径300μm，真空状態，電圧40kV，照射時間180秒

測定元素：Na，Al，Si，K，Ca，Ti，Mn，Fe，Rb，Sr，Zrの11個

測定箇所：鉱物粒子のない部分，埋蔵地の土が付着していない部分を選択し平坦面3か所にて行った。

結果としては，中国瓦の範疇に入るものと考えられるが，寧波系の瓦であるとの断定には至らない。また，博多出土の瓦とはほぼ同類であるとの御教示をいただいた。なお，詳細なデータ及び結果等については，小畑氏の今後の報告を待ちたい。

註2　さらに極似した資料が，Queluz Paris 1995『Du Tage a la mer de China』p.79に掲載されている。（大橋康二氏の御教示による。）

16世紀前半頃の中国景徳鎮窯の青花で，文様はコバルトで描かれる。外面口縁部に，「AVA AMRIA (NARIA) GRCA(GRACA) TIENA(PLENA)」と読めるポルトガル語が2回描かれ，外面の四方には，ポルトガル王家の紋章が地球儀を交互に配置される。しかし，中国人陶工が見様見真似で文様を描い

たため，王家の紋章は，上下が逆に描かれている。この作品は，京都に所在したキリスト教の教会に伝世していたものと言われている。宣教師やキリスト教との関わりが窺える作品である。本遺跡の資料も紋章が上下逆になっている。

註３　写真11は，佐賀県立九州陶磁文化館1995『トプカプ宮殿の名品－スルタンの愛した陶磁器－』P.33 №24を転写。解説は，同 p.149，№24の日本語解説より抜粋。（大橋康二氏の御教示による。）

参考文献

中世土器研究会編1995『解説　中世の土器・陶磁器』真陽社

金峰町教育委員会1998『持躰松遺跡（第１次調査）』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書（10）

柳原敏明1995「中世の万之瀬川下流域と持躰松遺跡」『持躰松遺跡（第１次調査）』

鹿児島県立埋蔵文化財センター
発掘調査報告書（120）2007『持躰松遺跡』
発掘調査報告書（136）2009『上水流遺跡３』
発掘調査報告書（151）2010『渡畑遺跡１』

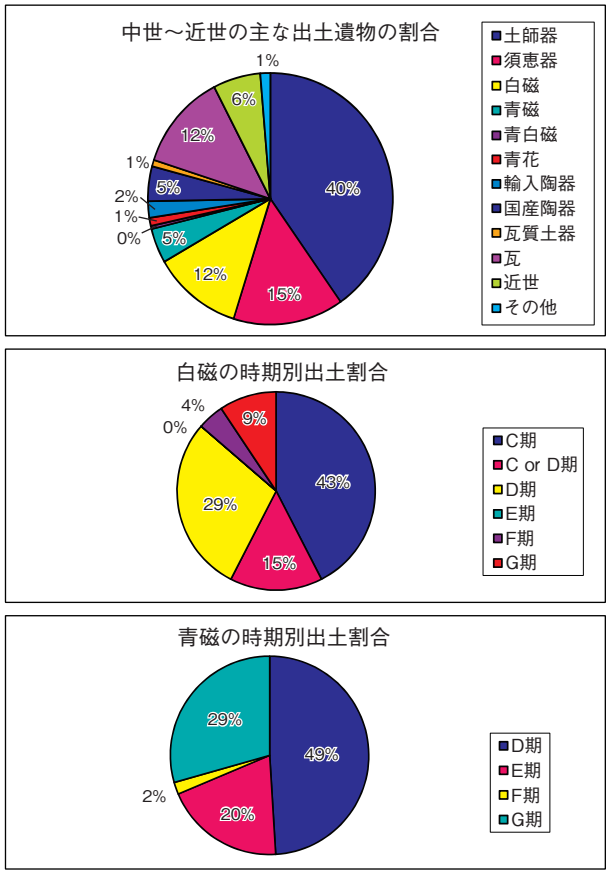
中村和美・栗林文夫1995「持躰松遺跡（２字踏査以降）・芝原遺跡・渡畑遺跡について」『古代文化』

山本信夫1995「12世紀前後陶磁器から見た持躰松遺跡の評価－金峰町出土の焼き物から追求する南海地域の貿易・流通－」

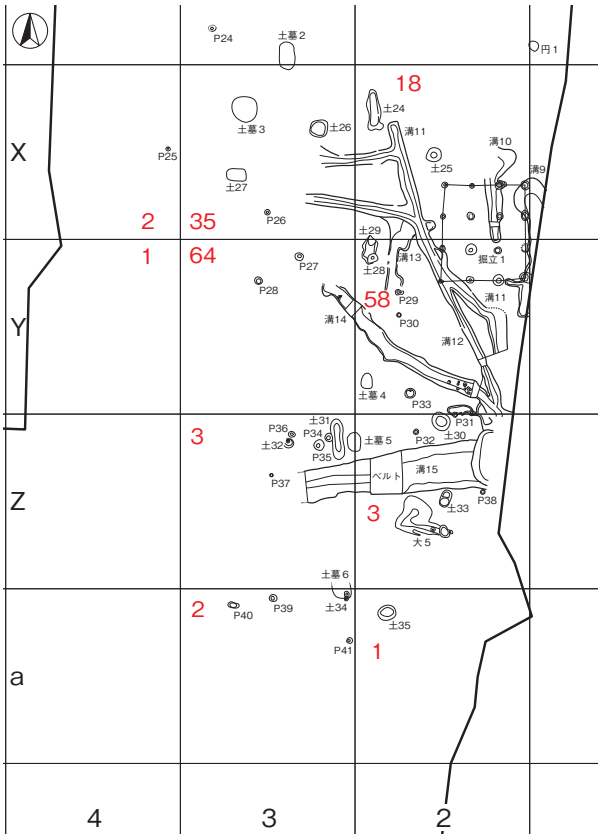
栗林文夫2000「万之瀬川下流域をめぐる最近の研究状況－考古学を中心として－」『大河』７号大河同人



写真11　ポルトガル王家の紋章が入った青花（出典：註３）



第150図　出土遺物の割合



第151図　布目瓦出土数（総数355点・区不明161点）

※赤の数字は出土数を表す。

第４節　井戸状遺構の考察

１　はじめに

人間の生活に欠かせないものの一つに「水」がある。ほとんどの生物は，体の７割以上は水分が占めているといわれるほど，水は生活と切っても離せないものと言えよう。

発掘調査においても，遺跡自体は何らかの形で水に関わっていると言っても過言ではない。しかし，遺構・遺物で明確に「水の使用」について言及できるものは意外に少ない。そこで，水の使用について明確に言及することのできる数少ないものとしてここでは「井戸」を取り上げたい。

渡畑遺跡においては石塔を組み合わせた「井戸」が発見されている。この「井戸」がどのような特徴をもつのかについて，県内で発見された事例を集めて検討を行うこととする。

２　県内発見の様々な井戸

山本博氏や宇野隆夫氏などによって，全国の事例から井戸の形態の分類が行われている（山本1986・宇野1982）。ここでは資料の制約もあるのでこれらを参考としつつも，大きく「素掘り」と「石組み」の２種類に分けて論を進める。

現時点で，本県における最も古い井戸は，小瀬戸遺跡（姶良市）で発見されている古代（平安時代）のものである。素掘りで，木製の井戸枠が一部残存する。古代の例はこの一か所のみで，事例の増加が待たれる。

中世になると，若干ではあるが調査事例が増加する。薩摩での事例が多くを占めるが，大隅でも近年になって事例がみられるようになった。その一例が領家西遺跡（根木原遺跡Ｆ地点）である。これらの多くは，「素掘り」であるが，有機物の残存が困難である場合も多いので，本来は「木組み」であった可能性も考慮すべきであろう。また，城跡での発見例が比較的多い傾向がみられるのも注目すべき点である。

近世には，素掘りのものはごく少数となり，ほぼ全てが石組みとなる。また，この時期のもののほとんどは鹿児島市内に分布する。

ところで，知覧城では井戸に類似した遺構が発見されている。ただし，形状は「井戸」に類似するが，この遺構は「井戸」ではないという。この遺構は当初「墓」であるという意見が出されたが（上田2003），分析などの結果から現在は「ゴミ捨て穴」という結論が出されている（上田2006）。また，上水流遺跡においても，井戸状の遺構が発見されているが，報告書作成の時点で「土壙墓」として報告を行った（鹿県埋文センター2008）。

これらの遺構は，完全に「井戸」の可能性が否定されるものではないが，状況から井戸以外の遺構とされるものである。このことから，特に素掘りのものは形状のみで「井戸」と結論づけることは危険であることが確認されよう。岩本正二氏によれば，井戸の用件として「坑の底が湧水層まで達していること」が指摘されている（岩本2001）ので，この点にも注意すべきであろう。

宇野氏によれば，全国的には弥生時代から井戸が発生し，古墳時代にはほぼ普及するという。しかしながら，鹿児島県内においては古くとも平安時代からであり，それも現在のところ一例のみである。古代（平安時代）においても井戸はあまり定着せず，事例の増加がみられるのは中世からとなる。それも中世前期には確実なものはなく，中世後期以降になってやっとほぼ確実なものがみられるようになる。

また上記の状況に似た遺構として，「カマド」がある。カマドは，古墳時代には宮崎県都城市（鶴喰遺跡）までは存在しているが，鹿児島県内では古代に至っても数例のみで，かつ非在地系の遺物が多くみられる遺跡における事例である。つまり，カマドの分布はあくまで参考であるが，井戸については何らかの原因があって一時的には存在したが定着しなかった可能性がある。この原因の一つに，鹿児島県内に広がるシラス台地では容易に湧水が得られるということがあげられる。また，多数の湧水の存在が，井戸の必要性を高いものにしなかったと考えられる。

また，中世での事例の増加は，これまで生活好適地とされてきた場所以外にも生活の場を広げるような新たな開発によって，湧水を求めた生活スタイルからの脱却が必要になった結果であると想定できるのではないか。今後，検討すべき課題といえよう。

３　渡畑遺跡の井戸

先述したように，当遺跡では井戸が発見されている。この井戸の大きな特徴としては以下の２点がある。

①石塔（五輪塔か）の部品を再利用し，組み合わせて井戸を構築している（他の石材でなく，あえて五輪塔を利用している）。

②万之瀬川に近接する場所に構築されている（河川の水が眼前に存在するというのにあえて井戸が構築されている）。

①については大龍遺跡で類似する状況がみられる。ただし，渡畑遺跡では石組みの多くが石塔の部材であるのに対し，大龍遺跡では一部に石塔部材を含むのみで多くは自然礫であるという点が異なる。

②については，立地だけでみれば，浜町遺跡や下鶴遺跡，川骨遺跡なども海や河川に近接するという点で類似する。これらのいずれもがほぼ実用の井戸と考えられている。ただし，井戸と川の距離は渡畑遺跡の方が圧倒的に近いという点が異なる。

ところで，京都の下鴨神社で発見された江戸時代の井戸が実用ではなく，祭祀（雨乞い）のためのものという

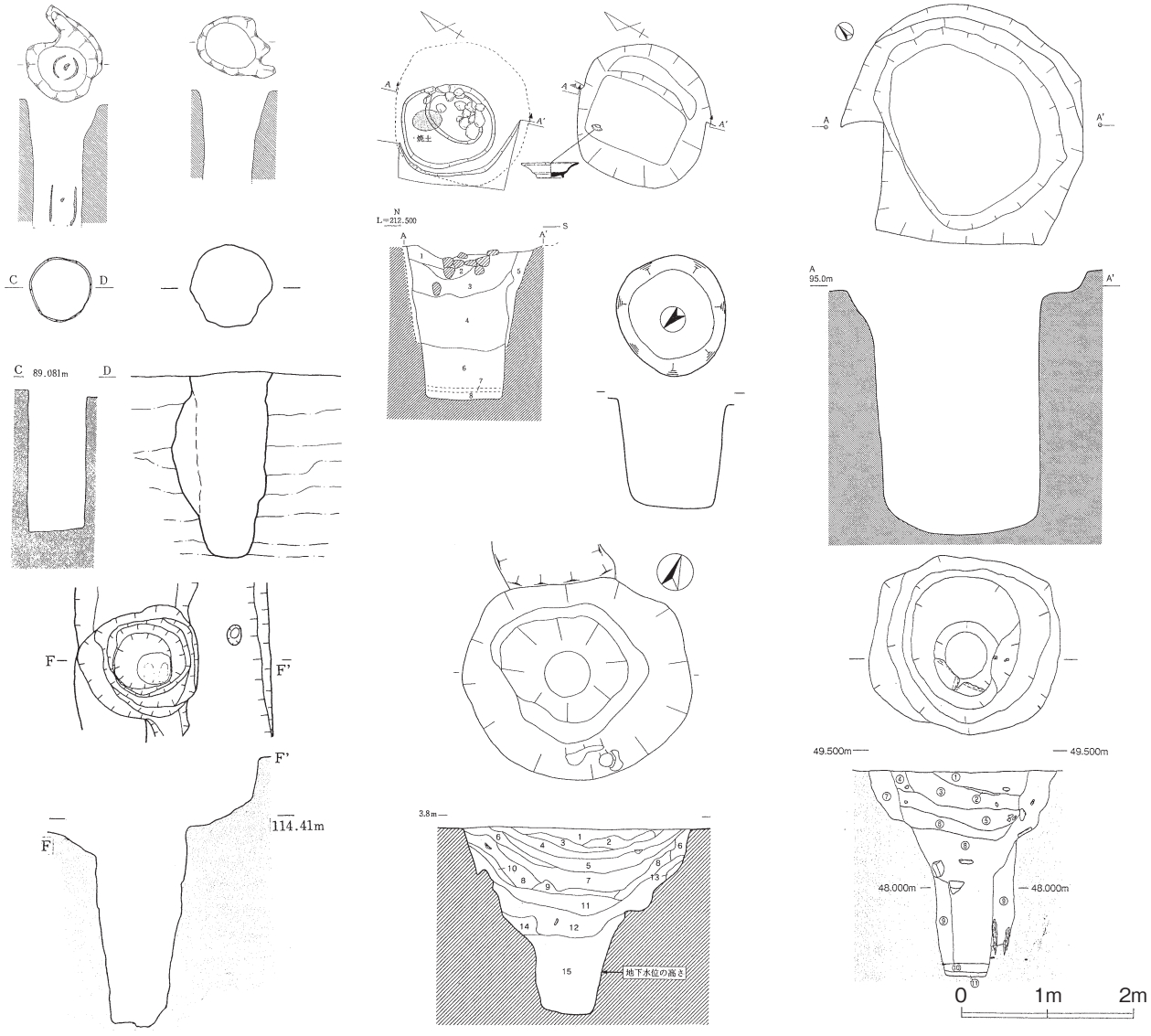
報道が近年なされた。本遺跡での例は，眼前に万之瀬川が存在し，かつ五輪塔部材を使用していることから，下鴨神社の例と同じく祭祀的な（実用でない）使用も考慮するべきではないかと考える。また，渡畑遺跡に隣接する芝原遺跡では，牛の頭骨が出土しているが，全国的な事例ではこれは道教呪術儀礼による「雨乞い」とされるものである。本遺跡での事例ではないが，非常に近接しているので関連していた可能性も考慮したい。

最後に調査上の問題点をあげたい。ここでは列挙するに留めるが，「時期認定の困難さ」「調査の安全面での限界（崩落の危険性など）」「近現代遺構についての軽視」などが指摘される。

課題は残るが，本遺跡の様相をより明らかにするための一助となるべく，今後も全国的な事例との比較を行って検討していきたい。

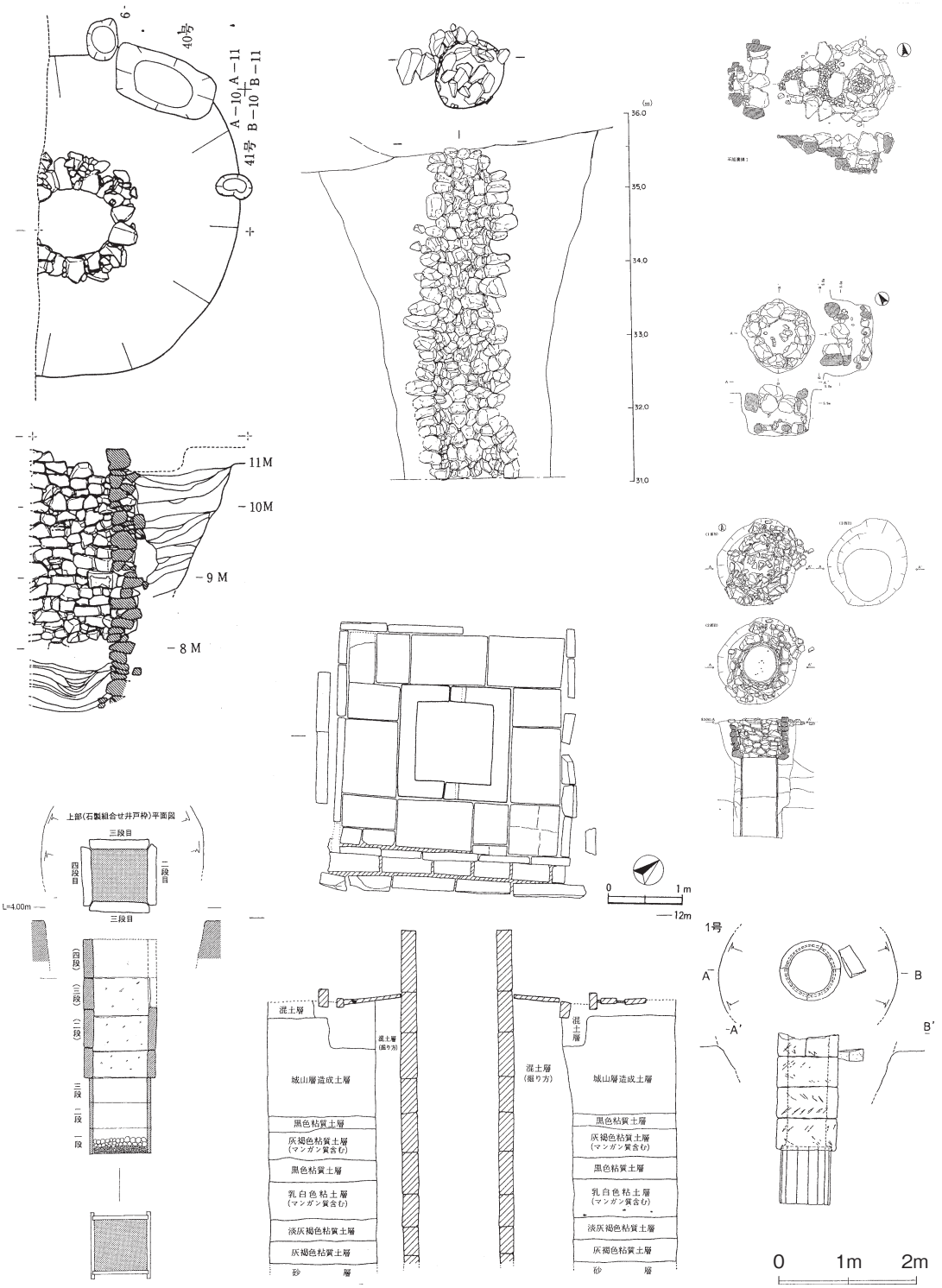
参考文献

宇野隆夫1982「井戸考」『史林』第65巻第５号
（後に宇野隆夫1989『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』真陽社に再録）
宇野隆夫1997「井戸」『弥生文化の研究』第７巻　弥生集落雄山閣



第152図　県内発見の井戸跡①（素掘り）

岩本正二2001「中世の井戸」北陸中世考古学研究会編『中世北　陸の井戸』
山本博1986「中世井戸の成立と展開」『日本考古学論集』2
堀内秀樹2001「井戸」『図説江戸考古学研究事典』柏書房
上田耕2003「南九州の城郭と埋葬」『戦国時代の考古学』高志　書院
上田耕2006「土坑について」『国指定史跡知覧城跡（三）』知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書（12）
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（121）2008『上水流遺跡２』



第153図　県内発見の井戸跡②（石組み）

表51　鹿児島県内で発掘された井戸（一部に参考含む）

No.	遺跡名	所在地	数（基）	時期	形態	大きさ（cm）			備考
						最大径	最小径	深さ	
1	小瀬戸	姶良市姶良町西餅田字小瀬戸	2	古代	素掘り	180	180	210以上	木製井戸枠。刻書土器「仲家」・モモ・ウメ・イチイガシ・ヤブニッケイ・ヒョウタン
2					素掘り	170	150	220以上	
3	根木原D地点（領家西）	鹿屋市花岡町字領家西	1	中世か	素掘り	106	102	218	白磁・常滑焼の甕出土
4	大龍遺跡	鹿児島市大竜町	1		石組み	180（内径90）	—	400以上	掘り込みは径4.5mの円形。石組み中には石塔残欠を含む。一部は調査区域外の為未調査。
5	西原	日置市伊集院町郡字西原	1	中世	素掘り	282	280	284	瓦質土器の鉢出土。
6	地頭仮屋跡	鹿児島市郡山字松尾	1		素掘り	170	120	170	井戸跡から土師器の椀・皿各一枚出土
7	鍛冶屋馬場	薩摩川内市平佐町字鍛冶屋馬場	1	中世後半	素掘り	300	254	218	井戸跡から羽釜出土
8	日輪城	曽於市大隅町恒吉	1		素掘り	160	150	200以上	上部石組み下から鞴羽口や取瓶など出土
9	平山城跡（川辺城跡）	南九州市川辺町字平山	1		素掘り	100	100	220	下部に粘質土がみられ水分が多い状態
10	川辺郷地頭仮屋跡	南九州市川辺町字平山	1		素掘り	240	210	240	底付近に木杭。14・15世紀の青磁皿出土。
11	上加世田	南さつま市加世田川畑字上加世田	1	中世後半～近世	素掘り	145	130	125	井戸状遺構として報告
12	渡畑	南さつま市金峰町宮崎字渡畑	1		石組み				本報告・五輪塔を石組みに利用
13	大龍Ｆ地点	鹿児島市大竜町	1		素掘り	95	60	440以上	掘り込みは470×450cmの台形。井戸は廃棄場に転用か。
14	清水城跡	鹿児島市坂元町字大興寺岡	1		素掘り	120	120	220	溝状遺構内で検出。用途・時期は不明。
15	鶴丸城本丸跡	鹿児島市城山町	5（2基は未調査）	近世	石組み	115	110	300以上	板石。
16					石組み	150	150	500以上	コの字形井戸枠を２つ使用して上面観方形に。掘り込みは径2.5m。
17					石組み	150	145	600以上	掘り込みは径5m。板石。
18	鹿児島城二之丸跡	鹿児島市城山町	2		石組み	120	120	400以上	凝灰岩製の板石，木製桶型井戸枠を使用。
19						162	162	450以上	凝灰岩製の板石，木製桶型井戸枠を使用。
20	浜町	鹿児島市浜町	1		石組み	90	90	300	凝灰岩製の板石，桝形木枠を使用。底に木札（墨書「婆娑羅帝婆」）あり。
21	寿国寺跡	鹿児島市武二丁目	1		石組み	100	70	200	掘り込みは径２m。寛永通宝１０枚出土。
22	地頭仮屋跡	鹿児島市郡山字松尾	1		素掘り	246	200	248	井戸跡から陶器製の碗・香炉・甕出土
23	大龍Ｇ地点	鹿児島市大竜町	1		石組み	130	120	130	底面のみ残存。上部は破壊のため確認されず。
24	出水麓（２）	出水市麓町	1		石組み	100	92	550以上	建物２に隣接。検出面で版築あり。
25	浜町	鹿児島市浜町	7（2基は未調査）	近世・近代	石組み木組み	100（内径60）	100（内径60）	274	掘り込みは径2.7m。上部は組み合せ式凝灰岩製円形井戸枠，下部は木製桶型井戸枠
26					木組み	90	90	190	掘り込みは径2m。木製桶型井戸枠
27					石組み木組み	160	160	270	掘り込みは径4.2m。組み合せ式円形井戸枠と木製桶型井戸枠を使用
28					木組み	92	92	254	掘り込みは径2m。木製桶型井戸枠
29					石組み木組み	160	160	120	組み合せ式円形井戸枠と木製桶型井戸枠を使用
30	大龍Ｂ地点	鹿児島市大竜町	1		石組み	92	88	200以上	掘り込みは径５m の円形。検出面では縦２m・幅60cmの４枚の凝灰岩で蓋
31	中原	姶良市姶良町脇元	2		石組み	60	47	40	底面の環状部分のみ（階段部分以外）の数値。報告書では石組遺構。
32					石組み	95	80	75	掘り込みは径１m の円形。報告書では石組遺構。
33	造士館・演士館跡	鹿児島市山下町	1		石組み	100	100	?	上面まで切石・礫が詰まる。中及び周辺には鉄製品を含む様々な雑物が散乱。
34	出水麓	出水市麓町	1		素掘り	100	100	200以上	「深穴遺構」として報告。土師器３点出土。
35	川辺郷地頭仮屋跡	南九州市川辺町字平山	1		石組み	90	90	240	凝灰岩使用。2m×2mの方形の掘り込みあり。
36	出水麓（２）	出水市麓町	1		素掘り	90	90	?	建物３は井戸に付随する東屋か
37	川骨	薩摩川内市高江町字川骨	3	中世～近現代	石組み				木枠あり。石は凝灰岩を使用
38	山崎野町Ａ	さつま町山崎	1		石組み				
39	下鶴	伊佐市大口下殿字下鶴	1		素掘り				井戸の可能性あり
40	虎居城跡	さつま町宮之城字虎居字城ノ口	1		木組み				
参考1	知覧城	南九州市知覧町永里字城内	11	中世後半	素掘り	130	130	290	参考。ゴミ穴として報告。土師器１２点
参考2						70	70	185	参考。土壌中にリン分を多く含む
参考3						90	90	160	参考。輪宝くずれの墨書土師器。銭貨（祥符元宝）
参考4						140	140	270	参考。
参考5						100	100	55	参考。土壌中にリン分を多く含む
参考6						110	110	65	参考。土壌中にリン分を多く含む
参考7						80	80	205	参考。イノシシの骨
参考8						130	130	34	参考。
参考9						88	88	120	参考。
参考10						70	70	165	参考。土師器小型坏３点
参考11						100	100	60	参考。
参考12	上水流	南さつま市金峰町花瀬字上水流・森山	1	中世後半～近世	素掘り	90	70	190	参考。井戸か？報告書では土坑墓とする

【掲載報告書一覧】
・出水市教育委員会1995『出水麓遺跡』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書（５）
・出水市教育委員会1998『出水麓遺跡（2）』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書（８）
・大隅町教育委員会・（財）元興寺文化財研究所2000『鹿児島県大隅町日輪城（日輪城）跡』大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（20）
・大隅町教育委員会2003『日輪城跡』大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（28）
・加世田市教育委員会1985『上加世田遺跡－１』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（３）
・鹿児島県教育委員会1982『小瀬戸遺跡』鹿児島県教育委員会発掘調査報告書（19）
・鹿児島県教育委員会1983『鶴丸城本丸跡』鹿児島県教育委員会発掘調査報告書（26）
・鹿児島県教育委員会1991『鹿児島城二之丸跡』鹿児島県教育委員会発掘調査報告書（55）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター2000『浜町遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（25）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター2002『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（39）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター2002『寿国寺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（40）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『中原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（54）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『山ノ脇遺跡・石坂遺跡・西原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（58）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター2008『上水流遺跡２』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（121）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター2009『領家西遺跡（根木原遺跡Ｄ地点）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（141）
・鹿児島市教育委員会1992『造士館・演武館跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（13）
・鹿児島市教育委員会1992『大龍遺跡　第１集　歴史時代編　大龍寺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（15）
・鹿児島市教育委員会1993『清水城跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（16）
・鹿児島市教育委員会2001『大龍遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（32）
・鹿児島市教育委員会2001『大龍遺跡Ｂ地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（34）
・鹿児島市教育委員会2006『地頭仮屋跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（44）
・鹿児島市教育委員会2007『大龍遺跡Ｆ地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（54）
・鹿児島市教育委員会2009『大龍遺跡Ｇ地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（59）
・川辺町教育委員会1984『平山城跡』川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書（１）
・知覧町教育委員会2006『国指定史跡知覧城跡（三）』知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書（12）
・南九州市教育委員会2010『川辺郷地頭仮屋跡』南九州市埋蔵文化財発掘調査報告書（４）

第５節　出土人骨の考察

１　はじめに

渡畑遺跡からは，中世後半以降の土壙墓が数基発見されている。その中には人骨が残っているものもあった。

以下にその特徴をあげる。

２　各人骨について

(1) １号土壙墓出土人骨（男性・壮年）

墓壙の外形は楕円形である。

人骨は頭蓋と四肢の一部が遺存する。保存状態はよくない。人骨の出土状況から埋葬姿勢で確認できるのは北頭位で仰臥屈葬の状態で埋葬されたという点である。膝は強く曲げている。性別は，前頭骨の眉弓の突出が強く，左側頭骨の乳様突起も大きいことから男性と判定される。年齢は歯の咬耗度が Martin の１～２度であることから，壮年と推測される。

頭蓋は前頭面に平行な方向に土圧を受け，極端に前後に長い形に変形している。しかし，土圧による変形を受ける前の頭蓋の形態を推測してみても，脳頭蓋は前後に長かったと考えられる。観察できた左外耳道に骨腫は認められない。また，前頭縫合も残存していない。

歯式は次のとおりである。

８××５４３××	１×３４５×××
８７６５４×××	１２３４５６７８

(2) ２号土壙墓出土人骨（女性・壮年）

墓壙の外形は楕円形である。

人骨は頭蓋と四肢の一部が遺存する。保存状態は悪い。人骨の出土状況から埋葬姿勢で確認できるのは北頭位で仰向けに埋葬されたという点である。性別は，前頭骨の眉弓の突出が弱いことから女性と判定される。年齢はほとんどの歯の咬耗度が Martin の１度であることから，壮年と推測される。脳頭蓋は右半分が遺存するだけであるが，これをもとに形態を推測すると前後に長い頭蓋であったと考えられる。観察できた右外耳道に骨腫は認められない。

歯式は次のとおりである。

８７６５４×××	××３４５６７８
８７６５４３２１	１２３４５６７８

遺存する歯に，う蝕やエナメル質減形成は認められない。また，歯の大きさ（近遠心径，頬舌径）は大きい。

(3) ３号土壙墓出土人骨（男性・熟年）

墓壙の外形は円形である。

人骨はほぼ全身の骨が遺存するが，保存状態は悪い。人骨の出土状態は立て膝で膝を強く曲げている。したがって，遺体は座棺に収められたことがわかる。遺存している人骨の中では，頭蓋の残りがいい。性別は眉弓の突出が強いことから，男性と判定できる。年齢は頭蓋三主縫合の癒合状況と歯の咬耗の程度が Martin の２～３度であることから，熟年と推測される。頭蓋は土圧による変形を受けており，特に顔面部で著しい。変形を受ける前の頭蓋の形態を推測すると，脳頭蓋は前後に長く，顔面は低かったと考えられる。観察できた右外耳道に骨腫は認められない。また，前頭縫合も残存していない。

歯式は次のとおりである。

××××４３２１	１２３４××７×
××××××××	××××××××８

遺存する上顎中切歯のシャベル型は深い。下顎左第三大臼歯の咬合面に C2のう蝕が認められる。

(4) ４号土壙墓出土人骨（女性・壮年）

墓壙の外形は楕円形である。

人骨は頭蓋（写真12）と四肢の一部が遺存する。保存状態は悪い。人骨の出土状況から埋葬姿勢で確認できるのは北頭位で仰向けに埋葬されたという点である。性別は，眉弓の突出が弱いことから女性と判定される。年齢は歯の咬耗度が Martin の１～２度であることから，壮年と推測される。脳頭蓋は右半分が遺存するだけであるが，これをもとに形態を推測すると前後に長い頭蓋であったと考えられる。観察できた右外耳道に骨腫は認められない。

歯式は次のとおりである。

×７６×××２１	１２３４５６７８
×××５４３２１	１２×４５６７×

遺存する上顎中切歯のシャベル型は左が1.51mm，右が1.38mm と深い。う蝕やエナメル質減形成は認められない。



写真12　４号土壙墓出土人骨（脳頭蓋）

(5) ５号土壙墓出土人骨（性別不明・熟年）

墓壙の外形は楕円形である。

人骨は頭部と上肢の骨が遺存する。保存状態は悪い。人骨の出土状況から埋葬姿勢で確認できるのは，肘を強く曲げている点と頭位が北という点がある。性判定が可能な部位が遺存していないため，性別は不明である。年齢は歯の咬耗度が Martin の２度であることから，熟年

と推測される。

歯式は次のとおりである。

$$\frac{\times\times\times\times\times\times\times 1 \quad \times\times\times\times\times\times\times\times}{\times\times\times\times\times\times\times\times \quad \times 2\,3\,4\,5\times\times\times}$$

上顎右中切歯のシャベル型は1.41mm と深い。下顎左犬歯にはエナメル質減形成が認められる。

(6) ６号土壙墓出土人骨（性別不明・成人の可能性）

墓の南側半分が残るだけであり，人骨はそこに下半身の骨が主に遺存している。人骨の保存状態はよくない。左右不明の上腕骨，大腿骨，脛骨が確認できる。埋葬姿勢は下半身の骨の解剖学的位置関係から，膝を強く曲げた状態の屈葬である。

性別は性判定可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は四肢骨の太さから成人の可能性が高いが，断言はできない。

３　おわりに

渡畑遺跡の６基の中～近世墓から，それぞれ６体の人骨が出土した。これらは，いずれも成人人骨であった。性別の内訳は性別が判明しなかった２体を除くと，男性が２体，女性が２体であった。

形質は，脳頭蓋が前後に長いものが４体あり，上顎中切歯のシャベル型が深いものが３体ある。

南九州の近世人の頭蓋は前後に長い。また，上顎中切歯のシャベル型も深い。渡畑遺跡から出土した中～近世人骨も同様の特徴をもっていることがわかる。

【参考文献】

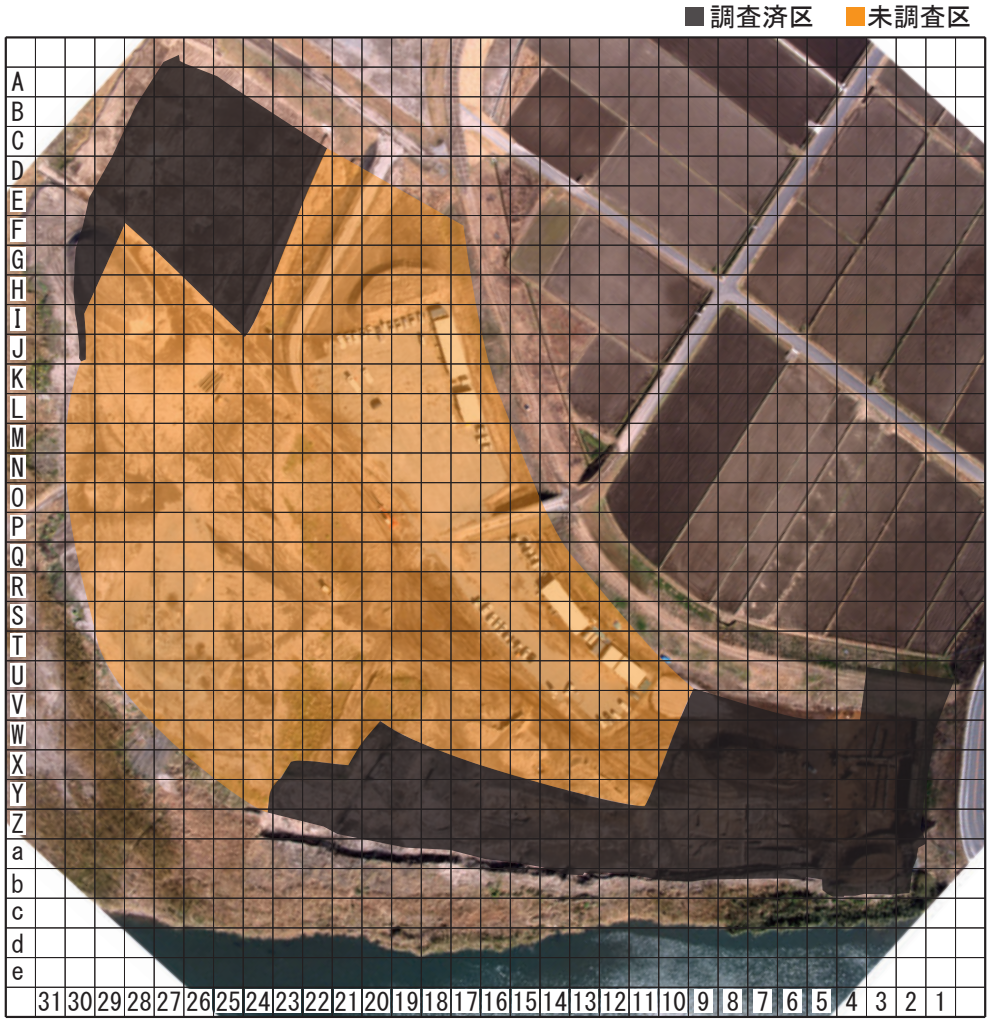
Martin, R. Knussmann, R（1988）*Anthropologie*. G. Fischer, Stuttgart

（竹中正巳）

第６節　今後の取扱いについて

一連の中小河川改修事業については，平成17年度の上水流遺跡・芝原遺跡の調査を最後に一時的に終了となった。渡畑遺跡の発掘調査は，中小河川改修事業に伴い平成12・15・16年度の３年にわたって実施した。しかし，当初予定されていた調査区については，すべて終了することはできずに未調査区が残されている（第153図）。

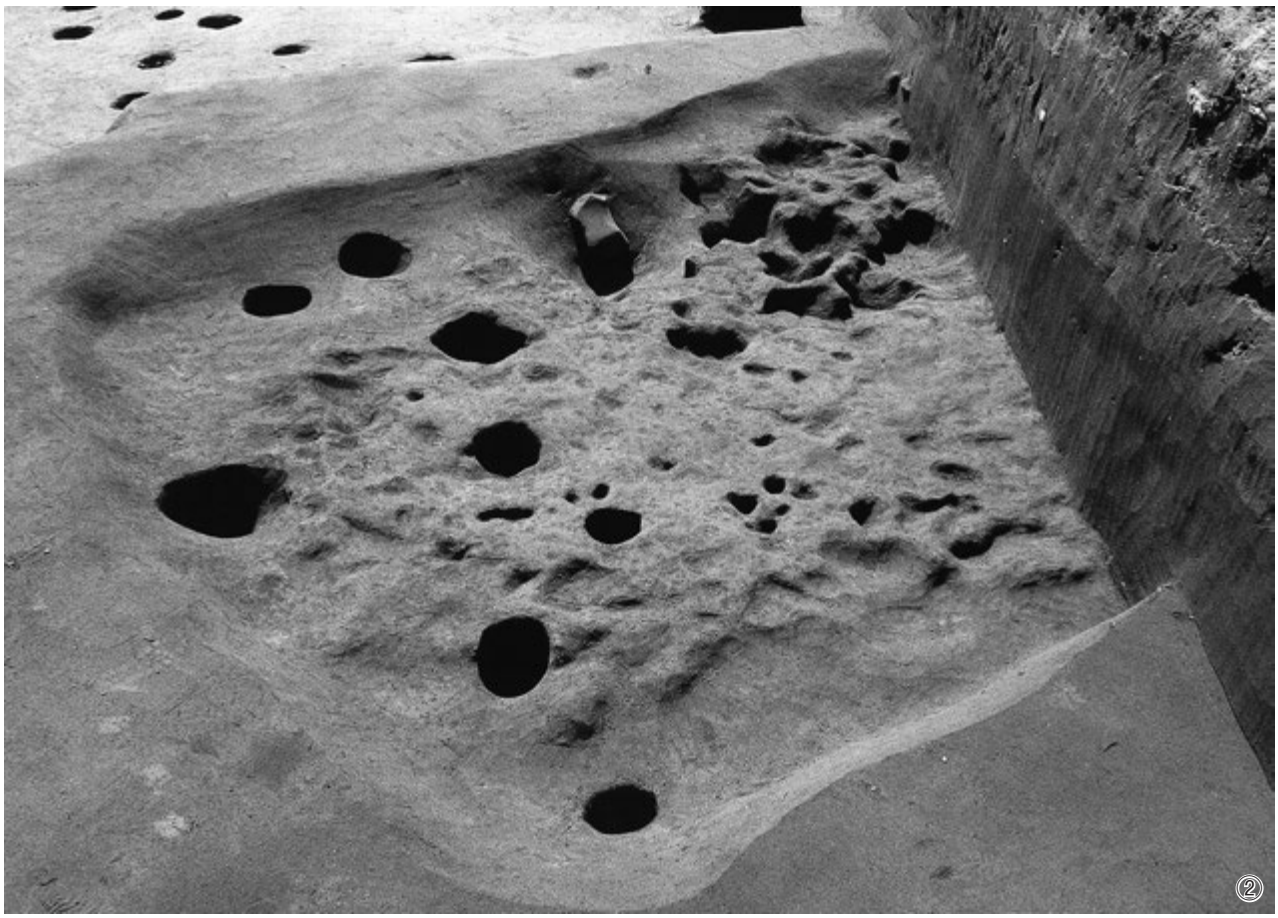
今後，この区域については，具体的な開始年や期間は未定である。



第154図　渡畑遺跡調査予定区

図　　版



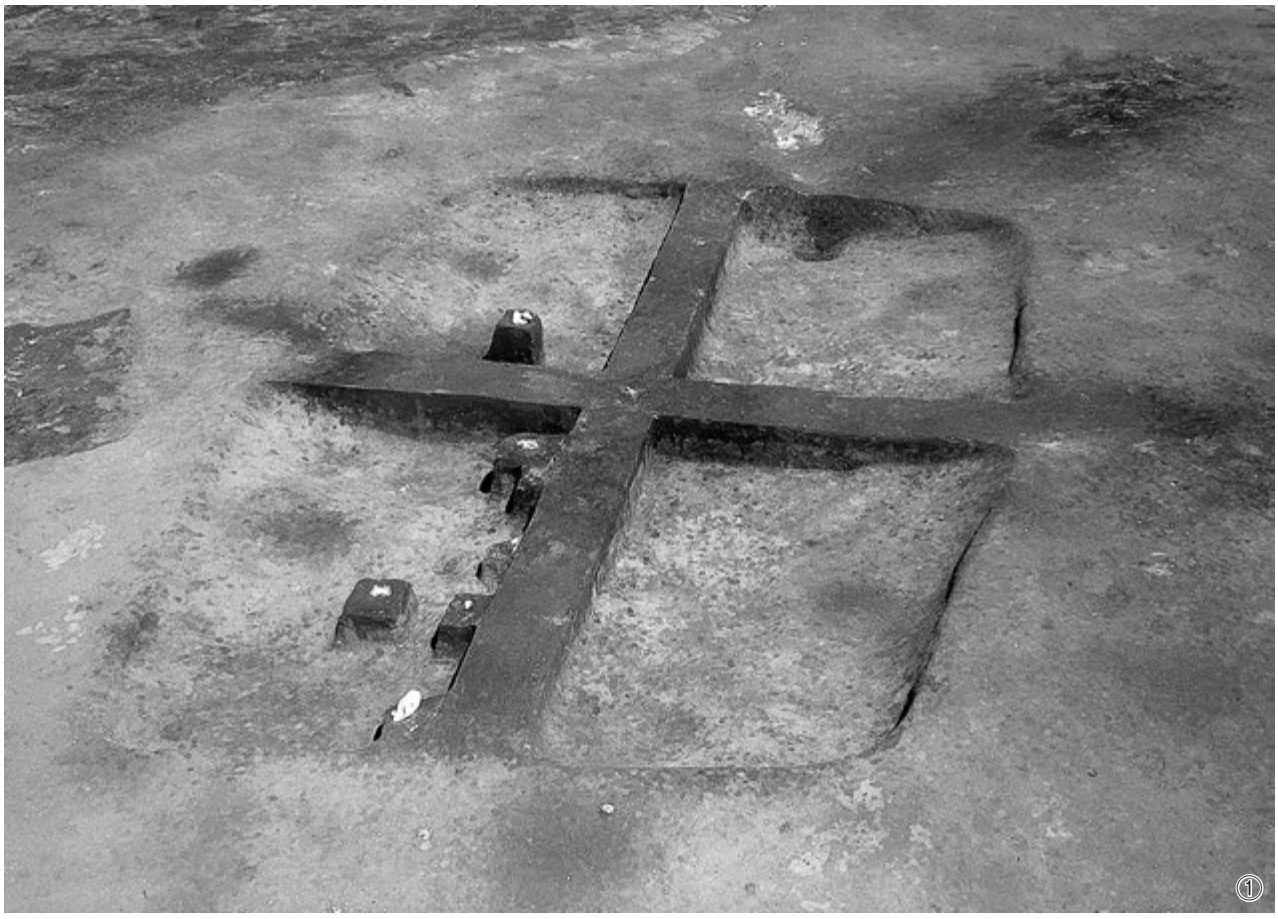


古墳時代遺構検出状況（１）
①上空から見た渡畑遺跡　②１号竪穴住居跡



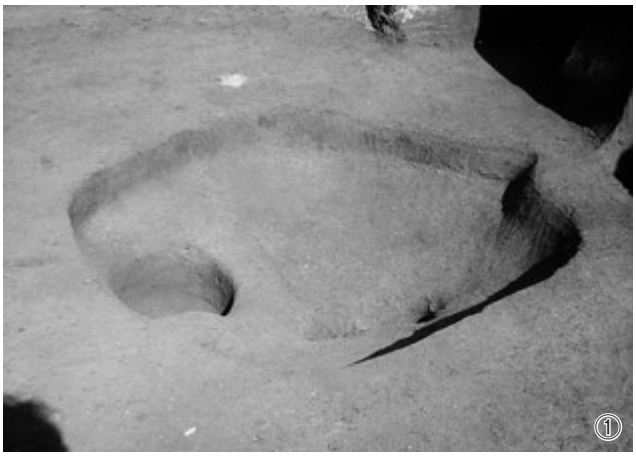


古墳時代遺構検出状況（２）
①２・３号竪穴住居跡検出状況　②２・３号竪穴住居跡完掘状況

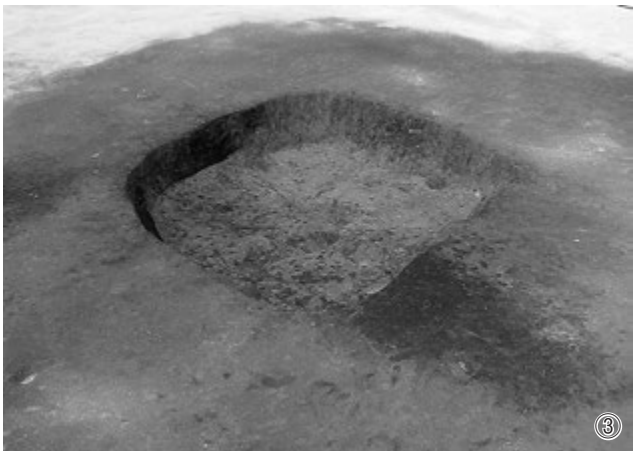




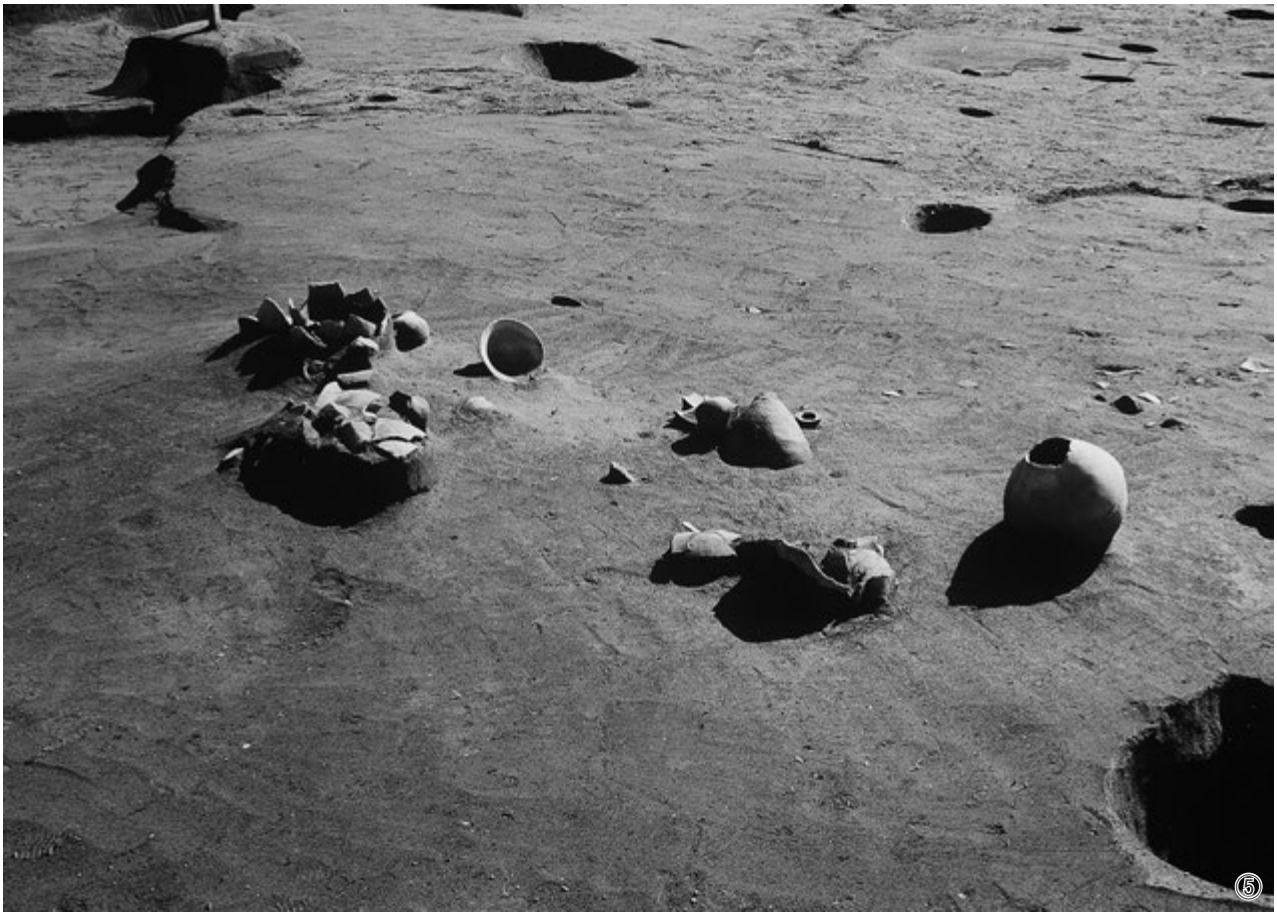
古墳時代遺構検出状況（3）
①7号竪穴住居跡　②7号竪穴住居跡完掘状況





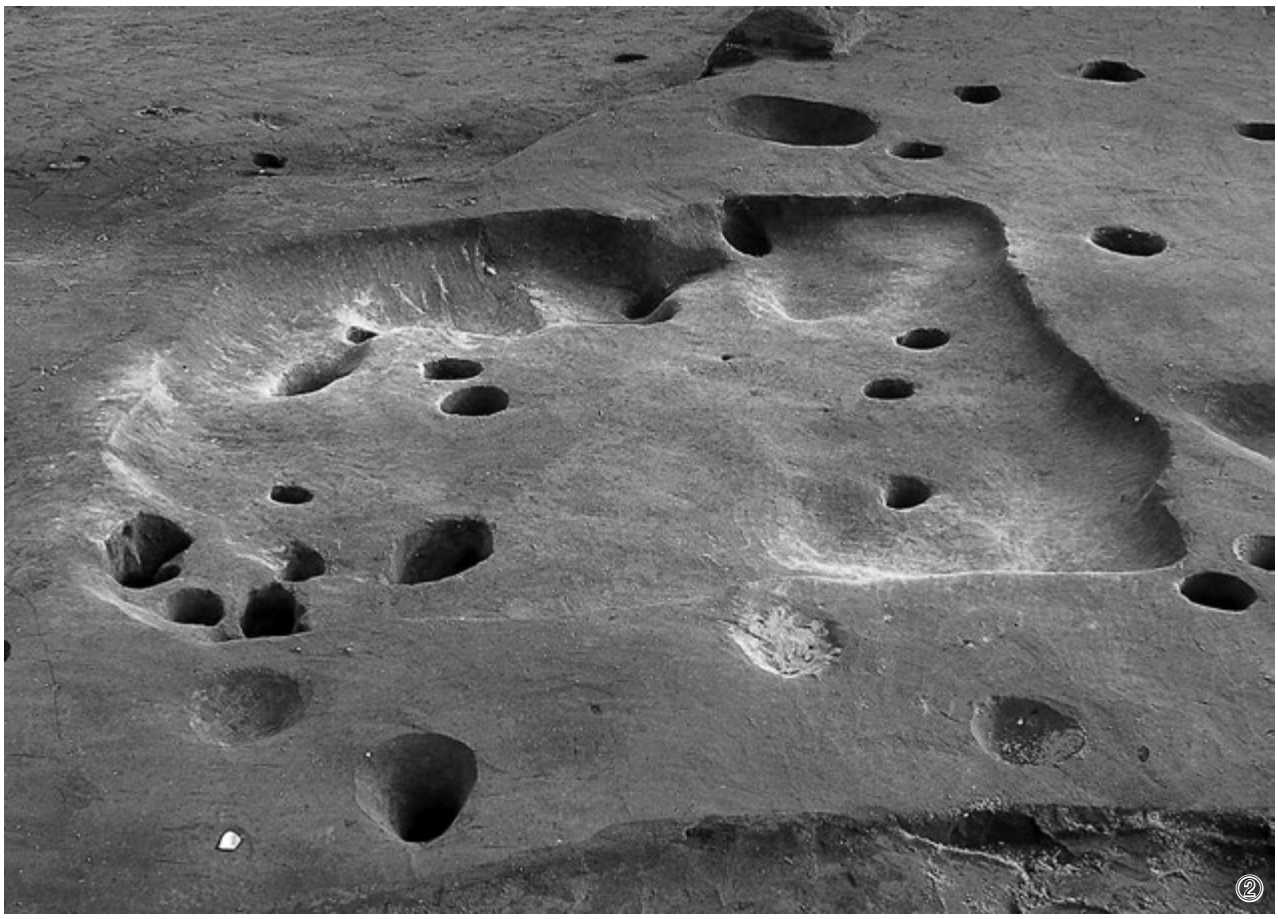






古墳時代遺構検出状況（４）および遺物出土状況
①１号大型土坑　②５号大型土坑　③６号土坑　④７号ピット　⑤遺物出土状況





古代遺構検出状況（１）
①８号竪穴住居跡（検出状況）　②８号竪穴住居跡（完掘状況）

図版6



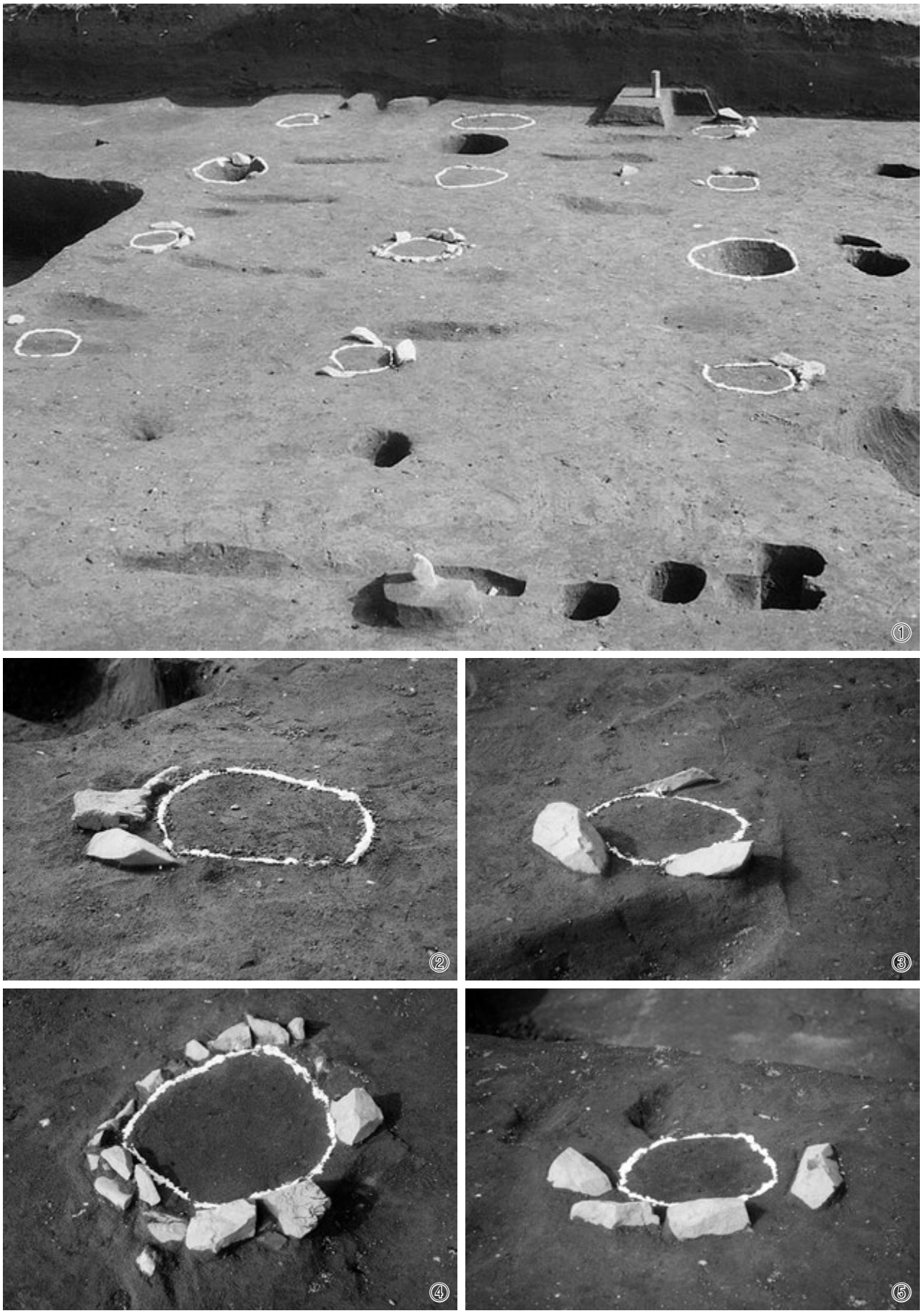








古代遺構検出状況（２）および遺物出土状況
①９号竪穴住居跡　②９号土坑　③12号土坑　③20号土坑　④遺物出土状況

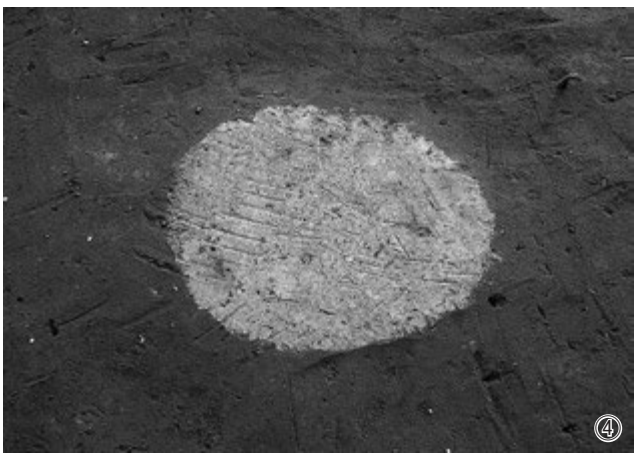


中・近世遺構検出状況（１）
①掘立柱建物跡　②～⑤掘立柱建物跡内ピット











中・近世遺構検出状況（2）
①・②16号溝状遺構　③17号溝状遺構　④・⑤円形粘土塊状遺構



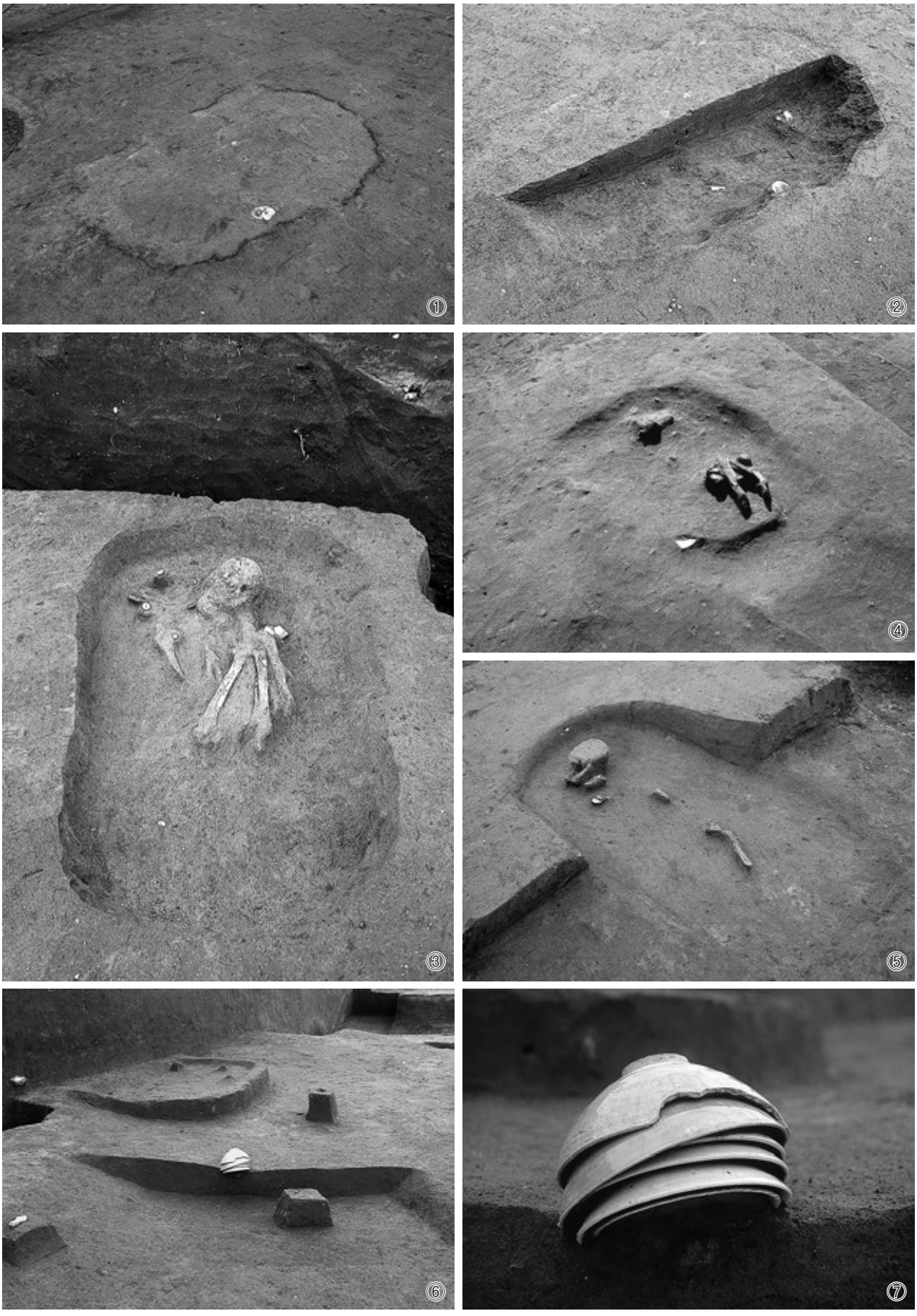




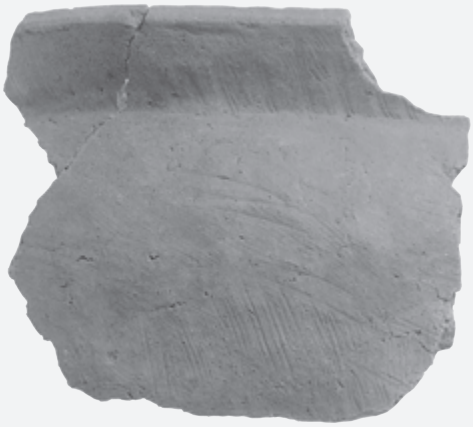




中・近世遺構検出状況（３）
①・②１号炉状遺構　③２・３号炉状遺構　④・⑤井戸状遺構



図版10　中・近世遺構検出状況（４）
①～③１号土壙墓（検出状況）　④５号土壙墓　⑤２号土壙墓　⑥・⑦11号溝状遺構内出土青白磁



87



90



101



114



112



108

弥生・古墳時代出土遺物（１）

図版12









弥生・古墳時代出土遺物（２）



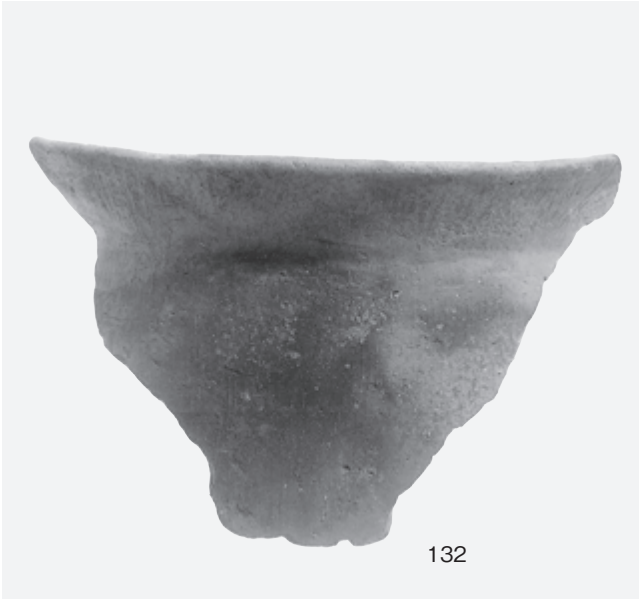


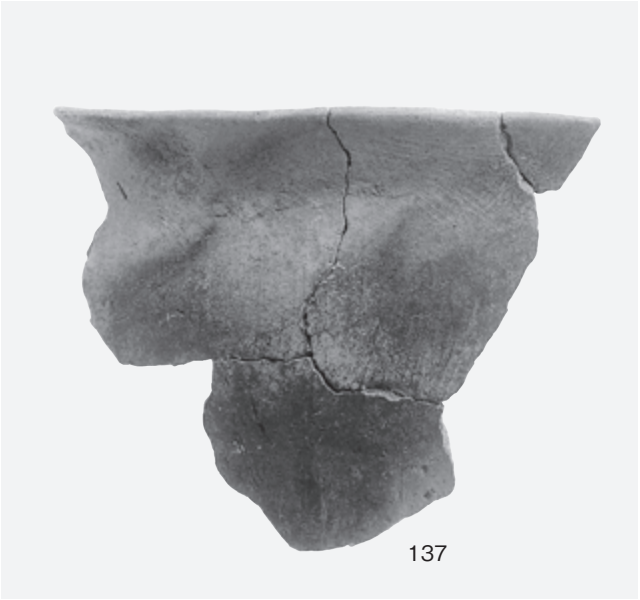




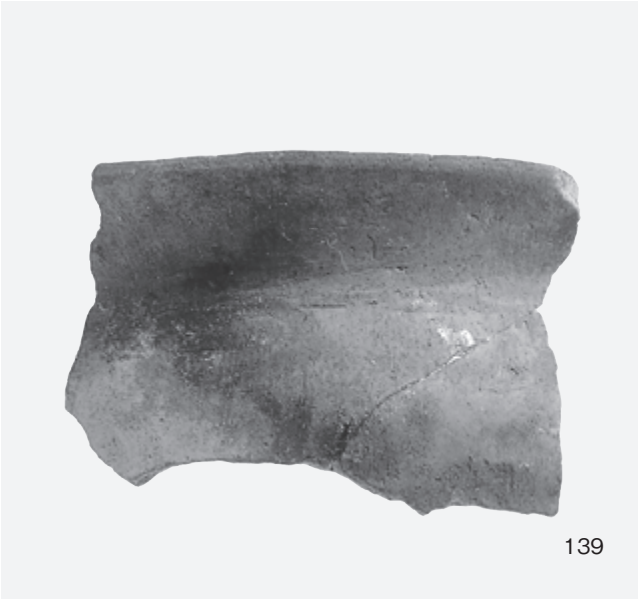
弥生・古墳時代出土遺物（３）

図版14

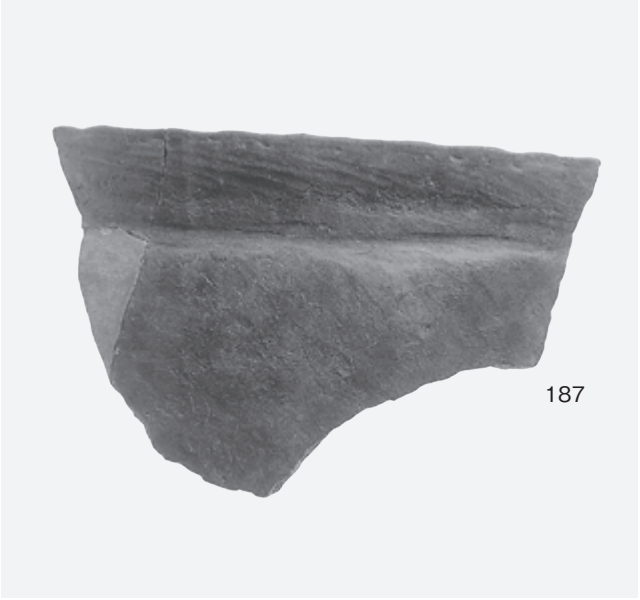

132


137


138

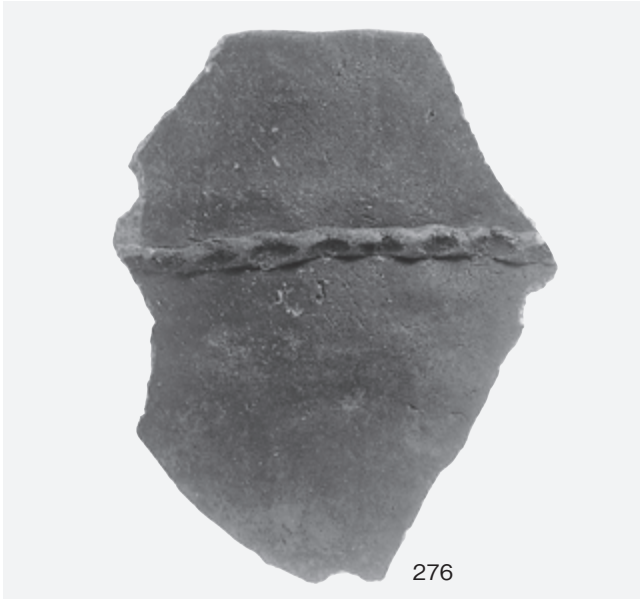

139


184


187

弥生・古墳時代出土遺物（４）


190


276


267


177


313

弥生・古墳時代出土遺物（５）

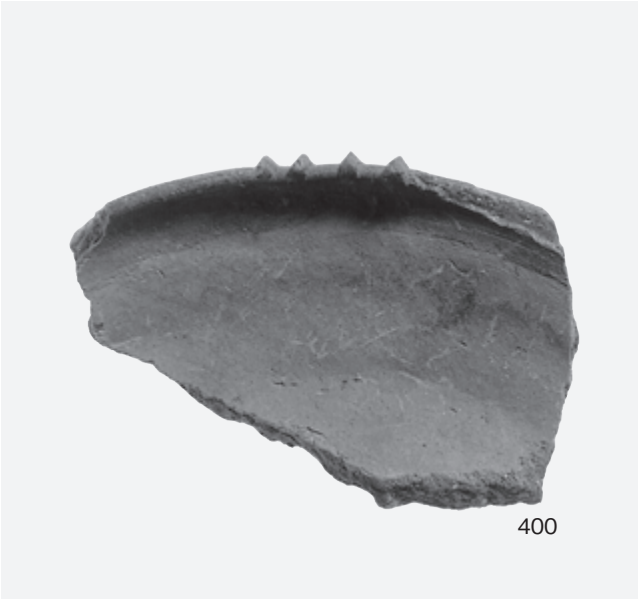

403

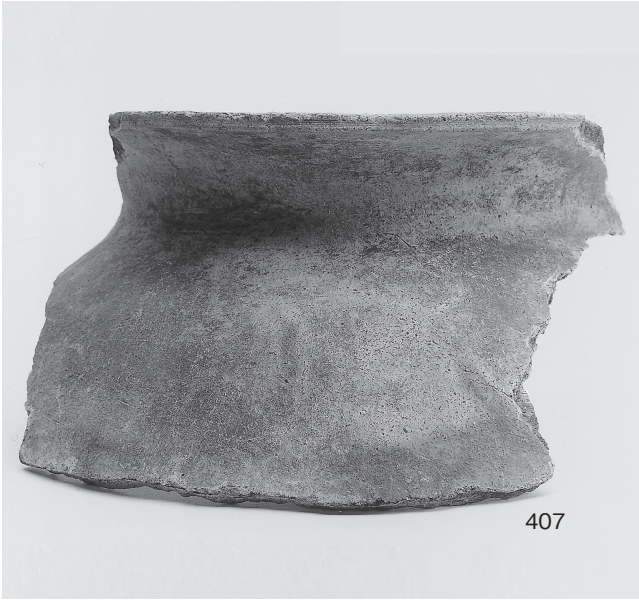

404


405


406

弥生・古墳時代出土遺物（６）


400


407


409


410


411


443

弥生・古墳時代出土遺物（７）

図版18









弥生・古墳時代出土遺物（８）


438


439


440


442

弥生・古墳時代出土遺物（９）

図版20



427



436



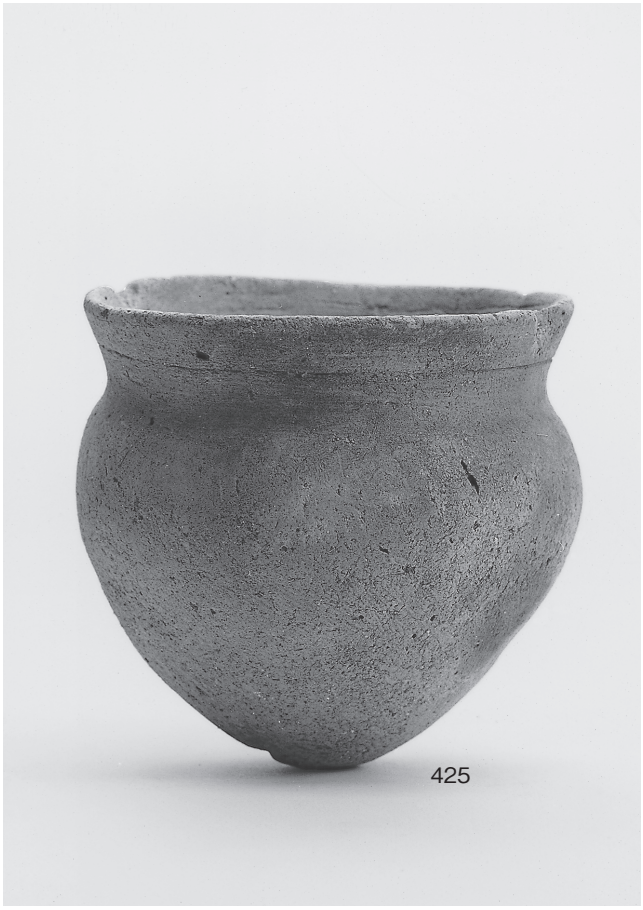
459



460

弥生・古墳時代出土遺物（10）


391


425


19（3号ピット内出土）


479

弥生・古墳時代出土遺物（11）

図版22


561

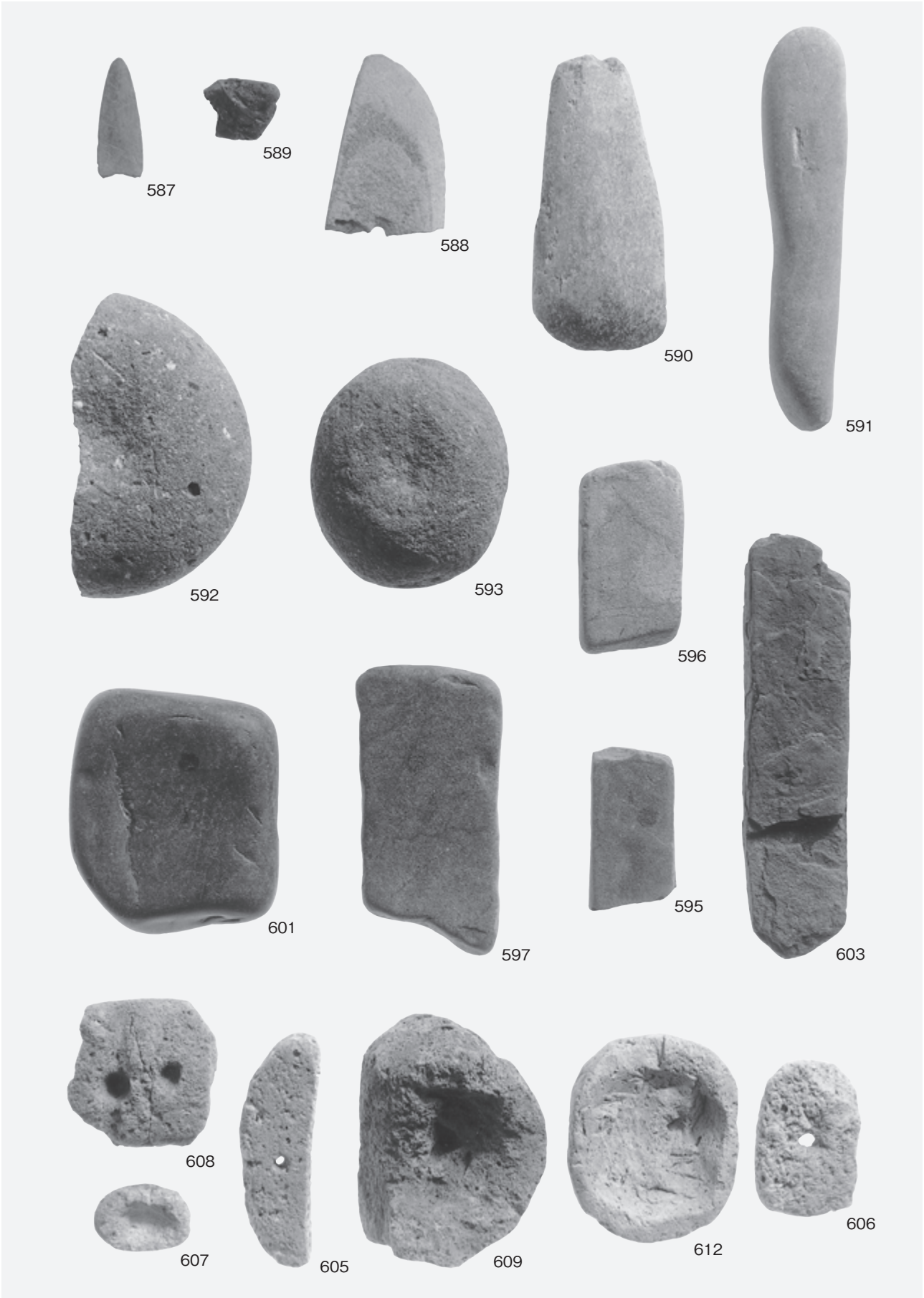

562


563


564


568

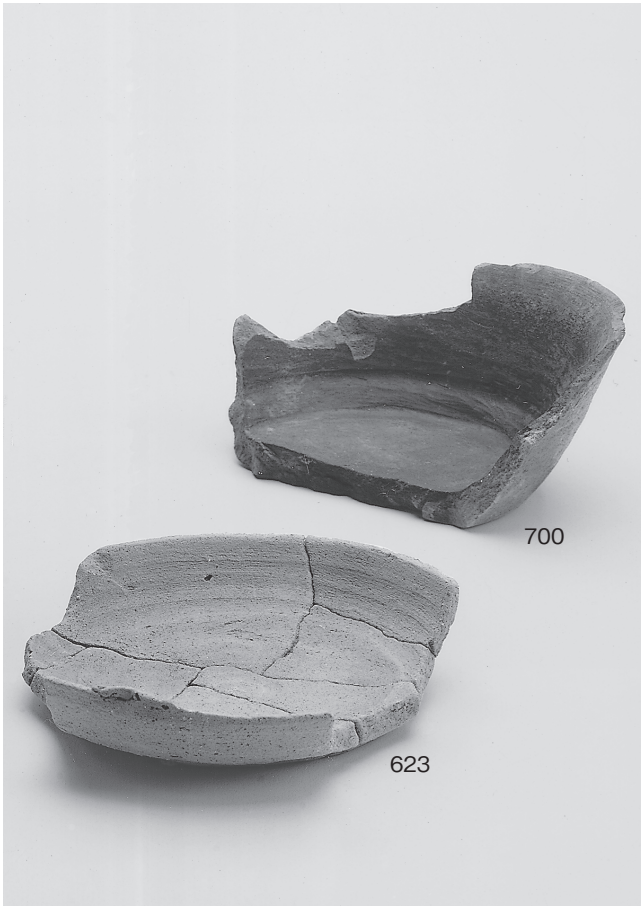
弥生・古墳時代出土遺物（12）



弥生・古墳時代出土遺物（13）

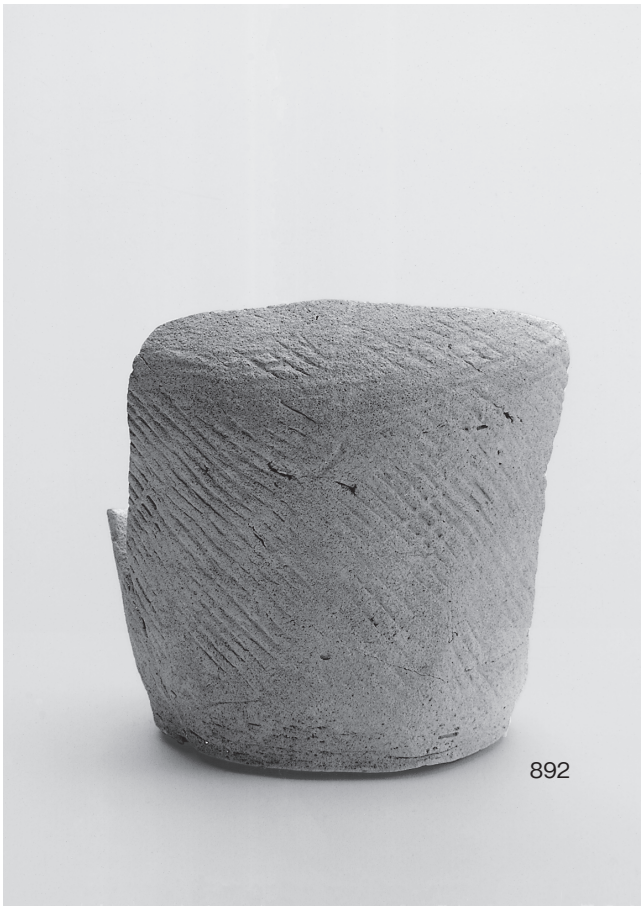


弥生・古墳時代出土遺物（14）

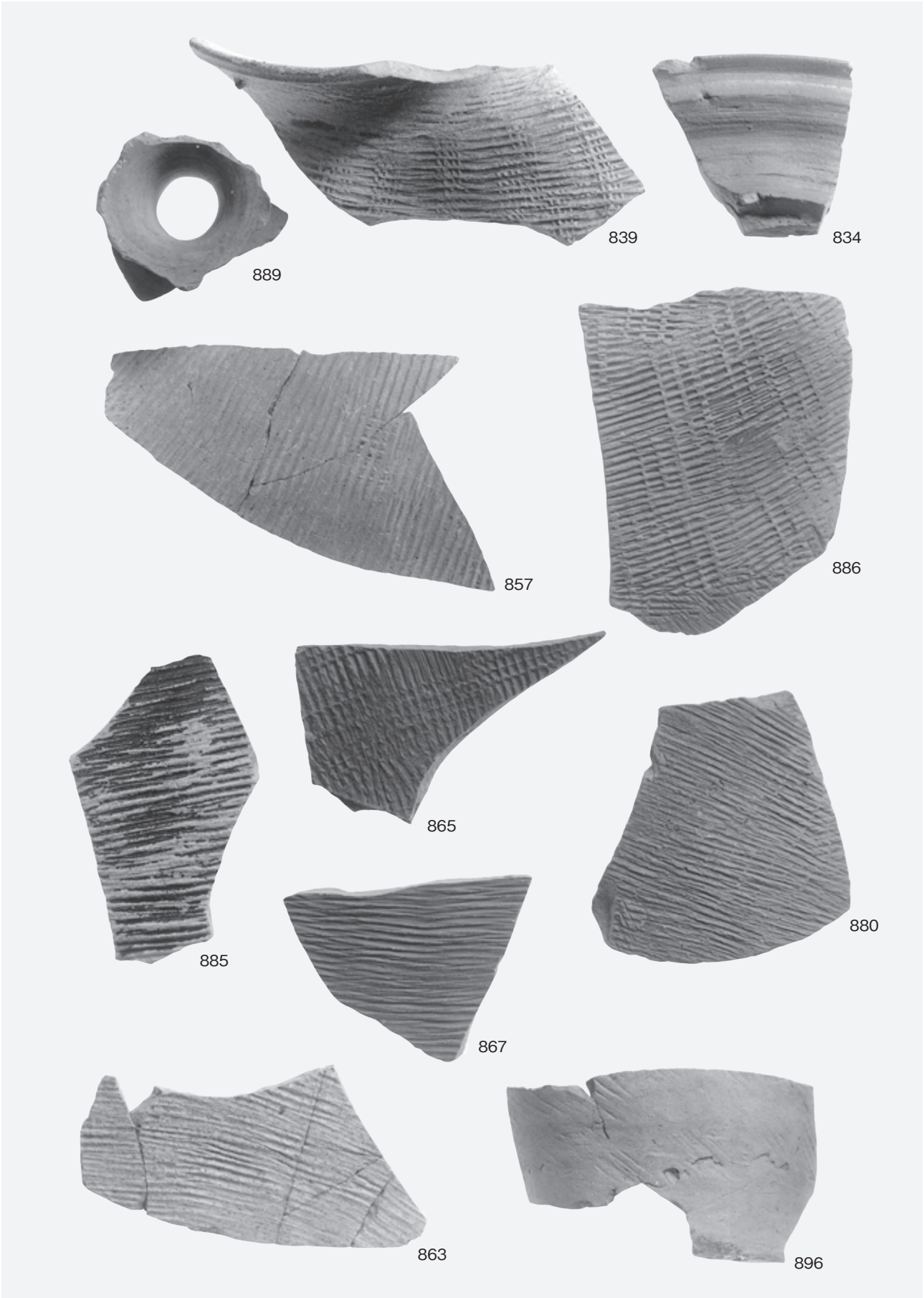




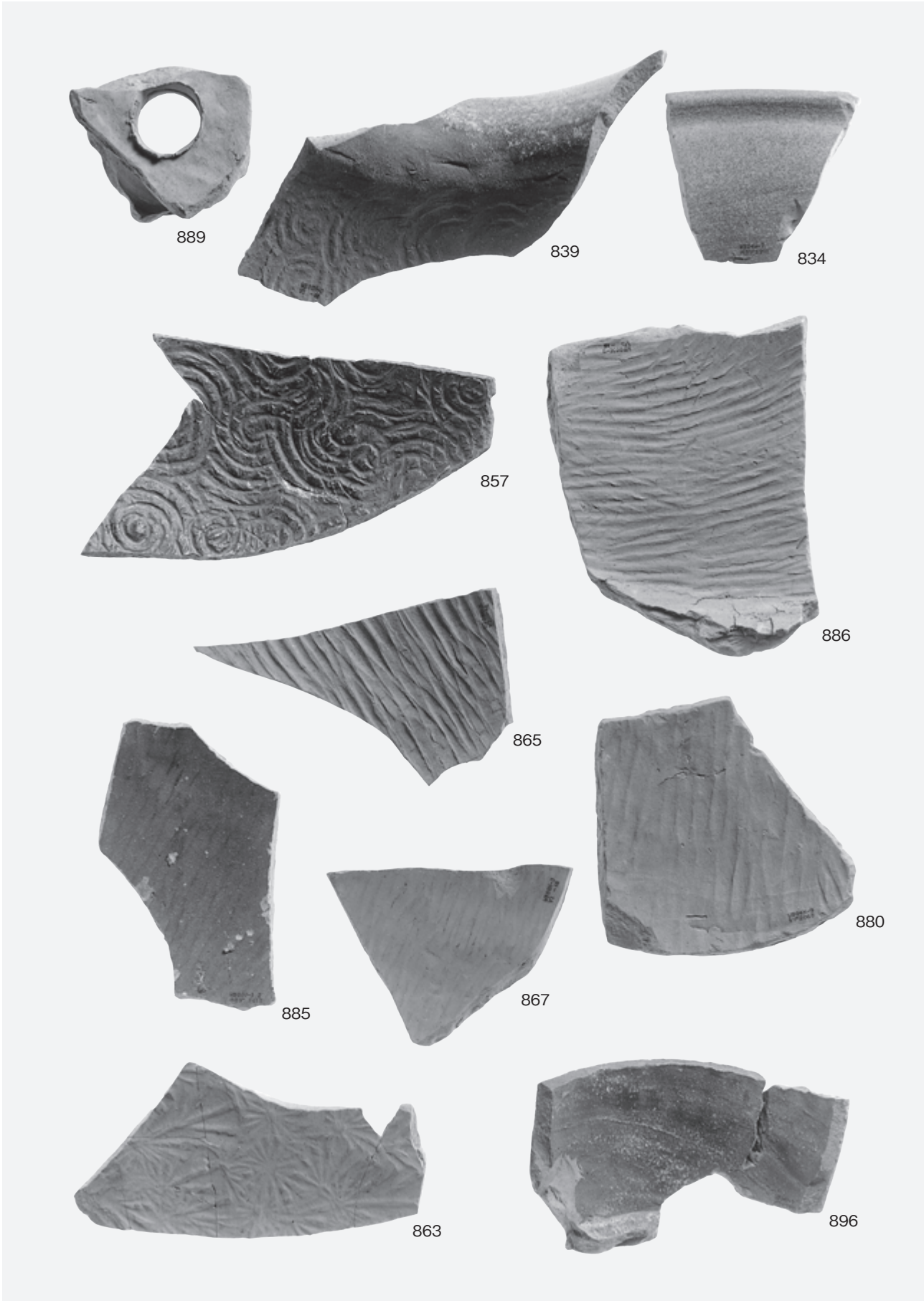




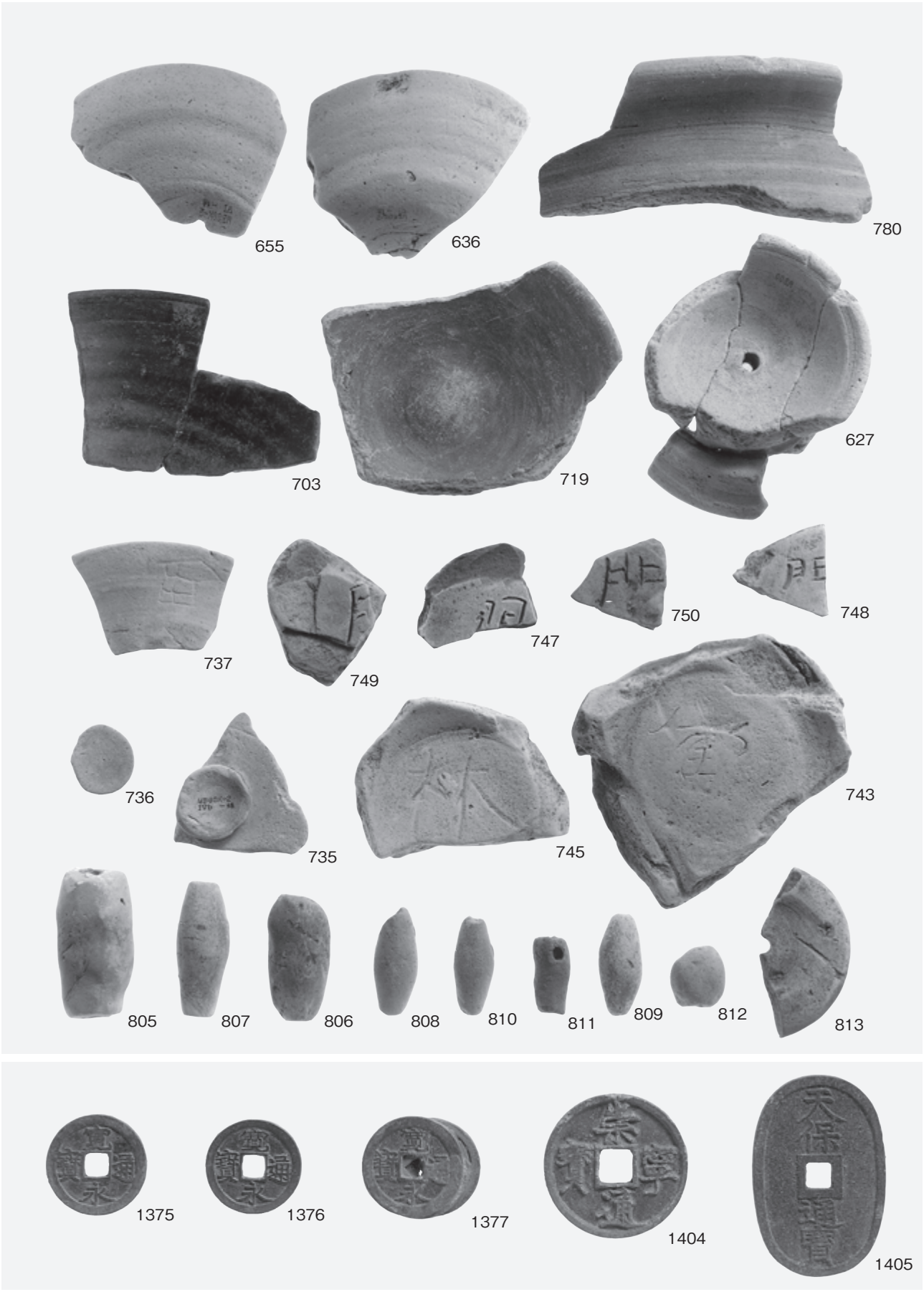
古代出土遺物（1）



古代出土遺物（2）

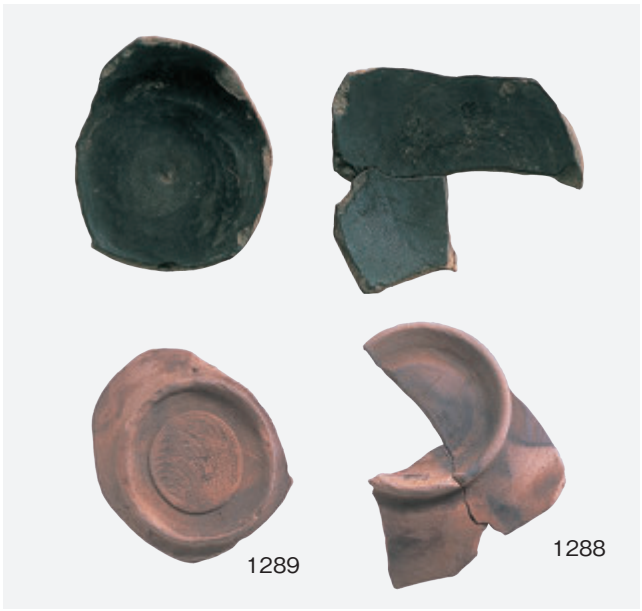


古代出土遺物（3）



古代出土遺物（4）・近世出土遺物


944
943


1289
1288


1032


1291


1286


内面
1296


外面
1296

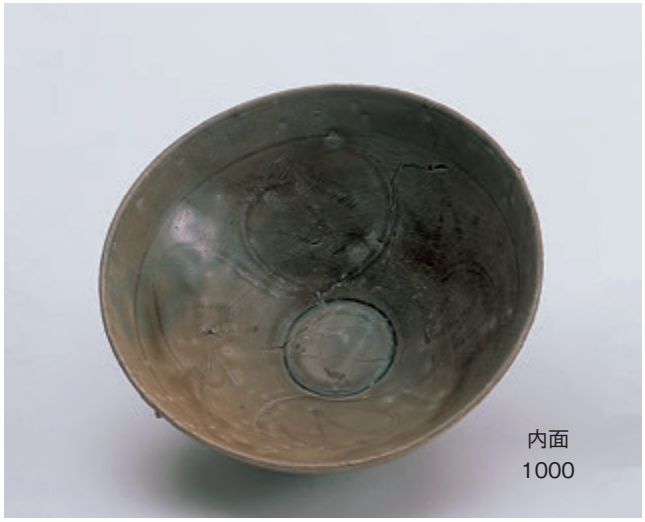

1335
1290
1034
1035
1071
内面


1335
1290
1034
1035
1071
外面

中・近世出土遺物（1）

図版30


内面
999


内面
1000


999


1000


外面
999


外面
1000

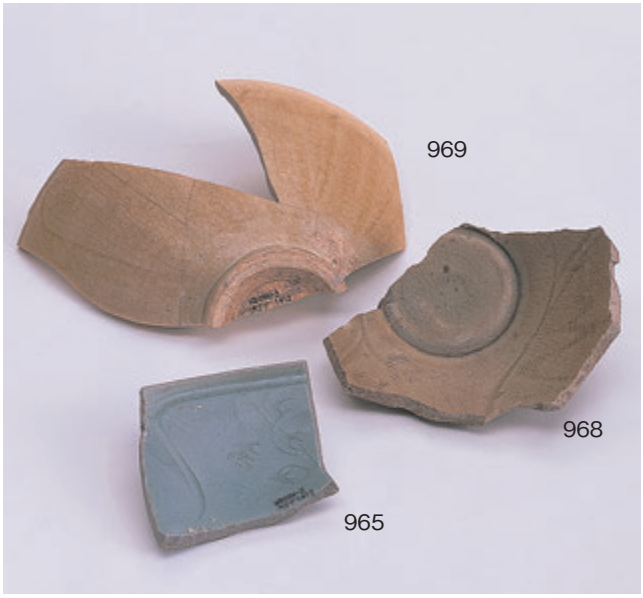

1001

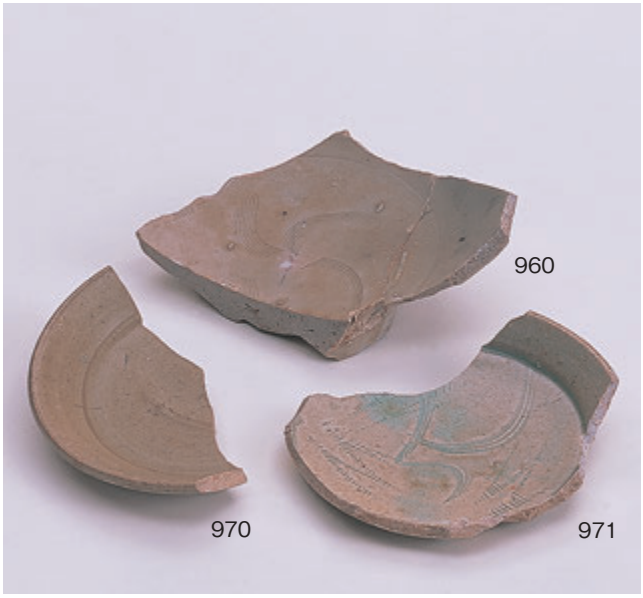

1002


1003

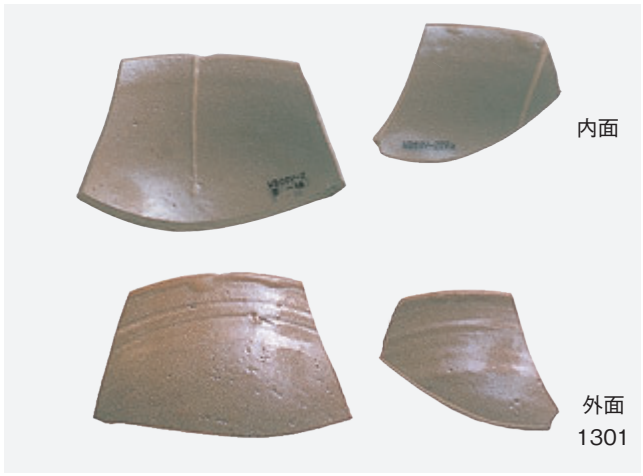

1004

中・近世出土遺物（2）

















図版31　中・近世出土遺物（3）

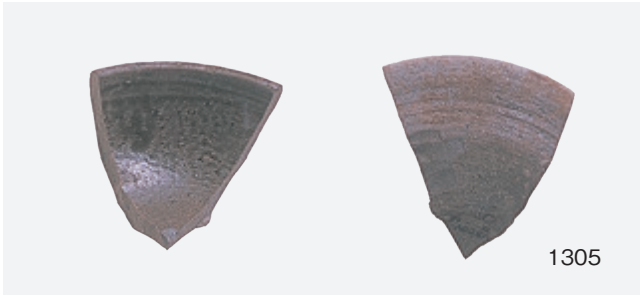
図版32


1336

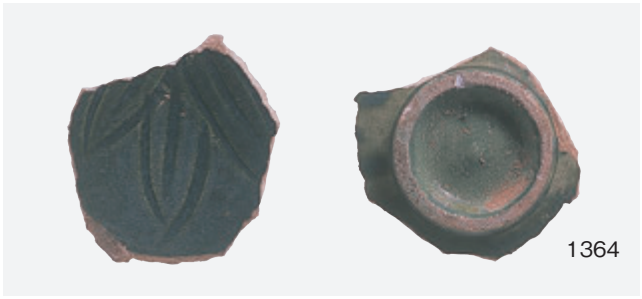

1355


976
975


1351
1352


1305


1350


1364


1353
1102


1371

中・近世出土遺物（4）

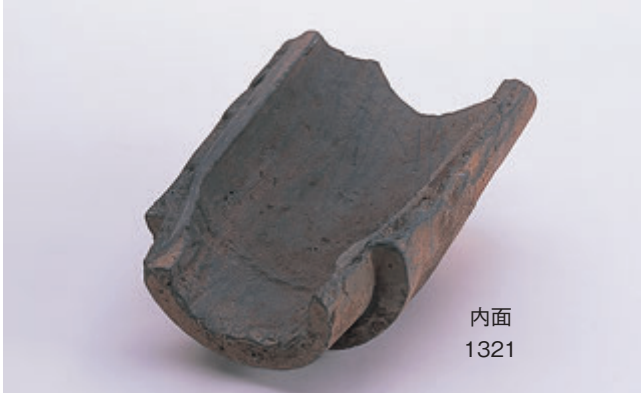








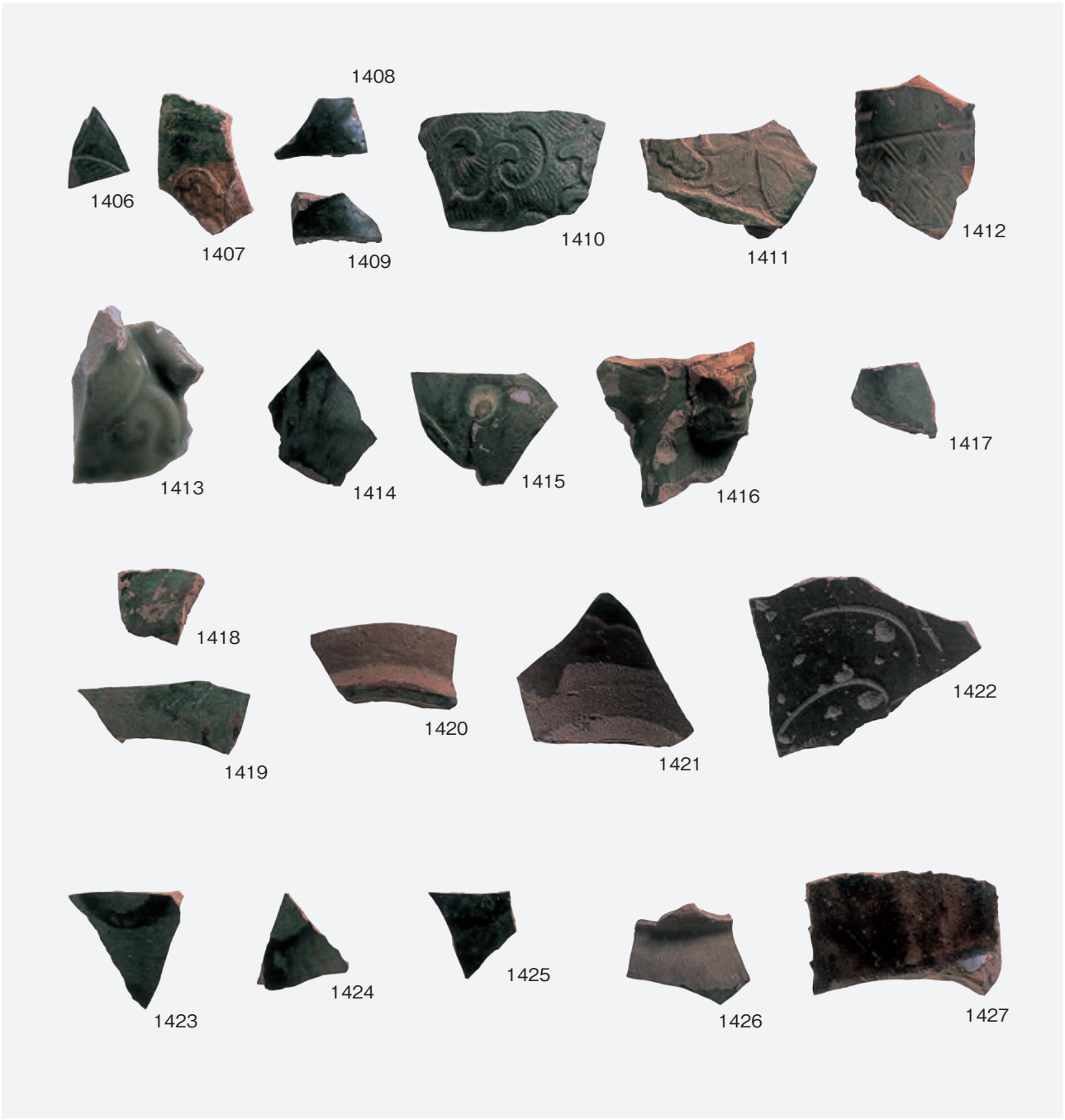








図版33　中・近世出土遺物（5）



図版34　中・近世出土遺物（6）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（159）

中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ

渡畑遺跡 2

（南さつま市金峰町）

弥生・古墳時代以降編

発行日　2011年３月

発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL（0995）48-5811

印刷所　斯文堂株式会社
〒891-0122　鹿児島市南栄2-12-6
TEL（099）268-8211